

パーク職員です。(完結
)

ハヤモ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妄想を抱き、ツライ現実にボコボコにされツライさん。そして耐え切れず現実から退場するコトに。けれど、これ以上苦しまずに済むぞ……とは、ならず。

次に気が付いたら、赤子リスタート。「けものフレンズ」の「パーク開園前」へと転生した。

「そうだ。今度はパーク職員になろう」

ヒトと、フレンズ。多くの謎と不安あれど、なんとかなるさ。

これは、なんの能力もない転生者が、妄想したり悩んだりしながらも、明るい職員ライフを送ろうとするお話である。

一部、掲示板形式

(後半、駆け足の打ち切りモードです……)

目次

「インフォメーション」(本編は幼少期の章から)

はじめまして! 1

パークでの先端研究や見解、現象

6

「パーク掲示板」(本編は幼少期の章から)

「パーク掲示板」1スレ目「パーク開園

!」 25

「パーク掲示板」2スレ目「けもシコ」

49

職員就職前(幼少期)

新たな人生。幼馴染と将来の夢。

66

カコとミライの出会い

74

将来の飼育員さんと園長さん?

80

幼い頃の、菜々ちゃんと園長さん。

そして……白いキツネさん。

95

過去を変える。 想いを変える。

108

痴態は恥だが役に立つ。

119

学生時代は、あつという間に。

133

進路

140

ようこそ! ジャパリパークへ!

	パークへ！	157
	ミライと不安要素	168
	無線越しのセルリアン	181
	初フレンズ	192
	森の貴婦人、守人に何想ふ。	203
	開園と未来に向けて。	214
	第1世代！パーク運営中！	
	現状の不安と、ワガママなキツネさま。	222
	知り合いの新人飼育員	237
253	都市部と真面目なまんまる耳	
	☆サーバルとコアラの体力測定	
	唐突で、だけど何気ない時間。	267
	固そうで、柔らかな。	306
	リウキウと楽しい予感。	332
	マルカとお話と。	333
	まだ、平和。	354
	☆菜々ちゃんの歓迎会へ。	371
	閉会后。菜々とキツネサマ。	386
411	お尋ね者との邂逅	
	☆パークの歌姫	426
	熱血少女とハチミツと。	461

友を求める孤高の白虎	491
EXの刺客「気になる！」	気になる 509
群れじゃなくても。	522
☆遭難だ！	539
悲劇：「まみれるワンコ」	559
☆キタキツネとケーキ屋へ。	571
愛があっても、襲うのは良くない。	598
日の出	623
妄想と対策。	648
☆地上最速 短距離走者（スプリンター）の冬。	663

カミングアウト	683
ラボへ。	698
疑問や不安、相談と。	720
凍土の眠りから覚めた太古の巨象と、研究の話。	738
劍齒虎は外に焦がれる。	757
先輩の名は。	769
パイセンの戯言。 或いは助言。	787
未知と撮影と。	805
とら！	826
奇跡の獅子は「普通」に焦がれる。	841

普通の戦闘？

862

方針は少しづつ、されど外界をも巻き

込み始める。

890

「その時」は突然に。

903

パーク・セントラル事件

発生

914

奪われたナニかとカラダ。

932

女になっても前進あるのみ。

956

管理センターへ。

975

「ときわたり」の可能性。

電車と先

輩。

1001

セントラル偵察。

そして再び研究所

へ。

1020

メルヘン裏のデープ世界

1041

セルリウム実験室へ。

相談しよう。

1063

《ときわたり》の可能性と相談。

1105

セルリアンの分際でハーレムとは生意

気だ！

1138

ハーレム潰しと、ウロボロス。

1170

永遠からの脱却。

管理センターへの帰還

情報戦の下地

改めて研究所。そしてフレンズ化？

1234

1213

1196

火口と四獣結界	1316	1311	1305	1296	1290	1285	1276	1271	例の異変	1267	1260	ヒトの勝手と少しのお別れ。	1248
東へ。									野生化したアンジュ				
白虎と稽古									西へ。				
北と南へ。									南の神鳥を接待				
今後の動き									東へ。				
隠居													

1336	END (ゲームオーバー等) 集	1331	1326	1321
	職員総員退去命令と後日談			
	パーク職員です。			
	やはり、ヒトは敵なのか。			
	仲直りと異変と。			

【インフォメーション】（本編は幼少期の章から） はじめまして！

はじめまして！

ようこそ、ジャパリパークへ！

これから、ジャパリパーク職員として働くあなたを歓迎致します！

これから、たくさんのフレンズに出会い、多くのドキドキやワクワクを体験していく事でしょう。

それは島でしか味わえない温もりや奇跡。 笑顔や喜びの輝き。 素敵な時間。

仲間やお客様と笑顔を交わし、楽しい職員ライフを送れるよう、これから援助して参りたいと思います。

おそらく、本土での講習で予備知識をお持ちだと思えます。

ですが、パークは時に常識が通じない……なんてことも。

ひよつとしたら皆さんが見聞きした、体験したものと違うかも知れません。

ここでは、微力ながらパークと職員を繋げるお手伝いをしたいと思っております。

(以下、講習時の簡易的な復習)

【ジャパリパークって?】

超巨大総合動物園。面積や内包施設が従来の動物園としては規格外の規模を誇ります。

世界中の動物を集める事、研究や種の保存を目的としています。

海底噴火により誕生した島を丸ごと敷地とし、調査、管理運営や施設建造等の為に多くのヒトが上陸しました。

当初は通常の動物展示等を予定していましたが、島特有の特殊動物が発見されてからは『彼女』達に合わせた施設や触れ合いを体験出来る様々な施設及び区域、研究施設が造られていきました。

【ジャパリパーク職員って?】

ジャパリパークで働く職員さんの事です。

様々な役割があります。アニマルガールの飼育や研究、島の保安調査、保守点検、工事、管理、清掃、警備、検疫、教育、接客、販売など……多岐に渡ります。

ジャパリパークに参入している企業や、協力しているグループが含まれる場合もあり

ます。 仕事に関わる特殊動物が含まれる場合もあります。

【特殊動物って?】

ジャパリパークの島内にて確認されました。 島特有の物質『サンドスター』が動物に当たる事で生まれます。

決まってヒトの女性の姿をしており、元の動物の特徴や魅力を引き継いでいます。

この事から『アニマルガール』と命名されました。

生まれた時からヒトの言葉を話せる、理解する、二足歩行である、身体能力が高い、等の特徴があります（一部除く）。

ヒトに対しては友好的な者が多く、危険性は薄いです。

その事から来園者との会話や接触は許可されています。 その為か『フレンズ』と呼ぶヒトが多いです。

【サンドスターって?】

島特有の物質で、島内にある火山から噴き出ている様です。 目視ではキラキラと輝く粒子に見えます。 土壌等にも含まれているのが確認されています。

特殊動物を生み出した物質であり、環境や地形にも影響を与えていると考えられています。 よく分かっています。

【セルリアンって?】

怪物、怪異……危険な存在です。島の各地に散見します。

セルリウムという島特有の物質から構成されていると考えられており、形や大きさ、色はバラバラです。ですが、何かを模倣した形である事が多いです。

ポジティブな、プラスイメージのある、ついでに物体や生命に対して攻撃を仕掛け、捕食行為を行います。

食べられた場合、死には至らないものの、アニマルガールであれば最悪のものに戻り、ヒトの場合は昏睡状態になる可能性があります。

もし見かけた場合、速やかに安全な場所まで避難して下さい。また同時に管理センターへの通報をお願いします。

【立ち入り禁止区域】

主に飼育・研究目的のサブエリア区分が該当します。職員であっても、立ち入り禁止区域には無許可で立ち入らないで下さい。職員であっても、立ち入り禁止

ジャパリパークは広大故に、未踏の地や調査不足地が存在します。また研究や飼育エリアとなっている場所には猛獣が放たれている場合もあります。

セルリアンが跋扈している場所もあります。大変危険ですので、絶対に立ち入りな

いようお願いします。

【アニマルガールとの接し方】

飼育担当外のアニマルガールであっても、交流するのは許可されています。ただし、治安や風紀を乱す行為や教えは禁止します。

逆に、その様な恐れがある言動や行為をする子がいたら、教育指導をしてあげて下さい。

【緊急時】

セルリアンの襲撃や、自然災害、その他の緊急事態が発生した場合、マニュアルに従って行動して下さい。

職員によっては異なります。しかし、お客様の安全を最優先して下さい。やむを得ない場合のみ、セルリアンとの戦闘は許可されません。

不明な点、詳細を求める方は管理センターまでご連絡下さい。

皆で支え合い、笑顔で日々を送れる、そんな明るいパークライフを送りましょう!

パークでの先端研究や見解、現象

超巨大総合動物園であり、特異な環境にあるジャパリパーク。島を取り巻く未知への探究心から、日々様々な研究が行われている。

それは、皆が聞いたサンドスターやセルリウム。アニマルガールやセルリアンを対象にしている他、環境に機械や装置。色々な分野が存在している。

パークの魅力のひとつとして、ここでは公開されている一部の情報を紹介したい。

【ジャパリパーク島】

海底噴火により誕生した島。日本列島を逆さまにし、丸めた様な形状を取る。位置は尖閣諸島附近。

観測史上、前例の無い速さで島が形成された。本島とは別に、大中小の離島もある。様々な気候帯が存在。草木や野原、山脈や谷等が広がるエリアがあるが、ヒトが持ち込んだり整備したものでは無い部分が大半を占める。

自然によるものにしては、島の形成速度含めて疑問が多い。未知の超常物質サンド

スターによるものだと考えられている。

事実、火山からの噴出物にサンドスターが検出された。土壌や水中（海、川、湖等に含む）にも確認。

気候や地形が場所毎に分かれており（サバンナのエリアや、ジャングルのエリア、雪原等）、さも地球の様々な環境が集合したかの様だ。

サンドスターそのものに謎が多く、どのように関わりがあるのか、影響があるのか不明。 研究中。

島は安定している。活火山はあるものの、噴火の恐れは低い。

ただし。近海に複数海底火山があり、未調査から危険な海域有。船舶は回避して、安全航路で航海するように注意する。船舶は回避し

【サンドスター】

島にて確認された超常物質。目視ではキラキラと輝く粒子に見える。

土地の形状、気温や湿度等といった環境に影響を与えていると考えられており、島の火山から噴出。

土壌や水中にも含まれているが、パーク外では確認されていない。何故かは不明。地球の奥深くにあるのか、限定的な場所にあるのか……。

研究が進めば環境問題や食料問題、医療、軍事、その他技術や産業の発展等の解決や飛躍的な進歩を遂げる可能性を秘める。

その為、日本のみならず世界中の企業や研究機関が注目。物質の調査を行なっている。

また、アニマルガールを生み出した物質。動物、または動物だったものに物質が当たるとヒトの形に変異、生まれる。

〔アニマルガール〕

特殊動物。島にて確認された。主に動物、動物だったものがサンドスターに触れて生まれる。

ヒトの形態を取り、元の動物の魅力や特徴を持つ。友好的な子が多い為か、フレンドズと呼ぶ者が多い。

ヒトの身体と大きさを持ち、頭部や尾骨付近等に元の動物の特長である耳や尻尾等が生えている。動かす事も出来る模様。

コレらに骨の存在を確認出来ない。

また、ヒトの身体能力を大きく上回る子が多く、どのようにしてその能力を発揮しているのかも不明。

身体や衣服類は、けものプラズムで構成される。　コレはフレンズを形作るモノとされる。

彼女達が衣服と意識していなければ、尻尾は衣服類をすり抜ける。

サンドスター同様に解明されていない未知の領域。

飼育員の話では、彼女らは触られている感触がある様子。　くすぐりたい、嫌がる等の反応をしたと報告あり。

生まれながらにヒトの言葉を話す、二足歩行、食事はヒトと同様でも殆ど問題ない（一部除く）等も謎。

服やアクセサリー類、言動はヒトのイメージ等が色濃く出ている子が多く感じる。

ヒトの飼育下にいる動物がアニマルガール化した中には、衣服に元の動物と異なる格好になった子がいた模様。

アニマルガールの中には、伝説や架空の動物も存在。　同じ種のアニマルガールは生まれ難いが、稀に生まれる。　双子の生まれる確率と大凡同じ。

一方で、亜種がアニマルガールとして存在しており、その区分は、かなり曖昧。

尚、ヒトの女性が持つ生殖器官があるが子供は作れないとされる。　この為、種として成り立たないとする考えがある。

ただし。　研究者・分類群・研究の目的によつて意見は異なるから、全ての生物の分

類に適用可能な『種概念』は存在しないとした方が良いのではないだろうか。研究がされているが、今のところほぼ謎に包まれている。

【けものプラズム】

アニマルガールの身体、衣服等を構成していると考えられているもの。

サンドスターで維持。その為、サンドスターが供給出来ない島の外に出てしまうと維持出来ず、動物に戻る。

絶滅種や架空のアニマルガール程、けものプラズムが高い傾向にあり。

アニマルガールの認識次第で、様々な形態や特徴を取れる可能性がある。特にプラズム値が高い程、その可能性は高い。

強く、疑う事なく信じればプラズムで構成される尻尾や耳等を消せる可能性が。ただし、今のところ事例はない。

けものプラズムを維持さえ出来れば、島外でも活動出来るかも知れない。

そうなれば、身体能力を生かしてヒトの補助が出来ると期待。

その為にダイビングで装着する、空気を入れるタンクのように、サンドスターを入れる容器研究がされている。

【セルリウム】

サンドスターに並ぶ謎物質。 サンドスター・ロウと一緒にされる事もあるが、正確に分別されていない。 目視では黒くドロドロした液体の様に見える。

火山から噴出している他、土壌にも含まれている。

セルリアンを構成する物質。 近くの輝きに吸い寄せられる様に移動するのが確認された。 触れた物体の情報、輝きを模倣。 その形状でセルリアンに変化。

セルリウム濃度で、大きさや生まれる数に変化がある。 強さに関しては、濃度だけでなく模倣する輝きの強さにも左右される。

謎が多く、セルリアンを生み出し大変危険だが、有用性があると研究される。

安全に運用出来れば、物質や情報の保存や模倣物の製作。 サンドスター同様、様々な分野で活用出来るのではないか。

取り扱いには慎重に行う。 魅力がない様な、輝きを持たない容器に保管。 これはセルリアン化を防ぐ為。

更に指定された実験室や保管室等を守る。 無断実験や持ち出し禁止等、管理は厳重。

【セルリアン】

セルリウムで構成されている現象、物体。 怪異。 怪物。 多くの場合、目の様に見える部分がある。

他の輝きを襲い、無機物、有機物を問わない。 アニマルガールやヒト、施設類も襲う為、大変危険。

意思が無いとされる。 生物なのか否か、意見が分かれる事がある。

セルリウムから変化する事から生物ではないとも。 一方、曖昧ながら会話が出来たという話もあり（セーバル）。

セルリアンは情報を共有出来る様子。 取り込んだ武器の形状等の情報を、取り込めない他の個体が模倣していた為。

カコ博士のレポートによれば、これは進化ではない。 模倣、共有である。 これは厄介な性質で、取り込んだ個体を倒しても解決しないから。

無力化するには、アニマルガールによる攻撃が有効。 核となる石があれば、そこが弱点。

水に弱いモノもいる様だが平気なモノもいたり、石が無いモノ、光に反応するモノしないモノもいて……これも謎。

ヒトの武器でも対処出来ると考えられるが、セルリアンが武器を模倣する危険性から禁止された。

無力化した際、四角いキューブ状の破片を散らした後、粒子となり四散する。また
はキューブにならず粒子になり四散する。この差異は理由不明。

サンドスターや輝きのチカラをコントロール出来れば、セルリアンに模倣されず、安
全に対処出来るのではないか。

その考えから、アンチ・セルリウム装置や武器が研究されている。

【輝き】

楽しい、嬉しい等のプラスイメージを輝きと表現する。曖昧で科学的に説明が困
難。

物体や場所、アニマルガールやヒトも持つ。

セルリアンは、これらを取り込もうとして行動する。奪われた輝きは、取り込んだ

セルリアンを倒しても戻る保証は無い。

場所の輝きが奪われれば、魅力のない、つまらない、楽しくない場所に成り果てる。

ヒトやアニマルガールなら、自信喪失や無気力等になる。最悪は元の動物に戻った

り、昏睡状態に。

【ラッキービースト】

高性能のパークガイドロボット。足腰くらいの大きさ。

量産型は青を基色とし、丸つぼく、動物の耳や尻尾と思わずものがある。小さな足が生えて手はない。腹部辺りにレンズが付いており、ベルトで固定されている。

本体はレンズである。身体を失うと自力での移動が不可能になるが、音声による会話や無線機能に問題はない。重要なデータも保持される。

モデルは、パーク上空を飛行していたという未確認飛行物体。それを見た者は研究が成功するなど幸運が訪れる事から、この名前が付いた。あやかつて、案内ロボットのモデルに採用。

パークの地理情報を持つ他、検索機能がある。AIが搭載されており、音声による会話可能。動植物やパークについての説明が出来る。

お客様や職員が危険な場合、最寄りの避難所や経路を説明。避難を促す。

また、生態系維持の為に野生状態のアニマルガールとの会話は通常しない。緊急時は、その限りではない。

他のラッキービーストと連絡が出来る。音声入出力が出来るので、ヒトが通信機として利用可能。

ラッキービーストに対応した乗り物の運転が出来る。高さや手、足の長さが足りないが、無線で接続して運転する。

除草機能がある。 アニマルガールに食糧を配る。 簡単な修理や整備が出来る。録画機能がある。

これは、ヒトの手に余る広大なパークの治安維持や整備を行う為。

何度目かの改修で防水機能をつけた。 一度に複数の出来事やアクシデントが発生するとフリーズする。 今後の課題。

量産型の他にも特殊なタイプ、カラーリングが異なりコスプレしている個体がいる。それらは言語プラグラム等に多少の変更がされている事がある。

【ジャパリまん】

アニマルガール用に開発された食糧。 ヒトや動物も食べられる。

まんじゅうのような見た目。 様々な味が開発されている。 各個体向けに栄養満点。

材料は自然素材。 肉類は使われていないが、味によっては大豆等を用いた擬似肉が使われる。 おいしい。

アニマルガールを墮落させた罪深き「ジャパリまんじゅう」とは異なる。

【SSプリンター】

3Dプリンターのサンドスターバージョン。

サンドスターを消費して、データにある物を物体化させる。仕組みは非公開。一部施設で、アニマルガールの遊び道具生成に使用されている。

物体や輝きを模倣するセルリウムを利用する案もある。安全性の確保が出来れば、普及するかも知れない。

サンドスターの大量貯蔵や保管は簡単ではない。謎も多い。その為、建造物や航空機、医療現場等に使われる複雑で重要な設備や機械類の製作には使われない。

しかしながら、安全を確保して効率化が進めば、将来広く使用される可能性がある。

【絶滅種の再現】

絶滅種の骨や毛等にサンドスターが触れると、アニマルガール化する。

パークに絶滅種がアニマルガールとして存在するのは、カコ博士の研究成果。

決まって目に虹彩（ハイライト）が無い。しかし、ヒト基準やアニマルガールの平均での問題（視力や健康）は無い。

仲間を欲する傾向を強く感じる。

けものプラズムが通常より高い。

ヒトが絶滅に関与したとされる動物のアニマルガールであつても、ヒトを恨む、攻撃

的な態度をとる事は確認されない。

衣服類や身体能力の高さ等の特長は、アニマルガールに共通している。

ヒトの想像が具現化しているともされるアニマルガールは、元の生態の解明には繋がらないとする意見が強い。

その為、彼女達は別の視点で観察するべきだ（アニマルガールとして）。

絶滅種が けものプラズムが維持出来ず、元に戻る際は動物になるのか骨や毛になつてしまうのか意見が分かれているが未確認。

彼女達の公表やサファリ区分への解放は議論された後、する事に決定。

生態系への影響や道徳的、論理的な観念から結論を出すのは困難だった。

ヒトの業で生み出した彼女らを自由にするのは一種の贖罪である。

国際自然保護連合（IUCN）の種の保存委員会によって立案された《保全のための絶滅種の代用種作製に関する基本理念》の理に反するかどうか。

【伝説、架空のアニマルガール】

実在しない架空のアニマルガールがいる。いつ何時、どのように生まれたのか不明。

リウキウ地方にいる例のアニマルガールは、カコ博士の個人的な見解ではあるが、

シーサーである。

架空から生まれたアニマルガールは、けものプラズムがほぼ100%だ。

特殊な能力や比にならない強大なチカラを持つ子らが殆どだ。改めてサンドスターやアニマルガールの存在が謎である。

【アニマルガールの世代】

何らかの理由で、動物に戻るまでをひとつの世代として見る場合がある。

別個体で再びアニマルガール化した場合は世代交代と表現する事もある。

しかしながら、アニマルガールの寿命は不明なのと、けものプラズムやサンドスター・

セルリウム濃度測定を用いても正確に何世代に当たるのかは分からない。

交代すると姿形は先代と同じでも記憶は引き継がれず、性格は異なる。

【けもハーモニー】

けもの達の何かが響き合って、奇跡を生み出す現象。

個々の能力が高まり、いつもより強いチカラを発揮出来る様になる。

また、集団規模で起きる強力なハーモニーはセルリアンを怯ませたり、チカラを跳ね返す。

他にも様々な奇跡が起きるのではないだろうか。

【セルハーモニー】

けもハーモニーのセルリアン版。セルリアン女王が起こそうとしていた。

女王が特別な輝きを取り込み、パークに散らばる強力なセルリアンを音叉のように使うと、超大規模なセルハーモニーが発生。それによりセルリアンが超進化。パーク中のあらゆる輝きが奪われる……と仮定された。

最悪の事態になる前に阻止された。アニマルガール達と、職員の努力のおかげである。

【アンチ・セルリウムフィルター】

セルリウムを浄化する装置。火口に張る事で、噴出物に含まれるセルリウムを無力化出来る。将来パークの安全に関わるので、重要とされる。研究中。

【サーバル】

サーバルの輝きから生まれた元セルリアン。見た目はサーバルにそっくり。色は緑スライムのように、鳥のアニマルガールの様に、頭部に羽のようなものがある。

一部、虹色の様に見える。

自我があり会話が出来、自身の輝きを持つ。

セルリアン女王事件の際はセルリアンを活性化させたり、特別な輝きを女王に届けようと行動していた為、危険視されていた。　当時は管理センターから捕縛依頼も出されていた。

見た目も今ほどハッキリしておらず、自我はあれど薄さを感じさせていた。

今はセルリアンの様な行為はしない。　友好的でアニマルガールとしての振る舞いをしてる。

しかし、セルリアンともアニマルガールとも言えない存在。

【セルリアン女王】

カコ博士の輝きから生まれたセルリアン。　カコ博士の姿形に似る。　元のセルリアンは空豆のような見た目である。

セルハーモニーを起こし、パーク中の輝きを奪おうとした。　それはアニマルガールや職員の努力によって阻止。　最後は倒され、チカラの無い空豆の様なセルリアンになり逃走する。

言葉を話すが、会話は成立しない。　カコ博士の輝き、知識の中から、セルリアンに

とって都合の良い部分のみを得ていた様子。

【野性解放】

アニマルガールが、けものプラズムを解放した状態。この時のアニマルガールからは、強いけものプラズム反応を検知する。

通常より身体能力が強化され、目が光り輝く。身体からは、けものプラズムが粒子の様に散って見える。アニマルガール皆が使える訳ではない。特にヒト寄りの子は使えない傾向がある。

けものプラズムを激しく消耗し、負担が大きい。使用後は倦怠感がある様だ。度が過ぎればアニマルガールの身体を維持出来ず、動物に戻る危険性がある。

【ビースト】

常にけものプラズムを解放しているアニマルガール。自分のチカラを制御出来ない。

本質的には他のアニマルガールと同じで、サンドスターが動物に触れて生まれた。意図的でなくても、周りを破壊してしまう事もある。自然発生か、人工的に発生し

たかは非公開。

【ムーンショット】

開発中の対セルリアン銃。 グルーガンの様な見た目をしている。 サンドスターを使用してセルリウムを無力化する。 詳細非公開。

試験段階で、まだ実用化の目処は立たない。

ムーンショットとは、月へのロケット打ち上げ（アポロ計画）から。 不可能だと思われるくらい大きな目標を掲げて、その実現に向かって新しい発見や発明に挑戦していくことをこう呼ぶようになった。

この銃は、発明が困難なものひとつとして、しかし挑戦、発明をする事から名前をこうつけた。

【セルリウムセンサー】

セルリウムを探知するセンサー。 セルリアンの探知等に使用。

火山からの噴出物や土壌にてサンドスターとセルリウムは大なり小なり接触している。 その時に起きる反応の大きさから、セルリウムかサンドスターかを解析。 濃度を波長や形、点としてモニター等に表示する。

逆に接触していないと反応が薄いかしないので、必ずしもセンサー反応が正しい訳で

はない。改善出来ないか、研究中。

【サンドスターセンサー】

サンドスターを探知するセンサー。サンドスターの探知に使用。

セルリウムセンサーと大凡同じ仕組みで探知する。欠点も同じ。改善出来ない

か、研究中。

【けものプラズムセンサー】

けものプラズム反応を探知するセンサー。アニマルガールの探知や健康状態の

チェック等に使用。

サンドスター、波長等で探知する。詳細非公開。

【パークでの現象、その他】

今までも統一した見解が無い、研究中の自然現象や動植物の生態がパークで見られる事がある。

しかし、パークという特殊環境下では外界の構造原理に当てはまらないとする考え方が強い。少なくとも、既成概念を捨てなければならぬ現象が目に見えて起きてい

る。

ここで紹介していない研究や未知への探求も、これからも続いていくだろう。
その結果、多くの幸せと笑顔を生み出せる事を願う。
ジャパリパークそのものも、その為にあるのだから。

【パーク揭示板】（本編は幼少期の章から）

【パーク揭示板】 1スレ目【パーク開園!】

【パーク揭示板】 1スレ目【パーク開園!】

1：名無しのフレンズ

ジャパリパークがグランドオープンした歓喜のままにスレ建て。

2：名無しのフレンズ

そんなんでスレ建てすんなks

3：名無しのフレンズ

》2

速攻で来て草

4：名無しのフレンズ

パークは奇跡の島だからね、仕方ないね♂

5：名無しのフレンズ

フレンズなのにオスなのか

6：名無しのフレンズ

》5

ブリーフのフレンズなんでしょ

7：名無しのフレンズ

》4

森の妖精は新日暮里に帰って、どうぞ。

8：名無しのフレンズ

114！ 514！ 板に書いて板に！

9：名無しのフレンズ

》8

クツソ汚いフレンズがいますね……。

10：名無しのフレンズ

女の子説は有力だって、はつきりワカンだね

11：名無しのフレンズ

なんでモホが湧いてるんですかねえ

12：名無しのフレンズ

》11

そりやどこにでもいるだろ

13：名無しのフレンズ

いきなり荒れ放題で草の草

14：名無しのフレンズ

オマイらやめろw パーク穢すなw

てか可愛いフレンズが沢山いるから、モホの兄ちゃん達にとつてパークは地獄地方な
んだよなあ……。

15：名無しのフレンズ

》14

制止の呼び掛けからの油を注ぐ行為。モホだつてはつきりワカンだね

16：名無しのフレンズ

進まないんで！ モホの話は終わり！ 閉廷！ 解散！

ここから下はパークの話限定な。破ったらモホ

17：名無しのフレンズ

結局モホなんじゃないか……

18：名無しのフレンズ

》17

通報しますた

19 : 名無しのフレンズ
ファツ!?

(17主はBANされました)

20 : 名無しのフレンズ

この掲示板はケモシコ警察により監視されています。

21 : 名無しのフレンズ

ええ……

22 : 名無しのフレンズ

草

23 : 名無しのフレンズ

だから、良い子のみんなは止めようね!

パークとフレンズを大事にね!

24 : 名無しのフレンズ

んじゃパークの話をしよう(震え声)

25 : 名無しのフレンズ

最初からしとけば17は……!

26 : 名無しのフレンズ

》25

17は忘れる

27 : 名無しのフレンズ

おかしいヤツを失くした

28 : 名無しのフレンズ

ところで、パークって何処にあるんだ？

29 : 名無しのフレンズ

》28

尖閣諸島附近。 連日ニュースでやってたる情弱

30 : 名無しのフレンズ

海底火山の噴火で出来た。 海保が撮影した写真とか動画があるぞ

<http://www.515151.jp>

31 : 名無しのフレンズ

》30

まだ草木が生えてないハゲ島の時ですね

貴重な資料

32 : 名無しのフレンズ

》31

また禿げの話をしてる……。

33 : 名無しのフレンズ

ここから僅か数週間で、こうなった

<http://www.191919.jp>

34 : 名無しのフレンズ

》33

ファツ!?

35 : 名無しのフレンズ

》33

うせやろ……?!

これマ?

36 : 名無しのフレンズ

土地広がってないか?

草木も生えまくって草を禁じ得ない

37 : 名無しのフレンズ

パークに行けばフサフサになる……? ?

38 : 名無しのフレンズ

人類観測史上、前例の無い速さで島が形成されたんだよなあ……。

39 : 名無しのフレンズ

》37

そう思うなら検証してきて、どうぞ。

40 : 名無しのフレンズ

キラキラしてんのナニ?

火山灰?

41 : 名無しのフレンズ

》40

キラキラしてんのは、サンドスターやで

42 : 名無しのフレンズ

噂の超常物質か

43 : 名無しのフレンズ

アニマルガールを生み出したんだよな
あと、気候にも影響を与えてるらしい

44：名無しのフレンズ

夢を壊すようだけど、テーマパークの設定だろ

アニマルガールはマスコットキャラ的な

流石に信じられない

科学的に検証困難とかほざいてるが、ただの逃げ道

ハイ論破

45：名無しのフレンズ

》44

どの辺に論破要素があるんですかねえ

世界中の国や企業、研究機関が日本政府に猛アタックしてんだよなあ

ただの妄言に、マスコミや世界が動くか？

疑うならパークに行つて、どうぞ。

46：名無しのフレンズ

》45

夢守るのに必死でワロタwww

パークに行け？

キモオタ妄想の為に行くまでも無いと思われwww

47：名無しのフレンズ

おいやめろ

48：名無しのフレンズ

>>>47

やめねーよw

オマイら現実に疲れたからって、妄想に浸かるなよなw

49：名無しのフレンズ

>>>48

通報しますた

(48主はBANされました)

50：名無しのフレンズ

>>>49

よくやった

51：名無しのフレンズ
仕事が早い

52：名無しのフレンズ

荒らしに反応するのも荒らし行為です

見かけても無視しましょう

53：名無しのフレンズ

ok

54：名無しのフレンズ

すまん

55：名無しのフレンズ

でも現実的な話するけど、領土問題とかどうなの？

56：名無しのフレンズ

ニュースの通りやろ

周辺諸国と揉めたのは事実

57：名無しのフレンズ

》56

一瞬だけな

直ぐ日本領だと認められた

んで、これまた凄い勢いでジャパリパーク計画がスタート

本土から職員が大量投入されて建設ラッシュ

58：名無しのフレンズ

何か裏がありますねクオレハ……。

59：名無しのフレンズ

島とサンドスターの安全性を確かめる為、日本を実験台にした説

60：名無しのフレンズ

》59

可能性はある

何か起きたら、日本の全責任。でも安全そうだったから美味しいトコを貰おうと

後々パークに参入してる

ガンバレにつぼん。

61：名無しのフレンズ

》60

国連会議とかで圧力掛けられたんだろ、たぶん。

それはそうと、ワイ氏は

フレンズが日本語だったから説

62 : 名無しのフレンズ

》61

フレンズが発見されたのは日本領と認められた後やで

63 : 名無しのフレンズ

あつ、そつかあ……

64 : 名無しのフレンズ

でもさ、フレンズってなんだろうな

65 : 名無しのフレンズ

》64

ともだち

66 : 名無しのフレンズ

けーんじ君！ 遊びましょ！

67 : 名無しのフレンズ

不吉な数字に危険なヤツがいますね

68 : 名無しのフレンズ

》65

そのまま草

69 : 名無しのフレンズ

》64

重い哲学かな？

70 : 名無しのフレンズ

》64

サンドスターで動物がヒトの女の子になった子たち

奇跡の仕組み？ 知らん。

71 : 名無しのフレンズ

世界中で研究が始まっているんだろうけどな、人類の叡智を集めても分からない可能性

72 : パーク職員です。

ドウモ。パーク職員です。

ジャパリパークにいるんだけど、何か質問ある？

73 : 名無しのフレンズ

ファツ!?

74 : 名無しのフレンズ

》72

突然過ぎて草生えた

75：名無しのフレンズ

》72

マ？ マ？

76：パーク職員です。

》75

ママではない、パーク臨時職員だ

色んな場所の手伝いをしている

77：名無しのフレンズ

キターー！

78：名無しのフレンズ

騒ぐ程でもないと思われ

79：名無しのフレンズ

じゃあ、今どんな状況？

グランドオープンしたから、客だらけ？

80：名無しのフレンズ

セルリアンいるんだろ、平気なん？

81：名無しのフレンズ

フレンズとイチヤイチャ出来るって本当ですか？

82：名無しのフレンズ

髪の毛生える？

83：名無しのフレンズ

騒ぐ程で草

84：名無しのフレンズ

怒涛の質問攻めw

髪の毛のフレンズは強く生きて……

85：名無しのフレンズ

オマイらw

あと髪の毛の話は涙、で、でますよ……

86：パーク職員です。

ひとつずついくぞ

パークは連日客だらけ。 忙しい

セルリアンは客がいるエリアにはいないから、大丈夫だ

逆に来ようとしても柵に阻まれるし、突破されても避難出来るからへーきへーき

フレンズと少しならイチヤついても良いが、度が過ぎるチャラ男とかは注意される
最悪出禁

髪の毛生えるかは知らん

来園して試してくれ

87：名無しのフレンズ

最後が切ない

88：名無しのフレンズ

最後ステマかな？

89：名無しのフレンズ

死亡フラグが混ざってるんですがそれは

90：名無しのフレンズ

》89

気にしたら負け

てか、マジでヤバい島なら動物園造れないだろ

91：名無しのフレンズ

》90

島丸ごと動物園にする考えの方がヤバい

上層部はサイコパスの可能性が微レ存……??

92:パーク職員です。

質問には答えた

だから俺の愚痴を聞いてくれ

93:名無しのフレンズ

》92

また突然過ぎて草

94:名無しのフレンズ

》93

忙しくて、ストレスマツハなんでしょ

95:名無しのフレンズ

俺らで良ければ聞こう

96:パーク職員です。

ありがとう

俺は男子寮住まいなんだが、パリピが多くて困ってる

ハード●イミたいな変態が常に腰を振りながら「フォー!」とか「セイセイセイツ!」

と騒いであると思ってくれば分かるか?

こうやって愚痴る場が無いと、この先やってけそうになくてな……

97：名無しのフレンズ

》96

うわあキツイっす

98：名無しのフレンズ

》96

分かり身が深い

俺らからしたら、パリピは敵だべ

少なくとも俺はそう

99：名無しのフレンズ

ハッテン場♂

モホの楽園は、そこにあった

100：名無しのフレンズ

》99

通報しますたー

(99主はBANされました)

101：名無しのフレンズ

ええ……

102：名無しのフレンズ

無茶しやがって……

103：名無しのフレンズ

BANされスギイ!

104：名無しのフレンズ

厳しいw

あと早すぎるだろw

105：パーク職員です。

でも隣にA氏っていうパリピじゃないヤツがいてな

ソイツとなら上手くやれる、友だちになれるかもと思ってたんだが

なんとソイツ、美人で巨乳な幼馴染がいるのが発覚した

裏切られたくそう! くそう!

106：名無しのフレンズ

そして話を続ける職員であった

107：名無しのフレンズ
スルースキル高い

見習いたい

108：名無しのフレンズ
でも内容は嫉妬で草

109：名無しのフレンズ
NTRしちゃえよ

110：名無しのフレンズ

》109

通報しますたー

(109主はBANされました)

111：名無しのフレンズ

丁度110で通報されて草

A氏ノンケかよお！

112：名無しのフレンズ

》111

通報しますたー

(111主はBANされました)

113：名無しのフレンズ

》105

これは幼馴染より先にノンケのA氏を喰っちゃうしかねえゾ

114：名無しのフレンズ

》113

通報しますたー

(113主はBANされました)

115：名無しのフレンズ

ツツコミどころがあり過ぎて、どこからツツコミして良いか分からんが

怒涛のBANで草ア！

116：名無しのフレンズ

敵しいw

独裁政権下かな？

だがNTR。ヤツは許すな

117：パーク職員です。

聞いてくれない系？

118：名無しのフレンズ

》117

戯れながら聞いている系

119：名無しのフレンズ

》117

安心して、どうぞ。

120：名無しのフレンズ

しかし美人の幼馴染ねえ

漫画みたいな事もあるんだな

パークの方が、よほどだろうけど

121：名無しのフレンズ

嫉妬する気持ちは分かる

でも友だちにはなれるハズやで

122:名無しのフレンズ

少なくとも、俺らはオマイの味方やで

なんなら友だちや

モニター越しだがな!

123:名無しのフレンズ

》122

ええ事言うた!

124:パーク職員です。

ありがとう、モホの兄ちゃんたち!

125:名無しのフレンズ

》124

通報しますたー

(124主はBANされました)

126 : 名無しのフレンズ

ええ……

127 : 名無しのフレンズ

フレンズって、なんだろうな

128 : 名無しのフレンズ

とりま、髪生えるかパーク行ってくるわ

129 : 名無しのフレンズ

》128

生き延びてたのね、髪 フレンズ

毛根の方はともかく

130 : 名無しのフレンズ

みんな……強く、生きろ！

【パーク掲示板】 2スレ目【けもシコ】

【パーク掲示板】 2スレ目【けもシコ】

810 : 名無しのフレンズ

今北産業

811 : 名無しのフレンズ

》809

オオカミの大人っぽさがシコい

812 : 名無しのフレンズ

フレンズ可愛い

エロい

4545

813 : 名無しのフレンズ

》811

シーサーのフレンズとか

露出高すぎてマズいですよ！

814：名無しのフレンズ

あー、ダメダメ

エッチすぎます

815：名無しのフレンズ

》813

こんなんでもマズいとか

DT乙

816：名無しのフレンズ

》815

ど、どど童貞ちやうわ!

817：名無しのフレンズ

http://www.454519.jp

818：名無しのフレンズ

うつ……ふう

819：名無しのフレンズ

》817

ケモナー歓喜

820：名無しのフレンズ

耳と尻尾がある分

アドバンテージがある

821：名無しのフレンズ

キ”タ”キ”ツ”ネ”か”わ”い”い”な”あ”

種付けプレス不可避

822：名無しのフレンズ

孕ませたい（直球

823：名無しのフレンズ

見返してきた

このスレ、ずっとこの調子かよ

みんながキモい事がよく分かった

824：名無しのフレンズ

》822

フレンズは孕まないらしいが

825：名無しのフレンズ

》824

マ？

826：名無しのフレンズ
やったぜ。

827：名無しのフレンズ
やり放題じゃん

中●し放題

826：名無しのフレンズ

セ●クスフレンズ

827：名無しのフレンズ

皆ゲスくて引くわ

828：名無しのフレンズ

》827

当たり前だよなあ？

つーかシコるだろJK

829：名無しのフレンズ

なんで孕まないの？

830：名無しのフレンズ

》829

ヒトと違うからだろ

831：名無しのフレンズ

》829

動物だからじゃね

832：名無しのフレンズ

思えば獣●でヤバイ

833：名無しのフレンズ

ヒトか動物か

意見が分かれてるよ

834：名無しのフレンズ

ヒトの子宮、卵巣はあるけど

卵子がない、排卵しない説

835：名無しのフレンズ

そして始まるパーク議論第〇〇回

836：名無しのフレンズ

》834

つまり発射（意味深）し放題

837：名無しのフレンズ

けもしコ警察いないんだな

838：名無しのフレンズ

》837

いたら、ここまで続いてないゾ

察しろks

839：名無しのフレンズ

パーク側としては、その辺どうなん

対策してんの？

840：名無しのフレンズ

》839

職員に聞かなきゃ全然分からん

841：名無しのフレンズ

対策しても、広大なパークなんで

穴だらけやろ

842 : 名無しのフレンズ

》841

フレンズの数だけ穴はあるから……

843 : 名無しの職員

呼んだ？

844 : 名無しのフレンズ

やべえ、職員じゃん。

845 : 名無しのフレンズ

許して下さい！

なんでもしますから！

846 : 名無しのフレンズ

》845

ん？ 今、なんでもって

847 : 名無しのフレンズ

モホは帰って、どうぞ

848 : 名無しの職員

オマイら……

フレンズはオカズじゃないんやで

(4545)

849 : 名無しのフレンズ

》848

説得力なくて草

850 : 名無しのフレンズ

やっぱ好きなんですねえ！

851 : 名無しの職員

》850

健全な男の子だもん

仕方ないね♂

852 : 名無しのフレンズ

》851

職員もヒトなんやなって(遠い目

853 : 名無しの職員

んで話すけど

貞操概念とか性教育の話は一応ある

オマイらみたいな変態に喰われないようにな

854 : 名無しのフレンズ

》853

職員も相当変態だと思っんですけど

855 : 名無しのフレンズ

》854

激しく同意

856 : 名無しの職員

★D A ★M A ★R E ★

下ろしてるズボン履いて、どうぞ。

857 : 名無しのフレンズ

》856

萎えたんで仕舞ってます

858 : 名無しのフレンズ

》856

髪生えないんで仕舞いました

859 : 名無しのフレンズ

》858

なぜはえるとおもった

860：名無しの職員

最初こそ性知識は、風紀を乱すって考えでも、そうするとフレンズは無知になるそれを良い事にヒトが事件を起こした

つ <http://www.147428.jp>

861：名無しのフレンズ

》860

えつなにコレは（畏怖

862：名無しのフレンズ

》860

マ？

863：名無しのフレンズ

》860

ヤベエよヤベエよ

864：名無しのフレンズ

》860

先輩！ マズいですよ！

865：名無しのフレンズ

》860

なんだこのオッサン!?

866：名無しのフレンズ

》860

絵に描いたような汚いオッサンと展開

867：名無しのフレンズ

》860

俺らよりヤバくて草も生えない

868：名無しの職員

グランドオーブンから数日後なんだよなあ

コレを受けて上は教育が必要と判断

エッチは駄目だと教えるようになった

869：名無しのフレンズ

》868

はええ

結構重い話があつたんですね

870：名無しのフレンズ

昔、保険の教科書の性教育部分を

淫らだと否定してる政治家いたつすけど

教育は重要だつてハッキリわかんかね

871：名無しのフレンズ

教育しないと子どもが犠牲になる

パークじゃフレンズが犠牲になつたか

872：名無しのフレンズ

偏見は駄目、絶対。

873：名無しの職員

この事件

偶然明るみに出たから、上も動いたけど

下手したら気付かれず多くの犠牲が出てた

874：名無しのフレンズ

パークって楽園のイメージあったけど

結構、ダークサイドな部分多そう（小波感

875：名無しの職員

あと規制があるが

成人向け雑誌がパークで買えるようになった

876：名無しのフレンズ

》875

え、買えなかったの？

877：名無しのフレンズ

》876

規格外とはいえ、動物園だからやろ

878：名無しのフレンズ

いやあ、キツイッス

879：名無しのフレンズ

アダルトを規制するとか

余計に性犯罪増えるに決まってるんだよなあ

880：名無しのフレンズ

》879

それな

パークは島だし、そこで生活するヒトもいる

欲求不満を如何に無くすかも大切なものにな

881：名無しの職員

オマイら……

さつきまでの性犯罪者予備軍から一転かよ

882：名無しのフレンズ

》881

当たり前だよなあ？

883：名無しのフレンズ

》881

一転攻勢はモホの特権

884：名無しのフレンズ

》883

モホなんだかノンケなんだか

これももうワカンねえなあ……

885：名無しのフレンズ

》884

なんでも喰っちまうイイ男なんでしょ

886：名無しの職員

ただやっぱりというか

広大なパークだし未確認のフレンズもいる

監視の限界はあるしプライバシーもある

皆を守りたいが、限界を感じるよ

887：名無しのフレンズ

自分の身は自分のチカラで守る事

でも本当に辛かったら

誰かを頼ったって良いんだぜ？

888：名無しのフレンズ

》886

そう言う名無しの職員は立派だと思うよ

889：名無しのフレンズ

俺はまだ、パークに行ってないけど

手伝える事があつたら手伝うぜい

890：名無しの職員

とりま、こうして話が出来ただけでも

気が晴れるわ、ありがとう

891：名無しのフレンズ

パーク職員も大変なんだな

892：名無しのフレンズ

応援してるぜえ

893：名無しの職員

ちなみに

フレンズに施す性教育は子ども向けな

だから、ややメルヘンな知識になつとるか

或いはDTが勘違いしそうな行為とか

平気でやる可能性がある

894：名無しのフレンズ

》893

DTを殺すフレンズがいるのかな？

895 : 名無しのフレンズ

》894

コワイ……コワイ……

896 : 名無しのフレンズ

》893

まあ、何もしないよりマシじゃね？

897 : 名無しの職員

もし、パークに来るなら気を付けて

遅いんで、この辺で寝ます

898 : 名無しのフレンズ

乙

899 : 名無しのフレンズ

》897

はいよー

乙

900 : 名無しのフレンズ

おっー

職員就職前（幼少期）

新たな人生。 幼馴染と将来の夢。

毎日、貼り付けた笑顔を必死に浮かべては内心で泣いていたんだよね。

存在を否定されて、泣きそうになって。

けれど身を守る為に心を殺して頷いて。

落ち込む事も泣くことも許されず、それでも一生懸命だったのを私は知ってるよ。

家に帰れば、枕を濡らす毎日だったよね。

朝日に怯える日々だったね。

そのくせ、相手を傷付けまいと未来も過去も受け入れてきた君は優しい人だ。

けれど君が傷付いていくのを見ているのは辛いよ。

悲しい事なんて知らないって笑うけど、無理しなくて良いんだよ。

「パークには、私がいる。皆がいる。フレンズがたくさんいる」

「だからね。もう頑張らなくて良いんだよ」

「辛かったら、言って良いんだよ」

ギユツと君を抱きしめた。

冷たくて、寒さと寂しきで震える身体を暖めてあげる。

君が耐えて溜めてきた涙が、大粒の雨となって私を濡らすけど、構わない。
君がそれで暖まるなら、それで良い。

「ようこそ、ジャパリパークへ」

どこまでも拡がる青空の下。 島から聞こえる明るい喧騒、僅かに聞こえるさざなみの音の中。 私は君に笑顔で言う。

「けものがお好きですか？」 って。

街中に溢れる求人広告に限らないが、条件の良さそうな文面や名も知らぬ笑顔を載せている事は珍しくない。

勿論、正直に受け入れた訳じゃない。現実には憎悪に満ちた厳しい世界。そう自身に言い聞かせてはいた。それは偽物。有り得ないと。

実際は阿鼻叫喚の重労働環境で毎日、罵詈雑言を浴びせられるに決まっている。

だが、甘い誘惑は偽物だとしても「ひよつとしたら」と根拠の無い可能性に縋って手を伸ばしてしまう愚者がいるのは、確かだ。

俺だよ。悪かったな。

そして都合の良い妄想は消え、悪い予想が的中。当然の帰結だった。

その罪を償えとばかりに俺は仕事や人間関係に心身共に疲れ果て、気が付いたら死んでいた。

だが、ここにきても甘ちゃん俺。薄れ逝く意識の中、どこか樂觀視をしていたのは否定しない。

人間、死ぬばそれまでとか楽になると言う。天国に行けるとも言う。本当にそうなのか分からない。これから分かる。

だが、俺はまたしても、根拠のない可能性に縋ったのである。やったぜ。楽になれる、解放されたと。

ところが、そうは問屋が……いや、この場合は神が卸さない。まさか死してなお、こんな目に遭わされようとは。

次に気が付いたとき。知らぬ若き男女に見下ろされ、笑顔を向けられていたのである。

何事か。疑問をぶつけようにも、バブバブとオギャー。感情表現は笑うか泣くし

かないという。

まさかの赤子リスタートだった。

うん。単刀直入にいう。俺は転生者になった。なぜに。why?

俺は天国で幸せになれるんじゃないのか。それともココがそうなのか。或

いは地獄か。そうか、そうですか。

周りを見れば、木製の格子に囲まれている。牢だ。俺は囚われたのだ。

冷静になってくれば、それは赤子用のベッドである。いけない。クールになれ。

よくある話や流れを参考にしよう。転生者の話を読み漁る程に好きではないが、大

まかな流れは異世界転生か。

だとしたら、ここがドラゴン飛び交うファンタジーな異世界なのか、厳しい戦時中の

世界なのか。

そして、ただの一般人に世界を救えだの守れだのの使命を帯びさせられるのか。

いや。そんな事するなら発展途上国の子ども達を救ってくれよ。そうじゃなくても軍人や政治家とか、もつと適性ある人はいるだろとツツコミたい。

駄目だ。わからん。全然わからん。

赤子のままでは情報収集は限られる。ここは耐えるのだ。

かくして俺は、若き男女に屈辱のおしやぶりや哺乳瓶ブレイを味合わされつつ、現代日本とさして変化を感じられないまま幼少を過ごした。

とある春の陽気の下。桜満開、花弁が舞い散り。歩いたり言葉を発せる頃。

外の景色やテレビやラジオからの情報からして、尖閣諸島の方に新たな島が出来て、もう上陸可能だとか以外は、やはり変哲も無い現代日本だわコレ畜生めと結論が固まりつつ、ガツカリし始めた時。

俺の住む住宅地の隣に幼馴染なる人物が出来た。凄いおどおどしている女の子だ。

もうね。幼馴染とか正直どうでも良い。ラブコメ風に結婚相手とかロマンな事は考えない。

男としてどうなの、と思われても仕方ない。グレた。この世界に対して。

精々、今度こそ就職に失敗しないぞと考える程度。

だが、それもまた、馴染みの名前で裏切られる。

「あ、あの……………カコ……………わたしの、なまえ」

あー、うん。 カコちゃんねー。 よろしくねー。 俺、杏樹（あんじゅ）っていうの。 前世の名前忘れたのー。

そう適当に流そうとして……………僅かに残った前世の知識が待てをかけた。

名前についてだ。 俺の、女っぽい新たな名前についてじゃない。

前世の……………俺の名前についてもない。

カコ。 目の前の、ロリっ子の名前だ。

「いや、まさか。 カコ博士か!？」

俺の甘ちゃん妄想脳は、カコという名前に反応を示す。 そう。 過去。 カコだ。

アニメで有名になった「けものフレンズ」の作品群、アプリに出てくる公式の「ヒト」である。

公式イラストは存在するけれど、アプリでは名前のみ登場。 ジャパリパーク動物研

究所の副所長らしい。

人類、フレンズ共に害ある存在「セルリアン」絡みの大事件「女王事件」発生の際、セ

ルリアンに襲われて意識不明。

作中に出てくる別の「ヒト」であるガイドの「ミライ」さんの話だと、パークの外、本土の病院に入院したんだかなんだか。

悲しくも、両親を幼い頃に失い、辛い思いをしてきたとか。

アプリ版は、動画等でしか知らない。だから詳しくは分からない。

現状、カコの両親は存命しているし。俺の影響なのか分からん。

だけれど、もしそうなら。もし、俺の妄想通りならば。

この世界は「けものフレンズ」の世界。

新たな島の情報は、将来、舞台となる超巨大総合動物園「ジャパリパーク」が建設される。

裏切られ続けたが、馬鹿な俺は再度、信じる事にして……質問を投げてみる。

「カコちゃん。けものは、おすき？」

——うんっ！

桜吹雪の中。

目の前の少女は、笑顔満開でお返事をしてくれた。
嗚呼、と。釣られて笑顔になった。
俺は初めて、妄想が現実になったのである。

「パーク職員に、俺はなる」

カコとミライの出会い

けもフレ世界は、ジャパリパークが舞台。

自然に内容は、パークやフレンズがメイン。外の情報は殆ど無い。

だが、あるにはある。少ないだけで。

例えば。カコとミライは幼い頃、動物園で出会ったという。

その時、ちよつぱり歳上のカコがミライに色々動物の話をしてあげており、ミライのけもの好きに拍車がかかったそうなの。

その光景は、ちよつぱり今じゃなからうか。カコの両親と、俺の今世の両親共々仲良く動物園に来ているのだから。

何度か動物園には共に来ているが、ひよつとしたら今日こそ、その光景を観れるのではないか。

して、それは叶う事になる。

「それでね、ホワイトタイガーは——」

「そうなんだ!？」

目の前で出会った緑髪の子と、馴染みのカコがキャツキャツと、けものの知識を生き生きと会話中。

うん。 たぶん、とうかミライさんだね……今は、幼いからミライちゃんだね。緑髪だし。

嗚呼。 尊い光景。 して、とうとう観れた歴史の一部始終。 我、感動。

この日の出来事は、ミライが職員になるひとつのキツカケになるんだろう。

感涙し、頬を雫がなぞる。 カコとミライが笑顔で話し合い、存命しているカコの両親が「あらあら」と微笑ましく見ている光景は、前世で疲れた心を癒していく。

俺は天を仰いだ。

どこまでも続く澄み切った青空が、水面のように歪んで見えた。

雨なんて降っているワケなのに、頬を濡らしていく。 目頭も熱い。

けれど、それは俺の不安定な心を如実に表しているといえよう。

「ミライ……アレさえなければ！」

同時に思う。

こんな可愛い子が将来、けものを見るとヨダレ垂らしまくって大興奮するパークガイド兼調査隊長になるとは……誰が予想出来ただろうか。

けものもいれば、のけものもいる動物園。

のけもの。それは誰の事でしよう。

俺だよ悪かったな。

楽しそうに話し合う幼女ふたりを前に、俺は拗ねていた。

ふんだ。どうせ転生者である。存在しない者である。いる方がオカシイのだ。

そんなわけで。ハブられている俺は、両親に頭をナデナデされつつ、「ガールズトーク」がどうか言われて慰められていた。

ガールズトークなのか、アレ。ケモノで野生的な会話がメインな気がするよ。

女子の会話ってファッションや化粧品の話のイメージがあるんだよね。あくまで

イメージだ。いや、幼子に求めないよ。

寧ろ純粹なまま育つて欲しい。

いや、純粹過ぎたまま大人になったのか。ふたりの雰囲気や設定を思い出そう。

カコは知識は凄くて研究所の副所長になり巨乳の主にもなったけどファッションセンスがゼロだったり。

ミライも知識は凄いけど求め過ぎてヨダレ垂らしまくりの大興奮して蘊蓄を語りたいウーマンになった。

まあ、うん。それが彼女たちのアイデンティティか。個性か。

だが、ミライ。大人になってヨダレ垂れ流しながら、フレンズに抱きつき攻撃をしようものなら、自重させる。

たぶん大丈夫だろうけど。パークやフレンズを愛する者である。迷惑になる行

為はしない筈だ。たぶん。

さて、一方でカコなんだが。

基本的に大学にて研究に没頭し、籠ってるイメージだ。休みの日は動物園に行つた

とかだが。

ジャパリパーク計画に参加、島に上陸した後も似た過ごし方だったのだろうか。分からん。

馴染みなのだから、なるべくコミュニケーションを取らねば。

両親は存命しているとはいえ、箆っている心にも悪影響かも知れん。

俺が休みの日とかに連れ出して、一緒に動物園でもパーク内散策でもやろう。その為には職員にならないと駄目だが。取り敢えず今は――。

「お、おれも！　けもののはなし、聞きたい！」

ガールズトークの輪に入る事にした。　恥ずかしい。　怖い。　でも、やる。ハブられは危機感を覚える。　過去の経験、そして今世の未来に対して。

「だれですか？」

「あんじゅ。　わたしの、おともだち！」

「よろしくお願いします！」

何故か幼女相手に深々お辞儀をしまして、両親やミライ、カコに驚かれて……笑われた。

うん。　恥ずかしい。　でも、お陰というか輪には入れたぞ。

いつか大人になって、パークに就職して職員になって、それぞれ働き始めても。

この輪をいつまでも。

そして、ともだちのままでもいいなと俺は願った。

将来の飼育員さんと園長さん？

超常物質サンドスターにより生まれる特殊動物、アニマルガール。またはフレンズ。

元の動物の特徴を引き継いだ女の子の姿をしている不思議な、いきもの。

けものフレンズ世界の、要といえる存在である。

そのフレンズには世代がある。

アニメにも、ペンギンアイドルユニットなPPPの話やロツジでの話で少し触れられている部分があるから、知っているヒトは多いと思う。

親とその子ども、的な意味ではない。

先輩、後輩といった感じというのか。

フレンズは何らかの理由でヒトの形態を維持出来なくなると元の姿……動物に戻る。死ぬワケじゃない。

ただし。戻った子が再びフレンズになるというのは聞かない話だそう。

その代わり。別個体がサンドスターに当たると、フレンズになる。この時、世代交代となり第2世代、第3世代となる。

記憶は受け継がれない。ただ、アニメサーバルがロツジで言っていた事や記録映像を見て泣いていた事から、稀に同種のフレンズが生まれたり曖昧な記憶や感覚は残るのかも知れない。

サンドスターの事は、全然分らない。

アニメでもよく分かってないとか言っていたのだ、俺はもつと分らない。

絶滅動物がパークでフレンズとして存在しているのも、そのお陰なのだろうが……分らない。

絶滅種がパークでフレンズとして存在出来るのは、カコ博士のお陰らしい。 馴染みとしては鼻が高い。 いや、現在は、まだ幼子だけど。

仕組み？ 知らない。

俺の中では、化石をパークに持ち込んでサンドスター当てたらポンと生まれるんじゃないかというイメージ。

実際は、知らない！

知らない知らんばかりで、話がズレていくが世代交代前、第1世代と呼ばれるフレンズ、その時のパークの状況が気になるヒトがいると思う。

アニメじゃ、ヒトの造った建造物等は遺跡と呼ばれ、一部除いて荒廃した感じであったからね。

それを見れるのは、漫画版。

して、あの世界は第1世代だとか。

漫画版はパークが通常運営されている。そこに主人公の菜々ちゃんが、新人職員としてやってきて、立派な飼育員になる為に頑張る話。

肩書きは「試験解放区 特殊動物 飼育員」だったか。長い。

担当フレンズはサーバルとキタキツネ。サーバルはアニメと性格は、そんなに違わないけれど、キタキツネの性格はかなり違う。

世代が違くと、性格も異なるようだ。見た目は、ほぼ一緒なのだけけど。今は割愛。

そんな主人公の菜々ちゃん。パークに行くまで会う事はないと思っていた時期が、俺にもありました。

「わたし、なな！ おともだちに、なろうよ！」

桜舞い散る公園にて。

同様のピンク色の髪の毛。名前共々春の陽気を感じさせる笑顔を向けて、手を差し伸ばして来る女の子が。

うん。 菜々ちゃんだ。 同名の別人の可能性もあるけど。

カコの従姉妹だとか、なんか言われていた気がするが定かではない。

まさか、漫画版主人公の菜々ちゃんにも会えるとは。

俺は再び感動して涙を流した。

嗚呼。 今日も青空が綺麗だ。 そして歪んで見える。

俺は幸せ者だよ。 よよよ。

頬を伝う雫。 雨にしては、しよっぱくて……温かい。

「ええ!?! 　　なんで泣くの!?! 　　泣かないで!」

「ごめん。 　　目にゴミがはいったの。 　　もう大丈夫」

ウソである。 　　幼女に泣かされたのだ。 　　おお、泣いてしまうとは情けない。

俺は片腕で涙を拭いっつ、差し出された手を取った。 　　ハンドシエイク。

おお。振り回されつつも温かい。この感覚、いつ振りか。再び流れそうになる涙に耐えつつ、俺は菜々ちゃんに挨拶をする。

「よろしく！ おれの名前、あんじゅ」

「うんうん！ よろしくね！」

ニコニコと接してくる菜々ちゃん。お天道様みたいに、とても明るい子だ。こちらも明るくなって笑顔にしてくれる。

その明るさは、大人になって職員になっても振舞ってくれるだろう。

冬場でも半ズボンで過ごして風邪引いたり、妙な発言でチーターに「変わってる」と言われるシーンもあったが、ミライやカコ程ではない。

あ、デイスってないよ？

個性豊かなのは良いことだ。 うん。

「あんじゅは他に、ともだちいないの？」

デイスられた。

「え、えと……いるよ」

「でも、あんじゅと、わたしだけだよ」

おいこらやめろ。幼女の身で可愛そうな視線を向けないで。心に響くんだよ。

ガラスのハートが傷付くんだよ。

いや、分かる。分かるよ。俺ひとりで公園にいるから、そう言ってきたんだと。

だから正直に答えていく。

「ともだちは、今日はいないの。ひとりで探検ちゅう」

ドヤツ。ウソじゃないよ。

そう。ひとりで家の周囲を探索していたのだ。

カコを連れ回すには、体力的に厳しいだろうから、ひとりなのだ。パーティー編成を考えての冒険である。

実のところ、気になる事があつての事だ。具体的には、神社を探している。

アプリ版主人公が昔、神社で狐の世話をしていたらしいのだ。

ひよつとしたら、会えるかなと思つての探索。　そう都合良く見つかるとは思えないけど。

「そうなんだ」

「うん。　それでね、この近くに神社はあるかな？」

「あるよー！」

あるそうです。

とはいえ。　都合良く目的が達成されるとは思えない。　神社は日本中にあるし。

本土にて、カコにミライ、菜々ちゃんにも出会えただけでも奇跡なのに、アプリ版主人公……後の女王事件解決に貢献し、園長と呼ばれる者にまで会えるとは思えない。

それでも、俺の妄想脳は期待をしてしまう。　これ、イケるんじゃないかと。

「あんない、して欲しいな」

「いいよ！　こつち！」

元氣よく駆け出す菜々ちゃん。　元氣なのは良い事だ。

追い掛けるべく、足を動かした。

決して強制じゃない、ワクワクした走りは久し振りだ。足取りも軽い。

前から受ける風が心地良い。

別に園長さんに会えなくても良いか。この瞬間を感じさせてくれた菜々ちゃんに感謝。

自然と笑顔になる。

俺は忘れていた幼き爽快感と疾走感を、今世で味わえたのだ。

「ココが、じんじゃー！」

菜々ちゃんは元気いっぱい、俺は息も絶え絶えになった頃。

辿り着いたは、古びた神社。森の木々に囲まれていて、石垣や木造の壁や柱はボロ

ボロだ。

カコを連れてくるには、やはり厳しい距離と場所。でも、ココは美しいと思う。

溢れ日が、決して小さくない境内と鳥居にシャワーとなつて降り注ぐ。町の喧騒はココまでは届かず、草木が擦れる音が、走つて興奮した心を落ち着かせる。

「……………良い、ところだね」

「うん。でも、あまり来ないの」

まあ、そうだろう。森の中にあるし、結構遠い。森の中にある道もボロボロで整備されている様子がない。

けもの道、と言われても仕方ないレベルだった。

「ありがとう。わざわざ俺のために」

「ううん！ わたしも楽しかった！」

へへへ、と笑う菜々ちゃん。嗚呼、心から癒されるよ。

ぜひ、大人になって職員になつても、そのままの君でいてくれたまえ。

そんな菜々ちゃんに再度、質問する俺。遠慮するべきだろうけど、笑顔を向けられると話しやすく感じちゃってね。

固い表情をするヒトつて、そういうのが嫌だからか。理由のひとつかも知れない。

「ココには、前にも来てるの?」

「うーんとね。2回くらい?」

首を傾げて唸る。記憶は曖昧な様子。

けれど、俺には貴重な情報。そうでなくても、話していると楽しい。

「キツネさんとか、他に男の子か女の子を見なかった?」

「うーん。他の子は見たことないよ。あつ。キツネさんか分からないけれど、

しろい けものさん なら見たかも」

おお。有力な情報を得たぞ。

そのしろい けものさん は、たぶんキツネさんである。パークのオイナリサマかも。

主人公がお世話をしていたという事は、この森か神社に住んでいると思われる。ココまで来たのだ。会えないだろうか。

そんな気持ちを感じたのか。菜々ちゃんが声をかけてくれた。エスパークかい？

「いつしよに探す？」

「良いの？」

「いいの！　わたしもね、会いたくてココに来たんだから！」

あら。利害一致かい？

漫画やなんかで、菜々ちゃんがこういう所に行ったという描写はない。

俺の影響なのだろうか。それとも、描かれていないだけで、行った事はあるとか？
考えても仕方がない。今は一緒に探そう。

「軒下、えーと……屋根の下とか、神社のしたがわのスキマを見てみようか」

「うん！」

さすがに、森の中に入る勇氣はない。入って帰れなくなったら大変だ。

変な騒ぎを起こして、バタフライ効果的に「パークの危機なのだー！」状態になるのは避けたい。

いや。既にやってるのかも知れない。

「あれ。ヤバイのでは？」

急に怖くなってきた。心境の変化の具合によつては、森の静けさとは不気味だ。

目の前で「うんしようんしょ」と汚れるのも厭わず、社の下側を一生懸命に搜索している菜々ちやんの光景も、恐ろしく感じてくる。

考え過ぎかも知れない。転生者なのだから、寧ろこういうのが醍醐味だろ楽しいと。

でも、それで誰かが不幸になる可能性を考える。未来は分からない。あくまで、俺の被害妄想だ。

やめよう。

俺の目的は、園長に会うのではない。パーク職員になる事だ。そこを忘れてはならない。

「いなさそうだし、そろそろ帰「いたよ、あんじゅー！」見つけたの!」

菜々ちゃんが嬉しそうな声を上げた。

手遅れだった。森に響く声が、俺を不安にさせる。自分勝手だとは自覚している。そも、探そうと言ったのは俺である。

「え、えーとね。あまり大きな声はダメだよ。けものさん、怖がつちやうから」

俺もな。既に怖い。主に未来が。

「ごめん。でも、ほら、こっち来て見て。あそこにいるの」

社の下を覗き込みつつ、手招きしてくる菜々ちゃん。これは……見て良いのだろうか。

うーん。どうする。見たところで問題ないと思うが。

正直に言えば、見たい。白い狐って、神聖な感じがする。中々、森で見れるもの

じゃないだろう。

「うん。いま、行くね」

見よう。大丈夫。考え過ぎだ。

そう自身に言い聞かせて、そちらへ向かう。そう。見るくらいなら。そんな時だ。俺を責めるような声が飛んできたのは。

「き、キツネさんをいじめるなっ！」

驚きと共に、声のする方を振り向く。

そこに立っていたのは、菜々ちゃんくらいなの、ひとりの男の子だった。勇気を振り絞っているのか、小刻みに震えている。

手には、小さなパン。キツネさんあげるごはんかな。

「……………園長かな？」

無意識か恐怖からか。

俺の声に応える者はいない。
となつた。

ただただ、森の静けさの中へと吸い込まれていくだけ

幼い頃の、菜々ちちゃんと園長さん。そして……白いキツネさん。

神社にて出会った男の子。

小さなパンを持って、勇気を振り絞って俺たちに立ち向かってきた。

キツネさんをいじめるな、と。

いや、いじめてはいないよ。そう見えたのかもしれないけど。

そんな男の子。特筆するべき格好はしていない。普通の子だ。けれど俺の妄

想脳は違うと否定する。

この子は、後にパークで起こる大事件の解決に貢献するヒトだ。

パークを跋扈するセルリアンに立ち向かうフレンズたちの指揮を執る。皆から愛

されて女王事件収拾後は園長と呼ばれて慕われる。

まあ、その、一部のヤンデレにも絡まれたりもする。

ただし。その正体やパークに来た経緯はよく分からない。

どのような経緯で休園状態のパークに招待されて、記憶喪失になったのか。

それと気になる事がある。キーアイテムである丸いリング状の「お守り」を持って

る様子がない。

お守りは、一緒に冒険するフレレンズにチカラを与える不思議なものだったか。

これまた分からん存在なのだが……細部まで語られない方が、妄想しがいがあるというもの。よし、妄想しよう。

……ダメだろ。今はそれどころではない。

俺は和解の為、男の子に、園長に否定の言葉を投げていく。

「ちがうよー！ いじめてないよー！」

「そっだよ。 いじめてないもん！」

菜々ちゃんも、一緒に否定してくれる。これで2対1である。信憑性が高まる。

「……………ほんと？」

少し疑いつつ、けれど信じてくれている声色。そこに純粋な幼き心を垣間見つつも、微笑む余裕を隠して言葉を繋ぐ。

「ほんとだよ。見たかっただけ」

「そう。見たかったの！」

嬉しそうに、隣まで駆け寄り同意する菜々ちちゃん。よし良いぞ。もつとやれ。子どもの笑顔を見ると、純粹にそうなんだろうなと思わせる。雑念を感じさせない。

うん。いつか忘れていた感覚だ。職員になっても、この心は持ち続けられるだろうか。

いかんな。俺が雑念だらけだ。

そんな俺の心境を知るよしもなく、園長（たぶん）は俺たちを信じてくれた。

「わかった。しんじるよ」

真つ直ぐな視線で、そう言われた。

理解のある子で助かる。別にコチラは嘘を言っているわけではないし、それに対しての罪悪感はない。

だけれども。信じる心を持っているこの子は、きつと強いんだなって思えた。

「ありがとう」

一応の礼を述べると、互いの緊張が解れた。

一件落着。パークに行く前に、重要そうなヒトと不仲になるのは避けたい事案であつたからね。

「ねえねえ！　あなたも、キツネさんを見にきたの？」

菜々ちゃんが、無邪気に話しかける。先程まで一触即発な事態だったとは思えぬ流れをつくる。

いや、良いんだけど。寧ろ助かります。ありがとう。

「うん。でも、ぼくは お世話してるんだ」

菜々ちゃんの笑顔。パワーのお陰か。ニコツと笑いながら手に持つパンを見せてきた。

ふむ。やはり、お世話をしてるのか。

その手に持つ小さなパンが、キツネさんのゴハンなんだろう。

「そのパンが、キツネさんのゴハン？」

「そうだよ」

「そうなんだ！ わたし、おやつだと思った！」

「あ、あはは……」

菜々ちちゃんに言われてちよつと、園長は目線を逸らした。

あー、うん。アプリの回想的に、親に自分のおやつ用だとかなんとか言って、貰ったんだろう。

少し罪悪感があるのかも知れない。

うむ。そんな罪の意識を和らげてあげよう。

何の能力もないが、ささやかに、俺に出来る事はある筈だ。

「実は俺も、パンを持ってるんだ」

そう言って懐から少し大きめの、丸いパンを取り出す。ジャパリまんじやないよ。クリームパンだよ。

「ええ!? 良いなあ」

菜々ちゃんが、素直に羨ましが。俺はニマニマとパンを高く掲げ、アピール。どうだ、欲しかろう。園長も欲しかろう。さあ拝め。

ここで有利なのは、より大きい食い物を所持する俺である。ここは俺が指揮を、いや、司会を執らせて頂こう。

「でもね、ちよつと大きいの。キツネさんにあげたいんだけど、良いかな?」

「えつ。いいの?」

「あんじゆ、やさしいね!」

食いついたね。単純な子たちめ。

このまま俺は話を進める。けれど、意地悪ではない。互いに有益な話だ。

「だからね、キミが持つてるパン。それは食べちゃって良いと思うの。あまりあげると、キツネさんのおなか、いたくしちゃうかも」

「え……あ、うん。そうだね。これはほくが食べるよ」

よしよし。これで親への嘘が本当になった。

この意図や意味が、幼き園長に伝わるかといえは「NO」だろうけど、所詮、自己満足。

これで良いのだ。誰かを救うとか大それたものでもない。しょーもない事である。

「わたしのぶんは!?!」

「……俺のをあげるよ」

菜々ちゃん。今の俺の気持ち、飼育員になったら分かるよ。主にキタキツネに対して。

そういつて、手でちぎったパンのカケラを菜々ちゃんに渡す。ちゃんときりームは入ってるからね、安心して食ってくれ。

「ありがとう！ あんじゆ、だいすき！」

「お、おおう」

そう言つて、早速パクつく。 すごい笑顔である。

こつちはだいすきつて言われて、動揺しちゃったよ。

幼子の「だいすき」は俺の思う不純なヤツじやないと言い聞かせても、やはりか、聞き慣れない言葉である。

愛があるというか。 くすぐつたい気持ち。

……………言つておろが、俺はロリコンじゃない。 そういう趣味はない。 あくまで、今後の付き合いを考えてだ。 仲良くなつておけば、役に立つかも知れない。

嗚呼、駄目だな俺。 利益で考えてしまつてゐる。 もつとこう……純粋に生きてい。

「その代わり。 キツネさんに会わせて欲しい。 良いかな？」

パンをあげたのだから、正直に白状すれば、こういう切り返しをしたかつたに過ぎな

い。

やれやれ。　これではフレンズに好かれないぞ、俺。

「いいよ。　ちよつと待つてね」

「ありがとう」

「でも、大きな声出したりしちや駄目だからね」

「っん！　わかった！」

「菜々ちゃん。　もう少し、しずかにね。　それと食べながら　しゃべらないの」

「ふあい」

食べカス付けながら、お返事する菜々ちゃん。　うん。　可愛いけど駄目なものは駄

目ですからね。　お行儀が悪いですよ。

パークでは、逆に教える側になるのだから、ヒトとは分からないものだけど。

微笑ましく思っていると、園長が社の下を覗き込む。　さつき菜々ちゃんがやってい

たところだ。

そして、やはりいるらしく、おいでおいでと手招き。　優しい声をかけながら。

「おいで、キツネさん。　僕だよ——だいじょうぶ。　ふたりは、悪いヒトじゃないよ。　でておいで」

そんな様子を、静かに見守る事しばらく。

ひよこつと下から現れたは、真つ白……いや、ちよつと汚れた白いキツネさん。　マジでいたのか。

キツネさんは、少し離れたところから見る俺と菜々ちゃんを一瞥。

こーん、とひと声鳴いた……気がした。　気がしただけだ。　キツネの鳴き声って、本当は違つたと思う。

「おお」

「ね？　ほんとーにいたでしょ？」

手柄を立てたとばかりに、隣でキャツキャツする菜々ちゃん。　認めてあげて、喜ばせよう。

「ほんとだね。　菜々ちゃんといっしょに、ここに来てよかったよ」

「エヘヘ」

あら可愛い。心が浄化されるわ。

おっと。キツネさんのゴハンを渡さねば。

「あ、このパンを渡すよ」

「うん。キツネさんも喜ぶよ」

俺も喜ぶよ。というか、既に喜んでいるよ。

園長に会えて、キツネさんにも会えた。

もうじゆうぶん過ぎる。人物やパークの謎に迫らなくても良いんじゃないか。

あ、でもパーク職員は目指します。これは譲れない。転生したのにパークに行かないのは嘘である。意味ないと断言して良い。

妙な決意を固める俺の手から、クリームパンの残りを受け取ると、園長はキツネさんに食べさせてあげた。

くんくん、と嗅いで、次には、むぐむぐと食べ始める。見ていて癒されるなあ。

このキツネさんが、オイナリサマなのかは分からない。頭部に載つかる妄想脳は

「あなたはオイナリサマね！」と訴えているものの、証拠不十分過ぎて話にならない。けれども、ここまでの展開からして……やはりそうなのではと期待してしまう。だからか。 つい、格好つけた言葉を出してしまった。

「えんちよう　さん。　おいなりさま。　どうかよろしくね」

「へ？」

「あんじゆ、急にどうしたの？」

あー。　うん。　痛い発言をしてしまった。　幼子に首を傾げられても仕方ないね。　そして、聞かれたのが幼子でも、すっごーい恥ずかしい。　ちくせう。　キツネさんも食事を中断して、なんかジツと見つめてくるし。　やめて！　俺のライフはもうゼロよ！

「ああ！　さて！　じゃあそろそろ帰る！　俺と菜々ちゃんは、少し遠い所から来たからね！」

「あつ！　待つてよ　あんじゆー！　急に行かないでよー！」

幼き子の声が森に、社に響く。

この日の出来事が、将来どう影響するのか分からない。
ただ事実として言えるのは。

この日から、パークに行くまでの長いようで短いような本土生活にて。

園長と、白いキツネに会う事はなかった。

けれども。きつとまた会える。

俺の妄想脳は、今世では、良く当たるのだよ。

だからさ。今は、さようなら。

「なまえ……聞いておけば良かったなあ」

それと。次にあつた時は、俺の恥ずかしい発言を忘れていきますように願う。

過去を変える。 想いを変える。

カコ博士の想い。

死んだ両親に、もう一度会いたい。

絶滅動物を再生したい。

儚く、届かない想いだ。 普通なら。

何故ならば、失ったら元に戻る事はないから。 どんなに恋い焦がれようと会う事

は、叶わない。

有機物、無機物問わず、それは万事に当てはまる事柄である。

必然で、故に理不尽。 けれど、どうしようもない。 慄として日々を過ごす。

消え逝く輝きは最早、手には掬えない。

代用品に手を伸ばし、多少の穴を埋める事は出来ても、喪失感を完全に無くすのは無理だ。

その際の喪失感は理解出来る。

前世の自身の人生であったり、終わってしまったアニメ、遠く離れた故郷に対して感じるノスタルジーか。 郷愁に似た何か。

だけれど。 それでもカコは願ひ、求めた。

して後者は……絶滅動物の件は叶った。

超常物質、サンドスターのお陰だ。

全く。 凄まじい謎物質である。 科学、医療、軍事、あらゆる分野にて価値があるのだろう。

失ったものが戻る。 再生する。 それに、どれほどの価値があるだろうか。

ただの記録媒体……アルバムを立体にしただけと考えて現在進行形のような価値は皆無とするヒトもいるだろう。

セルリアンの女王は、そんな感じであつた。

だが、パークにいる絶滅種のフレンズや、神さまは、心を持っているようにしか感じない。 俺だけだろうか。

例え再現や再生だとしても。

俺は、あの子たちフレンズは、生きていると考える。

その流れで。 俺が知らないだけで。

死んだヒトの再生という、普通なら禁忌に触れかねんコトをやっていたんじゃないか

？

いや、そうしたら絶滅種の再生は良いのかよという話になるが……今は割愛。

その片鱗か。女王が生まれ、パークが危機に陥ったのは。

いや。実はそれは、それすらカコ博士の計画の内だったのでは？

考え過ぎか。カコもまた、パークとフレンズを愛していたというのだから。

いや、しかし。

カコを襲い、輝きを奪ったセルリアン。

ソイツは女王にまで成長し、カコの思考や想いの中にある、セルリアンにとって都合の良い部分を発言していた。

——すべての輝きは やがて 消える。

失い どれほど 焦がれようと 戻ることはない

しかし 我々 セルリアンは 保存し 再現する 永遠に

壊れた機械のように。ミライの訴えに全く反応せずに、何度も繰り返した。

それはどこか不気味な光景で、ヒトによつては命の温かみを感じられない、無機質なモノを相手にしている嫌悪感があったであろう。

だが、待つて欲しい。

都合の良い部分とはいうが、それも紛れもない、カコの思考のソレなのではないか。

優秀なヒトであれど、満たされる事はなく、心の中では辛かったのではないか。

無垢な少女のように、お母さんに、お父さんに会いたかつたんじゃないのか？

ミライの話を参考にするならば、表立って想いを吐露する事はなかつたが……やはり、どこかで願っていた。

その結果が、思考が、あの女王の言葉だったのではないだろうか。

俺はカコじゃない。

だけど家族が死んだ悲しみは、分かっているつもりだ。

というか、一度死んだ記憶があるヒトが言つて良いのか分からんが……。

「知つておきながら何もしない。 死んでも死に切れなくなるかもな」

暗い、自宅の自室のベッド上で横たわりながら独りごちる。

雨の音が、他の音を許す掻き消していく。

明日。 カコの両親と共に、少し遠い所の動物園に行く事になった。

俺の、今世の家族には無理や滅茶苦茶言つて、家に何とか残つてもらつた。 今回、何

が起きるか分からんのだ。

あらあら、デートかしらと揶揄^{からか}う両親に、俺は薄ら笑いを浮かべて誤魔化する。嗚呼。俺にとつては、デートというより修羅場に行く気持ち。ツライさんなのだ。

一方、馴染みのカコは、とても楽しみにしていて、笑顔を振りまいてたな。だがしかし。俺の妄想脳がヤバいと激しく警笛を鳴らしている。

いよいよ。そろそろだと。

策はない。でも、何もしないワケにはいかない。

俺は神さまじゃない。

フレンズみたいに、強くない。

カコやミライのように、賢くない。

寧ろ俺は、馬鹿だ。

なんの能力もない、妄想好きの一般人だ。

今なんて、非力な幼子の姿である。

だけど。

「カコの……泣き顔は見たくない」

やはりコレだ。

けもの じゃないけど、大切なフレンドなのだ。

のけもの には、したくない。

後腐れなく、パーク職員になりたい。

笑顔の中、夢を叶えたい。

翌日。

雨が上がり、澄み渡る青空が点々とする水たまりに映る、美しい日である。

ちゅんちゅんと、スズメの鳴き声が聞こえる平和そうな日。

きつと今日も何事もないと。 楽しい1日になるよと。 そう思っても良い光景。

勿論、そうなれば苦労しない。 頼むから平和に終われと願う。

でもね。 俺の妄想は、今世で良く当たるんだ。 そして、信じている。 信じたく

ないものでもね。

「おとおさん。 おかあさん。 行って参ります！」

「あ、ああ。 気を付けてな」

「緊張し過ぎよっ！」

俺は戦場に赴くべく出兵するかのように、たじろぐ今世の両親に敬礼する。

背中には子ども用かばんを背負う。 色々入って、パンパンである。

ほんと、何が起きるか分からない。

備えあれば憂いなしというが、カコの両親が「なんの事故」で死んでしまうのかサツパリだ。

用意してもしても、足りないくらいだと俺は思う。

だが、このちっこい容姿で用意出来る物は限られた。

家にあつた小型の懐中電灯や、防犯を兼ねた子ども用の携帯だとか、お父さんの車にある発煙筒をパクってみたり、お母さんが俺の部屋に隠しているヘソクリを持ち出したり色々したけれど……不安しかない。

俺は不安な妄想に追われて、殆ど眠れなかったよ。 下手すれば俺も死ぬからね。

死ぬのは怖い。

カコは……俺が介入しているのだ、一緒に死ぬかも知れない。

だから、部屋の勉強机に「遺書」を書き残している。

幼子らしからぬ、難しい漢字を多用されているものに仕上がった。 まあ、うん。

遺したかったからね。

やっていることが、逆に更なる悪化を招いている可能性は否定出来ない。

だが何もしないよりは良い。 だから動いた。

だがしかし。 結果が全てだ。 泣いても笑っても次はない。

前世の受験勉強より酷い緊張である。 二度と味わいたくないね、これ。 胃が痛む。

不安の中、お隣さんの、カコの家の前まで行って待つっていると、扉が開いて両親が出てきた。

うん。 今日も美男美女です。 互いに見つめて、微笑みあっているときた。

ナニコレリア充爆発しろと、見るたび思うのだが、今日は思わない。 思っちゃダメ。

思う余裕すらないが。

さて。 次に我が馴染みのカコ。 母親の裾を握りながら背後に隠れている。 子

どもらしいというか、引つ込み思案なカコらしいといか。

ちよつと大きくなったかな。 背が。

そんな光景に、少し緊張がほぐれた。
して、カコの為にも頑張らねばならない。

「おはようございます。今日は（死なないで下さいマジで）お願いします」

ご両親に挨拶と共に深々お辞儀。カコ宅の車で行く予定である。もうこれ、車の事故になるんじゃないやねと思う。名推理。

「ははは。こつちもカコをお願いするよ」

お父さま。阿保な事言わないで。それ、今の俺には遺言に聞こえるの。

「ほら、カコも。杏樹くんに会いたかったんでしょ？」

お母さま。引き離さないであげて。その温もり、下手すると最期だから。

「お、おはようっ。きょうは、一緒に けものさん 見ようね！」

カコちゃん。 その満面の笑み、今の俺には沁みます。 沁みすぎて、ツライさん。

「……うん。一緒に、一緒に見よう。いつまでも、これからも」

「杏樹くん。どうしたんだい？」

「いえ。その、俺はカコちゃんと けものさんが好きなんです。嬉しくて」

「あらあら。もうボーイフレンドが出来ちゃったわね、カコ？」

「うう……もう！ はやく、いこつ！」

頬を染めて、たたたつ、と敷地の車に駆けていくカコちゃん。

こんな、こんな平和な会話や日常を守らねば。

パークの危機云々の前にカコの危機。

忍び寄る死神を追い払わねばならない。

俺にそんなチカラはないかも知れない。 だがやるのだ。

「はははつ。それじゃ、行こうか。ボーイフレンドくん？」

「はい。頑張ります」

「あつ、否定しないんだね」

隣でお父さまがナニか言っているが、構う余裕はない。
俺に出来ること。それをやるのだ。

痴態は恥だが役に立つ。

カコの両親は、なんの事故で死んでしまうのだろうか。

俺の妄想脳は、「今日が命日じゃね」と訴えているものの、詳細まで教えてくれない。俺はカコのお父さんが運転する車の、後部座席でソレを考える。

激しく流れていく外の景色は、前世の日本と変わらない。道路があつてガードレールが並んで、家が立っている。

まさか突然ココに銃弾が飛んで来る事はあるまい。

見た目は子ども、中身は妄想好きの大人。駄目な例として反面教師にされそうだが、その妄想は今世で良く当たるんだ。馬鹿にするなよ。

「それでね！ フンボルトペンギンは、嘴のピンク色が——」

事故というと、身近なのは交通事故だ。身近といつても程度は大中小。死亡事故なら規模はデカイ。

この車がスクラップになる事案かも知れない。だとしたら、俺やカコも危険だ。パークに行かずに天国に行く。笑えない。

「ケーブペンギンと、とてもよく似てるけど——」

未来への影響は、当然ある。

俺が死んだくらいじゃ問題ないが、カコは重要人物だ。

女王事件が発生せずともセルリアンは跋扈するだろうし、火山もある。

職員が退去せざるをえなかった「例の異変」がなんなのか知らんが、それも起きるだろう。

だがしかし。カコがいないと絶滅種がフレンズにならない可能性がある。あと、

ラツキービーストが開発されないかも。

ぜひ見たい身としては、ここで死なすワケには……。

つて。違うそうじゃない。

カコの生存はモチのロンだが、今は両親を救わねばならない。脱線してどうするよ

！

「あんじゅ?」

「へ? ああ、ごめん。ペンギンさんのお話だね」

いかん。隣に座るカコが首を傾げてきた。

楽しそうに語っていたのに、曇らせるワケにはいかん。

「……ペンギンさん、すき?」

ちよ。不安そうな目で見ないで。俺の不安が増幅されちゃうから。

ここは思考をカコにする。けものさんの話をしている場合じゃないが、心に余裕を持たせないと。

「う、うん。すき……だよ」

ボソリと。けれどカコに聞こえる大ききさで答える。

嘘じゃないぞ。ペンギンは、よちよち歩く姿がキュート。水面のキラキラをバツ

クに自由に泳ぐ光景は美しい。

よく見るペンギンとしては、フンボルトペンギン。いろいろな水族館や動物園の屋外展示で見られる種。

その事等から珍しくなさそうであるが、実は絶滅が危惧されている。だけど日本では繁殖が進んでいるらしい。気候に合うのかね？

嗚呼。脱線した。いや、良いのか。カコを相手にしているのだ。

いやいやしかし。両親を救うという重大な任務が俺にはあるのであつて。

そんな感じでうんうん唸っていると、前に座る両親から声がかかった。 擲揄うような、陽気な声で。

「大好きだなんて……大胆！ カコも幸せ者ね？」

お母さま。聞こえてたのね。脚色しているけど。

「杏樹くんがいれば、安泰だな！」

安泰？　これからヤバいんですけど。

「あ、あんじゅは、ペンギンさんが すきって」

カコ、また頬を染めながら、ご両親に反論。

まだ幼き身でありながら、両親が押揃っているのが理解出来ている様子。

やっぱ頭良いんだなあ。 或いは、発達が早いのか。 エロい意味ではないぞ。

「カコも好きなんじゃない？ ねえ？」

そこで助手席に座るお母さまが、振り返って俺を見る。 やたらイイ笑顔だ。

守りたい。 その笑顔。

だけど、

「はい。 でも、カコが いちばんです」

最低でもカコには生きて欲しい。 優先。

将来的な意味で。 重要人物が舞台……裏に上がる前に死ぬのは勘弁な。

カコがいないと、絶滅種のフレンズたち……ニホンオオカミとかトキとかリョコウバ

トが見れなくなる。

パーク就職時のコネ的なものも、あるわけで。

……………。

嗚呼。　まただよ。

人の生き死にを利益や仕事の天秤にかけている。　酷い話だ。

悔い改めようね、俺。

「あんじゅ　なんて、しらない！」

そこにダイレクトアタックな言霊。　ツライさん。

カコは、ぷいっとそっぽを向いてしまった。　ごめんよ。　反省してます。

「フラれちゃったね、ボーイフレンドくん」

お父さま、そう言う割に嬉しそうなんですすがそれは。　大切な娘にくつつく悪い虫な
んですかね俺は。

「血は争えないわね、ア・ナ・タ？」

そんな旦那に、奥様は嬉しそうに笑いながら腕を指で突つつく。カコ夫婦はアイコンタクトを交わして笑い合った。

なにイチヤついてんですかね。過去に何があったのか知らんけど、運転中に余所見しないでくれませんかね。

これで事故つて死んだら葬式出てやんねーから。俺、わるくねーから。

「あら」

その時。ブルブルと携帯のバイブ音。奥様の携帯からだった。

ポケットから、スマートフォンを取り出すと応答。耳に端末を当てて会話を始める。

誰からだろう。仕事関係だろうか。

「おはようございます。ええ……はい。一緒にいますよ。え？ はい、わかりました」

仕事にしては、少し違和感あるなあ。それよりも両親をどう救うべきか考えねば。いや、原因が分からないから対策が出来ない。ホント、どうするのよ俺。

「近くのコンビニかどこかで止めてくれないかしら」

「わかった。何かあったんだね」

「ええ」

とか、思っていた俺に対して、お母さまは言葉を投げかける。　　椰揄いじゃない。結構マジな視線と声色で。

「杏樹くん。お母さんとお父さんが迎えに来るわ。理由は……心当たり、あるんじゃないかな？」

ありますね。

たぶん、自室の机のアレが原因だ。それしか考えられない。オマケで発煙筒とかへソクリとか。

嗚呼。

問題とは何故、次から次へと出てくるのか。 いや、俺の所為ですね分かります。

「杏樹ッ！」「あんじゅーッ！」

道中のコンビニで待つことしばし。

カコの両親及びカコちゃんに心配されていると、俺の両親が車でやって来た。

して、声を上げられながら走り寄られてギョツと抱き締められる。 ぶたれる覚悟はしていたが、これはこれで苦しいです……。

「ぐえええ……」

「ああ！ 無事で良かった！」

「もう！ 机の上に犯行声明みたいのが置いてあったから！」

それ犯行声明じゃないです。遺書です。間違えられているけど、どちらにせよ心配を掛けてしまったようだ。

2人にも、カコ家にも悪い事をしてしまった。申し訳なさすぎる。

俺の、浅はかな行為。 猛省不可避。

だが許せ。 これも両親を救うため、俺の為に動いたからだ。

「もう！ あんな悪戯ダメよ！」

悪戯扱いだった。 俺のガチ遺書が……。

「この先で、大きな交通事故があつたというしなあ。 車のラジオから流れてきたときは……もう、心配で心配で!!」

「へ？」

事故？ この先？

俺の疑問を代弁するようにして、カコのお父さまが声を出してくれた。

「そうだったんですか。知りませんでした」

「車のエンジン、切ってまして。気がつきませんでした」

「いやはや……我が子もそうですが、皆さまも無事でありよりです」

「これは……」

「どうやら、俺の遺書が間接的に両親を救う事に繋がった模様。マジか！ 万々歳

じゃないか！

「ああ……よかったあ」

「ホントね。杏樹くんの悪戯で救われたみたい。ありがとう」

「だが杏樹くん。ご両親に心配をかけたのは反省しなさい」

「カコの両親に礼と説教を受けた。うん。取り敢えず遺書は悪戯ちやう。ガチ

です。そこだけは否定しておく。心の中で。」

「あんじゅ」

おろおろした声が。振り向けば、いつものカコちゃん。

謝らないとな。両親を救えたとはいえ、楽しみにしていた動物園の日に、こんな目に遭わせたんだから。

死ぬより良いだろと思うのは、あくまで俺の中だけの話だ。誰がこんな事を予想してぎやあぎやあ騒ぐというのか。

それに。俺は事故内容を全く知らなかったのだ。偶然良い方向に転がっただけである。

だから。ちゃんと謝ろう。

「ごめんね。せっかく動物園、楽しみにしてたのに……嫌いになるよね」

重要人物に、いや。カコに嫌われる。それは仕方ないかも知れない。

でも、さ。心が痛むな。それは。けれども。

カコの両親と俺の両親が話し合う傍、カコは「ううん」と首を横にふって否定してこう言うのだ。

「そんなコトない！ あんじゅは、わたしのヒーローだよ！」

一瞬、思考が停止しかけた。 なんとか言葉を噛み砕いて……そしてなんとか、

「……ありが、とう」

礼を述べる。

刹那。

涙が頬を伝った。

心配していた事から解放されて、無駄に用意した荷物や行動が報われた。

嗚呼。

俺は、やった。 やったよ。 俺がこの世界に存在している意味はちゃんとあったん

だ！

「杏樹」

お父さんとお母さんの温かな声が聞こえる。
俺、幸せ者です。

思わず言いそうになったとき、

「発煙筒、返してな？」

「あんじゅちゃん？　お母さんね、杏樹の部屋に大切なモノを落としたみたい。
後で一緒に探しましょうね？」

うん。　バレてたね。

そして、それを今言うか。　感動が台無しなんだけど。　涙を返せ。

そんな光景を見て、存命したカコの両親がクスクスと笑った。　大切な一人娘、カコ
の頭を撫でながら。

職員になる前の、大仕事。

それを成し遂げた報酬は、その輝きは、ココにたくさん溢れ返った。

学生時代は、あつという間に。

カコの両親は助かった。あとは幼稚園から小中高大と何か起こらないか不安だったが、特にはない。

前世と変わらず、人間関係は相変わらずだと述べておこう。

本土で、同じ光景に対し優しい世界を求めてはならないのは、よく分かった。

あとは……些細なコトを報告する。

幼稚園は普通にカコと一緒に、他に見知った子はいない。小学校になったら、ミラ

イや菜々とも再会。少し大きくなっていた。

ミライはこの時、メガネをかけており、このまま職員になるまでメガネユーザーなのだろうと思わせる。

中学で制服を着るようになる頃は、だいぶ大きくなった。身長とか胸とか胸とか。

特にカコ。

いやはや。ほぼ、「けもフレ」の姿になったね。もう少しで記憶と合致する。

だが制服姿はココでしか見れないレア光景だ。よく目に焼き付けねば。

新鮮であるが、ミライは……実は漫画版で制服姿（メガネなしの寝起きパジャマ姿もあるぞ！）を見た手前、驚きこそしなかった。

制服姿は夢の中の話だが、こうして見ると感動を覚える。泣きそうになった。実際、彼女たちの父親共々泣いた。

その都度、心配されて保健室に行くように言われるという。うん。保健室にはいった。

一方、父親は母親や娘に呆れられたり、ど突かれていた。合掌。

因みにミライや菜々は学年下なので、入学は共に出来なかったものの、ともだちとして仲良く過ごす。

数少ないヒトのともだち。男と女の差が、会話や行動に齟齬というか……少し寂しさを感じる時もあったが、良好な関係。

ミライは けもの の話の最中、ヨダレを垂らして大興奮して語り始める事があり、ああ、もうこの頃からなのねと苦笑したが。

周囲には揶揄う輩が多かったので、人の少ない時や放課後に話す。

高校でも大凡同じ感じであった。

違うとすれば……彼女たちの けもの の話に専門的な、難しい話が混ざり始めた、現実的な話が含まれ、磨きがかかったりはした。

して、肝心のジャパリパークが建設されるであろう島の情報であるが、とつくに上陸が始まっているそう。先ずはヒトの環境を整えている様子。港の整備や物資搬入。島内や海底に火山もあるから、本当に安全かの現地調査。

ある程度は、進んでいるともいう。

裏方では、動物や植物を輸送する為の手続きが進んでいるのだろう。保全状況によつては持ち込めない生き物もあるから。

島を丸ごと敷地とするジャパリパークは、民間、経済界や政界、日本国内のみならず、海外にも知れ渡っているはず。

もちろん、基本は善意ではなく利益で動いている世界。オトナ同士、腹黒い交渉が行われているのは想像に難しくない。

光あれば影がある。

それでも嫌だねえ……ヒトは。皆が皆じゃないけどさ。

だが、希少な動物や植物類がパークに持ち込まれる決定打は、サンドスターだろう。まだ公開されていないが、実はそれっぽいのは発見されているんじゃないだろうか。

勿論、それだけでなく交渉術もあつたと思う。法のプロセスによる障害の中、なんとかしようというのものもある。

本当の海の前に、書類と法の荒波を乗り越えて、パークは建設運営されている……と

いう妄想はすれど、俺の知るところではない。

政治家や学芸員、建設業並びに企業の皆さま、頑張りたまえ。

俺は職員になれば良いです。そして、もうすぐ発見されるだろう特殊動物……フレンズに会いたい。他力本願です。

ジャパリパーク計画に最初から参加出来なくても、一般募集で何とか行けるか。

あー、でもその間は無職になるのか。でも、なんとかなるさ。パークは広大だ、学芸員でなくても、普通の清掃員等のヒトは必要のハズ。たぶん。

という感じで。

努力が嫌いな俺であるが、なんとかカコと同じ学校に行ける努力をしてきたのでありまして……いや、大学は辞めた。無理。頭良すぎる。偏差値的にアウト。

高校も滑り込みセーフで受かって、赤点ギリギリ、もしくは取って補習再テストが当たり前だったのだ。

大学なんて無理ゲーであったよ。よよよ。

カコが、俺なんかの為に進学を止めようとしてきたのは驚いたが、それでは色々問題がある。パークの危機だ。

それと俺なんかの為に、人生を変えることもない。

気持ちだけ受け取り、だけれども、ちゃんと大学には行くように説得した。

別に大学まで一緒じゃなくなつたって、家は隣同士。携帯の連絡先だつて知つている。例え就職先が違くなつても、その気になれば会える。

「——でも」

しづられた。

もう子どもの頃みたいに、そんなにオドオドしてはいないが……やはりこういうトコは弱いのかなと笑みか溢れる。

ならさと安心させるべく、俺はカコに言う。

「こうしよう。ほら、デカイ動物園を創るかもつて話題の島があるだろ？　そこ

で会おう」

「仮称ジャパリパーク計画？」

「そう。ヒトや物資が足りてないとも言つてるじゃん？　調査や研究も大変だつ

て。まだ本格的に計画が纏まつて立案されてないようだけど……カコは優秀だからね。きつと呼ばれる。一般募集がかかれば、俺も遅れてでも参加する」

そう言う、色々悩んで……渋々という感じに頷いた。

でも、会えなかつたら酷いからね、と念を押されるといふ。うん。プレッシャーを与えないで欲しい。行ければ行くよ。たぶん。

カコは最初から計画に携わっていたという。たぶん、ミライもだ。

本当は、俺も最初から参加したい。だが弾かれるだろう。取り柄ないし。そんなに動植物に詳しくないし。

取り敢えずカコには、お偉いさんの目に止まって貰うべく大学に行かせる。そして、パークの計画に最初から参加して頂く。

では他のヒトは、どうか。

菜々は将来の夢的な感じで、アニマルガールの飼育員さんになりたかつたらしいが、もうこの時点で多少の矛盾がある。

幼い頃と呼べる時期は、とつくに過ぎていく。俺がカコの両親の件で云々唸ってる頃、まだアニマルガールはおろか、パークの情報はなかつた。

俺という存在がいる以上、色々とおかしなわけだが……。

取り敢えず、彼女も俺と同時期か分かんが、遅れてパーク職員になるだろう。

園長は……知らん！

見た目も、これといった特徴がなかつたし、同じ学校だったか何処かで会ってるかも

分からん。幼き頃の神社での記憶は曖昧だ。

そも、彼は客として招待されているんじゃないか。最初から職員ではなかったのかも知れない。

まあ、なんだ。そのうち皆と再会出来るさ。

「さて。大学は諦めたとしても、少しくらい勉強をば。動物園……博物館法……学芸員……いや、駄目でも学芸員補なら……うーん？ 俺、パーク職員になれるのか不安になってきたぞ!？」

おつむの悪い俺。

皆に置いてかれないか不安になってきたのであります。

進路

飼育員、調査員、研究員や管理スタッフの面々。

パークは広大であり、多くのヒトや多種多様の職員がいる……はず。

客の玄関先《パーク・セントラル》や、その遊園地を含む動物園である以上、接客するヒトもいるし、清掃員や整備員、警備員もいるだろうな。

けもの たちや、職員管理、島の情報整理等を行っているであろう《管理センター》の仕事も含めると、人手は足りなくらいじゃないだろうか？

パークガイドロボットの開発もあるだろうが、アニメのラッキービーストのポンコツ具合を見ていると、やっぱりメインはヒトなんじゃないかと思える。

つまり……あー、なんだ。

「学芸員は諦めて、ソツチになろう。 うん、そうしよう！」

都合の良い、妄想をして安心してマダオがココにいた。

菜々ちゃんみたいに、立派な飼育員になりたいとか、そんなんじゃないんで。

なんかの職員になって、フレンズを見たり、囲まれたいだけなんで。

へ？　現実は甘くないって？

そうだね。　じゃあ、目の前の問題を片付けよう。

「……………取り敢えず、補習を終わらせよう」

学校の空き教室。　夕日が差し込み、他に誰もいない。　見ようによつちや、美しい
光景。

ココが現実。　俺は、その真ん中にある勉強机にポツンと座る。

我、杏樹。　まだギリ高校生。

馴染みが大学に進学しようという中、卒業が危うい悲しき学生。

カコの両親の危機の次は、俺の危機。

前世の記憶？　知識？

役に立たん。　だって、前世でもロクに勉強してないもん。　ヒトはね。　繰り返す

生き物なんだね。

「ほら杏樹っ！　卒業出来なきや、パークに行けんぞー！」

教室に入ってきた、補習担当の熟年微熱男性教師から、言葉のムチが飛んできた。

俺がパークに固執しているのを知っているので、やる気を出せる為に言っているのだ。

して、目の前でヒラヒラと見せられる一枚の紙切れ。

このタイミング。ただの紙切れではない。

悪い内容なのかなあ、成績表かなあと思つてチラ見すれば、その瞬間に目を見開く事に。

「そ、それは！」

「そうだ！ ジャパリパークの求人募集！」

なんと！ それはパークの求人であった！

まさか、一般募集が既にかかっていたとは。

内容は調査、研究員補佐か？

まだ遊具や施設群の設備は整っていない筈だからな。

だが刹那的な、委託先の会社だとか日雇いは勘弁な。

或いは工事現場か。

パークに永住して働く正規員

が良い！

良く見ようと、教師の手から取ろうとするも、直ぐにヒョイと高く上げられて取らせ
てくれない。

代わりに渡されるは、補習用の問題用紙。欲しくない。求人寄越せ。

「さあ杏樹！　パークに行きたきや、頑張んな！」

「この鬼教師め！　恨むぞ！」

「お前が悪い。良いから、補習を受けな！」

結局は、そうするしかなかった。

最低限の努力、というヤツだ。

俺は見たくもない問題を見ては頭を抱え、時々脳裏にカコの実顔が浮かんで、気力
を回復させてペンを走らすを繰り返したのであった。

「よし。これで免除にしてやる。普通なら留年だがな」

「……うえええ」

やつと終わった。

空に星が瞬く頃、教員の慈悲により解放された。

窓と廊下は、黒い紙を貼り付けたように真っ黒。教室を照らす光源は、天井の蛍光

灯による真っ白な明かりのみ。

昼間はよく聞こえる、校舎内の喧騒は嘘のよう。校舎は静寂に支配されていた。

嗚呼。こんな時間まで残されたのね。

机に突っ伏し、気力を無くす。セルリアンに輝きを奪われたら、こうなるのかね？

「頑張ったお前に、ほれ。パークの求人を作る」

「……あざっす」

ペラリ、と。

教師に渡された報酬の紙を受け取り、疲れた頭で内容に目を通す。

「どれどれ」

えっと。調査隊の補助？

随伴して荷物運びとか段取りか。

あとは……コレは工事現場の猫車押しか。雑工だな。

俺、今世では現場系の資格を持つてないんだよな。専門校じゃないし、職人や代理人になるつもりはなかったから。

とはいえ。これらは、資格は必要ないだろう。気楽そうに感じるが、ある程度落ち着いたら暇を貰う（クビになる）可能性が。

そも、チカラ仕事だぞ、コレ。この時期の一般募集となったら、やっぱこうなるのか。

島に上陸出来る事に少し期待してしまったが、蓋を開ければ短い命。

これではカコとすれ違いになるか、そもそも全く会えない。

というか、よくこんなん学校の求人に出てたね。よほど人手不足なのか。

「あー、こりゃフリーターになって、様子を見た方が良いかなあ」

「なにを言ってるんだ。行ける時に行った方が良いぞ」

「俺、ずつといられる職員になりたいんですよ。清掃員でも雑務でも良いから」

「お前なあ。なんで、パークにこだわるんだ……あつ、そういうことか」

突然思い出したかのようにして、ニヤニヤし始める教師。

なに。やめて気持ち悪いからソレ。フレنزにして貰うなら、ウエルカムようこそなんだけど。

「馴染みのカコ絡みだろー」

まあ、うん。それも間違いではない。でもね、さっき言った通り、俺はパーク職員になりたいの。フレنزに囲まれて過ごしたいの。

どうでも良いワケじゃない。馴染みとして可愛いと思ってるし、けもフレ公式のヒトたちと絡めるのは夢の時間だ。

そういう意味では、舞台となるパークにいつて、もつと同じ時間を過ごしたい。という事を、まさか言える筈もなく。

頭悪い上にオカシイと思われるのも嫌なので、俺は適当に流すことにした。

「そうです。バレましたか、はははっ」

適当に、無感情に乾いた笑いで誤魔化した。コレでこれ以上踏み込んでこないと思っただが、

「うむ。優秀で美人の馴染みだ。比べられる苦しみがあっただろうが、尚も側にいたいとは……………お前も男だな！」

肩をバンバン叩かれた。すいません意味分かんないです。あと、痛いです。勘弁して下さい。

「いやあ、若い頃を思い出す！ 実はな、カコの両親は俺の教え子でもあつてなあ！

あの2人は両想いだつたが、母親の方が優秀だつた！ 父親の方に合わせようと

ランクを下げようとしたが、それはイカンということで、父親は勉強に励み、同じ道を歩んだ！ お前の場合は少し異なるが、いやはや！ 懐かしい日々を思い出したぞ

！ ありがとう！」

ペラペラと聞いてもない情報を、我が子のように嬉しそうに語る教員。それ、話して良いの？　プライベートとかで訴えられない？

「そうですか。　夫妻の過去は分かりましたよ。　でも俺、カコの事は」

そこまで言うと、ポンと両肩に手を乗せられた。　全部分かってるぞと言いたげだ。

「みなまでいうな。　大切にしてあげなさい」

「まあ……その辺は」

「それだけだ。　今日はもう遅い。　真っ直ぐ家に帰るんだぞ。　あ、その求人は持つて帰つて良いから」

もういちど、肩を叩かれて教室から出て行く先生。　かつかつと廊下を歩く音が遠く
なつて行く。

この時間まで付き合ってくれる辺り、超良いヒトなんだろうな。
言われた事は、パツとしなかつたけど。

「大切に、か」

カコは、そりやあ大切だ。パークへのコネだったり将来の為だったり。

個人としても好きだ。公式のヒトである。ミライや菜々もだが、馴染みとして側

にいたからか。両親の件もあった。情が出てくるのは否定しない。

でも、女の子として。恋愛感情があるかといえば……どうだろう。

そりや可愛い。胸もデカイ。頭も良い。

先生の話の流れ的には、俺とカコが将来くっついて欲しいのだろう。

でもカコは、俺の事をどう思っているのか。嫌われては、ないと思うが。

「分からん。全然、分からん」

悩んでも仕方ない。今はパークに行く事を考えよう。

卒業まで時間がない。

「取り敢えず、この求人で行くか。弾かれたら、もう一度別の求人を探して、パーク

に行けば良い」

不安を拭うように。　言い訳するように。

独り言を言いながら、俺も教室を出る。　廊下は明かりこそついてはいるが、窓は真つ

暗。　静かで不気味。

幽霊でも、出そうだ。　怖い。

「杏樹」

突如、女の声が耳元で聞こえた。

「うおおお!!」

悲鳴をあげながら声の方を向けば、そこにいたのはカゴご本人。

制服姿で、学生鞆を両手で前に持っている。　頭には、茶色を基色にした、ナニかの

けもの　のしっぽを思わす髪飾り。

これで白衣を着れば、ほぼイラスト通りの姿が完成するな。

しかし、カコ……こんな時間まで学校にいたのか。俺の為に？

「脅かすな」

「ごめん」

でも、言いたい事は言っておく。

心臓が悪い。マジで幽霊と思つたじゃん。

アプリ版で出てきた井戸の話の思い出したよ。アレが幽霊なのかフレンズなのか知らないが、ホラー系はムリイ……。

あかん。やめよう。パークに行きたくなくなる。俺はホラーは無理なのだ。

焦点をカコに戻そう。暗い話はNGだ。

「あー、えと。ずっと待ってたのか？」

「い、今。きたとこ」

「そっか」

ずっといたなら、先生も立ち止まって話したりするだろうしな。

或いは気付かれずスルーされた可能性もあるが。何にせよ、時間の浪費であろう。ああ、そういう意味では、カコもこんな時間まで……。

「俺の為かい？」

コクリ、と。静かに頷いて見せる。

ヤベエ。嬉しくて、感涙するわ。

いや、実際出た。滂沱ほうたには至らない。小雨だ。問題ない。

「あんじゅ?」

「すまん。嬉しくて、つい」

「小さい頃から、だもんね」

微笑みを向けられた。昔はオロオロしていたが、俺とはもう、流石に慣れたのだらう。こういうヤツだと。

涙というのは、感情が高ぶっても出てくる。自身をそれで制御、落ち着かせようとするんだったか。ストレス発散にもなるとも聞いたかな。

だが人前で涙を流すのは、みつともないとされる。特に男は。

弱いところを見せる。結果、下に見られたり馬鹿にされたり、場合によつては人間関係への悪影響や仕事に支障が出る。

ヒトの世界は、優しくないんだ。

駄目だなあ俺。前世から変わつてない。こんなんじや、今世でも繰り返すぞ。

「みつともないよな。男なのに」

「そんな事ない。あんじゅは、優しいから泣けるんだよ」

優しくはないんだよ、俺は。

将来への利益不利益で採算して、自己満足で両親を助けようとしたり、公式のヒトと会おうとしたり、そういう意味で君と付き合つてる節もある。

「それに」

その心境を察してか。言葉を続けられた。

「私の為に、泣いてくれた」

心を見通された気分になった。

嗚呼。

敵わない。改めて思い知らされた。

「そう、だな。その通りだよ」

「やっぱり、優しいよ。私が保証する」

こりや、いよいよパークに行かないとな。そこは保証出来ないが。

いや。行かなきゃ。転生者だから行かなきゃ嘘だとか、思っていた時もあるけれど。

カコと共に歩みたい。そう願う。

もう、未来を変えるのが怖いとか、過去を悔やむのは、今はナシだ。

俺は涙を拭って、礼を述べた。

「ありがとう」

どこか、懐かしい響き。幼い頃、両親を救おうとした日だったかな。この感覚は。

「どういたしまして。ヒーローさん」

覚えてたよ。

あらかやだ。急に顔が熱くなってきたぞ。こりや知恵熱か。あの微熱教師に当てられたか！

「そ、そうだ！ パークへの求人を見つけたんだよ！ 調査の補佐？ とかい
うのに応募しようと思うんだ！」

「じゃあ私より先に、パークに行けるの？」

「えーと……いや。研修期間があるとか？」

「そっか。ひよつとしたら、一緒にタイミニングでパークに行けるかもね」

「おうよー！」

恥ずかしさと嬉しさと、妙なテンションになる俺。

滑稽なのか微笑ましいのか。見てクスクス笑う馴染み。
パークでも、その笑顔を見なければ。

職員ライフ。まだ正規じゃないけど……うむ。上陸が楽しみだ！

ようこそ!

ジャパリパークへ!

パークへ!

長く短いような本土での生活と研修を終え、船旅による酔いに耐えつつの道。

この苦痛もパークへ行けるのを思えば、なんて事はなかった。

その心を如実に再現するかのよう、空は青く掴み所なく、吸い込まれそうな錯覚さえ感じさせる。

先程、渡ってきた母なる海からは、荒くも優しい波の音。俺の新たな旅立ちに対し

て、祝福と激励をしてくれた。

その聖母に対して、リバースした不屈き者がいたのは気のせいだ。 良いね?

「うおお……!」

上陸して先ず出迎えたのは、棧橋の境界にある、潜り抜けるアーチ。

センターには、アニメや漫画でも馴染みあるパークのロゴ。「の」の文字に、けもの耳を生やした様なデザイン。

職員の制服や、一部のフレンズの服にも描かれる。ファンならば知らぬ者はいないだろう。

そして湾曲した部分に、カラフルに描かれた印象的な文字。それは、これからの始まりを予感させるには十分過ぎる威力を誇っていた！

W e l c o m e t o J A P A R I P A R K !

おお。 聖地巡礼というレベルじゃねえ。

就職だ。 あ、正規員じゃないか。

「いええええす！」

ともあれ。

小躍りしつつ、明るい未来を見る。

歩むべき道は目の前に。

遠方では山脈が見え、森が見え、奥には様々な ちほー があるのだろう。

「楽しみだなあ」

未だ続く施設建設の為の機械音が島に響き、工事現場を象徴する紅白のタワークレーンが天へと伸びている。

全てがパークを形作る、或いは作っている重要な光景だ。

後半は、思いつきりけもフレ世界を否定するかのようなモノであったが、現時点では仕方あるまい。まだオープン前なのだ。

まさかサンドスターのチカラで、城や遊園地、研究所や宿泊施設がポンポン生まれるワケじゃない。インフラ等の基盤が、瞬時に整備される事もない。ヒトのチカラが、工事が必要だ。

特に漫画版に出てきた都市部は、凄まじい。ビル郡があつて、道路があつて車が走る。コンビニだつてある。本当に動物園なんですよーかと思うあの光景も、ヒトのチカラがあつてこそ造れたもの。

アニメに出てきた「遺跡」も最初は、こんな感じから始まったのだろう。

アニメから入ると、優しい世界に文明は必要ないと思う時もあったが、その文明を利用しているヒトからしたら、不便極まりない。

そも、アニメのフレンズたちの主食となつていたジャパリマンを作っているのだつ

て、たぶん工場かなんかの生産ラインあってこそ。

その意味では、フレンズたちも工業系の、文明の恩恵を受けている。なかつたら、逆にどうするのだろうか。

閑話休題。

前世と今世での、今までのストレスが……。

取り敢えず、多くの努力で生まれていく愛情や輝きが、肯定する本物が、未来に過去に、この島にあるということ。

俺も、そのひとつに組み込まれた。これ程に喜ばしい事はあるか。いや、ない。社畜のフレンズではないが嬉しい。

夢への、第一歩。

俺は栈橋を駆け抜けて、アーチを抜け、ジャパリパーク本島へと足を踏み入れ——
飛び跳ねた！

「パークにい、キタアアツ！」

思わず拳を天高く上げ、叫ばずにはいられない。周囲の職員や作業員に笑われたり

白い目で見られた。だが許せ。

「……までの道のり……長かった!」

転生して、即パークスタートだったワケじゃなかったから。

カコの両親を救い、学生時代は前世同様に人間関係と勉学に苦しみ、なんとか高校に入つたは良いが、今度は卒業が危うかった。

なんとか卒業して、教員から貰つたパークの調査補佐の求人に応募。受かつて今に至る。

「カコたちは、元気かなあ」

一方で、他の面々……カコやミライは先に上陸しているそう。同じタイミングにはなれなかったのは残念。

まあ俺、補佐だしな。計画にも最初から参加していない。

馴染みのカコは、終始成績上位。けもの話も博学で、大学にも推薦されて行くほどに。留年しそうだった俺とは真逆。

進学後、ジャパリパーク計画にも最初から参加要請されて、予想通りの展開に。今

は、島内の動物研究所に在るはず。

ミライも既に計画に参加していた……たぶん、港の近く。調査隊長兼ガイドとして、今日から暫く世話になる。この後、合流する予定。

歳的にはね、後輩ちゃんだけけどね。俺、頭悪くて彼女の配下なの。

いやいや気にしてないよ。公式のヒトの有名人ですからね、ええ。触れ合えると

思えば……ごめん。共に過ごしてきたぶん、少し落ち込む。

菜々は、正式オープンしてから上陸、就職する後発隊。連絡は取れるが、まだパー

クにはいない。

でも先輩風は吹かせられない。だって飼育員さん目指して勉強実技と努力してい

る子だったんだもん。

漫画や幼少の のほほん な印象ばかり残っていたぶん、ショックが大きい。

ごめんね！　ダメな先輩で！

「園長は……騒ぐほどでもないかあ」

野郎は良いです。

アプリ的に、客として招待されたらしいから、職員ではないのだろう。

たぶん、この「の」の字入りの作業服や探検服ばかりのヒトが詰た船には乗っていない。そも、幼少時代に1度会ってるくらいレベル。

顔も覚えてない。そのうち会える気もするけど。具体的には事件が発生して、パークが休園になったタイミング辺りで。俺の妄想は良く当たる。

「あつ! 杏樹さん! こちらですよ!」

聞き慣れた声。

見やれば、人混みからズレた先。手を上げるお姉さんの姿。

ガイドさんだ。ネタバレするとミライだ。他に誰がいるのか。仮に違ったらガツカリする。

「おお……!」

先端はウオーター迷彩の探検服に身を包み、無線機と、腰前面に雑囊にも使えるところを身につける。

探検帽子は、赤と青の羽根が装飾品として付いていた。

その隙間からは、綺麗なエメラルドグリーン髪の毛の毛。陽の明かりを受けて、美しく艶を出し輝く。

後々の未来で髪の毛は、かばんちゃんに変身し、帽子は受け継がれる(?)ののだろうか。

嗚呼。

アプリ動画や漫画、アニメでも見た格好のソレじゃないか。

見れた奇跡に感謝します。

俺はミライに駆け寄り、その姿をしかと両の眼で捉えたのであった。

「大丈夫ですか？　涙が出てますが」

「陽の明かりが目染みたんだ。気にしないで」

嘘である。感涙したのだ。この先も、また泣きそう。

「えーと……杏樹さん。改めまして、おはようございます！」

挨拶をして、仕切り直し。うむ。挨拶は大切だ。これをしなければ1日が始

まった気がしない。

「おはようございます」

「今日は、お忙しい中……じゃなくて、調査補佐として参加してくれて、ありがとうございます—！」

初めてで緊張してるのか。言葉がたどたどしいというか。だけど一生懸命さが伝わるというか。

これはこれで新鮮ではあるが、先輩として緊張をほぐしてあげよう。

「畏まる事はないよ。学生の時みたいに、普通にしてくれて良いさ。隊長なんだし、な」

最後は私怨が少し含まれて……ないよ? ホントだよ?

「そうですね。わたしが、ビシツとしなくっちゃ!」

「そうそう。というワケで、これからどうぞ、よろしくね」

「はい！」

拳を作つて見せ「マカセテ」と明るくアピール。

良い返事。先行きは明るいと感じさせる。

俺はうむうむ、と頷いて見せた。

「ところで。隊長というからには他にも調査隊員がいるのかい？」

「いますが、班別行動で散り散りなんです」

「えーと。我が班は？」

「わたしと、杏樹さんですよ」

笑顔で答えられた。それ、大丈夫なんですかね？

俺、素人なんだけど。

まあ、うん。大丈夫か。ミライならば。

「あつ。けもの。さんたちは見ましたか？ 既に島に来ているんですよ！」

「あ、いや……また後で案内して」

グヘヘ、と更なる笑顔になるミライ。
う、うん……大丈夫だろう。 たぶん。

ヨダレを垂らして、だらしない事に。

ミライと不安要素

俺の来たジャパリパークは、複数の大中小の島々からなる。全て含めると広大で、領海を含めると かなりのもの。

海底火山を含め、ヒトが把握している地は余りに少ない。

施工が進められている、安全が確認された場所は、一見広範囲に及んでいるが、全体から見たらごく一部。

アプリ版をも参考にするならば、オーロラが見えるような極寒の地もあればマグマが噴き出るような灼熱の火山地帯もあり、命に関わる場所もある。危険だ。

他にもサバンナ、ジャングル、砂漠に湖畔。森や山脈。

自然界に存在する様々な気候と地形が集まっているといっても、過言ではない。

それら多種多様な環境が、何故パークに密集しているのか。 広大とはいえ、気候の差が激し過ぎる。その理由は、なにか。

ふわつとした説明で良いなら、アレの名前は必ず出る。

超常物質、サンドスター。

アニマルガールを生み出すだけでなく、サンドスターは地形や気温、湿度にも影響

を与えていると言われる、島特有の謎物質。

アニメでも、空から見た光景にて、ちほーの境目は目視で大凡分かったな。

どういう理屈で、境が出来るのか。砂漠の進行を木々で食い止めるイメージ……とは、違おうだろうし。

それが奇跡にせよなんにせよ、特異性を確認したヒトたち。ワクワクの探究心と冒険心を躍らせたのは、想像に難しくない。

動物園の段取りをしている一方、調査だなんだと多くのヒトが尽力しているのが証拠だ。カコやミライとかな。

「わたしたちは、指定された場所に向かいます。そこで行うのは、サンドスターと呼称された未知の物質のサンプル採集です」

「本土の研修で、説明は受けたよ。サンドスターは……謎だよな」

移り行く緑の光景と、心地良い風を受けながら。

予定の話と返事をしつつ。

ミライが運転するモスグリーンカラーのジープは、不整地を小さな砂埃を立てて走り抜けた。

へ？　ジャパリバスじゃないの？

と、妄想を裏切る乗り物の登場に、最初は首を傾げたが、落ち着いて考えれば当たり前かとも思う。

アレは観光用だ。調査には向かない。成る程、合点がいくというもの。

俺の妄想脳は既知の情報に従事したがる。

転生者ならではの、といえば聞こえは良いが、惑わされてはならない。気を付けねば。起こり得る様々な状況に対処出来なくなりそうだから。

というワケで。今を集中しなきゃ。

任務内容を説明するミライの横顔を見る。

凜としているというか。頼りあるお姉さんの雰囲気醸し出す。

純粋な子どものように、けものさんを見て、はしゃいでいる時があるとは想像出来ない。

甘い。

………冗談。野郎に甘えられても、迷惑千万だろう。フレンズなら大喜びだろ

うけど。

「確かに、疑問に思っている方は多いです。ましてや、サンドスターの影響によって変身したという《けもの さんの特徴を持った女の子》の報告は皆、首を傾げてました」流れから、アニマルガールの話をするミライ。言ってることに反して、ちよつと嬉しそうな顔。

既にフレンズは発見されているようだ。

まだ、フレンズと言わないのは、日が浅いからか。

心の中では「フレンズに、やつと会えそうだけヒヤッハー！」と嬉々としてドツタンバツタン大騒ぎ中なんだけどね。

だが理性でグツと抑える。心のミライさんは制御しないと。でなきや引かれる。

「資料で見たよ。島に来た けものさんが、昨日までは普通だったのに、翌日に見に行ったら、ヒトの姿になってたんだっけ？」

「はい。飼育員さんが発見して……特殊動物、《アニマルガール》と呼称する事に。陸地の他にも、島周辺での目撃が相次いでいます」

ふむ。

船旅の途中では、見なかった。パーク近海でもそれらしき けものさんは、確認出来ず。

「俺も見たかったなあ」

「大丈夫。きつと、会えますよ」

ふふつ、と前を向きつつ微笑んだ。ちよつとドキツとしちやつたじやない。

いかん。焦点をフレンズに戻そう。気になるのはソツチだ。

島周辺、というと。

野生の海鳥、イルカやクジラの事だろうか。

クジラ……迫力がありそうだ。

気になる！ 気になる！

数多くいるフレンズの中には現存する、個体としては地球最大の動物種と言われるシロナガスクジラがいたな。

彼女の場合は偶然パーク近辺に来たところ、海底火山から噴き出るサンドスターに当たって、フレンズになったのではないだろうか。

けもの の姿をヒトが連れて来るには、無理があると思うし。重量は80トンを超えたか。体長30メートル以上の記録もあるとかないとか。

いや、分からんけどね。俺が知らんだけで、なんとかしてヒトが連れて来た可能性も否定しきれない。

分布域の違いの件もある。東シナ海にはいなかったんじゃ？

まあ取り敢えず。

何が言いたいかというと、フレンズは皆が皆、ヒトによって連れてこられた けものさんではない……ということ。 たぶん。

ああ、また脱線した。今を集中だ、集中。

「その、なんだ。 フレンズとは意思の疎通が出来ると聞いたよ。 嬉しい話だ」

「フレンズ？」

疑問符が飛んできた。

しまった。 まだフレンズ呼びはしていないというのに。 誤魔化さなきゃマズいか？

「ともだち になれたら、良いなーって事でフレンズ。ごめん。忘れて」
「いえいえ！ 良い響きじゃないですか！ フレンズ！ 私もそう呼びます

！」

嬉しそうな声にて返されちゃったよ。 あかん。 これ、大丈夫か。

いや。 名前くらい良いか。 俺が言わなくても、そのうち言い始めただろう。

「あつ。 もうすぐ目的地です！ フレンズさんの場所は、後程ご案内します！」

ミライの明るい言葉で、現実に戻される。 フレンズ……早速言うのね。

まあ良いか。

今は今だ。 改めて集中である。

これもまた、パークライフさ。

ホットスポットはパーク敷地内に、多数点在する。

危険とは、常に隣り合わせと思つた方が良い。流石に来客用のエリアは安全が確保されているが、将来の件も含めると、不安でいっぱい。

中には回避出来ない道もあるだろう。

だが、安全に頼り世の中。明らかに危険な場所に、軽装2人で行つて来いとはなるまい。

などと考えていた俺は、甘かつたのか。

「すまん。ココ、どこ？」

「火口付近です！」

キラキラとした粒子が、目の前の大穴から青空に昇る光景を目の前に。

ミライは笑顔を輝かして答えてくれた。うん。ありがとう。回避は出来ない

道か。

「途中下車からの登山が始まったと思つたら、まさかの火山という」

疲れた。結構、登ったと思う。標高は知らんが、島全体を見渡せるんじゃないだろうか。

一方で、ミライは疲労の表情ひとつ見せず、笑顔である。何気に強いですね……。

「今は落ち着いています。大丈夫ですよ」

今は、な。

この火山。アニメの火山と同一かは分からない。でも、将来的にはヤバくなる気がする。

サンドスター・ロウがどうか、セルリウムがどうかならなきや良いが。

園長に四神やセーバル。フィルターに、かばんちゃんの冒険。前世の中途半端な知識が脳裏をよぎる。

だが、俺にはどうする事も出来ないんじゃないだろうか。特に今、騒いでやれる事はない。

「とここで。目の前のキラキラは、サンドスターかい？」

大穴……火口から噴き出る粒子群を指差して聞いてみた。

答えは知っているつもりでも、不安を和らげようとしての会話だった。俺は弱いと

思う。

「そうです。とても綺麗な光景ですよね！」

「うん。して、採取かい？」

「いえ……はい。土壌や岩にもサンドスターは含まれてますから、其方を持ち帰るのです」

「そういうと、足下に転がる手頃な小石や砂を手に取り始める。結構、簡単そうだった。」

「だけど安心した。火口ギリギリに近寄って手を突っ込む作業だったら、ゾツとするからね。万が一落ちたらと思うとき。」

「安全帯があつて、掛けられる場所があれば多少はマシだろうけど。」

「いや……それでも不安がある。やはり、今後についてだ。」

「あの、さ。 サンドスター以外にも、別粒子が含まれてたりする？」

それを口にする弱さ。 そして、自分ではどうしようもない無力さを晒してしまう。

「と、いいいますと？」

質問の意図が分からず、聞き返される。 そうなるよな。

「その。 サンドスターに反する物質とか」

「うーん？ 調査段階から脱しません。 これを研究所に持って行って、詳しく調べて貰わないと」

そうだよな。 まだまだよく分かっていないのだ。 未来のパーク閉鎖段階でも、分からずじまいだったのだらうし。

分かっていれば……そういった悲劇も起きないか。 あくまで可能性だが。

「そんじゃ、ちゃんと持ち帰らないとな」

「はいー！」

そう言つて、踵を返そうとして。

気付いたことが、ひとつ。

「俺、必要なくね？」

これである。 補佐つて、なんだろう。

「そんな事ないですよー！ 一緒にいてくれるだけで嬉しいですしー！」

アワワと、言ってくれるミライ。

嬉しいけどね。 なんか、実務的なのがなかったというか、ただの登山で終わったというか。

まあ、良いか。 危険な目に遭ったワケじゃない。

「ありがとう」

礼を述べておく。深い意味はない。

ミライから「はい」と柔らかかに返されると、一緒に下山する事になった。十分らしい。

平和が一番だ。願わくば、ずっと続きますように。

この後直ぐだ。オバケの報告……セルリアンが確認されたのは。

そういえば、アニマルガールと同時期に確認され始めたんだっただか？

なににせよ、この世界にも、俺以外にのけものはいるって事だ。

無線越しの セルリアン

人類が邂逅した、アニマルガールことフレレンズと。

ヒト、フレレンズに共通した のけもの、セルリアン。

どちらも謎に満ちている。 故に理解したいと思うのは、ヒトの性。

よく分からんけど、カコの研究レポートや、アニメでのギンギツネの発言内容から、双方共に理解と対処を試みていたと思われる。

大切な事だ。 ヒトは様々な状況に直面し、発明や方法を模索し検討、受け入れて来た。

それらは、文明の発達とヒトの幸せに繋がっている。

或いは不幸か。

正解不正解、成功失敗を含めて、全てではないにせよ。 ヒトはこれからも、きっとそうだ。 そうしていく。

だがしかし。 アプローチを間違えれば、知る事も出来ない。 危険もある。

科学的見地から努力して「これでは、上手くいかないのが分かった」となるのは勿論だとして、それにしたって「やり方」は考えるべきだ。

いや。仕方ないか。試行錯誤の上である。

最初から「ふわつとした正解」が知らないならば、仕方ない。

そう。知らないならば。

だけど、俺は転生者。

曖昧ながらも、フレンズやセルリアンの情報がある。今現在のヒトよりかは。

犠牲の上で「知った」何かがパークにあるとすれば。

そのひとつは、今かも知れない。

『ごちら——妙な生物群と遭遇。大きな1つ目、明るい色合いをしている……』

言っちゃ悪いが、気味が悪い——近寄つて来る。あー、コミュニケーションは取る

べきか？ 指示を求める』

ミライの無線から、男性の……他の調査隊員の、呑気な声が聞こえたとき。

俺は思わず、引つたくるように無線を手にとって叫んでいた。

「逃げろ!?! ソレはフレンズじゃない!」

何が怖いつて。

隊員らの輝きを奪われる事よりも。

避けられたかも知れない犠牲を見逃す事だ。

『隊長じゃないな。 誰だ?』

「良いから逃げろ! 危険なんだよ、ソイツらは!」

質問している場合じゃないってのに、疑問を投げて来る相手。 さっさと逃げて欲し

い!

内容からしてセルリアンだ。 まだ生で見た事はないけれど、危険なのは承知している。

ミライは、俺の突然の行動を飲み込めず、硬直。 その間にも、相手からは融通の利かない言葉を投げられた。

『ライブラリにも、そのような報告は無い。　良いから隊長に代わってくれ』

ざけんな。　ナニが報告が無い、だ。

冷静な言葉と真逆に、俺の焦りと怒りを熱していく。

何の為の調査隊編成だ。　この島の事が、ちゃんと分からないからだろ。

言うなれば、ソイツらセルリアンの事も。

「自分でも分からんだろ！　　向かって来てるんだろ!?　　良いから逃げろ！」

ストレートに「それはセルリアンだよ！」とは言えない。　言っても「は？」となる
オチが見える。

アニメでいうと、かばんちゃんが初めて小さなセルリアンを見たときのような……あ
んな感じか。

問題なのは、敵だと教えてくれる子がいない事だ。　側に、な。

『隊長に指示を仰ぐ。　指揮系統を乱したくない』

「言ってる場合かあ！」

確かに。組織的な行動を取る上で、指揮系統がハッキリしているのは重要だけど、臨機応変に個々に対応出来る能力だつて必要だと思う。

もどかしい！

そう思った刹那^{せつな}。

「——っ！ 杏樹さん、無線を」

お望みの隊長さんが、我に返つた。反射的に無線を返す。最早^{もはや}、頼みはミライのみ。

「頼む！」

「はい」

俺は無力だ。改めて痛感させられた。

「代わりました、ミライです。至急、その場から離れて下さい」
『分かった。何処どこへ向かえば良い？』

アツサリ受け入れた。雲泥うんでいの差である。疎外感が酷い。
でもさ、良いから早く離れろよ。

そう思う俺だったが、ミライは怒らず素直に指示を出した。 エライさん。

「パーク・セントラルへ。管理センターに報告を頼みます」

『了解——今の聞いたな！ 急いで離れるぞ！ パーク・セントラルに戻る！』

最後の方。通話ボタン押しっぱなしだったのか、仲間とのやり取りと微かにエンジン音が聞こえた。

冷静さを装っていたが、やはり逃げたかったのだろうな。最後の方、慌てたような口調だった。

非常事態でも、真面目さを貫く強さ。俺には無いな。

取り敢えず、危機は去った様子。

嗚呼。スゲエ疲れた……。

「ありがとう、ミライ」

「いえ。 凄い剣幕でしたから、只事じゃないと感じまして」

緊張が解れていく中、ミライは微笑みを返してくれた。

敵わない。 突発的な出来事に、一瞬硬直してしまつたにせよ、冷静なやり取りであつた。

だがしかし。 実際、只事ではない。

相手も分かつていたと思うけど。 気味が悪いって言つてたし。

それでも、逃げないで冷静に指示を仰ぐ。 それはそれで凄いと思う。

調査隊員だからだろうか。 もう少し柔軟に動いて欲しいところだが、それもまた、彼の強さだつたと称賛したい。

おつといかん。 他の班にも連絡して貰おうか。 今のだけとは思えない。

「他の隊員とも連絡をとつて欲しい。 1つ目の、明るい色をした生物には近寄るな

と。 見かけたら逃げるようになって」

「分かりました」

信用して、質疑応答をせずに淡々とこなしていくミライ。無線で似たような言葉が何度も繰り返されていく。

でも、どれも了解の言葉で速やかに終わっていくではないか。俺とは大違い。

嗚呼。俺って人望ないというか。駄目だなあ。

「杏樹さん。ひと通り終わりました。わたしたちも、パーク・セントラルに戻りましょう」

「あ、ああ。そうだな。ありがとう」

一緒に下山ルートに入る。最初の時とは違い、ミライと共に周囲を警戒しながら、降りていく。

何が転生者か。役に立っていないじゃないか。

「杏樹さん……報告にあった生物、何かご存知何ですか？」

そして聞かれる。落ち込んでいると、面倒事が増えた気分だ。

それも、自分が悪いから、余計にイライラするとうか。 それでも穏便に収めようと、適当な嘘を言っておく。

「いや。 島に来たばかりだから、分からないよ。 でも、不気味なヤツが向かってきていたら……そうした方が良いと思ってね。 ごめん。 越権行為だった」

「いえ。 杏樹さんは、正しい事をしたんですよ」

特にお咎めはされなかった。 聞きたい事はたくさん、あるはずなのに。 それどころか、褒めるまでである。

「自信を持って下さい。 私だったら、同じ事をします」

「でも」

言い淀む。 俺の所為せゐでミライが怒られたり、報告や書類等の面倒事が増えるかも知れない。

俺だけならともかく、ミライにも迷惑が。 下手するとパークから のけもの にされてしまうんじゃないか。 心配だ。

だが、そんな心配を吹き飛ばすようにミライは言うのだ。

「わたしが保証します。誰かから言われたつて、杏樹さんは悪くないと言い張りま
す。わたしたちを守ってくれたヒーローだって」

無線でギヤアギヤア騒いでいただけなのに。

ここまで言ってくれるなんて、な。

「ヒーロー、か」

「はいー！」

「カコと同じ事を……言うんだな」

色褪せ始めた懐古の記憶。セピア色のソレも、再び色彩を取り戻したかのようだ。

「カコさんが？」

「うん。幼い頃と高校の時。自分じゃヒーローだなんて思わなかったけど、さ」

「良いんですよ。カコさんと私にとっては、ヒーローです」

真っ直ぐ言われると、むず痒い。

けれど報われた。

俺はまた、誰かの役に立ったんだなって。

「……………ありがとう」

頬を雫がなぞっていく。それは温かく、内側の喜びから出た輝きだ。俺からしたら、ミライの笑顔の方が、もっと輝いているけどな。

初フレンズ

セルリアンの存在が認知されていく一方、職員はセキュリティホールの穴埋めや、フレンズへの対処に追われている。

ビクターセンターも、色々手を加えねばならないだろうが、他もそうだ。

様々な方面で猫のフレンズも借りたいらしく、調査補佐である筈の俺は彼方此方に飛ばされた。

計画を変更して、増設することになった建築物の工事現場の猫押しであるとか、警備服を着てゲートに突っ立ってるとか。

今日はパーク・レンジャー（森林警備員）の補佐という事になっている。

自然保護。パトロールや、動植物の調査・保護を行うヒトたちだったか。俺はその手伝い。

臨時職員だからって、扱いが乱雑じゃないですかね……本来、国家公務員の資格や特別講習等が必要だったりしないのか。

いや。それだけ管理センターも多忙。首が回らないのが現状ということ。

新規書類と毎日の出面チェック、特殊動物や報告への対処、プロトコルの制作、資材

等の搬出入の手配及びチェック、トラブル対処、本土への連絡、アニマル・コントロール、参入営利団体とのやり取りなど……。

本来、予定していない緊急事態の発生で、各方面はドツタンバツタン大騒ぎ。

本土もそうらしいが、世界的に騒がれているんじゃないか？

だけど、最前線でホットスポットなジャパリパークの職員はスゲエ大変だ。

パークに来たのは、フレンズとキャツキャツする為で、労働天国による疲労感を味わいに来たんじゃない。そんなの前世で間に合っている。

ミライやカコは、本来の業務に集中しており忙しい。中々会えない。カコに至っては、島に来てから1度も会ってない。

菜々は、特殊動物発見の報の影響で、もつと後から来るらしい。寂しい。

園長は、知らん！

とにかく、今を過ぎれば落ち着くはず。これもパークの為だ。俺は皆の為に努力しているのだ。将来の為、フレンズとの楽しい時間を過ごす為。必要なんだと自身

に言い聞かせる。

中々どうして、知り合いのヒトにもフレンズにも会えないが、心の寂寥感に耐えるのだ。

かのようにして。

俺はレンジャーの制服を着せられて、ジープに詰められて、身体を揺らされながら、本職レンジャーと共に森へ向かうのでした。ぐすん。

「これから向かう森は、解放されたけものもいるが、大人しい子ばかりで比較的安全ではある。だが、世界的に有名になったジャパリパーク。拉致し、住処を荒らす輩が出るかも知れん。また、セルリアンと呼称された存在が侵入してくる可能性があるんだ。そのモノ共から、けもの達と森を守るのが任務である」

隊長格っぽい、ゴツい日焼け色のオツさんが運転しながら説明する。長い。

現状、パーク・レンジャーの制服と思われる黄土色の服を着ており、デザイン的にはミライの探検服に近い。

ただし彼の場合は、ぱっんぱっつんで筋肉が浮いて見える。赤いベレー帽を被り、胸元には無線機。その様は兵隊さんだ。

外国人だろうか。流暢な日本語ではあるけれど。何にせよ、共に働く仲間に違いはない。

でも、ちよつと怖い。

「アニマルガールになった子もいるそうだ。俺は既に見たが……ありや凄かった。奇跡とも言える。お前は見たか？」

「い、いえ！ まだ見れてないです」

隊員に先越された。俺、転生者なのに……未だ見れてないよ。

こんな心境を察してか否か、ガハハッと豪快に笑う隊長さん。

笑えるんだ。失礼ながらも思った。怖いイメージが、森の何処かへと吹き飛んでいくのが感覚で伝わる。

見た目と反して良いヒトなのかも。

「運が良ければ今日、森で会える！ 驚くぞー！」

嬉しそうに、喜びを分かち合うように。隊長はもう一度笑い声を上げる。

それは我が子自慢のような。力強くも優しい包容感を醸し出す。

ヒトは見た目じゃ分からない。だけど、笑顔っていうのは良いものだ。心が和むね。

前世では……騙されて、死んじやつたけどさ。

いかんいかん。ポジティブにいかなきゃ。疲れてるからか、マイナス思考になつて
いるじゃないか。しっかりしろ、俺!

よし。ココは仕事の話をしよう。具体的には班員について。

「班員は、あと「俺とお前だけだあ!」あつ、はい」

明るく、力強く答えてくれたよ。

またこのオチである。

人手、早く増やして。

過労死する前に。

お願い。

「ついでぞお!」

草木の如雨露から零れ落ちた陽が、優しく根を濡らす中。

俺は目立つ木や建造物が全く無い場所で降ろされた。地方の境界でもなさそうだ。つまり右も左も森。意味分かんないです。

「すみません。ココがそうなんですか?」

「そうだ! 俺には分かる。案ずるな」

案ずるよ。勘でやってるのか。優しいのは良いとして、頭は脳筋野郎か。

「お前の考えている事……痛い程に分かる。俺もそう思うからだ」

ごめん。何の根拠もない。というか、意味不明。アンタと俺の脳は違うのよ。一応、相槌は打つけど。今の上司だし。

「そう、なんですか?」

「ああ。ヤバいな!」

おお。分かってましたか。自覚があるのは救いが、

「セルリアンの気配だ………ッ！」

「成る程ヤバイですね直ぐ逃げましょ大至急」

踵を返して、車に戻る俺。 救いはない。

野生的勘でも、それは怖い。 パークにいる以上、遅かれ早かれ出会う事になるとしてもだ。

俺はフレンズみたいに強くない。 あの子のように、バスの運転席部分を持ち上げられたり、漫画版でいうと300キロの大岩を投げたりするチカラはない。

一般ピープル。 非力。 武器もない。 どうするの。

うん。 逃げるよね。

「逃げてはダメだ。 ココには守るべきモノがあるのを忘れるな」

「いやいや。 どう立ち向かうのです。 セルリアンだとして、素手で立ち向かえないでしょ」

勇敢と無謀は、似て非なるものだ。 ヒトの純粹なパンチやキックで、セルリアンを

倒せるとは思えない。意思の疎通が出来なきや、注意喚起等の呼び掛けも意味がない。

無理に危険な賭けをする必要はない。

その事を言おうとして、隊長の方を向き直ると。

「むっ！」

正面の草木がガサガサと動き始めた。音は大きくなつていき、近寄ってくるのが分かる。

何か来る。

隊長、マズいですよ！

その気持ちを察してか。

筋肉モリモリマツチョマンは、親指を立ててグッドポーズ。

振り返つて、ニカツと歯を輝せた。

それ、今必要かな？

「問題ない！」

「前を向いて下さい!」

刹那。草木をかき分け、どばーんと、

「ばあ! なんちゃって!」

「うわあ……あ?」

出て来たのは、可愛い女の子。

茶色のノースリーブ服にホットパンツを履き、白黒模様のアームカバーとタイツを着用。

左右に跳ね広がったショートヘアの色は少し茶色っぽい。スカーフ風な白色リボンを首に巻いている。

大きな耳が頭から生えている。瞳の色は茶色。お尻から生えた尻尾の形状はキリンとよく似ている。

フレンズ……フレンズだ!

「オカピだゾツと♪」

そして、オカピのフレンズ。

アニメでは、ジャングルちほーで、怒涛の紹介ラツシユの1人であった。

脚のシマウマのような白黒模様が、美しい。森の貴婦人と呼ばれるのも納得という
か。

だがそれ以上に、出会えた奇跡に感謝します……ッ！

嗚呼！ 長かった！

やっと、フレンズに会えたよ！

「ちよ、ちよつと泣かないで!? ごめんね! そんなに怖がらせるつもりはな

かったの!」

驚かせて、泣かせてしまったと思ったオカピが慌てて謝ってくる。

優しい子だ。でも、ちゃんと説明はしておこう。 罪悪感が。

「違うんだ……。 キミに会えて、とても嬉しくて。 涙が溢れちゃうんだ」

「ハツハツハツ! 出会えた奇跡に感謝だな! 俺も、また会えて嬉しいぞ!」

隊長がバシバシと背中を叩いてくる。痛いです。でも、この感覚、懐かしい。俺は疲れた心がじんわりと温まる感覚を味わう事にした。

涙が止まるまで、隊長とオカピは側で微笑んでくれた。

森の貴婦人、守人に何想ふ。

森で出会ったオカピのフレンズに感涙してしまった。前世から変わらず泣き虫な俺だけど、こん時くらい泣かせて。 前世から変わらず泣き虫な

だって、アニマルガールよ？ フレンズよ？

サンドスターによる奇跡で生まれた特殊動物にして、ヒトの女の子の姿をしている。同時に言葉を喋り、二足歩行であり、意思の疎通が可能である。

優しくどこか、ほのぼののしている。

童の頃に置いてきた、ワクワクやドキドキ、純粋な笑顔を見せてくれる可愛い子たち。愛を渴望する現代人には、心のオアシスである。

オカピもその例に漏れないが、三大珍獣に出会えたとは……幸先が良い。

ああ、いや。三大珍獣というのは他にジャイアントパンダとコビトカバであるが、明確な基準で決められたワケではなかったか。

なににせよ、珍しい事に違いは無いかな。

「泣くほど嬉しかったのかー！ 私も嬉しいよ！ さあ！ 超レアキャラガール、オカピとの出会いに感謝して、この美脚に見惚れると良いよ！」

事情を知ったオカピ。ニコツと笑顔を見せたかと思えば、次には「ふふふーん♪」と不思議なダンスを披露した！

「おお……………っ！」

全身を舐めさせてくれるように、ねつとりと、その場でターン。キリンみたいな尻尾は弧を描き、美しい縞模様しまもようの脚あしは前に出して、これ見よがしに強調。

ステージは、溢れ日で妖艶さを増させている。

大きめの けもの耳 もまた、チャーミングポイント。

俺はもつと、良く観察するべく、近寄ってしゃがみ込んだ。漏れなく、視界が縞模様の美脚で埋め尽くされる。

フレンズは、元のけものの特徴を服等で表しながらも、実際にありそうなファツシオンであり……………なんというかコスプレではなく、無理を感じさせないのは凄い。

そして、えっろ……………。

じゃなくて、すつごーい！

「ハツハツハツ！ 見惚れるのは仕方ないとしても、仕事はしなければな！」

隊長。現実的な言葉を言う割には、貴方もしやがみ込んでガン見してるよね。

いやはや。それだけ美しく見えるという事である。森の貴婦人きふじんと呼ばれるのも納得。

側から見ると、マツチヨとパンピーが森の中で女の子を観察している図。通報されそう。

でも大丈夫。

ソイツら、(森の)おまわりさんです。

「ツィンツィン」

ここでオカピが反応。踊りを止めてしまった。

ああ、ダメダメ。地獄言葉過ぎます。フレンズは知らなくて良いの。だから言

うのもやめて。

「ああ、レンジャーだ！　キミと、他の子。　森全体を守る仕事だ！　今日はパトロールメインだ！」

構わずナチュラルに会話してるとか。　羨ましいんですけど。

前にも会った事があるのかね。　いや、それは良いんだけどさ。　俺、蚊帳の外じゃね？

「だいじょうぶ？　最近、ヒトは　たいへん　って聞いているよ」

「問題ない！　今日は優秀な人材が派遣されてきたからな！」

心配してくれるオカピ。　優しい子。

対して隊長はスクツと立ち上がり、俺の肩をバシバシと叩いてくる。　痛いッス。でも。　数に入れてくれていているのは、素直に嬉しい。　ココは名乗っておこう。

「俺、杏樹っていうんだ。　よろしくね」

「あんじゅ！　良い名前！　これからよろしく！」

手を差し出されたので、反射的に立ち上がり握り返す。柔らかくて優しい。それに懐かしい感触だった。それ

「えへへー、新しい、ともだちが出来た！」

純粹無垢じゆんすいむくな笑顔である。守りたい、この笑顔。

嗚呼。守る、か。

そうだ。仕事しなきゃな！

この子の笑顔の為だと思つと、消極的な考えは消えて、前向きに明るくなる。

よし！ やるぞ！ やつてやる！

「さあ、仕事をしましょう！」

「そうだな！」

オカピの手を放す。温もりをもう少し感じていたけれど、その温かさを守る為、俺は仕事をしなきゃならん。許せ。

「…………あつ」

オカピから切ない声が。 ああ、安心させなきゃね。

「大丈夫。 パークを、皆を守るのが、俺たち職員の仕事だから！」

「良い事を言った！ なに、案ずるなオカピ君！ セルリアンにせよ悪党にせよ、見つけたら懲らしめてやる！」

「…………う、うん」

明るい声を出して、不安がらせないようにしているつもりだけど、オカピは不安そう
だ。

さっきの笑顔の方が似合ってるよ。 そう言おうとして、

「その、さ。 れんじやーさん、だよね？」

「ああ！」

「俺は補佐だけどね」

聞かれたので、すぐさま誤解なきよう本職じゃないアピール。何かあったとき、変に頼られたくないので。

ヒトとして、頑張るけどね。本職の方ほど勇敢ゆうかんじゃなければスキルもないと言いたいのだ。下手すると逃げるまでである。

「必ず。必ず帰ってきてね。危なくなったら逃げてね！ 私人でも大丈夫なんだからさ！ なんなら手伝おうか!? 私だって、守られてばかりじゃない、し。この姿になったお陰か、チカラも少しあるんだよ！」

突然の死亡フラグ。ギャグではなくシリアス。

必死に、何かを恐れるように。

オカピは共に行こうかと提案してくる。

——目尻めじりに涙すら浮かばせて。

泣かせたつもりはない。

「レンジャー、ね」

たぶん、この言葉が心に響いたのかも知れない。

彼女の記憶には恐らく無いだろう。　けもの　のときの記憶が残っていたとしてもだ。

俺の妄想が当たっていれば。

だからといって、同じ種の　けもの　共通の記憶や感性が、フレンズにはあるのかも知れないな。

ロツジでのサーバルちゃんみたいに。

どう返事をするべきか。　彼女を安心させるために、同行させるべきか？

俺まで不安になりつつ、隊長に目線を送った。　ゴツい見た目に反して、優しく、瞳にオカピを捉えている。

彼もまた、オカピに直接関わったヒトではないのだろう。　けれど、彼にも表現し辛

い気持ちは伝わっていると思う。

哀しみか。　無念か。

憎しみか痛ましさか。

何にせよ。俺は隊長さんに任せ——やがて、口を開いた。

「同行は許可出来んが……この森に戻ってくる俺たちの為に。また綺麗な脚あしを、踊りを見せてくれるかい？」

うん。シリアスモードだけど、言っていることへんたい変態だよな。

ミライがいたら同じ意見を……いや。あのヒトもダメだ。ヨダレ垂らして激しく同意するわ。

そして味をしめて、ワンモワセイツワンモワセイツと繰り返して溺れていくに違いない。俺は知っているんだ。

「うん。私に出来る事なら、なんでもするから」

やめなさい。女の子が、そんな事を言っではいけない。

「そうだな。では」

おつ、110番だな！

「キミも危なくなったら、逃げると約束してくれ。そして、俺たちに頼ってくれて良い」

と、思ったらマトモな話だった。危うく管理センターに通報するところだったよ。

「……うん。れんじやーさん も、あんじゅもね」

「ありがとう」

頷く。モチのロンである。俺のフィールドでの行動コマンドに、「逃げる」は1番前に来ている。

闘うなんて とんでもない。逃げるが勝ち。

「ではパトロールに戻る！ セルリアンの気配はあるからな！」

当てずっぽうじゃないん？

車を置いて、明後日の方向へ。これ、帰ってこれなくなるんじゃない？

「あつ、えつと！ コレ……くるま だっけ？ この側にいるから！」

察してか否か。 オカピが側にいてくれるという。 良い子。

セルリアンは出てこなかったが、案の定というべきか。

迷子になった俺と隊長さんは、夜の森に助けの声を響かせ、オカピが迎えに来るとい
う情けない事態を引き起こした。

グツタリする俺と裏腹に、隊長さんとオカピは互いの無事に高らかに笑い合う。

………まあ、災難であったが。

この日の出来事は、俺たちにとって良い思い出になるのだと感じたよ。

開園と未来に向けて。

フレンズ、セルリアン発見という非常事態からしばらくして。

各パーク職員の尽力により、なんとか開園かいえん手前てまえまで漕ぎ着けた。

菜々ちゃんはオープンスタッフではなく、遅れて上陸するそうだが……そろそろ第1世代である漫画版が始まるのだろうと感じさせる。

見渡せば、ピカピカの新築建造物。

セントラルには、遊園地の象徴である大きな観覧車かんらんしゃ。

けもの をかたどった飾りや、パークのマスコット人形も見受けられる。

「嗚呼ああ」

俺は青空を見上げた。 込み上げてくる感情は、やがて嗚咽おえつとなり外に出る。

ようやと。

ようやとと、ここまできた！

苦労は無駄ではなかったのだ！

長かった。 本当、長く感じた。

思えば転生先は普通に本土で、逆行ものかとも考えた時もあった。 過労死した前世を思うと、絶望すらした。

だがカコと出会い、けものフレンズの世界だと知り、職員になろうと決意。その前に、死んでしまうカコの両親を救うべく奮闘。

学生時代は、前世同様に人間関係に苦しみ、挙句に卒業出来るかヤベエ状態。カコ達は大学へ。 劣等感を感じながらも、それでも俺はギリギリで卒業。 パークへの道をなんとか歩んだ。

パークへは、臨時職員な形で上陸。 他の方々は正規で受けたか、計画に誘われて上陸。 羨ましい。 俺が悪いんだけど。

そして、サンドスターやらセルリアンやらフレンズやら新築工事やらで、ドツタンバツタン大騒ぎ。

俺も巻き込まれ、彼方此方へ行かされたな。

まあ、なんだ。

とにかく、パークは紆余曲折を経て、様々なプロトコルや新設工事を突貫で詰め込み、俺と共に新たなスタートを切る。

臨時職員の俺は、決まった仕事や場所に留まらず、お呼ばれした場所に右往左往。

運営開始しても、そうなる予定。

大変だけど、正規員の多忙さと比べると楽な方かも知れない。資格がなくて雑工な俺に、気難しい事はさせられないだろうから。

他のヒトには悪いけど、楽が出来たら越したことはない。俺はフレンズに癒されて来ているのだ。過労は勘弁な。

俺の曖昧な知識だと、フレンズが発見される前は通常運営されていた設定だったような気がしたが……気がしただけだったのか。

運営開始前に非常事態になった。いや、良いんだけど。早めに触れ合える分には。

そうそう。触れ合うというと。

フレンズの安全性は、謎は多くも確認されたとかで、来園者との接触は順次許可されていく予定。

この短期間で矛盾だらけの中、良く決定を下せたものである。俺には都合が良いんだけど。

というか、見た目の問題もあつたかも知れない。檻の中にいるけものがヒトの姿になつていたら、「なんか……ねえ？」というのもあつただろうし。なんのプレイだと。

そんなフレンズたちは、今。

「リカオンさーん！ この箱をアツチに運んで欲しい！」

「オーダー了解ですっ」

「アフリカゾウは？」

「港の手伝いに行っちゃったよー！」

「キタキツネは、どこいったー!?!」

「手伝うのが嫌だからって、森に帰ったー！」

わいわいがやがや……。

パーク・セントラルや都市部、港など、各地でフレンズが お手伝い。

ヒトに混じって、けも耳をピコピコ、尻尾をフリフリさせた子らが、笑顔を振りまきながら頼まれた仕事をしている。

可愛い。一部はサボってるようだけど。

もうね。職員とは打ち解けた感じ。早いな。フレンズと呼ばれる所以が分かる気がする。

して、フレন্ズの有用性の1つを見出されているのもあるか。チカラ仕事や素直さ、優しさ等だ。皆が皆じゃないけど。

その点、教育を行えば可能性は広がる。

実際、漫画版はそうだったか。一軒家に住んでいる子もいたし、受験勉強に励む子も。

クロサイは、キタキツネの為にログハウスの別荘を建てていた。凄いと思う。

野生の特徴とヒトの文化が混ざった姿。そこに純粋な優しさ含む喜怒哀楽がある。

俺が渴望した本物の世界が、愛がココにある。

もうすぐ、俺の知る第1世代……漫画版の世界に突入だ！

オラ、ワクワクすつぞ！

明るい喧騒の中。静かに、ガッツポーズを繰り出すのだった。

「杏樹さん！ 感涙するのは良いとして、港の搬入を手伝ってよー！」

「次は、調査レポートの整理を頼む」

「なにおう！ 商品棚にグッズを並べて貰うのが先よ！」

「いやいや！ 警備員としてだな」

うん。 もうひと踏ん張りだぞ、俺。 こんなトコで倒れるなよ。

「はーい！ 今、行きまーす！」

でも、前世のハードワークと比べたら。 必要とされて笑顔溢れる職場の方が良いに決まってるけどね。

それに、さ。

職員に、ヒトにも愛されている感があつて良い。
うらかな陽気の下。 俺も笑顔で返事を返す。
きつと、この島での職員生活は楽しいものだ。

だからこそ、不安になる。
いつか。

この幸せが、輝きが、消えるんじゃないかって。全ての輝きはやがて消える。

きつと、その通りだ。パークに異変が起きて、ヒトが消えて。

今の形とは別の輝きが生まれるとしても。

俺の妄想脳は、それを良しとはしない。

この幸せをいつまでも、感じていたい。

不幸だと感じた前世だったんだ。願うくらい、許してくれよ神さま。

それは勝手な願望だとしてもさ。

だからって、どうするのか。

祈って変わるなら苦労しない。サンドスターの奇跡に頼るのは、非現実的だ。

なんの権限もない俺に、チカラのない俺にどうこう出来るのか。

分からない。

だから、この不安を一時でも忘れる為に。

俺は今の仕事に集中する事にした。

ジャパリパークが、つうじょう通常うんえい運営されている世界。
それはきつと、目の前まで来ている。

第1世代！　パーク運営中！

現状の不安と、ワガママなキツネさま。

開園かいえんから何日か経過して落ち着いていたから、少し語らせて貰う。

パーク開園の報は、多くのメディアを通じて、またた瞬まく間に本土や世界中に広がった。

島を丸ごと敷地とした、スケールのデカさも注目されているが、何より人類が邂逅かいこうした未知の奇跡物質「サンドスター」と、それにより生まれたフレンズ「アニマルガール」、危険で謎の多い「セルリアン」の存在がデカい。

その結果。ジャパリパークは想定を遥かに超える来園者数を記録する。

多くを占めるは見物客。当然ではある。

目的の多くはフレンズだ。一目見ようとする者が多い。他じゃ見れないからね。勿論、アミューズメント施設を楽しむだけでも飽きる事はない。

普通の　けもの　を見て回るのも十二分である。一日じゃ見切れない。それだけパークは広大だ。

だがしかし。立ち入り禁止区画には行けない。サファリ区分の一部だけ、ガイド付き観光バス等で行ける場所があるようだけど、本当に一部のみ。

セルリアンが確認された場所、猛獣が放たれている場所は駄目だ。　当たり前ではある。

次に職員。

これは臨時職員の俺も含まれるのだが、その後も増員されて今尚、新規職員が増えている。

管理センタースタッフ、レンジャー、飼育員、警備員、接客員、保守点検員、整備員、清掃員、調査隊員、研究員などなど。

改めて思うが、パークは多種多様な職員で溢れているよなあ。

どこにも大抵、知り合いがいる自分にも驚きだ。　彼方此方に行かされているからな、そのぶん色んな職種に関わったから。

ヒトとの繋がりを、まさかパークで感じようとは。

フレンズとイチヤイチャ出来れば良いと思っていたけれど、ヒトも悪くない。

あくまで、パークでの話だが！

そこは強調する。　本土での人間関係は前世と相変わらずだった。　島の外では期

待しないよ。

閑話休題^{それはともかく}。

職員の割合で多いのは、接客員あたり。　当然か。　動物園であり遊園地であり観光

地であり。なにより広大故に。

いくらいても困らない。俺も人手不足を理由に駆り出された。接客業務もまた、多岐にわたるので、必要なスキルも多く大変だと思いきらされたよ……。

飼育員もそれなりだ。

特殊動物……アニマルガールにも飼育員がいる。書類や管理上の問題もあるが、活の全てをサポートし……心身の健康を維持させ、また教育を行い治安向上に努めなければならぬ。

これは漫画版でミライが言っていた気がする。

だから、飼育員はフレンズが最も身近な職員ともいえる。

羨ましい一方で、第1世代キタキツネのようにワガママガールや変な子に振り回されるのもまた、飼育員である。大変なのだ。

ミライみたいに、上は けもの耳 から 先は尻尾まで、睨みつけられても快感というような、全て愛せるヒトは多くはない。多少はイラツとくるかビビる。

それでも愛故に。 皆は教育を施し、褒めて、時に叱り……笑い合う。

菜々は、そんな立派な飼育員になる為に、これから来るんだよなあ。

俺は、立派な職員を目指しているワケじゃないけど、劣等感を感じるの否めない。でも、努力はしない。 先は長いからね。

作戦は「のんびり いこうよ」である。 異変関係は、足掻くけど。 研究者も増えてきた。

サンドスター、フレンズ、セルリアン……この島そのもの の研究以外にも、対象はある様子。 具体的に何かは知らない。

たぶん、絶滅種とか けもの 関係。

フアンタジー要素に科学的アプローチをかける試み。 成功したのもあれば、上手くいかない事もあつたそうなの。
絶滅種ぜつめつしゆの再生、とか。

俺は研究員じゃないから、詳しく分からん。 ただ、カコが上陸時点でジャパリパーク動物研究所の副所長になったのは知っている。

スマホに本人からのショートメッセージが届いていたから。

さすが、優秀な我が馴染み。 俺とは大違い……。 いや、素直に祝福するよ？

それで褒め言葉を返信したら、喜んでくれたみたいだな。

今は会えず、その笑顔を見れないのが寂しい。

いつかまた、幼い頃みたいに、一緒に けもの を見て共に歩みたい。 して、笑い合いたいって思う。

何にせよ、パークを救うのに役立つ情報ではない、か。

俺には かしこさ が足りない。

現状、どうすれば良いか分からない。

どんな経緯でセントラル襲撃事件しゅうげきじけんが起きるのか。

セキュリティホール。

ヒューマンエラー。

セルリアンの能力。

本土や大陸。

多くの国々。

政界。 営利団体。

真心の陰にある思惑と欲望。

フレンズと、ヒト。

多くのモノが絡む、ジャパリパーク。

俺にとって未知の世界。 知っているようで知らない、この世界。

優しさの裏側。

見えない影は不鮮明に、確実に不安を煽る。

何が起きるか分からない。

ジタバタしても仕方ない。

でも、祈って待つのも違う気がする。

俺はパーク職員。

もつというと臨時職員。

今は、やれる事をやろう。その時その時をこなしていこう。

それがパークの為であり、フレンズの為である。

うん。というわけだから。

「肉まん一キロで、10秒言うことを聞いてあげる。それが私の相場よ」

目の前の、ワガママガール……キタキツネを　なんとかしようか。

キタキツネ。

アカギツネの亜種。 フレンズとしては、アプリ、漫画、アニメにも出てきた人気のある子。

黄色の縦長な狐耳を生やし、スカートの下から覗かせる茶の尻尾は稲穂のよう。

オレンジのセーラー服みたいな服に、白色のミニスカート。 首には、白色の蝶ネクタイ風ネックウオーマー。

アプリ、アニメ、漫画版と共通している姿だ。

違うとすれば、尻尾がスカートの上から生えて見えるか、中から覗かせているかの違いだろうか。

俺が見ているのは、後者。 アニメもこっちだったかな。

漫画版だとスカートの上から生えていたんだが……気にしない。 どちらにせよ可愛い。

強いて言うと、中からの方が好きかも知れない。 なんか……えっちな感じもあるから。

アプリとアニメの性格は、内気な部分は似ている。 前者はボクっ娘で、言葉がたどたどしい。 後者はダラダラ娘。 共通しているのはゲーム好き。

さて。 この共通点から「可愛いモフモフ生物」だと偏見を持って、漫画版に行くと衝撃を受ける。

見た目が同じでも世代が違えば、性格も違うのだろう。そんな光景に直面だ。

取り敢えず、キタキツネをフレンズ用の食料がある建物……今は果物のみ残っている冷蔵庫の前に呼び出すのは成功した。

肉まんだけ全部パクられて、果物が残っているのは、漫画版と同じである。

へ？ 「肉」まん？

ジャパリまん じゃなくて？

残念ながら、漫画版の通り 肉まんである。そのまま、大衆が知るソレである。

一応ね、フレンズ用の食べ物……恐らくジャパリまん……開発中らしいんだけどね。今は「肉まん」なのよね。

それはそうと、問題はココからだった。肉は大丈夫なのかよという議論は置いておく。

「あのお、キタキツネ？ 俺、臨時職員だけどき。 仮にも担当だから、言う事聞いて？」

「いやよ。 私たちを管理する仕事なんて、いらないわ」

真っ直ぐな眼差しで、キツパリ言い切るキツネさま。

口調に違和感あるって？

なんだか、文明的で難しい言葉が混ざっているって？

そうだとしても、それが漫画版の子。して、第1世代キタキツネなのだ。

な？ 性格全然違うじゃん？

内気要素ないじゃん？

ボクっ娘じゃないじゃん？

俺は慣れたけども。

ああさて。

フレンズは、みんな自由に生きている。

管理されるなんて、真まつ平びら御免ごめん。気持ちには分かる。俺だって、自由気ままに生き

たいさ。

だが、現パークは通常運営されている。お客さんも大勢いる。その中では、やつ

て良い事悪い事がある。それを教えねばならない。

だがなあ……こんな風に反発されては、ままならん。

菜々風に言えば、女王さま。或いはワガママガール。

傍観しているぶんには、そんな被害はなかったが、こうして対応しなければならぬ

と、結構シンドい。

見た目が可愛い反面、こういうところでイラツときてしまう。

まさか、菜々の苦労を実体験させられるとはな……して、前任者が俺になるとは。

何故、臨時職員にフレンズの代理飼育員を頼むのか。管理センターは、何も思わな

いのだろうか。

何にせよ、任されてしまった仕事。説教もしなければならぬ。

「肉まん寄越せつて言うけどさ。その肉まんを勝手に持ち出しているよね。そ

れ、泥棒だからね。何度も言ってきたけど駄目だからね」

「弱肉強食の世界に生きてるのよ。何が悪いの？」

さも当然だ正論だと、堂々と冷たく言い放つキタキツネ。

そりゃあ、自然界の……けもの時代はそうだったかも知れないけどさ。

フレンズが弱肉強食とかいっちゃうと、違和感があるのよね。

フレンズは他のフレンズを襲ったりしない。捕食、被捕食の関係はなくなる。

代わりに飼育員さんが決められたゴハンをあげる。もちろん、量も決まっている。

健康管理や治安維持の側面からも、それは双方理解して妥協して欲しい。

じゃないとね。俺ちゃん、管理センターやミライに怒られるの。

最近は、どこで情報を仕入れたのか、カコにすらメール越しに怒られた。泣けるぜ。

「ちよ、ちよつと！　泣くことないでしょ。　たかが　肉まん　くらいで」

アワワと、慌てるキタキツネ。　どうやら、本当に涙が流れていたようだ。　情けない。

いや、しかし。　女王さまの困った顔とは中々にレアである。

男の泣き落としなんて、キモいと唾棄^だされて仕方ないが、キタキツネは芯は良い子なのだ。

漫画版を見た身としては、何となく分かる。　ココは利用させて貰う。

俺は、その場でオーバリアクション。　泣き崩れて床に伏せて見せる。

通りすがりの他飼育員には苦笑されたが、目前のキタキツネは動揺^{どうよう}。　よしよし。

「よよよ。　これ以上、ドロボーされるとね」

「されると……な、なによ！」

「俺は他のヒトに、首を切られるかも知れないんだ！」

「えっ………そ、そんな」

サア………つと、キタキツネが青ざめる。 ついでに身体が小刻みに震え始めた。
うん。 わかりやすく可愛い。

首とはヒトに限らず、多くの けもの にとつても急所。 それをやられる意味。
けもの であるフレンズも理解し……いや。 ヒト以上に重要性を認識していると
見る。

弱肉強食の世界を唱ったキタキツネだ。 尚更だろう。

まあ、首を切られるというのは物理的な意味ではない。 キタキツネの飼育担当から
弾かれるというコトである。

日本語って難しいね？

キタキツネが理解し切れてなくて、助かったよ。 クククツ。

「ご、ごめんなさい……2度としないから。 そうしたら、あんじゅ、助かる？」

嗚呼。 今度はキタキツネまで涙目に。

狐耳はしゅん、と垂れ下がり、視線も下向きに。

両手はミニスカートを抑えつけるようにして、プルプルしている。

キツネさんを虐めてるワケじゃないよ？
でも、ちよつとは懲りたか。この辺にしておこう。

「もう2度としないね？」

「し、しない！」

「約束出来るかな？」

「できる！」

「よし。それなら、俺は助かるよ」

そこまで言うのと、ほつと息をつくキタキツネ。

何だろうか。微笑ましく感じた。

親の気持ちって、こうなのかな？

俺は、親じゃないけどさ。

ふと、カコの両親とカコが脳裏に浮かぶ。

初老となった夫妻であるが、本土を出る直前の見送りでもイチヤついてた。
羨ましくなんか、ないんだからね！

俺だって、カコと……カコと、そうなるのか？

今は関係ないな。

雑念を振り払い、現実に戻る。目の前のキタキツネはとつくに立ち直り、俺を見て首を傾げていた。可愛い。

「どうしたの？ うんうん唸ってたけど」

「いや。昔と今と、ヒトについて少し考えてた」

「なによ、それ。変なの」

今度はケラケラ笑われた。喜怒哀楽の表情が豊かで良いね。癒されるよ。

きつと、その分、悩みもないんだろうな。羨ましい。

だからって、その輝きを壊そうとは思わない。寧ろ、守りたい。

だってそれが、俺の癒しだから。

「でも、あんじゅの部屋の食べ物なら良いでしょ？」

「だーめ」

「けちー！」

こんな、些細ささいかも知れないやり取りの日々も、
いつか、壊れる。

でも、もう少し持たせたいな。
けれども。

それは恐らく、別の命題めいだいだ。

知り合いの新人飼育員

漫画版の主人公、菜々。

新人飼育員として、頑張る子。

サーバルとキタキツネを担当し、主にキタキツネに振り回される。

ふたり だけでなく、他のフレンズとも絡むのだが今は割愛。

俺にとっては幼少の頃に出会い、今に至るまで、連絡が途切れる事なく友好的な関係を保ってきたヒトでもある。

中々、こういうのってないんじゃない？

大体は小中高の知り合いの殆どは進路が違えば話す事もなく、大半は自然分裂。

どこでナニやってんだか分からないんじゃないだろうか。 少なくとも俺はそう

だった。 前世でも今世でも。

ああ、俺が単にポッチだったのもあんだけど……これ以上は心が抉れるのでやめておく。 これは あくまで個人の話だ。

さて。 そんな感じで数少ないヒトの知り合いである菜々。

いよいよジャパリパークに上陸すると連絡が入った。

そこで、ミライと共に港へお出迎え。アニメに出てきた日の出港よりずっと大きい、物資の搬入にも使われる場所へ移動中。

移動は例によってジープ。

舗装路が増えて本土で走る軽自動車等、一般車も見受けられ始めたジャパリパークだが、現場職はこの手が多い様子。職種によるけれど。

まあ、この話は置いておこう。それより菜々だ。

嗚呼。

いよいよ漫画版らしくなってきたというべきか。

して、俺はキタキツネの担当から外される。後は任せたよ菜々。パイセンは別の場所に飛ばされるんだ。

決して、面倒ごとを後輩に押し付けてズラかるわけじゃない。元々の予定だ。

クレームは受け付けません。キツネのクリーニングオフは効かないんでヨロ。

「知り合いの方なんですネ？」

隣で運転するミライが言う。

いつもの探検服に、いつもの羽根付き帽子。受ける風で靡く、艶のあるエメラルド

グリーンの髪。

相変わらず横顔も美人です。　けもの　語りで大興奮して、ヨダレを振り撒かなきゃ尚良し。

「言っていないっけ」

「聞いてませんよー」

ああ。　　そういうえば、菜々と知り合いなのは、誰にも言っていなかったな。

学生の頃、ミライとカコが一緒にいる事はあれど、菜々との組み合わせはなかったし。別に支障はない。　　寧ろ、将来への影響等を考えると俺は障害かも知れない。

その意味では、迎えない行かない方が良かった気さえしてくる。

その思考を察してか否か。　　ミライは言葉が続けた。

「でも、杏樹さんがいてくれれば、緊張も解れて良いと思います」

「そうかな」

「そうですよ。　　私がそうだったんですから」

ふふつ、と微笑むミライ。
あかん。 ドキツとした。

「ま、まあ？ 初日だし、多少の緊張感を持つて貰わないと困るけど！」

「いろいろ教えてあげて下さいね」

「もちろん！ 特にキツネさまは、大変だからな！」

嬉しいような、恥ずかしいような。

そんな、くすぐったい気持ちがかみ上げる。

昂ぶる感情。

顔が、熱い。

ソレを誤魔化すように、声が高くなって、それが滑稽なのか笑みを深くするミライ。
くつ。 更に熱くなった気がする。

こんな時、オープンカーで良かったと思えるよ。 前から受ける風が熱冷ましになる

……気がする。

だから、前を向き直ると。

「おっ」

ちようど、港が見えてきた。

大きく立派な船が、埠頭ふと頭に横付けされているのがハッキリ見える。

錆びや剥げている部分はなく、艶のある船体だ。側面窓も多い。その分、たくさんのヒトを乗せられるのだろう。

この場合、多くのヒトとはパーク職員や作業員を乗せていると思われる。

この港は、お客さん用じゃないからね。

とはいえ。側面にはジャパリパークのロゴである、馴染みの「の」の字が大きく描かれている。

菜々は、アレに乗ってきたのかな。

「見えてきましたよ！」

「ああ。今日も活気があるね」

港には、他にも様々な光景がある。

別の船で来たであろう、大きなコンテナの山とか。

オレンジ色の専用クレーンがそれらを運び、下方ではチカラがあるフレンズ……ゾウと思われる子が、機械なしじゃ無理そうな巨大な木箱を素手で仕分け中。

違うところでは、黄色ヘルメットの作業員が梯子をコンテナに掛けていている傍らで、ネコ科のフレンズと思われる子が、ヒョイツとひとつ飛びでコンテナに乗った。

ヒトがトラックやトレーラー、フォークリフト等の乗り物や道具類を使う中、フレンズは己の能力である程度できる。

その対比が、港に限らず、様々な場所で見れたり……見れなかつたり。

やはり、フレンズはスゴいんだなあと改めて感じるね。

ヒトの姿で、それらをこなしている光景は、多くの可能性と不思議を感じずにはいられない。

して、ヒトとフレンズが入り乱れつつ笑い合う光景は、パークだからこそ。

加えて、運営中だからこそか。

後どれくらい、この光景を見られる猶予があるのだろうか。

「いかん。今を見なくちゃ」

ボソリと小さく独り言。

それは、流れていく風と光景に掻き消されて、ミライに届く事はなかった。

「ああ！ 杏樹あんじゆさん！ フレンズさんが いっぱい いますよ！ 私、幸せですっ」

本人はトリップしてるから。グヘヘ、とヨダレを垂らして、余所見よそみ運転うんてん中。普通に危ない。

「ちゃんと前見て集中して運転して、お願い!？」

「はっ!? 失礼しました!」

我に帰り、ハンドルを握り直すミライ。

彼女がガイドする時は、運転は別の手にして貰った方が良いよね。 違いない。

あつ、俺は駄目ね。 運転苦手なんで。

「ふう」

俺も気持ちを入れ替える。未来の事は分からないけど、悩んでも仕方ない。今は今。菜々を迎えに行く事に集中だ。

「せんばーい！　　杏樹せんばーい！」

人員用導線の傍らに停車、そこからの降車直後。

新規入場者教育を受けるべく、多くの者が担当者と合流する人混みの中。

懐かしくも明るい声が聞こえる。視線を送れば、片手を上げて駆け寄ってくる女の子の姿が。

嗚呼。

ようやく。

ようやく、パークで会えたね。

俺は新たな仲間を歓迎すると共に感動し、莞爾として迎え入れる。

「久しぶり、菜々なな」

「はい！　久しぶりですっ！」

新人飼育員しんじんしいくいんにして漫画版主人公まんがばんしゅじんこう。
菜々ななちゃんだ。

綺麗なピンク髪。左側にサイドテール。幼さが残る顔立ちと笑顔は、いつか無邪気に神社まで駆けた日を思い出させてくれる。

既に支給されたのか。飼育員の制服である、肩部分と背中に「の」の字のロゴ入りモスグリーンジャケットをTシャツの上から羽織る。

して、漫画版の通り短パンとスニーカーの動きやすい格好ときた。

いや、現在において問題がある訳じゃない。温かいからね。

今は。

この格好……休日でも冬場でも変わらない。だから将来、風邪を引いたりチーターに「変わってる」みたいな事を言われるんじゃないだろうか。

いや、今は関係ないな。素直に再会した事を喜ぼうぞ。

「菜々さん、おはようございます！」

「あつ、えつと！　ガイドさん、おはようございます！　ご指導お願いします！」

隣にいるミライを確認すると、ペコリとお辞儀。　ひたむきな姿勢で挨拶をする

菜々。

宜しい。　初めの挨拶は大事だからね。

漫画版的には、察かどつかの建物で挨拶を交わしていたが、俺の影響か。

このように港での挨拶となった。　別にこれくらいで未来は変わらないと思うので
気にしない。

「ふふつ、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

「そうそう。　フレンズと仲良くする上でも、柔らかな感じが良いよ。　少なくとも、

今は俺もいるし大丈夫」

何が大丈夫なのか分からないが、そう言っておく。

アレだ。　努力差の劣等感れっとうかんから、せめて先輩としての矜持きやうじを持つての発言。

それと、安心させたいという気持ちから。

「はい。分かりました！」

それが伝わったのか。菜々はニコリと笑みを返してくれた。

相変わらず、明るい笑顔。その笑みで、俺のドロドロした不安や煩惱ぼんのうが浄化されて

いくよ……。

こんな先輩で ごめん。

「ええっ!?　なんで泣くの!?!」

「え?　ああ、ごめん。良い天気だからね、陽が眩しくて」

嘘である。少女に泣かされたのだ。

前にも似たやり取りがあったなあ。うろ覚えだけど。

こんな幼稚ようちな誤魔化し。ミライには効かなかったのか否か、優しく話を合わせられる。

ああ、うん。

たぶん、バレてる。チラツと見られては、微笑みを浮かべたから。

だけど、言葉にして突っ込まない優しき。オトナです。これは沁みますね……。

「確かに、良い天気ですね。パークライフの始まりには素晴らしい日です!」

「はい! 頑張りますっ」

良い返事である。俺も、手伝える事は手伝ってあげよう。可愛い後輩の為だ。
して、菜々にもパーク職員ライフを楽しんで頂こう。

「気張らなくて良いからね。楽しむと良いサ」

ワガママなキツネさまとか、女王さまなチーターとか、ボケまくるアフリカゾウとか、アライさんの人生相談とかに対応していくのだろうな。

ああ、漫画版であった、それら光景のどれか見てみたい。

マーゲイとリカオンのキーキ屋さんも行きたい。コンビニでタイリクオオカミお姉さまにも会いたい。コアラがアルバイトしている光景を見たい。でもパップは勘弁。^{かんべん}

思えばキリがなさそうである。

ネガティブな思考ばかりだったけど、何も暗い未来ばかりではない。確かにパークには輝きがあつて、みんなが生き生きとしているのだ。俺も、楽しむ時は楽しむか。

「では、りよう察にご案内します」

明るい、ミライの声が。

おっと。すてき素敵な出発の時間だ。

きびす踵を返して車に乗ろうとして――

「なあ、ミライ」

生まれた疑問をぎもんぶつけてみる。

「これ、3人乗れるよな」

「はい。大丈夫ですよ」

定員の意味じゃなくてだね。

言い辛い、いちおう 言っておこう。

「密着する、けど」

もごもごと、訴えてみた。

このタイプ、後部座席がない。

つまり横一列に並んで座る。運転手、真ん中、助手席だ。

だがしかし。そんなに ゆったりスペースはない。本土で走る一般車のような快適さは、そんなに ないのだ。

「大丈夫です。 ゆっくり、安全運転で進みますよ！」

違う、そうじゃない。 振り落とされるとか、そういう心配ではない。

「あー、いや。 その」

「大丈夫です先輩！ 私狭くても気にしませんから！」

菜々が笑顔で言う。

思考が1番近いようで、違う。

ああ、うん。笑顔を見ていたら、それで良いかと思えてきた。

して、俺の心が如何いかに汚かれているか良く分かったよ。 よよよ。

「そうか、良かったよ。 じゃミライ、運転よろ。 余よそ所みげん見せん厳禁で」

「はい！ 任せて下さい！」

して。 真ん中に菜々を挟んでの寮への道中となったワケだが。

ミライがレンズに気を取られて、車体が揺れ、その都度に菜々の体温や柔らかさを服越しに感じる羽目になる。

慌てる俺と反面、ふたりは レンズに興奮してキヤーキヤー笑顔を振りまいた。

変に気にしている俺が、逆に馬鹿に思えてくる程に。

まあ、うん。良いか。

俺もフレンズ好きだし。

2人には、笑顔が似合うから。

都市部と真面目な まんまる耳

キタキツネの担当を菜々に任せ、俺は別命あるまで休暇となった。
やっただぜ。

菜々と共に、キタキツネの世話をするのも考えたけど……。

僕は疲れたよ、ナナラツシユ。

偶には休みたいのよ。

開園前から、あつちこつち行かされて自由時間がなかったんだ。

ようやつと手にした休暇。 転生者ならではの、主人公に随伴して手助けするコマンドなんて期待しないでくれたまえ。

ぶつちやけ。 何かあっても、キタキツネや周りのフレンドズが自力で何とかするの
で。

そこに俺という異物が混入して、逆効果になつても嫌だし。

とはいえ。 せっかく、第1世代の漫画版にいるのだ。

ヒトとフレンドズが入り混じり、笑い合う尊い光景を、輝きを見ていこう。

将来の不安はあれど、現状、妙案が浮かばない。

取り敢えず都市部でもフラつこうかしら。

ジャパリパークにも本土みたいな都市機能を持つ区画があるからね。

車が走って、ビルが建ち並ぶ。そこに多くの営利団体やヒト、フレレンズが入り混じる。

観光要素はないけれど、ヒトとフレレンズと一緒に生活するとなると……こうなるんだろ。うなあって思える光景があるのだ。

アプリやアニメから入ると、驚くコマである。

漫画版ではキタキツネの社会勉強で都市部が出てきたかな。当初は驚いた。

「都市部、といえば」

コンビニ、ケーキ屋。漫画で出てきたスポットが浮かんだ。

本土においては珍しくもなんともなく、パーク内の売り物も大きな違いはない。

一応、「ジャパリなんとか」という言い回しの商品が見受けられるが、本土でも味わえるモノが大半。

わざわざパークで買う程じゃないだろう。

だがしかし！ 店員はフレレンズだったりするのだ！

社会勉強やフレンズとヒトが共存する上での試験的な取り組みの一環である。

もちろん、危険や事故がないよう、十分な教養を施されたフレンズが主に採用されている……はず。

はず、というのとは。

漫画版において、パップの詰め合わせを売るコアラがいるからだ。

もし、コンビニに行つてコアラがいて、勧められても全力で断りにいこう。

だつて、ねえ？

アレはアレだからね。離乳食以前の問題だよねえ？

けもの 大好きなミライだつて、パップネタには慌てるんだ。いくら彼女でも、そ

の辺は断るだろう。

………断る、よね？

まあ、とにかく。フレンズが接客しているのだ！

尊い事に違いはあるまい？

「ふっふっふー。場所は分からないけど、適当にフラつただけで充分だろ！」

そうして、試験解放区の都市部へと歩む俺。

一応、寮も区画内に組み込まれてたりする。

一步、小さな玄関から出た瞬間。

広がるは、フレンズやヒトが住む一軒家やアパート等の住宅地。 居住区だ。

ガードレールに信号機。

舗装された道路と歩道。

そこを走る一般車両。

歩道には買い物物に向かう主婦らしきヒトと、獣耳と尻尾を生やした……イヌ科のフレンズが、すれ違う際に会釈えしゃく。

尊い。 萌えすらある。

その足先は、更なる文明群に通ず。

研究、飼育を目的とするジャパリパーク・サファリ区分。

その内の試験解放区しけんかいほうく。

ヒトとフレンズが共存する場所が、パークに、漫画版に、そして目の前に。

文明をフレンズに触れさせ、与え、その上での結果を模索する、自由な試験場。

本当に動物園かよと疑わずにはいられない、そんな場所。

だけど、様々な可能性が見えてくる場所。
そんな都市部へ、いざ行かん！

まんまるの、大きな おみみ。 白いシャツ。

黒と白のまだら模様のインナーを、腕より覗かせ、首下に黒いリボン。
駆ける上で機能美溢れそうな短パンは、ボーイッシュな印象を与える。

お尻から生

える しつぽは、フサフサしていて毛並みが良い。

アニメにも出てきた、我らが後輩。

して、漫画版ではケーキ屋の店員であるフレンズ。

そんな可愛い子が今、目の前にッ！

「いらっしやいませ。ご注文をどうぞ」

「fooooooooooooo!」

リカオンに、出逢えたあ！

嗚呼。 感涙不可避。

まさか散策していたら、偶然にも漫画版に出てきた「ジャパリケーキ」なるケーキ屋に辿り着き、リカオンにも会えるとは！

なんとという僥倖！

感謝ッ！ 圧倒的感謝……………ッ!!

「えーと。 お客さま？」

「ごめん。 俺、リカオンのフレンズに会うのは初めてでさ。 嬉しくて」

「は、はあ。 ありがとうございます？」

困惑するリカオンに対し、カウンター越しに俺は尚も感涙が止まらない。 滂沱。

営業妨害なのは分かっている。 俺が変人なのも理解している。 だけど、嬉しいの

だ。 出逢えた奇跡の眩しさに抗えない。

この島は地形や文明の度合いに関係なく、ヒトに感動を与えてくれる！

第1世代のリカオンも、真面目な子なのだろう。 口調は物腰柔らかで、少し違うか

など思わせる部分はあるけれど。

それから、なぜケーキ屋の店員をやっているのか分からないが。

まあ、そこまで干渉はしない。

それぞれの道である。妨害はしたくない。

あ。営業妨害だったわ。

「……落ち着いた。この、ショートケーキをひとつ下さい」

「分かりました」

注文は、ちゃんとする。騒ぐだけ騒いで、店を出るのはマジで妨害以外でもなんでもなくなってしまう。

動物園ではあるが、その前にケーキ屋である。して、彼……じゃなくて彼女は店員

さんだ。

オーダーを受けたりカオン。

俺の奇行には突っ込まず、通報もしないで仕事に取り掛かる。うん。ありがとう

う。

手慣れた動作で、一切れのケーキを専用トングで優しく摘み……お客さん用の、小注

文用の長方形の白い箱に入れて、袋に入れていく。

その何気ない、本土でも見かける動作。

それが何故か、とても凄い。 凄くない？

フレンズが、こうも「接客」して「道具」を使っている。

コレが如何に大変で、スゴい事か。

生まれた時から言葉を話し、二足歩行が可能という不思議な子たちであるが、読み書きは出来ない。

道具の用途も理解していない事が多い。

だがしかし。 覚えてしまえば、ヒトとの差異はない。

アニメで、その手の描写は多かったな。

タイリクオオカミが「ペン」を「手で持つて」「紙」に漫画を描いていたし、キタキツネは「ゲーム」をしていた。

サーバルは「紙飛行機」を「投げた」ワケで。

違うのは、カップをお客さんの前ではなく、一点に集中して置いたり、椅子に座る時はスカートの内側に入れないで、そのまま座っちゃったりかな。

1世代は、はつきり文明に触れさせて教えている様子。 受け答えや動作もヒト基準な気がする。

うむ。多くの不思議と可能性。

少し野生や幼さがなくて残念、とも言うべきか？

「お待たせしました——大丈夫ですか？」

「へ？ ああ、ごめん」

考察している間に、注文品が目の前に。あかん。これ以上は迷惑かけられない。

お金……ここでは日本円を渡して、商品を受け取る。

ちよつとりカオンの手が触れた。ドキドキした。

女の子との経験なんて、ないからね。感動と嫌われないかの不安が湧いてくる。

チラツ。

可愛い顔を見た。特に問題なさそうだ。可愛らしく首を傾けているから。

いや、問題はあった。萌え死ぬ危険が出てきたぞ。

心のミライは制御しているつもりだが、あまりいると理性が飛ぶ。して、物理的に

も社会的にも死ぬ。

下手すると、怒ったりカオンに生きてまま喰われるかも知れない。

どんと、いっつと、さみい。

ミライならプリーズか。いや、言い過ぎた。

何にせよ避けたい。もう少しリカオンを眺めていたいけど、この辺にしておこう。敵は多いんだ。管理センターとかミライとかカコとか。

因みに。通貨は、ジャパリコインじゃなくて円なんだよね。漫画版にて、コンビニの時にそんなセリフがあった。

観光地の方では使われている様子だけでも。

「あ、それと」

疑問をボカして聞いてみよう。

もうひとりフレンズが、働いている筈なんだけど。

「他に、フレンズがいないかな？」

具体的にはマーゲイが。

アニメではアイドルオタクな感じだったが、第1世代はクールで真面目な印象。だけれど、百合好きな面が。いや、良いんですよ。俺も嫌いじゃないわ！

「います、今日は非番ひばんなんです」

「……そうですか」

残念。

また時間が出来たら、覗いてみよう。

あまり シツコイと、いよいよ通報ものだからね。

「その。失礼ですが、パーク職員さんでいらつしやいます?」

ここでリカオンから声が。

おお。これは仲良くなれるチャンスじゃね?

妄想脳がドツタンバツタン大騒ぎ。これを逃す手はない。

「如何いかにも。俺はパーク職員だよ。臨時りんじだけど」

「お名前を聞いても良いですか?」

「杏樹。あんずの樹木で、あんじゅ」

女みたいな名前だろ。でも男です。リカオンは男の子みたいだけど、女の子みたいな感じに。

そう考えると、接点あるよね！

「あんじゅさん。分かりました」

頷くと、内側へと戻っていくリカオン。

おっ。なんかくれるのかな？

連絡先とか？

どうしよう。仲良くなって、菜々みみたいに「せんぱーい！」とか言ってくれるような従者と主人の関係になったら。グヘヘ。

「——もしもし。管理センターですか？ リカオンです。杏樹と名乗る職員が、お店に来まして」

思わず店から飛び出した。

あかん。通報されてるう！

判断は一瞬。行動は迅速しんそくに。

俺はケーキ屋から、ダツシユで離れた。色々手遅れだった。

ワツパをくれそうだよ。主人じゃなくて、犯罪人扱いだよ。被害者と加害者みた

いになってるよ！

その後。名前が割れているので、直ぐ俺に連絡が。

管理センターに、めっちゃ怒られた。

カコにも、どこで情報を得ているのか、メール越しに怒られた。

俺は泣く泣くりカオンに謝りに行き、許しを得たのと、誤解を解く。

一応望んだ形というか……連絡先の交換も行えたのは良かったが。

はあ……………。

今回、俺が悪かったよ、確かに。以後、気をつけようと思う。

だけど。 1番腑に落ちないのが、

「杏樹さん。 フレンズさんは、私も好きです。 けれど、迷惑をかけちゃ駄目ですよ」

ミライよ。

お前には言われなくなかった。

☆サーバルとコアラの体力測定

ヒトの姿でありながらも、元の けもの の魅力や特徴を受け継ぐアニマルガールことフレンズ。

その身体能力は、けもの の頃よりも飛躍しており、ヒトを凌駕して余りある。 皆が皆ではないけれど。

アニメでいうと、サーバルがバスの運転席を持ち上げていたね。

トキは、かばんちゃんを持って空を飛んだ。

ビーバーとプリーリーは、協力して立派なログハウスを建てた。

様々な可能性や不思議、有用性と危険性を孕む数々の能力。

今現在、フレンズとヒトで大きな摩擦は聞かないけれど、将来は分からない。

だけどフレンズは、その名の通り、決して悪い子ではない。 良い子たちだ。

雲の上のヒトたちも、そうなのだろう。 だからこそ、来園者との接触は許可されて

いるし、互いに手を取り合うし、笑い合う。 そこに嘘偽りは無い。

菜々が漫画で言っていた。

フレンズは、ヒトと動物の架け橋になるような、そんな存在だと。

そう、思っているそうさ。

俺も、そう思う。

前世より想いは強い。

パークに来て、目の前で見たから。

その温もりに触れたから。

信じるな、という方が無理だ。

ともだち であり。

守るべき こども たち であり。

希望と輝きだ。

それでもヒトとは、心のどこかで恐れているのかも知れない。

その裏に隠れる、陰の存在を。

そうでなくても、根掘り葉掘り調べたいという無邪気な好奇心。

分からないものを理解したいという欲求。

歩き方を知らず、走り続けた先にあるもの。それは希望か絶望か。

明日行う予定の体力測定も、健康状況の確認以外に別の意味での……つまり、データ収集が含まれているのは違う。

これらは妄想だ。 だけど、全くとを得ていない訳じゃあるまいて。

何にせよ、ぼちぼち起こりうる事件への対策を考えねば。

放っておいてもセントラル事件は、園長たちが何とかするだろうけれど。

「カコが悲しむのはさ、見たくない」

非力なヒトに、俺に出来る事。

ある筈だ。

そして。

何回だって、誰かを救えるはずだ。

サーバルとコアラ、キタキツネの体力測定日。

立ち会うヒトは俺と菜々、ミライの3人。

測定場所はココ。

低木が生え、黄金色の草が広がる雄大な大地。
サバンナちほー。

いつか遠い未来にて、かばんちゃん始まりの地となるのだろうか。
そんな感じに、青空の下でポケーと考える俺だが、ミライの声で我に帰る。

「昨日言ったとおり、今日は体力測定をします」

「やったー!!」

元気で明るい声が響いた。

側にいる第1世代サーバルだ。

その明るさで、元気が少し湧いてくる。アニメでもそうだったが、前世で何度励まされた事か。

「けものフレンズ」のヒロイン枠であるサーバル。

胸元は白色で、腕のロング手袋やスカート部分は黄色に黒色の斑点。少し短めの尻尾は黄色と黒の縞々。

服装は同じハズなんだけど……色合いというか、髪の毛の長さか。少しアニメと雰囲気が違うかな。

性格は大凡共通で、天真爛漫って感じなんだけどね。

本当は、主役に出会えた奇跡に感謝感謝の雨霰の涙が出て良いんだけどさ。今は別の涙が出そうだよ。

「サーバル」

「え？ なになにに、あんじゅ？」

「危ない時は、無理しちゃ駄目だからね。ヒトに、パーク職員に助けを求める事も忘れないで」

「急にどうしたの？」

「どうしました？」

「先輩？」「杏樹さん？」

サーバルのみならず、エプロン姿のコアラ、馴染みの菜々とミライにも首を傾げられた。

いや、本当にどうしたんだろうね。

ただ、言いようもない不安な気持ちを抑えたかっただけかも知れないな。朝は余計にそう思わせるから。

未来は漠然として、見えるようで見えない。その始まりを切る朝日は不安にさせるんだ。

それは暗い夜道を一人で歩くのに似ている。先が見えない。そこに何かあるかも知れない。誰かいるかも知れない。

恐怖だ。大抵は悪い方向に考えてしまう。

そういえば、第1世代のサーバルや、他の子は、どういう理由で交代したんだろう。寿命か、セルリアンに捕食されたか。もし後者ならば……もし、その場にいたら、救えると良いな。

「いや。たださ、セルリアンが出るかも知れないから」

「大丈夫！　自慢の爪でやつつけちゃうんだから！　あんじゅも、ミライさんも菜々ちゃんもコアアラちゃんも。みんな私が守ってあげる！」

サーバルらしい、元気な解決法。なにより、その笑顔が1番の抗うつ剤。唢然な気持ちなんて、どこかに飛ばしてくれる。

「杏樹さん、大丈夫ですよ。何があっても、私たちがサポートします」

「そうです！ 先輩は構えていれば良いんです！」

ありがとう。 ミライ、菜々。

こんな先輩を励ましてくれて。

「わ、私もお手伝いしますよ。 ケガしたらパップを差し上げます」

ありがとう。 コアラ。

気持ちだけ受け取る。

「みんな、ありがとう。 改めて測定をしていこうか」

「おー！」

俺は幸せ者だなあ。 こんなにも、素敵な ともだち に囲まれていたんだもの。

前世では、ぼっちの拳句に労働中に死んでしまったけれど。

冷たく抛り所のない心は、今や温かく包み込まれている。

とりま、そんな素敵な仲間たちと仕事をしよう。

手遅れだけど、先輩として振る舞うべく菜々に指示を出した。

「菜々、点呼よろ」

「はい点呼とるよ！ サーバル！」

「はいはい！」

「コアラ」

「はい」

「キタキツネ！ キタキツネ？」

「お出かけするって！ 3日くらい」

「……また勝手なことを」

うん。 どうやら漫画版の通り、キタキツネは欠席の様子。知ってた。 最初から見当たらなかった時点で。

「仕方ないですね。 お二人だけということ」

「……監督不行届で、ほんとにごめんなさい」

落ち込む担当の菜々。対して怒らず、笑顔で進行を促すミライ。

俺も前世で、こんな上司と部下の関係が欲しかった。

いや、過去を悔やんでも仕方ないけれど。今は今である。

「うーん。私が来る前は泥棒癖が直ったと聞くけど……この辺を　しつかり教育しなきやダメかあ」

菜々がボヤいた。

はて。漫画版の通りなら、食料泥棒は菜々が担当になっても、何度かやらかしている筈なんだけど。

「キタキツネは、もう泥棒してないの?」

「え?　はい。私が担当になってからは、やってません」

ありや。俺の影響だろうか。良い傾向であるけれど。

俺、なんか　したっけ?

「前任者である杏樹さんの教育が良かったんですよ」

ミライが褒める。素直に嬉しいけれど、要因がハッキリしないので微妙。

「うーん？　キタキツネはワガママだからなあ……俺が何かしたくらいじゃ、変わらないと思っただけけれど」

「変わってますよ。小さな事かもしれませんが、この調子で　いきましょう」

「私も先輩を見習って、立派な飼育員になりますっ」

「いや。俺、臨時職員だから。飼育員じゃないから」

反射的に否定してしまう。

特に立派という言葉は、俺には合わない。

利益不利益、自己満足や遊びで活動している部分がある。後ろめたい。そんな俺の心境を察してか。ミライが　はつきりと褒めてきた。

「でも、その時は臨時でも飼育員です。そして、短期間でフレন্ズの教育を行い、良い結果が出た。専属ではないのにも関わらず、これは大きな成果です。管理セン

タースタッフの皆さんも褒めてましたよ」

「そうですよー！」

「そ、そうか」

俺の行いは、そんなに良かったのか？

なんだか、褒められて恥ずかしい。

「あー、ほらほら！ 測定時間がなくなるぞ！ 　　まず最初は何やるんだ？」

「あんじゅー、照れてるの？」

「照れてますねえ」

サーバルとコアラがニヤニヤ。片手を口に当てて、少し目を細めて見てくる。

ええい。オトナを揶揄うんじゃない！

ああ、でも。

揶つたくも懐かしい。悪くない気分だ。

尊く、だけど手を伸ばせばそこにある。郷愁にも似た何かで、けれど　しつかり

存在するもの。

「サーバルちゃん、なんだなって」

ボソツと。とても小さな声が出た。

でも、耳の良い サーバルだ。俺の声に、大きな縦長の けもの耳をピクツと動かして反応してきた。

「呼んだー?」

「何でもないよ。じゃ、1キロ走から やろうか」

「わーい! 私、走るの超得意だよ!」

「私、苦手ですう」

誤魔化し成功。これ以上は日が暮れるので回していこうず。

「ミライ、説明よろしく」

そして投げる。立派な職員と褒められた後にコレという。我ながらヒドイ。

けれども、ミライたちは嫌な顔せず対応していく。あかん。浄化されるう。

「分かりました——ここから1キロ先、ゴール地点まで走って下さい」

「えーと」

「私、合図しますから、菜々さんは計測をお願いします」

「はい」

そう言われて、ストップウォッチを渡される菜々。漫画版同様、菜々が計るらしい。

「10秒びったりで止めるって難しいよね」

「私もやりたいですう」

フレンズは相変わらず自由である。して、ストップウォッチの用途を理解している

と見る。

この辺もまた、文明に触れてきた第1世代なんだなあと感じるね。

皆じゃないけどね。菜々に連れ出されるまで森生活だったキタキツネなんて、コンビニを食べ物かと尋ね、菓子パンの袋を「くんくん」したと思ったら、次には袋ごとパ

クつき、菜々が慌てた。野性味溢れる行動だ。

いかん。現実に戻ろう。

そこにはサーバルとコアラの自由さに菜々、困惑中の場面。

うん。微笑ましい。

けれど悔れん。

一応、菜々に注意しておくか。しても、見逃す可能性はあるんだけど。

「菜々。サーバルは超速いと思うぞ。しっかり見ておくように」

スタートして、約34秒で到達したからねサーバル。

ほぼ時速100キロ。わーお（驚愕）。

コアラは5分だったかな。

菜々は2分かそこらで来ると思っていて、目の前を走り抜けたサーバルに気付くのが2、3秒遅れた。

その為、正確に計れていないのだ。

因みに。漫画版の菜々のセリフ的に、一流のマラソン選手ならば3分らしい。

如何にフレンズが凄いか、分かる回であった。

「はい。分かりました」

菜々は笑顔で返答しつつ、1キロ先まで駆けていく。御苦労。して、幼き頃を思い出させてくれる後姿だ。

もう、あの頃に戻れない。寂しい。

あ、でも園長との再会は楽しみだな。きっとまた、彼とは会える気がするんだ。

「それじゃ、準備体操をして待っててね」

「はい」

今は、まあ。目の前に集中さ。

見せてもらおう！

フレンズの身体能力とやらを！

1 キロ走。

雄大なサバンナを、1キロ真つ直ぐ駆けるといふもの。

ヒトにとっては長距離であるが、フレンズにとっては短距離なんだそう。

フレンズ基準が既にある、ということだろう。

だけど、フレンズとヒトの境界線は曖昧だ。どこまでがヒトとして見て、フレンズとして見るのか。

書類上は「特殊動物」とされており、英名風で「アニマルガール」、愛称は「フレンズ」となっているけれど。

その調査や研究資料は少ない。

食性がヒトと同じでも問題ないとか、けもの耳や尻尾は生物学的に繋がってないとか……だけど感触はあり……けものプラズムによって身体が構成されており……あー、空を飛んでいる鳥のフレンズから光の粒子が見えるのはそれで、サンドスターではなく……能力の使用で擦り減り……度が過ぎると けもの に戻り……セルリアンに捕食されると全て……輝きが消えて、けものに戻る……まあ、よく分からん。

馴染みが研究員のカコだから分かるだろオメーとかは勘弁。ぺっ。

学生時代は赤点頭だった俺だ。 理解出来ぬう！

頭がパツカーンしちゃうよ！

そもそも、発見から閉鎖段階に至るまで謎だらけの存在であっただろう子たちだ。

人類の叡智を結集しても、理解の範疇を超えているのではないか。 多少は進展があつたとしてもだ。

……………閑話休題。

とにかく。 謎はあれど「すつごーい！」光景を見れる感動は 揺るぎない。

「よーい」

ミライがスターターピストルを天に上げる。

サーバルが、クラウチングスタートの姿勢。

コアラも真似て……女の子座りに。 ちよつと違う。 でも可愛い。

——ドンツ！

号砲が鳴り響いた瞬間。

「——はあっ、はっはっ」

最初のスタートは、コアラが先。既に辛そうです。

「待てー!」

次に楽しそうな声を上げて、サーバルが地面を蹴った。刹那。

——ズバアアアアアンツ!

「うおっ!?!」

風が巻き起こり、周囲の黄金色の草が軽く横倒しに。

ミライも、帽子を片手で押さえて飛ばないようにする。

コアラを一瞬で追い抜き、あつという間に点になった。

速い。速いよ。風まで感じたよ。

表情は嬉しそう。

そんな光景に、コアラも驚きつつ、健気に走り続ける。偉いぞコアラ。

「ああ！ フレンズさんは素敵ですつ」

ミライ。ヨダレ垂れてるぞ。菜々には見せられないよ。美人が台無しだよ。

まあ、でも。意見には同意する。身体能力だけではない。

頑張る姿や笑顔は素敵なものだ。いつか、俺が忘れていた光景が、また間近で見られる。幸せだよ。

……………。

1キロ走、結果。

サーバル34秒14。

コアラ5分12秒。

うん。注意した意味はあった様だ。

計れた模様。して、コアラは予想通りの結

果である。

だけど完走したのは、偉い。

因みに。サーバルは前回の測定では、35秒だったらしい。漫画版のセリフよ

「……サーバル、凄いですね。危うく見逃すところでしたよ」

「うむ。 どんどん 調べてみよう」

「くたびれたですう」

コアラとの差は、より深いものに。

けれども。 得意な事は違う。 競うものではない。

ありのままの自分で良いんだ。

第2種目

岩山アスレチック。

岩山に赴き、測定。

ゴツゴツした岩山を越えて、帰ってくるまでを計る。

「ガイドさん、これマジですか？」

ヒトだったら体力測定じゃなくてロクククライミングの競技なソレに、菜々が声を高くする。

気持ちは分かる。俺も生で見て、今ビビってるから。

「はい。これがフレンズ標準です」

標準……平均から決めたのだろうか。

コアラみたいに、ヒトかソレ以下の身体能力の子も、中にはいるんだけどな。

「菜々ちゃん、わたしからスタートね」

「うん。ちゃんと計ってるね」

おう。計りたまえ。俺は見ている。

「よーい」

ミライがスターターピストルを再び天に上げる。片耳を塞いで、目を閉じる姿は、どこことなく可愛いお姉さん。

——ドンツ！

「いくぞー！」

号砲と、サーバルの元気な声でハツとした。

いかん。ミライじゃなくて、サーバルを見なきゃ。

前を向けば、既に奥の方に。跳び箱を連続で飛ぶような軽やかさ。そして凄い跳

躍力だ。そして速い。

因みにスカートの中は見れなかった。高低差がそこまで激しく離れていなかったのだ。

いや、そこよりも身体能力を見たいんだけど。本能か。男って悲しい生き物よね。

「ゴール！ 何秒だった？」

何だかんだピョンピョンして、あつという間に戻ってきたよ。サーバル、速いよ！

「58秒……ヒトなら多分、1時間近くかかると思うよ」

「だな。フレンズって、スゲー」

因みにコアラは……。

「ネ、ネバーギブアップですう！」

わあー、と岩山にしがみついて叫ぶコアラがソコにいた。

ネバーギブアップは、決して諦めない姿勢の意味であるが……ここでは永遠に諦めず的の意味か。

取り敢えず、途中棄権。

しかし。ヒトが助けに行くには困難な場所で止まっている。こんな時はどうするの。

それは、菜々とサーバルが答えてくれる。

「途中リタイア。サーバル、助けに行つてあげて」
「はい」

得意なフレンズに助けてもらおう。

この辺、開園準備から感じている事であるが、飼育員さんに限らず、ヒトとフレンズの関係性を感じる場面だ。

見ている、嬉しくなる。自分のことじゃないのに、俺まで助けられたような、そんな気分になるんだ。

「コアアラを助けて落ち着いたら、次に行つてみようか」

まだ種目は続く。次は怪力がみられるぞ。

第3種目

岩なげ。

デカイ大岩を持ち上げて投げて、その距離を計る。言うのは簡単だが……。

「これキツくない？」

ヒトなら、普通は持てない大きさの大岩が、そこにあつた。

俺と菜々、ミライが手を伸ばして周りを囲めるかどうか。

「これもフレンズ標準300キロです」

無理い……。

標準つてなんだろうね。俺は 考えるのを やめた。

「今回は合図なしなので、自分のタイミングで」

呆けている間も、測定は続く。

早速持ち上げようとするサーバルに、ミライが軽く説明。

「あ、それ、すごく助かる」

対して、嬉しそうに言うサーバル。

自分のタイミングでやれる自由とはありがたい。何かに合わせてようとすると、それ

だけ意識を他所に持っていくからね。

そういえば漫画版では、ミライがスタートの仕方の説明の度、注意と称したフェイントスタートをかましていたなあ。

その度にサーバルがズツコケたり、岩山から落ちた気がする。

今回、俺が前半で時間を取ったからか、その辺はナシだった。ちよつと残念。

「ほりゃ」

軽い掛け声で、ひよいつと大岩を両手で持ち上げてしまうサーバル。

華奢な身体と細い腕のどこに、300キロを持ち上げるチカラがあるのか。

本当に300キロあるのかと疑いたくなるほど。

「すい」

「ホントだね」

そして、

「おりゃー！」

その大岩が、サーバルの腕から放たれ、宙を舞い……。

ズドカーンッ！

「すげえっ!？」

地面に接触。轟音と砂埃を辺りにまき散らしながら、僅かに転がった。

本場に300キロあるんだろ？、これは……。

アニメで、サーバルがバスの運転席部分を持ち上げられるのも納得というか。

これ、ゾウの子みたいなの、パワーある子だったらどこまでいくんだろうか。

フレンズって不思議だ。跳躍力のみならず、こんなチカラまで……見た目だけじゃ

全ての能力って分からない。

「16メートルです」

ミライが測定。 16メートルは……フレズ的には、どんくらい凄いのか。 少な
くとも、

「ねえ 菜々ちゃん。 16メートルって すごいのか？」

「ヒト基準だと、明日から怪力女認定かな」

「……ヒトだとね」

ヒト的には、凄まじいチカラだ。 このチカラが平和的に使われる事を願おう……。
セルリアンをぱつかーんする時とかね。

「ふんぎんぎんぎん……ふんぎんぎんぎんぎん」

そしてコアラは……無理そうですね。

「あ、あんまり無理しないでね」

「コアラちゃん、がんばってー!!」

無理をさせ、無理をするなど無理を言う。

「ただ、ココは殺伐世界ではない。社畜のフレンズも……まあ、いないワケじゃないけど、彼女たちには無縁であって欲しい。」

「これくらいなら、持ち上がるです……!」

小さな岩に持ち替えて、ブルブル震えながら、なんとか持ち上げるコアラ。

それを見て、サーバル含む、皆が微笑ましく見守る。

チカラは子供並み。可愛いじゃない。

して、それをバカにしたり、咎めるヒトなんていない。優しい世界がココにある。

「……私、全然だめです」

「大丈夫! 次があるよ!」

漫画版の通り しゅんと、落ち込むコアラ。 対して励ます菜々。

ここまでくると、コアラの身体能力はヒト並みか それ以下。

だけれど、コアラは樹上生活を行う けもの だ。 次の種目は恐らく得意な種目だ
と思い、菜々は言っているのだ。

第4種目

木のぼり。

測定に適した木のある根元に移る。 しっかりとした幹で、新緑が優しい陰を落と
して火照った身体を癒してくれる。

「コアラといえば木のぼり！」

菜々は今度こそ大丈夫だと、我が身のように喜んだ。 可愛い。

けれど、そう上手くは いかぬ。

いざ登ろうと幹を掴んだコアラであるが、つるつると滑り落ちるばかり。

一方でサーバルは、爪でも立てているのか。 どんどん上の方まで登って、あつとい

う間に天辺まで。

「つるつるしていて、登りづらいです」

「むう」

出来ると思っていただけに、難しい顔を浮かべる菜々。

仕方ない。イメージ的には、木登りが得意そうではあるからね。

けもの やヒトにも個体差はある。それはきつと、フレンズにもだ。

フレンズの場合、亜種はいても同一種は稀にしか いないようだが……さておき、得意と思われても出来るとは限らない。

見た目や名前のみでは、得意不得意は判断出来ない。

だから、過剰な期待を掛けて勝手な失望をするのは失礼だ。ところが世の中にはソレをして、口にして相手を傷付けるヒトもいる。前世で、そういう奴がいた。

菜々はそんな子じゃないけれど、予想外に違いはなく。

どう言葉を掛けて良いか考えあぐねているようだ。

そこに、

「ただいまー、っ……あうっ！」

「サーバル！　どうしたの？　大丈夫？」

木から降りてきたサーバル。左足を痛そうに抑えている。この世界線でも足をくじいたか。

漫画版だと、岩山で落ちた時に足をくじいたんだっけ。この世界線では、降りる時にくじいたか。

「あつ。でも全然平気だよ」

心配かけないようにか。本心からか。えへへとサーバルは笑った。

それに反して、見ていて痛々しい。

心が痛むというか、心配する。笑顔が余計にそう思わせる。

いや、本人は本当に大丈夫なのかもしれないけれどもね。

アニメで、崖から落ちてもへっちゃらなワケであるし。

あれ。だとしたら、擦り傷が出来るレベルって、ヒトにとってはヤバいコトなのでは？

いや、でも木の枝に引つかかるとか、そういう次元だろう。
うーん。 フレンズの耐久力もまた、謎である。

「医務室に運んだ方が良いですね」

「……そうですね」

菜々は 左足のロングソックスを脱がしつつ、患部を見て……ミライと話す。

この辺から察せるのは、フレンズは衣類の概念を理解しているという事か。 アニメでは毛皮扱いというか、脱げる事を知らなかったな。

して医務室、というのは。

身近でいうところの、学校や会社で診断や手当を行う部屋であるが、ココでは近隣の施設……：ビジターセンター内にある医務室に運ぶコトかな。

状況が悪いなら、セントラルの けもの病院行き。

だけど、これはヒトの、従来の対応の ひつつ。

さあて。 フレンズ……：コアラの出番、くるか。

チラリ、と見やれば。 予想通り、コアラが ててて、と近寄ってきて……：エプロンのポケットから白くて丸く平らなモノを取り出す。

「ケガですか？　それなら私が直してあげます」

「え？　治すって？」

「コアラ特製パップです」

じゃじゃじゃじゃーん、です。

現るは、特製パップ。フレنزズは、どうやって作っているのか知らないけどさ。

元のけものパップを思うと……受け取りたくない。

だが、それを知らないサーバル。足にパップを当てて塗り込んでくるのを黙って

見ている。俺も見ている。うええ……。

「これを痛いところにぬって……」

おう……知らぬが仏。

「すごい。さすがコアラちゃん、もう全然いたくない！　ありがとう！」

「よかったですう」

うむ。 良かったと思う。 今度は本当に痛くなさそうな、笑顔を浮かべるサーバル。

そして、安心して、合わせて微笑むコアラ。

嗚呼。 コレだよ。 優しい世界は。

決して利益不利益で誰かを助けるのではなく、そして自分の能力を他の誰かの為に使う。

そして助け合う姿。 美しく、尊く清らかだ。

「すごい。 フレンズには傷を癒すような力もあるんですね」

「みたいだね。 聞いてはいたけど、見るのは初めてだよ。 運動能力が高いばかり

が、フレンズの特徴ってわけじゃないんだ」

菜々が言うので、返事をする。

フレンズは、見た目と身体能力の高さに目がいきがちであるけれど、その特殊なスキルは、その子特有であったりする。

ひとつとして同じ子や能力はなく、一方で得意な事は違う。

苦手な事は他の子に助けてもらい、自分に出来る事があれば、それで他の子を助けてあげる。

この気持ちをいつか、俺は忘れていた気がするな。

たくさん助けて貰ったのに、逆に俺ときたら、自分のチカラだけが頼りだと思ひ込み……今の光景と会話で思ひ出したよ。

うんうんと頷いていると、落ち着いたサーバルがコアラに質問をする。

それ以上は いけない。

「ところで、パップって、なにで 出来「コホン！ コホン!!」……ミライさーん、

急にどうしたの。 よく聞こえなかったよ」

「サーバル。 世の中、知らない方が良い事もあるんだよ」

「そ、そうそう！」

慌てる職員一同。 コアラには悪いけど、仕方ないよね。

第2世代と思われるアプリ版でも、パップネタはあるけれど……フレンズになった後の作り方は謎である。

それでも知らない方が良いらしい。 うん。 そつとしておこう。

「さあさあ！　元気になったところで、200キロ走ってみましょう！」

慌てるお姉さんと化したミライ。　そんな姿も見ていて楽しい。

して、最後の種目……長距離走もまた、スケールでかいね。

漫画版では、この辺で切れてるんだけど、見れると思うと嬉しいゾ。

「あらっ？」

ここで、ミライが無線機を手に持つ。　いや、このタイミングでまさか。

して、悪い予想とは当たるもの。

しばらく　やり取りが行われたと思えば、無線機が元の位置に戻され……申し訳ない顔をコチラに向けてきた。　予想がつくのが悲しい。

耳を塞いで、聞こえないフリしとこ。

「杏樹さん、管理センターから連絡がありました。　他の場所に移動して欲しいと」

「あー！　聞こえないーい　聞こえないーい！」

「お願いしますー！」

杏樹さんの助けを求めている方がいるんですよー！」

懇願された。

くつ。出来れば長距離走も立ち会いたかったが、俺の助けを求めているならば……行くしかない。

さつき思つたら？

利益不利益、都合で残るのは良くないんだ。

仕事どうこうじゃなくて、世の為ヒトの為……いや。パークの為、笑顔を見る為だ。

「分かったよ、ミライ」

だから、取り敢えず。

笑顔でミライ達に手を振った。

「行つてきます」

「いつてらっしゃい！」

そうして、皆に笑顔で送り出される。

いつてらっしやい、か。

懐かしい響きだ。

幼き頃の記憶。それは前世か今世か。恐らく両方。

込み上げてくるモノがあるな。

「温かいな」

また涙が。

いかん。次の目的地で心配されてしまう。

俺は涙を裾で拭くと、口角を上げる。

次のヒトやフレンズに会ったら、笑顔でスタートしようと思ったからだ。

唐突で、だけど何気ない時間。

馴染みのカコは、ジャパリパーク動物研究所の副所長だ。

副所長の地位が、どんなモノか全然分からんけど、きつと凄い。上から2番目くら

いじゃないか？

幼馴染として、共に過ごしてきたぶん、なんというか……嬉しい。

カコの研究、功績。

一部しか知らないけれど、それらは大変なものだと知っている。

1番分かりやすく、皆の目に触れるものだと……サンドスターによる、絶滅種のフレンズ化。

アニメだと、トキ。名前だけなら、ジャイアントペンギン。

絶滅種がフレンズとして見られる奇跡。

それを起こしたサンドスターと、カコ含む研究員のみんなは……すごい。

仕組みや、どんな発想、実験や過程を経て生まれたのだろうか。

様々な妄想をする余地があり、これもまた楽しい。

PPPPの会話や、かばんちゃんが帽子に付着していた髪の毛から生まれたのを考える

と、化石にサンドスターを当てたのだろう。

しかし、貴重な化石を使用した実験……許可を得るまで様々な苦労があつたのではないか？

多少なりとも国内、海外の研究所や各機関との摩擦。

道徳的な問題も、あつたかも。

何にせよ、実現した。この結果は更なる技術の進歩を促進する……かも知れない。一方で、謎は深まる。

一部の研究員は、この結果に頭を抱えたんじゃないか？

眼に光がないのもだが、一番は「生きた」動物が変化したもの。という考え方が歪んだコトか。

この辺で、曖昧ながらもフレンズ化の条件が纏められてくる。

フレンズは、動物か「だったもの」に当たると生まれると。

それはPPPの会話で、あつたかな。

ヒトは、この辺で気付いてきたという事か。

ところが、シーサーのフレンズのように「神さま」のフレンズが確認された事は大いに混乱したコトだろう。

フレンズ。

物理的に、カタチあるものに「限らない」から。

亜種のように、フレンズ化の区分が　しばしば曖昧なものも謎であるが「限らない」件の謎はレベルが違う。

研究員たちも最後は笑顔で「分かんないや！」となったかな。　御苦労！
ごくろう

だけど　研究は、止まる事を知らない。

そして、サンドスター S S プリンター等の装置が開発されるのだろうか。

そして別物質、セルリウムの件も。

故に研究員たち……カコは日々忙しい。

そうそう会えない。

メール越しのやり取りも不定期で、返信が中々得られない事も珍しくない。

「うう……カコ、元気かなあ」

自室のベッドの上。　俺は転がりながらも、スマホを見ては嘆いた。

せつかくの休みなのに、会えないとかツライさん。

思えば島に来てから、1度も会ってない。

オトナとは、中々時間が取れない。　休みの日があつても、疲れて遠出する気が起き

なかつたりするものだ。

それでも幼き頃を思い出して、共に何処かへ行きたい日もある。

あの輝きの日々は、あの日にしかないものだけれど、俺以外に覚えているヒトがいるならば……気持ち共有する事は出来る。

そうして、胸を渦巻く寂寥感せきりようかんを埋めたい。あの日々は幻ではなかつたと。本物であつたのだと。

自己満足と言われても仕方ない話だが、未来を大雑把おおざっぱに知る身としては心配だ。そういう意味で側にいたかつたりもする。

カコの両親は存命しているものの、カコは絶滅種や他の研究をしているワケで。

この事から、俺が知っている未来が来る可能性がある。

カコはセントラル事件で、セルリアンに襲われる。そして、意識不明に。

挙句に女王事件に発展。パークは危機に陥る。それは避けたい。

俺がなるべく側にいる事で、それが解決するかは分からないのだけれど……。

「俺、臨時職員だしなあ。 研究所で働くのは無理か」

これである。 様々な場所に派遣されている俺だが、カコのいる研究所には入った事

がない。

そも、俺は無関係者。入れない。「カコの馴染みです」は通用しないだろう。特殊な場所だろうからなあ。俺みたいなヤツは入れないだろうな。これでは、カコの側にいてやれない。

「でも、会いたいなあ」

カコの笑顔を、側で見たい。守りたい。

けれど叶わない。

ひよっとしたら、もう会えない気さえしてきた。メールの返信も延々に無いのでは

？

「カコ……カコ」

過去に囚われ、未来を嘆く男。我ながら女々しいけど、仕方ないじゃん。妙案が浮かばないんだもの。どうしたら、平和的に会えるだろうか。

「うう。 カコ……くっ」

嘆きながら、ベッドの上でゴロゴロ転がるも、状況が改善される事はない。

「ふう」

溜息を出しても仕方ないな。

管理センターにでも行って、公表されているデータでも閲覧しよう。

所詮、パンピーである。 権限なく、出来る事は限られるのよ。 ペっ！

「さて行くか」

起き上がり、玄関へ。 部屋に籠つても発展はない。

ガチャリ、と何時もの開閉音。 新たな1日が始まる音。

それは希望か絶望か――。

……………。

目の前を見る。　独り言で名を呼んだ、その馴染みの女性が立っていた。

茶色の縞々な、けもの　の尻尾を思わす髪飾りを頭に付けて、青紫っぽい髪の毛を後ろで纏めている。

服装は豊満な胸で押し上げられた紫シャツ。　ズボンは黒一色。

言っちゃ悪いが胸以外、その、おばさんっぽいというか地味。

だけど、表情は明るい。　明るいを通り越して、赤らめて俯いている。
ふむ。

「久し振り、カコ」

取り敢えず、挨拶をした。

慌てては　いけない。　誤解の増長はマズイ。

「お、お、おおおはよう!？」

察した。

「続きは中で　しようか？」

「え、ええ、えええつと!?　その、あの！」

「落ち着こうか」

だから冷静を装って、部屋の中に迎え入れようとする。

コレはコレでまずい気がするんだけど、内心テンパってたんだ。　よくやったと褒め

て欲しいね。

だからさ。　同じ寮に住むヒトたちよ。

一斉に玄関から出てコチラを見ながら……イイ笑顔で携帯取り出してるから、想像つくけどさ。

管理センターに通報するのやめて。　お願い。

「落ち着いた？」

「うん」

周囲の誤解を身振り手振りで必死に解き、カコを自室のベッドに座らせて数分。やつと、状況整理の時間がやってきた。

ウチの寮のヒトたちは、祭りが好きで困る。起こすのも好きだから尚更だ。フレンズが職員のヘルプで来ただけでも、みんな騒ぐし。

俺は違うぞ。心の中で騒いでる。迷惑はかけてないんだ。 たぶん。

「全く。ウチのご近所さんにも困ったものだ、ははは……はあ」

隣に座りつつ乾いた笑いを起こして、カコの顔を向く。カコも乾いた笑みで返してくれた。

……………なんか虚しい。

久し振りに会ったのだから、喜んで良い筈なのに。

取り敢えず会話、会話しなきゃ。

会いたがっていたのに、いざ会うと言葉が浮かばない。

状況が状況だからね。突然過ぎたから。

えーと、まず普通の日常っぽい会話から仕事等の話にシフトしていく感じに話そう。

「白衣は その、着てないんだ？」

「外に出る時は着てない」

「だよな。 うん」

しょうもなさそうな話を振って、カコの様子を見つつ、話を続ける。

「今日は……どうした？ 連絡なかったけれど」

「実験が中止になって。 時間が出来て、その。 会いたくなつたから。 ごめんな

さい。 連絡を入れるべきだったけれど忘れた」

「そうか。 いやはや、連絡忘れとは珍しい」

「何を話そうか悩んで。 そつちばかりに気を取られた」

「へ、へえ？」

して、俺と同じように会話に困っているのかい。

状況は、何となく分かった。けれども部屋は静寂な空間に。気不味い。何を話せば良いんだよ。

こうなると、どうでも良い生活音がよく聞こえるものだ。

違う部屋や近所から聞こえる掃除機の音や洗濯機の音。ヒトのくぐもった声。

本来、集中するべき対象から意識をずらす。場合によっては作業妨害のソレも、今では妙にありがたい。

寮の外から聞こえるヒトの声。飼い犬の鳴き声。珍しくも何ともない日常が、今日も世界を回している。

何気なく窓を見やれば、綺麗な青空と白い雲。

時々、鳥のレンズと思われる影が横切って行く。

ミライやカコだったら、あのシルエツトだけで答えられるのかな。

聞いてみるか。

「なあ」「ねえ」

被った。譲ろう。

「どうした」「先に」

また被った。今世でも、あと何度繰り返すのか分からない、進展がないけど平和なやり取りだ。

「ははっ」「ふふっ」

それが何だか可笑しくて、カコと共に、つい顔が綻んでしまう。

それは乾いたものではなく、本物の笑い。負の感情を全て払拭する明るい表情。

いつか、遠い昔に置いてきた、嘘偽りの無い純粹さ。

何だろう。悩んでいたのが馬鹿らしくなってきたな。うん。

カコに会えた。素敵な笑顔を見れた。幻じゃなくて、確かに存在するものだと再

認識出来た。

それで良い。満足だ。

前世の経験もあって、オトナの笑顔は嘘偽りで塗り固めた仮面だと思い、疑心暗鬼になる時があった。信じられなかった。

今なら信じられる。その純粹さと輝きの存在を。

「うんうん！　満足だ！」

「そうなの？」

「うん。カコに会えて、笑顔になれて。昔を少し思い出せた。ありがとう」

「へんなの」

莞爾として答えると、微笑するカコ。

そうそう。カコには笑顔が似合う。

「……その方が素敵だよ」

ボソリ、と。小さく呟いた。

今世で小さい時、両親を助けて本当に良かったと思う。曇った顔は見たくないからね。

だからさ。これからも、守りたいんだ。

パークも、みんなも、カコも。

「何か言った？」

「なにも……いや。 そうだな」

「言つて欲しい。 杏樹の言葉が聞きたい」

ちよつと悪戯つぽく、して甘えた声。 プラス上目遣いとか……天然でやつてるなら、恐ろしい子！

いや、実は聞こえてたでしょ。

そう思うと恥ずかしくなつて……だけど、誤魔化すように、だけど嘘じゃない言葉を述べていく。

「カコ」

「うん？」

「これからも、どうか よろしくね」

俺なりの、照れ隠しの抵抗。

そして、嘘じゃない言葉。 これもまた、恥ずかしい。 だけど、言つておかなきゃ。 この島に来て、初めて再会して。 まだ言っていなかった事だもの。

そんな唐突な言葉を受けたカコ。

一瞬、キョトンとして。

求めているものと違ったからか、一瞬ムスツとしつつも……直ぐに「杏樹らしい」と微笑んで、

「うん。 杏樹、これからも よろしくね」

そう、返してくれた。

オトナになってから、こういう事を言うのは 恥ずかしいけれど。
でも、言って良かったと思えた。

これからも。

過去は幻でなくなり、今に繋がると感じられる。

未来は明るく、孤独じゃない。 怖がる事はないんだ。

「じゃ、どっかに出掛ける？ それとも部屋で話す？」

共に歩むカコに提案。 なんだらう。 ワクワクしてくるね！

「その前に。 これ」

熱くなる俺に反して、冷静に対応される俺。

カコはポケットから、自分のスマホをスツと出して……俺に画面を見せてきた。 管
理センターからの連絡だった。

「私の安否を確認する内容なのと、その、杏樹に出頭命令が」

「誰だ通報したヤツううう!?!」

思わず叫んだ。

どうやら、最初の熱の向け先は、ご近所さんになりそうである。

固そうで、柔らかな。

広大なジャパリパークを管理する、管理センター。支部はたくさんあり、都市部は勿論、ちほーの安全な場所や本土にもある。

それだけ、スタッフがいて……仕事量や情報量は多い。

運営や各機関、本土や調査隊、営利団体等との連絡が常に行われる。その中には、パーク内のヒトやフレンズとのやり取りがあるわけで。

あー、つまり俺も含まれるのだ。

俺は何度も世話になった。パークにいる以上、何かと絡んでいく。それは間接的であつたり直接的だつたり。それは間接的

職員は大なり小なり そうなのだ。辞めない限りは、世話になり続ける事だろう。今も、そんな感じであるし。

「杏樹さん。リカオンさんの件といい、カコ博士の件といい……通報されないように配慮して下さいね」

管理センター内、事務所のひとつ。

左右に並ぶ同一系統の事務機の道の奥にある……孤立した、これまた同一の事務機の前にて。

鳴り止まぬ各机からの固定電話音と対応の声というBGMの中。

その中で俺は、目の前に座る背広の、小柄な女性に説教を受けている。

眼鏡でシヨートヘア。知的な雰囲気でありながら、黒いスーツ越しにも出るベキラ

インはハッキリ出ており……なのに、背が低くて小動物みたい。

それに反して、真っ直ぐ厳しい目を向けて言っている。つもりの彼女。

でも、声が幼くて迫力ナシ。

正直怖くない。話し方も嫌な感じじゃないね。可愛いまである。

子猫や子犬が唸ってるレベル。その気になれば仲良く出来そう。

揶揄うか。通報されたけど、これはこれで良いオモチャ……じゃなくて、ヒトに出会えた。

「気をつけまーす」

「反省の色が見えないのですが」

馬鹿にされてると思って、ムスツとしつつ咎めてくる彼女。
ふっ。喰いついたね。

女だからとか、小柄だからとかで、舐められていると思ってるのだろう。強ち間
違いではない。

故に咎めてくる。真面目なのは結構。

だがしかし。同時に扱い易い部分もあるかもな。カコが表で待っているけれど、
ちよつと遊んで……いや、試してみるか。

「気の所為せです。ところで、連絡先を教えてくださいませんかね」

「そういうところです。ナンパはやめて下さい」

喰いついて来るね。ゆっくりと巻き上げていこうかしら。

「いえいえ。何かあつたら、直接やり取り出来ますでしょ」

「電話越しには済ませられない事もあります。何度も問題を起こすヒトに対しては
特に」

ふんすと、「一本取ってやった。どうだ！」と胸を張られた。
シヨウジヨウトキのフレンズかな？

何にせよ可愛いねえ。勝ったと思っっている辺り含めて。

「貴女あなたに会えるなら、トラブルメーカーになるのも やぶさかでは ないです」
「ふえっ!？」

面白いぐらい決まったカウンター。

して変な、可愛らしい声が聞こえた刹那。

事務所の視線は一斉に彼女に向けられる。

電話の音が遠く鳴り響く。

その異様な雰囲気、彼女は慌てて対応。 上司としての威厳を皆に見せようと、顔を赤らめつつも必死に。

「な、ななな何を見てるんですっ！ 各自、仕事に しゅうちゅー！」

はーい。

一斉にハモった声が事務所に木霊した。 皆、超良い笑顔なんですすがそれは。

笑顔溢れる職場。　良いじゃない。
それに、

「愛されてますねえ。　ククツ」

「あなた貴方の所為ですつ！」

上司が愛されていると分かる。　素晴らしい職場じゃないか。

羨ましいよ。　俺も前世で、こういう上司やヒトがいる　ところにいれば……。

いや。　おくそく憶測は止めよう。

それに過ぎた事だ。　今はパークにいる。　ならば、パークの話をするべきだな。
パークの中にある、こういう優しいヒトの世界だって守るべきものに違いないんだ。

「失礼しました——俺の件は済みましたか？」

「……うう。　もう良いです。　後はこちらで処理します」

羞恥と怒りで俯きつつも、敗戦処理に　かかられる。

でも、今のうちに　言う事を言っておこうか。

「では処理ついでに。パークセントラルのセキュリティ強化及び周辺調査を推奨すいししょうします」

「突然、なんなのです」

「あと、緊急時マニュアルの再確認」

「……何か問題があったのですか？」

真顔で聞いてこられた。何だかんだ取り合ってくれるらしい。良いヒトだ。

愛される要因の ひとつだな。

ならば、対応される側としては真面目に詳細を説明するべきだろう。

けれど、その詳細が分からない。悲しいかな、何故セントラル事件が起きたのか。

輝きに釣られて襲ったのだろうか。ヤツらに意志はない筈。

また、ぱびりおんのOP風では「なんでセルリアンが!？」というセリフがあった気がする。

普段は安全が確保されている、という事だろうか。取り敢えず全然分からん。

「いえ。ただ、セルリアンについては分からない事が多過ぎますから」

急に自信がなくなった。

確かな情報が無ければ、組織は動いてくれない。

ここまで言ったは良いけれど、無意味な事になってしまいかも知れない。

「レンジャーや調査隊、警備員も います。 フレンズさんも手伝ってくれていますから、大丈夫ですよ」

そんな不安を感じたのか。 彼女は、安心させるように微笑んだ。

「…………ええ、そうですね」

良いヒトだ。 こんな末端のヒトにも配慮した言葉をかけて くれるなんて。 だけど、何も解決してないんだよな。 言ってみただけさ。

彼女だって、あくまで ひとつの部署の……班長みたいなモノだろう。

権限はきつと、小さい。 もし、調査隊の編成や派遣等が管轄外なら余計に。

俺が、どうこう発言しても変わらないかもな。 そう思うと、俺って無力だな。

なんだか目頭が熱くなってきたよ。

「心配、なんですね」

「へ？」

「だって、涙が浮かんでます」

そういう彼女の言葉は、柔らかく。咎めるものではない。どうやら、涙が見えてしまったようだ。それでも耐えていたんだけどな。

「ああ……すいません。失礼しました」

「良いのです。上には私から掛け合ってみます。どうなるか分かりませんが、出

来る事は しますよ」

「忙しい中、ありがとうございます」

涙を拭いつつ、俺は礼を述べた。

なんだかさ、それだけで勇気を持って言った価値が生まれた気がした。

言ってみるものだ。確かに結果は分からないけれど、これもまた、ひとつの進展で

ある。

「あ、これを」

そういうと、メモ用紙を渡してきた。数字が並んでいるから、電話番号のようだ。

「連絡先です。登録しておいて下さいね。何かあれば連絡します」

「いろいろ、すみません。お願いします」

管理センターには、世話になりっぱなしだなあ。

お堅いイメージのある背広組であるけれど、こういうヒトたちがいるならば……救
いってあるんだなって。

「以上です。表に待ち人がいるのでしょう？」

あ。やべえ。

「ああ！　そうだった!?　　すみません、後はお願ひします！　　今日はありがとうございましたあ！」

やべえよやべえよ。

カコを忘れていたよ！

幼馴染を忘れて、他の女の子とトークとか……都合上、仕方ないよね？　　仕方なくない？

「そこ！　事務所内では、走らない！」

「はーいー！」

笑顔を向けられながら注意され、間延びの返事を返しておく。

左右に座るヒトたちの表情も、心なしか穏やかだ。

不思議と、涙は引っ込んだ。

希望の光が見えた。　　そんな気がして……俺は管理センターを後にするのだった。

その後。

ずっと待っていたカコは不機嫌に頬を膨らませており、俺は必死に謝る羽目になる。なんだか誤解を解いたり謝ったりと、朝から忙しい。前世も似た感じではあつたけど。

でも違うのは。

笑顔を向けられて、応援して励ましてくれる　ともだちに囲まれているコト。

そして。俺も笑っていられるコトだ。

リウキウと楽しい予感。

管理センターを後にし、オコナカコの許しを得たのち。

共に駅に行き、電車に乗り込んだ。

目指すは漫画版でも登場した リウキウチホー。

サンドスターの影響を受けてか熱帯気候。 砂浜や海が美しい南国のような場所である。

漫画版のコマや今世での写真等を見た感じ、琉球建築の建物や特徴的な石積みのお堀が確認できる。

前世では生で見る事がなかっただけに、楽しみだ。

最初、俺となら何処でも良いよと、嬉しい事を言ってくれたカコ。

ならば、いった事がない場所に行こうということになって、ココになった。

水着があれば、カコのナイスボディを拝めただろう。 だけど無い物ねだりはしない。
い。

代わりに胸はある。

此方を拝めよう。

うん。

改めて俺のキモさに身震いした。

……ナ二言つてるんだらうか。　　煩惱を追い出さねば。
では話題を今現在に変えよう。

今乗っている、この電車。　　本土のと代わり映えはないけれど、他のちほーに行く時は重宝する。

漫画版でも、菜々たちが旅行に行った際、出てきたな。

ヒトだけでなく、フレンズも利用可能。　　キタキツネやギンギツネも菜々と共に搭乗している描写があつた。

良い時代になつた……じゃなくて、パークは良い島だ。　　偶たまに動物園である事を忘れるくらいには。

うん……ココ、動物園だよね？

いや、パークを普通の動物園にカテゴリしてはならないけれども。

そんな文明的な時代も、いつか終わってしまうのだろうか。　　分からない。

セントラル事件や例の異変の陰に慄として過ごすつもりはないけれど、現状、ココでジタバタしても仕方ない。

カコの両親を救う時はジタバタして、結果としては救えたのだけれど。

過去の経験もあつて射幸心とは持つてしまうものだが、今回は落ち着いていこう。

とはいえ。　　あの時は命冥加な両親であつたが、本当に良かった。　　これは揺るぎな

い本心だ。

そして。 こうしてカコと一緒に、オトナになった後も微笑み合いながら歩けるのは、重畳に至り。

共にいて笑い合える。 何気なくも、それが最高の喜び。
屈託あれど、今の幸福と平和を享受きょうじゆしよう。

「今日も良い天気だね」

「うん」

電車の真ん中の車両。 端っこに座りつつも、窓越しに、流れる建物や青空を見ながら呟いた。

平日の昼間近くだからか。 あまり乗客はおらず、席もストレスなく、好きなところに座れる。

それに加えて左右の光景が良く見えた。 動かずして流れる世界は、それはそれは時を超えているような、新世界に行くような気がして……心躍らせてくれる。

して些細な話でも、カコが付き合ってくれる喜び。 俺、幸せです。

「杏樹、ところで」

「うん？」

「管理センターは、大丈夫？」

唐突に、不安そうな声を出された。心配を掛けてしまったようだ。

ここは安心させなきや。

俺は顔を覗き込むカコに、微笑んだ。

「大丈夫だよ。優しいヒトだったから」

ぶつちやけ。不確定要素たつぷりの未来を考えると、大丈夫じゃないんだけど。

これは自身を安心させる為の言葉でもあり、不安な気持ちを抑える為だ。

「なら、良いんだけど」

「大丈夫。うん、大丈夫」

会話が止まり、走行音に支配される。空虚な箱は、ただただ未来へと揺れ動くのみ。

いかなな。折角の明るい日なのに。また暗くなってしまった。
何とか話題を変えねば。

そう思った刹那、ゴオツと車両の冷房音。

冷たく心地良い風を受けて、驚いた。

「うおっ!?!」

「リウキウに入ったみたい。外、見て」

言われて見れば、建物は見当たらなくなっている。

代わりに広がるは、母なる蒼い海と白い砂浜。波は白線となって揺れ動く。

何処までも濃く壮大で、ひとつの神秘を両の眼に映し出す。

「おおっ!」

感嘆の声が出た。

パークは島だ。四方を海に囲まれているのだから、何を今更と言うヒトもいるだろ

う。

だがしかし。 広大なパーク故に。 内地にいと、海をプライベートで見ることが訪れない場合もある。

その気になれば見に行けるが、目的や時間を考えると歩みを止めてしまうのだ。

広大な海と心休まる波の音を見聞きする事で不安や悩みを拭う事は考えた。

だけど「明日もあるし」とか「行って何になる」とか「金と時間と体力の浪費」とも考えてしまう。

今世は前世ほど酷くはないつもりだけど……やはりか。 こういう機会でもなければ、やる気が出ない。

いかな。 気持ちを切り替えねば。

ココはジャパリパーク。 規格外の動物園であり奇跡の島々。

仕事だ無駄だと考えて生きて「これが俺の人生です」「パークライフです」とはなりたくない。

ならば、今を楽しめ。 どうしようもない不安を抱えても、文字通り どうしようもない。

少なくとも今は楽しむ時間だろ、俺。

「あんじゅ」

カコの綺麗な声が。　いかん。　これ以上心配させるワケには……。

「あ、いや。着いたら どうしようか」

「その前に、見て。 あそこ」

予想とは違う返答に、思わずカコを見る。

すると此方には目を向けず、振り返って外に人差し指を立てているではないか。窓に薄ら反射して見えるカコの表情は、輝いており、純粹無垢の良い笑顔。

何を見つけたのか。　馴染みの事だ、予想は容易である。

けもの　さん　を見つけたか。

「海鳥？　それともイルカかな」

「イルカ。　マイルカ！」

正解だった。

ふっ。　嬉しそうに言われては、見ない訳にはいかないな。

外を見やる。すると電車と並列するようにして、10頭ほどのイルカの群れがぴよんぴよん水面から跳ねていた。

「おお」

電車と競争しているのか。その光景は無邪気な子供を見ているようで微笑ましく、同時に運動能力の凄さを垣間見れる。

模様は黄色と灰色のパターンが交差しており、背面は黒、腹は白。感想としては、典型的なイルカ。名前的にも。

「普通のイルカ だね」

「もつと嬉しそうにしても良いのに！」

隣で はしやぐ馴染みのお陰で、逆に冷静だよ。俺の分まで 喜んでくれ。

いや。内心喜んではいるんだよ？

マイルカ。

アニメ「けものフレンズ」のラスト、フレンズとして出てきた子だから。

真のイルカ、英名 common (コモン：普通の) とあるメジャーなイルカ。

俺が見ているのは、けもの であるが、それはそれで美しき光景。

群れをなし、跳ねる姿は芸術すら感じさせる。

がっかり する事はない。寧ろ、この時でないと見られない輝きであり……。

「スゴい！ フレンズ化に立ち会えるなんて！」

「フアツ!!」

え、ナニ。 群れの1匹が本当に輝き始めたんだけど。 カコ大興奮、俺、混乱。

白い光のまま、皆とびよんぴよん跳ねているけど大丈夫なのアレ。

仲間も普通に飛んでるけど想う事ないのかね。 眩しくないのかね。 太陽光とは

違うのよソレ。 たぶん。

まさかフレンズ化を目視で見ようとは。 報告どうしよう。 取り敢えずスマホの

ビデオ回そうしよう。

スマホを構えて撮影しつつ、混乱と疑問符が俺の頭を支配しているうちに、光越しの

シルエットはヒトの姿に変形していき……やがて。

「ホント、奇跡の仕組みは分からん」

光が消えたと思ったら。

女の子が、他のイルカと共に跳ねていた。

アニメ、アプリア同様の姿。黄色のリボンにセーラ服の襟付き青色ワンピース。スカート下から尾を生やす。

足にタイツ等は確認出来ない。素肌に直接黒い靴を履いている様子。頭部は共に跳ねるイルカの特徴を引き継ぎ、黒色の髪であり、流線形。鼻孔、胸びれ背びれも髪の色や形で再現されている。

海水にもサンドスターが含まれているのだろうか。いやはや。奇跡は予測がつかない。というか、なんというか。取り敢えず。全然分からん。

「見たあんじゅ?!」

見ましたよカコさん。だから肩を掴んでガクガク揺らすのヤメテ。混乱する頭が更にシエイクされるから。

ハンドサインで落ち着くよう促しつつ、俺は応えた。

「見た、見たよ。自然の流れでフレンズ化の光景を見れるとは僥倖だね」

「うん！」

カコがスゲエ良い笑顔で何よりです。純粹無垢な表情つて、オトナになっても出来るようだ。

忘れてしまった懐かしい感覚が、世界が、少し思い出せたよ。

だがしかし。オトナはソレだけで終われない。ホントは嫌だが、仕事の話を考えてねば。

「あー、カコ。コレって報告案件？」

「うん。あの子たちは野生だと思うけど、管理センターやアニマル・コントロール上、把握したい筈だから」

カコも真面目に対応。まあ、そうなるか。面倒だけど連絡入れておこう。管理センターの小動物に言っておけば良いか。連絡先教えて貰ったからね。

「分かった。管理センターに、後で言っておく」

「ありがとう。それと」

まだあるのか。面倒が増えるのは勘弁なんだけどな。

休みの日にまで働きたくないでござる。

「イルカは陸から海に戻った哺乳類で、呼吸がしやすいように鼻……噴気孔が上についている。のは有名だけど、その時に水面近くだと太陽光が眩しいから瞳孔はUの字型で」

違った。蘊蓄うんちく語りであつた。

ミライと似ているところがあるなあ、と微笑ましくはある。

だけど口頭で言われて覚えられるほど、俺の頭は出来ていない。ぶつちやけ今、その知識は右から左に抜けている。すまない、カコ。

「——あの子に、フレンズになったばかりの　あの子に会いに行こう」

そこだけ聞き取れて、サムズアップと笑顔で応えた。　勿論、肯定的な意味で。

先程の仕事に対する憂鬱感？

気の所為せいだ。

フレンズになったばかりの子とは、個体差あれど、混乱や不安な気持ちちが　多少あつたり　する。

突然ヒトの姿になり、話が出来、かつての仲間と異なれば仕方ないだろう。

例によって女の子の姿である件や、喋れる件は謎らしいが。

取り敢えず、管理センターの小動物に報告。　迎えが来るまで、その不安な気持ちや

混乱を落ち着かせる目的、パークでのルール等の教育もあつて歩み寄ってくれとのお達

し。

小動物は職員管理が管轄の様子だけど、真面目に取り合って担当部署に連絡してくれた。ありがたい。いずれ礼はしなきゃ。

ところが、ここに来て問題発生。というのも、

「陸地と違って、海に棲む子だから会い難い」

「泳ぐか？　水着買う？」

それは海に棲む子に歩み寄るのは困難なんじゃね、という事。

電車から降りて、暑い陽射しの下。

リウキウの砂浜から沖を眺めつつ、解決法を模索する。

歩み寄るといふか泳ぎ寄るってか。俺、泳ぐの苦手なんだけども。

あ、でも。カコの水着姿が見れると思えばオールオッケー！

「一度声かけする。電車と同じ方向に遊泳を続けていたから。浅瀬に寄ってる

かも知れない」

うん。簡単な方法から試すよな。

まあ、でも。そう簡単に解決したら、苦勞しない。

そうしたら今度こそ水着だ。水着だひやつほい。

そして、マイルカと戯れる。眩い日差しの中、マイルカとボール遊び。

輝くカコたちの笑顔が浮かぶ……良いと思います！

「顔に出てる」

しまった。先に浮かんでどうする。

「あ、いや、これはだな」

「な、馴染みだもん。分かるよ」

もごもごと口を動かしつつ、分かっているよと、頷いて見せるカコ。

あかん。高校までずっと一緒だったのだ、俺の思考もある程度読めてしまうか。

頭良いし。

「早く、マイルカのフレンズに会いたいんだと」

うん。健全な解答をありがとう。改めて俺が汚れた心だと分かったよ。

まあ、間違いではない。半分正解だ。その先は知らなくて良い。

「あんじゅ?」

「何でもない。声掛けしてみるよ」

「お願い」

誤魔化しつつ、仕事に かかろう。

カコよりも、俺の方が声は大きいからな。それでも、何処にいるか分からないマイ

ルカに聞こえるか分からないけれども。

あつ。声……音で思ったが。

イルカつて下顎を使って骨伝導によって音を感じているんだっただか?

フレンズ化した後つて、どうなんだろうか。ヒトと同じ感じになるのだろうか。

視力も どうなんだろう。

ハンドサインを見て理解していると 何かの話で聞いたような。その為、視力は良

いとかなんとか。

ただ、水面ではボヤけて見えるらしい。 フレンズは その辺大丈夫な気もするけれど……どうなんだ？

あとは……フレンズ化した後も、エコロケーションを使うのだろうか。 水中とかで。

疑問は多々あるけれど、取り敢えず沖に向かって声出した。

「おーいー！」

夕日に向かって「バカヤロー！」なんて事はしない。 そもそも、今は昼前である。レンジャーの隊長さん辺りは、やりそうだけれど。 元気かなあ、隊長さん。 それよりも。

「来ないなら水着だね!？」

水着姿のカコを所望する。 漫画版みたいに、フレンズの水着姿もグッド!

一瞬、妄想の女子空間に海パンの、マッチョな隊長のポーリングが見えたのは気の

所^{せい}為^いだ。

「さつきより、大きな声出てる」

「いろいろ気の所為だ！　ただ、これで来たら苦勞は……うん？」

しよーもない　思考や　やり取りをしていると、沖の方から黒い点が。それは、大きな水飛沫を上げながら、ぴよんぴよん跳ねて寄ってくる。やがて大きくなっていき、視界で分かるようになる。

「マジで来たよ」

青色ワンピースの女の子……マイルカのフレンズを視認した。

スカート下から出ている、力強くもエレガントなイルカの尾が、大変目立つ。

その上下に振れる尾による最大速度は、如何程^{いかほど}か。

進行方向に対して真っ直ぐ見ているから分かりにくいが、かなりの速度である。

昔見た資料には、時速50キロか60キロと書いてあった。車並み。

ただし。　けもの　の時より能力が飛躍しているであろう、フレンズは更の上。

うーむ。考えても答えは出ないな。けれども。この世に、奇跡に疑問が尽きないのは楽しい事だ。考えて答えを探る。そこにもまた、生きる活力が生まれるのだ。

「あんじゅ！　来た！　来てくれた！」

カコ、またも大歓喜。俺の肩をバシバシ叩いてくる。

うん。見てるから分かる。して、地味に痛いのでヤメテ。

いや、まあ。イルカに叩かれるより絶対にマシなんだろうけど。

ミライは、愛ゆえに笑顔で叩かれにいきそうだが。いや、言い過ぎた。流石にソ

コまでは……言い過ぎだよな？

とりま、仕事を兼ねた遊びの時間だ。

「おーい。マイルカ！　可愛く言えばマルカちゃん！　ともだち　になるー

！」

寄って来るマルカに手を振って、相手の好奇心を刺激する。して、あわよくば仲良

くなりたい。

そうすれば、いろいろ会話も弾むだろう。不安な気持ちも消し飛ばさ。

「フレンドリーね」

「フレンドズだからな」

カコに笑われた。

普段と違うからかね。

仕方ない。パークが そうさせた。前世の意味でも、奇跡を見た意味でも、そして普通でなくなったのは、何も俺だけではない。

「ともだち?!　ともだち　になってくれるの!?!」

嬉しそうな声が聞こえる。

いつでも、どににでも　ありそうで、それは今この瞬間にしか　無いものだ。そういう意味では、普通とは　あつてないモノであり。

毎日が　かけがえのない日々なんだ。

俺はそう、
思えるようになった。

マルカと お話と。

マイルカは、ハンドウイルカと比べて神経質ともいう。

飼育数的にも劣っているらしく、日本でイルカというと、灰色つぼくて人懐っこいハンドウイルカの方を思い浮かべるヒトが多いかも知れない。

だがしかし。 ココはジャパリパーク。

けもの は いても のけもの は いない。

特にフレンズは、その名の通り ともだちだ。

野生だろうと飼育下だろうと、同じマイルカ科だけど名前が違うからとか人気の差で差別はしない。

本来の 姿と能力が異なる場合も多いが、逆に魅力を高めているとさえ俺は感じている。

「わあー！ 陸に上がったの始めて！」

こうやって、目の前でキヤツキヤツと はしやく青色ワンプの女の子……マイルカの

マルカを見ると、そう思う。

フレンズ化することで、会話のみならず、陸での活動も可能になったからね。

最初の上陸時、腹から乗り上げた拳句に歩行も危うかったが、もう慣れたのか。不自由なく砂浜の上ではしゃいでいる。

陸への憧れもあつたのか。嬉しそうにしていると、心配する必要はなさそうさ。

これもまた、奇跡のひとつ。

この明るい輝きを見てみると、未来や今に怯え、過去を後悔し続けている俺が、ちつぽけに感じてしまう。

うむ。俺も明るく、いかなきゃ。

「先祖返りかな」

微笑みながら、言葉を発する。陸地というワードから、少し話を振つたのだ。

イルカの、ご先祖様は、陸地にいたとされるからね。その頃は、けもの姿でも足となる部分が、あつたのだろう。

勿論、マルカに先祖の、けもの、についての知識があるとは考え難いが。

ヒトが共通して、そのけものに対してイメージする、様々な能力をサンドスターにより体現出来たとしてもだ。

俺たちヒトだつてそうだ。「お前の先祖は、何してた?」とか知らん、或いは憶えていない質問をしているようなモノかな。

だけど、知り得ている知識から曖昧に答える事は出来るだろう。

生まれて間もないフレنزにも、ソレはある筈だ。喋れるし歩けるし。

知識は如何程か。俺は、その辺を探る部分もあつて聞いてみたのである。ところが、先に口を開いたのはカコだった。

「先祖返り、というと。イルカには通常、胸びれ、背びれ、尾びれの3種類のひれがあるけれど第4のひれ、腹びれがあるハンドウイルカが発見された事があつた。これが水生の哺乳類の進化過程を明らかに出来るかも知れないと期待があり」

カコ。お前が語つてどうする。あと、その話も全然分からん。右から左に抜けていくよ。

マルカも同じらしく、首を傾げている。可愛い。重要なのはコッチじゃね?・

「なんだか よく分からないけど、物知りなんだね！」

それでも笑顔でカコを褒めてくれた。 なにこの子、天使じゃん。 いや、フレンズなのは知っている。

そうだ。 自己紹介がまだ である。 改めて、このタイミングでしておこう。

「自慢の馴染みだよ。 けもの について、色々詳しいんだ」

アイコンタクトで、紹介の続きを促す。 流石にココまで来ると蘊蓄語りも中断している。

良かった。 止めるべきタイミングを自己判断出来て。 某けもの好きの後輩ちゃん、その辺が怪しい故に。

誰とは言わない。 紛れもなくヤツさ。

「私の名前はカコ。 よろしくね」

「マルカはね、マイルカのマルカ！」

「おっ。 早速、その名で名乗ってくれるのか」

「うん！ えーと」

「俺は杏樹だよ。 よろしく」

「あんじゅ！ あんじゅ！」

「ふふっ」

おう……2人の笑顔が眩しい。これは、俺も自然と笑顔になれるというもの。作り笑い、愛想笑いで日々溢れた世界より、この刹那の方が うんと価値がある。

昔の俺は その事を知らない。後悔した頃には遅かったのだ。

だけど、当時の苦労や苦痛を知っているからこそ、今この瞬間の……島での幸せを理解出来る。

そして、失う時の喪失感と悲しみも。だからカコの両親を助けようとしたし、未来で起きるであろう事件を良しとしない。

そしてカコたちの笑顔が永遠ではなく、故に尊く思えるから、どんな金銀財宝より価値あるものと言えるんだ。

誰かに共感して欲しい訳じゃない。 純粋な笑顔と愛情、夢。 懐かしい感覚。

幼き頃に見失った多くの輝きを感じ続けられるなら、それで良い。 所詮は自己満足だが、それで行動して皆が笑ってくれるなら……意味はある。

もつとも、どう行動すれば解決するのか分かっていないが。

その辺は、アレだ。結局努力するしかないのだ。未来や過去を知る場合の、転生者の最低限の努力だ。

注意喚起を促して終わるなら苦勞はしない。

いや、注意をして解決するなら良い。願わくば、苦勞せず終わって下さい本当に。

「あんじゅ?」「どーしたの?」

「え? あ、いや。生命の進化過程は、ぶつちやけ詳しくなくてね。ソレは置い

ておいて、今の話をしようではないか!」

「私としては、ぜひ知って欲しいのだけれど」

誤魔化したら食い下がられた。優先はソレじゃない。

語るのが嬉しくて、少し暴走しているのかカコよ。

知識は重要だし、思考や行動を豊かにするが順序がある。

ココは、論しつつ進行しよう。

「今は その時ではない。マルカの為にも、今を知ってもらわねば」

「分かった。 えっとパークの……決まりから？」
「ぱーく？」

何から話すか、カコと考えていると。 マルカが再び疑問符を頭の上に浮かべていた。

パークを知らないのか？

いや、仕方ないのかもな。 陸ではなく海にいたのだし、野生であれば尚更知らぬか。
アニメでは、ヒトがいなくても「ジャパリパーク」の名をフレンズは知っている様子であった。

アレが代々言い伝えられている 言葉なのかフレンズ化に伴い備わる知識なのかは分からないけれども。

俺は前者だと考えている。 アニメ主人公のかばんちゃんやヒトのフレンズだから特殊かも知れど、パークの名はサーバルから教わっているから。

仕方ない。 ココは お兄さん達が手取り足取り教えてあげよう。

俺はアニメサーバル風に両手を広げて、説明を開始した！

「ふっ！ 教えてあげよう！ ここはジャパ「ジャパリパークだね！」あつ……正

解です」

「やったー!」

話途中で答えられた。両手を下げた。テンション下がった。対比するように、お向かいのマルカは万歳して喜んでいる。隣のカコには苦笑された。

なんだろう。調子に乗っていたら冷や水を掛けられた気分だよ。

マルカは、パークの名を何処かで聞いた事があるのだろうか。思っていたより、かしこいかも。

「波立ててね! 動くヤツにね! おふね? に乗っていたヒトたちが、言っ

ていたの! 『ジャパリパーク』って!」

かしこい。

して、その笑顔は尊い。

「良く聞こえたな。それから、良く覚えていた。偉いぞ」

褒めつつ、優しく頭を撫でてやる。遠くからだといルカの皮膚に見える頭部だけど、近寄ると ヒトと同じ様な髪の毛だ。

感触は……ザラザラ感が ある気がする。 ゴムのような感触もあるような……うーむ。 上手く言えぬ。

突起のところ、ヒレを表している部分……背びれは避けて、胸ビレ……部分は 少し硬いような？

なにぶん、前世でイルカに触れなかったからなあ。 比べられない。

それを言ってしまうえば、パークにいる多くの ケモの とは触れた事ないんだけどな、俺。

フレンズはフレンズ、けものは ケモで別にすべきだという意見はあるけど。

ただ、フレンズは 元のけもの と比較して どう違うのか、考えてしまう。

研究員達も、その上で評価や研究をしている節がある訳で……。

「えへへー♪」

まあ、良いか。 可愛い天使の笑顔が見られたのだから。

「——下顎を使って骨伝導により」

「カコ、その話は置いておこうね」

隙あらば解説をしたがるカコを鎮めつつ、話を続ける。遊ぶのはそれからだ。

「その通り、ココはジャパリパーク。海底火山の噴火により、出来た島を丸ごと敷地として超巨大総合動物園。動物園といつても、レジャー施設等も豊富。本土の都市機能と然程変わらない区画もある。世界各国との繋がりもある、国際的な場所だったりもする。それは政治絡みや営利団体、研究機関など様々。当初はココまでの規模になるとは思われてなかったんだけどね、サンドスターやフレンズの影響で」

「かざん？ どーぶつえん？ れじゃあ？ コクサイ？ さんどすたあ？」

「フレンズ？」

「あんじゆ。 もっと、簡潔に」

カコに注意されて、ハツとする。

つい、熱が入って マルカを困らせてしまった。俺とした事が。

これではミライやカコのコトを言えない。恥ずかしい。

いくら かしこい と思っても、早口に気難しく、特に知らない単語を並べられてはヒトとて理解に苦しむだろうに。

「ごめん。簡単に言うのと、ココは とても大きな動物園。そして、リウキウチホー

と呼ばれる、暑いところ」

「どーぶつえんって、何のこと？」

「博物館法で……いや。いろんな けもの さん たちが暮らしている所なんだ」

この子に、どうやったら 伝わるか。言葉を選びつつ会話を進めた。

フレンズの知能は、最初は何歳児並みなのか分からない。話す時は子どもに話しかけるイメージで良いだろうか？

今世でも、本土で あまりヒトと話さなかった所為か。説明ってムズいと感じる。

「けもの が暮らす？ マルカも？」

「う、うーん？ 野生でも近海であれば……少しちがう……いや、パークなら そ

う、かな？ フレンズ化しているし」

「フレンズって?」

「パークだと、けもの さんが サンドスターと呼ばれる物質に当たって、俺たちヒト……女の子の姿に変身した子を言っている。 フレンズは、ヒトの言葉で《ともだち》って意味。 マルカもフレンズだよ」

「わーい! おっともだちー!」

興味津々に、目を輝かせながら連続質問攻撃をしてきて、答えを得れば嬉々として喜ぶマルカ。

興味を持つてくれるのは良い事だが……正直疲れてきた。そろそろ馴染みに振るか。

「サンドスターって、なーに?」

「……………サンドスターは、火山から噴き出るキラキラ。 不思議なチカラで けもの を ヒトの女の子の姿に変えるんだ。 マルカみたいだね。 カコ、海底火山からも出ているんだっけ?」

ココで馴染みに振る。 今まで止められていたぶん、嬉しそうに喰いついてきた。

可愛い。

「出てる。ちゃんと調べきれてないけれども。その関係か海中にも微量ながらサンドスターが検出された。海にいるマイルカがフレンズ化したのは、この影響だと私は考える。地上の火山というよりも、海底火山の影響が強いかな。元を辿れば、目に見える火山も海底火山だけでも——」

抑えられていたぶん、一度、話し始めると止められない止まらない。

だけど、今はありがたい。今のうちに休もう。

サボっている訳じゃない。元々、今日は丸一日お休みである。勘違いしてはならない。休める時に休まねば、いつ休むのか。今でしょ。

それに、カコはペラペラと嬉しそうに語っているし。

マルカも目をキラキラさせながら、うんうん頷いている。本当に理解しているのだとしたら、すごい学習能力である。

さつきまで火山だのサンドスターだの理解してなかったほいのに。その能力、くないかな。無理ですかそうですか。

「——で、なければ、けものプラズムにより構成される身体が維持出来るとは考え難く——その意味では、島から離れれば離れる程に身体は維持出来ない。けれども、サンドスターの供給維持が可能なら島の外でもフレんズのまま活動可能であると考え——」

「なんだか脱線してきた。カコ本人も、蒼き母なる海を見つめてブツブツ言い始めてコチラを見ていない。」

「あの一、カコさん？ 火山の話から脱線し始めたんだけど。視線も脱線したんだけど。全車両がレールから離れ始めてない？」

「アウトオブ眼中ですかい。おっと、コレは死語であつたか。」

「マルカはねー、それでも良いよ！ おはなし、聞いているのも楽しいから！」

「尚も優しいマルカちゃん。でも、そんな彼女に疑問をぶつけることにした。カコの話についてだ。」

「で。その意味は分かるのかい？」

「分からない！」

笑顔純度100パーセントが眩しい。　　だけど、分からないモノを素直に言えるのは

偉いぞ。　褒めてやる。

「あんじゆは、分かる？」

「全然分からん」

「マルカと同じ！」

「そうだね。　だからって訳じゃないけど、あつちにある海の家……あの薄茶の建物に行つてくる」

振つておいてなんだが、遊ぶことにした。

カコには悪いが、この調子だと担当者が来てしまう。　　フレンズと遊べず終わるのは嫌だ。

「なにをするのー?」

「ビーチボールが売ってるから、買っただよ。それで遊ぼうか。遊び方は教えるから。ちよつとカコと待ってて」

「わーい!」

そう言つて熱くて白い砂を蹴りつつ海の家へ。

足を取られないよう気をつけてるつもりだけど時々、足の中に砂が入る。

足の裏から伝わる熱さとザラザラ感は、楽しみを前にすると心地良く感じた。

背後を振り返ると、マルカが手を振つて俺を見送っている。青色ワンピースが照りつく

陽の光を反射して、とても明るく眩しい。

カコは……気付いてない。まだ海の方を向いている。

ナニ黄昏てんですかね。これからだよカコ。

「おつと。急がなきゃ」

担当者が来る前に、遊ばなきゃ。時間がなくなっちゃう。

「——不完全な化石に限らず、毛の一部でもサンドスターが当たると、フレンズ化する。まだ条件はハッキリしてない。けものフレンズに限らず、神さまのフレンズもいる事から——」

まあ、戻つて来る頃にはカコも我に戻っているだろう。そうしたら、みんなで遊ぼう。それが良い。

「——ヒトのフレンズは、確認出来ていない。でも、もし条件が分かれば……失つたモノの再生も、可能になるんじゃないかという意見がある」

明るく行こう。きっと、未来は大丈夫。

俺は、都合の良い部分だけを無意識に切り取ってきた。悪いのは切り捨てた。前世もそうだ。

だから。何か不穏な言葉が耳に入ったのは、きっと気の所為だと思ふ事にした。

まだ、平和。

平和な第一世代は ヒトの文化がフレンズに最も伝わっている、或いは伝わり始めた世代だと思う。

漫画版でいうと、海水浴の際は水着を着用していたり、キタキツネが懐中電灯を使っていたり。 クロサイは別荘を建てる際、ハンマーを使っている。 チーターは、冬に家に籠ってストーブハーレムをやっていた。

それが墮落の道を行き、ヒトのように心を貧しくするかの問題は別として、ヒトによる影響は服や道具、社会的ルールに限らない。

文化的にも、ハロウインをやったり、正月に参拝している描写がある。

特に試験解放区等のヒトの生活圏と共にする、或いは近いフレンズがそうだ。

文化や知識、情報を共有している感じ。

街のヒトたち……職員だろうが、フレンズだろうが、時間に差もなく、多少の精粗の差はあっても、基本的に同じような情報を知っていても何ら変ではない。

今は、そういう世代……かな。

しかし、フレンズの好奇心や見方によって、受け取り方は多様である。 それはヒト

にも言える事ではあるが。

サーバルとコアアが、ストップウオッチが どういう道具か知っていたけれど、計測器というより遊び道具かのような発言をしていたように。

一方ではフレレンズの能力に迫る研究へ使われ、他方では おもちやにされる。

受容の形は異なっても、刺激された多様な好奇心の まなざし は、ヒトとフレレンズの知識のさらなる共有を促し、知的ポテンシャルを高める事となるであろう。

「マルカ、そつちにボールいくよ。 空中のビーチボールをジャンプして、尾でキックだよ。 《ボールキック》。 カコの方にね」

「わかった!」

「もし落ちちゃったら、《オーバーヘッドキック》……いや。 手で押して戻って来て

も良いよ」

「マルカちゃん、頑張つて」

「うん!」

だから、マルカとカコと、さんにん でキャッチボールモドキをやつて遊んでいるのも、ひとつ の光景であり……将来は何か役立つかも知れない。

マルカには遊びでも、カコや俺にとっては それだけに限らない。色々と考えさせられる部分がある。

また、この時の 何気ない行動が未来を明るくしてくれるかも知れない。希望的観測に過ぎないが、そう思うと全てに意味がある。

決して無駄ではない。だから遊びを全力でやっても罪になるまいて。

なにより。 楽しめる内に楽しもう。

レッツ・パークライフ。

「うりゃあつ」

右手にボールをのせ、大きく振りかぶって沖に遠投。

それなりに大きなビーチボールが、青空を背景に放り出された。 我ながら上手く出来たと思う。

マルカの為にも、ある程度の深度がある箇所まで投げねば ならんので。 といつても、浅瀬の域を抜けないが。

「やー！」

それでも、マルカの……フレンズの能力か。　ザパーンと勢い良く水面から垂直に空へと飛び上がる。

その先には、俺の投げたビーチボール。　既に重力に引かれて落下を始めているが、マルカは上手く飛び上がる距離を調整した様子。

綺麗にボールの手前で止まった刹那、素早く空中で逆さになり、尾でビーチボールを叩いた！

しかも、叩かれたボールは　しっかり　カコに飛んでいく。

すげえ。　訓練ナシの、口頭説明でココまで出来るとは。　オペラント条件付け等が
いらぬ。　飼育員さん涙目である。　いろんな意味で。

まだフレンズの身体になって、1時間も経っていないだろうに。　これはマルカの
ひと個体　としての能力なのだろうか。

「ひゃっ」

一方でカコ。　飛んで来たボールを手で弾き、バランスを崩して砂浜に尻餅。　可愛
い。

同時に思う。運動不足だと。

研究所にいるからか、出歩いてもスポーツ的な運動はしないからか。

思えば学生の頃も、体育の時間に似た光景があった。その辺、カコは昔のままな気がして……ちよつと嬉しい。

「ふっ」

「笑わなくても」

「ごめんごめん。カコと また一緒に遊べて嬉しいなつて」

「へ？」

へっ、て。

ひよつとして、イヤだったか？

うーん。俺、カコよりは運動出来ると思っていろいろいるけれど、おつむ が悪いからね。

あまり 気にしないようにしていたけれど、学生時代は周囲にからかわれてたし……。

「ごめん。 イヤだった？」

「ううん！　そんなコト、ない！　私も……………嬉しい」

後半、内股気味の体育座りの姿勢から、俯いてモジモジしながら答えられた。無理してゐるんじゃないだろうか。

「……………そうか」

カコの本心は分からない。　馴染みとはいえ、本人ではないから。

「あー、立てるか？」

今は考えても仕方ない。

俺は手を差し伸べた。　熱い砂浜に　いつまでも座らすワケにはいかない。カコの顔が赤くなつてきているし。　立たせないと。

「うん」

して、素直に手を握ってくれる。砂混じりで温かく柔らかかな手は、どこか懐かしい。

「そらっ」

カコが浮いたタイミングで、ぐいっと手前に引き寄せれば、勢い良くカコが起き上がってくれた。軽くて結構。

「ありがとう、あんじゅ」

「どういたしまして」

報酬に微笑みをくれた。嫌われては いないかな。それだけ分かれば、今は十分。そう考えたら、自然と俺も微笑み返していた。顔が熱い。

なんだろう。安心して言葉をかけようか迷っていると。

どうしようか、なんて言葉をかけようか迷っていると。

マルカがいつの間にか再上陸していた。その表情は俺らとは真逆。心配そうな、

不安な顔。

はて。どうしたのか。尋ねようと思つたら、マルカが駆け寄りつつ声を上げる。

「ごめんねカコ！　ボール、強く叩いちゃった」

おう……カコを転ばせてしまったと、罪悪感を持ってしまったか。
して、謝れる心を持つ。　優しく思いやりのある良い子じゃないか。

「マルカちゃんは悪くない。私の方こそ、ごめんね。　上手く取れなかった」
「でも——」

カコも優しい。　逆に期待に添えられなかったと謝った。　その所為か、罪の意識が
消えぬマルカ。

互いにオロオロの応酬合戦。　アニメの　かばんちゃんとカメレオンの　やり取り
のよう。

でも、このままでは埒が明かない。　戦いごっこではないが、アフリカタテガミヤマ
アラシのように、ココは第三者、俺の介入が必要であろう。

俺はパンパンと両手を叩いて、間に入る事にする。　中和しなくちゃ。

「はいはい、互いに悪くないよ。陽射しが強いから、熱くなっちゃっただけさ」
「暑くない。大丈夫」

カコ。そこは肯定して。否定されると、円滑に進まない事があるの。
仕方ない。証拠を提示、とうか指摘しよう。「カコの顔が赤い」を喰らえ！

「そりやおカシイよねえ。だって、カコの顔は赤いんだもの」
「あ、あう……その、えっと」

途端に歯切れが悪くなる。更に、色白の頬に朱がさす。ふっ。このまま、コッ
チのペースに引き込もう。

「マルカも、そう思うでしょ」

マルカも巻き込み、包围網（ふたり だけだが）を作ろうとする。逃がさない。
バブルネットファイディングじゃないが。イルカだし。ココ、陸地だし。

「分からないけど……そうだね」

快活な雰囲気からズレて、少し静かに応えるマルカ。

少し違和感があった。分からないけど、そうだという言い回し。

表情や声色的に分からない事が分かった、という訳じやなさそうだが。

フレンズに個体差あれど高度な思考は難しいイメージなので……いや、これは偏見だ。でも大凡合っているだろう。

ヒトと似て、同じ言葉を使いコミュニケーションを取れても、どこか野性味は抜けない。考えはするが、ピュアな心のもと、原始的に終わる事が多いのではないか。

勿論、悔り過ぎて痛い目に合うパターンは避けたいが。

ただコレは深刻に考える事じゃないだろう。ただの遊びだ。考えるなら、未来

について考えた方が良く。ベストアンサーは知らん。

「という訳でカコ。皆で、海の家で休もうか。担当者が来るまで、あと少しだろう

し」

「……………か」

何やら、蚊の鳴く声が聞こえた。聞き取れたのも蚊の部分だった。

ぱっと見、虫が飛んでいるようには見えなかったが、いたのかも知れない。その意味でも、さっさとココから離れよう。そしたら、

「あんじゆが、奢ってくれるなら」

思わず顔を見ちゃった。いや、奢るつもりであつたけど。

なんか俯いてる。赤いまま。

ホント、大丈夫だろうか。

「あー、うん。その辺は大丈夫。冷たいモノでも頼むか？　なに食べたい？」

「カキ氷食べたい」

「良いぞ。焼きそばでも、ラムネでも奢ってやんよ。マルカもな」

「ヒトの たべもの って、初めて！」

「ふふっ。お祭りの時みたい」

祭り？　本土での思い出かな。

あまり、記憶は無いんだよなあ。 いや、正確には思い出さないようにしているというか。

ヒト絡みの世界は、面倒であったからさ。 カコ達には優しく振舞っていたと思うが、赤の他人の中には酷いヤツもいたから。

パークに来て、いよいよ忘却ぼうきやくの彼方であったのに……前世の悲劇まで起床してきた。 いけない。 早く闇に押し戻そう。 アレは 無くて良いものだ。

「あんじゅ?」「どうしたの?」

「え?」 あ、いや。 俺も暑さに やられた かな……そら! 海の家まで競争

だ!

「陸で競争するのも、初めてだよ!」

「もう。 あんじゅ らしいけど」

心配されたので、誤魔化すように走り始めた。

今世は今世。 今は今。 昔の話は関係ない。 今が楽しければ、それで良いじゃないか。

い。

未来はさ、何とかしなきゃって思うけど。 過去は どうにもならないんだから。

この思考も、何度となく繰り返し——この先も何度繰り返し悩むのか。

前世や過去、俺をのけものにした、酷い事をしたヤツらを未来永劫呪詛しても仕方ないのは、分かっている……つもりではある。

だけで。やるべき事はやるべきだろう。それは決められた仕事や世界だけに留まらな。

取り敢えず。今は走れ、杏樹よ。

その後。海の家でアイスクリーム頭痛を皆で引き起こし、店員さんに笑われ——互いに涙目に なりながらも、笑いあった。

ヒトやフレんズの少ない眩い白き砂浜。さざ波とカモメの声、して純粋な笑顔がある屋根の下。

都市部の喧騒とは違った、自然の中にある安らぎ。

それを感じられる長いようで短い時間は、「の」の字のパークロゴをつけた、モスグ

リーンジャケットの担当者の到来で終了した。

別にそれは良い。いつかは終わるのを知っていた。マルカも、素直に笑顔で付いて行き……去り際、大手を振って別れた。良い子だと思う。

この時間は俺やカコ、マルカを幸せにしたのは違いない。そして、思い出となり明日の糧となる。

明日からも頑張ろう。明確な目標は無い。だけど、何もしないのは嘘だ。

都市部に戻っても、この熱が冷めないでいてくれる保証はないのだけれども。

ただ、やらなくちゃ。

幸い、様々なパーク職員との連絡先は知っている。仕事の都合、自然と増えていたからね。

何か……何かしなければ。

それは転生者の責務か娯楽か。

恩か思想か。ただの自己満足か。

ヒトやフレンズ、パークへの情か――。

その答えは、
なんだろう。

☆菜々ちゃんのお歓迎会へ。

汗ばむ陽気の時間が過ぎ、観光は陽が沈むのに合わせて終了した。日帰りなのもあり、整備された駅周辺をフラフラしただけであるが。

一応、漫画版であった水族館と思われる、建物の前まではいった。まだオープン前であったから、入れなかつたけれど。

だけど、見るべきポイントはソコだけじゃない。

青空広がついていたリウキウチホーは、沖縄の方で見られる独特の建築様式がある。

それを初めて見て、それなのに郷愁にも似た感覚を味わえた。

石等の自然由来を感じさせる建材が使われていたからかも知れない。

コンクリートジャングルにいと、ザ・人工物ばかり見ていたからね。その反動で

目新しく感じたな。

一方で都会の喧騒がない生活を「良いなあ」と思ったのも確かだ。

さざ波の音が聞こえ、母なる海が隣にいる生活。誰や時間を気にしないスローライフを送りたい。

前世ほど思わないが、今世でも思う。仕事仕事では堪らない。せっかくパークに

いるから尚更に。

時間を好きなように使いたい。そして旅がしたい。かばんちゃんのように。

そして、新しい発見と輝きの日々を送るのだ。かつての幼少時代のように。

……………妄想だけだな。現実には上手くいかない。でも夢見たって良いじゃない。だってヒトなもの。

「またね、あんじゅ」

「おう。またな」

故にか。フリーになった時、寂寥感が押し寄せたのは。

都市部の大きな駅。改札外で、カコと手を振って別れた後。振り返れば、見慣れ

たビル群に文明の喧騒。

僅かに夕陽の淡い光が残り、空に星が瞬き始める時間。暗い世界を照らすは、発光

する大中小の、カラフルな宝石。ふたつひと組で、決められた道を転がるのもいる。

その都度、摩擦か風か。音が俺まで届いてきて……………ココがいつもの場所だと再認識

させられた。

「むう」

眩しさに目を細めた。それだけで光の線が縦に、横に伸びる煌びやかなステージに。けれど派手なステージで踊る者はいない。

ときどき、けも耳と尻尾をフリフリした……フレんズのシルエツトが横切って行くが、彼女らは文明に慣れているのか。

そのまま、影の世界へと溶けてしまう。タイリクオオカミお姉さまなら、この辺を上手く表現出来そう。まだ会ってないけど。

「昔は、感動したのになあ」

昔と今を比べてボヤきつつ。俺は寮へと歩みを進める。

踏みしめる大地は硬く、歩きやすい。そこに物足りなさを感じるから、俺も随分と贅沢になったものだ。

「ああ」

天を仰ぐ。地上と比べると小さく……だけど天然の宝石が、まばらに輝いている。どこか優しい光である。

なんとなく手を伸ばしては、掴もうとするんだけど、届かない儚さ。幼稚な行動だけど、今はこの切なさを掻き消したくて。

他のちほーならもっとたくさん、綺麗に見えるんだろうか。それこそ、宝石箱をひっくり返したような。人工物も、この辺と比べれば少ないからね。

また、サンドスターの影響で環境が違う。さつきまでいた、リウキウもそうである。それぞれの大地から見た空は、どう映るのだろう。ワクワクするのかな。

取り敢えず、今は。

「帰ろう。先の事は、また明日考えよう」

明日から本気出す。そう問題を先延ばしにしつつ、寮までひたすら歩く。取り敢えず、菜々ちゃんが来た最初の1年……今年は大丈夫だろう。

漫画版の通りなら、一応そんな雰囲気である。

問題は、あの先が分からない事だ。平和なパークを描写した第1世代の、あの世界の終わり。

パークの危機は如何にして起きたのか。こんな時、前世のけもフレファン……考察班のフレンズがいてくれれば、良い対策法が立案されただろうか。

「知り合いは、たくさん出来たのに。なんだろうなあ、この孤独感」

冷たい。そのクセ、ドロツとした気持ちで胸の内を渦巻いて落ち着かない。

結局、この不安を除くには行動するしかないようだ。管理センターの小動物に意見具申したように。

「何かしなきゃ」

ボヤきつつも、歩みは止めず。

俺の存在や行動は、世界に迷惑だとしても。何もしないのは嘘になる。

もつと詰めていくと俺の存在そのものが嘘なのかも知れない。だとしたら聞こう。創作世界である。けもフレワールドに、何故俺が存在するのだと。

その意味は、何か。この世界が夢みたいなものなのか。その割には、五感はしっかりしている。喜怒哀楽もある。生きてきた記憶もある。

それらに意味を見出そうとする。それはヒトの悪い癖か。「良い夢でも良いじゃん」となれないのだ。なるヒトもいるだろうけれど。

まあ、なんだ。幸い大凡の方針は決まってきた。今頃悩んでどうする。

人生、何かの意味を見出したいだけの自己満足でも良い。フレンズや皆と一緒にいたいだけ、パークから出たくないから守りたいという、利己的な思考だと罵倒されても良い。

生活費の為に働いて食費や電気水道代を払い「これが俺の人生だったんだな」と終わるよりマシだ。そもそも、最初はパークライフを謳歌するつもりで島に来たんだ。前世や本土で味わったような道を歩みたくない。

なら、信じた、歩きたい道を進んで行こう。他に道は見つからない。これが俺なんだと、自信を持って行けば良い。

かのようにして。言い訳するように、歩き続けて。

「いつ帰ったんだよ」

気が付いたら寮の自室という、ある意味ホラーな展開。良く事故らず帰ってこれたと褒めてくれ。

思考の海に溺れていたか。溺死する前に浮上して良かったわ。ホント。

「うん？」

して、無意識か。ポストから出したであろう、便箋を手に持っている。

宛名は……まさかのフレンズ、サーバルからだった。

あー。これは、あれだわ。

漫画版のアレだ。

内容を見る。案の定、菜々ちゃんの歓迎会……その予定日と時間、招待状だった。

電子メールで起こされるやたら綺麗な文字ではなく、少し太いような、それでいて角張っていない、柔らかく大きめの文字で作られた文を読む。

ななちゃんの かんげいかいを します。 ぜひ きてください。

そんな感じの、内容。

「ははっ」

沈んでいたぶん、笑いが漏れる。感動の涙も、溢れてくる。

「サーバルは、凄いやな」

この紙ひとつで、前向きになれた。してくれた。

知っていても、実際に見て聞いて感じるのとは全然違う。

電子メール等が普及した現代。このような手紙類が珍しく感じてしまう。

一方で、温かい。忘れていた温もりだ。

心への明るい刺激は、きつと、ヒトを笑顔にするんだなと思えるよ。

後日。菜々ちゃんの歓迎会へ。

サーバルが企画して、親友のカラカルと相談しつつ開かれたもの。

パークに来た菜々ちゃんを歓迎しようという趣旨のこの件。

漫画版を見ていると、相談時にサーバルが会に出そうとしていた料理名の書かれたメ

モをカラカルに渡しているのだが……文字の読み書きが出来る風である。ヒトの影響か。かしこい。

アニメでは読めなかったからな。これが文明の差なのだろうか。それにしても歓迎会か。

俺の時なんかは……あれ。記憶にございませぬ。のけものなんでしょーか。

いや、うん。仕方ないハズ。まだパークがドタバタしていた頃に、臨時職員として上陸したのだから。そうだ。そうに決まってる。

だから忘れられているとか、嫌われてるとかハブられているワケじゃない……よな？

「き、嫌われていたら招待状は届かんだろ。うん」

自身を安心させるように、ブツブツ言いながら会場の建物へ。

漫画版では、誰かの家なのか借りた建物なのか分からなかったけれど、足を運ぶと後者ほい。大きめの家風の、公民館みたいだ。

それなりのモノを収容しなければならぬのだ。一般の家じゃ難しいんだろうな。

あ、家で思ったけれど。

漫画版にて、カラカルやチーターは 立派なヒト基準な家に住んでいる。

一方でキタキツネやキンシコウは森に住んでいる感じ。 なんだろうか。 望んだり、試験的なのに合格すると都市部に住めるのだろうか。 分かん。

一方で、本土や大陸からヒトと共に移住してきたイエイヌやイエネコという例外もあるようだがな。

パークもよく持ち込みを許可したものである。 なんでも持ち込み許可を得るには「サンドスターによる突然の変異——アニマルガールに変身しても、パークは責任を負いません。 援助はしますが、今までと変わらず家族として大切に接して下さい」という書類にサインしないと駄目と聞く。

本土ではヒトの身勝手にペットの問題が深刻なのだ。 この世界のパークは、その辺を配慮して……持ち込んで良いけど、ちゃんと世話しろよと言っているみたい。 して言うだけでなく、面倒もある程度は見てくれる。 優しい。 悪く言うとは無い。

アニメでは、生態系の維持に配慮がどーとかで、ラッキービーストは緊急時以外、絡まないようにしていたが。 イエイヌやイエネコは、該当するのだろうか。 分からん。

そのうち、ガイドライン等が見直されるのだろう。 まあ俺は現状維持で良いと思うんだけどね。 イヌもネコも好き。 可愛いは正義。

「ココがあの子の……こほん。　会場の建物ね」

ふざけつつ、普通の、一軒家にあるような扉を開ける。すると紙を輪にしてつなげた飾りものや、歓迎会の文字が目飛び込んできた。学生の時、作った記憶が薄らとあるなあ、これ。懐かしい。して、その辺の全作業を俺に押し付けて、カコ以外は皆帰りやがった。　アイツら許さん。

続いて、長テーブルの上に、たくさんの食事。　勿論サラダもある。これはカラカルのアドバイスからだな。　対してサーバルは草なんかで喜ぶのかなという反応。

返答したカラカルは、ヒトの子に重いのは駄目だといい、取り敢えずサラダなのよ的な事を言っていたかな。

作ったのは……まあ、誰かにお願いしたか。　サラダは兎も角、他の料理で使う火とか包丁とか危ないし……。

して、調理実習で作業を俺とカコに任せ、携帯を弄っていた連中も許さん。　拳句、俺の分の料理をリア充男が彼女に渡していた。　マジ許さん。

代わりにカコが、自身の分を少し分けてくれた。　美味かった。

嗚呼、当時の味方はカコだけだったよ。　よよよ。　昼や放課後はミライと菜々もい

たが。

「あつ！ いらつしやい、あんじゅ！」

して、アルパカ……じゃなくて、サーバルが1番に お出迎え。 屈託のない満面の
笑みが、心に沁みるよ。 よよよ。

「ええ!? なんで泣いちやうの!? ゴメンね、なんか悪い事言っちゃったかな？」
「違うんだ、サーバル。 歓迎会とかの集まりに招待されて優しくされたの始めてで
ね。 ゴメンよ」

「そうなんだ？」

我ながら、なんか悲しい事を言っている気がするが、取り敢えずサーバルを心配させ
てしまったので謝る。

「じゃあじゃあ！」

何か。俺の涙に効果音を付けてくれるの？　滂沱とおっしゃるか。何気に
デイスツてるのかな？

「また、何か　お楽しみ会をするとき呼んであげる！　何もなくても、やっぱり呼んであげる！」

おう。なんて優しいんだ、この子。やっぱり泣くしかない。デイスツてるなんて思っでごめんよ。

感謝……ッ！　圧倒的感謝……ッ！！

「ありがとう……！！　ありがとう……！！」

涙を拭つつ、礼を述べる。親しきフレンズにも礼儀あり。ちよい違うか。
すると、サーバル。腰に手を回してギョツとして、

「うんうん！　菜々ちゃんを　皆でお祝いして、一緒に楽しもう！」

おう。

ここは、主役の菜々が泣く場な気がするが、俺だって泣いてええやん。だってヒトだもの。

「うん。 そうだね、ごめん」

「もー！ 謝らないの。 ほら、料理も皆で用意したんだ。 取皿は傍に置いてあるよ。 食べて食べて！」

こんな俺にも、笑顔を向け続けてくれるサーバル。 ここは、ご好意に甘えさせて貰おう。 それもまた礼儀か。

ところでと、まわりを見渡す。 コアラが料理を取り分けてたり、黒にチェックのスカートな、オトナの雰囲気醸し出すタイリクオオカミお姉さまが、白に朱を染めたような、綺麗な色をしたスカートのトキや、相変わらず探検服なミライと談笑している。

サーバルの親友、カラカルは主役の菜々が来るか、外の様子をジッと伺っているな。常識を兼ねているイメージがある一方、忍耐力強いと思う。俺は無理。

後で挨拶しておこう。 カラカルもだが、オオカミとトキとは、何気に会うのは初めてだ。

「ありがとう——菜々は、まだ来てないのかい？」

「うん。もう少し　したら来ると思うんだ」

たぶん、漫画版の通りならキタキツネも来る。元気にしてるかな、あの子。

さて。じゃあ、来るまでに挨拶回りをしておこう。

「分かった。　じゃあ、それまで料理食べたり、他の子と話してるね」

「うん！」

こんな時、挨拶の順番ってあるのかな。　ヒトを避けてきた身としては、その辺のスキルがゼロなので。

取り敢えず、知り合いのコアラから話しかけるか。　恐怖のパップネタは……流石さすがに無いだろ。　たぶん。　料理の前でそんな危険なネタは、してはならない。

コアラ的には気にして無いんだろうけど、此方はたまったものではない。　言いそうになつたら、阻止だ。

「や、やあコアラ」

やーい、ビビってやんの。 あ、俺か。

「あつ！ あんじゅさん、お久しぶりですう」

「おう。 体力測定以来かな」

「そうですねえ。 あの時は見守ってくれて、ありがとうございましたあ」

「何もしてないんだけどね。 でも、コアラはよく頑張ったね。 得意な事も見れた
というか、うん。 良かった」

「あ、パップの「オット他ノ子ニ挨拶シナキヤ」分かりましたあ」

危ない。 やはり恐れていた単語が出てきたか。 俺の言い方も悪かったが。

コアラに悪いが早めに切り上げて、ミライのトコの集まりへ。

女子集団に男が単騎たんきで突撃するのは勇氣があるが、幼少の頃に経験したからか。
ちよつと足が重くも、何とか声を出す事が出来た。

「やあ、ミライ。 して、初めまして皆さん……かな」

「お久しぶりです、杏樹あんじゅさん」

笑顔で返事を返してくれるミライ。嬉しいな。学生の頃や前世にて、無視される事もあったからね。あの時は……うん。そろそろ思い出すの止めようか。

「初めまして、杏樹さん。タイリクオオカミです」

「初めまして。トキといいます」

「ご存知の方もいるようですね。改めまして。俺は杏樹と言います。宜しくお願います」

して、同じように敬語で返事をしてくれるフレンズ。何だろう。文明を感じつつも感動するんだけど。

柔らかな表情で返事を貰える喜び。オトナの世界の取り繕ったナニかではない。そして、何より。アニメに出て来た子との出会い。性格や世代違いで感動がある。

タイリクオオカミ。

アニメのロツジにて登場。全体的に黒な服装で、スカートを履いている。だから

か、ちよつと大人っぽいというお姉さんの印象。

オツドアイで漫画を描いており、アミメキリンに先生と呼ばれる。オオカミは表現豊かとされ、それに因ちなんだ行動や言動を取っていた。

漫画版ではコンビ二回で登場。何をしているのか分からないけれど、此方はオツドアイではなく、ゆつたりとした余裕のあるお姉さん。菜々曰く、素敵なフレンズだったか。

俺からしたら魅力みりよく違えど、皆素敵みなすてきだと思っただけね。キタキツネはまあ……ワガママだけどさ。

そして、トキ。

日本では絶滅種であるから、アニメでは目のハイライトが消えている。歌うのが好きなのは共通しているな。その声は音痴おんちというか、独特なものも共通……。

漫画版ではピクニック回で登場したかな。第1世代は普通の目に見える。大陸から来た子なのかも知れない。

その美しい朱色はトキ色とも言われるそうだが、うむ。こうしてフレンズとしての姿も美しい。歌はアレだが。

よし。折角せっかく出会えたのだ。場はなんであれ、友だちになれるよう、好印象を与えないと。紳士しんしほく、お近付きおきつきになるう。

「いやはや、御おふたかた二方とも美しい。ご友人に持つ菜々が羨ましい限りです」

「「えっ？」」

ハモった。ミライも含む。

あれ、スベったぞ。なんか信じられないモノを見たかのように目見開かれたんだけど。俺みたいなるルックスに言われるのは、キモかったよね、そうですね、そうですね。

「すみません。お恥ずかしながら、素敵な集まりに来るのは初です」

「い、いえいえ！ お褒め頂きありがとうございます」

「私も、褒めてくれて嬉しかった」

フオローしてくれる始末。顔が赤いからね、ちよつと怒ってるのかな。

ああ……失言であつた。後悔先に立たず。仕方ない。次から気を付けよう。

一方で、ヒトであるミライ。ちよつぴり悲しげに見て来る。リカオンの件もあるからな、フレンズに迷惑かけるなど思っているのかも。

「あー、えと」

「大丈夫ですよ。　ちよつと羨ましいなあと思ったりしただけです」

あれ、羨ましいの？

ミライも褒めて欲しかったの？

「けも耳と尻尾！　私も欲しいですっ！」

違った。　勘違いだった。

ヨダレを振りまきながら、身悶えするとか……危険人物過ぎる。　いや、知っている
んだけど。

ほら。　オオカミもトキも、ちよつと引いてるやん。　この辺にしておけ。

「あー、そろそろ菜々が来るかも」

「はっ！　　そうですね」

「様子見てきます」

そうやって、落ち着きを取り戻したのを確認した後。皆に軽く会釈して、カラカルの所へ。

今の彼女は、玄関の外が見える窓の側。時々、縦長な けも耳が傾いて可愛い。

菜々が来て、落ち着いてきてからのの方が良いだろうけど、料理をもしやもしやするだけつてのもね……主役まだだし。フレンズは気にしてないけれどさ。

「どうも、初めまして……カラカル、さん？」

ちよつと低い姿勢で話しかけると、流石に無視できないのか。カラカルが振り返ってくれた。

「あつ。ごめんなさい、菜々ちゃんが出来ないか見ていたの。入ってきたタイミンで、クラツカーを鳴らしたいから」

ふむ。説明ありがとう。そこは漫画の通りであるか。キタキツネ風に言うなら「火薬クサツ」なシーンを計画している模様。

そんな彼女の姿形は、サーバルと似ている。違う点はオレンジっぽいような色に、

黒く縦長のけも耳。アプリ版でもサーバルとは親しい間柄だったが、第1世代の時点で仲良しであったか。仲が良いのは良きことかな。

「失礼しました。俺、杏樹と言います。また後ほど」

「ああ、貴方がサーバルの言っていた」

あら。サーバルが俺の事を教えていたようです。話がスムーズになりそうで良いですねえ。さすがサーバル、略してさすサバ。

「ケーキ屋の女性店員に興奮し、寮の部屋に連れ込んで管理センターに通報されたという」

「違うからね!!」 いや、違わないけど違うから!」

あかん。ダメな方を教えていた。それと嘘じゃないけど、ふたつの事件が混ざって言い方がアウト。

話スムーズにならねえよ。てか、情報入るの、早いよ!

サーバルは、初代からトラブルメーカー体質なのか。さすサバ!

「冗談よ、からかっただけ。 改めて、カラカルよ。 よろしく」

「そ、そつか。 よろしく」

いや、ビビった。 そういえばアプリ版では、揶揄う描写が多かったかな。 名前からきているんだろうけど。

漫画版では常識人な印象が強かったんだがな。 これはこれでフレンドリーで良いかもしれない。

「話し方も、それくらい砕けた方が良いわ」

「そうか?」

「そうよ。 話声を聞いていたけれど、あまり畏まらなくて良いと思う」

あ、聞かれていたのね。 フレンズって、ヒトより聴力良さそうだもんね。

都市部や遊園地の喧騒が無いところでは気を付けよう。 寮の自室でも、特定の音や声は出さない方が良い。

また誤解されるのは勘弁だ。 あれ、俺のプライバシーは何処。

「そうですね……じゃなくて、そうだな。俺も楽し
そうそう。 あ、みんな、主役が来たわ！」

カラカルが、窓を見、次には皆に聞こえるように声を上げる。
して、クラツカーを何処から出すと、俺に渡してきた。 え、パリピしろと？

「じゃ、一緒に祝いましょ」
「え、ああ。モチロン」

一応、というか菜々を祝う為に来ているからね。寂しかったのもあるが。
取り敢えず、祝わないで飯だけ食ってゴチになりましたあ、あばよ なんて事はしな
い。

「じゃ、みんな扉の前でスタンバイ！」

サーバルを前にして他の子たちも、いつのまにか玄関先に集合。 手にはいつのまに

かクラツカー。

まあ、うん。この流れるに不参加はないだろう。

やった事はないから、得意でも苦手でもない、この行為。

でも……やる事に意味かどうかとか、考えない。相手が喜んでくれるなら、笑顔になつてくれるなら、それで良い。

ガチャリ、と玄関扉が開く。

刹那。皆で一斉にクラツカーを鳴らした。

起きたのは、大きな音と火薬の匂い。して、祝福と感激の笑顔。

嗚呼。主役じゃないのに、俺まで笑顔になっていた。

心地良い。

祝うって、こうだったんだっけ。

閉会后。 菜々とキツネサマ。

菜々ちゃんの歓迎会は、ほぼ漫画の通りに終了。

菜々と共に来たキタキツネが開口一番、火薬クサツと叫び、菜々が涙を浮かべながらサーバルに抱きついて礼を言った。 尊い。

それは良いとして、ウツカリしていて阻止するのを忘れていたんだが。 開会の挨拶の後、トキが歌ったのも、漫画版の通りとなってしまうた。

表現するならジャ○アンを再現しました的な、凄いインパクト。 ガラスが割れ、悲鳴が上がり、キタキツネは「耳がもげる」と床に倒れる程に。

アニメでは、かばんちゃんは平気そうであったのに……世代だろうか。 漫画版とアブリ版のトキの歌は危険である。

なお、アプリではサタンの産声だと表現されていた。 今となつては笑えない。 見た目、とても美しい歌姫なんだけどね。 その、まあなんだ。 個性は大事だと思ふよ。

その個性で、ちよい先の未来……パークのお客さんによるポイ捨てを解決したワケだし。 有用性がある。 進んで聞く気が起きない辺りが。

アレ……なら害悪じゃね？　モスキート音つてレベルじゃなくね？　そう思う俺もまた、パークにとつては害悪であった。

改めて、俺の心は穢れていると再認識。　悲しい。

最後、閉会前にサプライズとしてカラカルが、びっくり箱で菜々を驚かそうとしたら、サーバルが余計な風に仕込んだらしく、出てきた蛇のオモチヤに双方驚いた。

して、カラカルがサーバルに怒って幕を閉じる……という。

ここまでは大凡知っている。　漫画版の終わり方である。　俺の知らない部分は、そう。　この後の流れだ。

「——皆さん、今日はありがとうございました」

「(こちらこそ、ありがとう)」

菜々が改めて礼を述べ、皆が笑顔で応対する。　言葉や雰囲気から閉会の流れであり、シメの言葉を掛け合っているのだ。

既にタイリクオオカミヤトキは帰宅。　ミライはサーバルとカラカルの片付けの手伝い。

「菜々、次から肉まん以外も欲しいわ。今日の食べ物、次から各種持つて来なさい」
「ダメに決まってるでしょ」

キタキツネ、相変わらずの女王さま発言。都市部に出て来て、多少の規則や道具の使い方、言葉は覚えたようだけれど性格は変わらず。

「仕方ないわね……あんじゅー！」

「ダメダヨ」

「まだ何も言っていないんだけど!？」

目が合った刹那、ボス風の口調で拒否らせていたたく。

だって、安易に予想がつくもん、フレンズって純粋な子が多いから思考が読みやすい気がする。気がするだけだが。

「どうせアレだろ、菜々がダメだから俺を使うという考えだろ」

「そうよ。何か問題？」

ヤダ、キタキツネサマ、なんの躊躇もない。俺を下僕か何かだと思っているのか。生憎、ソツチの趣味はないのだけれど。

見た目が可愛いければ、全て許される訳じゃないです。

「問題しかないね、俺は料理が出来ないんだよ」

それから根本的な問題を答えておく。健康管理等の側面から、フレンズへの餌付行為がダメなのもあるが、俺は料理が出来ない。

仮にも独り暮らしのようなモンなのに、何故に、というのは愚問だ。

今のパークには、コンビニという素晴らしくもブラックな文明があるからな、文明万歳。

して、閉鎖されたら飢えそうである。

「先輩、料理が出来ないんですか？」

菜々に突っ込まれた。

いけないよ、先輩だから出来るだろうとか、しっかりしていると思っちゃ。だって

ヒトだもの。

「出来ない」

「そんな自信満々に言わなくても」

「何を言う。出来ないのに出来ると言う方が問題だ、知ったかも良くない」

「いや、まあ、そうですね」

前世でも今世でも、後輩に馬鹿にされるルートを辿りそうだな俺。

だがしかし。バレた時の気まずさを考えれば安いもんだ。して、地位も安く見られてアゴで使われちゃう。使われちゃうのかよ。

「先輩、その。良かったら私が教えても」

「気持ちだけ受け取っておく。俺なんかの為に貴重な時間を割く事はないよ」

ぶつちやけ面倒なので、断っておこう。察の連中に、また通報されても困る。

「そう、ですか」

「いや、そんなに落ち込まないで」

目に見えてしゅん、とする菜々。　　凄い罪悪感があるんですがそれは。

「して、キタキツネも何故落ち込む？」

「だって、杏樹が料理出来ないとなると、私の食べ物、増えないんだもの」
「喰わせるの前提かよ」

作れても、おいそれと喰わせないけどな。　　腹でも壊したら大変だ、ブラックマターを作る気はないが、万が一が発生すると管理センターに叱られる。

そうだ、喰わすというと。
キタキツネの食料泥棒癖は直ったのだろうか。　　してないとは聞いたが、直接聞いてみるかな。

「それはそうとキタキツネ。　　もう食べ物盗んでないよね？」

「盗んでないわ。　　どう？　　エライ？」

ドヤツ、と胸を張られた。それなりに胸はあった、どこ見てんだろいうな俺。そんなキタキツネに突っ込むは、現担当者の菜々。ご苦労である。

「盗まないのが普通なんだよ」

「普通は、な。まあなんだ。立派に成長したと思うよ、エライぞキタキツネ」

「へへっ」

菜々は咎めたが、俺は褒めて撫でてやる。甘ちゃんだと思うが、キタキツネの性格上、こっちの方が教育に良いかも知れない。

「むう。先輩、あまり甘やかしちゃダメですよ」

あれ。菜々には意図が伝わらなかった、というか不機嫌な顔なんだけど。

「普通って、個人差があるし……ましてや森や山、海に住む半野生状態のフレンズはヒトの社会が分からないからさ。褒める時は褒めようかなって」

「まあ、それは……分かるんです。分かるんですが」

ブツブツ言い始める菜々。　へ、なに、ナニが不満なんだ？

「ああ」

分かった。　褒めて欲しいんだな！

分かるぞ、努力しているのに他のヒトばかり褒められるのを目の前にすると嫉妬するよね。　菜々も可愛いなあ。

「菜々も、偉いぞ」

「へ？」

「ちゃんとキタキツネの事を見てるんだなって分かるよ」
「ありがとうございます、ございます」

ちよつと歯切れ悪く、礼を言われた。　どうしたの、いつもの太陽みたいに笑う君はどこだい。

でも、次にはパツと笑顔に。　今のは、何だったのか。　気の所為だろうか？

「ごめん、変な事を言ったか」

「いえ。 嬉しかったです、私の事も見てくれてるなあって」

ヤバい、そんな事を言われたら俺ちゃん、後輩に ときめいちゃうじゃない。

でも直ぐに冷静に。 俺は臨時職員で、彼方此方に派遣されている。

菜々と共に行動するのは稀だ、そんなに見ている時間は無い。

「あまり、一緒にはいないけれどな」

「それでも、です」

「そ、そうか？」

「正直に言えば、ずっと一緒にいたいなー、なんて思いますけれど！」

「お、おう」

後半、ちよつと強く明るい口調で言われてしまった。 やはりか、気にしているのかな。

しかし、ずっと、ね。 俺には重い言葉なんだよなあ。 未来への不安があるから。

「俺も、皆と一緒にが良いな」

恥ずかしくも、願っている事を口にしたら……菜々、口を尖らせた。

ナニか、当たり障りのないコト言つたつもりなのに。

菜々の気持ちが分からないよ。本屋で猫の気持ちみたいに菜々の気持ちって売ってない？

「な、なんだい？」

「なんでもありませんよー、だー！」

「ええ」

そつぽ向かれた。全然分からん、だれかたすけて。

そう思ったからか、無意識に撫で続けていたキタキツネから救いの声が。なんか、やたらふにやふにやした甘えた声だけど、この際気にしない。

迷惑行動のみならず、役に立つ事もあるのね。キツネサマサマである。

「あんじゅー。 今度、あんじゅの部屋でも会を開けば良いのよ」

一瞬下ネタに聞こえたよ。 欲求不満というか心が汚れ過ぎ、きつと疲れているのよ
杏樹君。

「ああ……数人なら、大丈夫かな」

この際だ、取り敢えず適当に相槌を打ってお茶を濁すのだ。

「そうすれば、皆と一緒にいられるわ。 そうね、3、4人くらいなら平気でしょ」

皆、ね。 キタキツネからしたら俺の皆は3、4人程度らしい、もつといると思った
んだけどイマジナリーフレンドであったか、泣けてくるね。

「なんなら、一緒に住んじやえば良いのよ」

「えっ!?!」

更に爆弾を投下するなよ、キツネサマ……。

俺より先に悲鳴を上げたるは菜々。そりや、俺みたいなヤツと一ツ屋根の下とか嫌だろ。

「そうすれば、菜々が料理を作ってくれるじゃない」

「お前なあ」

「あう……杏樹先輩は、どう思いますか?」

「ダメだろ、常識的に考えて。ウチは男性寮だしパリピ万歳な住民が多いし、フレンズや女性が来たのが分かると大騒ぎするんだぞ。そも、同居は許可されていない」

「……………はあ」

ねえ。なんでそこで ふたり ため息なのさ、俺に輝きでも奪われたのかい。

アレ、俺って実は無自覚系セルリアンなのかしら。 ナニそれ怖い。

「先輩らしいですけれど。 私としてはもうちよつと、そう、もうちよおおつと女の子を見た方が良いです」

「もう料理を作らなくて良いわ。 代わりに お金頂戴。 自分で買うから」

おかしい、何故ふたりに責められているのか。 ナニを間違えたというのだね。

「まあ……うん。 キタキツネが成長しているようで嬉しいぞ」

「褒めるなら、お金頂戴」

「先輩も成長して下さい」

俺、パイセンやぞ。 そんな風格はないんですね、分かります。

予想通りルート突入ですかね、見下される系の方向で。

「あー、ミライ、サーバルにカラカル。 俺も手伝うよ。 皿洗いとか やるよ?」

「あつ、ありがとうございます!」

「逃げた」「ちよつと待ちなさいよ」

なんか外野がワアワアしているけど、その内収まるだろう。 それまで逃げとこ。

あつ。 言っていない事があつたわ。

「菜々、キタキツネ」

「なんです?」「なによ」

今日、今のうちに言っておこう。

「——これからも、どうぞよろしくな」

「あつ! うん! じゃなくて、はい!」

「え、ええ。モチロン」

おや。目を見開かれて、元氣良く返事をされたよ。ちよつと俺も嬉しいじゃない。

「よろしく願いますね! 先輩っ!」

「よ、よろしく……するわ」

同時に恥ずかしい。今、振り返る訳にはいかない。

俺の情けない顔を晒さないのは、せめての、先輩としての威厳。

いや、羞恥心からかな。

お尋ね者との邂逅

ナワバリから出ないフレンズであつたキタキツネだが、都市部での影響だろうか。

最近は自ら都市部に来る事もあれば、住んでいる森の中も探検している。

ネコジャラシを持って、るるんと森を歩く姿を想像すると可愛い。可愛くない？
知的好奇心、冒険心は分らない。その心は人生を豊かにするものだ。

そこには新たな出会いや発見がある。オトナになると「ふーん。だから、で？」な
些細な事も、フレンズや小さな子からすると、キラキラと輝くモノであり魅力があるの
だ。

だがしかし。子から提供される一部の情報は、オトナも興味を引くものだったりす
るワケで。

「森の洞窟で、ツチノコを見たわ」

この、キタキツネの話が始まりであつた。

他に似た報告もなく信憑性は低い。

一応は管理センターに報告されたものの、未確認動物……日本の有名なUMA、ツチノコなのか疑う者は多く「見間違い」「勘違い」等の意見で終わりにかけていた。ところが、その手の話に食いついた一部の研究員が管理センターに「調査だ」と主張した為に、仕方ないにやあ……と調査員が派遣される運びとなる。

誰が行くつて？

俺だよ。

直接お前が調べに行けよと思うのだが、そこは貴重な研究員や管理センタースタッフ。フ。

セルリアンに襲われたり、自然災害等に見舞われる危険を考えれば、臨時職員という名の奴隷が行かせ易いという判断だな。

本職側……ミライたち調査隊は派遣されない。所詮は代えの利く下級職員で間に合うし、都合が良いという事さ。

同時に期待されていないまでである、カタチだけの調査に俺は命を賭けるのだ。泣いても、良いよね？

このままでは、ヤバイ。死ぬ。何より心細い。そう思ったチキンな俺は助けを求めた。具体的には、管理センターの小動物に。

彼女なら、誰か助っ人を派遣してくれる……そんな期待を込めて。

「明日の朝、貴方の寮に向かわせます」

モノは言ってみるものである。助けが来るそうなの、これで少しはマシになる。

「貴方の友人だという方をピックアップしましたよ」

しかも、わざわざ付き合いやすいように、俺の友人を選んでくれたという。有能やん。

フレンズだろうか。みんな可愛いからなあ、デート気分で仕事が出来るかも！
そう樂觀していた時期が、俺にもありました。

翌朝。ベッドから顔を横にした際、ピクピクした肉塊が見えて一気に目が覚めた
ね。

「おはよう！　　久し振りに会えて嬉しいぞ！」

朝起きたら、ポージングを取ったマッチョがそこにいたのだから。

「ああああああああああ!!?」

なんだよ怖いよフザケンナ管理センターの嫌がらせか小動物めチクシヨウ!!?

そのマッチョは、知り合いであった。パーク・レンジャーの隊長である。開園前

に知り合ったヒトだ、友人かは分からん。

別の意味で死ぬかと思っただ。して、デートなんてとんでもないです。

ツチノコを早く見つけないと。でなきや、夜の森を再び彷徨う事になりそうだ

……。

り。いつかの時のように、ジープに詰められて森の側まで揺らされ、途中下車からの森入

いつかの実体験を再度なぞっている目で目を腐らせていた。

側から見たら、絶滅種のフレンズの目である自信があるね。

漫画版では、こんな調査の話は無い。俺の影響なんだろうが、ちつとも良くない変化だよ。

ツチノコの話自体は、漫画版であるんだけどね。故に彼女が、第1世代が存在するのも知っている。

この世代。アニメと違い、遺跡の調査はしていない。そも、遺跡自体、この世代か運営中の間に造られた建造物が後の未来における遺跡であろうから、その意味では遺跡自体、今の時代のパークに恐らく無い。

では、何をしているのか。それは自身の容姿を見たヒトが驚くものだから、自身の姿は怖いのだと思い、人の目に付かぬよう、洞窟でひっそりとサバイバルな生活をしているのだ。

少し寂しさを感じさせる子であるが、迷子になって、洞窟にやって来たキタキツネと出会い、会話をし、外に出る事にする。

今は、その辺の段階だろう。ということとは、洞窟に居ない可能性がある。

それでも洞窟に行かねばならない。下手に動き回るより、住処で待ち伏せた方が良い。

その為にも報告をしてくれたキタキツネと合流、協力を仰ぐ。場所を教えて貰わな

いとならん。

「キタキツネツ!! キタキツネは何処だ! 返事をしてくれ!」

大声を森に響す隊長さん。都市部でやったら間違はなく通報モノである、して俺も捕まる、同伴者はツライさん。

「いやー、真面目に探さなくて良いんじゃないスカ。ツチノコってUMAですよ」

「何を言う。UMAだからこそ、探す楽しみが増すというもの!」

「気持ちは分かりますがね」

分からないモノを探す、宝探しのようなワクワクは、まあ、俺にもあるけどさ。

そういう俺より昔の世代、ツチノコブームというのがあったそうだ、多額の懸賞金が賭けられたとか。

「もしいたら、捕獲です?」

「しない。友になる」

あら、優しい。金という俗な単語を浮かべた俺とは大違いだよ、キタキツネも最初は似た考えだったが。

「拳で語り合えば、言葉や壁は乗り越えられるっ！」

ダメだった、脳筋思考だった。

「フレンズ化しているなら、普通に話し合いますよ!?!? 言葉、通じるんですから

!」

「むっ、そうか! 拳以外に語る方法がある……パークは良いところだな!」

今まで拳で語り合ってたんか。 いや冗談だろう、オカピと殴り合ったと思えないし。

「しかし、キタキツネが出てこんな。 本当にこの辺なのか?」

「え、まあ……ナワバリはこの辺なんです。 最近は都市部にも出掛けているから、

なんとも」

「ふむ、最悪は自力で探さねばならんか」

「いやあ、それは避けたいですね」

「気合いで乗り越えるんだ！」

「無理ッス」

気合いで乗り越えられなかったでしよ、開園前するとき。 忘れたワケじゃないよな？

「キタキツネの協力が得られないなら、諦めて帰りましょうよ。 管理センターには

『何の成果も得られませんでしたあ！』と報告しても許されますよ、UMAだし」

「案ずるな、こんな事もあるうかと用意していたモノがある」

隊長のいう「案ずるな」は案ずるんだよ、ロクなアイディアじゃないよ。

そうして懐から出したるは、ザルと肉まんである、やりたい事を察せるのが悲しいなあ……。

「ザルくないですかね」

ザルだけに。

「いや、これはザルだ！」

そう言ってるじゃん、意味は違うかもだけど。

「俺はコレを使ったナイスなアイデアを考えたのだ！」

「あー、はい。お任せします」

「ふっ！ 見ているが良い！」

そう言うと、その辺に落ちていた木の枝を拾って紐を付け、ザルが斜めに浮く様に突っ張り棒に。

「これで、茂みに隠れて……キタキツネが来たところで紐を引く、するとキタキツネが捕まる。 どうだ、良い考えだろ」

「ザルの大きさからして、捕まらないでしょう。 それにキタキツネは そこまでお

「バカじゃないかと」

「やってみなきゃ分からない！」

見ても聞いていても「ええ」なんだけど、ツツコミを入れるのも疲れるのでお任せするわ。

「アンタたち、何してるのよ」

「うおっ!？」

茂みに隠れようと踵を返した刹那、突如として声がかかったのでビビったわ、見やればキタキツネだ。

「ふっ! キタキツネを捕まえようとしておるのだ」

「隊長、目の前のフレンズがそうツス」

「ナニ!? いつの間になっていたのか、やりおるな!」

「大きな声を出し続けられても困るから来たのよ、感謝しなさい」

「おお! 感謝するぞ!」

「へ、変なヤツね」

隊長のハイテンションに引くキタキツネ。その気持ち分かるよ、逃げたいよね？
逃げたくない？

「それで？ 私を捕まえて、どうするつもりなの？」

ジト目で知り合いである俺を見てくるキタキツネ。酷いことするつもりはないよ、
ホントだよ？

「ツチノコを見た洞窟に案内して欲しいんだよ」

「イヤよ、面倒臭い」

「案内してくれるなら、そのザルの下にある肉まんをやろう」
「仕方ないわね、案内してあげる」

チヨロくないですかね、悪いオトナにお菓子を貰ってホイホイ拐われそうで心配。

「ふふん、良いヒトね♪」

「お前なあ」

笑顔で、先程の評価とは逆な事を言うキツネサマ。　して、地面に直置き的肉まんに手を伸ばす、なんか悲しいなあ。

「今だあ！」

「ひゃっ!？」

して、案の定というべきか。　紐を引いてザルを倒す隊長、こども　ですかアンタ。　ところが、そこは身体能力が高いキタキツネ。　肉まんを持ったまま素早くバックステップ、ざるは空を切る。

運動、反射能力も高いんだらう。　思えば漫画版にて奈々と一緒に崖から落ちた時、空中で奈々をお姫様抱っこ。　最後は着地が決まっていたな。

何気に第1世代のキタキツネって強いんじゃない？

ひよっとすると歴代最強なのかも知れん、だから何だよな話だが。

「ちよつと何するのよ!？」

「畏が勿体なくてな、つい悪戯心が！」

「あー、はいはいツチノコ探しに行きましょう」

だが搜索とコレは関係ない。越権ながら仕切らせていただくわ、このまま喧嘩されては日が暮れるんで。

「さつそく洞窟に案内してくれ」

「むー、仕方ないわね。肉まん貰った事だし」

「一キロで言うことを聞くんじやないのか」

「なに？ もつとあるなら貰うわよ」

「無いんで、今ので勘弁してくれ」

余計な事を言ってしまったが、案内はしてくれるらしい。良かった。

キタキツネを先頭に歩く俺ら。背を見て思うのは、良い子になりつつある、という事かな。

あと稲穂のような尻尾、モフりたい。

ホントにさ……パークは、このまま何事も無ければ良いのに。

「ハイハイ」

迎り着いたは森の中の洞窟。意外と近かったんだけど。いや、助かるから良いが。

「じゃ、後は頑張ってね」

「キタキツネは？」

「案内しか頼まれてないもの、それしかやらないわよ」

わお。それ、ヒトの社会で言えたらどれだけ良いだろう。

取り敢えず、この件に関わった管理センターと研究員に言ってくれと嬉しいな。して、俺は呼び出されて怒られる未来になるんだろう、怒られちゃうのかい。

「じゆうぶん助かった！　ありがとう！　後は我々職員でやるから、大丈夫だぞ

！」

「ありがたいなキタキツネ。 菜々によろしくな」

「ええ。 今度、部屋に遊びに行くから肉まんでも置いておいてよ」
「不法侵入と泥棒はやめろ」

去り行くキタキツネに軽く礼と手を振りつつ、洞窟に向き直る。

大口の中は漆黒に包まれ、先は見えない。 怖い一方、ワクワクするね。

「ふっ！　　ここからが本番だぞ！」

「まあ、そうっすね」

「今度こそザルを成功させる！」

ザル？　　もう成功しているじゃん、別の意味で。

「捕まえないんですよ？」

「おっと、そうだった！　　ならば拳で語る！」

「やめましょうね」

懐中電灯を装備、奥に進みつつ隊長にツツコミを入れる。真面目に聞いてると疲れるので、もう適当に流しているけれど。

「ツチノコさん、いませんかー!」

声が響かせてみる。それは闇の中へと吸い込まれていくが、聞こえただろうか? どこかヒンヤリとした空間は、不気味で寂しさを孕ませる。

この中に、長らくツチノコはいたのだろうか……可愛そうと思うのは、俺の勝手になるが……ううむ、会ったら友だちになりたい。

「出掛けているのかも知れん」

「そうですね、1度入り口に戻りましょうか」

そう言いつつ振り返ったら……懐中電灯に照らされたフードの女の子がぬわん、と照らされて

「うおおおおお?」

思わず声が出てしまったよ！

「眩しいモノを向けるな」

「お、おう」

フードの女の子は淡々と訴える。お陰で冷静になれたので、素直に電灯を逸らした。た。

下にライトを向けると、ひよろりとした尻尾が見える。ああ、この子もフレンズなんだなって分かるよ。

「ふむ、君がツチノコ君かね」

「お前も眩しいモノを向けるな」

隊長……俺の真似をしているのはワザとなんですかね？

「すまん」

「大丈夫——ツチノコだ、驚かないんだな？」

「いんや、驚いたぞ！」

「そうは、見えなかったけど。隣のツレはともかく」

「UMAのフレンズとも会えるとは……出会えた奇跡に感謝する！
はっはっはっ
！」

「……なんだこのヒト」

「気にしないで、そういうヒトだから」

豪快な笑いを洞窟に響かせる、憂鬱とは無縁そうな笑顔が羨ましいね。

「色んなのがいるんだな」

「うん、まあね。ヒトも けもの も、皆違うさ」

みんな違って、みんな良い、という見方もあるけれど、仲良くなれないヤツとは無理
しない方が良いでしょう。

フレンズとヒトは違うのだ、前世と本土で俺をイジメた連中、マジ赦さん。

「ところで、名前を呼んだと言うことは わざわざ会いに来てくれたのか？」

「うむ！ 管理センターに頼まれてな！」

「管理センター？」

あれ、管理センターを知らないのか。 いや、無理もないのか、ツチノコは周囲とのコンタクトを避けてきたのだから。

「パークの いろんな事を管理しているヒトや建物の事だよ。 ソコに頼まれたんだ」

「なんでまた」

「キタキツネ……キツネの子の話だね。 ツチノコはヒト、日本からしたら有名なのに未確認動物で珍しいから」

「——ああ、それで」

ブツブツと言うツチノコ。 漫画版であつた、キタキツネがツチノコを捕まえようとした件を思い出しているのだろう、たぶん。

「なんにせよ、出会えて良かった。友だちになつてくれないか？」

レアな友だちがいるとか、ステータス高まらない？ 興奮しない？ お友だち価

格も高いですよ、そんな俺は俗っぽい。

「俺からも頼む！」

隊長も、そんなレア度にあやかりたいのかな？

「唐突だな」

「駄目か？」

「駄目じゃないが」

「よし、決まり。仲良くしよう」

「勝手なヤツらだ……良いけどな」

ふっ、と薄笑いを浮かべるツチノコ。嫌われてはないようで安心する。

「では、隊長。管理センターに報告を」

「いや、それは止めよう」

え？
なんでよ、我々の成果じゃん、大金ゲットで有名になれるかもなチャンスよ？

「ツチノコ君、これから君はどうするんだ？」

「これまた唐突に……そうだな。外に出て、いろんなモノを見て聞こうと思う」

「ふむ。ならば、なるべく、ありのままの世界を、パークを見せたいと思う。職員

としても、個人としても」

なんだかシリアスな感じになってきたんだけど。

アレだ、報告すればパークは大なり小なり騒ぎになってしまう。そうなれば、ツチノコは捕獲対象になったり、アイドル風にキヤーキヤー騒がれてしまうだろう。

そうなれば、パークをゆつくり見れなくなるだけでなく友だちも作れない。作れても、それはきつと、利益不利益等を考えた二セモノだ。

1度ウワサが広まれば、群れの圧が押し寄せるだろう、それはツライさん。

俺は、そのツラさを少しばかり理解しているつもりだ、モチロン前世とか本土での経験である。

ヤツらめ。 ゆ・る・ぎ・ん!!

今回の隊長の言葉、ギャグは良いとして俺には重い。過去の経験だけでなく、俗っぽく穢れている俺が浮き彫りになった気分です、ツライさん。反省不可避。

「——分かるな、杏樹君」

「……ッ」

両肩に、ぼんと乗せられる大きな手。力強くも温かくて、責めているようで赦してくれる……慈悲深い、そんな手だ。

——何気に、名前を呼んでくれたのは初めてな気がする。思い出せないけど。ただの脳筋じゃない。隊長の器の片鱗が、ココにあるのかも知れない。

「……はい。俺も、同意見です」

「うむ、聞けて安心したよ」

そう言うと、いちどポンツと俺の肩を叩いて高らかに笑う隊長。嗚呼。

馬鹿にしていた部分があつたが、馬鹿だったのは俺の方だったかな。

1歩間違えれば、自身の発言や行動が誰かを苦しませる。

この世界で、パークではその辺が無縁になるだなんて、妄想だ。欲を出し過ぎれば、

ヒトだけでなくフレンズも傷付ける。気を付けないとならない。

一方的に被害者だと思うのもまた、妄想なのだ。無意識に加害者になっている……

ひよつとしたら、既にやらかしているのかもな。

そう考えたら、急に怖くなってきたよ。

やはり、人間関係は面倒だ。

その後。

ツチノコは発見されなかったと嘘の報告ひとつで、この件は片付いた。

UMAだ、本気で探そうとは思っていないのだろう。管理センターは、これ以上は言つてこなかった。

サンドスターつて神さまのフレンズやUMAも生み出すのか、スゴいねー(棒)で幕を閉じたかな？

いや、本気で探すにしても調査員不足かな。

ただ、パークにいる以上は……そのうち発見されるのかも知れない。

だとしても、俺は シツコイ干渉はしないようにしようと思う。

ツチノコの為、パークの為。

ヒトにもフレンズにも、どこかで線引きは必要なんだ、きつと。

「杏樹君、お・は・よ・う！」

再び朝からポージングを取るマッチョを見て、余計にそう思う。

お前のモーニングコール(電話じゃなくダイレクト)は、いらん！

☆パークの歌姫

ジャパリパークに来園した お客さんで日々溢れるアトラクション園内にあるベンチにて。

少し汗ばむ程度に良い天気の中、俺は道行く若人を腐った目で眺めていた。

ここだけ見ると、無気力になってしまった無職の男だと失礼に思う輩がいるだろうが、断じて違うと主張しておく。

たださあ……ちよつと疲れたのよ。朝起きたらマッチョがポーズングしていたら、精神的に来るでしょ。

あの後、管理センターに連絡して帰って貰ったわ。モーニングコールはいらん、朝から刺激物は身体に悪い。

「———そんでさあ」

「———なにそれ、ウケるんですけどー！」

前世、本土のどこかでも聞いたような口調が耳に入る。

して、ポイ捨てしていく光景も、どこかで見た光景である。
パークに来て、ヒトはヒト。

リア充はリア充だ、俺と異なる種族である。

綺麗なジャ○アンになる事もない、俺とか欲に塗れたままだし。

ありのままの姿で良いよ、気取らなくて良いよという優しき言葉を掛ける者もいるが
な、こういうのを見ると変わるべきトコは変えるべきだと思うの。

ただし、目の前の光景全てがヒトではない、誤解はいけない。

様々な性格と役割があるのは、パーク職員を見てきた者なら分かってくれるかな。

マツチヨもそうだが、菜々やミライ、カコ、管理センターの小動物……この近辺にい
る接客員等。

自分の為、フレンズの為、パークの為、大切なモノの為に日々の役割をこなす。

俺にだって、役割がある。 いや、ベンチに座る役じゃないぞ。

「またか」

足下に転がってきた空き缶を見てボヤク。 これで何度目かなあ、俺がゴミ箱に見え
るんですかね？

俺はソイツを拾い上げ、指定されたゴミ箱に捨ててに行く。

その光景は、周りにも見えている筈なんですがね、それでも俺の目の前でポイポイ捨てるヒトは、なんなんですかね。

俺が見えてないのか、空気ですかそうですか。

フレンズもいるというのに、真似したらどうするんだ全く。

今の俺の役割、ゴミ拾い……臨時清掃員。

増えてきたポイ捨てに対処してくれ、ヒト増やしてとの事で俺が派遣されたのだが。周りに散らばる、或いは歩いているゴミを見て思う、思っていたより深刻だと。

「フレンズの出番かな」

漫画版であった、あの回を再現するしかないのか。

正直、避けたかったが止むを得ない。

ヒトと、けもの、無差別にダメージを与えるアレは歓迎会でお腹いっぱいだが、再び披露して貰わねば。

「ゴミはゴミ箱へポスターも役に立たなかったからね、直接訴えるしかないね、仕方ないね」

ヒトは誤ちを繰り返す、パークでもやらかしている。　だつてヒトだもの。
だが、悪行を許すワケにはいかぬ！

「結果として生まれる苦しみを、味わうが良いわりア充どもお！」

苦しみ、地べたに這い蹲る若人を脳裏に浮かべて、暗黒微笑を浮かべる俺。
仕方ない、仕方ないのだ。

ヒトには罪を知ってもらわねばならないのだから。

「というわけだから、トキ。君の素晴らしい歌声で皆に伝えてくれ」
「はいー」

アトラクション園内の、広場にて。

目の前で返事をしてくれるのは、純白に綺麗な朱色を染めたような、美しい服を纏う女の子。

頭部には、鳥の翼。スカートと服の間からは、やや扇状に見える尾羽。

うん、音響兵器なフレンズ……トキです。

けもフレファンなら、知っている子であろう。アニメにも出てきたからね。

歓迎会にも来ていたから、俺や菜々とは面識がある。綺麗な朱色はトキ色と呼ば

れ、歌が好きなお子としてもパークでは有名らしい。

有名……なのだが、たぶんそれは、歌が破滅的な意味も含まれる。不協和音という

か、モスキート音ってレベルじゃねえ嫌な声で歌うのだ。

勿論、トキには言わない。不必要に傷付けるつもりはないからね。

話しは普通なのにな、フレンズって悪いトコも受け継ぐっばいから、可愛そうだと思う。

後の世代……アプリやアニメでも、そうであるし。

だが、今回は役に立つ。役に立って貰わねば困る……!!

「あの、先輩」

トキの隣、この件に立ち合いになった菜々が、ひそひそ声で話しかけてきた。

「なんだい」

「トキに、ポイ捨て注意の歌を歌わすってマジです?」

おい、苦虫を噛み潰したような顔をするんじゃない。正史(?)にて貴女が やつていたんだからな。

「良いじゃないか、トキは大好きな歌を歌い、罪深きヒトは反省する。一石二鳥だよ」

「そう、なんですかね?」

「そうに決まってる」

ヒトは反省しても、時が経てば誤ちを繰り返す、ならその度にトキも歌える。

アレ、ヒトの誤ちも全部が悪じやないね、トキが歌える場を作るとかりア充共も良いトコあんじゃん。

俺もその都度、ヤツらが苦しむ姿を見れるつてモンだ。 あ、俺も苦しむから駄目か。

「何にせよ、ポイ捨てという悪行を止められれば良いのだ」

「なら、先輩が直接訴えるのは？」

無理です、パリピな若人にルールとかマナーの単語を口にしてみる、気に食わないつてんでヘイトを向けられて罵詈雑言を浴びせてくるぞ。

そうしたら、豆腐メンタルの俺ちゃんが立ち直れなくなるでしょ。

群れの力を見せられちゃうのは勘弁だ、取り敢えず適当に誤魔化しておくか。

「音痴なんで」

「歌わなくても良いんじゃない」

「歌の方が、人々の印象に残ると思うんだよね、特にトキのが」

「……そうですね。忘れられないと思います」

「そんなに私の歌を評価して下さい……あんじゅさん、ありがとうございます！」
「ああ。頼んだよ」

笑顔を向けられた。ちよつと罪悪感が湧いてくるんだけど仕方ないね、パークと俺、そして君の為だよ。

「では、歌います！」

そう言つてトキは、頭部の翼を広げ空に浮き、

「ミは みんなのミ♪ ファは ファイトのファ♪ ソは おみそ汁♪」

ツツコミどころがある、して耳がもげそうな声で歌い始めた。

「ウギヤアアアッ!?」「耳がっ耳がああああっ!?」「キヤー!?」「ナニこの音は!?」「不幸になる!」「この世の終わりだア!」

そして上がる断末魔、斃れるパリピ。

「ふ、ふはは……！ 見ろ、罪人どもが苦しんでおるぞ！」

「先輩もスゴい苦しそうなんですけど!?!」

「オマエモナー！」

頭がクラクラして、周りのパリピや菜々共々、俺も斃れる。

それでもなお、周囲の罪人の苦しむ姿を目におさめようと、歪んだ笑顔で確認。

近くにいたフレンズ——こちらは無罪だが——は更にキツそうだ。アードウルフやカバは、けも耳を塞いで悶えている。

「ゴミはゴミ箱へ〜♪」

だがトキの声。耳を塞いでも、防ぎきれない。脳を直接揺さぶられる不快感が早く終わってくれと願うしかない。

だからか。「俺がルールだぜヒヤッハー！」な若人も音を上げてしまうのは。

「も、もうポイ捨てて……しま、せん」

遺言を残すかのように、一様に絞り出した声が出た刹那。

トキの歌が終わった。短いようで長かったな、二度と聞きたくないです。

「ふふっ、どうでした あんじゅさん？」

その罪を知らぬかのような、天使が……いや、悪魔的な子が俺の前に舞い降りた。

「あ、ああ。良かったぞ……また、ポイ捨てが多くなったら頼む、よ」

「はー」

その時には立ち合いは勘弁な、もう味わいたくないでござる。

その後。

管理センターに例によつて怒られた。おかしいな、良い事をしたつもりでいたんだが。

ヒトもフレンズも難しいね？

まあ今回トキが満足そうな笑顔だったから、良かったと思う。後、罪人が正義に屈したような光景が見れて、俺も満足だよ。

くくつ。

熱血少女とハチミツと。

ヒトとフレンズが共存しているとも言える第1世代。

その光景は、都市部で多く見られる。漫画版でいうと、コアラがコンビニでバイトしていたり、リカオンとマーゲイがケーキ屋で働いていたりするのだが、その例だろうか。見た目は可憐な女の子って感じだし、普通にヒトと意思の疎通が出来るから、大きな壁が無いように感じられる。

だがしかし。体力測定の際のように、身体能力の差や知識の違い、純粹故の問題がある。パップとか……いや、パップは忘れよう。

とにかく。職員は、その差による問題に対処しなければならぬ。ヒトとフレンズの健康と治安向上に努めるのだ。

して、菜々風に言えば、ヒトとけもの架け橋……は、大袈裟かもだが、これからも友だちの関係を続けたいと思う。

「大変だ！　都市部でフレンズが喧嘩してららしいぞー！」

だから、この話にも対処しなければ。

姿形、十人十色。キタキツネが最初、ワガママガールであつたように、皆が皆、言う事を聞いてくれるフレンドリーな子ばかりではない。

だが選り好みするのは、違うだろう。

そんな事をしたらさ。落ち着いた後、互いに傷付くと思うから。

——それは、避けたい。

「俺、行つてきます」

だから俺は、直ぐに現場に向かう事にしたのだ。

「オラア！　何とか言つたらどうなんだ！」

あー、こちら杏樹臨時職員です。都市部の道路脇、現場に到着しました。

ヤンキーな、だけど可愛げを感じられる女の子の怒声が聞こえ、その音源を囲うように歩道で人集りが出来ております。

正直怖いんですけど。帰りたんですけど。なんで引き受けちゃったんだろうと今頃後悔してますよ、ええ。

でも仕事なんです。勇気を出すんだ。

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ。

「というわけで、キタキツネ先生！　お願いします！」

「なんで私なのよ!?!」

こんな時は、最近は言う事を聞いてくれるキタキツネに任せよう！

「突然呼び出しておいて、喧嘩を止めてくれなんて。あんじゅ　ひとりで　やって

よ」

あれ。言う事を聞いてくれないわ。

「プレミアム肉まんをやるから、何とかしてくれ！」

「イヤよ。喧嘩なんて、私、やった事も止めた事もないんだし」

ええ……担当者の菜々と言い合いになってたりしないの？　けもの　の時、親兄弟

と経験ないの？　そういうの、喧嘩のウチに……入らないのか。

今回は拳が交じりそうな雰囲気だし。レンジャーを呼べば良かったか、してヒト前で殴り合いになって、呼んだ俺が怒られる、また俺かよ参ったね。

「でもさ、今のキタキツネは歴代最強かも知れないから、安心して止めてくれ」

「意味分かんないんだけど」

「頼むよ。頼れるの、キタキツネしかないんだ」

「うう……仕方ないわね」

手を合わせて懇願すると、しぶしぶといった様子で引き受けてくれた。

根は良い子だからね、キタキツネ。特に最近は、目に見えてそう感じる気がする。

気がするだけだが。

「はいはい、道を開けて」

図々しくも、堂々と臆する事なくヒト払いをして前に進むキタキツネ。今日ほど頼りになると感じた事はない、たぶん。

「じゃ、俺は背後からついて行くから」

して、女の子の背をビクビクとついて行くシャバ僧。俺だよ。

「さっきからダンマリか！」

前方から再びの怒声。

ヒエツ。俺は関係ないのに、怒られている気分。

そんな俺に反して、キタキツネは臆する事なく声主に声をかけた。つよい。

「ちよつとアンタ。何のフレンズか知らないけど、喧嘩なら止めなさい」

「あ？ 誰だよ、お前」

「キタキツネよ。 して、背後のコイツは あんじゅってヒト」

おい、俺の名前を出すんじゃない。 それと前に出すなよ、ヤンキーの前に出たらシヨック死しちゃうかも知れないでしょ！

「ど、どど、どうも。 杏樹ツス。 焼きそばパンでもコロツケパンでも買ってくるパシリなんて見逃して下さい、後、喧嘩もヤメテ下さいお願いします」

先手必勝。 90度のお辞儀技を繰り出す俺。

これでダメなら、更なる技を繰り出すしかない。 その名も土下座である、プライドなんて捨てちゃうゾ。

「やきそば？ ころっけ？ ぱしりってなんだよ。 ハチミツの一種か？」

あれ。 都市部に住んでいれば知っていそうな単語を知らんのか、このヤンキー。

パシリはともかく……焼きそばやコロツケを知らんとは、食ったパンの枚数を覚えて

ないという感じでもあるまい。

チラツと前を見る。喧嘩相手は知らんけど、せめてフレんズは確認しなければ……。

「あれ、キミは」

小さな丸耳に、普通ほくもモフリたくなる尻尾。赤いネクタイに、グレーのカー
デイガンを着了た学生ルツクなスタイル。

背の赤いマントと、鼻の絆創膏が印象的な女の子……つて。

「ラーテル?」

怖いもの知らずという けもの、ラーテルのフレんズであった。

「そうだぜ!　ワタシはラーテル、世界一の怖いもの知らずだ!」

「なによ、知り合い?」

「いや、会うのは初めてだよ」

いやはや、まさかラーテルと会えるとは。いちおう、漫画版でチラツとモブとして出ていた気がするけど。

出会えた奇跡に感謝……して、良い状況じゃないよな。

「その、ラーテルさん。キミは誰と喧嘩していたんだ」

「目の前にいるヤツさ」

目の前？ 野次馬と、キタキツネと俺と……俺かよ、ドツペルゲンガーでもいたんかね、ヤベエよヤベエよ。

「他に いないじゃない、逃げたんじゃないの？」

「いるじゃないか」

「どっよ」

「さつきから睨んでくる、コイツだぜ！」

そう言って、指をさすラーテル。目線で追うと、直ぐ隣で路駐している無人の車が

あつた。

「このデカブツ、睨みつけてくるばかりで微動だにしないし、モノも言わないんだ！」
「ええ」「アンタねえ」

憤慨するラーテルには悪いが、そりやそうだろう。

車は乗り物である。最近の車は分からんが、喋りもしなげや、ヒトの操作や指示ナシに動いたりしない。トランスフォームもしない。

「そりや車だ、いきもの じゃないよ」

「だけど睨みつけてくるぜ！」

「目に見えるのはライトだよ」

「らいと？」

「なんと言えば良いか。ヒトの使う道具だ、だから睨みつけるとか、ないです」

文明を知らぬフレンズに、説明するのは大変である。

ラーテルがどこまでの知識を持って、この都市部にやってきたのか分からない。

普通、ある程度の知識が無いと危ないから教育されるのだけれど……迷子か？

「そうか、ヒトの道具か！　道理で喋らないハズだ！」

豪快に笑うラーテルさん。

納得したようで、何よりです。

最近のは喋るモノもあるけれど、言うとな面倒なんで黙っておこう。　気になる方は、

検索シテネ。

「ところで都市部……あー、ココにはどうやって来たんだい？」

邪なムードが霧散したので、質問コーナーに変えていく。　周りも興味が失せたのか、散り散りに。

キタキツネは、なんだかんだ残ってくれるらしい。　嬉しいね、なんかあつたら守ってくれ頼む。

「相棒のノドグロミツオシエに教えてもらったんだ！」

「そうなのか」

渋る事なく、元気良く答えてくれるラーテルさん。

ああ、ラーテルって、鳥のミツオシエと共生関係にあるんだっけ。

地上棲のラーテルは、蜂の巣を見つけ辛くても、空飛ぶミツオシエは見つけられるとかなんとか？

だけど、ミツオシエは蜜蝋等を食べたくても蜂の巣を壊す力を持たない。だから、ラーテルに巣の場所を教えて壊して貰う。

結果、ラーテルは蜂蜜を食べられるし、ミツオシエはおこぼれを貰える。

その共生関係はフレンズ化しても、続いているのだろう。仲良しなのは良き事かな。

だけどさ、疑問があるんだよね。

「なあ、なんでミツオシエは都市部を教えたんだ？」

コレである、都市部に蜂の巣でもあったのだろうか。だとしたら、それはそれで問

題だぞ。

「相棒が言うには、ココに大量のハチミツがあるからだぜ！」

「はい？」

うん、嫌な予感がしてきたよ。 冷蔵庫にある大量の肉まんみたいなオチじゃないの、それ。

「いちおう聞くけど、場所って知ってるの？」

「ああ！ あそこだ！」

そう言って、道路を挟んだ対岸を指さすラーター。 そこには たくさんの主婦とフレンズで賑わう……大安売りの のぼりを出している建物が。 本土でも馴染みある、その光景と建物は……。

「スーパーかよ!？」

ヒトのお店、スーパーマーケットであった。

「ある日、相棒は一枚の紙を持ってきた！　ワタシには読めなかったが、それにはハチミツの　在りかが描いてあったという！　それがあそこだつて話だ！」

「それ、チラシじゃね？　スーパーの大安売りの広告じゃね？」

やっぱりそんなオチだった。　たぶん、ミツオシエは落ちているチラシでも見つけて、ハチミツの単語に釣られたんだらう。　そしてラーターを使うと。

この世代、サーバルや他の子もだが……文字の読み書きが出来る子は珍しくない様に感じられる。

だから、ミツオシエがチラシを読めたとしても別段、変だとは思わない。　こういった件があると厄介だと思ふけど。

だが、話はコレで終わらない。

「相棒は言った！　道中、多くの敵が待ち構え、並大抵では辿り着けないと！　だからワタシに助けて欲しいと！　ならばワタシが道を切り開くと伝えたんだけ！　その隙に相棒がハチミツを手に入れる　さんだん　だ！」

「客を跳ね飛ばす事は、ダメダヨ」

「どんな危険でも、勇気とこの装備で乗り切るさ！」

「キミの存在が危険ダヨ」

ボス風に注意しておく。

ここでいう敵や危険……主婦やそのパワーのコトかもだが、フレンズのパワーは更に危険であるからな。

このままだとモノを売るってレベルじゃねえナニかが発生してしまう、それはダメダヨ。

「邪魔するモノは倒すっ！」

「ヒトの話、少しは聞いて!？」

あかん。注意しても聞いてくれないよ。

超次元スポーツならぬ、超次元ショッピングとか見たくないです。見たくない？

いや、どつちだよ。

「キタキツネ、代わりに買ってきてくれ」

「なんでソコで私なのよ!？」

ジツと我慢の子であった、キタキツネに丸投げを試みたがダメだった。だつて説得とか俺には無理そうなんだもの、特にラーテルみたいな脳筋はアカン。

「あんじゅ が行けば良いでしょ」

「あんな危険地帯に行けるか。 圧死してしまうわ!」

「飛び越えれば良いじゃない」

「俺は無理だ、てか入口の隙間が広くないからキタキツネやラーテルでも無理だろ。ガラスにぶつかるぞ」

「ワタシなら飛び越えない! まっすぐ突き進む!」

「ラーテル、ちよつと落ち着こうか」

互いにテンパって、ロクな解決案が出てこない。 今にもラーテルは車道に飛び出して轢かれる雰囲気であり、早々に解決しなければ。

「うん? 飛ぶって言えば」

失念していたことが。

「ミツオシエは、どこだい？」

そう、ミツオシエの存在だ。

この件はミツオシエが元凶と思われるが、当の本人が見当たらない。

「相棒なら、あそこだ」

指さした先、スーパーの建物の上。小がらな女の子の姿が。頭部に畳んだ羽根と思われる膨らみが見え、お尻から尾羽を生やしており、フレンズだと分かる。端に座り、足をパタパタと動かしながら下の様子を見ているときた。

そんなミツオシエ。ラーターとは異なるが、どことなく制服っぽい黒の服を着用。だけど赤のチェック柄のスカートを履いているから、明るい印象を与えて来る。

可愛いじゃないか、下から見たらパンツ見えないかな、いやナニ考えてんだろ俺。

「あの子が、ノドグロミツオシエか」

「アイツ、何してるの？」

「ワタシが道を創るのを待っているんだぜ！」

「いや、道を創ったら おまわりさん 来ちやうから」

摩天楼もあるビルの隙間を車がびゅんびゅん飛び交うジャパリパーク都市部。

本土と然程変わらない都市機能が働いており、多くのヒトとフレンズ、参入する営利団体や外国のヒトもいる、綺麗で文明的な見た目に反して国や企業の欲と闇が見え隠れする雰囲気があるこの場所。

全てをパーク職員が管理運営するのはキツ過ぎるし、法的な絡みも出てくる。となれば国家の犬がいる、そんなワンコ達の世話になりたくないッス。

「誰が来ようと、邪魔するならブツ飛ばす！」

ラーテル、国家権力相手に大立ち回り。見たいようで見たくないです。

こうなったら、フレンズの純粋な心を利用するか。他の子や心境を考えるとスゴい嫌な言い方だが……言おう。

「ラーテル」

「ん？」

俺は、深刻そうな眼差しを向けつつ、彼女に言う。

ココは被害妄想を相手に押し付ける。前世と本土での経験で鍛えられたネガティブ思考だ、稀に役立つから馬鹿にするなよ。

「このまま突撃するとね、ミツオシエが傷付くかも知れない」
「なにつ!？」

大切な相棒が傷付くと聞くや、声を荒げるラーテル。よしよし喰いついた、さすが貪欲な……は、関係ないな。

「話から察するに、ハチミツを手に入れるのはミツオシエだよな」

「そうだぜ! 最後まで絶対に守り抜くから、問題ないぜ!」

「ああ、手にするだけなら問題ないだろうね。いや、客を跳ね飛ばすなら問題あるけ

ど」

ラーテルの勢いとパワーがどれほど知らんが、ミツオシエがハチミツを手にするのは出来るだろう。その際に起きる道中の問題は取り敢えず置いておく。

「でもね。 ミツオシエが、ちゃんとヒトの社会を理解していれば……そのまま外には出ない」

「なんでだ？」

「キタキツネ、教えてあげなさい。 コンビニかどっかで、菜々に教えてもらっただろう？」

「へっ!? えーと」

再びヒマしている、キタキツネに抜き打ちテスト。 俺は見えないが恐らく漫画版の通り、菜々に何かしら教えて貰っているハズ。

「おかねを払う……じゃなくて？」

不安げな小声で、上目遣いで解答するキタキツネ。可愛い、して正解だゾ。

「その通り。ちゃんと覚えていて偉いぞ」

「へへっ」

キタキツネの頭をひと撫ですれば、純粋な笑顔を向けてきた。

ヒトの女の子ならキモいと唾棄される行為も、フレンズならこの笑顔。あゝ癒されるわあ。

「……こほん。ヒトのお店の多くは、欲しいものを お金を払って手に入れるんだ

よ」

「よく分からないぞ！ 分かるように説明してくれよ！」

「ミツオシエが、お金を持ってないんじゃない？」

全然分からんラーターテルに対し、キタキツネはそういう。ふむ、その可能性もゼロではないが……。

「まあ、その可能性もあるな」

「ハチミツを持つて、そのまま外に出れば良いじゃないか！」

「それ泥棒よ」

キタキツネ。 キミも昔は やつてたからね。 掘り返すつもりはないけど。

「たぶんだけど。 ミツオシエがヒトの社会を理解しているなら、お金を持つてるんじゃないかな」

「なら問題ないじゃないか」

「いや、ココからだよラーター」

俺は ずずい、とラーターに詰め寄る。 メンチ切ってるワケじゃないよ？

ただ熱血少女に分かるように、イメージする喧嘩流儀というか不良用語的なのを使つて、そんな風に話そうと思つてね。

「ヒトのお店ではね、欲しいものとお金を持つてレジと呼ばれる場所にいる店員さんのトコに行くんだよ。 下さいな、とね」

「ああ」

「だが手に入れるにはな、タイマンしなきゃならない！」

「そうなのか!?!」

タイマンの意味が分かって、驚いているのか知らないが、取り敢えず話を進める。

「今見えてる敵なんて、氷山の一角。奥に行くほど敵で溢れているが、そんなのは障害物競走の障害のソレでしかない！　だがどうしても避けられない、それが最後のタ

イマンだ……!?!」

「そんなコトが……危ない目に合わすワケにはいかない！　ワタシが代わりに！」

「いや、これは　お金を持っている子の役割なんだ。ツライだろうけど、ミツオシエに頑張つて貰おう……そう、例え傷付き、ラーテルとお別れする事になつても」

「そんな、ワタシの為に……!?!」

がつくし、と項垂れるラーテル。　怖いもの知らずでも、友が傷付くのは嫌なのだろう。

フレンズは良い子だとしみじみ思うよ。

一方、キタキツネはジト目で見てくる。　キミも良い子だよ、言いたいコトもあるだろうけど。

「あんじゆ、大袈裟おおげさに言つてない？」

「分かりやすく言っているのだ、文句あるならミツオシエに言いなさい」

「納得出来ないんだけど」

ラーテルが突撃を止めてくれれば良いです、ハイ。

「うう……だが、相棒が待っているんだ。何とかしたい！　いや、してみせる！」

「あかん、やっぱ突撃するかも知れない。　穩便に済ましたい身としては……自らが動かねばならないか。」

「よし、分かった。俺が代わりにハチミツを手に入れる、それで解決だ」

「いや、ワタシが行くぜ。　相棒を見捨てるワケにはいかないんだ！」

「じゃあ、その相棒に話をしてくる。　キミは相棒と共にスーパ―の外で待っていて

欲しい」

職員としては教育しなきゃならんが、そのうち来るであろう担当者に任せる。

今はハチミツを手に入れるのだ、話が長引いて商品が無くなる可能性もあるし、ミツオシエが痺れを切らせてナニかやらかすかも分からん。なにより、俺が面倒臭い。

ラーテルの返答を待たずに、俺はサツサとスーパーの方に駆ける。

手前の片側二車線道路は、それなりに大きい、フレンズの前で悪い例は見せられないから、ちゃんと横断歩道を渡りました。

……いやほら、これで通報されて おまわりが来たら笑えないでしょ？ 横切る勇

気が無かったワケじゃないよ？

「おーい、ノドグロミツオシエさんとやらー！」

スーパーの前まで来ると、客の群れから横にズレたトコから、上のミツオシエに向けて声を掛ける。

残念ながらパンツは見えなかった、いや、見るつもりはないんだけど。

声を出した事で多少周りの視線が向けられたが、直ぐに視点はスーパーに戻ったよう

だ。ウチの寮だったら通報されてるな。女の子のパンツを見ようと下から覗き込んでいるヤツがいると。

「うん？ 誰ですか？」

一方で、ミツオシエは可愛い声を出して反応してくれた。

良かった、無視されたら地味に辛かったゾ。古傷が抉れるまでである、そしたら泣いちやうトコだよ。

今は嬉し涙の方が出そう。俺ってホント、涙腺ユルいよね。

「やあやあ！ 我はパーク職員の杏樹である！ お主の相棒、ラーテル殿との事

で話に参った！」

「うわっ、なんか変なヒトがいますね」

「おい、否定出来ないけど言うのやめて。ツライから」

ガラスのハートが傷付く事を言うんじゃないよ。ちよつと反応してくれたのが嬉しくて調子に乗った俺も悪かったけど！

「取り敢えず降りてくれないかい？　話難いんだよ」

「仕方ないですねえ」

そう言うのと彼女は立ち上がり、頭部の羽根を広げて……ふわりと空中に浮かんだと思つたら、ゆつくりと降りて来た。

「おお」

その際、彼女の周りに発生する虹色の光……けものプラズムだっけ？

それが神秘的で……思わず声が出てしまう。トキが空を飛んでいる時も出ていたが、あの時はゆつくり見る余裕がなかったからな。

こうしてみると見惚れてしまうよ。

「——綺麗だ」

「へ？」

「いや、何でもない」

いかん、声に漏れた。 通報は勘弁な。

「ラーテルから、大体の話は聞かせてもらつたよ。 露払いをさせようって腹かい、腹黒ちゃん」

「ハラグロじゃなくて、ノドグロです——べ、別に悪い事してませんよ！ お金だつて担当者に貰つて用意したんですし、ラーテルさんには か弱い私の代わりに先頭を歩いてもらうだけです！」

「ヒトを弾かせる気でしょ。 ダメだよ、危ないから」

「うっ。 いやでも、ほら！ ヒト同士押しあつてるじゃないですか。 あんな感じですよ！」

客の群れを指さすミツオシエ。 確かに押し合っている。 まあ、こういうのを見て「やっても良い」と認識しちゃったのかなあ。

でもそれをフレンドズがやると、アウトなんだよなあ。 加減すれば平気だろうけど。

「ラーテルの性格からして、同じレベルで加減してくれる保証がない。 ヒトは脆い

んだ、ちよつとしたことでケガもするし、強くない」

——それから。

皆が優しいワケじゃないんだよ。

「——私だって」

「ああ、個人差はあるだろう。だから、キミはラーターを頼った。頼ること自体は間違いじゃないと思うよ。でも、今回はちよつと容認出来ないかな」

偉そうな事を言っている自覚はある。して、コレが正解とは思っていない。

でも、この子には俺と同じ道を歩ませたくないんだ。嫌われ無視されるのけものがあるならば、それは俺だけで良い。

「だから代わりに、俺が行く。お金はキミの担当者に請求するから気にするな」

「えっ、でもあの数相手に……奥まで進めますか？」

「ステルス性の高さもある、役立つか分からんが」

前世や学生時代では、あまりの高さからか名前を覚えてくれたヒトは僅かだ。カコやミライ、葉々や教師には覚えられたようだが。

あれ、コレって人混みじゃ役に立たないんじゃないかね？ 特に今回。

「まあ、なるようになる」

「分かりました、なにもせずに戦利品をいただけるなら良いです。 てなワケで、ガンバつちやつてくださ〜いっ」

「ちったあ、遠慮えんりよした発言してくんね？」

ストレートに言ってくるので、思わずイラツときてしまった。 良くも悪くもピュアなんだろう、ピュアなら許せるワケじゃないが。

「勝手に助けてくれるんだもん」

「今回だけだぞ」

後は彼女たち担当者の仕事だ、俺の仕事じゃない。 ただ今回は、そう、今回は放置したら危険だと思ったから助けるのだ。

「てなワケで。キタキツネ先生！　先頭お願いします！」

「やらないわよ！」

再び隣まで来てジツと我慢の子であつた、キタキツネに頼んだがダメだった。

うーん。相棒と言うには、まだ教育が足りないかな？

友を求める孤高の白虎

前世や本土、スーパーでの買い物。多くの者が経験し、ベテランの方に至っては、近所戦隊マダムズとの阿鼻叫喚あびきょうかんの物資争奪戦を繰り広げ、むせまくっていたであろう。

欲による負傷者が出ても止まるんじゃないやねえぞと怒りと悲しみを乗り越えて戦利品を持ち帰る。ある者は、何も得られず敗北感に挫折する。

ある意味で戦場ともいえるスーパーの大安売りイベントだが、怪我なく生き延びるだけならば激戦が終了するのを待てば良い。後には何も残らないがな。

かつてビビリーな俺は、巻き込まれる前には敵前逃亡、戦場から離れているのが常であつた。銃殺刑はないので安心して逃げるのであります。

だが今回、友の為に戦火に身を投じなければならぬ。前世で良いように使われて奴隷労働社会で命を散らした身としては、これ以上働きたくないでござる状態なんだけどね、引き受けた以上は突入しなければ。

「行くか」

ヒトは群れる生き物。　こうなるのは仕方ないかも知れない……俺は嫌いなんだがな。　あれ、俺ってヒトじゃないのかも。　ナニモンだよ俺。

「ふっ、主も鍛錬に参ったか」

何か聞き慣れない言葉が聞こえたよ。　練炭の間違ひかな、前世ではネガティブ思考に陥ると、その単語が稀に出てきたからな。

うん。　なんか悲しくなってきた。　早く行こう、任務を遂行するのだ。

「……行くか」

「無視しなくて良いだろう!」

幻聴も死ぬ前は聞こえたなあ。　デブハゲ上司の声が何も無い空間で聞こえるのかな。　な。

「あれ、俺……死ぬのか?」

「突然、妙な事を言わないでくれないか。　というか頼む。　こっち向いてくれ」

死神か天使か知らないが、ココは言う通りにしておくかな。そして後悔するまであ
る、後悔しちゃうんだよ。

「やつと向いてくれたか」

そこには白い天使のような、だけど勇ましく神聖な女性が立っていた。　けも耳と尻
尾が生えているのでフレンズのような。

白い髪に模様のように黒髪が混ざり、ショートヘアの髪にはトラ特有の縞々模様が印
されている。　瞳の色は薄くも宝石のように美しい水色。

格好はトラのフレンズの色違いといったところか。　白色のワイシャツに灰色
チエック柄のミニスカートとネクタイ、髪やガーターベルト付きニーソックスの色も黒
色の縦縞が引かれた白、お尻……スカート下からは、長くしなやかな尻尾が生えている。

あと巨乳。

「うほっ」

驚いた。この子は……ホワイトタイガーじゃないか。この時代だ、初代であるう。

インドに生息するベンガルトラの白変種であり、先天的なメラニン色素の欠如・欠乏であるアルビノではない。

トラ全体の数が減ってしまった今では飼育下でしか目にすることができないそう。全世界でも250頭あまり、国内には30頭ほどしかない希少種らしい。

フレンズ化した彼女の性格イメージは、やはり武道派。白いけものとは神聖な印象を与えてくるが、実際、古来より神聖なものとされてきたとか。

地域によつては崇められている他、中国の民間伝承に登場する四神の一体……西方を守る白虎もこのけものから来ている……のだったか？ 四神はジャパリパークにフレンズとして存在しているハズだから、いつか会いたいね。

そんな、スゴそうなフレンズである彼女であるが……よもや、スパーという大衆な場所での会おうとは。はっ。ひよつとしてスパーとは神聖な場所だったのか、違うか。違うと言ってくれ。

「満足したね、じゃあの」

だが急いでいるので戦場に戻る事にしよう。ココは貴様の戦場ではない、直ちに持ち場に戻れ。いえっさー。

「ま、待ってくれ！」

聞こえない。前世で訪問販売とかを何度も受けたりしていると、こいうのは一々立ち止まって相手にしてはいけないと学んだからね。

善意を向けてはならない。相手はソレが狙いなのだ、その善意に漬け込み罪悪感を持たせて契約や商品を買わそうとしてくる。

相手も事情があるのだろうが、それで我が身を滅したら元も子もない。それはヒトの社会が「まだ」存在しているパークでも通用する。してしまう。悲しいけどパークはまだ、ヒトの社会なのよね。今回の相手はフレンズだけど。

「……うう」

ふっ。泣き落としなんて効かんぞ。それと泣きたいのは俺の方だよ、俺が泣くんかい。

「友を作るのが、こんなにも困難とは」

「おーけー！　俺は杏樹ってんだ、友になろうぞ！」

思わず戻った。

いやマジ泣きしかけたわ、その気持ち分かるゆえ。

「ほ、ホントか!？」

パツと顔を上げ、笑顔になるホワイトタイガー。　ちよ、やめて。　友を通り越して

「結婚しよ」とか言いそうになる。

神聖そうな、だけどボツチな子に対して、なんて恥知らず！　それから馴染みのカ

コモいるのに！　女の敵め！　それは誰か。　俺だよ。

「ホントホント。　ただ、急いでいたもんだからさ、悪い」

「そうだったのか——　我はホワイトタイガーだ。　すまない、そうとは知らず」

「いや、大丈夫。　でも後で話そうか、ほら、バーゲンセール中だし」

今なお、マダムズで溢れる店内を見回して言う。 ホント、ここってパークなんですよかね。 将来、廃墟になる気が起きないんですがそれは。

「ばあげんせえる、というのは分からんが。 それが、この相手の名前なのか」「は?。」

トンチンカンな事を言ってきたぞ、この娘。 アレか、この子もラーテル同様、都市部を知らぬのか。

「スーパー、来た事ないの?。」

「ない。」「とてもすごい」という意味だと思つてな、恐らく道場か鍛錬場かと来てみたんだが……違つたか?。」

スーパーが鍛錬場なら、ショッピングモールはナニか。 ダンジョンか。 すつごーい。

「違う、激しく違う」

「ならば、なんだというのだ」

「店だよ、ヒトの」

「みせ？」

「また後でな。詳しくは担当者にも教えてもらいなさい」

あかん。この娘も色々知らない様子。これ以上はかまえない、ハチミツを手に入れねば。

「うおおお！」

我、杏樹臨時職員。表で待つ友の為、マダムズに挑むモノなり！

そう行き勇んで、熱気溢れるヒト混みに突撃してみたんだが、

「ゴフツ」

第一層目すら突破出来ず、跳ね返されて床に転がされた。恐るべしマダムズ。

鍛えてない俺には無理ゲーである。　だが、ハチミツはこの先なのだ。　迂回路がないので、何とか進まないとならん。

「修行か」

「ねえ、今のどこをどう見てそう思うの?」

背後から声を掛けられて、イラツときたよ。　この娘にとつては満員電車も修行だと言いつつである。

なら前世の俺は毎日修行の日々だったな。　活かす場もなく死んだ気がするが。

「俺は、この先にあるハチミツを手に入れたいの」

「任せろ」

そう名乗りを上げるは、ボツチ……こほん。　孤高の白虎のフレンズ。

「我が神域の一撃、見せてやろうぞ」

「ヤメテエエエ!!?　それはセルリアンにしてえええええ!!」

スーパーを血の海に沈める気か！ ホワイトタイガー、スーパーウーマン！

「問題ない。急所は外す」

「問題しかないよね？ ヒトを何だと思ってるの？ マト？ 修行相手？」

「友になればと思う。 して拳を交え終われば、それは友だ………たぶん」
「お前は友に拳を振るうのか!？」

理性を感じられそうで、ある種の狂気を感じてきたよ。 誰ですか。 この娘を都市部に連れてきたのは。

担当者よ、もっと教育してくれ頼む。 じゃなきや、ヒトとフレンズの間に亀裂が走るよ！

「フレンズ同士なら……ラータルと気が合うんじゃないか？ あとはパーク・レンジャーの隊長」

「誰だ？」

「俺の知り合い。 ラータルは会ったばかりだけど……表にいると思う、余裕があれ

ば紹介するよ」

「お、おお！　　ありがとう！」

喜びに打ち震える白虎。　俺の中で、強く高潔な印象が崩れてしまった。

後代よ、これが先代だ。　可愛いから良いけど。

「だけど今はハチミツだ！　　また後で！」

「なら商品棚の上を移動すれば良い」

真顔で解決案を出された。　うむ、さすがフレンズ。　目の付け所がしゃあぶ……いや、野生的。

「俺には無理だ。　第一、そんなことしたら怒られ「なら、我に任せてくれ」おい待てい！？」

静止を聞かず、白虎は脇の商品棚の上にピョイとひとつ飛び。

天井や照明器具等につつからず、ちゃんと調整して飛んだのだ。　スゴい。　そして

目立つ。　白いのもあつて。

「ハチミツだろ？　取ってくる」

そう笑顔で言つて、商品棚の上を　どこその忍者のような素早さで駆けて行く。

それは側からすればズルとか以前に、危険行為のソレだ。　商品が傷付く危険性とやらかしているヒト……フレンズや、周りと店に迷惑をかけるものだ。

治安向上に努めなければならぬ職員としては止めねばならない。　だが、俺は良い子じゃない。　楽にハチミツを手に入れられるならばと許してしまった。

誰かに責められたら、止めようと思つたけどダメだったと言ひ訳するつもりまである。　自身ではなく、初対面の、尊いフレンズを利用して己の欲を満たす。　挙句には彼女に全ての罪をなすり付ける。　マダムズより欲深く罪深い男が、ココにいた。

「職員失格だな」

罪の意識から自虐した言葉を呟くも、口角は不気味に上がつていくもので。

こうなるともう、客観的に見ていたり。　自分自身が自分ではなく、「他人」を見てい

る。汚れた心を「他人」として罪を認めない。

一方で顔や言葉で綺麗事と言いつくをする。なんだろうか、まるで俺が嫌ってるヒト達のソレじゃないか。

本物を求める割には自身は偽物である。この矛盾は何か。こんな事をしていては、パークやフレンズへの愛すら偽物になっていく。全てを裏切る。それは………イヤだ。

いや、偽物だからこそ本物に恋い焦がれ、求めてしまうのかも知れない。セルリアンのように輝きを奪う気はないが。

ただ利己的な行動をずっと続けていると、ツケを払わされるかもな。異変発生時とか。

「取ってきたぞ——どうした？」

「へ？ あつ、いや。ありがとう、助かったよ」

白虎によって思考の海からサルページ。危うく溺れて鬱になるとこだった。

ハチミツの瓶を受け取り、二重の意味で礼を言う。こんな口だけのモノで罪が帳消しにはならないだろうが、言わねば相手に悪い。それと自己満足。

「くッ！　　我に出来る事ならば、何でも言ってくれ！　　そう、友だからな！」

凄い笑顔を向けられたよ。　　どんだけ飢えてたの。　　そう考えると、とても可哀想な娘に見えてきちゃうよ。

「あー、うん。　　嬉しいけどさ、女の子が軽率に何でもか言っちゃダメだよ」

「そうなのか」

「そうだよ。　　特にヒトの男には」

「分かった。　　だが何故だ？」

そりゃ○○○○フレンドビーにされちゃったりするからだよ。

なんて生娘に言える筈もなく。

「男は飢えたオオカミなの。　　食べられちゃうんだよ」

「私の力、見くびるな。　　襲われても返り討ちにする力はある」

即墮ち2コマになりそうですね。それから、純粹な心故、騙されそう。

「ヒトと友になるのは良い事だ。でも、中には悪いヤツもいる。覚えておいて」

「覚えておこう」

取り敢えず、言っておこう。パークは希望の光だけではない。光が強い分、絶望の闇も深まる。

「だが、あんじゅは、良いヒトだろ？」

「へっ？」

思わず、変な声が出た。俺が良いヒト？ そんなワケない。そう否定しようとして、

「初対面の我と、友になってくれた。拳を交えたワケじゃないのにな」

その笑顔、ツライさん。可哀想だと思つて近寄つた拳句に、俺はキミを利用したか

らね。

「いや……その。 ラーテルとか隊長とか他に友だちが出来たら、俺は見捨てて良いぞ」

罪の意識からか。 また変な言葉を口走る。 だが、白虎は首を横に振って言うのだ。

「友に制限などない」

それにと続けられて、

「もし悪い事をしたならば、友として叱ろう。 しようとするならば、全力で止める。 助けを求めるなら手を貸そう。 だから先を案ずるな。 何にせよ、お前は我の友だ。 それとも、迷惑だったか？」

「……ホワイトタイガー」

友という言葉葉つて重い足枷あしかせだ。面倒ですらある。

目の前の娘は虎であるし、群れるのとか嫌いそうだと思う。俺なんて要らない子じゃないだろうか。

いや、それは俺の妄想なのかも知れない。信じて馬鹿を見、拳句に死んでしまった前世だが……フレンズの事は信じてても良いんじゃないか。

「ははっ」

「どうした？」

「いや、ポツチの白虎が言うのと重みが違うなど」

「孤高だ」

「冗談だよ——迷惑なものか。これからも、どうぞ宜しくね」

「ッ！ ああ！ 宜しく頼む！」

その後。

会計を済ませて白虎と共に外に出ると、ラーテルが突撃をかまそうとし、キタキツネとミツオシエが必死の静止を呼びかけている場面であった。危なかった。

ミツオシエにハチミツを渡し、ラーテルを落ち着かせ、キタキツネに肉まんを買えとせがまれつつも、皆に白虎を紹介してやる。

その武道派な言動に、キタキツネは若干引いてはいたが、ラーテルとミツオシエには概ね好意的であった。良かった。

「今度、どっちが強いかな勝負するか！」

「いやあ、ホワイトタイガーさんに出会えて良かったですよ。これで更に駒が増え

て……いししっ！」

「今度、私の為の別荘を建てて貰おうかしら」

「ありがとう、あんじゆ。一度に友が増えて……出会えた事に感謝する！」

ここに来て、今更ながら強烈な不安に再度襲われた。

大丈夫、だよな？

紹介しても大丈夫だったよな!?

EXの刺客「気になる! 気になる!」

ヒトは、多くの けもの を目の当たりにしてきた。その身体能力の高さや美しさに惹かれ、崇め、憧れ、一部は仲良くなり……一部は絶滅に追いやった。

多くの言葉が生まれ、記録が残り、道具や乗り物が生まれて、それに けもの の名をつけて……多くの悲しみと喜びも生まれた。伝説や感動を与えることもあった。

中には地球というクレイドル^{ゆりかご}を飛び出した子もいる。 けもの は偉大である。いや、名を冠したヒトの道具類であったとしても。

今やジャパリパークという、けもの がアニマルガールとなり、会話が出来る奇跡の島が出来たこの世界だが、これからもきつと、ヒトと けもの は、そうなのかも知れない。

だけど。 ヒトによって保全状況が深刻な けもの は多くいる。 これからも、とは現状維持という意味ではなく……或いはそうであっても維持する為の努力はしなければならぬのだろう。

で、なければ。 EX (Ex tinct) は、増えていき……生態系は崩壊、後世の子らに見せる事が出来なくなるだけでなく、ヒトも影響を受けて……EXの仲間入りに

なる日が来るかも知れない。

だが、パークの奇跡……サンドスターにより、絶滅種がフレンズとして復活するのが分かった今。その悲観も少しは和らいだ気がする。少しだが。

T V等で流れるニュースにて、この事が報じられた際、パーク園内や世間では様々な意見が飛び交った。

何か悪い実験が行われるんじゃないかねえとか、ヒトの都合で絶滅させられたり復活させられたりして可哀想だとか、それは紛い物だとか道徳に反するとか、フレンズ化ならば、復讐されんじゃないやね怖いとか。

逆に、また見ることができるとか、研究出来るとか。何にせよ、それら意見も大分好き勝手な憶測や話である。

俺？ 世間どうこうより、カコの心境が心配だ。絶滅種が復活出来るのは、カコの研究成果であるからね。

カコを責めるヤツの話は聞かないが、もしいるならちよつと違くねと思う。せめて俺だけでも味方でいたい。守らねば。

さて。そんな感じに絶滅種の話を続けているが。ケモフレでの描写や、ゲーム等で出て来る保全状況……レドドリスト作成に関わる国際自然保護連合（IUCN）の建物がパークに建設されたのは、知らない話であった。

俺は事務局の職員ではないし、委員会に所属している科学者等ラボラトリー・スタッフは知らない。カコは、分からないけど。

取り敢えず、直接の関わり合いが無いとみている。そう。直接は。

またレッドリストの話であれば国連だけでなく、日本の環境省が作成するものもあるが、やはり ソッチのお役人さんとは直接の関わり合いは無い。

「ココが、そうか」

ジャパリパーク都市部。多くの雑居ビルに混じり、明らかに他とは違う建造物……鎮座する豪華で綺麗なビルディングの前に俺はいた。

目的があるわけじゃない。ただ、目立つから気になって間近で見ようと思っただけ。

大衆に見える、道路側には複数の長い棒が生える。見上げれば天辺に付けられた旗がパタパタと風で靡いている。

描かれるは、複数のロゴや国旗。それが並列し、陽の明かりで輝いていた。その中には、光栄と言って良いのか、パークロゴの「の」の字も混ざる。

「俺の知らないジャパリパークってか」

今更なんだが、パークは思っていたより複雑だ。　だけど、下つ端職員の俺からしたら雲の上の話。　関係ない。

労働時間を迎える度、奴隷社会を嘆き権利や利益、自由を求める割には上の苦労は知らない。　俺も大分勝手である。　だが、どうしようもない気がする。　俺には権限も能力もない。　いや、言い訳か。　だけど嘘じゃない。

「窮屈きゆうくつな世界を続けて良いものか？」

そんな、ヒトがいるジャパリパーク。　アニメのように、ヒトが消える方が良い気がする。

フレンズだけがいる、のけもの　のいない世界。　それは誰も傷付かない、皆がずっと笑い合えるユートピア……は言い過ぎか。　でもソツチの方が幸せじゃないのか？

ヒトが取捨選択し、歩む道。　パーク撤退もその道のひとつ。

だが逆にだ。　未来にて異変が発生するのを知っていれば、それらはヒトが未然に防げるものか。　或いは解決出来るものなのか。　それは分からない。

「電話、してみっか」

スマホを取り出し、電話帳にあるカコにコールする。研究に没頭している時は繋がらないが、偶に繋がる。相手に迷惑だろうけど、俺はカコが心配、いや、俺の不安を拭えればと。

渦巻くモヤを払うキツカケになれば良い。何より俺が寂しい。なんと女々しい男なんざましよ。

Purururu……Purururu……と、電話が鳴る。この間の期待と不安。かける言葉を脳内で考えようとしていたとき。

『もしもし、どうしたの?』

あ。繋がった。我が馴染みの可愛い声が耳元で聞こえてくる。やべ、言葉考えない。

取り敢えず、適当に……。

「あー、いや。声が聴きたくなくなってさ」
『ふふつ、変なの』

そう。変なんです。あ、元からかって、やかましいわ。

「色々、その。大変だと思うから……体とか大丈夫かなあって」

『大丈夫、ありがとう。あんじゅは？』

「俺は大丈夫だよ」

『そっか。良かった』

大丈夫と言合い、取り敢えず互いの無事を確認する。この手は鸚鵡返しのソレなので、実は互いに無理している可能性があるのだが、今は置いておく。

暫しの間。気不味いようで、心地良い。後方で走り抜けていく車の音、知らないヒトやフレンズが歩く音。そよ風は心を落ち着かせてくれる。

カコと共有する、ちよつとした時間。電話越しでも嬉しい。嗚呼、また共に過ごしたい。その手に触れたい。そんな俺ってキモい。

『えっと……お願いがあるの』

先に口を開いたのは、カコだった。

はて。 お願いとは。 珍しい。 何だろうか、俺に出来る事なら良いけど。

「怖いのは嫌だよ」

『だ、大丈夫』

一瞬の言葉の詰まりも、俺にとっては恐怖の対象だよ。

『職員は、アニマルガールのヘルプで担当以外の子の面倒を見る事があるでしょ?』

「ああ」

『その逆。 職員を補助する為に、アニマルガールが来るのは知ってる?』

「知ってるよ」

この話、似た光景は漫画版でも見られるかな。 菜々がチーターのヘルプの為に家に訪れる回や、ミライのヘルプで来たタヌキとか。

『それでね、あんじゆの活躍を聞いて大変だろうって……研究所のヒトがいて。へ
ルプを寮に送りたいんだって』

「それは、嬉しい話だな」

『あんじゆが良ければ、今日にでも寮に向かわせたいんだけど』

嬉しい。表面上は。

だがな。この手にはナニか裏がある。馬鹿正直に受け入れられない。そのへ
ルプ、どんな子なんだ？

「フレンズ？」

『そう。ニホンオオカミ』

「ファツ!？」

思わず変な声が出たよ。

そりやそうだ。ニホンオオカミ……その名の通り日本にいたオオカミなのだが、ヒ
トの所為もあつて絶滅したという。

だがパークにてフレンズとして復活。 そんな子が、ウチに来るだつて？

「嬉しいけど、絶滅種じゃないか。 フレンズ化していようと稀少な研究相手だろ。 そんな子を臨時職員に回して良いのか？」

『うん。 寧ろ^む回したい、みたい』

ここで、一度電話が切れたと思つたら。 向こうでドツタンバツタン大騒ぎをする音が。

微かに「ニホンオオカミ」とか「それ、らめえ！」とか「気になつても、触るなあ！」とか聞こえてくる。

うん。 何となく回そうとする理由が分かった。

『お待たせ』

「ああ。 こんな事言いたくないんだが、厄介払いだな？」

『本音は、そう。 でも表での生活をさせての変化や動作、成長を見たいというのもある』

「そりゃあ、どつちがヘルプなのか分からん話だな」

『……研究所に届けられた剥製の毛にサンドスターを当てたら、ニホンオオカミのアニマルガールが生まれたの。とてもヒト懐っこくて、快活で好奇心旺盛。ニホンオオカミの記録は少ないけれど、ジツと観察するクセ等が見られる。それから、何日か経ったのだけど、その、元氣過ぎて研究所の皆が困ってる』

毛とはいえ、稀少なものをわざわざ本土から遠く離れたパークまで持つてくるとは。

連日のパークニュースや国連の建物を見るに、サンドスターやフレンズの存在は凄まじいのだろうな。して、毛は上野にある科学博物館からだろうか。

何にせよ、色々あったのだろう。ご苦労さまである。

「あー、うん。分かった。コッチに送つて良いよ。改善しなくても文句は受け

付けないが、それで良いなら」

『ごめん。ありがとう』

「いや、俺もニホンオオカミのこと見たいからさ」

『じゃあ、寮の部屋まで送り届けるから。部屋にいるようにしてね。寮母さんには許可を得ているから大丈夫。何かあったら、私に連絡を』

「分かった」

『うん。じゃあ、また後で』

「ああ、またな」

ツイッター、と。ふむ。切れたか。

こりや面倒な事になりそうである。俺のパートナーとなるフレンズの予感がして、嬉しくもあるが。

しかし、ニホンオオカミか。フレンズの姿は可愛い子だと記憶にある。オオカミというかワンコの印象が強い。前世で剥製を見た事があるけれど、小柄な犬って感じであった。

「ふっふっふっ。調教しがいがあるかもな」

おっと。管理センターに通報されないようにしなければ。

そう、るんるんと帰路につく俺。楽しみだなあ、早く会いたい。

「あれ」

ふと思う。寮のヒトの目も気にしなければならぬが、ニホンオオカミも気にしなければならぬ。いや、気にしちやマズいか？

「女の子と同居って、なるんじゃね？」

なんか、不安になってきたぞ。

取り敢えずベッド下のエロ本を隠すか。好奇心旺盛で、エロ本が見つかり「ナニコレー！」と笑顔で広げて見せられたら……軽く死ぬ。下手すると職員ライフの危機なのだ。

「ヤベエ……落ち着け。相手はオオカミ。女の子だと意識しちやダメだ。平常心、平常心だ」

先程の余裕はどこへやら。気になり始めたらアワワワワ状態になりつつある。悲しいかな、チエリーには余裕がない。

「ソウか。俺もオオカミになれば良いノかもな、そうだ。そのままツガイにナレ

ば絶滅種も寂しくは……って、気を確かにモテ！」

我、杏樹臨時職員。
に陥りそうです……。

内に秘める、或いは下半身的な意味で、ある意味ピンチな状況

群れじやなくても。

男部屋に女の子が来る。　そんなイベントに様々な妄想を膨らませて、願わくば距離を縮めたいと邪な思考を張り巡らす。　俺も男だ、男なら仕方ない。　仕方なくない？　いちおう本土にいた頃、カコという馴染みが部屋に訪れてはいた。　でもチヨメチヨメに発展はせず、けもトークがメインで終わったのが殆どである。

決してヘタレたワケじゃない。　ほら、ヒトは対話が出来る。　話し合うことで理解し合える。　本能で行動する　けどもの　じゃない。

その証拠というか、カコとはベットインする様な事態に発展はしなかった。　常に平和に笑顔で終了したのである。

うん。　ごめん。　ヘタレだわ、やっぱ。

「今度こそは、いや。　今回は駄目だ。　落ち着け。　クールになれ杏樹」

しかし今回はヘタレで良い。　コトを起こしてはならない。　だってフレンズだも

の。

ヘルプで奉仕に来るんだか世話になりに来るんだか分からん子だけど、一線を超えれば最期、互いの清い身体はミライの涎に塗れるが如く穢れてしまふに違いない。

そんな悲劇を回避するべく、不浄なるモノは押入れの闇に葬り、イカ臭い男部屋を少しでも良くしようとは換気と掃除までした。自らも風呂に入つて身を清めた。滅多に使わない折り畳みテーブルを組んで、市販の茶菓子も用意した。この時、俺の心はびよんびよんしており、幼き頃に置いてきたワクワクを取り戻したかのような喜びに満ちていたといえよう。

楽しみに混ざる僅かばかりの不安が程良いスパイスとなり、今か今かとソワソワして待機する。時々携帯を見たり、ゴミが無いか見たり、外を見てみたり。

不備はない。大丈夫。ヨシ。推奨されても現場で滅多にやらなかった指差し呼称までやった。これもフレンズの為。我ながら俺つて単純だと思う。して、再度携帯を見ようかとしたときだった。

ピンポーン。

「ッ！　はいよーっとー！」

時はきた。 全てはこの時の為。 俺は勢い良く玄関に駆け出し扉を開けた！
そこには――。

「あんじゆ、えと……さつきぶり？」

「はじめましてー！」

いつもの、服のセンスがアレで巨乳な馴染みカコと。

隣には ケモ耳と尻尾を生やした、ワンコで笑顔が眩いフレンズ。

「お、おお！ 会いたかった！」

ニホンオオカミのフレンズが。

茶色の長袖セーラー服、ピンク色のチェック柄スカートを着る。茶色のニーソックスに白色のローファー靴。

お尻からは茶色の毛で覆われた尻尾が生えている。

髪型はツンツンした茶色のロングヘアで、先端部分は白色に変色。 瞳の色・形は

茶色のツリ目。

そして絶滅種の特徴というか……ハイライトが無い。

しかし、暗さを感じさせない快活さを感じさせてくる。

現に笑顔だ、その笑顔の

口元からは八重歯やえばを覗かせて可愛い。

「俺は杏樹。よろしくね」

「うん！ 私はニホンオオカミ！ よろしく！」

「ここじゃなんだ。ふたりとも、中に入って」

「うん。ありがとう」

また寮のパリピが出て来てニヤニヤ見ているからね。キミたちの目からは、どう

映ってるんだい。

子持ちの人妻を自室に連れ込む犯罪者か。それともナニか。これから仲良く

フイーバー（意味深）するように見えるのか。

何にせよ、犯罪行為ではない。普通に話すだけだ。故に面白いナニかではない。

だからさ。また通報しようとするのはヤメテ。マジで。

「何これ！　いろいろあるんだね！　気になる！」

「お菓子だよ。えっと　この子も、ヒトの食べ物に平気だよな？」

「大丈夫。　他の子といっしょ」

「よし。　ニホンオオカミ、食べて良いよ」

「ありがとう！　大好きっ！」

「お、おお」

ふたりを部屋に連れ込み、茶菓子を提供。　ニホンオオカミは目をキラキラと輝かせ、尻尾をはち切れんばかりにブンブン振る。

それが隣に座るカコの身体にビシバシ当たってるんだが……大丈夫か？　目を細めてるし、嫌なんじゃ。

「幸せ」

あつ。大丈夫そうですね。そつとしておこう。

一方でニホンオオカミ。

どの お菓子を食べようか迷い……そして。

「これ！ サンドスターみたいに、キラキラしたヤツ！」

「おつ。 良いぞ、少し固いけど甘くて美味しいよ」

チヨイスしたのは、別の小皿に仕分けられた金平糖。色とりどりでカラフルな粒

子つぼい様が気に入ったのかな。あと、サンドスターを知っている様子であったけど

……研究所で学んだのかな。

アレって、ヒトが実験で使う際はどうするのだろうか。溜められるものなのかな。

他に気になるとしたら、色彩が分かるのかなという点とか。

とか、呑気に思っていたら。

「はっ、はっ、はぐつ、はぐう！」

「ちよっ、おま」

両手をテーブルに付けて前屈みに。そのまま小皿に顔を突っ込んで食い始めた。
なんだろう。側から見たら、何のプレイだよって感じ。漂う犯罪臭。イヌプレ
イ。いや、イヌ科だけどき。

——バリバリバキツ。　ごきゅん。

金平糖のカスを食い散らかす野生的で、ワンコで豪快な食い方。　ドックフードじゃ
ないんだけどなあ、それ。

俺は唾然と見、カコはそれすらも愛おしそうに眺めている。　いやあの。　大丈夫で
す？

「——可愛い」

カコさん。　未だトリップ中。　ナニこの絵面。　まともなのはボクだけか！

「可愛いけど、見た目ヤバいから。　女の子が四つん這いに近い格好して、野生的に食

べてるから。 ヒトのする食べ方とか教えなかった系？」

手で掴む。 食器を使う等。 ヒトは食事をする際は、大凡そうする。 決して皿に顔を突っ込んでムシヤムシヤしない。 やるのは特殊な時だ。 少なくとも俺の中では。

フレンズは、特に生まれて間も無い子は仕方ない部分もあるけれど、ココはヒト社会が色濃い都市部側。

このセクターで、フレンズとはいえヨツンヴァインになって食事をするのは特殊。 というか相当変態だよ。

「……………教えると、本来の姿が観察出来ないということだ」

あつ。 戻ってきた。 良かった、このまま説明もナシに時間が過ぎるのは気不味い。 絵面的にもツライさんであった。

それにしても本来、ね。 でもフレンズ化した時点で色々違うと思うんだがな。 それはカコも知っているはずだ。

「でも、完全じゃないんだよね？」

「うん。アニマルガール化しても元の けもの の特性や魅力は引き継がれる。だけど、ヒトが想像したモノも現れる」

「伝承にあるもの、イメージする印象とかかな。キツネやタヌキは化ける、とか」

「そう。だから本当にそうなのか分からない時があるの。UMAやカミサマのアニマルガールがいるように。本当にそうなのかも知れないし、違うのかも知れない」

カコはニホンオオカミを見ながら、そういう。憂の感情を僅かに覗かせつつも、喜びも混ざった複雑な表情で。

むう。アニマルガールやサンドスターの研究。とても大変なんだろうな。

そんな風に見られている当のオオカミさんかというと。もう食べ終わったのか。小皿を嬉しそうにペロペロしているところだった。気に入ったようで何よりだ。

でもやっぱり、野生的。飲食店に連れて行けない。行ったら通報されそうだし、俺が逮捕される、されちゃうのかよ。

「でも、アニマルガールとしても記録に残したい。逆にこの姿から分かる事もあるかも知れない。だからニセモノかホンモノか、関係なく研究対象」

「そうか。でも、ココに連れて来たって事は、その辺の観察はもう大丈夫なのか
な」

「うん。だから、普通にヒトの知識を教えて大丈夫」

ならば、食べ方から入ろう。この状態で外に出たら大変だ。おまわりさんのお
世話になるのは困る。

「観察記録みたいのって、いるのかな？」

「大丈夫。偶に、電話越しの口頭こうとうで伝えてくれれば」

ココでカコ。真っ直ぐ俺の目を見つめて、

「変なコトは、教えちゃダメ」

怖いよカコ。俺がナニを教えちゃダメだというのだね。

「変なコトって？」

「そ……それは」

そこで目を逸らしちゃうの。可愛い。もつと見てみたいから、からか揶揄からかしたい。でも話が進まないの、軌道修正に入る。感謝したまえ。

「不法侵入とか、信号無視とか？」

「そ、そう。反社会性の色が濃い……あんじゅ、そんなコトしてるの？」
「してないよ。模範とはいかなくても」

なんかマウント取りたがってない？ カコもワンコなの？ ヨシヨシして欲し

いの？ お腹撫でる？

「ごちそーさま！ 甘くて美味しかった！」

そんな事を思ったからか。お皿を綺麗に舐め終わったワンコ……じゃなくてニホンオオカミが、声を上げてきた。

本題に入らないとな。いつまでも、俺とカコが じゃれあつてるワケには いくま

い。

「それは良かった……これからキミの教育をしていこうと思うんだけど、大丈夫？」
「なにになに!?　なにを教えてくださいの?」

おお。　前のめりになって、至近距離で聞いてきた。　ホント、人懐っこいね。
初対面相手に距離が近い。　それなりに三白眼だから迫力もある。　でも、不思議と怖くない。

「そうだな。　ヒトの社会について」

「しゃかい?」

ああ。　分かるように話さなきゃな。　マルカの時もそうだったし。

「まあ、その。　群れの決まりかな」

「群れ!」

あれ。目を輝かせ始めたよ。尻尾ブンブンだよ。して、カコ。顔をモフモフ尻尾でビンタされて幸せな顔をしてる。ソツとしておこう。

……そういえば、彼女はアプリの話等だと群れや仲間に執着している感じだったな。それはニホンオオカミに限らず、絶滅種に見られる傾向にあるんだっけか？

アニメだと……トキが歌で仲間を探していると言っていたし。皆が皆じゃないかもだけど。

「そう。皆が仲良く生きていく為に、ヒトの群れには決まりがある。分かるかい

？」

「何となく分かるよ！」

群れで生きたとされる けもの だからか、理解は出来る様子。 良いことだ。

「ねえねえ、あんじゅ！ 決まりを守れば、私も群れに入れるかな!？」

「ツ」

——息苦しくなった。

「あんじゅ?」「大丈夫?」

「あ、ああ。大丈夫だよ」

いかん。刹那の出来事とはいえ、今の言葉はきた。考え過ぎなものもあるし、俺が過去を引きずっているのもあるだろう。

彼女を同じ目に遭わせたくない。それは彼女の境遇からか、それとも俺の過去か。何にせよエゴか。だとして、何もしない選択はないけれど。

「カコ。どれくらいの期間、一緒にいられるのかな?」

「決まりはない。あんじゅの判断か、研究所や管理センターから指示があるまで」

ふむ。結構、長い付き合いになるかも知れない。その間は色々教えよう。大変そうだが、充実した日々になりそうだな。

「じゃ、のんびり教えていこう」

「やったー!」

「それと、ニホンオオカミ」

「うん？」

喜んでいいるから、それで良いかもだが。　いちおう、これは言っておこう。　自己満足になるけどさ。

「俺は群れるのは好きじゃない。　だから群れには入らない」

「えっ」

嗚呼。　ハイライトの無さと相まって漂う寂寥感。　でも続きがある、だからカコ。　責めるような目で見ないでくれ。

「でも、ニホンオオカミの友だちにはなれる。　それで良いかい？」

どうだ？　アプリのカラカルとのやり取りからして、これでも大丈夫のはずだが。　不安の中、表情を伺っていると……期待通りの反応をしてくれた。

「うんっ！」

満面の笑みで。ニホンオオカミは頷いてくれた。

ああ、良かった。拒否られたらツライさんであった。

カコも一転、微笑みを向けてくれる。良かった、嫌われなくて。

「あんじゅ。それじゃ、ニホンオオカミの事……よろしくね」

「おう。何かあつたら連絡する」

こんなやり取りに安心したのか。カコは微笑みながら俺に彼女を託し、職場へと戻る。

次に会うのはいつだろう。その時には、ニホンオオカミは成長しているかな。

懐いてくるニホンオオカミの頭を撫でてみた。目を細めて嬉しそうだ。

俺は、群れは苦手。彼女が憧れるモノは俺には合わないと思う。

だけど、否定をしようとは思わない。アレもまた、ひとつの輝きなのだから。

遠くから見て、羨ましく感じる時はあるけれど。こうして友だちになれるなら、それで良い。

こうして。俺とニホンオオカミの同居が始まったワケだが。

世間知らずで野生的な彼女や、同じ寮のヒトに遊ばれて苦労をしていくのは言うまでもない……………。

☆遭難だ!

空は暗く灰色で、辺り一面は冷たい傾斜に白ばかり。先が見えない不安は身も心も冷えさせた。

追い討ちのように顔に打ち付ける無数の粒すら冷たい。貴様の人生はこうだといわんばかりだ。

そう語るココは何処どこと問われれば。吹雪の中にある雪山であると答えておこう。

決して俺の心境を表したポエムではない。現実には雪山の中にいる。

それでナニをしているか。歩いている。徒歩。ウォーキング。

蹠行性しよこうせいからなるある程度安定した立ち方から、片足ずつ接地（どこも雪だが）して

のロコモーション。安全な場所を求めてな。或いは大切な友を捜すために。

いや。この面倒な言い回しには誤魔化しが含まれるな。

正直に言おう。遭難中でありませう、ハイ。

いやあね？ サーバルとカラカルがハイキングに行ったと聞いてね？

こりや漫画版の通りになるかと思つて、防寒グッズや食糧をバックバックに詰め込んで雪山に出向いたのさ。

ニホンオオカミは置いてきた。教育が不充分過ぎる。雪山に連れて来たら「先走つちやつた」方がマシな展開になるに違いない。

初日からイキナリ寮の部屋に置くのも恐怖であるが、部屋を守るように指示しておいた。「大人しくしていて」と言うよりは使命を与えた方が良いと思つてだ。

性格的に飽きが来て、冷蔵庫の中を漁られるとか押入れを漁られるとか外出されて行方不明になるかも知れないからね。守るように言つておけば、多少は抑えられるだろう。

彼女の笑顔純度100パーセントな「分かつた！」は、時々不安なのだがな。番犬を信用しよう。あ、狼か。

だが今は今に集中しなければ。このままでは命が危ない。手先が冷たく足が重くなつて来たよ。

幼い頃は雪を見てはしゃいだものだが、大人になると様々な弊害となる。寧ろ害にしかならぬ。特にこういう時は。ツライさんだよ。

全く……サーバル達を救うつもりが、俺が救つて欲しい側になりかけている。いや手遅れか。

「なんで、こんな事に」

虚しくなつて、思わず天を仰いだ。

今更ながら後悔しかない。予め雪山には行くなよとか注意喚起くらいは出来たのに。

そうじゃなくても、闇雲に雪山に突入するもんじゃなかった。そもそも漫画版の通りにいくならば俺が何とかしなくても、ふたりは助かるのだ。

これも、俺が格好良いトコを見せたいとか評価されたいという欲を出した結果。当然の報い。笑つて良いぞ。寧ろ笑えよ。

「なんて、マヌケ」

「恥ずかしい。情けない。現在進行形で時間と体力を消耗する今、余計に思う。」

「だがしかし。このまま低体温症になるとか、最悪な事態である死を甘んじて受け入れる気はない。」

「取り敢えず、寒さを凌ぐ方法かな」

アニメのようにカマクラを作って凌ぐ事も考える。

このまま当てもなく彷徨うくらいなら、その方が良い。 ヒトの叡智。 見る相手がいなくても良い。

いないといけないルールもない。 必要な事だからやるのだ。 そして楽しそうだから。

この困難もパークのひとつとして愛そう。 どんとこい。 思うようにいかない諸々を良いようにする。 それが多種多様な世界の、関わり方のひとつである。

その見方を変えれば、結構希望は見えてくる。 結局は自分がどう思うかで希望か絶望かが決まるんだろう。

普段は奴隷労働社会を憎み日々をガツカリして過ごしてきた反動か。 こんな危険な状況下に生を見出すとは。 皮肉と形容するべきか？

「でも時間がかかる……うん？」

そんな時。 幸運にも目の前にポツカリと大穴が。 洞窟だ。

「なんとこの僥倖………ッ！」

それは、幸薄な状況に訪れた一筋の希望。　口を大きく開き、俺を飲み込む闇とは思わない。

何にせよ、寒さを凌げる。　ひよっとしたら、この奥にサーバル達が避難しているかも知れない。

「迷う必要が、どこにある」

取り敢えず中に入ろう。　寒いんで。

「いやあ、お客さんが来るなんて　久しぶりだよ」

かくして。　俺は洞窟に入り、とあるフレンズに出会った。

ケモ耳より枝分かれしたツノが印象的な他、服装はクリスマスマスを想起させる格好。襟元の鈴や髪を結わえている赤と緑のリボン等が良く目立つ。

ここまで来れば、多くの者は答えられるだろう。ソリを引く けもの、トナカイだ。彼女の笑顔での対応も相まって、この状況にも希望が出てきた。 1人じゃない。

その事実が心に響く。 あ、涙出てきた。

「ええ!?」 なんで泣くの!?

いかん。 本当に涙が流れていた様子。 慌てて拭つつ、俺は答えた。

「会えて嬉しいなって」

「そうなんだ? 私も会えて嬉しいよ!」

引くことなく、ニコニコして言うトナカイ。 嗚呼。 その笑顔だけで救われた気がするよ。

漫画版を見る感じ、物理的に期待は出来ないけれど。

寧ろ寿命を縮ませるまでである。 アイスやかき氷を喰わせようとするとか寒いギャ

グをかますとか。麓までの道も知らない。実は殺しにかかっているんじゃないかと疑ってしまう。いや、それは考え過ぎだと思いが。

ただし。意図せずともサーバルとカラカルは凍傷になりかけたり、死に掛けるのだが……はて。彼女らは今、いないのだろうか。

「俺は杏樹ってんだ。キミはトナカイだね？」

「私のコト、知ってるんだ！」

「名前だけ。ところで、サーバルって子を見たかい？ 探してるんだよ」

「サーバルは知り合いだけど。いやあ、見てないなあ。最後に会ったのは半年前

だよ」

どうやらまだ会ってない様子。これから来るのだろうか。

或いは俺の影響で違う場所に行ったか、雪山でも違う山とか。だとしたら大丈夫だ

ろうか。不安だ。

「何かあった？」

「うん。サーバルと親友のカラカルがハイキングに出かけたらしいんだけどさ。」

サーバルの事だから、ロクな登山グッズも持たず遭難してるんじゃないかと思ってね」
「へえ。 そうなんだ！」

トナカイのギャグが炸裂。 急に寒さが増した気がする。

ナニか。 彼女の技だろうか。 サンドスターは謎塗れだからね、可能性はある。

「……………まあ、この吹雪だ。 闇雲に探しても仕方ないな」

洞窟の外を見て思う。 冷たく白い無数の綿が流れ行く様が視界に映る。 何でかアツチの方が温かく見えた。

それだけトナカイのギャグが寒かったということか。 出て行くつもりはないけれど。

真面目に話すと、外の視界はマジで悪い。 先が全く見えない為に搜索は困難。 下手に出ない方が良い。

そも、俺は専門家じゃない。 素人だ。 現に俺も遭難している。 スマホを見たが電波もない。 バッテリー消費を抑える為にオフしておく。 ここはジツとして耐えるのだ。

「そうそう。吹雪が止むまでココにいなよー。あつ、アイス食べる?」

「いらん!」

殺す気か。 トナカイ、恐ろしい子!

「かき氷もあるけど。シロップは何が良い?」

「フザケンナ!」

素でやっているのが恐ろしい。これが寒冷地に生息する子との差だというのか。

けものは、生息地に合わせた進化や生態をしている。トナカイが雌雄共にツノがあるのも、その為とされる。オスだと繁殖期の抗争に使われるが、雪を掘る為にメスにもあるんだそうだ。

アニメでも様々な特徴が出てきたな。フェネックだと砂漠に住む狐、耳が大きいのは熱を逃がすのに役立つとか。

だがな。その地域に合わせて進化したということは。他の地域に行けば合わないという事でもある。

温暖な地域に住まう子は、寒冷地対応が苦手だとかが分かりやすい。皆が皆じゃないだろうけど。

「暑い日にアイスやかき氷を食べる事はあるけれど。こんな極寒の雪山で、ヒトは好んで食わん。ましてや遭難しているなら」

「そうなんだ？」

「わざととか？ わざとなんだな？ 俺を氷漬けにしたいんだな？」

「違うよー。あつ、雪のかけあいっこする？ そっちの方が涼しいよ」

「ヤメテエ!？」

生息地の差。その所為で命の危機になるのは勘弁だ。

だが偉大なご先祖様たちは道具や服、建築物の工夫を凝らして様々な顔を持つ地形に進出した。

その後も努力が続けられ、今日の文明へと繋がっている。トナカイには片鱗を見せてやろう。大したモノじゃないけど。

「ほれ。コレやるから、雪をかけるのはやめて下さい」

「うん? 何これ」

荷物を降ろし、中から取り出したるは大きめの缶。中身はカンパンだ。保存や携行に優れた非常食の代表。

最近のは非常食でも美味しく食べられるようになっていたが、このカンパンは喉が乾くイメージ通りのソレである。だけど開けて直ぐに食べられるモノだ。手も汚れない。

「カンパン。ほんのり甘い」

そう言いつつ、開けて食べて見せた。ボリボリと。

トナカイにもひと粒渡してみると手で持つて素直に食べ始めた。山暮らしが長そうに見えて、意外と文明的なのかも知れない。アイスとか、かき氷を提供してくるくらいだし。

「うーん? 美味しいと思うけど、やっぱりアイスの方が」

「冷たいコト言うね」

ツツコミを入れないと、アイスを食べられそうだよ。 命の危機だよ。

「あつ！ トナカイ！」

そうこうしていたら、聞き覚えのある快活な声が。
振り返れば、なんと。

「サーバル！ カラカル！」

サバンナなふたり組が、洞窟に入ってきた！

「あれ？ あんじゅ もハイキング？」

「違うわい。 ふたりがハイキングに行つたと聞いて、心配して山入りしたんだ。
見事に遭難したんだけど」

「奇遇ね。 私たちも遭難したわ……サーバルが道を知っているとばかり」

「やっぱり」

ずーん。

出会えたのは嬉しいが、その置かれた状況にカラカルと共に落ち込む。悲しいかな、漫画版の通りになってしまったようだ。

「トナカイ久しぶり! 1年ぶりかな」

「あはははっ。やだなあ、半年ぶりだよ!」

一方でサーバルとトナカイは元気だね……羨ましい。交友の広さ含めて。

「かき氷とアイスクリームがあるよ! どっちが良い?」

「アイスクリーム!」

「ああもう、最悪じゃない……絶対助かりっこないわ」

元気なサーバル、沈むカラカル。なんだこの落差。親友ならば、もうちよい互いをだな……。

「まあまあ、アイスでも食べて落ち着きなよ」

凍死という意味でか？ トナカイ、恐ろしい子！

「いちご味おいし〜」

「おいおい」

サーバル、順応してんじやねえ。

「低体温症になっても知らないわよ」

カラカルの言う通りである。危険行為はやめなされ。

いやはや、あかん。サーバルの身体がブルブル震え始めた。
しているんですがそれは。

漫画版の通りと化

「はう？ 今になって寒くなってきた」

「ほら、言わんこつちやない」

やはり来て正解だったかも知れん。 共に遭難したコトに変わらないがな。

「寒さに打ち勝つ方法なら知ってるぞ。 気持ち次第で吹き飛ばんだ」

「悪いがトナカイ、それはNGで頼む」

根性論とかムリイ。 俺、そういうの嫌いなよ。 パーク・レンジャーな件がある
ので。

「温かいジャパまんとかないの? カラカル〜」

「あんたが忘れてきたんでしようが」

「よし! 私がホットな話をして暖かく」

「吹雪が強まりそうなんでNGで」

トナカイが、またも精神論的なのをやろうとしたので止めておく。 それと、彼女が
口を開くと寧ろ寒さが増す気がしてならぬ。

「贅沢なやつらだな。　なんだったら暖かくなるのさ」

「物理的に暖かくなりたいんだよ」

マジ顔で言つてきやがるトナカイ。　悪い子じゃないんだらうけどね。　その、性格の違いがね。

「暖をとれるもの……ぬいぐるみなら、あつた」

サーバルのリユックからペンギンの大きなぬいぐるみが。　漫画版でもそうだったが、こうして見ると可愛い。　でもあまり役に立たないかも。

「サーバル、何故そんなものを持ってきた」

「ほら、抱きしめればグツスリと」

「グツスリ寝ている場合じゃないでしょ!」

俺もカラカルも、ツツコミで疲れる。　彼女の普段の苦労は　どんなものなのだろうか……考えないようにしよう。

「ああ私……もうダメかも。このまま死んじゃうかも」

「あく私もダメかも」

ここで俺の荷物について、誰も見向かないのはツツコんで良いんですかね。なんだか悲しくなってきたよ。

仕方ない。コチラからアプローチしよう。

「早まるな。毛布を持ってきたから、これに包まるが良い」

「おおっ」

そう言って、バックパックから取り出したるは「の」の字が大きく描かれた毛布。そんなに大型ではないが、包まれる大ききはある。それをふたりに渡してやった。

「ああ……暖かい」

「ありがとう、あんじゆ。助かったわ」

「まだ助かったワケじゃないけどな。ジャパまんみたいに美味しくはないだろう

けど、カンパンも食べる？」

「ゴメンなさい、いただくわ」

「あんじゆ、色々用意してるんだね」

「サーバル……お前が用意しなさ過ぎなんだよ」

「ひどいよー」

全く。一時はどうなるかと思つたが、この調子なら平気そうだな。

「おー、雪が止んだみたいだぞ」

「ほんと？」

とてとてと、皆して表に出る。確かに雪は止み、雲の亀裂から僅かながら淡い光が漏れ出している。

「ここまで来れば、もう大丈夫かな。」

「よし！ ソリで麓まで滑つていこう」

「大丈夫なんでしょうね」

トナカイといえぼソリ。 そんな感じに洞窟の奥から、小さなソリを引つ張り出してきたトナカイ。

なんというか、子どもの遊具に手が生えたような……サンタが乗るような立派なモノではない。

だが、乗った方が早く麓につくだろう。 カラカルもサーバルもソレを知ってか、トナカイを先頭に乗りに込んでいく。

「よし行くぞ。 しっかり掴まってなよ」

「小さいわね」

いやはや。 見ていて微笑ましいね。

「しゅっぱーっ!」

「うわー!! め、めちやくちや はやい じゃないの!」

「いいぞいいぞ! サンタクローズになつた気分だよ!」

ガーツと。

凄い勢いで下山していく御三方。
姿を見送った。

漫画版の通りだ。

もう大丈夫だろうと、俺は後

「さて……俺は？」

雪山に取り残されたは、俺ひとり。

ビューと風が吹く。寒い。

白き世界に取り残された、ひとりの男。

ボッチはさ……やっぱ寂しいね。

悲劇：「まみれるワンコ」

玄関の戸を開けて汚れた白に塗れる空間が両の目に飛び込んだ瞬間、俺は自らの軽率さに思わず愕然としてしまった。

現実として見てしまえば認めざるより他なく、同時に自らの選択ミスをしたことによる怒りと恐怖が沸き起こる。

それは多足類が全身を這いずり回るが如く。　気持ちが悪い、というより今後起こり得る更なる恐怖に俺は身を震わせた。

「お帰り　あんじゅー！」

穢れた白の向こうから聞こえるは、可愛い女の子の声だった。　犯人……いや犯犬、狼か。　狼藉者である。

壊れたブリキ人形のように。　俺は首をギギギとぎこちなく動かせば、ドロドロ白液に塗れ、穢れた天使がそこにいた。

尻尾とけも耳、つり目から察するに二ホンオオカミだと判断出来たが、何故か服は中途半端に脱げかけて肩や北半球が露わに。

そして足下には押入れの闇に封じたハズの、禁断の書物が転がっている。露出度が高い女性の水着写真集。それすらも穢れた白液に塗れて悲惨な事に。

傍にはマヨネーズ容器が転がる。ナゼに、とは考えない。故に、とは考えたが。いや、最も悲惨なのはこの状況。目の前のナニとも知れぬブツと合わさり、この部屋は劣悪を極める。なんか臭うし。

「ああ、あああ！　　あああアツ！！　　そうだよなあ……やつばそうなるよなあアツ！」

悲愴な運命。　　パークの良い子には見せられない光景に、つい絶叫した。

「どうしたの？　　遠吠えなら一緒にしよ！」

「……うう」

それに対し、彼女は無垢な笑顔と悪意なき鳴声を上げた。俺は怒る気力が起きず崩れ落ちた。　　見方次第で天使とも悪魔ともなるが、残念ながら俺の視点からは後者で

あつた。

素直に言つて、怖い。パークで起きたこの惨劇に鳥肌が止まらない。両の毗から水が滝の様に流れていく。どうも鼻水まで流れている様だ。嫌な汗も出た。俺の顔は今、様々な負の感情に歪み、ばっちい汁に塗れている。

「ところでさー！　この白いの、美味しいね！　白くて冷たい箱の中にあつたんだあつ！　おべんきよーしようと思つて、ほん？　も見てたのー！」

「白いのはマヨネーズだ……本は、キミが見てはならぬものだったんだよ」

やはりというか、当たり前というか、知識なき　けもの　に家の留守を頼むというのは愚行であつたらしい。結構、勝手をやっていた。

マヨネーズは冷蔵庫にあつたものを漁つて、弄り回して部屋に撒き散らしたんだろ。　本も似た事情か。

それに加え、俺はパリピ巢窟の中心で悲劇を叫ぶべきではなかった。背後で扉の開閉音が何枚も聞こえ、ヒトの不幸を喜ぶ声や嘆く声、通報する声が聞こえてくるのがその証拠だ。

総じて形容するならGが這い回る音。　何故俺はヤツらを喜ばせてしまったんだ。

ある意味で最も恐れていた事態ではないか。

普段は下等な連中だと哀れむ事すらあつたが、この場における最大の患者は俺個人に他ならない。なんて事だ。悲惨すぎて笑いが起きるね。 はははは。

——いろいろ終わった。

事案発生現場にしか見えぬ、我が寮部屋。 社会的にも死んだも同然。

穢れた白いドロドロなんて、さも男のアレっぽいじゃん。 本もあるから、余計である。

特にニホンオオカミの格好が、だらしねえナニかの状態でアウトだ。 けもの ですもの。 大目に見てねとはならないだろコレ。 俺が大目玉を見るパターンだよコレ。

「ひぐつ、うぐ……もう……やだあ」

もうダメだお終いだあ。

雪山から独り寂しく下山をし、疲労困憊の身体を引き摺って部屋に戻ったらコレだもの。

俺のパーク人生もここまでか。 お天道様の下を歩けない身体にされちゃうのか。

ああ、カコに顔向け出来ない。 ごめんよカコ。 俺に世話は無理だったよ。

何にせよ、また管理センターの小動物に迷惑をかけるのだ。 此方から自首しよう。

「……………うぐ……………ひつぐ。 俺です。 杏樹です」

そんなワケで。 俺は震える手で管理センターに電話した。 声も震えていた。 取り敢えずの第2声は「助けて下さい」だった。

「貴方への説教も、何度目か分かりませんね」

寮の外。 背広を来た ちんちくりんな女性に、俺は説教を受けている。 管理センターの例の小動物だ。

何故か彼女を見ると、罪が赦された気がしてしまう。 色々と世話になっっているからかな。 母性すら感じさせる。 説教も仕事のモノというより親に叱られている感じ

だ。

「いやいや。今回、悪くないですつてば」

「涙声で罪を白状したじゃないですか」

「パリピが騒ぐんで。事態の收拾には最早、貴女に頼る他なく」

だからか。安心感から軽口が出てしまうのだ。太々しいのは自覚している。でも、彼女は許してくれる。

一言二言あれど、最後は笑顔な感じ。寛容なのだろう。

「出来る事はします」

そんな彼女の視線に釣られると。

寮に掃除用具を持った清掃員達が入入りしているのが見える他、女性の飼育員も1名入っていくのが見えた。

「掃除するヒトまで派遣してくれて、助かりました」

「ニホンオオカミさんも綺麗にするよう、手配しました。貴方に任せたら、それこそ本当のマチガイが起きそうなので」

俺、信用されてないね。そう見えるんですかね。

「やだなあ、紳士ツスから大丈夫ですよ」

「部屋の中から、いかがわしい本があつたと報告が」

「ハアン!？」

変な声が出ちゃったよ！ ヒトの恥部を見ちやらめえ！

「くつ。 処分してから電話するべきだったか」

「安心して下さい。 その場で処分したそうですから」

「おおう」

クサイモノを消して、爽やかな笑顔を向けてくる小動物。 そのうち、俺を消さない

よね？ 大丈夫だよね？

「次から、こんな事がないように。 貴方の事ですから、また問題が起きそうですが」

「善処します」

「よろしい」

ふふつ、と微笑む彼女。 説教とやらは、これで終わりのようだ。

他だったら怒鳴り散らされたり殴られたり公開叱咤になるのだろうか。

周りのヒトが優しいと、時々言いようもないような不安に襲われる。 俺、島の外に出たら生きていけないんじゃないかって。

島の外に、自ら出る気は無い。 実家帰り等はあるかも知れないけど。

——怖い。

今回の件も実のところ、この辺を最も恐れていたんだと思う。 島から追放されたらどうしようって。 居場所を消されたらどうしようって。

自業自得なのに。 ワガママだよな、俺って。

「どうしました?」

「えっ?」

いかん。ネガティブの闇に沈んでいた。

「いえ、何でもありません」

「何か有れば、相談して下さいね」

「ありがとうございます」

ホント……良いヒトだね。ダメになっちゃいそう。あ、手遅れか。

「じゃあ、その。前にしたセキュリティや調査の話……どうなりました？」

「話はしました。ですが、人員は振られてないですね」

「そうですか」

人員不足だろうか。パークは広大だ、フレンズのチカラを借りるにしても限界はある。

「心配しないで。きつと大丈夫」

「ありがとうございます」

その言葉に何の保証があるのか。きつとない。だけど縋る。自身は何もしないクセにな。

「あ、掃除……終わったようですよ」

清掃員達が寮から出て来たから、会釈して礼をする。相手方も真似るように返事をしてくれた。笑顔だ。

それは本物じゃない。仕事上の紛い物。だとしても、今の俺には救いのひとつだ。

だけど。縋って本当に救われるなら苦労しない。前世は作り笑いに騙されて……最期は死んだんだから。

「あんじゅー！　お風呂って楽しいね！　あわあわしててー！」

ニホンオオカミが出てきて、声をかけてきた。ふむ。あわあわしていたのは職

員さんかな。それともシャンプー？ 両方か。

「それと毛皮つて脱げるんだね。知らなかったよ！」

「ああ」

アニメでもあつたようなコトを言うニホンオオカミ。そうか。フレンズは教えないと服が毛皮であり、脱げる事を知らないんだよな。

「杏樹さん……変な気を起こさないように。何かあればカコ博士に言いますから」
「やめて下さい死んでしまいます」

今世での死因もまた、悲しい理由にならないようにしよう……。
カコが知つたらどうなるか分かんが。でも馴染みだからというか、その、知られたくないよね。身近なヒトにほど。

「そうならないように、以後いじ気を付けて下さいね」

「……ウイッス」

ねば。
気を付けるねえ。躰しっけは大変そうだ。それから未来の話。取り敢えず礼は言わ

「今日はありがとうございました」

「どういたしまして。では」

「バイバイ、おねーさん！」

小さな背広の、その真つ黒な背を見送りながら思う。

この先、どうすれば良いのだと。

考える程に、全く嫌になるね。

☆キタキツネとケーキ屋へ。

何やかんやで、クリスマスシーズン到来である。最近では寒くなってきたなど思っていたが、いつの間に12月であったか。

光陰矢の如し。いや、労働社会において季節に気がつかなかったとか？ だとしたら泣けて来るんだけど。

サンドスターの影響で気候や地形が異なる地方があるジャパリパークにも、一応の四季がある。俺が住んでいる都市部周辺とか特に。

漫画版でも、季節を感じさせる描写があつたりする。菜々はマフラーを巻いていた。そのくせ、半ズボンなのは置いておこう。

閑話休題。

カップルが観光地や都市部に大量発生する時期。同時にいない者にとっては苦痛な時期だ。それはパークでも変わらない。

メリークルシミマス。ネットでは互いの傷口を舐め合い、リア充を共に叩いて笑い合い、二次キャラの画像や写真を前にして豪華そうな食事を並べてエンジョイしたりする。

それもまた、ひとつの過ごし方。俺も似た過ごし方をしてきた身としては、アリだと言っておこう。

たつのしーならば良い。それは重要にして救い。そして生きてるって証拠だよ
(大袈裟)。

「だが今日の俺は違う！」

部屋は飾り付け、パーティ用の三角帽を被り、テーブルには大きなケーキ。

他にもピザと、最近開発されたのか、ジャパまんというまんじゅうも用意した。

久し振りに豪華な食事の風景である。

来客？ 恋人？ ちゃうちゃう。同居しているニホンオオカミとクリスマス

を祝うのさ！

ふつつつふー。リア充ならぬリア獣。群れてヒヤッホーウするのは嫌いだが、こ

れくらいなら許せるぞおい。

何よりフレンズは気兼ねなく接する事が出来るからね。ヒト同士のギスギスを考

えなくて済むのが良い。

フレンズ最高。パーク万歳。恋人とは違うが、たつのしークリスマスとなるな

ら、素晴らしいパートナー。

マヨの悪夢とその後のパリピ連中との事故処理は……忘れよう。ニホンオオカミも、言い付けをある程度守れるようになってきたし、都市部に出ても問題ない。

買い物だつて出来ちやう。かしこい。

さて。後は……ニホンオオカミが、買い物から帰ってくるのを待つばかり。

来たらクラツカー鳴らそう。よし、スタンバイスタンバイ……。

「ただいまー！」

扉が開いた！　　今や！

「おかえりい！」

パーン！

音がなり、紙吹雪が巻き起こる。

決まった。祝いはここからだ！

「うわあ！」

「いやあ待つてたよお！　　買い物お疲れねえ！　　色々用意したからあ、荷物傍に

置いてねえ！」

アルパカ風に、でもハイテンションに。ニホンオオカミが喜びそうな感じで、案内を促す。

ふっ。彼女なら大喜びしてくれる。そんな満開の笑顔を期待していると、

「隣のパーティに呼ばれたんだ！　　あんじゅ　も行こうよ！　　みんなでやると楽

しいよー！」

そう言つて。　　買い物袋を玄関に置き、踵を返してしまった。　　彼女の姿は一瞬だった。　　なんと夢いことか。

「……………ふ、ふふ。　　群れるのが好きな　　けもの　　にはパリピ連中がお似

合いだ」

今年もボツチ。 そんな歴史は断じて許し難い。

だがパリピ連中の輪に入るのは嫌だ。 プライドと生理的悪感により断固として拒否する。

「落ち着け。 他にも友はいるんだから」

こんな時は電話だ。 文明の利器を使えば良いのだ。

俺は電話帳から馴染みのカコの名を選び、コールボタンを押した。 数秒のコール音。

『お掛けになった電話番号は、ただいま電波の届かない——』

「クッ！ 研究中か………ッ！」

だが現実には俺に冷たかった。

カコと連絡がつかないのは、別段珍しくない。 研究に忙しいと電話に出られないのだ。 だ。

でも、これくらいでヘコたれない。 現実とは常にどうにもならないのだから。

「他で良い！」

馴染みが駄目だから、他の女とクリスマスを過ごそうというクズ思考に。もう必死。

だってしょうがないじゃないか。クリボッチは嫌なんだもん。料理も冷める。パリピ連中の所は嫌だ。

そうして別の番号へ電話を掛け始めた。

——ミライ、菜々、小動物。レンジャーは……面倒なんで掛けなかったが。ところが、こんな時に限って皆が音信不通。誰とも連絡が取れなかった。仕事か。それともパリピに誘われて一緒にヒヤツハーしているのか。なんにせよ、望みの相手は出てくれなかった。

「フヒッ」

その現実には、俺の中でナニかが折れる音が聞こえた。同時にキモい笑いが部屋に響く。

どうやら今年もボツチらしい。知り合いのアニマルガールを呼ぶにも、彼女らは携帯を持っていない。直接ナワバリに行く方法があるが、不確定だ。

こうなると、もうダメだった。自分の人生が無価値に思えてくる。何をやってもダメな気がしてきた。

何が転生者か。何がパーク職員だ。今年も前世同様にクリボツチじゃないか。

こんな汚く下衆な俺だ。プライベートで付き合ってくれる子なんて、いやしないんだ。

思えばサーバルから誘いの連絡がない。忘れられている可能性があるが、やはりどうしてか見捨てられている気がしてくる。

穢れなき島だ、フレンドリーだと勝手に憧れて上陸して……そんな俺は穢れている。だから世界が変わっても孤独が襲って来るのだ。何の冗談か。質の悪い笑い話である。

「はっ、はは、ハハッ」

どうせ俺なんか、誰にも愛されないんだ。また今世でも仕事上の愛想笑いや偽物に騙されていたんだ。お情けで付き合ってくれたに過ぎない。パークなら大丈夫だ

と思いがつた俺は馬鹿だったよ。　へへッ。

と、三角コーンを被つた男が、茫然自失となり白目を剥いていると。バタンッ、と勢い良く玄関のドアが開く音が。

「ッ！」

ニホンオオカミが帰ってきたのか。　俺を心配して戻ってきたのか！

そんな期待と共に、振り返れば。　いたのは金髪の狐娘であった。　イヌ科という意味では同じだが。

「キタキツネ……ッ！」

「お邪魔するわよ」

それはワガママガール、キタキツネ。

最近は言う事を少し聞くようになり、ちよつぱり良い子な女の子。

だが今や株が急上昇。　聖母か何かにすら見えるほど。　いよいよ後光が差して見

える。　それが例え共用廊下からの明かりだとしても、俺にはそう見えた。

俺はソレを、口元を手で覆い、信じられないといった表情で見るとはなかった。

タイムリングに感涙した。あまりの救世主っぷりに。

キタキツネが来た事情は知らぬ。だけど多くは望まない。共に過ごしてくれるなら。

ところが。放たれた言葉は予想以上のものであった。

「あんじゅ！ 私の恋人になってよ」

「フアツ!？」

あまりに突然の言葉。面食らうのは無理もない。だけどクリスマスを共に過ごしてくれるなら、「イエスー」と軽く言いそうになったのは内緒だ。

だがフレンズに、それもキタキツネに惚れた腫れたの話が分かるのか？

そう考えたら、不思議と平常心に。熱が冷めた。ネガティブも消え中和されてしまう。感謝はしないけれども。

「ああ……ケーキか」

して、当たりをつける。こりや漫画版にあつた話関連だと。

都市部にあるケーキ屋さん。リカオンが店員をやっている所だ。

俺が通報されたのもあつて、行き辛いのだが……キタキツネに引つ張られて渋々行く事にした。

それと余談だが。前に教えてもらったリカオンの連絡先、アレはケーキ屋の固定電話に繋がる。個人ではない。前にやらかして、ツライさんである。

「恋人同伴でケーキがひとつ貰えるのよ！」

そう言って、キタキツネは目を輝かせながらチラシを見せてくる。クリスマスツリーの絵が描かれた紙には、確かにその旨が書いてあつた。

漫画版の通り。この事から、彼女も文字が読める。かしこい。問題なの

は恋人の意味を理解していない事だ。

「恋人の意味分かってないだろ」

「ケーキ券の代わりじゃなくて？」

「違う」

都市部の歩道を歩きながら間違いを言う。

やはり理解していないのも同じか。 欲に忠実というかフレンズらしいというか。

「まさかと思うが、菜々や他のフレンズを巻き込んでないだろうね？」

「してないわよ」

「そ、そうか。 なら良し」

あれ。 漫画版の通りなら、ジャイアントパンダとかタイリクオオカミとかコアアラとか巻き込んでケーキを貰おうとしていたんだけどなあ。

俺の影響か。 悪くはないけど。 寧ろ良いんだけど。

「ところで、あんじゅ」

「うん？」

「恋人って なに？」

さて。 なんでしようね。 勝ち組かな。 結構だ、だからって格好付けて他人を巻

き込むのはやめて欲しい。

学生時代の《アレ》とか弱そうな通行人を捕まえて女の前でボコボコにしてみるとか。 そんな事してない自称善良なカップルでも、俺ら彼女ナシが見たら僻むんだけど。

「菜々に教えてもらいなさい」

「なんでよ」

「俺より上手く答えられるだろ」

漫画版の通りなら、想い合っている者同士がなるもの……だっけ？

聞いたキタキツネは、じゃあ肉まんとは私は恋人になれるのかと聞いていたかな。 肉
まんの気持ちがかかるのかな。

さておき、説明とは難しいよね。

「ところで、菜々はどうしたの」

「察にいなかったの。仕方ないから、あんじゆの所に来たのよ」

「仕方ないのか、俺は」

ツツコミつつ、疑問に思う。

はて。外の掃除でもしているものかと思っていたが。俺の知らない展開が続く気がするな。今更だけど。

菜々が熱を出した回でもあるから、具合が悪くて休んでいるのかも知れない。部屋にいなかったなら病院とか行っているのかね。部屋

だとしたら、連絡がつかなかったのも頷ける。悪い事をした。

「後でまた、連絡するか」

「あつ。ココがケーキ屋」

そんな俺や菜々の心配を他所に、キタキツネはケーキ屋へとズカズカと入店。迷いが
ない。俺も仕方なく背中に隠れるように入店する。

はあ……キタキツネの欲への忠実っぷりは羨ましい。そのスキル、俺にもくれ。そしてオオカミに変身してマチガイを起こす。起こしちゃうのかよ。

「いらつしやいませ……あれ、あんじゅさん？」

「や、やあ」

ボーイツシユだけど丸耳がキュートな、リカオンに再会。向こうは俺の事を覚えている。なんか気不味い。フレンズが覚えてくれているという感動が起きない。ツライさん。

「ケーキ貰いに来たわ」

「カツプルね。あんじゅさん、また変な事を？」

「俺、そんな悪いヤツに見えるかな？」

いや、悪いヤツなんだけどさ。またってナニか。俺って人相悪いのかな。地味にシヨック。

「そんなの、どうでも良いからケーキちようだいよ」

キタキツネの どうでも良い発言も結構キますね。 いやあキツいっす。

「まあ待つて。 限定ケーキには条件があるんです。 マーゲイ、カップルだよ」

無視されてないかな俺。 やっぱ嫌われているのかも知れない。

この場にいるとツライんで帰つて良いですかね。 料理片付けなきやだし。 マーゲイには会いたいけど。

すると、そんな願望を叶えてくれるかのように、店の奥からメガネを掛けたフレンズが。 マーゲイだ。

アニメと同じ服装だ。 何となくサーバル似、独特の黒の流線が混ざる。 けも耳も可愛いが、ひよろりとスカート下から伸びるネコ尻尾が可愛い。

アニメではPPPのファンで、マネージャーになるフレンズだが（漫画版では、なんとPPPの名が出てくる、PIPではない、俺もこの世界でチラリと見聞きはした）。

第1世代のマーゲイは、リカオンと一緒にケーキ屋の店員をやっている。 性格も異なりクールビューティな感じ。

俺が初めてケーキ屋に来た時、会いたかったフレンズだ。その時は生憎と非番で会えなかったが……挙句に通報されたが、とうとう会えた。

ありがとうジャパリパーク。ありがとう第1世代。
だからさ、もう帰って良いかな？

「いらっしやい」

ポツと頬染め、そう言う彼女。 ナニを思ったんですかね。 菜々の時はナイスカッ
プルと思っていたようだけど。

俺は、マーゲイの目にどう映ったのか。 元気でツンツンな狐娘に振り回される悪人
かな、やっぱ悪いヒトなんだね。

「ケーキなら好きだけあげるわ」

「本当？」

「その代わり」

マーゲイは一拍おいて、

「あなた たちの愛を見せていただきます」

聞いていると恥ずかしいよマーゲイさん。愛とか、俺には重いし。

それとキタキツネは、俺の事をケーキ券だと思っっているぽいんですがね。それって愛なんですかね。

「——パフォーマンス次第で お店のケーキすべて差し上げますよ」

「おおお、イエスイエス」

リカオンが明るく言い、キタキツネのやる気を上げる。俺は やる気ないんですがね。

ほら、その、恥ずかしいし。帰ろうかと踵きびすを返そうとした刹那、

「あんじゅー！」

ガバツと視界にキタキツネのドアップ。可愛い顔とて突然だとビビる。

そしてピヨンと抱き着いてきて、

「アイラブユーあんじゅ!」

「ぎゃあああああ!?!」

メリメリメリツ。

思いっきり抱きしめられた。　苦しく痛い。　こんなハグじゃない、ただの絞め殺しよ!?

フレンズの握力ってホント恐ろしい。　こんなスマートな身体のどこに、こんなパワーがあるのだろうか。　柔らかな感触を味わう余裕がない。

愛があるなら大丈夫かって?　俺に対してというより、ケーキじゃないかな。　俺に限れば苦しく痛いだけ。　嬉しくない。

「どう!?!」

「うーん。　イマイチ萌えない」

「ギ、ギブ……ぐるじいつ」

「おい、恋人。　大丈夫?」

大丈夫じゃ、ないです。だからキタキツネの腰をポンポン叩いてるんです。
レフリーは、いないんすか。マーゲイ助けて。リカオンも助けて。シヌウ。

「あんじゆ、何とかしなさいよ」

そう言つて、やつと離してくれた。腰に手をやつたまま、見つめてくる格好だけど。息を整えるのに忙しく、ドキッとくる余裕がない。彼女の目には俺は男じゃなくてケーキ券であるし。そう思うと虚しい。がつくり。

「そうは、いつてもな」

息を整えながら悩んだ。

漫画版なら菜々が風邪でグツタリするところだ。そして店の中に入れられて寝かされる。

病氣イコール死ぬの思考であるキタキツネは、とても心配して添い寝。

それを見たマーゲイが萌えて、菜々が回復したトコでリカオンと共に祝い。ケー

キをプレゼント。

でもなあ。野郎で嫌われている俺がやってもなあ。現状、具合悪くない。仮病というか嘘は嫌だ。騙すのは気がひける。添い寝も抵抗がある。

決してヘタレじゃないもん。騙したくない気分なんだもん。失敗の可能性もあるもん。

「残念だけど、ケーキはあげられないかな」

「そうだな」

「えー！」

そんなー、と声を上げるキタキツネ。漫画版の通りにならなくても仕方ないね。別にこんくらいでパークの平和が乱れるとは思えない。些細な日常のヒトコマだ。

「帰ろう、キタキツネ。帰ればまた、来られるから」

キャンペーンは終われど、撤退すれば俺みたいに黒歴史は出来まい。これ以上いると危険だ。傷口は浅い内が良い。

苦勞や恥の見返りをココで求めてはならない。引くのも勇氣だよ。

「やだー！ ケーキ欲しい欲しい欲しい！」

うわーんと駄々を捏ねても駄目だ。店員を見てみる。マーゲイは冷たい表情。リカオンは苦笑。ここからの起死回生劇は無理じゃないかな。

「じゃあ、俺も適当にやる。それで駄目ならソコまでだ。良いね？」
「うう……分かったわ」

諦めて貰えるよう、そう提案。キタキツネは頷いた。マーゲイもリカオンも「どうぞ」という具合。

仕方ない。やるか。漫画やアニメ、ゲーム等の知識からソレっぽいコトをしよう。現実に通用はしないソレらを。

恥ずかしいが、それで諦めてくれるだろう。

「キタキツネ」

そうやって、顎に手を添える。　　そうして少しくいつと上に持ち上げて俺と見つめさせる。

「えっ」

声を上げられるも構わない。　　そのまま　そつと、ヒトの方の耳元で吐息を掛けながら愛を囁いてみた。

「俺、パークに来て……キタキツネに会えて良かった」

「えっ、えっ」

「ワガママだけど根は良い子で、都市部のコトも色々学んで、最近は何だかんだ言う事を聞いてくれて。　　今日なんて、部屋に来てくれてとても嬉しかった。　　独り寂しかったんだ。　　キミは俺の天使だよ」

「あ、あんじゅ？　　ホントにあんじゅなの？」

「狐耳が可愛い。　　尻尾も可愛い。　　笑顔が可愛い。　　キミの全てが愛おしいんだ。だから、これからも一緒にいて欲しい。　　愛してる」

「っ〜！」

ここまで言つて、そつと離れた。キタキツネの顔を見ると……赤い。怒っているのだろうか。一方で俺はスゴい恥ずかしい。凄まじく。側から見たらキモさを追求した生ゴミなナニか。黒歴史不可避だよ。

「……………ふむ。愛を見せて貰つたよ」

「あんじゅさん。そうやって、他の方も……………？」

マーゲイはメガネをキラーンと輝かせて。リカオンはジト目で反応。ナニか。良くも悪くもこれ以上はやらないよ。こんなのキモいやん。

「約束通り、ケーキプレゼントだ」

えっ嘘。マーゲイがホールケーキを寄越してきたよ。美味そう……………じゃなくて。今のどの辺に感動したの。キモさ辺り？

「あー、うん。　ありがとう。　良かったなキタキツネ……キタキツネ？」

赤いまま棒立ちするキタキツネ。　欲しがっていたケーキを前にして微動だにしない。　らしくないな。　大丈夫かい？

「キタキツネ、ケーキいらんの？」

「はっ!?　　いるに決まってるわ！」

慌ててケーキを受け取る。　俺は頷いた。　そうだ。　それで良い。　ヒトの犠牲を無駄にはならない。

これで逃げたらケーキは俺のものだ。　そして独り寂しく食べるまでである。

「マーゲイ、リカオン。　世話になりました」

「いや、何もしていないが。　またな」

「また来てね」

手を振って店を後にする。　ケーキをくれたコトよりも　また来てね、と笑顔で言わ

れたのが嬉しかった。拒絶されていなくて良かったと思う。

「みんなに、分けてあげるんだよ」

「分けたら取り分減るじゃないの」

「そんなコト言わない」

「えー!」

キタキツネと会話しながら、都市部を歩く。外は暗く、雪が降ってきたトコだった。

街灯に照らされた綿がふわり、ふわりと舞い落ちる。

それらは冷たいのに、不思議と心が温かい。なんでだろう。キタキツネと一緒だ

からか。

「そうだ。菜々に連絡しなきゃ」

思い出して、携帯を取り出す。未だに彼女たちから返答がないのは悲しいが、取り

敢えず菜々だ。

「どうしたの？」

「菜々に電話するんだよ。心配だから」

コールして、呼び出す。数秒のコール音の後。

『お掛けになった電話番号は——』

「よし。帰ろう」

爽やかな笑顔で携帯を閉じた。それ以上考えるを止めた。温かい気持ち氷点下まで下がるのは避けたい。俺の頭がジャツジを下した結果だった。

「大丈夫？」

「キタキツネ……今はキミだけだよ。俺を慰めてくれるのは」

「えっええと……？」

ふつと雪降る夜空を見上げつつ笑う。現実とはどうにもならない。だが悲劇とは時間が経てば癒えてくるもの。

この悲劇も、その内に笑い話になる。ニホンオオカミのマヨネーズ事件がそうだ。1年と経たずに立ち直れた俺だ。

明日にでもなればケロツとしているさ。でなきや鬱だ。今世でも鬱とか嫌過ぎるだろ。

「今日さ」

だから、そうならぬよう。過去や未来に関係なく、今日は楽しく終われるように……俺は口を開く。

「ウチ、寄ってかない？」

そう言う。並列して歩く狐娘は、微笑んで頷いた。

ありがとう。

心の中でそう言った。口に出せば、目にあるダムが決壊しそうだったから。

愛があつても、襲うのは良くない。

愛とはナニか。最近、それを考える時がある。

パークに来て、嘘のように女性との付き合いが増加した。

本土でも言えた話なのだが、ジャパリパークという特殊環境下にいる所為なのは分かる。というのも、アニマルガール……フレンドズを女性として見てしまえば、自然とそうなる傾向にあるのは仕方ないのだ。

あの愛らしい けも耳、けも尻尾。鳥の子なら頭部の羽根。フードが有れば蛇の子……とまあ、無くとも普通に美人が多い。

ミライ風に、無いと足りない派もいるのは分かる。だが悲しいかな。これも男性か。顔や胸に自然と視線が向いてしまう。して「おっふ」と思う。偶に口に出る。

しかし、そんな日々を送る中、俺はこうも思った。

コレ、彼女たちの体目当てでパークに来たみたいになつてね？ と。

当初、俺はいやらしい目的で島に上陸したワケじゃない。前世での苦痛から逃れる為に本土を離れた。

して、フレンズと仲良くなりたいたい、友になりたい、笑い合いたいと夢を見たワケで。職員として上陸した以上、仕事はしなくてはならない。それでツライさんになる時もある。だけど決して、下心が主目的ではない。

だがやはりりというか、種を植えつけたというエロい本能が牙をチラつかせるのは仕方ないじゃない。だって男の子だもん。

だけど待つてと、理性が語る。かくしてソレは愛か。己の欲を満たす為に他を犠牲にするのはアリなのかと。

彼女たちのピュアなハートを騙し穢すのはイケナイ筈だ。その前に社会的に犯罪者やん。きつとソコに、少なくとも俺が求める愛はない。

そんなコトを考えている暇があるなら、パークの未来や闇に立ち向かえと言われるかも知れない。

だが、そうは言っても俺とてヒトだ。悩みもすれば、迷いもする。

「ふ、ふふふ。 あんじゅさんが悪いんですよ？ タイリクオオカミお姉さまと仲

良くしちゃうんですから」

特に、こんなふうには面識のないフレンズに言われながら押し倒された時には、らしくもなく愛とは何ぞやと悩ませてしまうのも無理からぬ事だった。

いま、俺を襲っているこの子。タイリクオオカミをお姉さまと慕っている雰囲気から分かる方もいるかも知だが……イタリアオオカミというフレンズだ。

服装はタイリクオオカミの亜種ということからか、色違いという印象。

亜麻色のジャケツットに灰青色のチェック柄のネクタイを締めていて、ベージュ色のフアーを首元と足首に巻いている。

茶色いニーソと灰青色チェックのプリーツスカートによって生成される絶対領域。

靴の紺色が隠れたトコはオシヤレポイントか。

髪は前側が茶色、後ろ側が亜麻色のツートンになっており、前髪の一部と後ろ髪の毛先は白。ぱっちりした瞳はオレンジ色。

発言から分かる様に、タイリクオオカミをお姉さまと慕っている様だが……はて。それは第2世代の時代かと思っていたんだけどなあ。

既にフレンズとして存在し、かつタイリクオオカミを慕っていたとは。俺の知らないジャパリパーク。

して、他への想い故の行動を受けるとは。これもひとつの愛なのだろうか。

だとしても甘んじて受けるワケにはいかない。こんな美少女に犯されるならウエルカムようこそなんだけど、犯すというのは期待とは別の意味だろう。恐らく精神的屈辱や脅迫か物理的に捻られるかだ。

愛とは様々な形や解釈があるにせよ、取り敢えず俺は他者の愛に理不尽に巻き込まれていると言えよう。

なので、この危機的状況を脱するため、俺はイタリアオオカミの説得を試みた。

「お、落ち着いて。こんなこと、タイリクオオカミが知ったら、どう思うか知らない君じゃないハズだろ!？」

「ハアハア……! タイリクオオカミお姉さまの慈愛は……見て良いのは私だけなのッ!」

俺は想いヒトならぬ想いフレンズの名を口にす。ところが、チカラを弱めるどころか微笑みを漏らし息を更に荒くした。

加えて潤んだ瞳、上気した頬は実にエロく情欲を湧き起こしてくる。

——おのれ、狂気の女め!

正直、おいしいシチュとも思う。だからといって、先程も思ったように面倒事は勘弁なのだ。特に痛いのは嫌だ。心身共に。俺はそこまで受け姿勢ではない。

にしてもだ、タイリクオオカミの名を口にして、ああ反応するとは。

愛とは恐ろしい。身をもって知らされた。愛が重いという表現方法があるが、こういうのを言うのだろうと思う。

自らの求む愛の為に、他者を犠牲にするのみならず、想う相手の考えをも考えない。形容するなら自己中だ。この手の輩は自らが満たされれば他はきつと、構わないヤツだ。愛を受けるのは良いけど、他へ愛を向けるという考えがない。

いや、あるか。タイリクオオカミに対しては。でも他にもあるなら、俺は襲われてないだろう。たぶん。

フレンズは色んな子がいる。得意な事も違う。姿も考えもバラバラだ。

だがミライのように、彼女たちの全てを愛せないヒトなのだ。少なくとも俺はな。転生者とはいえ、フレンズやパークが好きとはいえど。実際に触れ合い続けていると合う合わないが出てくる。

会えばアイドルや有名人に会ったかのようにヒヤッホウしていた俺は何処へ消えたのか。慣れつて時にツライさん。

悲しいけどこれ、現実なのよね。

ともあれ今は……対話をもってして抵抗しよう。パワーならフレンズの方が上だから。押し倒されているのもあつて、逆転は無理に近い。

レンジャーの隊長が言っていた拳で語るのは駄目だ。普通に勝てないだろうし。

「いや、ほら。そんなに交流が頻繁だったワケじゃないし」

震え声で事実を言ってみる。これで引いてくれれば苦労しないけど。

第1世代のタイリクオオカミもそりや、美人だし大人の雰囲気がある淑女って感じだ。

笑顔を向けられれば男女関係なくコロツと心が傾いてもおかしくない。俺としてはアニメにも出てきたフレンズだし、お近付きになりたい気持ちはあつた。

でも、しょっちゅうではない。パーク内での馴染みのカコとの再会数に、少し毛が生える程度じゃないだろうか。仕事がある身というものもある。

最後に会った時は、仕事……ヘルプで買い物の手伝いをしたくらい。それで嫉妬し

ているなら、どんだけだよという話であり。

「知ってますよ？　その僅かな時間で、相合傘したり買い物袋を受け取る時にワザと手に触れていた事もねッ!!」

「ヒエッ」

目を見開き、犬歯(?)を剥き出しにして唸る彼女。　スゲエ怖い。

ふ、ふむ。　なるほど。　確かに振り返ってみれば、必要以上に身近な距離で過ごしたな。　仕事という大義名分を掲げて……俺にも非があつたかも知れない。

でも無意識に温もりを、愛を求めた結果なんだ。　疲れている時ほどに欲求は深くなるんだって。

ちよつと摘み食いしても良いじゃない。　更に言えば減るもんじゃないでしょ？

「て、てかさ。　なんで俺の名前知ってるんだい？　それからココ……俺の部屋の

場所とか。　タイリクオオカミとの買い物だとか」

聞かなくても分かりそうな、でも分かりたくない事を口にする。　時間を稼ぎつつ、

彼女の思考を変えたり乱して隙を伺う為だ。

すると案の定というか、予想通りの回答を得る羽目に。

「尊敬するタイリクオオカミお姉さまの事なら、私、色々知つてます。 ええ……あんじゅさんよりも。 朝起きて鏡の前で笑顔の練習をされていたりとか……ふふふ」

幸せそうに、髪を振り乱しながら喋るイタリアオオカミ。 美人が台無しだ。 同時に狂気の愛を感じる。

「つーか、それ、ストーカーじゃね？ 普通に犯罪じゃねとツッコミを入れたら瞬殺されそうなんぞ言わない。」

「そんなお姉さまを、私は誰よりも深く愛しているんですつ」

「な、ならこんなこと」

「なのに！ なのにツ！！ お姉さまは家やカフェでひとり、時々ウツトリと貴方の名を口にしてツ！！ どうしてなの!? 私はこんなにも深く愛してるのに！ 私の事は呼んでくれないの!? その顔を、笑顔に向けてくれないの!?!」

「ええ」

そんなの知らないよ。

タイリクオオカミが、俺の事をどう思ってた口にしてたのか分からん。　ただどだからって、俺を襲うとか酷いよ！

まあでも、言っていることが分からんでもない。　電話しているのに出てくれないとかツライさんだよ。　あ、それは違うか。

「それで貴方の事をちよつぱり調べました。　結構、簡単に出てきましたよ」

それで俺の名前を知ったのね。　でもさ、俺の名前が簡単に出るってどうなんだろうね。

そこんとこ、管理センター大丈夫？　個人情報その他云々の漏洩ってヤバイ部類じゃね。

それとも俺のレベルってそうなのかな。　杏樹なら良いや的な。　うん。　なんだか悲しくなってきた。

「ケーキ屋さんで女性店員に声を掛け、自室に連れ込んでマヨネーズ塗れにする犯罪

者だとね！」

「間違ってるわいけど間違ってるわ!？」

複数の事件が混ざり合ってヤバい事になっているんですけど。妙な誤解を招いているんですけど。

中途半端に事実が混ざっているのもタチが悪い。

「そんな犯罪者、お姉さまに近付けさせろのワケにはいかないんですっ！」

「繰り返すようだけど誤解だから。それと情報源はドコ? 管理センターなら文

句言う」

「貴方と一緒に住んでいるニホンオオカミです」

「駄犬め……ッ！」

身内も絡んでた。おのれ犯犬。社交的で明るいのが良いが、その辺は注意しなくてはな。聞いた感じだと、放置する程に被害は増しそうであるからね。

さて。そろそろ押し倒されているのにも飽きてきた。危機的状況もややマヌケな会話も挟んだ所為か、冷静に対応出来そうな気がしてきた。気がするだけであ

る。

「それで？　俺をどうするの」

「そ、それは」

どうやら、部屋に侵入して押し倒したまではいいものの、そこから先ナニをどうしたら良いのか分からないようにフリーズしてしまう彼女。良かった。八裂きとか調教とかの発想には至らなかつた模様。

いやはや。こうして冷静に観察していると、微妙に目が泳いでいる。面白い。それと可愛い。

ちよつと、チカラも緩んできた。このまま顔を上げれば唇を奪えそうまである。やらないけど。殺られるから。

俺は彼女の様子を堪能しながら、ポケットの中でケータイを操作。管理センターの小動物にショートメッセージを送る。

文面は　ただひと言「たすけて」。これでイけるハズ。　じゃなきやヤバイ。

そう思い、窓の外からみるみる大きくなる黒き人影に「はえっ」と驚いた瞬間だった。

「杏樹君！ 無事か!？」

バリンツというガラスが寛大に割れる音と共に、黒く日焼け色な筋肉モリモリマツチヨマンの変態が突如と現れた。俺がSMを発信してから1分と経たぬ早業であった。

うん。助けを寄越してくれるのと結果が出るのは早いですがね。人員をやはり間違えている。ガラスを破るな。森林警備員……それも隊長は森に帰って、どうぞ。

だが知り合いで現場の荒事に対して、最も頼りになりそうな救助員でもある。今や彼に頼る他ない。俺は迫真の演技をしつつ叫ぶ。

「きゃー！ 助けて隊長！ イタリアオオカミに食べられちゃうー！」

「!？」

瞬間、狼狽えるイタリアオオカミと鬼気迫る表情になるマツチヨマン。

そこからは刹那の出来事。目にも留まらぬ速さで俺の上から吹き飛ばイタリアオオカミ。ドゴツと響くナニかが廊下に転がる音。「ゴファッ」という美少女にある

まじき重低音。

後に残るは、ゴゴゴと効果音が聞こえてきそうなオーラを纏いながら、残心の構えをとるマツチヨマンだけだった。

スゲエ。フレンズを吹き飛ばしたよ。いろいろな意味で驚きを禁じ得ない。やはり拳で語るのは冗談でもなくてガチか。

世界観や法や秩序、幻想をもブチ壊しかねんレンジャーは今後、怒らせないようにしなきや。

「隊長、ありがとうござ——」

取り敢えず礼は述べようと、口を開いたのを合図するように、それは始まった。

「——っ！」

言葉にならぬ、切り裂くような声をあげて踏み込んできたナニか。

それがイタリアオオカミだと気付くのが、判断が遅れる程に速い。ヒトが作った、

決して脆くない人工の床を踏み砕く勢いのチカラで放たれたソレ。さながら弾丸の

様な速度で隊長との間合いを詰め、同時に片手を白光で輝かせながら振り下ろされ――

「ぬうんっ！」

その前に、気合いの掛声と共に再度、イタリアオオカミが廊下へと吹き飛んだ。これまた早い。超スピード!?

「えっ? ええ?」

どうやら隊長のカウンターが決まった様子。張り手の様だ。それにしたって、あんなに飛ぶものか。反応速度も達人かよと。隊長強すぎやろ。そんな思考に答えるかの様に、野太い声が部屋に木霊する。

「ふむ。これまでセルリアンや けもの、フレンズと拳で語る事あれど……この歪な感じは初めてだ」

そう言つて、隊長は構えを解く事なく言葉を続ける。　ヤダ。　格好良い。

「厄介だな！　杏樹君、出来るだけ時間を稼ぐから、安全な場所に避難していなさい

！」

「ウ、ウツス！」

一見優勢に見える、突如として始まったバトル。　ソレをやるプロいヒトが「厄介」と言うのだからヤバいのだろう。　相手はヒトより身体能力が上のフレンズであるし。

「愛に障害はつきもの。　そして、さすがパーク・レンジャー森林警備員………ツ！　滾らせてくれ

ますねツ!!」

俺は素直に返事をし、割れた窓から飛び出す。　その後に聞こえてくる百合モドキな咆哮には必死に耳を塞いで聞こえないフリをした。

寮部屋から出た後、嗚咽を漏らしながら真つ先に向かった場所。それは都市部にあるタイリクオオカミの家。

目には目を。 歯には歯を。 オオカミにはオオカミを。

イタリアオオカミという恐るべき脅威に対抗するには、それ以上の暴威を用いるか、想いヒトならぬ想いフレンズに説得して貰う。 さすれば、平和的に解決する事だろう。

单身、どこか遠くへと逃げる事も考えたが、俺の考えつく隠遁先では見つけて下さいと言っているようなもの。

フレンズの多くは、鼻や耳が効くのだ。 そうじゃなくても、調べて寮の部屋まで来たヤツだ。 直ぐに捕まってしまう未来が見える。 今後のパークで過ごすに当たり、ビクビクするのも勘弁だ。

故に先ず、安全地帯の確保より以後の日常確保を優先すべきと判断した。

「い、いない……だど？」

が、しかし。そんな目論見は即頓挫する事となった。立派な家の前まで来、常の様に合鍵で入るも誰もいない。どうやら出掛けている様子。

代わりにあるのは、散乱したファッション誌やデートスポット特集の雑誌。それから下着。第1世代のフレンズは着替えるのだろうか。一応、漫画版にて水着や着物を着用する描写はあるからね。

「って、そうじゃない。現実はどうしようもない。問題は次にどうするかだ」

とは言ってみたものの、いない可能性を考慮していなかった。こうなつては他の事を考えるしかない。

「頼れる心の友は他にもいる。落ち着け。深呼吸しよう」

息を大きく吸い、ゆっくり吐く。たったそれだけの動作で気が楽になった。訂正。そんな気がしただけだ。正直楽にはならないが、落ち着いた気分にはなれた。気分大事。

「……………ふう」

幸いな事に、あの百合モドキのデーモンウルフが迫ってくる様子がない。隊長は予想以上に善戦しているようだ。差し迫った危険は直ぐにはこないと見て良いだろう。

俺は冷静に状況を把握、整理しつつ、念の為今いるタイリクオオカミの部屋のカーテンや窓を閉め切つてから、スマホを手を取った。電話帳を開き、すぐさま力行の『管理センター』を選択。更なる救援を求めるべく、コールボタンを押した。数秒のコールの後。

『お掛けになった電話番号は——』
「クソアツ！　また繋がんねえのかよ！」

思わず激昂の言葉が出てしまう。普段はフレンズやパリピの通報を受けると俺に出頭命令を下す癖に、逆に必要な時はコレである。内側で沸々とした感情が出るのは仕方ない。

しかしさあ。最近、皆冷たくない？　俺の顔なんて見たくない系？

「——俺は、ダメなのか？」

そう思うと、またも、俺の中でナニかが切れた。俺が思い描く理想像と現実とのギャップが酷すぎて。メールは良くて電話はダメかよ。自然と涙が出てくる。

どうやら感情のキャパシティを超えたらしい。ザコ過ぎて笑えてくる。

実は、俺が友だちだと思つて舞い上がつていたのも妄想だったのかも知れない。やはり仕事上の上っ面の付き合いか。お情けか。セルリアン以上ののけもの……それは俺。パークに要らない存在。そも、転生者つてなんだよ。周囲のヒトからしたら、クソザコなメクジな臨時のパーク職員だよ。社会的弱者。ヒトとしても弱者ときた。付き合い合メリットがない。寧ろマイナスまである。

求めた世界とは、優しさとは。笑顔とはヒトの世界では、きっと存在しないのだ……。

——生まれてきてゴメンなさい。

「ふ、フへへっ」

と、哀れな弱者気取りをしていると、

——べた。べた。

音に釣られてふと窓を見る。見てしまう。締め損なつたカーテンの隙間から、血走つた瞳は覗き見ていた。ボロボロになり、はだけた服を恥じる事なく晒す痴女。挙句に獲物を前にして涎を撒き散らすまでである。

美しい北半球どころか赤道直下、中心の桃の点を器用に避けて南半球をも野晒しにしている。ソレを窓に押し付けているから、豊満なまんまるはへしやげてしまった。

デカイ。今はどうでも良い情報が頭を過る。

ダメだ。綺麗なまんまるを見つけて来なきや。違うそうじゃない。アライさ

んのバステきなネタで誤魔化している場合ではない。

その吐き気を催さずにはいられない狂態に、血の気が引くのが分かる。今の俺の顔

は、青ざめに青ざめているに違いない。

そのくせ本能か。見方次第で恐怖とも情欲の対象ともなるイタリアオオカミさんの顔を見る。して、僅かな隙間から覗く彼女の唇の動きを、俺は読まなきや良いのに読んでしまった。

み い つ け た ♪

そして始まるノッキング。窓を打ち叩くドラム奏者。なんと人狼は地獄の釜を開いた光景を見せてきた。最早ただのホラーだ。夢だったら覚めて。一刻も早く。

「ああああああッ!？」

瞬間、迸る恐怖の絶叫。両足が内股になるばかりか、思わず自らの両肩を抱く。腰が抜けなかったのは奇跡に近い。絶望の淵で挫けぬ勇氣。こんな下衆な俺にあるはずないというのに。

いったい、ナニが俺を立たせるというのか。

俺が自身に疑念を抱くと同時、ふと幼馴染のカコの実顔が、そしてミライや菜々、小動物や隊長、サーバルたちフレンズの実顔が浮かんだ。

この極限状況下だからこそ、ようやく気付いた俺の願い。

今までパークでナニしようとも満足出来なくなってきただけでなく、募るは不安。乾いた心を潤そうとしてもナニかが決定的に足りなかった。

それは……。

「そうだ。 そうだった……俺はまだ死ぬ訳にはいかないッ！ レズ狂愛の犠牲になる訳にはいかないんだ！ だって俺は……俺はまだっ！ 守るべきもの、見届けたいパークの未来があるんだから——！」

消えかけていた輝きが、今再び七彩の光となつて光量を増した。

そうさ。 そうなんだ。 いっだって思つていた。 いっだって焦がれていた。

仕事で、プライベートで、パークで接してきた多くの女性……ヒトやフレンズ。 彼女たちが見せる他者への無邪気で、慈悲深く、聖母のような温かな笑顔と言葉。

それは本来、ヒトの世界で穢れて、捻くれ泣き虫な俺がおいそれと触れて良い代物じゃない。

でも、だからこそ。

俺には無いものだから憧れた。

誰かを愛し、愛せる彼女達が素直に綺麗だと思つた。

いつか、いつの日か。 そんなふうには俺もなれたら良いな、と。

……今更、力なきクソザコ臨時職員がナニを思つたところで、一切の未来は改善しないかも知れない。 こんな風に寧ろ悪化するかも知れない。

だけど、

「いつか普通に恋をして、愛して笑い合う。それを望んでナニが悪い！」

ついでに童貞を捨てたい。初体験は幼馴染のカコが良い。そのままウエディン
グドレスを着せてバージンロードを通る。

そして初夜もベッドの上でチョメチョメしたい。ごめん。求めている愛の形と
少し異なる。でもやりたいかと聞かれれば頷く。やっぱり俺は穢れているね。

こんなマヌケな、だけど決意を固めたお陰か。あれだけ震えていた足が止まってい
た。

これならまだ、希望はありそうだ。

窓の外には、未だに不気味極まるノッキングを続けている野生化した けもの……い
や、ケダモノがいる。

俺は最後にキツと睨みつけてから、踵を返して出口へ走った。

頼みの綱の女子とは連絡がつかない。隊長はおそらくもうやられている。ウチ
の駄犬は寮のパリピと わふわワンダフルで頼れそうに無い。ラーテルやホワイ
トタイガーは、ナワバリが遠い。タイリクオオカミ同様、会えない危険性もある。

ヒトは最後に信じられるのはやはり、自分自身しかない。
ならば、後は精一杯生きて足掻くのみ！

俺が決意を胸に、改めて覚悟を振るい立たせた瞬間だった。

バリインツ！！

部屋に響き渡る破砕音。

「う、うそだろ……！

窓割りやがった!？」

驚きの声を上げたが、フレンズの身体能力……オオカミならソレも可能か。

それにきたって、普通に割るなよ。隊長もそうだけど。いや、緊急時を思えば仕方ないだろうさ。けれど破片って危ないじゃん。労災と弁償は勘弁。

「まさか、タイリクオオカミお姉さまの部屋にまで侵入して……もう辛抱堪らない……あんじゅさん！ 貴方は私が調教します。代わりに私は貴方の飼主になってあげるッ！」

背後から投げかけられる四神も真っ青かも知れない理屈に、俺は涙で歪む視界を拭い

ながら、静かに異議を唱えた。

「SMプレイみたいに言ってるじゃねえよ……狼少女が………ツ！」

狼に衣を着せた言い方だろうと、やっている事が狼藉である。

こうして、俺の逃亡生活が始まった。

単純に考えてフレンズに勝てるとは思えない。だが劣等感を感じている場合では無い。俺は俺。新たな問題に直面すれば立ち向かわねばならない。

あ。逃げてるか。

日の出

前世でもパーク職員でも。職場で「もうダメ、シヌウ」と聞いた記憶がある。

疲労困憊な仕事の日々。会社やお上にこき使われてきた。愚痴つても罪じゃない。陳腐な事だが俺は思う。

ところが、別のベクトルで「シヌウ」な目に合うと、奴隷労働社会に生きるのとどっちが賢いのかと考えてしまった。

今もあの日を思うと、震えが止まらない。

あれは、そう……大晦日より何日か前。とても天気が悪い日だった。雨なんてレベルじゃない、ヒドイ嵐狂愛だった。それまで平和を享受してきた世界に、突如として暗雲が立ち込めたのだ。

さながらそれは、セルリアンに輝きを奪われる方が尚もマシかも知れないもの。稲光が轟音を携えて地上を焼き払わんと猛威を振るうが如し。パークは枯れ果て、ヒトだけでなく、けものやフレンズたちさえも恐怖に慄いた。

そう。名を口にするのも憚られる恐怖の女王、イタリアオオカミが来襲したのだ！
恐ろしい災いだった。とてもとても、恐ろしい災いだ。

あの日……ホラーに片足どころか全身浸かり切ったケダモノが俺を狙い、俺の心に未曾有の傷跡を残した日。

俺は精一杯、生き足掻こうと逃げに逃げた。悪夢に捉えられたら最期、俺の清い心と身体はセルリウムやサンドスター・ロウ的に、真っ黒に染め上げられてしまうに違いないから。

背後から刻一刻と迫るヤツの魔の手から逃れるべく、タイリクオオカミの部屋を脱兎の如く飛び出した。

そこから先は必死過ぎて、どこをどう走ったのか覚えていない。ただ唯一、ハツキリしているのは、どういう訳かケダモノとの追いかけてここに奇跡的にも勝利したということだけ。

恐怖に泣き叫び、疲労困憊の身体を引きずって……ふと前を見た時。海の方へ、地平線の彼方より光の洪水が起きた。

涙ではない。それは朝日が昇る瞬間——確かに。俺は生の実感を得、感謝した。安堵。圧倒的、安堵。自然の光がこうも有り難いと思つた日はない。まるで聖なる光。俺を包み、癒してくれる聖母の輝き。

落ちて着いてきたからか、今の時間を確認すれば……バッテリーが切れ掛かったスマホの時計では1月1日……正月。俺が見たのは初日の出という事。

嗚呼。俺は数日もの間、逃げ続けたのか。

かつてここままで、生きていて良かったと思えた日はあっただろうか。　ここまで年明けに感謝した日があっただろうか。

否。　ヒトの社会にほとほと疲れ、年が明けても何も明けないネガティブ思考の俺が、ここまでの思考に180度変わったのは……俺を知っているヒトが見たら驚きのあまり気絶するかも知れない。

それほどまでに、今の俺はこれ以上にならない陽の輝きを浴びて笑顔を浮かべたのだ。

まともに飲まず食わず、だけど自分の力で、この瞬間まで生き延びた。

感に堪え切れず、俺は嗚咽を漏らしながら朝日に万歳。

そして、そんな状況だから断言出来る事がある。

「生きるとして、素晴らしい」

生きていて良かったと思うワケ。

海と空の境界。　パークの向こう。　そこから射し込む爽やかな陽光に目を細めな

がら、俺は嘯みしめるように呟いた。

「(ハハ)……どこだろう」

漣の音で落ち着いてきた俺は、周りを見渡す。目の前が海なので海岸線辺りだろうけど、辺りはそんなに大きな建物や人影もない。

小さな埠頭があるだけである。

「観光地じゃないよな」

少なくとも都市部から離れた何処かだ。あのビッチが来るように感じないが、安全とは言えない。

しかしだ。あの痴女ソノモノな格好で彷徨うものなら、フレンズとはいえ捕縛され

てしまう。或いはそうかも知れない。サンドスターやプラズムの回復で直る可能性もあるが、短時間で超回復するとは思えない。

「管理センターに連絡……しよう」

枯れた声でブツブツ言いながら、スマホの電話帳を開いて再度掛け直す。しかしダメだった。そういうものだと思え入れ。期待すると落ち込むから。

仕方がない。代わりにショートメッセージで生存報告をするのと「あけおめ」とオマケで送信しておこう。

そうだ。他のヒトにも同じ文面をば。連続して操作し、送れる相手には送った。本土の親やカコの両親にも送っておく。

まだヒトとの繋がりが切れていないと思えば、心の内でコンコンと温かなモノが湧いてくる。心地良い。返信がないのにそう感じるから、それは自己満足である。

「——疲れたな」

疲労困憊。携帯を仕舞うと同時に妙な安心から緊張の糸が切れて……その場で寝

転がった。

汚れるとか文明的かなんて考えない。そこまで頭が回らない。ヒトはやはり、ヤバイ時は本能に従いたくなるものなのだ。

ごろん。

嗚呼。固い土……冷たく気持ち良い。もう少し脇に逸れれば砂浜だけど、ココで良い。

視界は海から空へ。決して同じではない無限は光の洪水により、どんどんと白みから青へと輝く。夜空の小さな光は、役割を終えたと強い光に流されていく。

パークのみならず、全世界共通の自然の満ち引きも、心境と余裕次第で尊くなるんだなあ。

こう、空をゆつくりと眺めるのも随分と久しい。働いていると明るい暗いか、天気はどうかと利益不利益を気にするだけだった。

ポーっとする自然観察。ヒトの世界を一時的に切り捨てる。この星に生きる生命も含めて、ふと立ち止まり眺めれば美しい。恵みを齎し、時として残酷であるも尊く儂い。

イタリアオオカミもまた、そうだと思える日が来る。過去のモノになれば美化出来る。そういうえば おっぱい は美乳であった。

「隊長、無事だと良いけど」

目を閉じて、今回の犠牲者を思う。かのマツチヨマンなレンジャーを。ショートメツセージの中に無事を問う言葉を添えたが、大丈夫だろうか。

「む、り……おやすみ」

俺はその答えを知る前に、意識は闇へと落ちていく。眠気にととう勝てない。

限界だった。

最後に聴こえたのは、漣の音。そして誰かが歩いてくる音。疑問や警戒心は闇に沈み浮上しない。そのまま俺は、僅かな感覚をも闇へと葬った。

ヒトや自然について想いながら、外で寝てしまったが、自然や　けもの　で言えば、寝るといふのは危険行為。　最も無防備な状態だからだ。

その為、けものは木の上で寝たり、穴の中で寝たり、或いは半分は寝て半分は起きていたり、あまり寝ない、立ったまま寝る等をするそう。

ヒトは……かつてのご先祖様は火を起こして交代で見張り、オオカミを飼ひ慣らしたとされる、今でいうイエイヌを番犬としていたのだろう。

そして危険が迫れば共に仲間知らせ、追ひ払つたり立ち向かつたり。　或いは逃げたりもしたのかな。

だが今の俺は1匹狼ならぬ1匹羊。　カモともいう。　そして寝てるとくれば「食べて下さい」と言っているようなもの。

ヒトの世界が色濃い第1世代のジャパリパーク本島とはいえ、セルリアンや　普通の　けもの　が跋扈しているエリアもある。　安全かも分からないのに、見通しの良い場所ですら寝る。　畢竟、世界を侮つてるといえよう。

だから、俺が　かのオオカミに食われても仕方なく……セルリアンに襲われて意識不明になつても文句は言えなかつた。

「……………」

だから、何者かに別の場所へ運ばれたこの状態にも文句は言えない。いや。前者と比べれば遥かにマシか。生きて再び起きれたのだから。

背から伝わる硬さと陽光の眩しきで目を覚ませば、お天道様が天辺に昇っている。世界は青く輝いていた。潮風が寒い。

起き上がりつつ、スマホを見たが……真つ暗だ。うんともすんとも言わぬ。バツテリーが切れている。仕方なくしまった。

「さつき見えた港？」

見渡した感じ、雰囲気は変わらない。位置が小さな埠頭の真ん中になったというのとだけだ。

「だ、誰だろ？」

病院やどこかのベッドの上で寝ているなら、まだ分かる。でも、港に転がされた理由ってなんだろう。ナニコレ怖い。

「だ、誰かいるのか!？」

怖さを紛らせようと声を上げるも、帰ってくるは漣だけ。不安が増す。どうしよう。この場から離れようかと思つたその時。

「目が覚めたんだね!　よかつたー!」

「うおお!？」

突如として聞こえる女の子の声。思わず驚きの声を上げてしまった。慌てて周囲をキョロキョロと見渡す。いない。結構近い距離から聞こえたんだけど。幻聴か？

「下だよ!」

「した?」

言われるがまま、埠頭の側面を覗き込む。すると……そこには。

「おはよう！　そして、こんにちは！」

マルカを白っぽくしたような、イルカのリフレズがいた。

水色のセーラー服風半袖ワンピース。襟を白いリボンで留めている。服のへそ部分にはパークロゴと錨を合体させたシンボルマーク。

「おお……っ！」

感嘆の声が出た。それは心身共に疲れたところに現れた、癒しの存在。脅威ではない。心を開ける気兼ねなく接せる子。

初対面のハズなのに、先程までツライさんだったのに。まるで旧友に再会したかのような安心感が俺を包み込む。

刹那。全てが労られ、努力や苦勞を含む万事が認められたかのような気がした。

お前は頑張った。ココがゴール。そう言われれば、何も考えずに受け入れただろう。そこまでに彼女の、このタイミングでの登場は癒しと感激を呼んだ。全俺が泣いた。

「バンドウイルカ……!」

そう。彼女は水族館の人気者。イルカショーでも馴染みある子であったり。

泳ぎの達人である。けもの。バンドウイルカである。

漫画版でも、海水浴の回、モブでチラツと出ていたような気がする。あの子がバンドウイルカかは分からないけど。こうして会えたのは嬉しい。

「あつ! 私のこと知ってるんだ! バンドウイルカのドルカだよ! よろし

くね!」

「あ、ああ。俺は杏樹。一応パーク臨時職員をやってるよ、よろしくね」

「あんじゅ! あんじゅ!」

「……ははは」

ニコニコと挨拶をしてくれるドルカ。笑顔が眩しい。俺も釣られて少し、ほんの

少しだけ口角が上がった。

それがどうも、ドルカ的には気になったようで、笑うのを止めて声を掛けてくれた。

優しい。

「大丈夫？」

「うん。大丈夫」

大丈夫と聞かれれば、鸚鵡返しに答えた。よくある話だ。

ドル力を心配させまいというよりは、前世や今世での、或いは社会人のテンプレート。そう言われたらそう返しておけというヤツ。

苦しくても疲れていても、それを素直に言うのは許されない。周りだって相手だってツライさんだから。

ひよつとしたら俺よりツライのだ。なのにそれを相手に伝えたら……：相手はどう思うか。 勞つてくれるのか。 休みを貰えるのか。 俺の場合は「俺は、お前より疲れてんだよ！」とか「仕事舐めるな」と怒られて更に仕事を押し付けられたり「役立たずは帰れ！」と言われたものだ。 互いに不快である。 少なくとも利益は生じなかつた。

今回の相手はフレンズ。 そんな事は言わないだろう。 でも、最早癪だった。 心や感情は極力殺せ。 でなければ傷付く。 ここにきて無意識での自己防衛。 我な

がら阿保だ。

「元気がなかったら言つてね？　元氣じゃないなんてもつたないよ！」

「ありがとう。でも、うん。平氣」

俺はきつと、こんな思考を持ち続ける限り、この子達のようににはなれない。

でもだからこそ。　懂れる。　そして俺の輝きだ。　それを側で見たい。　それくらいならきつと、許される。

「ホントに？　あんじゅ、海の近くで倒れてたよ。　心配だからヒトが来そうなた

こまで連れてきたんだ」

「あ、ああ。　ドルカが俺を移動したのか。　ありがとうね。　でも大丈夫だよ」

成る程。　ドルカの仕業であつたか。　陸は大変だつたらうに。　ありがたい。

取り敢えず怪奇現象じゃなくてよかつた。

そして俺は大丈夫。　ツライさんじゃない。　ツライと思うからツライのだ。　昔

言われた言葉である。　メンタル弱者の俺には根性論にしか聞こえず、ツライものはツ

ライさんだったかな。それで本当に大丈夫になるなら死ぬ事も無かっただろうに。そんな思考を読み取ったのか。ドルカは悲しげな顔になって見つめてくる。いかな。イルカは心が読めるんだっけか。だからって君まで悲しまないで欲しい。こんな可愛い子に泣き顔は似合わない。

「服がボロボロだよ。何だか疲れてる……大丈夫に見えないよお」

ジッと見つめて案じてくるドルカ。

このままだと、本当に泣いてしまうんじゃないかという暗い顔。それは避けたい。彼女もまた、ツライさんなのだ。

こんな時、どうすれば良いのか。昔の上司達のように「俺の方がツライんだよ」と怒鳴れば良いのか。否。それでは嫌う連中と変わらない。必要なのは愛だ。相手から一方的に愛を受けるのはいけない。与えるのもダメかも知れない。イタリアオオカミの例は俺的にNGである。意識して接しなければ。

「そう、だな。本当は疲れちゃってるかな……鬼ごつこの やり過ぎでね」

「おこいっつハッ」

「相手はオオカミだったけど。ああ、鬼ごっここといのはね、簡単に言えば追いか
けっこだよ」

「あつ！ それならやった事ある！ 舟ふねと競争したんだ！」

事実だけど、少し楽しみに話してあげた。するとキャツキャツと喜ぶドルカ。

俺は頷く。 そうだ。 それで良い。 君は笑っていないさ。 子と接する親とは、
こんな気持ちなのかも知れない。 その笑顔を見たいが為に。 日々を、今回を生き延
びたとさえ思える。 俺のやった事は無駄ではない。 この通り意味がある。 なん
と嬉しい事か。

このまま話を逸らしてしまおう。 俺の話になると大体ネガティブになっちゃうか
ら。

「勝てたかい？」

「勝てたー！」

「そりや凄い。 おめでどう」

「ありがとう！ 泳ぐの得意だから！」

褒めれば素直に受け入れて喜んでくれた。そして一度潜って、ザパーンとジャンプ。大きな水飛沫を散らして喜びを表現してきた。俺にもこんな時期があつたのだろう。気持ちの話だ。

前世の記憶を中途半端に引き継いだ今世では、幼少の頃からダメだったが。前世の頃はどうかだったか。今や昔の昔。思い出せぬ。

昔と言えば、カコやミライ、菜々を思い出した。今とあの頃を比べると大きさも違えば性格もちよつとは異なるか。だけど純粹のままに感じる。羨ましい。園長は知らん。

「それはそうと」

都市部に戻らねば。管理センターに直接行って、事の経緯を説明しないと。

イタリアオオカミがどうなったのかも分からない。事と次第ではパークで安心して過ごせない。ニホンオオカミも心配だし……いや。彼女は近隣のパリピがいるから平気か。

「ドルカちゃん。都市部への行き方って分かる？」

「としぶ?」

「ヒトが たくさん いるところ」

「ゴメンね。 ちゃんとは分からない」

申し訳なさそうな顔をしながら寄つて来る彼女。 むう。 海側からもビル群は見

えると思つたが、この世界では無いのかな。 分かんが。

「でも方向は分かるよ」

「そうなのか?」

「うん! あつち!」

そう言つて、海面から片手を上げて指をさすドルカ。 白くシミひとつない綺麗でしなやかな細い腕と指。 そこから滴る水が陽光に反射して輝いて綺麗——。

「あんじゆ?」

「あ、ああ。 ごめん。 あつちか」

いかんいかん。邪心は捨てろ。

慌てて見やれば、まあなんとなくながら けもの道が見える。草を多少抜いて出来ただけな感じの。

埠頭があるんだから、もうちよいまともに舗装した道があつて良い筈なんだがな。殆ど使われてない港なのかも知れない。

「ありがとう。俺はそこに行かなきゃならないんだ」

「むー。もう少し お話していたかったなあ」

「ははは、ごめんよ。いろいろ助けてくれて本当にありがとう」

俺も もう少し話していたい。礼も本当はしなくてはとも思う。だけど、悲しいかな。俺の安否を確認したいヒトもいるだろうし、俺自身、心身共にヘタつていて。長居する気力が起きぬ。特に お腹空いたのです。料理をひっかけて行かないといけないのです。

ダーク・イタリアオオカミがいたら恐ろしいが、流石にもう大丈夫だと願いたい。願いたくない？ フレンズを信じる。

「あつ！　最後に握手っ」

踵を返そうとしたら、ドルカが握手を求めてきた。　断る理由はないな。　それくらの要望、答えてあげねば。

ドルカは俺が握手しやすいように、わざわざ海岸から乗り上げて、トテトテと駆け寄って来る。　可愛い。

「うん、良いよ」

「さあ、手を繋いで？　そしたら　ともだち！　ともだちが増えて私も嬉しいよ

！」

「ともだち……うん。　ともだちだ。　俺も嬉しいよ。　ものすごく」

水が滴る小さな腕を伸ばされたから、素直に握り返した。　柔らかくて、冷たい海水に触れたと思えば温かな体温が手を伝ってくる。　その差が妙に心地良くて、つい彼女を抱き締めたくなる欲求に襲われた。　耐えたが。

「というか、なんだか……その。　恥ずかしい。　ともだち。　そう言われるのも何度目か分からないというのに。」

「そんじゃ……この辺で」

これ以上は危ない。 いろんな意味で。

「うん！ また会おうね！ バイバイ！」

「バイバイ。 ありがとう、世話になった……それから、その」

「うん？」

ああ。 コレは言っておかねば。 この挨拶をしないと時間が進まない。 そんな気がするから。

「あけまして、おめでとう」

「あけまして？」

「新しい1年が明けた、始まったから。 そうしたら、こう挨拶するんだ」

「そうなんだ！ じゃ、あけましておめでとう！」

「うん。 あけまして、おめでとう。 それじゃ……その。 また」

「うん！　またねー！」

そう言うと、笑顔で手を振って来る。俺も手を振りつつこの場を後にした。振り返ると、小さな点程になっても尚なほ振っていた。優しいんだな。引き止めないところも優しさか。嬉しいね。

「ふう」

ふと綺麗な青空を見ながら思う。疲れ、空きつ腹を抱えての年越しだったが、良いところもあつた正月であると。

前世でも嫌な年越しの仕方は少なくなかったが、今回は……その。温かかったかな。心が。年越しは刺激的でデンジャーだったけど。もつと言えば逃亡に必死で記憶が無い。気が付いたら明けていた。

漫画版だと今はどの辺りだろうか。キタキツネとキンシコウが お参りに行っているところかな。だとすれば着物姿のふたりを見てみたかったが……この状況だ。諦めよう。今は自分自身の安全確保優先だ。

「管理センターに行つて帰つたらシャワー浴びよう。服も洗う。美味い飯も食う。そして寝る。ニホンオオカミはパリピと遊んでいるだろうから大丈夫。うん」

足を引きずるように、歩みを進める。ヒトのナワバリ求めてなんとやら。かばんちやんじやないが。

「俺もな……明るくいかなきゃな。他の子に嫌われちゃうぞ」

独り言をブツブツ言いながら歩く男。周りにヒトがいたら通報されそうだ。寧ろしてくれ。今は迷子に近いワケだし。

今は取り敢えず歩く。それだけの体力が残されている、或いは回復した自身に驚いていたりする。

何にせよ良い事だ。歩ける事は。

「ポジティブに行こう」

気楽に行こうよ。 先は長いよー。

アニメ フェネットクという言葉が、ボイスが脳裏をよぎる。 そうだな。 先は長い。 事件も起きていない。

「今年からが、勝負か？」

漫画版は1年間を描いているようだった。 2年目以降、何が起きるのか分からない。
い。

勿論、事件なんて起きない方が良いに決まってる。 でも、きつと起きる。 俺の妄想は当たるんだ。 外れる事もあるけどさ。 寧ろ外れる下さい状態。

「今度は、逃げられない……いや。 逃げちやダメだ」

逃げられなければ立ち向かう他なく。 それは転生者がどうかじゃなくて、職員として出来る事をやらなきゃなと思う。

2、3月までは大丈夫かな。 その短期間に何が出来るか。 赤点泣き虫の無能小物職員が、足掻いても変わらないかも知れない。 でも何もしないのは、きつと嘘になる。

「ヒーローは引退したつもりなんだがなあ」

汗でベトつく頭を掻きつつ、前を見る。薄らとビル群が見えてきた。ヒトのナワバリだ。

「取り敢えずメシは外」

腹が減っては戦はできぬ。

場合によっては、おかわりを寄越すのです。

妄想と対策。

疲労困憊の身体を引きずり、管理センターに辿り着いた俺。長い道中、コンビニで添加物たっぷりだろう おにぎり購入。ソレを食べつつ、イタリアオオカミに会いませんようにと内心ビクビクしながらも、壮大なビルディングはモノとも言わず俺を無言で迎え入れた。

中は何度目になろうか。吹き抜けのある大広間。偶に鳥のフレンズがひとつ飛びで最上階近くまで飛んでいくが最早、感動も起きない。特に今は。

して、周囲の背広にギョツとされたり距離を取られるのも構わず美人の受付嬢の前まで這い寄った。向こうは仕事柄、逃げる訳にはいかない。必死の愛想笑いを浮かべて対応する。コンビニでもそうだった。接客という意味では共通する。こんな時、相手は大変だろう。立場が逆だと思うと……やはり接客業は俺には向かぬ。

でも今は悪いと思わないね。俺がこんな目に遭っているのは対応に多少なりとも問題がある管理センターにあるのだから。俺の苦痛はオマイら内勤には分かるまい。かくいう俺は内勤の苦労を知らぬが。

受付嬢は無罪？ 管轄違えど管理センターという職場だ。同罪だよ（暴論）。

「小動物に会わせてくれ。臨時職員あんじゅの杏樹あんじゅが用事あると伝えて」

「しよ、小動物ですか？ フレンズでしょうか？」

「ある意味フレンズだな。背の低い女性で世話焼きのヒト」

「あ、ああ。はい。お待ち下さい」

そう言つて、固定電話でナニやらゴニョゴニョ言う受付嬢。「背の低い女性」「世話焼き」で分かる辺り、有名なのだな。

だが言いたい事は言わせて貰う。その結果、周囲に「何お前、俺らのアイドルにナニしてくれてるん？ おおん？」となれど。

悪に染まる。パークの為に……！　そしてボコボコにされるまでである。されちやうのかよ。

そんなしよーもない事を考えると、やがて。

「———すみません。現在、欠席しています」

「そうかあ欠席……ファッ!?!」

受付嬢に言われて奇声が出てしまった。周囲の視線が痛い。恥ずかしい。だがないとは何事か。真面目そうなヒトだ。勤務状況は把握していないが、休むヒトには思えない。

「病気がナニかで？」

だから、欠席理由を つい聞いてしまう。部外者なのに。越権行為等に当たるか。 だとしても気になる。ニホンオオカミじゃないが。

「現場巡回げんばじゆんかいをされています」

だがしかし。 あっさり教えてくれた。 さっさと厄介払いしたいからか。 それは考え過ぎか。 そんな理由で情報をホイホイ漏らさないだろう。 身内も そうだったらなあ。 イタリアオオカミの件的に。

「現場巡回？」

「はい。 セルリアンの出没情報や対策の為に」と

彼女が？

俺は首を傾げた。現場職じゃなくても、背広が現場に行く事はあるだろう。視察等の為だ。それは分かる。

だけど彼女は、それなりの地位があるヒトに思える。詳しくないが管理職側だ。抜けて他のヒトが困らないなら良いが。

ひよつとして、俺の為に……？

いやいや。こんな問題児の為に現場まで……行きますねえ。マヨ事件の時、寮の前まで来たし。世話好きというか有り難いというか。

まあ、なんだ。詳しくない俺が突っ込んでも仕方ない。取り敢えず いないという事実からどうするか。それを考えよう。

「分かりました。ありがとうございます」

「伝言が ございましたら」

「そうですね。『杏樹は無事』だとお伝え願えれば」

「分かりました」

そこまで言うと、会釈して管理センターを後にする。ベトつく身体に吹き付ける風が寒い。気分は良いものではない。

「帰ろう。そして仕切り直しだ」

風呂。足りない分の食事。携帯の充電。睡眠。俺にもしたい事がある。寮の自室へと俺は再び足を引きずっていく。陽は折り返し、地へと沈み始めた頃だった。

「お帰り あんじゅー！」

「うおっ」

寮に戻れば、笑顔で出迎えた同居犬。　ぴよんと抱き着いてきてスリスリ。　撥つたくも温かい。　尻尾もはち切れんばかりにブンブン振っているときた。

彼女を見ると説教したい事やイライラが、刹那に吹き飛んでしまう。

お帰りと言われる事が、こんなにも沁みるとは。　これで「お風呂にする？　ご飯にする？　それとも　わ・た・し？」というセリフがあれば……冗談だ。　ご飯

「ただいま。　ごめんな、何日も留守にして」

頭を撫でつつ、謝った。　パリピがいるから大丈夫だと思つてはいたが、突然部屋主が消えたら心配なりするだろうから。

「もー！　どこ行つてたの？　心配したよ！　なんでか部屋は窓が壊れてたし、れんじやあつていうヒトがボロボロで倒れてるし、イタリアオオカミの匂いがするし……あんじゅの匂いは都市部の匂いが強くて分からないし！」

「いめん、いめんよ」

不安にさせた事への罪悪感。同時に感じる愛情。複雑ながらコンコンと湧く温かさをより実感したくて、ニホンオオカミの頭を撫で続ける。

最近はお風呂にいつも入っているから、シャンプーの良い匂いがフワツとする。落ち着く香り。

風が無いから、ふと窓をチラ見する。綺麗なガラス板が嵌められていた。破片の一切は無い。寮母さんが対応してくれたのかな。ありがたい。

「色々あつて」

「どういふこと? 気になる!」

おう。上目遣いで言われてドキツとしちゃったじゃない。

問い詰めるというより、純粋な好奇心からの眼差し。うむ。いつもの、明るい彼女になって良かった。俺も明るくいこう。

「そうだな……イタリアアオオカミと追いかけてっことをしていたよ」

だから。事実ではあるけれど、楽しそうな感じで話してみる。モノは言いよう

さ。

「そうなんだ！ 私もやりたかったなあ」

「今度、一緒にやろう」

「うん！」

なでなで。ヘッヘッと喜び、尻尾をブンブン振るニホンオオカミ。可愛い。パ
リピと戯れ合うから俺の世界の子じゃないと思っただよ。君は立派な家族
だよ。

「うー？」

そう思っていると。くんくんと匂いを嗅いでは首を傾げ、

「なんかあんじゆ、変な臭い」

「ぐはっ!?!」

家族から痛恨の一撃を貰った。臭うとか……言われるのはスゲエショックなんです。すがそれは。

「……悪い。風呂、入ってくる」

そつとニホンオオカミを引き離し、ふらふらと風呂場へ。今の攻撃で俺の中のナニかな輝きが消えそうになるが、何とか耐えた。メンタル弱者にしては良くやったと褒めてくれ。

前世での嫌な経験が生きたか。感謝はしない。

「私も入るっ！　アワアワ楽しいもん！」

「申し訳ないが、別の意味でアワアワしちゃうのでNG」

ヤバい事を笑顔で言うので断っておく。フレンズと混浴とか、バレたら大変だ。

特に毛皮を服として脱げるのを知っているから尚更に。当然というか、脱いでくるよね。アウトだよ。

ミライなら羨ましく思われるだけで済むだろうが、カコや菜々、管理センターを思う

と……考えるのはよそう。　怖い。

「えー！　ひとりより、ふたりの方が楽しいし、気持ち良いんじゃないかな！」

「ヤメテ？　俺をケダモノにしても楽しくないヨ？」

喋りながらも、見えないように風呂場の内側で脱衣していく。下を向けば剥かれた唯一無二の相棒。　穢れたバベルの塔。　ぬらり。　てらり。　アテもなく虚しい主張を始めている。

通報されたらオワタ状態。　フレンズがいたら更に。

○○○○フレンドですつてか。　笑って許してくれる事案じゃないよね。　友も居場所も全部失うのは勘弁。

「とにかく。　入ったらオシオキだから。　許さないからなあ？」

「……くうん」

「ワンコみたいに落ち込んだ声を出してもダメ」

服を出し、シャワーの蛇口をひねる。　直ぐに出た湯を浴びつつ、そう返しておく。

天真爛漫な彼女だが、最近は言い付けを守れるからな。ここまで言えば大丈夫だろう。

フレンズとヒト。同居で問題があるとしたら、こういうトコかな。フレンズは元がオスでも、サンドスターに当たるとみんな女の子だ。見た目は可愛い子ばかり。ヒトのオスがハッスルしちやったら……後は取り返しがつかない。

「それとも」

両者が愛し合っていれば大丈夫か？　パークや周りは許してくれるのか？

「いや。フレンズはフレンズだよな、きつと」

友は友。もつと言えば、けものフレンズ。

ヒトが思う「好き」と相手の「好き」は違うかも知れない。愛がズレている可能性がある。

じゃれつくようなモノかもだし、懐くとか、そういう話かも知れない。

「つて、俺はナニを考えてるんだ。 ヤメだヤメ！」

邪な想いは捨てよう。 今、考える事じゃない。 それよりパークの未来を案じる。

「先ず起きるのはセントラル事件か。 そして女王事件。 だけど、妄想の通りなら放置しても解決する事件だ……園長が来れば」

園長。 アプリ版主人公。 来園経緯、正体不明な英雄^{ヒーロー}。

だけど、それらしき話は未だ聞かぬ。 大丈夫だろうか。 心配だ。

いや、きっと大丈夫。 必ず来てくれる。 そして解決に尽力してくれる。 そう信じよう。

「だけどカコは、守らなきゃ」

カコ。 我が馴染み。

俺の記憶や妄想通りならば、セントラル事件でセルリアンに襲われて輝きを奪われる。 それは園長が知らないトコだ。

その輝きからセルリアンの女王が生まれ、女王事件へ発展。全ての輝きを失いかねないパークの危機に。

そうでなくても、馴染みが襲われるのは良い心地ではない。

「女王事件、ね。ひよつとしたら阻止出来るんじゃないか？」

身体を洗いながら思う。連絡先も知っているし、管理センターや調査隊のミライの連絡先も知っている。最近はその、連絡が取れないのが悲しいけど。

兎に角。カコを守れさえすれば、セントラル事件が発展する事はないのだ。

「セントラル事件は、どうして起きたのか分からないけど」

セントラル事件。セルリアンによるパーク・セントラル襲撃事件である。

基本的に意志が無いとされるセルリアンが、どうして集団で、突如として客さんの玄関口であるセントラルを襲撃したのか謎である。

輝きに反応するにしても、それまでは大丈夫だったのだろうし。

「オイナリサマは知っていたようだけど。 会えば良いけど、どこにいるか分からないからなあ」

皆に夢の中か何かで語りかけていた様子のおイナリサマ。 戦える者は心の用意を、弱い者は逃げる用意を……だっけか。

「逃げる、ね」

パーク・セントラルから離れよ、という事かな。 だけどダメなんだ。 逃げちやダメだ。

「俺はパーク職員だ」

フレンズの様に強くない。

カコ達のように頭は良くない。

他の職員のように、優れた技能は無い。

でも俺は皆に助けられて、やっとの想いでパークに地を着いて立っている。

報いたい。皆が好きだから。それもまた、愛じゃないか？

「バタフライ効果に期待して……足掻いてやる。ジダバタして、子どもの駄々みた
いになっても。それで何か変わるかも知れないんだ」

ポジティブに行こう。味方ともたちがゼロってワケじゃないんだ。

☆地上最速 短距離走者（スプリンター）の冬。

スマホを充電して復活すると、たくさんのヒトから連絡が来た。それらは「あけおめ」メールでもあり、生存を喜ぶ声でもあった。

そして謝罪も含まれる。仕事やセルリアン対策に追われて、直ぐに返信が出来なかったと。今となっては仕方ないね、と思った。寧ろ安心した。嫌われてなかったようだから。それが1番の朗報。俺にとつては。

ちなみに。レンジャーの隊長は無事。病院に運ばれたそうだが、直ぐに快方に向かったという。そして森へと帰ったんだと。強いですね……。

イタリアオオカミは俺の妄想が当たったのか、捕縛されて正気に戻ったそう。次が無い事を願う。

さて。正月も明けて。上や派遣先で出会う職員達に、警備やセルリアンの危険性を日常会話っぽくアレンジしながら話を続ける中。

時間とは無慈悲にも、しかし平等に流れて行くもの。此方の都合も御構い無しに仕事も与えられる。ふあつきゅー！

「それどころじゃないんだが」

時が経つにつれて、焦る気持ち。それでも生きる為には働かざるを得ない。

いかなん。落ち着け。ポジティブに行こう。派遣先がバラバラな分、いろんなヒトやフレンズに出会える。そして注意を促せる。そこから発展するかも知れないから。

「今度は、ヘルプに行けと仰るか」

そして今回。都市部郊外側へ。閑静な住宅街のような地区にある、カラフルで立派な一軒家へと足を向けた。

見た目は どう見てもヒトの「おうち」だが、住んでいるのはフレンズだ。

「ココが 女のハウスね」

ふざけつつ、インターホンを押す。本土でも聞いたことのある「ピンポーン」という軽快な電子音が響いた。

第1世代。 野生的な巣ではなく、都市部側に出て来ているフレンズは、このような住居に住んでいる子が珍しくないのだ。

「出来れば、ヒトやフレンズに沢山会える職場が良いんだが……いや。例え一人で大きく変わるかも知れん」

ブツブツ呟いていると。 ガチャリと玄関が開いた音が。 前を向くと、そこには……。

「来たわね、愚民^{ぐみん}」

「フアツ!？」

いきなり愚民呼ばわりしてきたフレンズが。

驚きと共に見やればロングヘアで長身のスラツとした体格。 体型は高速で走るために進化した事を思わせる細くしなやかな体つき。 アニマルというよりアイドルみたい。

白色の半そでシャツにミニスカート。 スカート・アームカバー・ニーソックスなど

にはヒョウ柄模様が。お尻からは尻尾が生えており、走り時のバランスを取る役割を担っているのかな。

そんな彼女の名は……。

「チーターか!?!」

かの地上最速の けもの、チーターだ。

多くのヒトは知っているだろう。地上最速の けもので有名だからね。

そして、短距離走者でもある。スタミナが持たずバテる。長距離走は苦手という。

「ふふん。私を知っているなら話は早いわ。今から私の下僕におなり」

いやー、第1世代のチーターは濃いフレンズだね。あ、初代じゃなくても濃いかな。取り敢えず、なんだ。漫画版でも出てきた通り女王サマキャラだな。

何処かのキツネサマみたいだ。そういえば同じ金髪風である。金髪美女は好きだけど、言っていることは好みじゃないね。素朴な性格や明るい子が好き。Sは

ちよつと……。

「SMプレイは味わいたくないんで、サヨナラ！」

「ちよつと待ちなさい！」

なので逃げる。職務放棄じゃないよ。　　とうか放棄したくても相手はチーター。逃げられないだろう。

ほら、背後を向けば……。

「待てゴラア!!」

「うひょっ」

凄まじい速さで距離を詰めて来るチーター殿。逃げられそうにない。

振り切るように違う道、右折してみた。振り返ると、一瞬チーターが直進する姿で見えたと思つたら……次には目線が合い、目の前にチーターがワープしたと思えば、そのまま押し倒された。電光石火の早技。刹那の出来事。

そういうチーターは、急激な加速度変化と進行方向を変える能力があるんだっけか？

だけど、如何にして方向制御や操縦性を実現しているのか、その仕組みはまだ明らかになっていないとか。

「ふ、ふふふ……チーターの私の手から逃れられたモノは　いまだかつて　いないのよ」

そう言つて、耳元でハアハアしながら言ってくる。息が荒い辺り、体力が無いのだと思わせる。そして催眠音声の類かな。耳に息が当たつて擦りたい。

この辺、漫画版に近いな。菜々もこうして捕まったのだろうか。

「そ、そりゃあ運が良かったね。　チーターつて野生での狩り成功率的には」

「あん？」

「ナンデモナイデス、ハイ」

猛獣の眼光にも勝てなかったよ。　完全敗北である。　いや、身体は屈しても心まで支配出来ると思うなよ。　故に下僕にはならないです。

「あれ。 菜々は？」

ふと思う。 漫画版の通りなら、この立場は菜々だ。俺じゃない。そう声を上げると、チーターはキョトンとして首を傾げた。

「なんの話？」

「菜々っていう飼育員。 知らない？」

「知らないわ」

でた。 知らないジャパリパーク。 些細な事だろうけど、時として知らないとは不

安要素でもある。

いやいや、いかん。 ポジティブに考えろ。 俺の影響で変わっているんだと思え

ば世界は明るい。 明るくない？

「とにかく。 来た以上は私の世話をするのよ。 あんたたち飼育係はフレンズの世

話をするのが仕事でしょう？」

「臨時職員だよ。 本職じゃない」

「今は飼育係に違いないでしょ」

そう言われて、ズルズルと引き摺りお持ち帰りされちゃう俺。　酷い事する気でしょ

！
いや冗談さ。

「あつたかい部屋だね」

そうして入れられた家。　暖かく、冬服を脱ぎなくなる室温である。

周りを見た。　綺麗に整理されている。　観葉植物が置かれ、オシャレな感じ。　野
性味はなく、上品なお姉さんの部屋を妄想させるレイアウトとなっている。

「当然よ。　こんな寒い日に外に出たら死んでしまうでしょ」

そう言いながら、コタツに入るお姉さんなチーター。普通に外に出てたよね。

生きてるよね。けもの頃は暑いトコに暮らしていた所為？

まあでも。フレンズも気候に合わない所にいると寿命を縮める要因になるんだっ

たかな。強ち間違いではないか。

「わたし、いま、冬眠中なの」

「冬眠？」

「冬が明けるまで、こうしてコタツの中で、あたたかくしてゴロゴロしてる」

猫はコタツで丸くなるってか。フレンズがやっても可愛いけど、ツツコミは入れておく。

「冬眠は食べ物が少ない冬を乗り切るための手段だから、これはただの惰眠な」

取り敢えず菜々が言っていた事を言ってみた。チーターめ。贅沢な越冬をしよ

うとしている。けものだから大目に見るが、ヒトの姿形をしていると、どうもね。

許されるなら俺もなあ、惰眠を食りたいなあ。出来ればずっと。

「私のリッチな冬眠生活のために、今日から あなたは 私に尽くすの。 わかった？」

「イヤな仕事だ」

なんたる女王サマか。 キタキツネと似ている。 俺は養ってもらうのは良いが、養うとか世話とか やりたくないです。

「買い物、炊事洗濯、掃除ほか、雑務の一切をやるのよ」
「少し手伝うだけでぞ」

一時的な仕事である。 とはいえ、コレを漫画版にて別にかまわないと言った菜々も強い。 キタキツネの面倒を見ている影響ほいが。

「じゃあ、さっそく、ここに書いてあるもの全部買ってきてちょうだい」

そう言って紙を渡してくるチーター。 漫画版の通りか。 彼女も文字の読み書き

が出来る様子。かしこい。

そんな かしこい彼女が何を書いたのか。 気になって見てみれば……。

牛乳

豆乳

クッキー

シヨートケーキ

ミルクチョコレート

ココナッツミルク

ラフランス

「ええ」

どんな暮らし してるの。

思わず菜々と同じ事を思った。 全体的にお菓子系というか。 偏っている。

職員としては、小言のひとつは言わねばならないか。

「取り敢えず買ってくる」

そう言つて、チーターの家をいちど出た。　ココは無難に漫画版の通りにやった方が……。

「い、いや。　コンビニは避けよう」

コアラのポップを避けるため、俺は何時ぞやのスーパーへと足を向ける。
平和な漫画版でも、避けたい事はあるのだ……。

フレンズとヒトが生活する試験解放区。　その都市部にあるスーパー。
何時ぞやホワイトタイガーと出会った場所でもある。　それと外側でラーターとミ
ツオシエ。

今日はセールがない様子。知り合いのフレンズも見当たらない。比較的店内は空いている。

ふむ。それは有難いのだが、皆元気だろうか。ホワイトタイガー達とはともだちと思っっているが、ホイホイ会う間柄じゃない。

トラの子だし、ひっ付き合わない方が返って良いのかも知れないが……ちよつぷり寂しい。

「今度会えたら……ニホンオオカミを紹介するかな」

ブツブツ言いながらも買い物続ける。明るく社交的なニホンオオカミなら、皆と仲良くなれるだろう。

こうして友の輪が広がる。良い事だ。これが連鎖していき、けものフレンズとして……パークの危機に立ち向かうチカラになればと思う。アニメのラストの方向的に。

「……カコの側に、何とかして行けないだろうか？」

では、ヒトの世界の方。ジャパリパークの研究所に勤務する大切なヒト……カコは

どうだろう。守る者はいるのだろうか。心配だ。

俺が寄り添うにも、研究所はおいそれと入れる施設ではない。臨時職員が入れる事があるとしたら、改修工事や荷運びや清掃の雑務の時かな。

だがしかし。その仕事を待つのは、不確定である。そもそも話が来るかも分からない。その前に事件が起きては手遅れだ。

仮に仕事をする事になっても、一時的に研究所の敷地や内部に入れるだけ。カコに会えるか分からないばかりか事件前に終了して外に出されたら、やはり同じ様なもの。

「ならば」

同じ立場なら。研究員や専属のスタッフ、助手になるならどうか。正規じゃなくて良い。研究所にとって有益な存在だと示せれば、暫くは研究所内に留まれるかも知れない。或いはアクセスの許可。駄目でも話に耳を傾けてくれるようになるか。

サンドスターにセルリウム。アニマルガールにセルリアンという未知の存在へのアプローチ。既成概念を捨てねばならないパークにて、情報や知識は何であれ欲しいハズ。

では、そんな情報や知識を俺は持っているのかという話になるが……たぶん、ある。

「レポートか何かを書いて提出するか」

買い物を済ませ、チーター宅に戻りつつ、俺は今後の方針を固めた。副所長の馴染みというコネや、ニホンオオカミという伝手もあるから……きつと大丈夫。

そうでなくても。何とかなるさと思うしかない。

「さつきより暖かくない？」

戻れば、室温が上がっている。運動した所為ではないだろう。

漫画版の通りなら……。

「あーさむさむ」

やはりか。奥を見れば、コタツのチーターがストーブを5台も出していた。それらはチーターの周りをグルリと囲んでいる。ストーブ　ハーレムである。

「ナニこれ。　どんだけ寒いのだ」

「うるさいわね」

不機嫌な表情で見えてきやがる。美人なので、それすらも絵になるが、職員としてならば指導をするべきだ。　菜々がやったように。

「まあ良いか」

だけどやらない。　サボれる時にサボ……じゃなくて休まなきや。

チーターの脇に買い物袋を置くと、反対側へ。　向かい合うようにコタツに入った。温かい。　コタツさいこー。

「何してんの」

「一緒にぬくぬくしようかと」

「世話係が ぬくぬくしてちゃ困るわ。 家事をやって頂戴」

「だが断る」

「アンタ、ホントに職員？」

むっ。 俺を否定するのかなような発言。 反抗しちゃうぞ。

「うるさい。 そもそも、生活リズムや健康の側面から見れば、本当は指導をしなきゃならない。 それをしないんだ。 感謝こそすれ、文句は受け付けない」

「あんた普通っぽい顔して、実はすっごくい変わり者でしょー」

変わり者です。 転生者ですらある。 強調すると本来存在しないレベルだろう。 凄いだろ。 拜めよ。 何も出来ないが。

「変わり者さ」

「否定しないのね」

「結果なら出てるからな。 管理センターや知り合いに聞いて調べれば、俺の痴態の

数々が分かるだろう」

「悲しくなってきたわ」

そんな問題児が派遣されて来た件についてかな？

悪かったな。

俺も面倒事は

勘弁だ。

「まあ、コレも何かの縁ってことで。以後よろしく」

「まあ、良いけどね。よろしく……えーと、愚民？」

それも否定しない。 だけど名前で呼んで欲しいね。

「杏樹あんじゆだ」

「そう。 よろしく あんじゆ」

そう言って、コタツから片腕を出して「招き猫ぐー」で挨拶してくれた。 可愛い。

「可愛い名前ね」

「ふえっ!？」

一瞬、チーターに心を読まれたと思つて変な声が出てしまったよ。恥ずかしい。それが面白かつたのか。煽るような笑みを浮かべてくるチーター。男に可愛いとか、それ、褒め言葉じゃなくない？

「ま、まあ。女っぽい名前だとは思うけどさ。もう慣れた」

「あらそう。これから名前でも平気なのね？」

「もちろん。他の子からも呼ばれてるからな。今更だよ」

「……そう」

今度は詰まらそうな顔をされた。仕方ないね。名前を呼ばれるのは幼少の頃よりずっとである。慣れている。

それに嫌だと思つてない。響も個人的には気に入っている。偶に今のチーターみたいに揶揄われる事はあれど、俺の慣れた反応に飽きて続かない。勝手に飽きて、どうぞ。

「——そろそろ行くね。お邪魔しました」

「邪魔されたわ。家事をやってくれなかったし」

「買い物したろ」

「それだけじゃない」

「まあな」

ふっ、と互いに笑う。言葉通りに嫌がつているワケじゃないのだと分かる。この感じ、意外と好きかも知れない。

知り合いで、こういうやり取りをするのはあまりなかったからね。

「また来なさいよ。あんじゅ」

玄関の戸を潜る時。背後から そう聞こえたから、俺は振り返らず片手を軽く上げて返事をする。

つい口角が上がったが、きつとチーターにはお見通しなんだろうな。

カミングアウト

火山から噴出する奇跡、サンドスターと生命の反物質と仮定するサンドスター・ロウ……セルリアンを構成するセルリウム、対するアンチ・セルリウムフィルター。

《例の異変》であると妄想している大事件にて、犠牲になるかも知れないセーバルと四神。

それより先に来るもの。近々起きるかも知れない、セルリアンによるパーク・セントラル事件。

起き得る危機に警告を出すべく、この件を研究所宛の手紙を出した。カコやミライ、他の面子にもそれとなくメールを送った。

荒唐無稽。唾棄されると想像するのは安易だが、何もしないよりマシだ。

別に何か起きてから「警告したのに、何もしなかったオマイらが悪い」と責任を担がせるつもりはない。

どうして良いのか分からないから、俺はヒト任せにしているに過ぎない。そも、ヒトの手に負えないかも知れない。

だけでもし、もしだ。

誰か一考の余地有りと判断し、アクションを起こすキツカケになるのではないか。それらが連鎖して早めに動けば、パークの危機は回避出来るかも分からない。

「他に出来る事は……何かないのか？」

思わず呟く程には、勝手に追い込まれる俺。具体的な解決の手立ては無いのかよと。

世の中、文句や訴えは多くとも解決案が一向に出ないケースは少なくない。もっと言えば行動に移すヒトは、もっと少ない。俺もその1人だ。

理由は色々あるだろうが、俺の場合は結局は楽がしたいのだ。パークを楽して守りたい。その為にはどうすれば良いのだろう。

楽という言葉とは、どうにも現代社会でサボリ……悪と考えるヒトがいる気がするが、俺は そうは思わん。

楽したいという気持ちがあるからこそ、人類は様々な効率の良い道具や運用方法を模索、実行してきた。楽の為に苦勞をしてきたのだ。

そりゃ、悪い部分もあるだろうが、同時に今の文明が出来た要因のひとつでもあろう。

行動する原動力のひとつともなる。

まあ、その。チーター宅の俺のように、何も生み出さずゴロゴロして無益で終わるパターンもあるが。

それはそれ。今は今。して、今は自室のベッドの上でゴロゴロしているまである。大丈夫。俺がいなくても世界は回る。あ、この考えだと やっている事を否定する。撤回しよう。

「うう……一番はカコと、管理センターの小動物かな」

頼りになるは、やはり2人。パークでのポジションでは、それなりの地位に座っているだろうからだ。発言力も高いだろう。

後はミライか。調査隊長だからね。発言力もそうだが、行動力もありそうだ。現場で言えば、森林警備員がいるけれど、その……かのマツチヨマンは脳筋ばいから。微妙である。メールはしたけれど。

「開発すればな」

フィルターをヒトが作れば。　　サーバルや四神が犠牲にならない。　　作れば、だ
けど。

サンドスターや　けものプラズムによる奇跡をヒトが生み出す。　　それこそ、困難
じゃないだろうか。

いや……分らんか。　　SSプリンターという、3Dプリンターみたいのが　あるの
だ。

「——想像する事は、実現出来る」

人類史に残る偉いヒトが、それっぽい事を言ったとか。　　ならば、可能性はあるとい
うもの。　　希望は捨ててはならない。

悪く言えば……絶望を受け入れるのは難しい。

「ふう」

いつまでもゴロついているワケにはいくまい。　　仕事は休みだけど、部屋にいても良
い事はない。

俺は立ち上がる。取り敢えず散策しよう。ニホンオオカミは寮のパリピと遊びに行つてしまった。その為にぼっちでの行動。別に寂しくないもん。いつもの事だもん。

気楽で良いね。好きに時間を使える。自由だ。自由万歳。ぐすん。
さて、行き先だが。パーク・セントラルはどうか。男ひとり、アトラクション園内をフラつくのは悲壮感漂う気がせんでも無いが、フレンズや子供の笑顔は励みになる。輝きだ。

ふむ。ひよつとしたら、この気持ち……セルリアンもソレで釣られるのか。いや、違うか。ヤツらに意思はないハズだ。きつと。

ガチャリと、玄関の扉を開ける。また今日も始まつてしまう。
否。始めるのだ。

進め。俺とパークの為に——！

「あれ」

目の前にヒトがいた。馴染みある綺麗な顔だった。胸も大きい。エロい。
というか幼馴染のカコだった。

「お、おとお、おはよう あんじゅ!?」

服のセンスは相変わらずである。

しかしな。この光景、前にも無かったかな。

「デジャブ?」

カコは顔を赤く染めたまま、首を横に振った。やはりナニか。またナニかと間違えたのか。

「中に入って」

取り敢えず室内へ誘う。今回はパリピが騒がなかった。ニホンオオカミと出払っていたからね。

「——また連絡も寄越さずに」

カコをベッドに腰掛けさせて、お茶を出しつつも言う。 タイミングが合わなければ
すれ違いの可能性があった。

いや、良いんだけどね。

こうして会えたんだ。 俺も本気で注意しているワケじゃない。 嬉しくて口角が
上がるまでである。 我がルームへウエルカムようこそ。

「ごめん」

「研究に忙しかったんだ？」

「うん」

出した茶をチビチビと飲むカコ。 可愛い。 まだほんのり赤い頬も合わさって尚

良し。

「その」

「うん？」

しおらしい。　　モゴモゴ言葉を発する姿も良いよね。見ていて楽しい。　　可愛いものもあるよ。

「さっきのは？」

湯呑みを口に付けながら、上目遣いで聞いてくるカコ。

ふつ。　　えっちい方向に考えたのかな？　　そんなカコも可愛い。　　からかってや

ろう。　　カラカルじゃないが。

「どんなこと？」

「えっ!?　　えつと……しよーどうぶつとか、か、か、かかか開発とか！」

あらら。　　赤くなって可愛い。　　そしてエロい方向かな？

だとすれば、思っていたより汚れていて悲しくもあるが、同時に楽しくもある。もう少し からかってやろう。

「ナニ想像してんのお？ サンドスターの奇跡で起きるヒト化現象や応用技術の話だよ」

「え……ええ。モチロン！」

慌てる姿もグッド。もう少し堪能してたいが、カコが訪れた理由も知りたい。送ったメールの件だろうか。だとしたら真面目に話合わねばならない。この辺にしておこう。

「それで。来た理由も、そんなトコ？」

「あ、うん。送ってくれた手紙とメールの件。それから……大晦日の前後。謝りたくて」

「ああ、気にしないで。過ぎた事だから」

大晦日前後。イタリアオオカミに追いかけて回された恐怖の鬼ごっここの事だ。

セルリアンより尚恐ろしい怪異とも言えたが、生き延びた。過去は良い。未来を
考えよう。

「手紙とメールの件を話そう。取り敢えず、見てくれたんだね」

「うん。火山から噴出する物質についてと、将来起こり得る危険について」

良かった。無事に研究所に手紙は届いたか。そして見てくれた。

では次。気になるのが感想だ。どうだろうか、反応次第では厳しいぞ。

「それで、その。どう思った？」

恐る恐る聞いてみる。今度は、俺が上目遣いになる番だった。

野郎がやつてもキモいな。鏡があつたら、リバーズしそうである。しちやうんか
よ。

「正直に言つて荒唐無稽」

「グハアッ!？」

馴染みからキリツと言われた！　言葉のナイフが心を滅多刺しにしてくる！

「ご、ごめん　あんじゅ！　で、でもね。　信じてないワケじゃない」

「ほんと？」

アワワと慌てるカコに言われて、少し立ち直る。　希望が潰えたワケじゃなさげ。

「サンドスターという未知の物質が起こす現象に、既成概念を捨てて向き合わないといけないから。　絶滅種のフレンズ化もそう。　ニホンオオカミにサーベルタイガー。　資料からして特有のものであり……個人として疑う事が出来ない。　リウキウのシーサーは、特定を先送りしていたけれど……そうだと考えている」

えーと。　つまり、カコは信じてくれているのかな。　もうちよい分かりやすく頼む。

「信じてくれる？」

「一考の余地有り」

なんか微妙なラインですねソレ。大丈夫なんでしょーか。

「研究所の仲間は、信じていないヒトもいるけれど……所長と私。それと何人かは考えてくれている」

「そうなんだ……誰もいないよりマシかな」

大体は期待通り、或いはそれ以上の反応。所長とカコが仲間になったならば心強い。

問題は、今後の展開か。

「それで、その。どう対応していく？」

「その前に」

対してカコ。俺の目をジッと見て、一枚の便箋を見せてきた。俺の送った手紙だ。

そして言うのだ。俺でも理解出来る、ごもつともな質問を。

「どうやって、この情報を知ったの？」

「うっ」

だよな。そうくるよな。

だというのに。俺は答えを用意していないという。完全にヒト任せにしている所為だ。

「今日は所長に言われたのもあって、あんじゆに会いに来たのもある」

「ああ、確認の話……かな」

「そう。公開していない研究所の情報、或いはそれ以上の情報を あんじゆ が何故知っているのか」

「ごめん。カコ、疑われた？」

「大丈夫。皆、疑ってない」

「よかった」

ホツと胸をなで下ろす。全く、俺とした事が。カコを守るだなんだと格好つけようとしてる癖に、逆に危険に晒してどうする。

取り敢えず、馴染みのカコが疑われてなくて良かった。所内では信用されているんだろうな。羨ましい。

「それで……答えてくれる？」

そして再度、問い詰められる。真剣な表情で。

ここで上手くやらないと、取り合ってくれないかも知れない。

「わかった」

頭をかきつつ、力なく呟いた。

頭が悪いものだから、上手い言葉が見つからない。なら正直に言おう。

「俺は、パークの未来を知っている」

今度は俺が信用される番だ。
いや、その前に。

自分自身を信用するところから、始めないとならないな。

ラボへ。

「俺は、パークの未来を知っている」

真顔で発言した時。　世界は一瞬とはいえ、静寂に包まれた。

小さなマイルームは、部屋というよりかは「白い箱」と化す。　色彩を失い、白けの

みの音無空間。

それは平和の静けさじゃない。　嵐の前の静けさ。　理解が追い付かず、混乱と対応

の遅れから来るものだ。

妙な間は、短く長い。　時間の流れが曖昧だ。　心地悪く緊張が湧いてくる。

ボスがいたら「検索中」と繰り返すかフリーズするトコか。　仕方ない。　ポンコツ

じゃなくても対応出来まい。

「……………予知夢？」

目の前の馴染みが、カコが。何とか静寂を払ってくれた。困惑の表情だが、良くやったと褒めてあげたい。

「そんな感じで」

一方元凶の俺は、曖昧な感じに答えた。ダメな対応だと思う。

転生者ですとか、はつきり言えないのは、自信がないから。だけど引くワケにはいかない。被害妄想が現実になってからじゃ遅いんだ。

「完全な妄想じゃない。一部は当たっているだろう？ 特に研究所が公開していない情報を知っているんだから」

だから食い下がるように言う。赤点頭で天才と争う気は無いが、俺にも譲れないモノがあるから。

そんな気持ちを読み取ったのか否か。カコは頷いて言ってきた。

「うん。私と、所長が信じる理由」

「だろ？」

よし。この話は終わり。寧ろ終われ下さい。今後の対応の話をしようず。じゃないと困る。根掘り葉掘り聞かれるのは避けたい。

言ったら魔法が解ける事は無いだろうが、もし自分が「ゲーム等の登場人物」だと知ったら……たぶん落ち込む。

一般人なら頭オカシイと思われるか、関係ないと考えるだろうが、カコ達は純粋な心を持ち合わせる。きっと信じてしまう。そして傷付けるかも。それは避けたい。

まあその。ちよつと えつち な部分もあるが、ソレはソレ。ウエルカムようこそ。生物の本能でイチヤイチャしよう？

おっと。今はソレどころじゃない。真面目に話しているんだった。

「それで、研究所の対応としては……どうしていくのかな」

「あんじゅ を研究所に連れて行く」

「フアッ!？」

おい待て。さらつとヤバい事を言っていないか、我が馴染み。

俺は実験体じゃないぞ。ニユアンス的にそう感じて鳥肌が立つんですけど。

「ナンデ？」

「詳しく聞きたい」

ココで良くない？　なんで研究所に移動しなきゃならないの。

やっぱり乱暴する気でしょ。エロ〇〇〇^ピみたいに！

「今、開発段階のもの。　そして考察していること。　それを見聞きして欲しい。

そして意見を聞かせて」

「ソコじやダメ？」

震え声で尋ねてみる。　研究所に行ったら、血抜かれたり薬品を投与されるんじゃないな

いだろうな？

全く。　研究所に行けるチャンスだというのに、逆にチャンスが来たら拒否すると

か。　なんと贅沢な。

いや、ほら仕方ないじゃん。行き方の順序がね。なんか過程が怖いじゃん。そんな気持ちを読み取ってか否か。カコは首を横に振って答える。

「ダメ。機密や情報保持の観点から、多くは外で話せない」

「俺は部外者だぞ。今の話もそうだが、所内に入るのは良いの？」

「良い。所長が許可した」

所長、ね。随分と寛容というか。面識は無いけれど、どんなヒトなんだ。

俺の妄想を信じて、パークの機密を扱う施設に招き入れるというのか。器が大きいというか、考えが深いのか浅いのか。

「さつきも言ったけれど、既成概念を捨てないといけない。普通なら信じられない

事が……奇跡が起きる島だから」

「そうか」

真顔で言われた。パークや俺を信じているんだなと改めて思う。

奇跡。カコは決して言葉だけの空想にしてはいないのだ。

ジャパリパークだからこそ、信じてくれたという事ね。発想を転換してくれるヒトがいてくれて良かったよ。

じゃなければ。俺はその意味でもボツチだったに違いない。

「奇跡、か。俺にも起こせるかな」

「やってみなきゃ、ね」

互いに微笑んで立ち上がる。勿論、行く場所があるからだ。

パークの未来を決する場所。そうなるかも知れない場所へと赴くのだ。

「それじゃ副所長さん。案内よろしく」

「喜んで。預言者さん？」

預言者つて。手紙の内容からか。

しかし言われると恥ずかしい。ヒーローとどっちが良いのだろう。そも、預言とやらも訪れる未来か分からないが。

「英雄の次は預言者かあ」

「両方かな」

「勘弁してくれ」

「ふふっ」

さあ。

ジャパリパーク動物研究所へ行こう。

パークの不思議や、けもの を研究し、時として開発や実験、パークの方針を考える
キツカケになる場所。

そしてカコが副所長として勤務する重要施設。

どんな場所なんだろう。 危機を回避する努力はしなくちゃならないのに、ワクワク
がソレを上回った。

「その前に」

言いたるはカコ。

「ニホンオオカミは大丈夫？」

心配そうな声である。同居する けもの を気遣うとか優しいね。でも大丈夫。彼女にはパリピというフレンズがいる。

放置しても寮のパリピや寮母さんが世話してくれるだろう。 楽で良い。

「ああ、大丈夫。 メールでも送った事があるけれど、寮のヒト達が世話してくれるから」

「あんじゆ がないと心配するんじや」

あら。 分かってらっしゃる。 仕方ない。 ココは何かしらアクションをしておくか。

「置き手紙はしておく」

「そういえば、文字を読めるようになったと報告していたね」

「うん。 覚えるスピードが速くて助かったよ」

買い物だつて出来ちゃう子だ。　まだ彼女の行動に難があるものの、外に出ても問題ない。

パリピとの付き合いで妙な事を覚えなにか心配ではあるが、大丈夫だろ。　たぶん。

「研究所にいた時は、興味は示しても途中で他に気を取られて覚えきれず」

「環境の変化かな」

「そうかも」

環境か。　俺もパークに来て　だいぶ変わったと実感しているよ。

それが良い事か悪い事が分からないけれどもね。　けれど昔のままだったら、何も進展はしなかつただろう。

「まあ、その辺は研究所に行きながらでも」

メモ用紙を用意して走り書きをしながら、そう言った。　カコはどこか不安そうにしていたが、まあ大丈夫だろう。

大切なのは今である。　未来の不安や過去への後悔を軽減させたいなら、今を生きる

しかない。

不安に思えば思うほど、際限なく闇は湧いてくる。細かい事は考えない事だ。

カコとバスで揺られながらも、雑談を交わしつつ辿り着いた場所。

バス停の先、白く綺麗な建物が。住居を思わす建造物の一切は見当たらない。

開けた道路に、少ない交通量。そして、偶にすれ違う白衣のヒトたち。

門にはガードマンボックスがあつて、通り抜けるヒトの入退場を管理している様子。フレンズはいない。

本土でも似た光景を見た事があるな。アレは倉庫街や工業地帯だったか。

小さな頃は「なんだかすつごーい！」と目を輝かせる光景であつた。

しかし、仕事で見聞きする機会が多くなると目が腐つた。悲しいなあ。

だが今や昔。そんな事はない。俺はやはり、変わったのだろう。

「ココが研究所？」

「うん」

カコが先行、俺は付いて行く。情けない格好じゃ、ないです。故に恥ずかしくな
い。

だから堂々と年配の警備員に挨拶。サインして脇を通り過ぎようとして、

「ちよつと待って」

呼び止められた。怪しいものじゃないよ。預言者だと言われた転生者なだけで。
うん、じゅうぶん怪しまれるワードだね。

「カコ博士。彼が杏樹あんじゆさん？」

クリップボードの紙を見ながら問う警備員さん。話は通っているようだけど、ナニ
か問題が？

「は、はい……許可はその、下りてる……と思いますか」

対するカコ。 オドオドしながらも答えた。 俺やミライ、家族以外だと たどたどし

いのは、本土と同様であるか。

いや、職場の仲間同士なら話せるのかな。 ぱびりおんの雰囲気からして……いや。

アレは緊急時だし。 或いは無線越し。

でも多少は改善してきたと思うけれどね。 幼さが残るといふか。 可愛い。 軽

くニヤけちゃう俺ってキモい。

「特例だと聞いてますので。 どのようなヒトか気になりました」

「そ、そうですね。 えと、幼馴染で、その、研究の重要参考で」

もう少し時間掛かりそうですね。 オドオドして話すから、余計である。 怪しきも増す。

いや、本当に許可が下りている様子だから堂々としていれば良い。 まあ、オドオドしている姿は可愛いからヨシとする。

「分かりました。いえ、呼び止めて すいません」

警備員さんは、帽子のツバをつまんで微笑んでは会釈した。悪いヒトではないのだらう。

人間味があつて良い。無機物な音声ガイドより温かみがあるから。

ラッキービーストも、それっぽい部分はあるよな。量産型な機械のカラダで、ポンコツな部分があつたけれど。逆に そのギャップが良いのかも知れない。肝心な時は困るが。

そんなラッキービーストは、今ココで開発しているのだろうか。そう思うとワクワクするね。

「杏樹さん」

「へ?」

警備員さんに笑顔で呼ばれて、

「宜しくお願ひします」

そう言われた。

——これからも、お見知り置きを。

たぶん、そんなニュアンス。

だけど俺には。パークの未来をも任された気分になって……荷が重かった。

「はい」

けれど返事はする。 でなきや先に進めない気がして。

最も中途半端な責任を感じたり、負う気はない。 させたいならハッキリ言う事だ。

「私は何もしないけれど、コッチの利益になるように頑張つてね」と。

そうしたら言つてやる。 お前もパーク職員だと。 お前も頑張るんだよ。

………いや。 被害妄想をし過ぎた。 どうも緊張しているようだ。 ポジティブにしよう。

アニメのラストの方、ギンギツネ等の話から察するに、ヒトはセルリアン対策に積極的に動いていたみたいだし。

悪い事を考えれば、悪い方向へ向かう。

根拠はないが、暗い考えでは多くがネガ

タイプな結論になる。

俺は気持ち切り替えて、カコの後についていった。　まだ戦いは始まっていないのだ。

——などと、格好付けていた時期が俺にも　ありました。

俺は完全に部外者。　技術も無い、頭も悪い。

正直言つて邪魔者。　所内に入れば、白衣を着たヒト達に奇妙な目で見られているのが　その証拠。

「ふう」

何と居心地の悪い空間か。　フレンズがいれば気が紛れるのだが……道中、見当たらない。

サーベルタイガーの話聞いたから、研究所にいられたらと思っただけだ。違う部屋かどこかだろうか。

「大丈夫。みんな、優しいヒト」

カコさんや。俺にとつては新たな環境なの。直ぐに慣れないタイプ。とにかく、逃げちゃダメだ。こんな俺でも役に立つかも知れない。

「私は外で待ってる」

そんな感じで所長室へ通された。俺だけで行くように言われているらしい。

「……………失礼します」

駄目な例として取り上げられそうな声と返事を待たないノックで、チョコ板みたいな扉を開ける。

この手の挨拶や部屋への入室は苦手だ。胃が痛くなる。特に頼れる命綱が無い

時ほど。勉強なんてしていないワケであるし。

高校の時の面接練習？　忘れましたね……。

さて。中は広くて左右に天井スレスレの本棚。絨毯は靴越しに分かるフカフカ感。

高級感漂う立派な部屋である。　ザ・お偉いさんがいるイメージのソレだ。　実際いた。

「キミが、杏樹くん　だね？」

明るい年配の男性の声と共に顔を上げる。　木製の事務机の向こうに社長椅子。

そこに鎮座するは初老のおじいさん。

流星に口には出さないよ。　挨拶はするけれど。

「はい、杏樹です。　よろしくお願います」

「此方こそ宜しく。　私は、このジャパリパーク動物研究所の所長をやっている――
―という者だ。　此方こそ、宜しくお願いますよ」

気楽な感じに話をしてくれる所長さん。固いヒトじゃなさそうで良かった。話しやすいのは良い事だ。

公式の面であれば、こうもいかないんだろうけれど。 1対1だからかね。

「カコ博士に聞いたと思うが、キミが送ってくれた手紙。その内容は無視出来ないものだと判断した」

「ありがとうございます」

「情報漏洩の疑惑もあったが、未来の話も書いてあったからな」

未来の話を多少信じてくれたという事で良いのだろうか。それとも未来逆算思考的な？

だとしても、科学者が証拠もないものを信じると言うのは少し驚きだ。

いや、それは偏見かな。科学者もヒトの子である。血も心もあるだろうて。

それを察したのか顔に出たのか、所長が声を掛けてきた。

「意外かね？」

「へ？ あ、まあそうですね。カコには荒唐無稽と言われたし……だけど信じ

るつて。　　科学者がハッキリした証拠もナシに迎え入れるというのが、その「ふむ。　　確かに今までの考え方なら、私も信じなかつただろうな」

やはりココがパークだからかな。　　奇跡が起きて、多くの不思議がある。

それらは常識が通用しない。　　答えを知るには今までの思考では、きつと駄目だ。

だから所長は変えた。　　変えられた、というべきか。　　ずっと同じ考えで生きてくと、中々考えを曲げられないヒトは少なくないだろうから。

「だが我々がサンドスターと呼称する物質や動物のヒト化現象を見て考えさせられたよ。　　そこに杏樹君の手紙が発破になった。　　ありがとう」

「いや、その。　　俺は何もしてないです」

「いやいや。　　ヒトやパークを信じ直すキツカケになったのだ。　　礼は言わせてくれ」

マジで何もしてないんだけどなあ。　　寧ろコレからである。　　そしてナニが出来るんだらうね。

キツカケ作り？　　言葉とヒト任せでパークを救えるなら楽なんだけど。

「最も、所内のヒト全員がそうではないがね」

所長は苦笑する。仕方ないと思った。

あんな手紙を信じろという方が難しいだろう。普通ならシユレットター待ったナシ。

「いえ。所長やカコが信じてくれたなら、十二分と言えます」

チカラある重役な方が信じてくれる。これはとても心強い。

下のヒトが信じてくれるのも重要であるが、上のヒトが「NO」と言えば進まない事もあるからね。

その意味では、とても助かった。

だがしかし。それに反応するように、所長は言葉を発した。

「そう言ってくれると助かる。だが、研究や開発とは単独のみで進歩しない。例外もあるが、多くのラボトリー・スタッフの協力無くして、成功を掴むのは難しい」

むう。その意味は、俺でも 何となく分かる話。担当者だけでは現場の作業は進まない。作業員だけでも進まない。

アレだ。似たような話を上げるなら、ビーバーとプレーリーの関係だ。

ビーバーは、優柔不断というか心配性で作業が進まず。でも補強や立地に詳しくかつた。

プレーリーは、行き当たりばつたりな猪突猛進な作業で危険な目に。だけど、その作業速度は物凄く早い。

片方だけでは上手くいかない。そういう事である。この話の場合は、まあ、建築業の色合いが強いかもだが、他や研究員も当てはまる事はあるだろう。たぶん。

「何であれ、時間を貰う事になるが……先ずは歓迎する。改めて、ようこそジャパリパーク動物研究所へ」

立ち上がり、握手を求められた。断る理由がない。素直に握り返した。

「改めて。宜しくお願ひします」

そして手が離れる……事は、所長が強く握ってきた事で叶わずへ、ナニか。　そういう趣味は無いんですけど。　そんな恐ろしい事態を考えそうになる前に、

「……………研究所の、ジャパリパークを何処まで知っている？」

——冷たい表情と声だった。

本当は怖いジャパリパークってか。

血が凍ったね。

心のどこか。　手放して喜んでいた俺を恥じた。

俺はどうやら、パークの暗部に片足を突っ込んでしまったようだ。

ヒトがいる以上、闇は付き纏う。

何故俺は、パークだというだけで……信じてくれたと勝手に喜んで……この島ならみんな「フレンズ」だと勝手に思い込んだのだろう。

ソレに気付いたのは、愚直にもこの瞬間だった。

疑問や不安、相談と。

聞き齧りの情報で行動する。根拠や確証もナシに動く危険性は 如何程か。

ひとつの考察や妄想の参考になるとしても、いきなり走つたら転倒する。その前に道を間違えるかも知れない。

それはアライさんの様な、微笑ましい光景とは限らない。特にヒトの世界では。

—— ジャパリパークを何処まで知っている？

所長の言葉。まるで踏み込んではいけない世界があるかのよう。

ジャパリパークは のほほん とした陽光の世界。ヒトがいる世界でも、そう思っていた俺は考えを改めざるを得ない。

ヒトがいる以上、闇はあると。特にパークは様々な国や営利団体が絡むのだ。笑顔と陽気の裏には欲が渦巻いているのだろう。

「手紙の内容以外は、知らないです。それらも曖昧な知識として頭にあるだけです」

ハッキリと、そして曖昧に言う。俺は明るい世界しか知らないと。でなきや俺は、輝きを消される。そんな気さえしたから。

「なら良いんだ」

そう言って手を離してくれる所長。そしてニコリと微笑んで、

「後の事はカコ博士に頼んでいる。皆と仲良くしてくれると嬉しい」

「……はい。失礼します」

逃げる様に所長室を後にした。

久し振りに、笑顔が怖いと思った。

セルリアンより、ヒトの方が恐ろしいよ。

せめて今後の事件に絡む敵では無い事を、俺は切に願った。

「なんの話？」

外に出ると、カコに尋ねられた。何時の間に白衣の格好だ。似合ってる。私服はアレだけど。

「いんや。挨拶をしただけさ」

笑顔に努めて、そう返す。カコは副所長だけれど暗部を知らないかも知れないから。変な事を言つて不安にさせるのは避けたい。俺だつてパークの闇は知らない。

触らぬ神に祟りなし的な。

フレンズは触りたいけれどね。四神とかシーサーとかオイナリサマとか。おつ

と崇られる。

なんて罰当たりな俺。 いや、罰当たりなのは、彼女らの美人でエロいアニマル・ガールのボディである。俺は悪くないもん。

「なんかイヤラシイ顔してる」

怪訝な顔をしないでくれ。俺だって男だもん、エロい事を考えもするさ。所長の話の後で、マヌケな妄想が出来る。なんて悲しい性。

「男の会話さ」

「フケツ」

「グハツ!？」

馴染みが、俺のガラスのハートにダイレクトアタック!

そんなカコに反抗が。俺じゃない。所長室から扉越しに曇った声が。

『カコ博士。杏樹君の案内を頼むよ』

「は、はいっ!?　ゴメンあんじゅ、行こう!」

慌てて、カツカツと歩き始めるカコ。　あら可愛い。

大きくなっても、心は純情というか。　幼いというか……微笑ましい後姿。

「うん。　よろしくな、カコ博士?」

振り返って睨みつけられた。　赤くなりながらも、頬を膨らませて。

やっぱり幼馴染は可愛いねえ。

俺はくつくつと内心でほくそ笑む。

……………。

清潔な、病院の廊下を思わす通路を共に歩いていく。　時々すれ違う研究員に会釈し

つつ、実験室とやらに通された。

プラスチックやメスシリンダー。顕微鏡けんびきょうにペトリ皿。

「シーケンサーや質量分析計と思われる機械……それから拳銃の様な小型の電動ドリル。たぶん、細胞の核やタンパク質を取り出すため、試料をすりつぶすのに使うヤツかな？」

後は、プレパレーターしゅうじんきの道具らしきもの。エアーチゼルだっけ？ 後は小さな集塵機しゅうじんきのホースのようなもの。

うん。全然分からん。

俺は詳しくないから、何故同じ部屋にコレらがあるのかとか分からない。

何にせよ、動かし方や使い方、仕組みも分からない。俺が使う事なんて、ないんだろうけど。

「座って」

作業台に並んで置かれた簡易な丸椅子に座らされた。カコも同じように、お向かいに座る。

はて。よく見ると作業台は銀色の巨大なトレーに見える。まさか解剖台？

そこから導き出される答えは――。

「良からぬプレイを強要させる気か！」

「ち、違うっ！」

「またも赤くなって首を横に振る。　　押搦って遊ぶのは楽しいね。」

「けれど真面目な話、解剖や投薬対象になるのは勘弁な。　　俺は実験体じゃない。」

「じゃあナニか。　　お部屋デートかい？」

「実験室で　　デート。　　一緒に投薬し合い、解剖する。　　うん、ただのホラーに聞こえる。」

「……真面目に話そう？」

「すまん」

「頬を染めながら咎められても、怖くも何ともないが謝った。　　このまま遊んでいては、何しに研究所に来たのか分からない。」

「えーと。 何から始める?」

取り敢えず言葉を発してみる。 元凶の俺が聞くのも変だけど、ココはカコの なわばり なのだ。

郷に入れば郷に従え。 様子を見よう。

「未来の話から」

「ミライ? ヨダレ振り撒く調査隊長の?」

「パークの未来の話」

「またもふざけてしまったが、カコは普通にスルー。 スキル高いですね。 さすが研究員。 違うか。」

「特に火山の話は無視出来ない」

「ソコをスルーしない。 さすが研究員。 違うか。」

「サンドスター・ロウやセルリウムの噴出があるのは把握している。けれど、パークを閉鎖するには至らない規模」

「今は、ね。将来は分からないんだ」

かばんちゃんの世代。 遠い未来。 或いはその手前の時代を考える。

ヒトが……職員が島から消えてしまった あの世界。 退去せざるを得ない事情が、事件があつたのだ。

妄想の域を出ないが、火山の噴火と噴出物の影響かと考えている。

カコが言っていた物質だ。 サンドスター・ロウにセルリウム。 今は平気でも、早急にフィルターを張るべきだ。 作れば、だが。

それと……気になる事がある。 アニメのミライの記録的に、フィルターの存在をヒトは知っていた気がするのだが。

ソレがあつても尚、ヒトは退去せざるを得なかつたという事だろうか。 退去理由は火山だけじゃないのかも。

けれど分らん。 全然分らん。

「あんじゅ?」

「あ、ああ」

話すべきだ。手紙には書き忘れたが。

「前世……じゃなくて、予知夢の記憶的にはフィルターを張つてもダメかも知れない」
「別の何かがある?」

「それは分からない。でも、言っておきたくて……解決策は分からない、ごめん」
「ううん。ありがとう」

そう言って、メモ書きをしていくカコ。言わないよりマシだろうて。

この何気ない事が未来を救うかも知れないのだから。

「火山の調査は、予定を早めて詳細に行くつもりなの。調査員も増員された」

「ありがたい話だ」

「うん。管理センターに友だちがいて。助けてくれた」

友だち？　管理センターに友だちがいるのか。　てつきり、俺やミライ以外は……
失礼。　そんな事もあるか。

これ以上は止めよう。　自分の心も抉られちゃう。

「結果待ち？」

「うん。　その間も、フィルターの開発や研究を皆で進める。　半信半疑の仲間もいるけれど、パークを愛して……守ろうとしてくれている」

「そっか……良かった」

俺は莞爾として頷いた。　カコが良き仲間にも囲まれていると感じたからだ。

勿論、こんな俺を多少でも信じてくれているのも嬉しい。　暗部にズブズブ沈みたくはないけれど。

「他の研究は後回しになる。　ガイドロボットの開発に携わっている仲間も、こっちにまわるから」

「えっ」

なん……だと。

ガイドロボットって、アレやん。恐らくあの量産型な青いやつ。ポケットのあるタヌキ的なんじゃないです。

「ラッキービーストの事か？」

「うん」

おう……ゴメンよ、ラッキーさん。

俺の所為でキミの開発は遅れそうだよ。

ラッキービースト。

青色と水色で構成された、足元くらいの大きさな案内ロボット。アニメにて登場。

パークに沢山いる様子から量産型。

ケモ耳と縞々尻尾が生える。足は白く、二足歩行。腹部にはレンズ。知ってい

るヒトは多いだろう。かばんちゃんと一緒に冒険していた個体がいたのだから。

ポンコツだの無能だの、言われた面はあれど、実際には高性能なロボットだと思う。

会話する為にインタフェイスとして喋る事が出来るワケで。その逆に、聞き取る能

力もスゴいと思うの。

他にも検索機能に、手は無いけど車の運転機能もある。除草機能や施設のメンテナンスをするスキルも持つ。施設の錆びや、観覧車のゴンドラが落ちた辺り、限度がある様だが。映像の記録、投影による再生も可能。

フレنزズの食事であるジャパリまんの配給も行なっていたな。そういう理由かは知らないが、フレنزズからはボスと呼ばれていた。

ガイドロボットというからには、地形や施設を把握している節がある他、けもの等の特徴を説明出来る。状況についていけないトラブルが起きるとフリーズしちゃうんだけど。

ただし。大量のサンドスター・ロウを検出すると耳を赤く点滅させ、緊急事態としてハッキリとした口調で避難を促し、最寄りの避難先を教えてくれる。フレنزズとの会話等の干渉は生態系の維持を理由に控えているが、緊急の時は会話をする。

初期は防水機能が無かった様だが、後に付加された模様。レンズだけの姿になっても喋れたり、バスのバッテリーが分かる辺り、本体はレンズなのかも知れない。そんな……そんな 重要ポジションにいるロボットが開発されない。いや、遅れる。

この所為で将来、どんな悪影響があるのか。

バスが大岩に衝突しない。

雪にタイヤが埋もれない。

フリーズ（物理）しない。

船が沈まない。

あれ。良いんじゃない？

………違う。そうじゃない。いや、全否定は出来ないかもだけど！

かばんちゃん世代で案内がない、車の運転が出来ない、解説ナシとなると。旅路

は大きく異なる事になるだろう。

良きフレンズが いっぱい いるので、他の方法で 何とかなる気がするけれどね。

歩くのが大変だという距離があつた様だけど、図書館の存在は知れ渡っている感じで

あつたし。

「あれ？」

どうなのか。俺が存在するジャパリパークだ。

かばんちゃんが生まれない可能性がある。それはどうなのだろうか。許される

のか？

あの世界に憧れた癖に、まるで否定しているみたいじゃないか？

既に現時点で色々と影響があるだろう。今更な悩みである。

だけれども。あの世界を再現する為に、今の時代を放棄して良いものか？

ヒトは苦手だ。いない方が良いと幾度となく思ってきた。だけど、俺は多くの職員に……ヒトに助けられたのも事実なんだ。

やはり無視出来ない。皆を助けたい。

例え、あの温かな世界が、輝きが生まれなくなつたとしても。

あ、今の世界を救えるかは別の話な。自信ないです。ほぼ他力本願ですしおすし。

「どうしたの?」

「えっ?」

カコの声で、意識が実験室に戻された。

いかん。また妄想の海に沈んでいたか。

「ラツキーがいないと、未来が危ない?」

「ああいや……そこまでじゃな……」めん。

曖昧なんだ」

「あんじゆ。やらなきやならない事は多いと思う。だけど時間と人手が限られるなら優先順位をつけなくちゃ」

カコに諭された。そうなんだよな。優先するモノを考えよう。難しい話じゃない。

そりやラツキーの開発も必要だ。だけど手を止めて貰ってでも、火山を抑えねば。

「そうだよな。俺は、研究や開発のスキルは無いから役立たずだけど」
「そんな事ない。貴重な意見をありがとう」

カコは優しいね。気遣ってくれて。

でもさ、どうしよう。このまま研究所に居ても迷惑なんじゃないか。そんな考えを予想してか。カコは微笑んで、

「皆と話すの良いよ。フレンズもいる。良い刺激になる」

それは………なんというか。楽しそうだ。

でも心配だ。俺、部外者だし。

「研究所を部外者が出歩いて良いの？」

「私も一緒」

「なら安心だ」

そう言つてスクツと立ち上がるカコ。　いつか見た、オドオドした影はない。

「案内、してあげる」

微笑みながら、手を差し伸ばされた。　断る理由は　どこにもない。

小さく綺麗な手に軽く触れれば、しっかりと握りられた。　そのままグイツと引き上げられる。

温かくも力強い。　細い腕のどこに、そんなパワーがあるのだろうかと疑う程に。

幼馴染も変わったという事か。

嬉しいような、寂しいような複雑な気持ち。

でも、暗い感情は湧かないな。

俺も釣られて微笑んだ。 周りが明るいのだ、俺が暗くなつてどうするよ。

「おう。 ヨロシク頼む！」

だから俺も莞爾として受け入れる。 カコは、みんなは やはり「フレンズ」である。

凍土の眠りから覚めた太古の巨象と、研究の話。

ヒトが誕生する前の時代。恐竜が地上を支配していた、6650万年前にあったという大事件。

それは巨大隕石の落下。生命の75%が絶滅したとされる第5の大量絶滅。衝突による火災と衝撃で巻き上げられた塵埃で太陽光は遮られ、地球全土の気温は低下。

激変した環境に耐えられず、多くの命が死に絶えた。

植物の光合成が2年も滞ったとかいう話を聞いた事がある。

動植物にとって陽は重要であろうに……薄暗く、命の音が聞こえぬような時代が地球にあった。想像出来るだろうか。

恐竜時代の終わり。

それはあまりに唐突であった。

だが、それでも。

それでも生き延びた命があったのだ。

食料も乏しく、陽もなく、それでも生命の大量絶滅を乗り越えて……進化して。

今の地球が、命がある。ヒトがいて、たくさんの けもの がいる。

命の強さ。 或いは奇跡。 様々な偶然や必死が重なり、今日まで続く。

だがしかし。 乗り越えた先にも苦難とは常に待ち構えていた。

氷河期。 地球が寒い時代。

いや、まあ、サイクル的には今も氷河期らしいんだけど。 今は暖かい氷河期らしい。

イメージがつきにくいが。

だが昔の環境は、比べものにならないくらい、厳しかっただろう。

雪と氷の大地。 少ない食べ物。 生命を鈍らし、死へと誘う凍てつく寒さ。

そんな厳しい時代。 ご先祖様と……毛の長い太古の象、マンモスは頑張っていた。

剣歯虎のサーベルタイガーも、逞しく生きていたのだろう。

だが……結果は、多くのヒトが知っている通り。 マンモスやサーベルタイガーは、

どうなったか。

絶滅。

地上から、地球から姿を消した。

諸説ある。 ヒトが狩りをしたからとか、病気だとか、寒冷化が進み過ぎたとか。

何にせよ、姿を消して時間が経ってしまおうと人々の記憶とは風化するもの。どのような姿だったのかも忘れられてしまう。

マンモスの話であるが、200年ほど前、永久凍土の中からマンモスが見つかるまでは、ヒトは骨から どんな生命だったか想像していた。

巨大な骨……巨大なネズミか？ いや巨大なモグラだろうと考えていたという。

今でこそ、マンモスは象だと考えられるが、昔は大きく違ったようだ。

ちなみにマンモスは、モンゴロイド族の一部が使うサモエド語で「マー（地中の）」「モス（動物）」が語源とされている。

考えが改められても、この名が残った事になるのかな。

さて。 そんな永い年月を得て、永久凍土の中から掘り起こされたマンモス。

それは前世同様、この世界でも多くの謎や感動を人々に与えた。 また、細胞核等から復活出来ないかという試みの話を耳にしている。

前世では、大きなニュースもあつたな。 実験で2万8000年前のマンモスの細胞核が動いたんだっけ？

復活までは、技術的に、道徳的な問題が山積みだけれど、その研究過程で発見された事は、人類にとって大きなチカラになるかも知れない。

そして………この世界。

奇跡の島、ジャパリパークがある今はというと。

「ケナガマンモスと言います。 えと、宜しくお願いします」

どこかの民族衣装を思わず、茶色を基色にした服装と、象のフレンズを思わせる長いマフラーを着たフレンズが目の前に。

目にハイライトがない。 絶滅種だから。

「俺は杏樹。 ヒトだよ。 パークでは臨時職員という扱いになってる。 宜しく」

フレンズとして。 彼女は……いや。 彼女たちは蘇った。

——蘇った、という表現は正しいのか分からないけど。

そもそも……ヒトによって誕生した絶滅種の生命は……。

やめよう。 今は素直に喜べ。

俺はモヤモヤを心の内側に押しやり、莞爾として握手した。 手というか、俺は彼女

のマフラーを軽く握った。

いや、普通にマフラーが動いて俺の前に伸びてきたから。 ホント、どうなってるん

だろうね。

サンドスターの研究。それは希望か誤ちか。

今の俺には……答えられん。

「彼女はケナガマンモスのフレンズ」

そう紹介してくれるは、共に研究所を歩いていたカコ。

休憩スペースのような場所で、マンモスのフレンズと出会い、このような形になった。

ケナガ、と言っていたが。マンモスにも種類がある。俺は詳しくないが、ケナガ

マンモスは日本では有名な種類なんじゃないかな。

でもフルで言うのと長いし、ケナガって女の子に言うのは失礼な気がする。カコは良

いのかもだけど。

俺はマンモスと普通に呼ぼう。

それにしたって、ちよつと抵抗あるけれどね。マンモスって言葉は何かの表現で使われるから。デカい的な意味で。

「研究所で、サンドスターで生まれた子」

カコに言われた。まあ、所内にいるんだし そうなんだろう。ハイライト無し。

「最初、ココがどこなのか……私は なんの けもの なのか分からなくて。 だけど、ココにいるヒト達が教えてくれました」

微笑みながら、説明するマンモス。 大人しさを感じさせる、温厚な子のようだ。しかし……なんだ。 妙な気まずさがあるんだよね。 俺の中で。

ヒトの勝手に復活したワケである。 自室のニホンオオカミもそうだから、今更ナニ思ってるのよという話だが……彼女のには大丈夫なのだろうか。 生まれた事を喜んでいるようにも感じるが……聞き辛い。

「そうか。俺も教えたり、教わったりする立場だから、その喜びは 何となく分かるよ」

取り敢えず、適当に濁していこう。 EXのフレンズには、デリケートな話かもなワケで……。

「牙の一部に、サンドスターを当てる事で生まれた」

ちよつ、カコさんや！ 容赦なく言い始めたけど!?

何故か俺がアワワワしながらも、マンモスさんをチラ見。

大丈夫かな？ 大丈夫かな!?

「はい。 永い時間を氷の中で眠っていました」

「おうふ」

ほらみろ。 どころなく寂しい話になってきたじゃない。

会えた奇跡に万歳するつもりが、これではお通夜モードじゃないか！

「ここは第三者な俺が、場を切り替えなければ。」

「ほ、ほう。 牙……それは凄い！ 博物館や写真で見た事があるけど、立派だよな。」

「実験では状態の悪いものが使用された」

「おいしい!? カコ、お前空気読めよ！ マジKY！ あつ、これはEX語か！

「状態の良いものは、外界の研究所や組織から反発があつてパークに持ち込めなかつたの」

ええい！ 政的な話をするんじゃないよ、このエロ乳博士め！

「牙、というと。 マンモスが発掘される永久凍土には古生物学者以外にも、マンモスハンターが訪れる。 象牙の代わりにマンモスの牙が高値で取引されるため」

そんな情報、いらないます。 というかイヤラシイ話をしてんじゃないよ、カコオ！

「あ、あの……あんじゆ　さんが荒ぶってますけれど。　大丈夫ですか？」

「大丈夫。　荒ぶる気持ちは分かる」

ホントかよ！　　ならこの話題変えようぞ。

「あんじゆは、自身も発掘調査に行きたい……のだと思う。　私もそうだから」

「なあ、カコ。　自分の気持ちと俺の気持ちと同じとは限らないからな？」

思わずツツコミを入れずにはいられない。　発掘調査は興味あるけど、今の気持ちは別にあります。

「カコ博士。　あんじゆさん、こう言ってますが」

「大丈夫。　照れてるだけ」

「そうなんですか？」

「もうソレで良いッス」

グレた。諦観。諦めの境地だよ。

ナニ言っても改善しない事もある。時に諦めも大切だと学ばされた。無駄に精神を削る必要はない。

マンモスも、特にカコの会話を気にしている風でもない。そこはフレンズ故か。それとも研究所で既に学んだのか。

ストレートで平気か。変にジタバタしない方が良かったのかも知れない。疲れた。俺も普通に話そう。

「……………はあ。それで、マンモスはどんな理由で復活したんだい？」

「皆の長年の夢。好奇心や興味から」

マンモスの前でソレを聞き、言う俺とカコである。当のマンモスはウンウンと頷く。悲しみや怒りはない。

フレンズらしいというべきか。最初からこうするべきだったかなあ……複雑。

「夢？」

「そう。私も含まれる。マンモス復活、本土でも聞いたこと、ある？」

「まあ」

イギリスの研究所によるクローン羊「ドリー」の技術と同じような方法を使って、冷凍標本から状態の良い細胞を入手して、復活させようという考え……だったか？

「研究は苦難の連続。絶滅危惧種である近縁種、アジアゾウの卵子や母体が必要となることや……あんじゅ？」

うっ。単語に反応する俺の身体……ッ！

なんとという軟弱者か！ まさか俺は言葉でも反応するM体質なのか!?

「あんじゅさん、身を屈めてます。お腹、痛いのですか!？」

「違う。大丈夫だから、その。続けて」

「へ、ヘンタイ！ 変なコト、考えないで!」

「カ、カコが変な事を考えるなよ!？」

「ヘンなコト?」

「マンモス。君は清い心でいてくれ」

「は、はい……?」

おのれ馴染みめ。言葉責めは求めてないんだよ。良いから話を進めようぞ。

「あー、とにかく。苦難の連続だったワケだ」

「……そう。綺麗に細胞核を取り出せない、サンプルの状態が良くない、絶滅危惧種のゾウを母体に使えない等」

「その方法だと動物愛護の観点などから、確実に世界中のヒトの理解を得られないよな」

「うん」

それに、とカコ。

「たとえ蘇らせたコトが出来たとして、マンモスが生態系にどんな影響を及ぼすのか誰にも予測が出来ない」

「ふむ」

俺は頷いて見せる。

言っていることは、何となく分かる。

生態系は とても複雑なバランスで成り立っている。そこに現在の地球に存在しないマンモスが一頭蘇っただけでも、思いがけず大きな影響を出してしまうかもしれない。

「私が研究所にいるのも、それが理由だと聞いています」

と、ここでマンモス。 どうやら、前に何かを聞いた様子だ。

「例えばフレンズの姿であっても、外の世界に放つのは少し待って欲しいと。自然だけでなく、ヒトの世界にも強い影響が出ちゃうからって」

「ヒトの世界……カコ？」

ここで、それもフレンズの口からヒトの世界が出てくるとは。ロクなモノじゃない予感がするが、ここまで来たら聞いておこう。

「マンモス復活は、発表していない」

「それ、部外者の俺に言っただけで良い系？」

また面倒事に巻き込まれるのは勘弁だぞ。パークの危機の前に俺の危機再び。

「あんじゆなら良い。パークを愛しているなら、悪い事はしないでしょ？」

「フレンズを悲しませるような事はしたくないさ。だが、ヒトがパークで間違えた道を行くんだと判断するしかないようなら……俺は止める」

——ヒトの再現とかな。

俺の偏見や価値観を押し付けるようだが……上手く表現出来ないけれど……この手のモノは、凄く嫌な予感がするから。

カコと俺の間で険悪なムードが漂う。それも間に挟まるマンモスがアワアワして四散していった。

「わー！　わー！　特別深刻な話じゃないですよ！　ね、ね!?　カコ博士っ

！」

「……………そう。あんじゆなら、たぶん深刻じゃない。関係ないポジションだから」

「関係ないだあ？ 俺は臨時とはいえパーク職員だ。直接の管轄じゃなくても、人心が離反するならば、カコでもミライでも……俺は止めつぞおい」

「だいじょぶですって！ カコ博士、取り敢えず おはなし〜！」

「……………分かった」

「……………聞こう。すまん、熱くなった」

「(こちらこそ、ゴメン)」

なんだか、可愛くも必死になっているマンモスを見ていたら落ち着いてきた。

ふむ。まるで親の喧嘩を止める子のようにじゃないか。いや、経験はない。あく

までイメージだ。

「マンモス復活は、語弊がある」

「ふむ」

「今話してきた細胞からの話とは別に、今回は超常物質サンドスターによるもの。

アニマルガールの身体はけものプラズムによって構成される。絶滅種の身体や

架空動物は特に高い。マンモス……彼女の場合、けものプラズム85%と高い」

「それが問題なのか？」

「そう」

はて。サンドスターだと問題になるのか？

困難なマンモス復活を、サンドスターにより簡易的に行えた。これがマズいのだろうか。

「前にも話したと思うけど、サンドスターにより生まれる子は、ヒトの姿形をしていく」

「本来の姿じゃないな」

「そう。姿形。アニマルガールとして観察は出来ても、けものとして観察するのは意見が分かれる。アニマルガールはヒトのイメージするモノが、妄想が反映されるのが分かってきているのもある。何故かは分からないのだけれど……その分からないも含めて正確性に欠ける。変に《分からない》を発表すると多くのヒトと世界を混乱させ、危険に晒す事から、彼女の存在を伏せている」

あんまりな話だよな。

ヒトの夢とやらに付き合わされて、このパークに生を受けて。

挙句にだ。都合で存在しないようにしなければならぬとか。勝手過ぎる。

「——けれど」

言葉は続く。

「いつまでも研究所に閉じ込める気はないの。皆も同じ考え方。外を知らずに、

友を作れず孤独で終わるなんて、可哀想だから」

「そうか。良かったなマンモス」

「はい！　いつか、外に出られる日を楽しみにしています！」

カコ達がそう思うなら、きつと出られる日が来るだろう。それも、遠くない未来で。

第2世代の時代がそうだと思う。絶滅種も普通にフレンズとしてだが……外で他

のフレンズと共に生を謳歌おうえか出来る時代。

いつか、来る。皆で笑い合える時が。

「国際自然保護連合・種の保存委員会によって立案された《保全のための絶滅種の代用種作製に関する基本理念》の理に反するの……色々な問題があるけれど、きつとなんとかなる」

「お、おう。俺も出来る範囲で協力するよ」

よしよし。話は良い方向に向かっているな。

基本理念とやらは分かんが。

「あれ」

こころでふと、疑問が湧いた。

「なあ、カコさんや」

「どうしたの？」

「ニホンオオカミ、絶滅種だよな。外に出てるのは良いのか？」

「……………ニホンオオカミは、ニホンだから……えと、じこくりよー的な感じ」

で、うん！　大丈夫！」

「ホントかよ!?!」

研究所、結構ガバくね？　ザルじゃね？

ココに来て、結構マヌケな話で不安になってしまう。

ほら！　マンモスを見てみる！　始めて困惑した、苦笑いの表情を浮かべているぞ！

俺は頭を抱えた。　パークでは、EXの　けもの　も、ヒトも大変なのだ。

剣齒虎は外に焦がれる。

「初めまして。 私はサーベルタイガー。 そんなに怖がらないで」

そう言って、 招き猫グーで挨拶をする猫なフレンズが目の前に。

古生物を代表するマンモスのフレンズと出会えば、お次はサーベルタイガーときたわ
!

まさかの豪華なラインアップに、興奮不可避だよ！

この連続攻撃による感激は、幼少の頃以来だ。 カコに出会い、短期間でミライや
菜々と出会えた、あの日々を思う。

有名なフレンズやレアっぽい子との連続した出会いというのは……心踊るものがあるね！

「大丈夫だ！ 感激に打ち震えていただけだから！」

「そ、そう」

ちよつと引かれたが許せ。興奮が冷めやらぬ。

いやはや。カコの話からサーベルタイガーは出てきてはいたが、こうして会えるのは感激だからね。

例によつて絶滅種だから、目にハイライトがない。

だけど。こうしてみると……うん。虎というか猫ほいというか。可愛い。

フサフサでしなやかな尻尾とか ケモ耳とか。

名にある大きな特徴である牙の「サーベル」部分は、髪型にて表現。もみあげ部分が白色で牙のようになっていいる。

だが、それだけではない。腰には帯刀……鞘付きサーベルが収まっている。

これはヒトが与えた武器ではない。フレンズ化に伴い、一緒に形成されたものらしい。

改めてサンドスターとは謎である。もう何でもアリな気がするんですがそれは。

だからか。SSプリンターなるモノがあるのは。ホント、どういう仕組みなんですかね。

火口のフィルターも作れる気がしてくるよ。作るのは研究員任せだが。

「彼女もマンモスと同じ経緯。牙の一部に、サンドスターを当てたら生まれた」

「外界のコトは あまり分らないの。 良かったら教えてくれると嬉しいな。 ええと、 お名前を聞いても？」

「おつと失礼。 俺は杏樹あんじゅだ。 いちおうパーク職員だよ、 よろしく」

片手を軽く上げて挨拶。 そこはヒト式。 招き猫グーをやるうかとも思ったが、野郎がやつてもキモいと脳内会議で却下した。

理由は、それこそ引かれるから。 これ以上、調子に乗つてると危険だ。 初リカオンの時みたいになるのは勘弁な。

「パーク職員？ 服装からして研究員ではなさそうね。 飼育員さんかしら？」

おう。 食い付いてくるね。 俺の事を知らうと、仲良くしようとしてくれているの
だろう。 嬉しいね。

そして職員や服装の概念を理解している様子。 ある程度、教育はされているのだと
伺わせる。

話しやすいのは良い。 自然で暮らす野性味溢れるフレンズほど、文明的な話は困難
だからな。 助かる。

「いんや。臨時職員だよ」

「りんじ?」

とはいえ。分からない事も多いか。

臨時という言葉聞いて、疑問符を浮かべたし。

外界のコトを知らぬと言っていたのだ。仕方ない。教えてあげながら話をしよう。

「定まった管轄にいないんだ、俺。必要に応じて飼育員だったり、警備員や接客員、調査員の手伝いをするんだよ」

「スゴいのね。いろいろなコトが出来て」

微笑みながら、褒めてくる剣齒虎。きつと意味が分かつての発言。かしこい。

そして愛想とかじゃなくて、フレンズらしい、本当に純粹な気持ちから出た言葉。

確証は無い。でも分かる不思議。あかん、それを感じたら恥ずかしくなってきた。

それに劣等感も同時に湧いてくる。申し訳ない。

「い、いや……本職の方とは、大きく劣るから。実際は、足手纏いにならないようにするのが精一杯というか」

そうボソボソと、自信なく素直に説明する。事実である。俺なんて猫の手な感じだ。猫のフレンズじゃないが。いや、フレンズの方が余程役に立つ。身体能力高いから。

俺の弱さを見せる……女性に。なんと情けない男であろう。そしたら、そんな暗さを察してか。隣のカゴが褒めてきた。恥ずい。

「あんじゅは、凄いいよ。職員はみんな褒めている、それに今は預言者……その、英雄」
ボソボソ言って聞き取れなかったが、褒めてるのは分かる。でも剣齒虎は聞こえた模様。そこは能力の高いフレンズ故にか。興味津々って感じに、俺に訪ねてきた。

「よげん？　ヒーロー？」

どこかのグループ名じゃ、ないよな。

英雄か。カコめ。昔の事を思い出したか。更に恥ずかしいじゃん！

取り敢えず、預言の話の方でいこう。英雄は過去の出来事なのだよ。というかアレ、間接的に偶然生まれた結果だし。

だからって預言の話も、中二病というか十分恥ずかしい話なんだけども！

「いや……なんだ。俺はパークの未来を案じているって話さ」

「スケールの大きな話ね」

こんな話を、それも太古の けもの のフレンズに言うのは不思議な感じだなあ。

フレンズ化に伴い、かつていた過去の時代を想う事はあれど、未来について彼女達は何を思うのだろうか。

というかその前に。言って良かったのかなコレ。ストレートに「未来を知ってる

ぜ！」とは言っていないけれど。 どうか自信持つて言えない。 不確定要素たっぷり過ぎて。

剣歯虎をチラツ。 微笑んだままだから、大丈夫か？

次にカコをチラツ。同じように にこやか。大丈夫そうですね。このまま流
してしまおう、そうしよう。

「まっ。将来起こり得ると予想される災害に対策を講じて貰うべく、俺は研究所を
訪れたってワケ。 なっ？ カコ」

ここでカコに同意を求めた。これ以上言うと、余計な混乱を招く。
ある種の秘密保持の為。この意図は、カコにも分かってくれるハズ。
ここで同意を得、話を終わらせる方向に持っていくのだ。

「そう。 あんじゅ は、パークの未来を知っている。 守る為に動いてくれている」
「おいしい!?!」

思いつきバラしてんですけど副所長様！ 大丈夫なのそんなんで!?!
それとも、そこまで重要な話じゃないのかい？ 相手はまだ研究所暮らしのフレン
ズだろうけど、将来的に教えたらアウトじゃね？

「知っている？」

「あー、いや。ちょっと間違いだよ……たぶん、こうなつちやうなあという予想もつと言うと妄想。当たるかどうかわからないんだ。気にしないで」

ははは、と乾いた笑いで誤魔化した。隠し事をしているのは明白な態度、相手に失礼なのは承知している。

だが、この話はカコ含む研究員からしたら荒唐無稽。半信半疑。それでも取り合ってくれているのは有難いが、おいそれと情報を広めるべきではない。

パーク全体や外界に知れたら大混乱に陥る危険が高い。それとカコや俺。陽の光を浴びて生きていけなくなる事になるのは勘弁なり。

「ううん。気にするわ」

とは、サーベルタイガー。

そうか。そうだよなあ。気になつちやうよなあ。本能のウエイトが高いのもあるか。

でもね。好奇心は猫をも殺す。彼女を危険に晒すワケには……。

「こうして会えたもの。困っている事があるなら助けたい」

結構、真面目に協力を申し出られた。嬉しいと想う。嬉しいのだが、これ以上ヒトに付き合うのも……。

「もつと貴方の事を、世界を知りたいの。それに、友だちを助けたいと思うのは間違いないじゃないでしょ？」

——郷愁を覚える。

けものフレンズ、か。アニメの最終回を思い出した。

「あんじゅ。いつか彼女も外に出る。その時でも良い」

「それとも迷惑だったかしら？」

カコや、サーベルタイガーから追撃が。うむ……ヒトの勝手に振り回されているんじゃないかと考えると、引け目を感じてしまうよ。

だけど友だちというワードを用いられてはな。ココは意思を尊重するべきだ。役に立ちたい、助けたいという気持ちは嘘じゃないハズなのだ。

会ったばかりのヒトに友だちというのも、フレンドリーが過ぎる気がするが。互いの性格を把握してないから。

とはいえ、断る理由はない。やんわりと受け取る、それが最善じゃないかな。

「迷惑じゃないよ。じゃあ……なんだ。その時は助けて欲しい」

「ええ。喜んで」

ニコリとされた。笑顔が眩しいね。

「たくさん、たくさんの事を知りたい。今のパークを、島を。外の事を、世界のことを。だから必要なら守るわ。このチカラは、きつとその為に与えられたから」

腰にあるサーベルの鞘をひと撫で。それは大切な象徴だ。おいそれと使うものじゃない。

だけど、必要とあらば使うだろう。それはセルリアンか、それとも――。

所長とのやり取りの後からか。 どうにもネガティブな思考が抜けない。だから言ってしまうのだ。 ヒトの世界は輝きだけではない。 その分、影があるコトを。

「のけもの。 この世界には いるんだよ」

それは曖昧に。 だけど存在するナニか。セルリアンだったり、或いは。

「えっ？」 「あんじゅ」

そんな顔をするなよ……ふたりとも。輝きを奪うつもりはない。 俺はな。

「……………セルリアンっていう危険な存在がいるのさ」

だから共通の敵の名を出して誤魔化した。 こんな時、セルリアンの名は便利だよ

ね。

ヒトの世界でも、共通の敵がいるコトで纏まりがつく事がある。学生頃は……ああ。俺が皆の敵だったのかも知れないな。役に立てて光栄だ。畜生共めが。

「ああ、セルリアン。知ってます。教えてもらいました。写真も見ましたよ」
「そうか。安心したよ」

その写真。ヒトが写ってたりしません？

「なら、間違えないな」

万が一は、助けて貰えるかな。

或いは刺されるか。

いかな。俺は何を恐れているのだろう。未来か、それともけものか。

いや……フレンズを悲しませること、失うことか。

先輩の名は。

白く清潔感溢れる研究所内。昔と未来の狭間、そのふたつを今に繋いでいく重要施設。

そんなジャパリパーク動物研究所内を、カコに案内されてEXフレンズと出会っては笑顔とヒトの業の間で悩み、様々な想いを馳せていく。

浪漫と郷愁に似た何か。好奇心と不安。心配と希望。それらを抱えて、俺やカコは歩き続ける。

かつて この星で生きた、彼女たちの物語をもういちど。そして、俺たちヒトの物語を、この奇跡の島、ジャパリパークで共有出来たら……それは素敵な話だと思う。

不安や心配はある。ヒトは彼女たちほど「フレンズ」じゃない。それでも。みんなの笑顔を――。

そんな想いの中、とうとう かの パイセンと出会う事になった。

PPPからは「ジャイアント先輩」と呼ばれて慕われていたという……アニメだとアライさんパートにて名前が出て来た、あのフレンズだ。

「よっ！　会うのは初めてだな！」

別の休憩スペースにて。　フランクに話しかけてきたのは幼女……じゃなくて、ペンギンのフレンズ。　その名も。

「ジャイペンじゃないか……！」

ジャイアントペンギン！　略してジャイペンだ！

マジか！　既にフレンズ化していたとはなあ！

例によって目にハイライトが無いが、その憂さを感じさせない性格は、ヒトによっては話しやすい。　名前に反して、幼子に見える背丈だが……フレンズ化は条件含めて謎に満ちている。　それと頭に着けている旧式ヘッドホンには「PPP」の名が確認出来ない。　まだ関係を持っていないという事か？

可愛いから良いけど。　可愛いは正義。

「……………はっはっは！　　ジャイペンと呼ばれたのは初めてだよ！」

「そうなのか。 あ、いや、すまん。 いきなり失礼な事を言った」

「いいっていいって！ そんな感じに、気楽に話そう！」

つい興奮してしまった。 対してジャイペンはケラケラと笑う。 守りたい、その笑顔。

いかんな。 そのうちミライさん状態になってしまう。 それは避けねば。

だがジャイペンかあ。 後々の代まで、フレンズ化が解けない状態で生きていくのだろうか。 PPPとも関係を持っていくのかな。 現状、持ってなさそうだけど。

だけど この先は分からない。 彼女が外に出て、様々な事を見聞きし、感じ、想いを抱いていく。 そう考えると、実は知識が深そうなところとか、貫禄があるところとか納得がいくというもの。

貫禄はまあ、普通に古代に生きた化石ペンギンというのものもあるだろうけども。

「改めて。 ジャイアントペンギンだ！ よろしく！」

「俺は杏樹あんじゅだ。 パーク臨時職員をやっている、よろしく」

はい握手。

ちよつと身体に対して大きく感じる、長袖に包まれた大きな手羽……じゃなくて手？
を出されたので握る。ふむ。握手の概念を知っているのか。勉強したのか
な。かしこい。

さて。触れた感想と致しましては、服の下の骨格はヒトの手に感じる。手羽……
手先まで覆う長い袖は大きい、内側は幼女サイズということか。そこはフレンズと
形容して良いのかな？

これが都市部だったなら「はい事案」という事で逮捕されちゃう。されちゃうのかよ
悲しいなあ。

「彼女もまた、マンモスやサーベルタイガーと同じ境遇」

「おっ！ アイツらに会ったか」

カコの説明に、明るく反応するジャイペン。

マンモスとサーベルタイガーを知っているのかい。いや、知らん方が変なのか。

所内を自由に動ける風だったからね。フレンズ同士の接触もあるだろう。

たぶん、ジャイペンとマンモスの生きた時代は違うのだが、こうしてフレンズとして
話せるのは、何というか不思議な感覚。

ニホンオオカミも、そうだったのだろうと思う。好奇心が強過ぎて、所内に迷惑を掛けていた為に出されてしまったが……。

「ニホンオオカミは、元気かー?」

うおつ。心を読んだかジャイペン?

丁度、彼女の事を考えていたタイミングで言われて驚いたぞ。

偶然かとも考えたが、ジャイペンのニヤニヤした顔を見ると……狙ってやったか。それとも俺の顔が面白い?

「あ、ああ。元気も元気。元気過ぎて困るほどさ」

「そりや良かった。でもさー、まよねえず 事件とか大変だったろー?」
「ッ!」

なん……だと。

ナゼ知ってるん。俺の悪夢のひとつである、マヨネーズ事件を……!

彼女も所内から出る事は、まだ出来ない筈。となれば誰かから聞いた事になる。

秘匿する話じゃないのだろうけど、あまり情報は広げて欲しくないなあ。イタリアオオカミが俺に言った事のように、誤解の素になっていくからさ。時間と伝達の間が空くほどに。

俺の驚愕に染まる顔を見て、しっしっしっ、と今度は大きめに笑われた。やはり面白いらしい。側から見れば幼女に、いいようにされている図である。俺ってザコい。

「カコ博士から聞いたんだ」

「カコオ!？」

報告相手が直接バラしてました。いつか覚えてろよ。

「周知の事実。私からじゃなくても、管理センターから広がってる」
「聞きたくなかったわ、その事実!？」

カコからは衝撃発言。知りたくなかった。

管理センターは、俺を管理したいのかピエロにしたいのか、どっちなん？

前世同様、管理にうるさい昨今。簡単にホイホイ情報を漏洩させて良いのでしょーか。いや、良くない。良くないと言つて。

恥ずかしくて外に出られなくなっちゃうじゃん。被害が出たら訴えてやるう。そして敗訴する、負けちゃうんだよ。

「いやいやー、話には聞いてたけどさ。あんじゅは面白いヤツだなー！」
「面白くないツス」

しっしっしっ。からかい上手のジヤイペンさん。笑顔に騙されそう。

全く。礼儀正しい子の後だから、余計にインパクトが強い。悪い子じゃないのは分かるだけどね。

可愛いのも分かります。あ、ロリコンじゃないです。ロリババの趣味もないです。

「とうるか話に聞いてたの？」

「カコ博士がよーく、話してくれたよー？」

「カコオ!?!」

ジャイペンがニヤニヤしながら言うもんだから、俺はカコに向き直る。俺は何度幼馴染にツツコミを入れれば良いのか。いや、変な意味じゃなくてね。

そんな幼馴染は、目を逸らしつつ頬を染めて、

「だ、大丈夫。問題ない。変なコト、言つてない」

ナニそれフラグ？　今までの経験からして怪しいんだけど。そも、情報を漏らすんじゃない。

「けえきやさん聞き齧り。ケーキ屋、ケーキそのものが何かはまだ良くは分かかってない。に通報されたり、オオカミニホンオオカミが研究所にいたので。そういう種がいるのは学んだに襲われたと聞いたー。外の生活は楽しそうだなあ？」

「楽しくねえよ!?!　問題大アリだわ!?!」

2人にツツコミを入れる羽目に。自分にしては器用に出来た方である。誰か褒めて。

そりゃ、元を辿れば俺が悪いんだけどさあ。ヒトの失敗をネタにされ続けてもねえ

？

それに、向こうだって非があったんだよ。天秤にかけたら、悪いウエイトなら向こうに傾く。

なのに俺ばかり責めるんじゃない。天誅を下したいのはコチラである。男の職員というのもあるのかも知れないけど。差別はんたーい！

「まあまあ。そうカツカせずしに」

「あんじゆ。カルシウムを摂取した方が良い」

研究所でソレはネタなんですかねカコさん。まあ、カコのギャグは良いとして……あ、顔が真顔なんで、ギャグではなさそうだね。ギャグじゃないよ。

「分かったよ。昔の出来事は美化出来るから良いけどな。今じゃ思い出に近しい」

「……………思い出かい」

あれ。ジャイペンが目を細めてしまった。いかん、彼女には地雷だったか？

古代を生きた子にとっては、今でいう昔は帰りたくも帰れない、懐かしい故郷なのかも知れない。

俺の場合は……前世かな。だが前世に戻りたいとは思わない。今の方が楽しい。

それは俺個人の話になるが、彼女にも「楽しい」を感じて欲しい。

ヒトが跋扈しているパークだが決して。この世界も捨てたものではないんだよ。

「恐竜も——」

「PPPPって知ってる？」

話を遮るように、彼女の先輩……と言って良いのか分からんが、そのグループを口にする。

彼女と将来、関わりがあるフレンズといえば、有名どころでPPPだろうから。

きつと興味を持ってくれる。

「ハハハ」

知らなかったか。研究所で、その手の話は聞かされなかったのだろう。

なに。今教えてあげれば良いこと。彼女にとつても、俺にとつても、これからなんだから。

「pen^{ペン}guin^{ギン}s パ^パperf^{フォー}orm^マance プロ^ロject^{ジェ}の略」

ここまで言えば、彼女も分かる筈。かしこそうだからな。して、それは当たる事になる。

「ペンギンのアイドルグループか？」

「(名答)」

やはり かしこい。 いや、賢い。

元の けもの の知性は知らぬが、フレンズとしての彼女は、知りたい気持ちや考えるチカラがある様子。

俺にも、チカラがあれば赤点を回避してカコと大学に行けたかも……いや。過ぎた事を悔やんでも仕方ない。

今を生きねば。 今も悪くない。 本土では高校止まりだったが、カコ達とはパーク

で再会出来たのだ。

他にもこうして、所内で様々な話とフレンズと出会えている。素晴らしいじゃないか。前向きに行かなきゃなど、俺は話を続けた。

「現生ペンギンによるアイドルグループ。確か今のメンバーは、フンボルト、コウテイ、ジェンツー、イワトビ。最近はロイヤルも入ったんだったかな」

菜々やミライからの情報を思い出しながら話を進める。PPPライブは見に行かなかったのだが、菜々やミライからのメールで教えて貰った事がある。

とすれば、今のメンバーは漫画版の、単行本イラストの通りだろうか。昔の記憶は曖昧だけど、たぶんそう。

アニメのマーゲイのセリフ的に、初代は4人だとか何だか言っていたような……俺の知らないパークになっているのだろうか。

それとも長い時間で情報が間違えているのか、ロイヤルの加入が記録に残されていないのか。漫画版ではロイヤルは出なかった気がするし。

或いは記録に残したんだけど、紛失したか。色々考察出来るが真相は闇の中。ここが同一世界と見なして良いのかも分からない。取り敢えず、今考えても仕方ない。

なお漫画版の通り、菜々はイワトビと知り合いである。その幸運に あやか
りた
い。

して、漫画版の通り音痴を改善したいトキのアドバイザーとなっていたそう。

その後の秋の音楽祭に、トキはシヨウジヨウトキと参加。素敵なハーモニーを奏でたそうなのだが……ドヤアなシヨウジヨウトキが暴走したとかで、音響兵器によるテロ会場と化してしまったとか。

菜々とトキ達には悪いが……正直に思った。いなくて良かったと。

「ほうほう。私にとっては後輩にあたる子たちが色々やつてるワケか。それは気になるな」

「だろ? ココを出たら、見に行くと良い」

微笑みと言える、柔らかな笑顔になるジャイペン。さっきまでのイタズラっぽい笑みとは違うもの。

これで今と未来に希望を抱いてくれよな。俺も少し抱いている。というか抱かせてます。他力本願です。

「そうだなあ……その時はあんじゆ。案内してくれよー」

「へ？ ナンデ？」

アレ。何だか面倒臭そうな話をしてきたぞ、この幼女。

「色々知ってるみたいだしなあ、何か面白い話も聞けそうだし。それに泊まるトコとかさ？」

通報待ったなし。それは面白い話じゃないんですが。

あとジャイペン。また悪戯っぽい小悪魔な笑みになってるね。もうワザと言っ

てるよね？

「ムリッス。管理センターとおまわりさんのお世話に なりたくないんで」

「あんじゆなら大丈夫だって！ 過去を美化出来るんだから！」

「パークの犯罪史と黒歴史に載りたくないわ！ 美しさのうの文字もないから！」

勘弁してくれ。ニホンオオカミだけでも、「うわあ」な時があるのに、揶揄い幼女ま

で絡んだら収集つかない。　頭がパツカーンしちゃうよ。

「もう遅い……かも」

カコが俯く。　諦観するの止めてください。　既に起きた事は仕方ないけど、この先増やしたくないという意味で、俺は言っているのよ。

「そんじゃー、未来の話になるけど」

心を再度読んだか知らんが、ここでジャイペンが切り返す。

「あんじゅ」

言われて顔を見た。　打って変わり、真顔。　ふむ……質問かな。　答えていこう。

「未来のパークを知ってるんだって？」

「曖昧に」

預言者の話も聞いていたか。まあ、今頃驚かない。ジャイペンとの会話から、そういう情報は取り込んでいると感じたから。

ここは素直に答えていこうかね。なるべくだけど。

「フレンズとヒトの未来も？」

世代的な意味だろうか。だがフレンズもたくさんいる。俺が知ってるのは極々一部。

「……曖昧に」

そう答える。正直に。

「もうひとつ質問いいかな？」

何だろう。答えられるものかい？

「お前、この時代の……いや、この世界のヒトか？」

「勘の良いガキは嫌いだよ」

思わず口に出た。それは認めたと同義なものにな。

カコは目を開いて絶句している。一方でジャイペンはしっしっしつと、笑い始めた。

まるでナゾナゾに答えられた、無邪気な子供の様に。

……まさか、フレンズに、このタイミングで暴かれようとは。いや、ヒトとは

違うフレンズだからこそ、その思考が出来たのか。

して認めたかのような発言をした俺は悪いのだが。

ヒトから看破される事はないだろうと。だからフレンズにも分からないだろうと考えた俺の思考……どこまでいっても甘いものだ。

それを痛感する。して、今後の対応はどうしていいこうか。

「あんじゆが……この世界のヒトじゃない？」

ほら。カコなんて、困惑している。

全く。面倒事とは何故増えるのか。俺も悪いのだと思いつつも、取り敢えず口を開かねばな。

それとジャイペン。フレンズでありながら彼女は危険だ。ヒトとは別のベクトル、チカラとは違う方向で。

パイセンの戯言。 或いは助言。

「……………なーんてな。 そんな事があるとでも？」

ジャイペンに核を突かれた拍子に、思わず認めるかの様な発言をしてしまった。

お陰でジャイペンに喜ばれ、カコを動揺させてしまう。

取り敢えず、茶を濁して元の平穩を取り戻そうとテキトー言ったが、

「誤魔化さなくて良いぞー。 なに、安心しろ。 お前の素性をバラしたりしないさ」

「ツー！」

コレはダメですね。 ダメなのです。

預言の話を知っている様子から、手紙の事をも知っているのだろう。

であれば。 手紙に書いてない内容も知っていると見るべきか。 そして、その内容

が漏れたら都合が悪い事も。

だけど、どこで時間軸が異なる、世界が異なるヒトだと言えたのだろうか。

「最初は変わったヒトだと思ってたんだがなー。未来を予測するならともかく知っているなんて、フツーじゃ有り得ない。大方 妄想の類だと思った。研究員も、初めは そう言っていた」

だが、と指……手羽を指してきて、

「まだ研究所しか知らない情報すら書いてあつたら、な？」

ニツと。俺を追い詰めるように語りを続けるジャイペン。

……………確かに。俺は、まだ公開されていない情報を書いた。開発段階のラツキービーストの事等をな。

だけど、それだけで《この世界のヒトか？》という疑問には到達出来ないハズ。未公開の情報が書いてあつたから、多少の信憑性は持つだろうが、情報漏れの可能性だつてあるんだ。時間軸は関係ない。なにより未来まで分からん。

俺は反論した。見た目幼女相手だが、油断ならん。俺の平穩を乱すなよ……。

「予知夢みたいなモンだ。 たぶん、こういうのが開発されているんじゃないかなっていう、曖昧なもの。 未来もそう。 皆やジャイペンの言う通り、妄想さ」

「カコ博士の両親を助けたのも……今じゃ昔の出来事だろうけど、当時は知っていたから？ サンドスターの影響かなあ？」

そこまで知ってんのかよ。 漏れどころは、予想出来るけどさ。

チラリとカコを見る。 表情は不安そうだ。 信じたいのに信じられない感情で、葛藤かつとうしているかのよう。

たぶん、カコがジャイペンに話したんだろう。 今とは真逆に、嬉しそうに。

話さなければ、知らず平和に過ごせた保証はない。 ジャイペンに限らず、いつかは誰かが核心に迫る。 だから責める気はない。 悪いのは俺なんだ。

「予知は……そうかもな。 サンドスターの影響かも。 だけど曖昧だったよ。 ジタバタしてたら、偶然救えたんだ。 でも、だからってさ………時間軸は兎も角、別世界のヒトだってならなくない？」

恐怖か怒りか。声が震えていた。見た目幼女相手に、なんちゅービビリ。いんや、認めよう。怖いんだって。心の中まで見透かされたような、そのハイライトのない目が。純粹で無垢そうな見た目の、同時に優しそうで残酷な言葉が。

「そうだなー」

態度を変えて、此方の言い分を認め、背を向ける。して引き下がるような事を言う
ジャイペン。

論破したか、危機を脱したと油断した刹那、

「という事みたいだよー、カコ博士?」

と見せかけてからの、クルリとターン。再びのハイライトの無い瞳は……今度はカコに向けられた。

それは逃げられないぞ、と言ってるかのよう。傍から見えるその暗さに、吸い込まれそうな錯覚さえある。

俺はまたも余計な情報を言ってしまったらしい。

……逆か。 ナニかの情報を引き出された。 そしてそれに気付くのが、遅かった。俺って本当にバカ。

「ど、どういう事だよ」

それは具体的に分からない故に。 此方の劣勢を、敗北を認めた、相手のペースに持つていかれるしかない発言しか、俺には出来なかつた。

それに答えてくれるように、カコは口を開く。 俺程じゃないにせよ、僅かに震えた声で。 馴染みの俺じゃなきゃ見逃しちゃうね。

「予知の話は……ジャパリパーク、サンドスターによる影響だつて考えられた。 でも、島の外では確認されてない」

……あ。

しまった……！ 当時、サンドスターは関係ないじゃん……！

マジかよ、カマかけられた……！

カコの両親を救つたのは昔話、それも本土での出来事。 ジャパリパークはおろか、

サンドスターはない。

だって、島の外でサンドスターは当時から今現在に至るまで確認されていない。この世界では。

完全にやらかしました俺。後悔先に立たず。

「これでサンドスターによる未来予測って考えは、消えたねー。島の外にサンドスターは今んとこ無いんだろ？ 超常物質で なんでも とはいかないかもね」

ぐっ……。だが曖昧だと言ってきた以上、逃げ道はある。いつもみたいにジタバタしてみよう、悪足掻きすれば何とかなる。 たぶん。

「あー、でもさ。サンドスターは未知の物質だし。外界に影響を与えている可能性もなくはないじゃん。外界にも火山はある、微量ながら出てる可能性だって……それと本来俺に備わっていた能力って可能性は？」

「まあ、ゼロじゃないんじゃないかなー。なにせ 《分からない》んだ。いろいろ妄想は出来るだろうね。元から超能力者だとか微量ながらあるかも知れないサンドスターとか」

「……………そうだろ？」

苦し紛れ。 証拠皆無。 明らかに俺が動揺して、隠しているのは見え見えだ。

確実な証拠がないのを良い事に、こんな態度をしているだけ。

もう認めているかのようなモノなのに、俺は尚も隠そうとする。

それは保身であり、今までの日常が恋しいのもあり、特別扱いが嫌なのもあるし、フレンズや……………カコ達と不仲になりそうで怖いから。

こうやって、隠している態度そのものが、不信感を持たせるものなのに。 パークを救いたくて行動したのに。

曖昧なモノを信じて欲しいクセに、曖昧に誤魔化そうとする。 俺って醜く卑怯だ。

「あんじゅ」

カコの、幼馴染の声が身体の芯まで響く。 それもどこか、責めてるように感じて

……………俺はビクツツとしてしまう。

壊れたブリキ人形のように。 首をギギギとそちらへ動かした。

この時の、俺の顔はどうだったのか分からない。 恐怖やら不安やら怒りがぐちゃぐ

ちやになつてゐる酷い顔の自信はある。

「ただど確實に分かつたのは、

「素直に話して。知つてゐることを。手紙に書けなかつたことを。私は、それで嫌にならぬ」

カコの表情。 視界が歪んでいたが、どういう表情だったのか——この先も忘れる事はない。 胸をキツく締め付けられる思いだ。

「小さい時から、側にいてくれて——」
「分かつた、話すから」

涙は見たくない。

だから続く前に、カコの気持ち全部吐露する前に、俺は両手を上げて降参。 白状する事にした。

「ジャイペンがどういう意図で、この手の話を仕掛けたのか分からん。 後で聞かねばならない。 フレンズだから純粋な好奇心からか……或いは何かの布石か。」

フレンズらしからぬ、高度なやり取りだった。見た目もあってギャップが酷い。身体能力のみならず、頭でも彼女に勝てる気がしない。

なに、遅かれ早かれ、どこかで言わねばと思っていたんだ。それが早まっただけの事。

皆が俺の事を信じて助けてくれたんだ。今度は俺が皆を信じなくてどうするよ。

「信じてくれないかもだが」

だから口を開く。 ちよつと重いけど。

「ジャパリパークの無い世界から来た転生者だよ」

そう言った。 普通のヒトが聞いたら、頭オカシイと思われるワードで。

一瞬静寂に支配される空間。 ジャイペンもカコも、目を見開き驚いている。 ジャイペンは予想していたのか、同時に口角を上げて楽しそうにしているけど。

両者、噛み砕いて飲み込むのに時間がかかっているのは共通していた。

さて……ココで俺は構わず話を続ける事にするが、俺にとって、ココが創作物の世界

だったトコから来たとは言わない。衝撃過ぎるから。カミサマのフレンズだって、驚愕するかも知れない話故に。でも嘘は言ってない。

して、未来を知る理由もそれとなく言う。突っ込まれる前に。

「——転生する時に、あー、なんだ。この世界の記憶みたいのが頭にあつてさ。

曖昧に漠然としたものなんだけど……事件が起きてパークがヤベエ的な。そんな感じ」

自分でもナニ言ってるか分からん。白状のつもりが誤魔化しながら、目を泳がせながら話しているじゃん。

自分が嫌になる。信じてくれる大切なヒトを目の前にして、こんなんで。

誰も傷つけたくないから？　違うな、保身に走っているだけだ。　　とうか……
今、カコを傷つけてる。

元凶のジャイペンを責める気はない。元凶の元凶は俺だから。隠していたのも俺だ。　　必要ないからと心で言い訳していたのだ。

これでヒーロー気取り。　　笑えてくるね。　　寧ろ笑えよ。

「それは本当なのね？」

我に帰ってきたカコの眼差しで俺氏、泣きそう。 ジャイペン助けて。 あ、ジャイペンは敵ばいからダメか。 今も悪魔的な笑みを浮かべてるし。

「う、嘘じゃないぞ」

「分かった。 でも、全部じゃない」

うっ……。 さすが馴染み。 見透かしているな。 赤点頭で天才に挑む気はないので、引き下がれる時に引き下がろう。

「……ああ」

「話せない訳を聞いても？」

グイグイくるね。 怖い、怖いよお。 これがカミサマのフレンズで、対峙していたらチビってるまでである、まだ会った事ないけど。

「禁則事項だよ、パンドラの箱だよ」

いつか話す。いつかは不明。下手すると来ないまでである、来なくて良いです。ただ今ではない。ジヤイペンもいることである。研究所内であるし、誰か聞いてる可能性だつてある。

時渡りについてなら、カミサマのフレンズか、のちに来る園長にでも聞いて。或いは図書館。それは無理があるか。

取り敢えず、何処かの電気街の物語みたいに、大惨事な世界大戦みたいなのが起きたら困るので言わない。パークどころか世界がヤバい。バタフライ効果とか、恐ろしいぞ……。

「……………分かった。あんじゅは、何かをまだ知っている。それだけで、今はじゅうぶん」

「すまん」

引き下がるカコ。好感度下がったかもね、ギャルゲーしてるつもりはないけど。

俺は対して情けなく謝るだけ。何が正解なんだろうね。

「なあ、あんじゅ」

「ジャイペン……キミは悪くないんだが、俺も お前に対する好感度が下がったぞ。その悪びれもない態度に、俺は軽くイラツとするのが その証拠。 そんな自分にも嫌悪感を抱きつつ、返答する。」

「なんだよ?」

「まあまあ……悪かったって」

片手羽を上下に振るロリババ。 ぜってー悪いと思つてないだろ、未だ笑顔だもん。

「私にもいつか、話してくれよー。 あんじゅの世界を。 どうして終わったのかを」

そりゃあ……そう言うのは、絶滅種として興味があるのかい?

俺という終わりと始まり。 しょーもない物語を聞かせてもツマラナイと思うがね。

彼女たちEXフレンズにとっては、けものとしての物語は終わったかもだが、フレ

ンズとしての物語は始まっている。

俺としては、そっちの方が興味あるんだけどな。知りたいたいののはコツチだよ。

いや……それはフェアじゃないという事か。彼女もまた、俺の持つ好奇心と同じようなモノを持つて聞いてきたのだ。

だからといって、許せる訳では……それをいつちやうと、彼女も同じ想いなのだろうか。それは分からないが……もしそうなら、これはナニかの警告……？

「あんじゅ」

ここで もう一度、真顔で言われて、

「フレンズになろうとしてくれるのは嬉しいけどさー、こういう時は難しいよな」

やはり、ナニか含みがあつたか。

「じゃー、私の本心を述べさせて貰おうかなー。ちよつと試してみたくてさ、回りくどい言い方をした。ごめん。それでね、ちよつぱり、ちよーつぱりストレートに

言わせて貰うとね……ヒトとフレンズ。 お互い悩むだろうが、絶滅しない道を、共存の道を私は望んでいる。 あんじゅの知る未来のパークやフレンズも……きつと、そうなんじゃないかな」

笑顔で言われたよ。

俺もそうでありたいと願う。 だからこそ、今を頑張ってる……つもりだ。 だけだよ。 それを言いたいが為にカコと俺をかき回したのか？ 違うな、これとは別の意図だろう。

「だからさ、パークの危機とやらに立ち向かうなら応援させて貰うよ。 でも、その為にはさ……友だちを信用して頼るところから始めるのも、ひとつだと思おうよ」

さいですか。

余計なお世話だ、と言いたいが。 まあ、そうなんだろうとも思う。 礼は言わねばな。

「ジャイペン先輩に言われると、重いな。 ありがとう」

「だろー?」

しっしっしっ、と笑う。カコと俺も薄ら笑いで返しておく。真つ暗な雰囲気は、取り敢えず脱したか。

それを察してか、ジャイペンはクルリとターン。背を見せて歩き始めた。離れていく背はシブい。

そのシブさとは逆に、俺の事をどこまで知っているのかという疑問もある。単に適当に遊び半分で別世界のヒトの話をしたのか、核心に迫っていたのか。

なんつーか……謎が多い小さな背中なのに、今はデカく感じるよ。風格つつーか、ね。

でもねジャイペン。もうちよいケアしても良いのよ。

「まっ、後は若い2人に任せて! 末永くお幸せになあー!」

「なっ……!!?」「えっ!」

そう叫ぶと、ダツシユで逃げていくジャイペン。ケアどころか爆弾投下してきやがったぞヤツ! お見合いじゃねーんだぞ!?

シブいと思った俺が馬鹿でした。今じゃただの畜生のガキだよ！
カコを見る。顔が茹で上がり、オーバーヒートを起こしそうになっている。いか
ん。俺が何とかしなければ。

「愛を囁く前に、俺の昔話をするからさ……安心して、な？」

ナニを安心するのか分からんが。取り敢えず言葉を並べてみたのだけれど、

「まず、その、お付き合いから!? あ、変な意味じゃなくてね! 最初はどうする
んだっけ!? お母さんは、えつと……まず胃袋を掴む……!？」

パニックだった。どこからかメスを取り出し、刃先が照明で、キラーンと輝く。

カコさん落ち着こうぜ、ロリババ畜生に惑わされ過ぎだよ。胃袋つて摘出的な意味
じゃないよ。スプラッターヤメテ。

ジャイペンも こうなるのが分かっていたのかね。恐ろしい子!

「落ち着こうか？」

俺はカコの平常心を取り戻す事に忙しく、互いに素性の事だとか未来や過去の事は頭から離れた。

落ち着いてみれば、それも先輩の策略だったのかも知れない。改めて偏見や偏在は良くないと感じたよ。

それから。友だちをもう少し意識しようと思った。帰ったら、その……ニホンオオカミの頭を撫でたい気分だな。

未知と撮影と。

ジャイペンによるジャイペンの為な、ジャイペンだけじゃない話が終わった後。

普通なら信用に値しない単語や言動をやらかしてなお、カコは俺に対してソレ以上の言及はしなかった。

というか、出来なかった。お見合いの時にするような言葉を、ジャイペンが投下したからだ。

なんだよ。「末永くお幸せに」って。唐突過ぎるだろ。カコとは、その、そういう関係じゃない。なりたいたとは思うけど、その、こんな男だし。

その前にパークやフレンズの安全を守らねばならないし……。

そんなワケで。荒ぶるカコを落ち着かせて、所内案内へと戻った。気まずさはあ
るんだけどね。いつか、俺の話をしようとは思うんだ。やはり隠し事してるって気
持ちは悪いじゃん？ 相手も嫌じゃん？

「あー、いつか話すよ。俺の話をさ」

「うん」

こんな短いやり取りを交わして、ソレ以上は言葉を交わさず、廊下を歩き続ける。馴染みじやなくても分かるが、この手のものは話たくないワケじゃないんだ。

お互いに何か話そうとはしているんだが、言葉が見つからない。雰囲気から脱獄するのは至難の業故の空気。ツライさん。

こんな時こそ、若干KYなフレンズが居てくれれば場が和むんだがなあ……。

都合良い時ばかり求めてるな俺。いかん。これは自分の問題、何とかしなきゃ。何か……そう。案内してもらってるんだから、それ関連の話をしよう。

「なあ」「ねえ」

被った。レディに譲ろう。

「どうぞ」「先に」

………こんな時に息ピッタリ。デジャヴすら感じるんだけど。いや、前にも

あつたよ絶対に。

「ふふっ」

「お、おう」

カコが笑ってくれた。良かった……妙な安心感を得たわ。

このままセルリアンに輝きを奪われたような神経で、所内を過ごしそうだったからね。

笑顔とは周りをポジティブにしてくれる。特に大切なヒトのは。俺も釣られて

口角が上がったよ。笑顔いちばん。

「——誰にでも、話せない事はある。あんじゅが大丈夫な時に話して欲しい。

そ、その時は私も……話すから」

カコさんも何か隠し事があるのか。柔らかな口調ながら、ほんのり朱が差してるんだけど。研究所勤務だし、秘匿事項は多い。その件ならば、それは仕方ない話だ。

話されたところで、俺にどうにか出来るか分からん。努力はするが。

「分かったよ。　お互い、大丈夫な時にな」

曖昧な。　だけど温かい言葉と表情。

ハッキリしてなくても、心地良いものだった。　あるんだな、こんな事も。

「よし！　　気を取り直していこうか。　次は誰を紹介してくれるんだ？」

明るく行こう。　道のりは長いんだから。

「仲間の研究員。　記録保存チーム」

記録保存チーム？　それはまた……パークを記録するヒトたちか。

だとしたら、撮影された、記録された資料が遠い未来まで残ったりするのであるのか。

ひよつとしたら、かばんちゃんの代にも、遺っている資料があるかもな。　ボスのミ

ライさんの映像みたいなの。

かつてあった、もうない輝きを未来に遺す。　寂しさと懐かしさ。　そこに何かの意

味があるのかと問われれば、きつと、形作ってきたものを、当時の想いを忘れたくない、覚えていたいのからなのかも知れない。

それはアルバムを開いた時の感覚のひとつ。

俺の場合、開いても集合写真以外、無いか、あっても見切れており……。

うん。 やめよう。 それ以上はいけない。 ツライさんになってしまふ。 過去の記録とは無いと悲しいが、あっても悲しい時がある。 俺の黒歴史は消せないが、思い出したくはない。

「どうしたの?」

「あー、いや。 紹介よろしくな」

「まかせて」

ボスカい? フラグなのかい? 声色は違うけども。

ボス……ふと蛇のフレンズに会いたくなかった。 そして隠れんぼとか、楽しいんじゃないかな。

蛇に会うなら、キングゴブラに会いたい。 アニメに出てきたからね。 そしてヒューツ! と言いたい。 最後は首を絞められ毒を注入され昇天する、しちやうん

かよ。

そんな感じに、しょーもない妄想をしていると。いつのまにか部屋の一室までやって来ていた。

白い扉の前には、透明テープで貼られた画用紙が。「U^ユM^マA探求！」とデカデカと手書きで書いてある。

はて。この文面通りなら、ココはU^ユM^マA探求クラブであり、映像保存チームの部屋じゃない。

というか、なんか、部活動の部活部屋みたいなノリになってる。ここ、研究所だね？ チームは非公認クラブじゃないよね？

「仕事場のデスクで、会報書いてるヒトたち？」

「そんな事はないけど……何の話？」

カコさんにネタは通じなかった。ワニキャップも通じなさそうだ。いや、通じるか。格好良いとか良いアイディアだと言われそう。ミライは特に言いそう。フレンズ相手ならウケるすらある。

そう思う俺のセンスはきつとオカシイのだろう。或いは相手。

「失礼します」

俺を置いて行くように、ノックして入っていくカコさん。ああ待つて！ 置いてかないで！

「お、お邪魔しまーす」

後続で入れば、小さな部室……じゃなくて研究室。四方を囲むように並ぶ、天井までの本棚と、小さなデスクが真ん中。誰かが座つて一眼レフカメラを紐で首から下げる中年の痩せ男。人相の良さそうな顔だ。

白衣ではなく、ラフな格好。菜々たち飼育員の着るジャケットに近い。モスグリーンじゃなくて、ブラウンだけでも。

そこを基点にコの字を描く小さな折り畳み机とパイプ椅子。ずいぶん簡易的だ。

ただし。テーブルの上や周りは、ナニかの本や雑誌、崩れた書類の山で散乱状態。ノートパソコンや、バインダーも転がる。汚い。研究に忙しくてこうなったのか。

「やあ、カコ博士！　そして杏樹君だね！　ようこそ記録保存チームへ！　今は私しかいないが……それに散らかっているが、ゆっくり語り合おうじゃないか！」
「う、うつつ」

そこそこの歳に見えて、超元氣なヒトだな。　思わずたじろいちやったよ。

「こちらは、ジャパリパークや外界の発掘現場など、様々な場所へ行つて写真を撮っている方で——他のメンバーは？」

「探検隊や保安調査隊に同伴して、未踏の地へ旅立った。　或いは火山の調査だね。　アニマルガールやセルリアンに出くわせば、そちらの撮影も合わせているよ」

散らかっている部屋に、カコはナニも突つ込まず、普通に仕事の話をする。　これがカコの日常なのでしょう。

そして俺、イキナリ置いてかれていたんだけど。　寂しいんだけど。
なんだろう。　この世界に俺が存在してないって感じで悲しい。

カコはもう幼少の時みたいに、側にいる存在じゃないんだなって……………。

なんで職場違うんだよ。よよよ。

いや、仕方ないんだけどね。頭の出来具合もあるんで。こうして、一緒にパークを歩けるだけでも幸せなんだろう。そう思わなきやな。

「まあ、それはソレとして。杏樹君！」

「な、なんスか？」

沈んでいた思考からサルページ。感謝はしない。

「手紙を皆で読んだんだがね！ アレはどういう事だい!？」

うっ……クワツと責めてきた。やはりか、他のヒトと会えば突っ込まれると覚悟していたつもりなのに。

こうしてやられると、悪い事をした気分になってしまう。見た目がこんなヒトでもパークの為に日夜努力を重ねているのだ。

俺の妄想に振り回されていると思うと、とてもツライさんに……。

「ツチノコの事が僅かながらに書いてあったんだが！　そこんとこ　詳しく頼む！」

違った。勘違いだった。

「扉にUMA探求と書いてあったでしょ？　UMAが好きなもの。けものや自然の光景も好きだけど」

カコが、苦笑しながら耳元で説明してくれた。ああ、うん……そうみたいです。やっぱ記録保存チームとか写真部の部長みたいとかか、非公認クラブのUMA探求クラブじゃね、ココ。来るとこ間違えたんじゃないやね。合つても名前を変えた方が良い。

そんな思いをつい知らず。部長——もう部長で良いや——は、肘をテーブルに付き、両手を前に組んで語り始める。深い思考のポーズですかね？　だけど俺の意図とは違う模様。

「世界には存在を主張、噂されていながら、学術的に確認されていない未確認動物、U

MAがいる。日本にもだ」

「そうなんじゃないツスカね」

……………ツチノコ捜索があつた時、部長が絡んだんじゃないだろうか。そんな気がしてきたぞ。

「絶滅種も分類される事があるが……パークでは、アニマルガールとして出会う事が出来る。素敵な話だと思わんかね!？」

ワイもそう思います。UMAやカミサマ、絶滅種のフレンズと出会える。奇跡の仕組みは分からないが、すごい話だ。

「あー、はい」

「そして未来の話で書いてあつたツチノコという単語……アニマルガールとして、遺跡の調査をしているんだと!？」

喰いつくところ、そこですか？

もつとこう……あるじゃん。ヒトが消えて、建造物が遺跡扱いとか。良いんだけどね。興味を持ってくれる事はさ。唾棄されてポイされるよりかは。

「俺が見た、その……予知夢的なヤツでは」

カコが隣にいる状態だけど、そう言っておく。もう気不味い空気は脱したからね。

「ふむー！ それもまたUMA的な話ではあるが、私も信じているぞ」

「……ども」

UMA的って。喜んで良いのか微妙な事を言われたよ。

「前にツチノコ搜索の依頼を出した時は、残念ながら見つからなかったが、きっとパークにいると信じている」

遠い目をする部長。やはりアンタが絡んできましたか……。

ツチノコはいるんだよ、フレンズとしてパークに。でもフレンズだからこそ、見つ

けても報告はしなかった。 マツチヨな森林警備員に論されてね。

だから「見つからなかった」と思っているんだろう。 悪い事をしたつもりはないが、少し申し訳ない気もする。 気がするだけだけど。

このヒトは悪いヒトではないだろうけど、どこからか情報が漏れてしまえば、ツチノコが本気でお尋ね者扱いになってしまう。

そうなれば、外の世界を怖がってしまうかも知れん。 この世代のあの子は、物静かで、そういう騒ぎは嫌いだろうから。 だから避けれる、余計な情報は お口にチャックだ。

「まあまあ。 ツチノコ以外にもいるツスよね、UMAって」

「モチロンだとも！」

よしよし。 話を反らせた。 意外とチョロいかも知れん、この部長。

「リウキウ地方のシーサーは、カミサマのフレンズであつたが……写真に収めさせてもらった」

そう言つて、写真を引き出しから出してくる部長。夏を思わず入道雲と綺麗な青空の下、堂々と笑顔で、左右に赤青のシーサーが写っている。背景は石垣で囲まれた家屋……琉球建築の建物。

結構、彼女たちの格好は際どい格好をしていると思うのだが、写真を撮つて良かったのだろうか。

知らんヒトが見たら、なんのグラビア的な写真かと思つてしまふそうである。俺は知つてるけど。知つててもシコい。これ、後で焼き増ししてくれない？

「それからラッキービースト……ッ！」

「へ？」

何故にココでラッキーの名前が？

思わず変な声が出たが、落ち着いて前世の記憶を漁ってみると……なんとなくだが、分かつてきた。

アレだ、コンセプトデザイン的な話であつた……気がする。

ラッキービーストは、アニメだとロボットであるが……ある設定ではパーク上空を飛んでいる姿を度々見かけられている、UMA的な存在だった……か？

見かけた時は、研究だとか成功する事が多かったとか。故にラッキービースト。レンズではなく、虹色の液体が入った小瓶を下げる。パークのマスコットキャラみたいだ。

なんか、そんな感じだった気がするな。記憶が曖昧過ぎて、良く思い出せん……。

「当研究所でパークガイドロボットとして開発されているラッキービーストは……今は火山関連で開発中止になっているが、元はパーク上空で度々確認されていた謎の飛行物体がモデルだ！ 恐らく、何らかの生物であると考えられているが……私はUMAだと思っている！ その撮影には成功、それを元にデザインされたのが今のラッキービーストだな！」

嬉々として、もう一枚の写真を出す部長。見やれば、星空に浮かぶ、小さな青くて丸っこい何かが。被写体は小さくブレてはいるものの、それがラッキービーストなんだな。だとなつてのが分かる。

「ブレてしまったが、偶然にも撮影出来たのは僥倖であった。だが、次に写す時はハッキリ写したいと考えている！」

嬉しさと熱意が伝わってくる。 やっぱ好きなんだなあって思えるよ。 いつか凄
い発見をするんじゃないだろうか、このヒト。

俺も釣られて笑みを浮かべ、頷いた。 年配になっても、その熱意。 感服の至り。
俺も歳とつても……そういつた熱意を持てるだろうか。 人生楽しそうで羨ましい
よ。

「他にもっ？」

だからか。 最初は変なテンションについていけなかったが、部長の物語を聞きたく
なってしまうのは。

「ああ！ 空飛ぶといえば……スカイフィッシュー！」

スカイフィッシュ、か。 聞いたことはあるな。 長い棒状の身体を持ち、空中を高
速で移動するというUMA。

欧米ではフライング・ロッドとか、単にロッドと呼ばれたりするとか。

でも、夢のない話をする、その存在は否定されている。正体は昆虫とされ、その残像がそうだとか。　　モーシヨンブラー現象だっけか？

だがしかし……ジャパリパークには夢も奇跡もあるんだよ。

スカイフィッシュ。　　前世の記憶通りなら、レンズとして存在します。　　喋れないっばいけども。

「ゴロンドリナス洞窟に行けば或いは……とも、思ったが。　　残念ながら私は見つけれなかった」

ナニそれ行動力の化身。　　それを片付けの方向へ少し向けていただいても……いえ。　　なんでもないです。

「だがジャパリパークでも、スカイフィッシュがいるらしい報告があつてな。　　私もそれらしきものを撮影する事が出来た！」

そう言つて、別の写真を見せてくる部長。　　見てみたが……白いナニかがブレまくつている様には見えな。　　アニマルどころか棒状のナニかにも見えなかつた。

「これが……っ？」

「ああ。やはりUMAは一筋縄ではいかないな。だがいつの日か、カメラにハッキリ収めたいものだ」

この写真に写るものが、UMAかどうかは分からないが……浪漫のある話だ。成功するかどうかは置いておいて、不思議と応援と期待をしたくなる。

UMAには、そこまで興味は無かったが、部長の話を聞いていると、こっちまでワクワクしてくるよ。

「おっと、UMAの話ばかりですまない。私は普通に けもの や アニマルゲームも好きだし、景色も好きだ。だから、このパークや世界の風景、けもの の写真も撮っている。生きとし生きるもの、その輝きを両の眼に、カメラのレンズに写したい。そして後の世に、この時の感動や喜びを伝えたいからね」

おう……立派なヒトじゃないか。眩しくて頭が下がります。

それに比べて俺は……いや。頑張ろう。何を頑張るのか分からんが、何かを考え

て頑張る。具体的には不明です。UMA状態です。

「——杏樹君」

「は、はい？」

ここで微笑んだ顔を向けられて、

「君は………我々人類が、UMAや絶滅種の様な状態の世界を知っていて。そして、その世界の素晴らしさも知っているとして悩んでるとしたら………素直に、自分の心に従いなさい。上手くいなくても、それは自然の結果なのだ。だから、未来や今を気に病む事はないよ」

「ッー」

驚いた。突然、そのような事を……。

その思考も、頭の隅ではあった。アニメのように、職員が、ヒトのいない世界の方が良いんじゃないかと。

だけど、多くのヒトを、職員を見てきて、滅んで欲しくないと。矛盾した考えは、

俺を無意識に苦しめたのだ。

このヒトは、そんな心境を見透かしていたかのよう。伊達に生きてきていないという事か。全く、恐れ入る。

「はい！　ありがとうございます！」

こういう意味での理解者もいる。俺の心は、足枷あしかせは軽くなつた。

味方。いるじゃないか、ヒトの世界にも。こういった、話をしてくれる方が。

カコも、こうなるのが分かっていたのか分からないけれど。いんや、分かってやったのだろうな。隣で　ずっと聞いてくれていたし、今じゃ俺を見て微笑んでいるから。

「ところで」

と、部長。

「君もUMA探究クラブ……ごほん。」

記録保存チームに入らないかい!?

臨時の

手伝いとして募集するから、ぜひ一度！」

俺は脱力した。感動を返せ。

やっぱU M A 探究クラブじゃないか、ココ。

とらー！

UMAなツチノコのアレンジを森で見たり、EXアレンジの一部を研究所で見ってきたが、絶滅はしてないものの、希少な けもの という子も地球上にいるワケで。

有名な けもの である、トラもそうである。複数の種類がいる トラであるが、絶滅の危機に瀕している。住処がなくなったり、あの特徴的な模様……虎斑の美しさを狙われてしまった。狩りの成功率の低さもあるだろうか。

そんな希少なトラであるが。ジャパリパークに運ばれて、アレンジ化しているようだ。

アレンジの彼女の姿。ホワイトタイガーと似ている。白シャツにアカチエツクのネクタイ・スカートといったライオンとおそろいの衣装に、トラ柄の長手袋・ニーソックスを着用。それからおっぱい 大きい。

アニメ等で直接絡む事はなかったが、人気のある子なんじゃないだろうか。こうして見ると可愛いし。

「ち、近づくな、このバカあ……！」

「良いではないか良いではないか〜」

目の前には、カメラを持ちエロオヤジと化した記録保存チームの部長とトラのフレンズ。

様々な角度から撮ろうとし、トラは嫌がっている。

「嫌も嫌をも好きのうち。 本当は仲良くなりたいのだろう!」

「そ、そりゃワタシだって……って! 近づくなつて言ってるでしょ!」

部長に引つ掻き攻撃をしない辺り、相手が脆いヒトだからか優しさからか。

アプリ版では、ハグをしに来たサーバルに容赦無い引つ掻き攻撃を喰らわせていたよ
うだけど。

いや、今は未来の話ではない。 目の前の今、現実を考えねば。

「なんでこうなった」

俺は天を仰いだ。 綺麗な深緑と溢れ日が美しい。 だけど見た光景は欲に塗れた

醜い光景に思える。

なぜ、なぜ部長と共に森に来ているのだろうか。なぜ、トラにセクハラ紛いの事をしているのか。

一歩間違えれば逮捕される光景に対して、俺は研究所から今に至るまでの経緯を振り返る事にした。

ジャパリパーク動物研究所内。記録保存チームの部室……じゃなかった。研究室を後にしようとしたら、部長のスマホに連絡が。研究

一瞥したと思えば、次には笑顔で言葉を解き放つ。嫌な予感しかない。

「トラのアニマルガールを、森で見たという報告があつた！　行くぞ杏樹君！」
「断ります」

即答。絶対に面倒なのでお断り申し上げます。

俺が研究所の中をプラプラしても何の役に立たないだろうが、だからって、外に行く理由にならない。

ぶつちやけ、疲れるのは嫌です。セルリアンを含む危ない目に会いたくないです。トラには会いたいけど、デメリットの方が高そう故に。

「今を逃せば、次に会えないかも知れないぞ?」

ひとりで行ってくださいよ。それともアレかい? ボツチは寂しい的な?

「いや、危なそうなんで」

「けものを、パークを愛する者として記録に残したくないか?」

くどい! どんだけ行きたいの。

「俺の仕事もあるんで」

「シーサーの写真を焼き増しして あげるから!」

「パークの為、直ぐに向かいましょう!」

仕方ないな。パークの為だ、ひと肌脱ごうじゃないか。なんならフレンズと脱ぎ合いつこしたい、そして逮捕されちゃう。

「……………あんじゅ」

カコの冷やややかな視線が刺さってツライさん。いや、ほら。俺も男だし。それにパークの記録保存に貢献をしようかと。

「いや、ほら。もし生まれたばかりのフレンズだったら、パークの説明とかした方が
良いじゃん？ セルリアンに襲われたら大変だし、ね？」

「そうね」

なんだろう。スゴい言葉が冷たく感じる。絶対零度までいなくなるとも、永久凍土に俺を閉じ込めそうな冷たい雰囲気。今、マンモスがいたらマフラーで温めてくれそう。

「はっはっはっ！　若いとは羨ましいなあ」

部長。　アンタの所為です。　俺もホイホイ釣られたのが悪いけど。

「では行こうか！　なに、そう遠くない。　写真を撮ったら直ぐ帰って来れる。

近くまで車で行くが運転は任せてくれ」

「ウツス」

そう言って、研究所を後にする俺と部長。　カコの冷ややかな視線を背後に受けながら。

仕方ない。　仕方ないのだ。　全てはエロい写真……じゃなかった。　パークの為、
フレンズの為なのだ………！！

「俺が悪いんじゃない？」

回想から戻ってきて、第一声はコレだった。非があるのを認めた時、俺の浅ましさを呪う羽目になるとは。反省して、どうぞ。

「ちよつとアンタ！　コイツの　友だちなら、何とかしなさい！」

俺の存在に気付いたトラさんが、助けを求めてきた。不純な理由でココにいる身としては、せめての償いとならねばな。

「あー、その。　トラは本当に嫌がってますし、あまり　やらない方が良いのでは？」

いい加減にしないと裂かれますよ。　フレンズとはいえ、その可能性はゼロではない。

俺は　けもの　に対する危険も加味して言ってみた。　部長は俺より長く生きていく。　分かってくれる筈だ。

「……ふむ。　　そうだな、すまない」

そう言つて、カメラを構えるのを止めてくれた。　　良かった。　　俺とトラがホツとしたら、

「なら彼女を研究所に連れて行こうか」

「いい加減にして」

トラとハモつた。　　仕方ないね。　　懲りてないんだもの。

「それ、拉致です。　　誘拐です。　　捕まります」

「ハッ！　　私とした事が。　　トラは希少種、連れて行く事は出来んな」

違う。　　そうじゃない。　　嫌がつてる事を無理矢理というのが良くないの。

トラも思うトコがあるのか、厳しい口調で訴えてくる。　　猛獣がやると、オーラが怖い。

「あのね、ひっ付き合うのも群れるのもワタシは嫌いなんだよ。この機に覚えな！」

ウガーツと吼えるトラさん。分かるよ、その気持ち。互いに気を遣わなきゃならないからシンドイよな。あ、ちよつと違うか。

「仕方ない。トラの気持ちを尊重しよう。だが簡単な教育はさせて貰おう」

「はあ？」

「雰囲気からして、アニマルガールになったのは最近ではなさそうだが。ココがジャパリパークなのは知っているな？」

「他の子に聞いたからね。そんぐらい知ってるさ」

真面目な会話を始める部長。最初からやれよ。かくいう俺は何もしてないが。

「自身が何のフレンズかも？」

「トラだよ。ベンガルトラ。もう良いかい？ 馴れ合うつもりはないんでね」

ふむ。最低限の知識はあるように感じる。ココがパークで自身が何者か分

かっている。それだけで、普通のアニマルガールは良い気がする。
ところが部長。話を終わらせずに、言葉が続けるのだ。

「そうかあ。私もそうだと思っていた。というわけで写真を一枚だけ撮らせてくれ。そうしたら立ち去ろう」

何がというわけなのだろう。ミライの方がまだ良い気がしてきた。部長は部長で欲が溢れてしまっている。

「だあーもう！ 分かった、分かったよ。しゃしん とやらは 危なくないコト
なんだろうね!？」

折れたトラさん。なんかすいません。文句は全部 部長が負いますんで。

「問題ない。魂を抜かれる事も無ければ、何分も立ち尽くさないといけないものでもない」

そういつて構え直す部長。　何百年前の話です、それ。　アンタ生まれてないよね。何故、その話を今した。

「魂抜かれるとか、そんなおつかないモノはお断りだよ！」

ほら見ろ。　不安にさせたじゃないか。　臨戦態勢に入ってるよ。　拳握ってるよ。　トラは強いんだぞ。　ヤベエよヤベエよ。　誤解を解かねば！

「だ、大丈夫だよ！　根も葉もない噂が昔あったんだよって話だから！」
「そ、そうかい。　紛らわしいね」

ホントそう思います。　なんで　そんな事をいうんでしょうね部長。

「さあ撮るぞー。　好きなポーズで！」

そう言えば、なんだかんだ付き合うトラさん。　不機嫌な顔ながら「うー！　が
おー！」のポーズをするとか……言動とは裏腹というかギャップ萌え。　可愛い。

「ハイ チーズサンドイッチ！」

かしやり。乾いたシャッター音が響けば、構えを解いてニコリと微笑む部長。なんすかね、その掛け声。冒険の先で何度か聞きそうな言い方だね。

「うむ。良い写真が撮れた。ほら」

そう言って、カメラの撮影データを俺とトラに見せてくる。そこには不機嫌な顔をした、だけど可愛いポーズをしたトラさんが。

「小さなワタシが入ってる!？」

驚かれた。カメラというか、機械類を知らんのだろう。フレンズって、こういう反応してくれるから可愛くて面白い。くつくつと笑いながら。俺は簡単に教えてあげた。

「これは、その時の光景などを切り取って保存出来る道具なのさ。実際に入ってるワケじゃないんだよ」

「よく分からないけど、ヒトの道具って凄いのね」

「ずずいと俺の横に近寄って、じつくりと画像を見るトラさん。ひっ付き合いたくないと言っていたが、今は忘れている模様。腕に胸が当たってきて、ドギマギするまである。」

「ハッ!？」

それに気づいて、俺の顔を見て、慌てて離れていく。うん。可愛い。

「なに ニヤニヤしてんのよ! 気持ち悪い!」

うん。落ち込むよね。

「若いって良いなあ!」

まさか狙った？ 狙ってやったの このヒト!?

「とにかく！ これで終わり！ さっさと どっか行つて頂戴。それから、木に引つ掻き傷を見つけたら、それ以上進まない事ね。ワタシのナワバリなんだから」

そう言つて、逆に自らが立ち去るトラさん。可愛いトコが見え隠れして、可愛がりたくなつちやうね。裂かれる心配があるけど。

「杏樹君。彼女と次に会う時があれば、もっと仲良くなりたいな」

「え？ ええ」

「ああ見えて、本当は他の子とも仲良くしたいのだろう」

あら。分かつてらつしやる。トラとはいえ、彼女はフレンズ。ボツチは……寂しいもんな。

ホワイトタイガーを紹介しよう。トラ繋がりで。

「さて。セルリアンに襲われる前に研究所に撤収。杏樹君、時間を取ったね」
「いえ。大丈夫です」

フレンズに会えたのだ。良しとしよう。トラは希少である、出会えた奇跡に感謝しよう。

「ところで」

笑顔の部長。嫌な予感。

「マルタタイガーって知ってるかい？ 約100年前に報告されたという、UMA的な幻の青虎を！」

「見かけたら報告します。そんじや帰りましょう」

所内でも外部でも虎に会えたので、今日はもう良いですと踵を返した。これ以上の面倒は勘弁な。

奇跡の獅子は「普通」に焦がれる。

「マルタタイガー。それは大陸側で約100年前に報告されたという幻の青虎。実はな、パーク内で見たとという報告があつてな！」

「そう都合良く見つからないでしょ」

研究所に戻ろうとしたら、これである。森を早く脱しないとセルリアンにチヨメチヨメされてしまうというのに。

まったく。撤収とはなんだったのか。UMA好きに付き合うのも楽ではない。いつそセルリアンに襲われて、その意欲を少し削って貰った方が良い気さえする。

「都合良く見つからないのがUMAや珍獣だ。簡単に見つかったらツマラナイだろう？」

「珍獣ですか。コモド島とか行った感じで？」

共に森を歩きながら、軽口を言ってみた。

して、コモドドラゴンと命懸けの競争をするんですかね。 案外、部長ならやるかも知れない。

「行ったことはある。 コモドオオトカゲは毒が危険だからな、あまり近寄れなかった」

あるんかい。 行動力の化身である、俺の思い付く場所は大体行ってんじゃないだろうか。 部長、恐ろしいヒト！

「今では、パークでも観察出来るがね。 サンドスターの影響か、UMAやカミサマの話まである。 本当に、ココは現代の楽園だよ」

そう言つて遠い目をする部長。 楽しさとは別の感情が混ざっている様子。 様々な場所へ行き多くの経験を重ねてきた年配者としては、思うところがあるのかも知れない。

だが楽園、ね。 それには同意する。 かばんちゃんのいる未来せかいでも そう言えるの

だろう。

そして世界中の　けもの　が集められているパークは、ノアの方舟はこぶねなのかも知れない。

そう考えると外界の　けものや、ヒトは……いや。考えるのは止めよう。

今を生きねば。　そも、そうならないように俺はジタバタしている。　ダメなら仕方ないが、信じてくれるヒトは多い。　ポジティブにいこう。

とはいえ。　ルターを探すにも、場所は知っているのだろうか。　知らないと困る。　フラフラするぶん、セルリアンに襲われる危険が高まる。　聞いてみよう。

「そんな楽園にいる、ルターの居場所はご存知で？」

「ルター？　　免罪符の話かい？」

あつ……。

しまった。　愛称で言ってしまった。　取り敢えずテキトーに誤魔化すか？

「いえ。　マルタの　ルと、タイガーの　タで略したというか。　すいません」

なんで謝ってるんだらう俺。 そんな悪い話じゃないのに。

うーむ、部長のように年配のヒトほど略語が嫌いそうなイメージがあるからか。 何略してんだ、ちゃんと言え的な。

そんな不安を抱えたが。 当の部長ははっはっはと笑い飛ばした。 森に響き、草木の擦れる音と合わさる。 不特定多数に安心させられた気分になって……ホツとした。

「なるほど。 その名の方が愛着が湧いてくるね」

うんうんと頷く部長。 優しいヒトで良かったよ。 このヒトとなら、UMA探求に付き合うのも悪くないな。

ギスギスしながら、危険な未知の領域に行くよりは。

「ルターの場所。 この辺りなんだがね」

あつ、そうなの？

言われて辺りを見回した。 草木しかない。 風で揺れるものはあれど、けものやアニマルガールの姿は無いんですけど。

「いませんね」

「そう簡単に見つからんさ。 故に幻と——」

そう言った刹那。 スツと木の陰から青い制服に身を包んだ美少年の横顔が。 手には青薔薇。 そよ風に吹かれ、美しい青髪とスカートが僅かに揺れている。 映画のワンシーンかナニかですか？

どこの貴族校の生徒ですかねという その格好。 よく見ると 青いケモ耳と青くすらつと長く細い尻尾。 虎斑とらふの模様がある。 アニマルガール、トラの子のようだ。 反射的に胸を見た、少し膨らんでいた。 男の悲しい性。

「やあ。 僕をお探しかい？」

そして、掛けられる甘く脳を蕩けさす美声。 イケボボイス。 本当に女の子なのかい。 いや、女の子だろうけど。 スカート履いてるし胸あるし。

その美少年系ガールと貴族オーラに思わず「抱いて！」と言いたくなるが、

「アイエエエエ!? ナンデ!? 青虎ナンデ!」

口から出たのは驚愕の声だった。

へ、ナンデ? こんなアツサリ出てきて良いの?

キミ、レアなフレンズでしょ。 UMA的な子でしょ。 最高レアリティな感じで

しょ。 良いのかい、こんなんぞ。

「出会えた奇跡に感謝だな」

驚愕する俺を置いておき、カシャカシャと撮影を始める部長。 許可を取らずに撮り

まくる。パラッチの図。

こういうところは良くないよね……違うそうじゃない。 今は感動と混乱の中にいるんだ。 何とか状況を噛み砕いて飲み込まねばならない。

「き、ききき君! マルタタイガーかい!」

「ああ。 トラの中でも希少な種、それが僕……マルタタイガーさ。 ルターと呼んでくれ」

どことなく憂いを帯びた表情で、自己紹介をしてくれるルター。この世界の彼女は、一人称は僕なのね。

切なくも素敵な表情に胸がキュンキュンしちゃうが、ココでパタリとシャッター音が消える。

「ふむ。杏樹君、やはり未来を知っているのかい？」

ああ、ルターの名前で反応しちゃったか。まあ、ツッコまれる可能性はあったな。変に誤魔化したツケか。

偶然、俺と彼女の考えた愛称が被ったという主張も出来るが……これ以上面倒になっても困る。俺は冷静になると素直に頷いた。

「はい。ルターがパークにいるであろう事は予想していました。そう名前を名乗る事もです。でも、こうも早くに会えるとは。騙すつもりではなく……すいませんでした」

「またも謝る俺。隠し事とはツライさん。俺もフレンズみたいに明るく楽しく生きていたいなあ。」

「そんな暗い俺に反して、部長は明るく返答してくれる。本当、良いヒトだ。こんなヒトが前世でもいてくれれば……過ぎた昔話は良い。いつまで引き摺ってるの俺。」

「気にする事はない杏樹君。私は不思議や疑問とは自分で見て聞いて感じたいと思っている。例えるなら推理小説みたいだと言うべきか。逆に、先にネタ明かしをされても、自分で確かめに行く楽しみが出る。深く悩む事はないよ」

「おう。素敵なヒトや……。」

「許す許さないではない。考え方が俺側ではない。理不尽や偶然を、それが人生だと謳歌おうかしているかのよう。」

「俺もこうなりたい。生きているなら幸せに、楽しく過ごしたい。特にココは楽園なのだから。」

「——僕のコトを知っているのかい？」

楽園のイケメン ルター君から声を掛けられた。 いけない。 一瞬とはいえ忘れてた。 UMA状態。

「うん。 少しだけ」

「私も知ってるぞ！ 奇跡の獅子、幻の青虎……ッ！」

あかん。 部長が荒ぶり始めた。 感動がまたも薄れていく……。

見ろ。 ルターが また憂いを帯びた表情になっていく。 少し自重しようず。 少し咎めねば。

「ルターは嫌がっているみたいですよ」

「大丈夫だよ。 えっと、あんじゅ君で良いかな？」

大丈夫というルター。 して、今頃になって名乗るのを忘れていた。 大変失礼した。

「そう。 杏樹だ。 パーク臨時職員だよ。 ごめんよ、名乗るのが遅れた」

「同じくすまない。私はジャパリパーク動物研究所、記録保存チームの者だ」
「改めて よろしく。 気にする事はないよ」

おう。 イケボイスを掛けられる度にドキドキしちゃうんだけど。
でも、大丈夫という件は無理しているんじゃないか？

ルターはアップリの動画を見ていた感じ、その美貌と甘い声、高貴そうな風格で多くの
けもの を魅了していた印象だ。

狙ってやっているワケじゃなく、天然タラシだから手に負えないというか……どこの
主人公ですか？

そんな子であるが。 一方で、内面を見てもらえないとルターは苦しんでいた時も
あったそう。

今現在、パーク運営が始まって年月は浅い。 今、彼女は その苦しんでいる時期に
いるんじゃないだろうか。

その憂いを帯びた表情も、その現れだと考える。 ならば寄り添えないだろうか。
幸か不幸か、俺はソレを知っている。

モテモテイケメン（ルターは女の子だけど）のモテ過ぎる悩みなど、唾棄してバイバ
イしたいが、理解者がいないのは苦しいもの。

だけどせめて、せめて何かしてあげるならば。彼女の苦しみにも同情し、少し寄り添ってあげる事しか出来ない。それで和らぐならば出会えた価値もあると思う。

だから、俺はルターに話しかけた。彼女の 悩みを聞く為に。

「——気にする事がある。ルター、君は普通になりたいと悩み、願っているね？」

言われたルターは目を見開き、驚いた。何故知っているの？ といったところか。

それは裏を返せば、今まで理解者が現れなかったということ。

この様子から、同じ境遇というゴールデンタビータイガールのルターにも出会ってないのかも知れない。

「その通り。僕は奇跡の獅子として皆から大切にされてきたが、内面を見てもらえず、ツライと感じている。故に普通に憧れているんだ」

「そうか」

予想通りのようだ。だからといって嬉しくはない。苦しんでいるのが分かった

今、どうして捨てておけようか。

昔の俺だったら、適当に相槌打って別れるタイミングを見計らうね。それをしないのは、相手がアニマルガールなものもあるけど、俺には寄り添ってくれるヒトやフレンドがいるからだ。

ならば、俺もそうなる。彼女が現れたのも、俺たちに何か期待を込めたのもあるかも知れない。

とはいえ。教えるのは難しい、普通とはなんぞやという哲学的な問答もある。

「普通か。上手く教えられないけど、ありのままの、自然体は……ダメか」

「ああ。みんなに注目されてしまったよ」

自然体はダメみたいですね……。

雰囲気は貴族オーラだからね。それと彼女の普通、自然体は天然しごろ、たらしなそれである。挙句に無自覚系。

それを知っている俺も、きゅんきゅんしてしまった。いけない、俺にはカコがいるのに……ルターさん抱いて！

「ふむ、普通か」

ここで平常心になった部長、声を上げる。 ナニか良い話でもありますか？

「偉人の名言に、”普通とは存在しない。 いたらお目にかかりたいものだ” という言葉があつた気がする」

えーと、アインシュタインの言葉かな？ あまり詳しくないけれど。

普通……ふとマイルカを思い出した。 あの子は元気だろうか。 また会いたいな……海獣園にいるんだっただかな。

一方ルターは、気になって聞き返す。 普通に焦がれるのに、普通がないとは。

「普通は存在しない？」

「万事が認める普通とは、そうない。 誰かにとっては異端であり、逆に別のヒトからは普通に見える。 仮に皆が思う共通の普通があつても、時代と共に考えが変われば普通も変わるものだ」

真顔で語る部長。普通じゃないコトを追いかけている年配者が言うのと、重みが違うね。

ゆったりとした時間と口調の中では、不思議と心に響く言葉。自身の中にある宇宙への旅立ち。それを誘うには十分な威力である。

「ルター君。君の思う普通とは何だい？」

「僕の思う普通は——」

学校の問題のように、決まった答えはない。ルターの思う“普通”がどうであれ、それもまた“普通の答え”なのだ。

「——すまない。難しいな」

ところが、答えを上手く出せないルター。困った表情も絵になって美しいが、内心はツライさんなのだろう。

部長もソレを思ってたか。強く解答を出す事はせず、やんわりと対応していった。

「ふむ。様々なモノを見聞きし、自分なりの答えを見つけて行くと良い。慌てる事はない、というわけで」

あれ。なんで急に笑顔なんですか。もうね、いや々な予感がして来たよ。そして面倒ごとに巻き込まれる、名推理。

「記録保存チームに入らないかい!?」
様々な場所に赴き、様々なモノを見れるぞ!」
「突然の悪徳勧誘は止めましょう」

やはりそうかい。被害が拡大する前に止めに入る。相手が けもの でも見境なしだ。

ルターもよく分からないからか、苦笑して断った。良いぞ。かしこい。かしこさが足りぬフレンズならば「楽しそう!」とホイホイで行っちゃうトコだ。良かった。

さて。断られた部長は、心底残念そうにしょげている。皺も心なしが増えて見える。ちよつと可哀想かな?

「むう、残念だ。ルター君がいれば予算も仲間も増えそうだったからな」
「ここに来て欲を晒すのはNG」

可哀想じゃない、醜かった。

毎度このヒトは感動をぶち壊す。馬鹿な俺だが、そろそろソレは覚えておこう。
良く言えばシリアスブレイカーだから、良いところもあるけど。

「とまあ、冗談は置いておこう」

冗談だったの？ ガチに聞こえたよ。

「参考までに、我々の普通を見て行くかい？」

「良いのかい？」

「良いとも」

良くないともー。勝手に話が進んでいるけど、俺や部長の素行を見ても参考にならないと思うぞ。寧ろ悪化するまである。

フレンズもヒトも千差万別である。それは良い。ただ俺は転生者であり、周りからは預言者だの問題児だのという少しアブノーマルな扱いだ。

ルターが悪いコトを覚えたら大変だ。具体的にはカメラを持ってヨダレ振り撒くケダモノ、知り合いで言うともミライ化。

まさか なるまい、と思えど まさか の可能性はゼロじゃない。イケメンがヘンタイになった姿もゾクゾクしそうだが、ココはルターの為を思つて上手く避けねば……。

「では杏樹君。彼女と共に、しばし行動したまえ」

「フアツ!」

いやいやいや。 ナニ言い出してんスカ部長、仕事を勝手に作つて押し付けないで下

さいよ!?

部長が1人であれこれやるよりマシだろうけど。 マシ、だよな?

「ちよ、部長は?」

「私は研究所に戻らねば。 未来に備えて、ね」

くつ。　　そう言われては強く言えぬ。　　追い討ちを掛けるように、ルターも甘い声を上げてきたし。

「すまない、迷惑をかけてしまったね」

憂いを帯びた表情でのイケボ　ボイス。　　あん、胸の奥がきゅんきゅんしちゃうじゃないの。　　なんなら下半身もムズムズしちゃう。

全く。　　断れないじゃないか。　　あわよくば　　このまま　　お持ち帰りして、チヨメチヨメ出来ればと思う。　　逆にされるのも良い。

うん、俺の心って醜い。

「あー、大丈夫だよ。　　一緒にいられて嬉しいからさ」
「そう言ってくれると、僕も嬉しいよ」

美しく、宝石のような青色の中、眩い笑顔を浮かべるルター。

研究所にはカコもいるし、部屋には二ホンオオカミがいる。　　なのにイケメン……

じゃなかった、女を部屋に連れ込むとか。

でもほら。カコは研究しごとで中々会えないし、ニホンオオカミはパリピとワンダフルだし、寂しくなっても仕方ないじゃん。

何だか俺ってクズ男と化しているんだが、ルターの笑顔を見てると全てが許される気さえしてくる。そも、コレは仕事なので仕方ない、俺の免罪符。

「所には私から伝えておこう。落ち着いたら研究所に戻って良いからね」

「……ええ」

そう言つて、笑顔で研究所に戻る部長。勝手に話が進んで仕事を与えてオサラバとは。コレはヒドイ。良いヒトなのか悪いヒトなのか分からん時がある。

とにかく。直ぐに研究所に戻れそうにないな。ルターに普通をそれっぽく教えて、切り上げねば。カコの視線が絶対零度になる前に。

「あんじゅ君、これから よろしく」

一方で 優しく穏やかな視線を送ってくれるルター君。味方は君だけだよ。

「(イ)ち(ら)い(そ)」

手をさし延ばす。逡巡なく素直に握り返された。手の平は 何となく柔らかい。さつきまで感じていたドキドキとは違う、何となく温かいモノがコンコンと湧いてくる。

—— やっぱフレンズって良いなあ。

姿形十人十色。イケメン系でも女王サマ系でも、ふと思えば皆可愛い良い子たち。自然と煩惱は消えていく。心が軽くなっていく。そうだ、コレが良い。

やはり、ジャパリパークは楽園だ。

故に導かねば。正しいとか間違いつか、そんなものは分からない。たぶん、普通と同じように万事が認める解は無い。

でも、それで良い。自分なりの答えを見つかる事が出来るなら。ルターもそうさ。いや、ルターに限らない話。全てのフレンズとヒトに言える問いである。

「そんじゃ、行こうか」

握手の手を握ったまま、俺は歩き始めた。共に歩く道。だけど、ゴールは違う道。恐れる事じゃない。それは魅力である。輝きである。だから互いに惹かれ合う。

思えば、多くの事に魅了されてきた気がする。これからも、きっとそうだろう。

そう考えたら、未来という未知は楽しい世界に思えてきた。

俺は自然と微笑んだ。それは作り笑いのような、心ない乾いた笑みではない。

純粹な心からきたものだった。

普通の戦闘？

奇跡か運命か。 幻の青虎、マルタタイガーのルターに出会い、普通を教えるべく行動を共にする事に。

とはいえ、口頭による説明は難しい。 ということではトのナワバリな都市部に行く事にしたのだが、

「キヤー！」「格好良い！」「ドキドキしちゃう！」「素敵ッ！」「イケてるよね〜！」

ヒトや、都市部に出張つてるフレンズの注目を浴びた。 ルターが。

しまったなあ。 こうなるコトを安易に予想出来たはずなのに。 相変わらず俺の軽率さには頭を抱える。 もう少し、賢く行動出来ないだろうか。

「隣を歩いてるヤツ、誰よ」「知らん」「ナニ一緒に歩いてんですかねえ」「モテないからって一緒にいるんしょ」「イケメンに失礼」「価値が下がるわ〜」

……………こうなる可能性もあつただろうにさ。離れた俺にも聞こえるような高い声だから心にグサグサくるんだよね、言ってるのはヒトのパリピでゲバいビ●ちばかりだが。

「あんじゆ君、すまない」

見よ、ビ●ちどもが！ 貴様ら面食いが騒いでいるイケメンなルター君を！ 哀しげな顔を浮かべてるじゃないか！

ちったあ自重しろよ。連れて来た俺も悪いが、フレンズやヒトの気持ちを知らずに騒ぐんじゃない。哀しんでいる顔すら絵になるから、余計に騒いでるけどさ。

「い、いや……大丈夫「哀しんでいるのは、あの隣の男の所為ね」「違くないわ！」「ああいう男って、側において自分が注目浴びてると思い込みたいのよね」「価値あるように見せたいだけなのよ」「違くない」「ハハハッ」……………おのれ」

ムカつく。なんだよ価値がどうこうとか、勘違いしやがって。事情を知らずに見

た目だけで判断するヤツが騒ぐんじゃねえよ。

俺から言わせれば、連中は皆でひとつを攻撃して一体感や共感を得ただけ。逆に集団から外れる恐怖を味わいたくないから、ああするのだ。俺には分かる。

パークは守りたいが、コイツらは滅んで良い。俺を殺した原因のひとつでもある。連れて来た俺にも非があるが、これ以上ココにいても良い事はなさそうだ。

俺の寮部屋か森に移動しよう、直ちにだ。キタキツネが社会勉強にと連れてかれたコンビニは、都市部のど真ん中なのでやめておく。

「これがヒトの”普通”なのかい？」

ルター君。そんな今にも泣きそうな顔をしないでくれ。それすらも美しいが、君は悪くない。笑ってなさい、笑顔がいちばん。

それと、その普通は否定させていたたく。様々な普通があるが、俺にとって”アレ”は普通じゃない。全俺が認めない。

「違う。アレは一部だけ。良いヒトはたくさんいるよ、俺と一緒にいた記録保存チームのおじさんとか」

あとは森林警備員のマッチョな隊長とか、管理センターの頼れる小動物とか。

けもの大好きで、ヨダレ振り撒く調査隊長兼ガイドのミライさんとか、服のセンスがなくて、知らないヒトには 少しオドオドしちゃう可愛い俺の幼馴染な研究員のカコとか。

みな、どこか変なトコはあるけれど、良いヒト達だ。　フレンズも良い子が多い。こちらも癖があるけど。

「移動しよう」

「……分かったよ」

これ以上騒ぎになって、通報されても困る。　ルターも望むべくもないだろう。

ココよりマシな場所……ウチの寮も大概だが、そっちに向かおう。

そう思い移動しようとした矢先、

「むっ、あんじゅか？」

聞いたことのある声が。

振り返れば、ルターと似た姿、だけど神域の白き虎の子。

「ホワイトタイガー！」

「ああ。 久し振りだな」

そう。 かつてスーパーで出会い、当時はボッチであった彼女。

また都市部で会おうとは。 いやはや、友と会えるのは嬉しいね。

「共にいるのは、見たところ 我と同じ虎のアニマルガールのようだが……青いのだな」

「初めまして。 僕の名前はマルタタイガー、ルターで良いよ」

「ホワイトタイガーだ。 よろしく」

珍しい虎の子同士が笑顔で、それも招き猫ぐーで挨拶している奇跡。 あとスゴい可愛い。
愛い。

てか、ルターも白虎も招き猫ぐーするんだな。 ギヤップ萌えというか可愛い。 可

愛いしかない。お互いにドギマギする事もなく、純粋な笑顔を向けあう美しさもある。

「何やら騒がしかったから、様子を見に来たら あんじゆ とルターがいたという事だ」

「すまん。俺の所為だ」

「いや、あんじゆ君は悪くないんだ」

俺とルター、互いに落ち込んだ声を出す。　　なんだか、けもフレらしくないギスギス感があつて嫌だなーと思う。　　今更だけど。

ヒトがヒトである限り、そうなってしまうのだろうか。　　理想と現実の差を思う度にツライと感じてしまう。

「ふむ……困り事なら友として、相談に乗ろう！」

どーん。　　そんな気持ちを払拭する仁王立ちの白虎さん。　　ドヤ顔ですらある。

友との交流が嬉しいらしい。　　俺も嬉しいが、ソレを利用して悪い事に巻き込まれ

なきや良いが……。

それを感じ取ってか。　白虎は嬉しそうに語り始めた。

「何、案ずるな。　キタキツネの別荘を建てる時も手伝ったし、ミツオシエのお願いも幾度となく解決してきた」

「そりゃあ……エライな」

案ずる話が出て来たよ。　それ、良い様に利用されてるよ。　彼女は嬉しそうだからつつこまないけど、聞いている俺の心境は複雑だ。

キタキツネの別荘の話は、漫画版であったヤツだろうな。　という事は、クロサイもいたのだろうか。

ミツオシエは……まあ、あの性格だ。　やはり駒扱いをしているだろうて。　どちらにせよ、会ったら説教垂れねば。

俺は職員として、何て言ってやろうか考えていると。　一緒に聞いていたルターが称賛の声を上げる。

「良い行いをしてきたんだね」

良い行い、ね。　そうだろうな、相手の役に立ったのだから。
でも頼んだ相手が悪意あるものなら、良くない。　そういう輩は後々面倒を起こすかも知れん。

「(きゅん)と、友として……普通のコトをやったまで」
「普通、か」

対して白虎は謙遜。　その割には虎の細長い尾を得意そうにユラユラ揺らしてるのが可愛い。

でも普通とはナニか。　ここはひとつ、彼女に相談して普通を見せて貰おう。

「早速相談があるんだけど」

「なんでも言ってくれ！」

うん？　　今なんでもって……いや。　イヤらしい事はお願いしないよ？

「ルターにホワイトタイガーなりの普通を教えて欲しい」

奇妙ともいえるお願い。普通とは少し違うだろうホワイトタイガーだが、彼女も彼女なりの普通がある筈だ。

俺に言われた白虎は一瞬、キョトンとしたがルターを見て頷いて、

「普通、か。分かった」

そう言ってくれた。持つべきは心の友。様々な視線や価値観からくる普通は、時として否定したくなるが、ルターの参考になればと思う。

ホワイトタイガーは、周囲のヒトや けもの を一瞥すると、言葉が続けた。

「ココから離れよう。目立つからな」

「ああ……そうだな」

「すまない、宜しく頼むよ」

青虎に白虎がいたら、そりや目立つ。落ち着いて話す事もままならない。

「あれ、ホワイトタイガーは　なんでまた都市部に？」

「ミツオシエにハチミツを買ってくるように頼まれていたのだ。　もう大丈夫だが」

聞いてみたら、悲しい理由だった。　あの子に会ったら　やはり説教か。

白虎よ……もう武人なイメージが薄れてるよ。　パシリのフレンズと化してるよ。
友とはいえ反論して良いのよ？

「では森に行こう。　そこで普通を教授する」

ゆらゆらと　得意そうに揺れ続ける細長い尻尾。　けも耳も　ピコつと動いている。

ボッチを脱して　さぞ嬉しいのだろうが、悪い事に巻き込まれたら大変だ。　俺からも、俺なりの普通をフレンズに教授した方が良いかもな。

森にて集られるは、複数の目を持つドギツイ色の物体。ミカヅキモやその他の単細胞生物を模したと思われる形だが、大きさは犬猫サイズやヒト並み、それ以上のものとバラバラだ。

ただ、共通して目に見える球体の部位がいくつもあつたりするなど、ヒトの生理的悪感を招くには十分な見た目をしている。目だけに。

はい。　　けもフレに出てくる謎多き共通の敵、セルリアンの登場です。

アニメの、ひとつ目オバケとは異なるカタチ……アプリ版の姿である。

それが20は下らぬ数で押し寄せてるのだから、気持ち悪いコトこの上ない。いや、通り越して恐怖である。見渡す限りソレだからだ。

草木で視界の悪い森であるが、色が大変目立っているので分かりやすい。迷彩効果を發揮されて忍ばれるよりマシだが、堂々としているサマは恐怖心を上昇させるに至る。意思疎通は無理なバケモノだしな、おいでよセルリアンの森。

「これが私の普通だ」

「ノーマルじゃなくね!？」

デンジャーなアブノーマルじゃね!？」

恐怖から思わず叫んでしまった。 サファリに住む フレンズや けもの はい つもこうなのか!?

ジャパリパークって、楽園な一方で厳しい環境でもある。 これはヒトだけでなく、けもの やフレンズにとつてもだ。

パークの掟……自分の身は自分のチカラで守るコト。 アニメでカバがそんなコトを言っていたな。 セルリアンがいる時点で パーク運営時代から そういう状態なのだろう。 改めて思い知らされた。

「何を言っている。 千体組手と比べたら楽な方だぞ」

「お前がそう思うなら、そうなんだろう。 お前の中ではな！」

「戦いは望むべくでは無いのだけれどね」

俺とルターが嘆く。 今、我々は大ピンチなのだ。

千体って。 セルリアンって この世代に そんな大量にいるのか!?

小型一体だけでも、ヒトにとつては脅威なのに、そんな数にチヨメチヨメされたら ベッドイン待った無し。

バケモノに犯されるなんてやゝよ！

「俺はヒトだぞ?!」 森林警備隊長じゃないし、武器もナシに戦えん!」

俺が戦慄している間も、白虎と青虎は それぞれ臨戦状態へ。

白虎は武人のオーラが漂い始め、構えの姿勢に。 青虎は青薔薇を胸ポケットにさし、凜としてセルリアンの群れを見つめる。

「大丈夫だ あんじゆ。 見せるだけといたろう? 我が鍛錬を見て行くがよい

!」

「僕も加勢しよう。 奇跡の獅子の名は伊達じゃないんだよ。 この名は好きじゃないんだけどね」

ヤダ……格好良い。 抱いて!

俺は両手で口元を押さえ、高まる気持ちを押さえつける。

この獅子たち、凄いやん。 惚れてまうやると。 フレンズの中のフレンズ! ベストフレンズ。 とりあえず今は。

男が女に守られるというのも、何だかアレだが、身体能力の差がある。 ココは任せ

よう。

そう思った刹那、セルリアンがワツと我々をチヨメチヨメするべく飛びかかった！

あの姿形から、どうやって大地を移動しているのか分からないけど、とにかく気味の悪いバケモノは虎たちに一齐に襲いかかり――。

「ふっ！」「ッ！」

倒されていった。セルリアンが。

虎の子による華麗な動き。正拳突きであつたり、洗練された回し蹴りであつたり、流れ作業のように繰り出し消していく。

けもプラズムを輝き散らせる度、セルリアンは吹き飛び、怯み、その物体の何処かにある石を砕けさせ、破片の輝きで更に森を輝き尽くす。それは白と青のイルミネーションを見ているかのよう。

「おおっ」

昼間だというのに、その美しさには眼を見張るものがある。

戦闘なんてとんでもないと思ってきたが、このような輝きもあるのだと評価した。ギャララーがいたら拍手喝采大喝采間違いなし。

「どうだルター！　　私の普通は！」

「なるほど。セルリアン組手……普通の道とは険しいんだね」

「普通はセルリアンの大群相手に組手なんてしねえよ！」

ツツコミは入れないといけない。でないと、ルターがあらぬ道に進みそうだ。ナニをやっても輝けそうなのが　また怖い。

そんなマヌケを混ぜつつ、虎はセルリアンを殲滅してしまった。　強き虎の前に散る最後の輝きは、どこか切ない……。

青虎と白虎も思うところがあるのか。　どこか憂いを帯びた表情になる。

「……………もう終わりか。　鍛錬が足りんな」

「言葉ではなく、行動で示すというやり方があるよ。　次から加減して逃せば良い鍛錬になるんじゃないかな？」

「ふむ。　次からは峰打ちでいこう」

「ヤメロオ（建前）！ ヤメロオ!!（本音）」

とんでもないコトを言い始めやがったので、止めておく。死の恐怖がなく、無差別攻撃をするかのようなセルリアンにも「逃げる」コマンドはあるようだから、ダメだ。女王事件の女王となったセルリアンも、元のセルリアンに戻ったとき、逃げたのだ。それが ナニかのフラグになってパワーアップして戻って来たら大変だ。稽古はしなくて良い。セルリアン滅ぶべし慈悲はない。

「どうやら、私の普通はヒトの目には特殊のようだ」

「そうなのかい？」

「けもの から見ても特殊な方だろ！」

いかん。相談相手をミスった気がするぞ。他のフレンズを紹介してもらおう。

「次の普通を見よう。ラーテルはどこだ？」

「ああ、ラーテルなら向こうにいると思うぞ」

「分かった、ありがとう」

白虎に教えて貰い、森の奥へとルターと共に進む。　ラートルも癖があるけど、少しは普通だと信じて。

「束になっても怖くないぜ！　かかってこいセルリアンツ!!」

「ダメだこりゃ」

行けば早々、森に響く熱血少女、ラートル魂の叫び。　モフリたいフサフサ尻尾を揺らしながら、集るセルリアンに雄叫びを上げながら、喧嘩殺法を繰り出していく。

「うおおおお!!」

走り抜くようにラリアット。　先制攻撃の素早い左ショートジャブからのリズム感

あるワンツーストレート。相手は碎ける。

その声と騒ぎに誘い出され、ホイホイ集まり続けるセルリアン。俺とルターはとばつちりである。

「なるほど。元気良く声を上げるのが普通なんだね」

「体育会系はダメだ！ 腹黒ミツオシエ助けてくれッ！ どうせ側にいるんだろ

!？」

脳筋はアカン。 またもミスったコトを悟った俺は腹黒ちゃんに助けを求めた。

彼女なら助けてくれる……………俺は願いを込めた。

「腹黒じゃないです、ノドグロです！」

可愛らしい声が頭上で響く。 見上げれば木の上に小柄な女の子が座っていた。

やはりいたか。

して、スカートの中身は見えなかった。 残念。

「どっちでも合ってるだろ！ それよりラーテルの脳筋を何とかしてくれよ！」

「ならないです。でも、正直で真っ直ぐで良いじゃないですか」

「叫ぶのをやめさせてくれよ！ セルリアンホイホイと化してるぞ彼女！」

「まあ、いつもの事ですし」

「なるほど。ラーテルの普通も、組手なんだね」

「日常的に事故ってるだけだろ」

ツツコミつつも呆れる。ルターがセルリアン組手を始めないと良いけれど。

パークの平和活動という意味なら、それもありがたい話だが、今は普通を教えなければ。

「でも、このままだと危ないね。僕も加勢しよう」

そう言ってラーテルの元へ駆けていく青虎。ヒトを凌ぐ速さと、その速度に乗った虎の拳により、セルリアンは瞬時に碎け散る。

石を狙わずとも突き抜けるような鋭い拳は威力が凄まじいらしい。それとも、この時代のセルリアンはそうなのか？

「おおっ！　ホワイトタイ……じゃないな。　誰だ？」

「マルタタイガー。　ルターで良いよ」

「そうか！　ルターは強そうだな、ちよつとチカラ比べをするか!？」

「はははっ、今はセルリアンを倒そうか。　いつしよに、ね？」

「(きゅん)　お、おう！」

ラーテルはブレないね。　个性的で良いことだけど。　でも普通とは違う気がする。

やがて、サクツと殲滅したラーテルと青虎。　再び森に静けが戻ってくると、ミツオシエが降りてきた。　なんか、企みの笑みを浮かべて。

ふむ………　椰楡うか。

「いやー、どうも　こんにちはー！」

「おや。　君は？」

「ノドグロミツオシエです！」

「違うゾ。　腹黒ちゃんだゾ」

「違いますっ！」

小鳥にピーチクパーチク言われたが、可愛い囁りだね。　しししっ。

「こほん。　いやいや、大変でしたね、セルリアンが集まってきちやって」

「お前、ナニもしてないじゃん」

「あんじゅさんだって、何もしてないじゃないですかっ！」

「俺はヒトだし？　　戦闘とか無理ゲー」

「私だっつか弱いアニマルガールですっ！」

まあ、これは互いに仕方ない。　ヒトのチカラでセルリアンと肉弾戦とか無理だろう。

フレンズも、みんなが戦えるとは限らないからね。

「とにかく！　　お強いですねぇルターさん。　その強さを見込んで、ぜひ私のコマ

……じゃなくて、私の友達に」

「ルター君、気をつけたまえ。　この腹黒ちゃんは、君を駒にするつもり故」

「そ、そそそ、そんなワケないじゃないですかヤダなもー！」

動揺してるんですがそれは。 分かりやすいのも、可愛らしい。 もう少し揶揄いた
いね。 そそるナニかがある。

「コマ? コマって、紐で回して遊ぶ遊具の事かい?」

あら。 コマをご存知で。 かしこい。

そういや、蹴鞠とかサツカーとかボーリングとか知ってるんだっけ? 忘れたが。

どこで仕入れたのか分からないが、知識ある けものは理解が早くて助かる。
ジャイペンみたいな、勘の良い子は別問題だが。

「そ、そうそう! それで一緒に遊んだり!」

「良いね。 なんだか普通っぽいよ」

「そうそう。 普通っぽい……うん?」

ここでナニかに気付く腹黒ちゃん。 おや、この場でイチバン賢そうな彼女だ、彼女
の求めるモノに気づいたか?

「普通が良いんです？」

「うん。僕は普通の女の子になりたいんだ」

「なるほど」

気付いちまったか。だがしかし、腹黒ちゃんが真面目に良い子な普通を教える保証がない。いちおう、止めずに話だけは聞いておく。

「なら、私の下僕……こほん。私の手伝いをしてくれば、普通が分かるかもですよ」

あつ。ダメみたいですな。

「もう下僕っていつてるし。ルター、付き合うのは良いけど、願いは聞かない方が良いゾ」

「ええい！ 話の腰を折るんじゃないです！」

ピーチクパーチク可愛いなあ。でも、職員として少し小言を言わねば。

「折るついでに聞くけど。ホワイトタイガーにハチミツ買わせたんだったって?」

「ぎくつ……べ、別に喜んで やってるんですし、良いじゃないですか。それに、私じゃ ヒトの群れには勝てないし」

「そーだなあ。 まっ、別にお願ひするのは良いさ。 でも、エスカレートし過ぎて、危険な目に合わせるなよ。 もし合わせたら」

「あ、合わせたら……?」

「さあ? どうなるかな。 ヒヒッ」

「ヒエッ」

あえて不鮮明に、黒く内容を隠して言う。 それからどの程度まで許されるかも不鮮明にしておく。 ナニされるか分からない恐怖。 下手に言うより効果的だろう。

因みに。 ナニか悪さをしたら擽りか、お尻ペンペンの刑に処す。 平和的だろう? 決して女の子のカラダに悪戯したいワケじゃない。

「だ、大丈夫ですつて! あんじゆさん、心配し過ぎですう」

「あんじゆ君。 あまり友だちを怖がらせちゃダメだよ。 ミツオシエ、大丈夫かい

？」

「(きゅん) だ、大丈夫ですよ！　ちよつとした冗談の言い合いです」

おうふ。　ルターに微笑まねながら突つ込まれた。　いやいや、性別的には俺がツツコみたい。　変な意味で。　おっと、これ以上はいけない、話題を変えよう。

「すまん、冗談さ。　ところでラーテルは　どこいった？」

「うーん？　　そういえば　珍しく大人しいですね。　いつも騒ぐから、何処にいるか分かりやすいんですが」

すつかり忘れていたラーテル。　辺りを見渡す。　草木で視界が悪い為、探し辛いが、そこは　けものたちの出番。　ヒトより優れた能力が発揮される。

「空から探しましょうか？」

「それには及ばないよ。　匂いが近い……向こうだね」

とまあ、こんな具合である。　さすが。　戦闘能力のみならず。　こういう　けもの

成分もまた、魅力的だ。

ただしルターの場合、ヨツンヴァインなる事なく、さも花の匂いを嗅ぐかのような高貴な感じ。何処までいっても、その貴族オーラは消えそうにない。差別はしないけどぬ。

そうして、ルターの後をついて行くと。草陰にラーテル発見。なにやらしやがみこんで、もくもくとナニかしている。普段騒がしい子が大人しいと、逆に怖い。

「あつ、いたよ」

「ら、ラーテル？ どうしたん？」

「ラーテルさん、何してるんですか……っつて！」

前に皆で回り込めば、そこには熊の、じやなかつた。ラーテルさんがハチミツの瓶を抱えてペロペロ舐めていた。

口周りと手が、ハチミツでベトベトだ。その状態で近寄るなよ。絶対だぞ。フリじゃないからな。

「よお。一緒に舐めるか？」

「一緒に舐めるか、じやないですよー！　ホワイトタイガーさんをパシって……じやなくて、買ってきて貰ったハチミツ！　殆どひとりで食べちゃってるじやないですかっ！」

「そういえばそうか。　すまん」

「はははっ。　ラーテルは　食いしん坊なのかな」

「それもあるだろうが、脳筋がイチバンじゃね？」

セルリアンをボコした後、平和なヒトコマ。　個性的な子を相手にすると、大変な時もあるが、落ち着いて見れば可愛い子たちの光景だ。

ううむ……やはり、パークは良いところだ。　危ない事もあるし未来は不安だが、やる事をやっていこう。

「これ以上は日が暮れて危ない。　そろそろ帰ろうか」

「そうだね。　いろんな普通を見れて、考えるキツカケになったよ」

「良かった」

「……………あんじゅ君。　ひよつとして、ワイルドに食べるのが普通かい？」

普通の道は、
険しそうであるが。

方針は少しづつ、されど外界をも巻き込み始める。

ルターと森で別れ、研究所に戻った俺。取り敢えず報告をしなければ。

そんなワケで、記録保存チームの研究室に戻る事にした。部長は既に戻っており、カメラを優雅ゆうがに弄っている。

おのれ。ヒトに仕事を振っておいでからに……未来の為の作業をやってるんじゃないん？

「お帰り。普通は教えられたかい？」

「いや……知り合いのフレンズに協力してもらったんですが。微妙ですね。セルリアンにも襲われたし」

「そうか。だが、参考にはなっただろう」

おい。セルリアンに襲われた件はツツコミなしですか？ ヒヤリハットってレベルじゃなくね？ 口に出すと、また面倒になりそうなんでやめておくが。

「……………そうだと良いんですが。 変な事にならなきや良いんですけど」

脳筋レンズの影響で、ルターまであなったら嫌だなあ。 いや、ルターなら何やつても絵になりそうだけど。

「では、この件は終わりかな。 杏樹君はカコ博士の元へ戻ると良い」

「分かりました」

ああ……………やつと解放された気分。 ルターの将来は気になるが、今は前に進もう。 そう思いながらも、会釈えしやくして部屋を後にする。 して、最初に入ったカコの研究室へと足を運んだ。 特に考えなく、普通に入ったのだが、

「……………お帰り」

「ヒエツ」

冷やかな視線で、カコに迎え入れられた。 え、ナニ。 俺がナニしたってんだ。

ゴーホームなの？ w h y?

「た、ただいまー。あの、カコさん？」

「……なに？」

ヤバイ。これはキレてるとかキレてないとかじゃない。キている。

視線だけでやられそうだよ。永久凍土に閉じ込められそうな冷たさだよ。マン
モスタすけて。

「そのお、ナニを怒ってるので？」

「怒ってない」

ウソだゾ。絶対怒ってるゾ。幼馴染である、俺は知っているんだ。

昔を思い出した。本土でも似たような事があつたなど。アレは高校時代だったか。菜々とミライと一緒にいて、カコが後から来た時だ。

仲間外れにしたワケじゃない。カコ以外、時間より早く集まっちゃったから、少しダベっていただけである。そうしたら今みたいなの視線になった。それも俺に対してのみ。

おかしい。何故俺だけなのか。俺がナニをしたというのだね。

あの時は、そう。放課後、ふたりきりで何もトークしながら夜の動物園というイベントに参加したんだったかな。交通費、入園費は全部俺持ちで。カップル割引とやらで多少は安かったけど。取り敢えず、その時はソレで機嫌を直してくれた。だ、だから今回も似た手段で……………。

「この子……………だれ？」

「ッ!？」

スツと出されるは、一枚の写真。ドラマの刑事さんがやるような、警察手帳の提示のように見せてくるソレ。

見やれば、俺とルターが笑顔で顔を向けあい並列しているモノだった。側から見たら浮気現場を激写された、証拠写真。良く撮れてると褒めてやりたいところだ。

「図つたな! 図つたな部長おおお!!」

研究室に木霊する俺の絶叫。ヤツはとんでもないコトをしてくれました。若者

で遊ぶんじゃない。そのうちパワハラという事で訴えてやろうか!!

「ねえ……だれ?」

そんな俺に反して、絶対零度の視線を向けてくるカコ。くつ、コイツ目が絶滅種の子たちみたいになってやがる……!

いや、この子は俺の知るカコじゃない。カコみたいなナニかだ。血をも凍らせる雪女だ。ゆきやまちほーにお帰り。うん、冗談言ってる場合じゃない。

「ち、違うんだ!　これは偶然出会った……そう!　友だちだ!」

なんで浮気がバレた男の言い訳みたいになってるんですかねえ?　でも事実なんだ信じて。

「記録保存チームのヒトと、虎を探したついで、マルタタイガーを探すことになってね!　そしたら運良く見つかったのさ!」

「運良すぎじゃない?」

「いえすまむ?!」

もうダメ。カコが、ひとこと言う度にちびりそうになる。なんでこんな怖いんだよ。よよよ。

それは、カコを想ってるコトの裏返しか？ この緊張感は好意からくるものは？。これが恋ですか。いや違うだろ。違うと言ってくれ。

俺がドギマギしていると。カコがスツと寄ってきて耳元でネットリと呟いてくる。息が耳に当たって擦ったくも恐ろしい。それは心を直接冷やすかの如く。

「ふたりで お話しよ?」

「ヒイツ!」

ナニしようというのだね!

俺は恐怖で涙が出そうになるのを必死に堪えながら、ふたり向かい合って座ることになった。

ああ……パークライフの危機なのだ!

「マルタタイガー。 幻の青虎。 約100年前に報告があったという」

「あ、ああ。 記録保存チームにも聞いたよ」

「管理リストにも、動植物搬入出記録にもない。 観察記録にも、この手の記録はない」

ナニか。 そんな膨大であろう記録をもカコは知っているの？ だとしたら恐ろ

しい子！

いや、たぶん検索結果とかだろうけど。 全部は覚えられないだろ常考。

「そりゃ無いだろ。 あ、或いは意図的に隠しているとか」

「あんじゆみたいに？」

怖い。 怖いよカコ。 それと、それじゃまるで隠して……隠していたな。 転生の

話とか。 それとツチノコの存在。

「でも青虎の件は、その、隠すつもりはなかったぞ？」

「ホント？」

「ホントホント！　住んでる場所も分かったから、今度紹介するから！」

そういうと、表情が一転。パツと明るくなる我が馴染み。

ああ、そういう……ケモナーめ。

「分かった。　許す」

ナニに対してだい？　why？　けものさんと仲良くしていた件？

嫉妬深いんだか、愛に溢れてるんだか分からない。　でも、男として。　異性として

は　けもの　だけじゃなくて俺にもその……好意を寄せて欲しい。

それとルターは、見た目も性格もイケメンだ。　そんな子にカコが惚れてしまわない
だろうか。　ないか。　ないとやってくれ。

仲良く腕組みをする図が頭に浮かんできたら、イライラしてきたぞ。　紹介したくな
くなってきた。　でも紹介する、これ以上凍えたくないんで。

でもさ。　ちよつとは、その。　カコにも意識して貰いたくて、俺は変な話をしてし
まうのだった。

「あー。マルタタイガーは、ルターって愛称で呼んでるけど……イケメン系のアニマルガールなんだ」

「うん。写真を見る限り綺麗きれい」

「カコは、その、こういう男が好き？」

「えっ!?!」

好奇心と恐怖心が混ざった声で聞く。カコには驚かれた声を出されたが、コレは個人的に重要なので。

周りには、フレンズを含むと多くの女性で溢れている。みんな美人だ。下品な表現だが、幾度となく欲情したと言って良い。

だけど一線を越えるワケにはいかぬ。俺にはカコがいるのだ。個人の貞操観念かも知れないが、つまりそう。

まあその。ビビりつてのもある。

でもカコが俺に興味なかったら、悲しいワケだ。俺の一方的な片想い。それって虚しいじゃん。だから、興味を持ってくれるように、カコの好みになるように聞いてみたが、

「そ、その……マルタタイガーは アニマルガールで。女の子だから」

誤魔化された。少し攻めないとダメか。

「いやいや。男の好みの話だよ」

「も、もう この話は終わり！ 今後の話をする！」

赤面されつつ強制終了。真面目な話にシフトチェンジされては、これ以上は踏み込めないか。

カコの好みは気になるが諦めよう。取り敢えず未来の話だ。

「分かったよ。研究やパークの方針かな」

「そう」

言いつつ、机のバインダーを掴んで言葉を続けていくカコ。今度は真面目な表情。仕事モード。コロコロ変わる様は、見ていて楽しいが、今は真面目に聞こう。

「ジャパリパーク動物研究所のリソースは、あんじゆの言う未来に備えて割いていく。上の許可は得てあるから大丈夫。それから、ココだけじゃ無理があるから、他の研究所や関連施設にも協力して貰う事になった。本土や大陸からも応援が来る」

え、マジで!?

驚いた。俺が思ってるより、話は膨れている。パークだけでなく外界まで及んでいるとは。好転するのは良いが、逆にいきすぎて怖い。

「そこまで俺の話を信じてくれるのか?」

「少し、話を曲げている。たぶん、そのままじゃ信じてくれるヒトは少ないから」
「ああ……それは仕方ないか」

未来予知だのなんだの、信じるヒトは少ないだろうからな。特に外界は。そこは機転を利かせてくれたカコたちに感謝だな。もつと言えば、上手く丸め込んでくれたのだろう。交渉術が高いヒトがいたのだろうか?

そんな疑問に答えるように、カコは続けた。

「管理センターの友人背が低い女性。一部からは小動物とも。が良くしてくれたの」

でた。管理センターの友人。

いったい何者なのだ。面倒見が良い。畑違えど無条件の信用を置いてくれる。

何より、自身の仕事ではなさそうなのに、助けようと手を差し伸べるとは……。

そういう善人がいると知るだけで、心が救われた気持ちになるね。

でも、なんだか 知っている人物な気がするのだが……気の所為か？

「そうか。味方が心強いな」

「うん。後は調査隊からの報告や資料を元に動く。セルリウムや、サンドスター・

ロウの浄化装置ファイルターの開発も進める」

頑張れ。俺はスキルがないから応援だけしておく。本当に他力本願で申し訳な

いが、とりま希望が湧いてきた。

後は、上手くいくコトを願うしかない。

「また進展があつたら連絡する。今日はここまで」

「俺に出来る事は？」

「ある」

「それは？」

「ルターを紹介して」

「あつ、ハイ」

また、それぞれの仕事日常に戻るのか。

いや、今はそうするしかないか。

「その時」は突然に。

パークの未来を他力本願に任せつつ、俺は元の日常へ戻った。

仕事の合間に見る色とりどりのお客さんの笑顔、共に浮かぶフレンズの純粋な喜び。

寮に帰れば、ワンコなニホンオオカミがじゃれついてくる。そんな、当たり前。ただけど永遠じゃない、その場にしかない輝き。

ひとつとして同じものはない。刹那の美しさ。故に儂く、締め付けられる思いを胸に抱く。

ヒトとけもの が混ざり合う この地は、あとどれくらいか猶予が残されているのだろうか。流れ行く時間と笑顔を見送りながら、俺は付いて来たニホンオオカミに膝枕（うつぶせで、顎を膝に載つけて寝ている）をしながら、ボンヤリと考えていた。

「どうしたんですか、先輩？」

懐っこい、可愛い声クリアに聞こえて、我に帰る。瞬時に世界に色と音が戻ると

同時、顔を上げれば、ピンク髪的菜々ちゃんだ。

「お久——いんや、なんでもない」

「そうですか？　ベンチで物思いに耽っていたので」

明るい表情で、両手を背に回して聞いてくる菜々。幼さと相まって可愛いと思う。逆に　その様子から、未来を知らないのだろうとも思う。知らない方が幸せな事もあるけれどね。

俺は寝てるニホンオオカミの頭を　耳の間に手を添えるように撫でながら、テキトーに言葉を返した。

「今日もパークは　ヒトが　いっぱいだなあつて」

「アトラクション園内ですからね」

「菜々は仕事？」

「いえ。　私も先輩と同じです」

「サボりか」

「違いますよ！　　休みです！」

休みでも、飼育員の着るモスグリーンジャケットなんです。あまり仕事服で休日を過ごすのはマズいんじゃないかと思つたが。

よく見るとパークロゴである「の」の字が見当たらない。似ているだけで、私服だろうか。にしたつて紛らわしい。責めないけどね。

「はははっ。冗談だよ」

「てか、先輩は仕事中心!？」

「休みだよ?」

「もー!」

膨れる菜々。可愛い。

一方、まだ寒いのに短パンなのは突つ込むまい。

「まあ、隣座って」

取り敢えず座らせる。目の前に立たれ続けては、落ち着かないからね。

「——ニホンオオカミ、可愛いですね」

隣に座りつつ、ワンコスタイルで寝るニホンオオカミを見る菜々。優しげな表情で、ジツと寝言を見つめている。

可愛いのは同意する。同居していると、問題もあるが。下的な意味も含めて。

「ああ。困る時もあるけれど」

「マヨネーズ事件とか？」

おうおう管理センターさんや、もう少し情報を抑えてくれや。後世にまで語られたら、ツライさんなんだけど。

「……………やっぱそれ、有名なの？」

「知るヒトには」

「ありや黒歴史だ」

「ヒトに歴史あり、です」

「重い歴史だなあ」

歴史ねえ。個人はともかく、パークは どんな歴史を作っていくのだろう。既に世界中から注目されているワケだが、悪い方向に向かわない事を願う。

「そういう菜々は？ キタキツネ、元気？」

「元気です。この前なんて、出張している間に別荘を建てていたみたいで」

「どうせアレだろ。他のフレンズに やって貰ったんだろ」

「良く知ってますね」

「……キタキツネの性格からしてね、そうだろうと思つたのさ」

嘘です。 漫画を思い出して言っただけですハイ。 言うつもりはないけど。

言つても信じてくれないかもだし。 信じても、それはそれで面倒になりそうではある。

ふうと軽く息を吐き、前を向き直す。 陽の明かりを浴びて輝く観覧車に ネコ科の けもの を横したような、目立つお城が視界に飛び込んだ。

北風に吹かれ、青空を旅する雲の下。 対してお客さんとフレンズの、寒さに負けな い活気。 その中にある太陽みたいに眩い笑顔は、来たる春を呼び込むかのように映

る。

そしてこれからも。ずっとこの先も。この笑顔が続くようにすら感じられて。

それは同時にワクワクと不安であつて——上手くいく保証はない。上手くいったらいつたで、知らない世界に挑まねばならない。

上手くいかなくても、それはそれで生まれる輝きに期待してしまう。アニメと同じ世界になるんじゃないかとね。

そう。かばんちゃん達に会えるんじゃないかと。今の時代を犠牲にするような真似をする……俺が嫌になる。嫌悪感が湧いてしまう。

部長の言葉を都合良くして、それは自然の摂理だ、淘汰だと言い訳する。でも違う。

きっと俺は、そんなの望んでない。皆が平和に過ごせる、ヒトとフレンズが手を取り合う世界が良いんだ。

そんな汚い俺を誤魔化したくて。俺は口を開く事にした。きっと、似た想いを抱く彼女の声を聞きたかつたんだ。

「——葉々、もうパークに来て1年経つか」

「へ？ あ、はい。いろんな事がありました」

「俺もだよ。濃厚な1年だったね。これからも色んな事が起きるだろうけど、共

に頑張ろう」

「はい！　これからも、宜しくお願いします」

「おう。　よろしく」

そう……これから、色んなコトが。　事件が起きる。　更に進めば、例の異変が。

それを良しとするか、悪しとするかはヒトによつて違う意見だろう。

視線を下にする。　ニホンオオカミとは、あとどのくらい一緒にいられるだろうか。

そう思いながら頭を撫でたら丁度、ふわあと大きな欠伸をして起きるところだった。
可愛い。

「……………むにゃ？」

「起きたかい。　こんな寒さと喧騒の中で寝れるとは、羨ましい」

「おはよう、ニホンオオカミ」

「……………あつ！　　なな！　　おはよう！」

寝起きいちばん、俺じゃなくて視界に映った菜々の名を上げる。　なんだ、菜々の事

を知っているのか？

ニホンオオカミも単独で都市部や、どこかを歩き回つてるようだからな。その時だ
ろうか。

「会ったことあるのか」

「はい、都市部で」

ふむ。交友の輪が広がるのは良い事だ。ニホンオオカミは明るく社交的だから
な、そして俺がますます根暗になる、なつちやうのかよ。

「なな も、ゆーえんちに遊びに来たの？」

「まー、そんなトコかな」

「そつか！ あ、じゃあさ！ かんらんしやに乗る!? 高いところから、色んな
気になるモノが見えるよ！ 一緒に探そうよ！ あんじゆ も一緒に！」

元気だなあ。ニホンオオカミは、ベンチで寝る前も遊びまわってたんだが。

まだ足りぬか。振り回される身にもなつてくれよ。でも、彼女の笑顔を見ている
と許してしまうな。親の気持ちって、こうなのかな？

「俺は良いが、菜々は？」

「大丈夫ですよ」

「よし、行こう」

そう言つて、3人ベンチから立ち上がる。観覧車まで距離はない、普通に歩いていける。大きくて目立つし迷うことはない。

しかし、この観覧車。アニメに出てきたヤツと同じだろうか。いや、違うか。アニメにはけものキャッスルなるものは無かつたはず。ライオンたちの拠点として、和風な城があつたが……ココが同一世界とも限らないしな。

しかしなんだ。パークの建築物のデザインって凝つたモノが多いと思う。けものみならず、そういうところに着目するのも面白いかも知れない。

などと笑みを浮かべて思いつつ、皆で移動していると。

——ソレは鳴り響いたのだ。

ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！

それはパークセントラル全体に響く五月蠅い音。とにかく無差別に緊急を知らせる警報音。それを頭が理解するより早く、スピーカーから間髪入れない女性のアナウンスが流れ始める。

『パーク・セントラル内にセルリアン侵入。大変危険ですので、係員の指示に従い避難して下さい。繰り返します——』

努めて冷静な声、すぐさま対応する周囲のプロの接客員。
でも俺は——。

「菜々、マニュアルに従った行動を取るんだ！ ニホンオオカミ、俺について来い！」

「え、えと！ わかったよ！」

「せ、先輩!? どこ行くんですか!?!」

「ジャパリパーク動物研究所！」

俺は弾かれるように駆け出した。お客さんや、パーク職員、フレンズとは逆方向に。

油断していた。事件はいつ起きるか分からないってのに！
カコ……………無事でいてくれよ。

パーク・セントラル事件 発生

それは前触れもない、台風や土砂降りのような災害であった。

突如として、島を丸ごと動物園とした超巨大総合動物園《ジャパリパーク》に来園するお客さんの玄関口《パーク・セントラル》が謎多き敵《セルリアン》に襲われたのだ。

後に《パーク・セントラル事件》と呼ばれる大きな事件の発生。アプリ版へと繋がる転機。

時期は分からずとも、来る事は予想出来た。

でもさ、早すぎじゃね？

それが俺の感想。

何故なら漫画版は約1年を描いていたようだから。世代交代の話も聞かない。

もう少し余裕があつて良かった筈なのだ。

「くそつ、セルリアンめ！　もう少し待つて良いだろ！」

だが起きてしまったものは仕方ない。起きた事に対して最善を尽くさねば。

俺は悪態をつきながらも、ニホンオオカミと共に走る。

鳴り響くサイレンの中。多くのお客さんと職員、フレレンズが港側へと避難していく一方で、俺と相棒のニホンオオカミは波に逆らって逆方向へと進んでいた。

目的地はジャパリパーク動物研究所。俺の幼馴染、カコが勤める場所。俺はそこに走って向かっている。車なんて無いからね。

前世の浅い記憶をアテにするならば、この事件の際にカコは、セルリアンに襲われてしまうからだ。

結果、カコは輝きを奪われ昏睡状態。事件収束まで目を覚まさない。

また、奪われた輝きから《セルリアン女王事件》へと発展。全ての輝きが奪われそうになるという、パークの危機に。

しかし。園長と後々呼ばれる英雄やミライ、第2世代サーバル一行の活躍によって、事件は収束。つまり、放置しても野郎とフレレンズが解決するのだが、

「カコはッ！　俺がッ！　守るッ！」

大切な幼馴染を、放置出来ないよなあ？

セルリアンにチヨメチヨメされるなんて、歴史が許しても俺がゆるさ”ん”！
なんなら俺も混ぜろ。違った、そういう問題じゃない。

緊急事態なのにアホな思考をしながら走りつつ、気が付いたら研究所前まで来ていた。我ながら緊張感なさ過ぎである。

「セルリアンの匂いが いっぱい するー！」

「早くね!？」

ここに来て、ニホンオオカミが悪い情報を教えてくれた。

前を見やれば、白衣を着たヒト達が書類やらバックやらを乱雑に抱えて外に飛び出しているではないか。

セルリアンは確認出来ないが様子からして、セルリアンが中にいるということ。して、白衣の中にカコの姿は見当たらない。

これはマズイ。そう思って、すぐにでも突撃しようと思っていると。

「ああ！ 杏樹さん！」

俺を見つけた知り合いの警備員が叫ぶ。手に持つ警棒が心許ない。

「突然セルリアンがつ!？」

「見りや分かりませう。貴方は警備してたんでしょ。みすみす通したんで?」

緊急事態に興奮しているのと、上手くない状況へのイラつきで、辛く当たってしまった俺。

相手の努力や苦勞を知らない、言葉が過ぎるものだ。自覚はある。だけどヒトも生き物である。感情の完全制御は効かない。

「裏から侵入されたんです! それと、相手は大群。警報するので一杯です、ひとりじゃ無理だったんですよッ!」

「もういい分かりました。カコ博士は見ましたか?」

「い、いえ。見てません。皆と一緒に避難したかと思えますが」

狼狽しながらも、曖昧に答える警備員。ホンマつかえ……いや、仕方ないね。

緊急事態である。バケモノが襲って来て冷静でいられる方が変だろう。

研究員の数も、中にいたフレンズの数も、結構多い。格好も白衣、似たり寄ったり。いちおう、カコはパリ●リバー、縞々の尻尾な髪飾りをしているが、混乱の中では意識しないと見つけられないだろう。

それと警備員の話はアテには出来ない。アプリ版のミライの話的に、避難はスムーズだったそうだが、カコは襲われた。一体、ナニしてたんだらうか。

「まさか、けもの病院か？」

ふと思ひ出す。第2世代サーバルとなる(筈だった)、脚を骨折した けものサーバルを。

アプリ版のサーバルの話だと、励ましてくれたヒトがいたらしいが……たぶん、カコの事だったのでは？

だとしたら、カコは病院なんじゃね？ 研究所に来た俺は無駄足じゃん。

悩んでるヒマはないというのに……どうすれば。そんな時、警備員と隣のニホンオオカミがヒントをくれた。

「カコ博士は研究所から出ていない筈です。記録にはありませんから」

「あんじゅ! 電話通じない?」

「はっ!?! その手があったわ」

ここに来て、文明の利器の存在を忘れていた。それを賢さは劣ると内心思っていた。ニホンオオカミに指摘される恥ずかしさ。

コノハ博士やミミちゃん助手が聞いたら罵倒されそうである、して喜んじやう、喜んじやうのかよ。

だが恥じるのは後でもできる。慌ててスマホを取り出し、電話帳からカコを選択。数秒のコールの後。

『ただいま、大変混み合っております——』

「ダメだ、パンクしてる」

しまった。そりゃパンクしていてもおかしくないわ。

諦めてスマホを仕舞う他ない。たぶん、お客さんや職員が一斉に電話してるのだから。家族や仲間へ安否確認で。

緊急事態なので、焦る気持ちはある。だが仕方ない。都合良くいかないものだ。繰り返しコールする暇もない。研究所にいても、何処にいるか分からない現状、ココは突撃するしかない。

「ばんく?」

「みんな電話してて、繋がらないんだ。とにかく、中に入る。俺は戦えん、ニホンオオカミが頼りだ、付いて来てくれ!」

「分かった!」

「杏樹さん! 無茶です、危険です! 中はセルリアンが侵入してるんですよ!」

警備員に止められた。そんなの知ってる、でもココで何もしなかつたら後悔しかない。

「大事な馴染みを取り残されてるかも知れないんで」

「避難してる可能性もあります! 今は身の安全を優先して下さい!」

もつともである。助けに行ったら、自身も被害に遭うなんてよく聞く話だ。

だが今回、命綱を連れて来た。ココは信じて突撃だ。

「フレンズがいるんで大丈夫です」

そう言つて、俺は所内へと走り出す。背後からの制止の声も聞かずに。

所内に入れば、喧しい警報音。 偶に聞こえる破壊音。 ヒトより聴力が良いであろう、ニホンオオカミはしかめっ面。

すまない。だが我慢してくれ。 カコを探さなきゃならないんだ。

「匂いは？」

「する！ こっち！」

そういつて、先行してくれるニホンオオカミ。俺は後に続く。助かる、俺だけでは何も出来なかつただろう。

戦闘は前提としていないとはいえ、ヒトの目での搜索は困難だ。時間が掛かる分、セルリアンに出会すだけでなく、カコがチヨメチヨメされる危険も高まる。

その点、ニホンオオカミはヒトより嗅覚が優れるし、たぶん戦闘もこなせる。なにより研究所は元々彼女がいた場所でもあるから、頼りになる。

「ココー」

そうしてセルリアンに会うことなく辿り着いた場所。それは……。

「カコの研究室じゃないか」

とある扉の前に辿り着く。側面のネームプレートには『カコ』の文字。

研究所に来て、色々話した場所でもある。

なんでココに……？

まさか警報や騒ぎに気付かないなんて事はあるまい。仲間の研究員だっているの

だ、声掛けだつてある筈。

ましてやカコは副所長。放置は出来ない………いや、ヒトは緊急事態の際、本質を露わにする。身の可愛さを優先して、他人に構わず蜘蛛の子を散らすようにフレンズや他を見捨てて逃げた可能性はある。

そうだとしたらヒトは……それがヒトだとしてもやはり……。

「考えるのは後だ！」

ネガティブ思考に溺れる自身に一喝。今は今すべき事を為す。為さねばならぬい。

俺は扉に体当たりするように勢い良く開けようとするも、

「あ、開かない!？」

ドアノブが回らない。押しても引いても開かないときた。

内側からロックが? でもこの騒ぎだぞ?

怖くて出られないとか。いや、そんなコトは……。

「おい！　おいカコ、俺だ！　杏樹だ！　いるなら返事くれ！」

ドアを乱暴にノックするも、声は返ってこない。逆に返ってきたのはガタタツという物が崩れる音。

やはり「いる」。それがカコかは分からないが、カコだと信じる。

「セルリアンが！　セルリアンが来たよ！」

ニホンオオカミが吼えた。振り向けば、廊下の空間を埋めるようにせまる大型のセルリアンが。

赤く、頭部はプテラノドンみたいなシルエット。アプリに出て来たセルリアン、アカガウだっけか？

狭い廊下を挟むようにソイツは、遅く、だけど確実に。俺を喰おうと、身をくねらせ攻めに来た。

「くそっ!？」

焦る気持ち色が濃くなり、比例してドアを乱暴に叩いた。

猶予がない。赤点頭でも分かる結論。

ニホンオオカミに任せようと思ったが、戦闘経験はたぶんない。ほぼ都市部暮らしの都会っ子なのだ。

例え戦えても、初陣で大型セルリアンは無茶だ。ならば。

「おいカコ！ ヤバイんだよ、いんなら早く出てきてくれ——ニホンオオカミイツ！」

「な、なに!？」

ダメだ。

俺は判断を変えた。ココで開くかも分からない扉と相撲して喰われるくらいならばと。

俺は扉から離れて——。

「この扉！ ぶっ壊せえッ！」

乱暴に、そう叫ぶ。

押してダメなら引いてみる。それもダメならと。

そして言った刹那。ニホンオオカミは疑問や抗議の声を上げる事もなく、逡巡なく腕を白く輝かせて、鉄製扉に振り下ろした。

ドカアンツ!!

大きな音。へしやげる鉄扉。部屋内に吹き飛ぶドアだったもの。

フレんズのパワーと不思議に驚かされつつも、俺は言う。

「良くやった!」

言いつつも、中へと入っていく。撫でくりまわす余裕がない。今はカコだ。

「いるのか!?!」

研究室内を見渡す。散乱した紙片の中に、カコが女の子座りで震えていた。なんだ、いるじゃないか。

手には何かしらの書類の束。何か。研究中に警報を聞いて、ビビって動けなくなつたのか？

「……………あ、あんじゅ」

震え声で呼ばれる。怖い想いをさせて悪かったが、緊急事態だ。今は逃げねば。

「何してたんだよ。すぐ逃げるぞー！」

手を取り、無理やり立たせる。震えている様子はない。自力で歩けそうだ。

俺は引つ張るように廊下に連れ出した。アカガウは通路に引つかかったのか、あまり進んでいない。口を大きくバクバク開閉しているサマは恐ろしいが。リアルパツク●ンかな？

「行け行け！」

「うん！」

「カコ、歩けるな!？」

「だ、大丈夫」

「よし」

ニホンオオカミを先行させ、俺はカコの手を取り、早歩きで出口を目指す。

だが走りたい衝動をグツと堪える。曲がり角でセルリアンと運命のゴツツンコなんて味わいたくないんでね。

「ま、前！」

だけどタイミングが合わずとも都合が悪い事もある。ニホンオオカミが吠えたので、前方に注視すると、そこにはセルリアンの群れが。

「さつきまでいなかったろ……ッ！」

ヌツとエントランスに集まっていたときた。出口は群れの先。突破は無理か。

ドギツイ色で目がチカチカするまである。

受付カウンターの上には、そら豆みたいな形のセルリアン。コチラに気付くと、ピヨイと飛び降りて向かってきた。どこに足があるのか、どうやって動いているのか、ホント謎。

しかしなんだ……コイツか？　正史でカコを喰いやがり、女王にまで成長したヤツは。

「下がって！」

「頼む！」

ニホンオオカミが唸り声を上げて、セルリアンと対峙する。直ぐに飛び掛かり、ドツタンバツタンと埃を立てる。

ところが戦闘に不慣れだからか、中々倒せない。そうこうしている間に、他のセルリアンが集まってきてしまった。

「下がれ！　エントランスは諦める！」

「ウウ……分かった」

「カコ、他の道、非常口は!？」

「さ、さっきの道と……逆」

「悩む暇はない。行こう!」

そう踵を返して――。

「ッ!？」

アカガウが見下ろしていた。いつの間にか追い付いてきたらしい。

この警報とセルリアンの数だ。ニホンオオカミも音や匂いでピンポイントに分か
らなかったのだろう。

「ハハ………マジかよ」

「――あ」

カコの、なんとか声に出た、恐怖ではない、諦観の声が聞こえ。

大口が、闇が迫り――。

「逃げてッ!!」

ニホンオオカミの悲痛な叫びが木霊する。それらは距離から間に合わないと本能が察してからくるものか。

なんにせよ、俺も本能からか。カコを守らねばとほぼ無意識にも、カコをこの場から撥ねとばす。刹那。

バクンツツ!!

そんな音と共に、俺の意識は闇の中へと消えていった……。

最後に。どこか遠くでカコとニホンオオカミの叫び声が聞こえた気がしたが、それをしっかりと感じる余力は、既になかった。

奪われたナニかとカラダ。

聞だった。限りない黒は深淵、無言でいて尚も語り続ける。自身は立っているのか或いは逆さまか、いよいよ五体どころか存在も感じられぬままに声を聴く。

聴く以外は許されないようで、実は考えられた。ただその声がお前の全てなのだと感じるままに浮く。

——お前はヒトだ。

ヒト。違和感なく、スツと入ってきた。

そして、同時に嫌悪感が増す。

ヒトの笑顔の裏側、本当の素顔。それはオゾマシイ欲望に塗れた悪魔の姿。

現生人類が属する種の学名はホモ・サピエンス。ヒト属で現存する唯一の種。

ネアンデルタール人等、かつては他の種もいたそうだが、絶滅。

IUCNのレッドリストでは、軽度懸念。

それは良い事のように悪く感じる。何故だろうか。自然界から大きく離反して

いるからか。　そも、どうして今、このような思考に至るのだろう。

というか、ココどこだっけか……。

そんな俺の思考に構わず、声は続く。

——ヒトは多くの　けものを　絶滅へ追いやり続ける。　苦しませ続ける。

地球から　消えるべき　のけもの　だ。

正論を言っているように感じた。　のけもの。　それはヒト。

同種で平気で傷つけ合える、欲の為なら無慈悲な殺しをも行える悪魔。　いない方が、駆除された方が良い。

——だが　我々　セルリアン　は　ヒトにより絶滅した種と　失われた　輝きをも　再現する　永遠に。

はて。　どこかで聞いたような話だ。

あれ。　これ……セルリアン女王の言葉に似てるね。

——それには ヒト は 邪魔なのだ。
 方舟にヒトは もう 乗せられぬ。

特に オトコ は。

へ？　なんでオトコ？　why？　アダムだけ追放!?

一方的に語られた挙句に邪魔者扱いされたんですけど。軽くトラウマなんでヤメテくれない？

てかさ。あんた誰よ!?

——きえるがいい。

刹那。視界の闇が、霧が払われた。

それは眩い白が瞬時に広がり、俺の視界も埋め尽くされ——。

「うわあああ………あ？」

目を開けると、知らない天井。新しい世紀な世界じゃないよなココ。周りを見渡す。全体的に白く清潔感溢れる部屋だ。同時に、自身はあるベッドで寝ている模様。

片側には丸椅子に座って、俺の膝にすがふように涙目で眠るカコとニホンオオカミ。

「病院？」

たぶん、そうなんだろうと思う。記憶にある、似た光景から察するに、そう予想する。

病院じゃなかったら、逆にドコなんだろうか。でも、なんで病院にいるんだっけか……あつ！

「そうだ……俺、セルリアンに喰われたんだ」

思い出せば声と身体が震えてしまった。その所為か、声が低い。女みたいになつてゐる。

情けないが、仕方ない。

恐怖。 まつこと恐怖体験であつた。

フレンズのように、けものプラズム体ではない、このヒトの身体を失う事は無いにしてもだ。喰われるという、生物にとつては忌避したくなるオゾマシイ経験をしまつた。

そして。 ナニかしらの輝きは奪われた。

その事実は未知の悪疫に罹患したが如く。 詳細不明の恐怖。 ゾゾゾツと鳥肌が

止まらない。 ナニカサレタヨウダ。

「あーマジかよ。 何の輝きを奪われたんだ……ナニがあつた？ カコたちが無事つぽいから良いけど」

解決するには無意味の、そんな女みたいな呻きに気付いてか。 耳の良いニホンオオカミがモソツと動いた。

その動きの衝撃か、カコも同時に起きてくる。カーテンの隙間から洩れる陽と相成って、美しい。

「……………あんじゅー！」

「あんじゅー！」

硬直する俺を半目で確認されると、次には目を見開いて叫ばれ……抱き着かれた。

柔らかくて良い匂い。それは普段の俺なら安心したりドキドキしちゃうものなのに。

どういうワケか。俺には不安しかなかった。

「良かった！ 良かったよお……！」

ニホンオオカミは涙を流しながら。シーツを濡らすのも構わず頬擦り。

撫でたい。そんな気持ちがあるのに、ナニかが欠如している。

その思い出せそうで、思い出せない感覚は不快感となり、形容し難いドロドロした感情が湧いてくる。

「もう！ もう起きないんじゃないかと……無茶しないでよ！ あんじゆを失つたら、私は……」

カコにはムギユツと抱きしめられた。豊満な胸が押し当てられるも、興奮しない。物足りなさを感じる。何故か劣等感まで湧いてきた。

柔らかさが。温もりが。優しさが。

それらが羨ましい。ココに今、感じているのに……俺に備わってないからか。だから感じたくない。感じる程に悲しみは大きくなる。

震える身体。それも密着すれば、異変に気付くもの。カコに顔を覗き込まれて、俺は尋ねられた。

「……大丈夫？」

大丈夫じゃ、ないです。口を開こうとするも、震えて中々思った事を言えぬ。

「あんじゆ？ 具合悪いの？」

ニホンオオカミも心配して覗き込む。

ハイライトのない つり目。 怖いようで可愛い、彼女のチャームポイント。 その愛らしく、溺れたらまずまずとイク深淵に沈み切る前に。

俺は何とかもがく声を発した。

「い、いや……大丈夫。 突然だったからさ、驚いただけ」

愛想笑いを浮かべて取り繕う。 だが仕方あるまい。 変に心配させるワケにもいかないだろう。

「——医療チームが言うには、身体は良好という事だけ……輝きを奪われたのは間違いでない。 無理、しないで」

良好？ ナニか違和感あるんだけど。 声とか。 何だか上半身にも下半身にも違和感あるんだが……。

幼馴染のカコには、その具合を察せられている気がするね。 誤魔化すのは無理

か。

こりや見張られそうである。自由行動が出来ないかもな。

「あー、うん」

歯切れの悪い返事を返してしまった。さも無理しますよ、脱走しますよという印象を与えてしまうというのに。実際、その腹であつた。セントラル事件が起きたというのに、寝てられないじゃん？

でも不用意な発言で、カコにジト目をされるといふ。嬉しくありません。

それはそうと。喰われた後、ナニが起きたのかは聞いておきたい。セルリアンに喰われて、吐き出される事はあるかも知れないが、今の状況から察するに、救出されたと考える。

「俺が喰われた後、ナニが起きたか……教えてくれる？」

「ええ」

カコは応じてくれた。良かった、グロいナニかだという理由で規制されなくて。

「ニホンオオカミが必死になって、あんじゅを取り返そうとしたの」

「私、頑張ったよ。でも跳ね飛ばされて、返り討ちにあったの」

しゅん、と垂れ耳になるニホンオオカミ。　思い出して落ち込んでいるらしく、可愛
い。

でも何故か。　頭を撫でたり、励ます言葉が出てこない。　怖い。　その温もりが。

この一点を理由に触れられない。

そんな俺の心境を置いて、カコは説明を続ける。

「でも所内にいたアニマルガールが来てくれた」

「そうそう！　マンモスとね、サーベルタイガーとね、ジャイアントペンギン！」

暗い表情が一転。　嬉しそうに尻尾を立ててブンブン振る我が相棒。　感情の起伏

が激しい。

そういやニホンオオカミは研究所でレンズ化したんだもん。　久し振りに会え

た面子とタイミングが相当嬉しかったのだろう。

だがな……なんでフレンズが残ってたんだ。ヒトが一方的に復活させておいて、一方的に見捨てたのか？

「そうか。その子たちがセルリアンを倒して、助かったワケか」

「うん！」

「礼を言わなきゃなあ……でも、フレンズが所内に残っていた理由は？」

ドロドロした気持ちを抑えるようにして、カコに尋ねる。

別にカコや、研究結果を悪いとは言わない。でも、内心、何故か今まで湧かなかつた悪感情が湧いてきてしまうのだ。

ヒトがいなければ、あの子たちは……。

「残っていたんじゃないの。スタッフと共に一度は脱出したみたい」

「ならなんで？」

「警備員が教えたみたい。中にあんじゅが入ってしまった、と」

ああ……それで救助隊の如くやって来て、俺をセルリアンの体内から引きずり出して

くれたのかな。

ふと、かばんちゃんの物語を想う。ラストの方は衝撃的だったなあ。

一方で俺は、純粹じゃないし優しくもない。義人でもない。悪ですらある。未
来については他力本願であつたワケで。

「……警備員は？」

「外で避難指示しなきゃいけないって、中には来なかつた」

あつそ……本当は怖いから見捨てたんでしょ。

いや、仕方がないねと言ってあげるべきか。ヒト個人がセルリアンの大群に立ち向か
えるとは思えない。俺を制止したのも、その辺からか。それを無視して突撃した俺
にも非はある。

「俺を喰つたセルリアンは？ 倒されたのか？」

続いての質問。質問ばかりで悪いが、重要故に。

女王事件の件がある。それは、こうしてカコを救えたから回避したと思つている

が、俺の輝きから発展するかも分からない。

それから夢の話が気掛かりだ。こんな俺の輝きでも、女王みたいなヤツが生まれるかも分からん。

まあ、赤点頭の輝きなんで。ただの中二病で終わる可能性もあるが。寧ろ終われ。

そして園長たちに解決される。勝った！ セントラル事件 完！

「ううん」

カコ、首を横に振る。ダメみたいですね……。

「エントランスにいたセルリアンの数が多くて、逃げるのを優先したの」「ゴメンね あんじゅ」

いや、まあ仕方ないね……。

ニホンオオカミとしては、倒したかったのか謝ってきたけど、謝る事はない。無事逃げられた、それが大切だと思う。

「助けてくれただけでも 有り難いよ。 みんな、無事に？」
「ええ。 全員、無事。 避難した後の点呼確認でも、異常なし」

良かった……俺の所為で、誰か喰われたら申し訳ない。 特にフレンズは 喰われると下手したら けもの に戻ってしまう。

絶滅種の場合、骨や毛に戻るのかは分からないけど。 かばんちゃんの物語を見るに、そんな事はないかもだが。

だとしても。 けもの になった子は想い出が消えてしまうという。 悲しい。 それは避けたい事案だ。

「良かった……その、質問を重ねるようで悪いんだけど。 ココはどこ？ どれくらい寝てた？」

これもまた、重要だ。 ニホンオオカミがいる事から、ジャパリパークの何処かだろう。

島の外に、フレンズは行けないはずだからだ。 行くと、けもの に戻るんだっけか

?

「都市部に近い、港より——病院。 あんじゅは2日 寝ていた」

「うへえ」

2日も。 いや、逆に2日で済んでラッキーか。 カコは昏睡状態だったんだもんな。

それと比べたら、かなり良い。 輝きを奪われたのは不安だが、日常生活や会話に支障はない。

うん……でも。 その日常は、今は無いんだ。 2日でセントラル事件が解決したとは思えない。

そう考えていると、また気になる事が増えた。 ニホンオオカミじゃないが。 園長や、その愉快的な仲間たちはいるのだろうか。 園長

オイナリサマは？ セーバルは？

カコに聞いても分からない話だろうから、これは自分で確かめねばならない。 今すぐは難しいだろうけど。

では現状、パークがどうなってるか聞いてみよう。

「パークは、どうなってる?」

「休園状態」

やっぱりな。

そこは予想通りだ。

「セルリアンが大量発生していて、アトラクション園内もサファリも危険。お客さんは、パークの外へ避難済み。都市部にいたアニマルゲールは、都市部よりかは安全だとしてサファリ区分に行っている」

「職員は?」

そういん たいきよめいれい
「総員退去命令?」

「一部は残ってる。主に管理センターと森林警備員、調査隊かな」

シヤチクウ!

だが仕方ないのかも。管理センターは災害発生しているからこそ、逆に逃げられない立場。混乱を収めようと努力しているところか。パークのみならず、外界との連絡もある。かの小動物、大丈夫だろうか。

森林警備員は……知らん。平時じゃなくなってしまったパークで、セルリアンの群れとドンパチしてるのだろうか？

調査隊は……ミライたちか。この状況の打開の為に動いているのかな。

ミライは、ひよつとしたら園長と合流しているのかも。気になると思いますよ。

「ココは安全なのかな？」

「まだ安全。でも長くはない。今日もセルリアンが侵入しようとしたから……覚めなかつたら本土に移送する事になっていた」

「……カコとしては、目を覚まして、もうしたい？」

「ええ。私が言うのもなんだけど……あんじゆを危険に晒したくはない」

研究室にこもっていた事を気にしてか。そういう言い回しをされた。

あの時、警報響く中、なんでこもっていたのだろう。手に持っていた書類の束は、そんなに大切だったのだろうか。

また質問を重ねようとした時。今まで黙っていたニホンオオカミが声を上げる。小さな、だけど確かに聞こえる声で。

「——あんじゅは」

「うん？」

「今度こそ守るから。だから、お願い……………行かないで」

「……………ニホンオオカミ」

快活な彼女らしくない、静かで真面目な声だった。　　だけど今にも泣き崩れそうな懇願の声。

彼女も、彼女なりの考えがあるのだ。　　フレンズは一見、のほほんとしている子も多いが、内心で隠している感情やヒトのような、複雑な心境を持ち合わせる。

決して。　　フレンズだから表の笑顔だけが全てではないのだ。　　もちろん、表も本物であろう。　　だけど。　　時々見せる裏の顔も本物だ。

俺は知っている。　　裏の気持ちを自ら暴露する勇気を。　　恐怖を。　　苦しさを。

それでも、それでも。　　それをする。　　心が助けを求めているから。

受け入れてくれないかも知れない。

拒絶されるかも知れない。

状況が悪化するかも知れない。

見捨てられるかも知れない。

そして最後の抛り所にサヨナラされたとき。

ココロを……………亡くす。

それが今の彼女。脆く壊れかけた、心のSOS信号。それは重大なものだ。それを真摯に受け止めず無下にする。前世の経験もある、俺には出来ない。例え、受け止める器がなくても。受け入れるのが怖くても。

だから、俺は。

「分かった。俺もパークに残ろう」

「ッ……………！ あんじゅ！ ありがとうッ！ ありがとうッ！」

感情が弾けて、わんわん泣きながら顔を埋めてくるニホンオオカミ。

そんなに俺が大切かい？ そうならば、嬉しい話だけれど……………やはりか。それを

失った時を考えてしまう。怖いなあ。

今まで、こうも強く意識してこなかったのに。セルリアンに輝きを奪われた影

響だろうな……………流石に気づく。

自然に治れば良いけれど。この身体の不調も合わせて。経過を見なきゃな。

「……あんじゅ」

カコ。そんな目で見るなよ。お前だって、俺ならそう言うって予想出来たる？
フツと笑って見せて。同時に申し訳ないと謝っておく。

「ゴメンな。またお前を悲しませるかも知れない。だけど、俺はパークに残るよ」

「うん。そうね、あんじゅなら……そう言うって思ってた」

「さすが馴染み。して、どうする？ 止めるか？ 強制移送？」

「ううん。一緒に、パークに残る。医療スタッフには私から伝えておく」

「そっか。苦勞ばかりかけるな、ワリイ」

「助けてくれたもの。これくらい、ヒーローのワガママは聞いてあげなきゃね」

ふふつと微笑まれた。ホント、カコには敵わない。そして守れて良かったと思う

よ。心の底からな。

でもヒーローは否定しておく。昔の話から引つ張つて言っている節もあるんだろ
うが、この事件の英雄の話ならば、別にいるからな。

「ヒーロー、か。 たぶん……それは別にいる」

「手紙であつたヒトのコト？」

「そう。 後に園長さんと呼ばれるヒト」

「今は、それらしき報告は聞かないけれど。 手紙の通り、パークが襲撃された以上、
きつと現れるのかな」

「ああ。 俺は信じている」

昔を思い出す。 神社で出会つた男の子を。 あの、信じる事が出来る真つ直ぐで純
粋な瞳を。 今思うと、キユンと不思議な感覚があるが……あの子が園長だったかは知
らない。 だけど、きつとそう。 俺も信じよう。 それが行動力の原動力になり、誰
かを守り、幸せにしていুকかも知れないのだから。

「さてと。 そんなじゃ、冒険の前の挨拶でも……ニホンオオカミ」

「くうん？」

「そしてカコ」

「えっ？」

「これからも、よろしくね」

「ッ！ うん！」

「ええ。 これかも、この先も」

彼女たちの、快活全開の笑顔を見て、俺も笑みが溢れた。

冒険の時間が始まる。 パークを救うため。 フレンズのため。

ヒトとフレンズ。 共に、これからも歩んで行こう。

「うん？」

そう思って、縫り付くニホンオオカミを そつと剥がそうとして下を向いた時。 ピ

シリ、と思考が停止した。

ニホンオオカミの胸とは別の、別の膨らみが見て取れた。 それは自身が着用する患

者服、それが明らかに膨らんでいる。 胸元で。

次に、手を見る。 妙にツヤツヤしていて、細く、綺麗だった。

——アレ。俺って こんな綺麗だったか？
今更ながら疑問に思った。

「……………」

本能がそれ以上考えてはならないと、ジャツジを下す。下しつつも、最後の希望と欲望のままに、俺はソツとニホンオオカミをズラして——。

「わ、ふ？！」

「あ、あんじゆ。それ以上は止めた方が」

制止の声は、もはや頭に入ってこない。

そのままズボンをズラして、中身を確認し——。
無いハズの双山と割れ目があり。

逆にあるハズの、唯一無二のムスコとイナリが無い。

つまりは。

つるつるしてた。

「いやあああああああ!?!」

思わず上げた悲鳴は、やはり従来の声ではなかった………。

心は男のままでも。

身は女の子のソレであつたのだ。

女になつても前進あるのみ。

超常物質サンドスターは、元がオスでもフレンズ化の際に容赦なく女の子にしてしま
う。

その理由や仕組みは全くの謎であり、身体の構造は、ケモ耳や尻尾がありながら、ヒ
トの女の子のソレだという。

しかも可愛い。元の特徴や魅力を引き継ぎつつ、スゲエ美人な子ばかりだ。

けもの好き　じゃなくても、健全な男ならば　そのエロボディに興奮してムラムラ発
情してしまうのも仕方ないのである。

「……………」

さて。その話を前提に進めていこう。

俺は洗面台の、鏡の前に立っている。写るは美しさと可愛さを併せ持つ美女。誰
しも羨み、貢ぎ、蝶よ花よと可愛いがられそうな子だ。　誰

ケモ耳や尻尾はないが形の良い胸の膨らみ、整った顔立ち。 ショートヘアの髪の毛の長さも綺麗に整っており、肌はきめ細やかだ。

「……………」

俺が片手を上げると。 彼女も上げる。 手を振ると彼女も振る。 愛想笑いをすれば同様に笑った。

これだけで墮ちる男はアツサリ墮ちる。 少なくとも前までの俺だったらそうだった。 そう、前までは。

今、目の前の美女を前にしても興奮しなければ発情もない。 代わりに起きるは虚しさ喪失感。

だってさあ……………ナニもないんだぞ？

それから この、鏡に写るの……………俺自身なんだぜ？

「自分に欲情はしないんやなって」

絶滅種の子たちのように、目のハイライトを消す美女。 大切なムスコを、相棒を、穢

れたバベルの塔を失ったのだ。

挙句、ご覧の通り女の子にされた、仕方あるまい。

共に来たる日に備えて戦支度していたというのに。突如として、希望は奪われた。

その名はセルリアン。ヤツはとんでもないモノを盗んでいきました。俺のムスコです。

世界広しといえども、セルリアンに チ●コを奪われて女の子にされたヒトなんて俺くらいだろうなあ。ケツ。

「生きる意味を……失う」

ボヤきの言葉すら可愛い女の子。もうやだお嫁にいけない。間違えた、お婿にいけない。

フラフラした足取りのまま、俺は女子トイレから離脱。中で着替えは済ませたが、その精神力はガリガリと削れまくっている。

こんな調子で事件の渦中に飛び込めるのか。不安しかない。

「どうだった？」

「あんじゅ?」

入り口で見張ってくれていたカコに声を掛けられた。隣にはニホンオオカミも一緒。

こうして貰えないと、安心して便所にも入れない。女々しい。情けない。

「どうもナニも無いよ。 ああ……まさかブラジャーまで着用しようとは。 生まれて初めてだよ」

「……えっと。 パークの外に出れば元に戻ると思うから。 大丈夫」

「そうは言うがな。 この事件が解決するまでは、本土との行き来が難しいだろ」

「……そうね」

「解決まで我慢するよ」

カコの言う通り。 サンドスターだかセルリウムだかの影響で女の子にされたならば、その影響がないであろう島の外へ脱出すれば直る……はず。

だがしかし。 事件中は舟が自由に行き来出来ない。 そりやそうだ。 危険な島においてそれと接近する機会は減らしたいだろう。

救助船を呼んで脱出は出来ても、戻るのは困難。戻ろうなんてとんでもないと止められそう。

そうなるとう事件を見届けられない。それは困る。知らないところでヤバイ事が起きて嫌だし。だから、うん。女の子のカラダで我慢する。

そんな心境を察してか否か。ニホンオオカミがフオローしてくれた。快活な子どものような、純粹な笑顔と言葉で。

「女の子になってもあんじゅに変わりたいし、匂いもいつしよ！ 私は気にしないよ！」
「ニホンオオカミ……ッ！」

嬉しい事言ってくれるじゃないの。そう思い撫でくりまわそうとしたら、

「それに今のあんじゅ、可愛いし綺麗だし素敵だし！ フレンズにもヒトにも人気出ると思うよ！」

「ぐはあっ!？」

上げて落とされた気分になった。悪意がないのは分かるんだけどさあ……がつく

しと床に膝をついてしまった。

男としては、それは喜べないの。 いや、喜ぶヒトもいるかもだが、俺はダメだった。

「あんじゅ?」

「ま、まあまあ。 直る可能性の方が高いと思うから。 私も……戻って欲しいし」

「えっ?」

「何でもない。 落ち込まないで、ね?」

「……………おっ、そうだな」

カコの言う通り。 今は悲観している場合ではない。 今後を考えよう。

そう思い、再び立ち上がる。 揺れる胸の鬱陶しさを感じるも、今は胸囲以上の脅威に立ち向かわねばならない。

「まずは管理センターと連絡を取る。 それから今後を考えよう」

「分かった。 私は、やる事を済ませる」

やる事?

なんだろう。こんな状況下でか？

「ひとりじゃ危ないぞ、一緒にいようか？」

「大丈夫。あんじゆは、あんじゆにしか出来ない事をやって」

「お、おう」

真つ直ぐな眼差しで言われ、思わず下がってしまう。くつ。これも女体化の影響か。違うか、元からか。

だけど心配だなあ。せっかく助けたのに、セルリアンに襲われでもしたら、ムスコの犠牲も無駄になるじゃない。

ここはやはり、護衛が必要。俺にはお見せ出来ないならばフレンズに助けてもらおうか。

「ニホンオオカミ、カコを守ってあげて」

「えっ？ でもあんじゆは？」

さすがに首を傾げられた。俺を守ると言っていた護衛をカコに回す。彼女の心

境や複雑だろう。

それをやらかす俺。結構ヒドい。でもほら、カコが心配じゃん。もしコレでカコがセルリアンにチヨメチヨメされたら、ムスコの犠牲が無駄になる。

それに俺は男だから大丈夫………あつ、今は女だった。

「俺は大丈夫。危なくなったら逃げるから」

「で、でも！ 私が守らなきゃって」

オロオロしてしまうニホンオオカミ。平時の命令とあらば喜んで遂行するのだから………厳しいか。

それに添えるように、カコも言ってくる。

「あんじゆ、大丈夫だから。私は比較的安全な場所を移動する。それに、管理セン

ターからの迎えも来る」

「………そうか、わかったよ」

引き下がろう。カコはどうも、遠慮しているというより、ついて欲しくないようだ。

秘匿すべき研究や資料絡みだろうか。そう考えると温かみがない冷たさを感じてしまい……ちよつと寂しかった。

「うん？　管理センター？」

カコはそう言った。管理センターから迎えが来ると。管理センター絡みなのは分かったが、何用だろうか。

「あ、いや……いいの。気にしないで」

今度はカコがオロオロする番に。隠し事をされるとは、気分が悪い。だが仕方ないと割り切ろう。互いに言えない事のひとつやふたつはあるさ、と。

「分かったよ。そんじゃ、道中気を付けてな。何かあったら連絡する」
「ごめん。ありがとう」

妥協されたのを感じてか、カコは謝罪と礼を言ってきた。それがナニかは気になる

が、今は諦めよう。

「良いんだ。 さあ、行こうか？」

「うん！」

ニホンオオカミの元気の良い返事を機に、互いに手を振り……………俺とカコは左右それぞれ真逆の方向へ歩き始める。

共に歩んでいるようで、違う道。 近くにいるようで離れてる。

それは物理的にも、心の距離でも。

もちろん、他の誰よりも近い大切なヒトだけど。 あと一歩。 勇気が出せないんだと思う。

「——今は事件に集中だ」

勇気を出す時は、男の時で言いたいなど。

女々しいと思う。 でもしようがないじゃん、女の子なんだもん（言い訳）。

「暗っ」「暗いね」

病院のエントランスに出た時。　思わず出てしまった感想である。

非常照明のみなのか、薄暗いんだもん。　照度のみならず、雰囲気も。

外に通じる大きなガラス張りの自動ドアは、非常用隔離シャツターが降りている他、サンギやらバタカク、パレット（荷台）等の木材でバリケードが作られている。

ところどころ隙間が見え隠れし、荒い事から、どうやら職員が慌てて作った急拵えのモノのようだ。　シャツターがあるのに作られた理由……何らかの理由で上手く動作しなかったのか、動いたが降り切るまでの間に合わせて作ったのかと妄想する。　或いは一時避難者の受け入れや入院患者の為に、シャツターまで降ろせなかったのかもな。　その証拠か。　エントランスホールは、木材が散乱している他、トンカチやノコギリ、釘打ち機等の工具が投げられてあった。

白衣の職員や、パーク都市部で勤務する警察官、管理職と思われる背広に、比較的健

康そうな患者さんが待合の長椅子でぐったりしているのも、何かあったのかと連想させた。

中にはイヌ科やネコ科と思われるフレンズもいる。やはりか、同じように元気がない。

これ……………外、ヤバいんじゃない？

出たらアライさんシテイのような状況なんじゃ……………ニホンオオカミがいるとはいえ、小さな個体相手でも苦戦する状況なのだ。囲まれたら酷い事をされてしまいそう。

かゆうま。

それでも、いざクエストへ。この病院から出て、ひと狩り行こうぜ。間違えた、ヒト狩りされる側だった。ムスコの次はナニを剥ぎ取られるんだろかね？ 考えたくない。

「杏樹さん、話は聞いています。ですが、本当に外へ？」

見送りの美人の看護婦さんが、心配そうに聞いてくる。赤の他人なのに、声を掛け

てくれるのは正直嬉しかった。

それが例え、仕事だとしても。

「はい。やらなきゃいけない事があるので。その、病院の皆さんも?」

「はい。職員さんも残っていますし、怪我したら治療するヒトが必要ですから。アニマルガールの皆さんも いますからね」

笑顔で答えてくれる看護婦さん。その笑顔と言葉が本物なのか偽物なのか疑う俺が嫌になる。

「だけど。例えば仕事であれ本心であれ、その姿勢は素晴らしい。俺は莞爾として頷いた。」

「けものや、フレンズ……アニマルガールは、動物病院の方で?」

「はい。けものは、動物病院ですね。アニマルガールもですが、ヒトとおおよそ同じということ、簡易な病気や傷なら、ヒトの病院で見ることがあります」

「中央病院は?」

「セルリアンに占拠されて、セントラルごと閉鎖されています」

ああ……予想通りか。

アプリ版のような状況なのだろう。理由は相変わらず分からんが、今やセルリアンの根城か。

そうならば結界張ってるのかね。オイナリサマもいるのかもな。

「分かりました。ありがとうございます」

「はい……病院の外、都市部は既に危険です。行く当てはあるのですか？」

「まあ、一応は。管理センターに向かいます。そこで指示を受けたり、調査隊に連絡

とる為の無線機を借りようかと。携帯は繋がりませんし」

「そうですか………気を付けて下さい」

無理に止めてはこなかった。互いにやる事があると感じているのだろう。

俺の場合、指示がないのを言い訳に自身の都合で動く。なんだかサボってるようで

罪悪感があるなあ。

でも動きます。自由万歳。

「シャッターを少しだけ開けます。素早く潜って下さい」

「はい。お願いします」

そう言つて、シャッターの開閉スイッチを操作してくれる看護婦さん。

ガラガラガラと、ゆつくりと上がると同時に、足下から外の光が流れ込んでくる。

その光ある世界は、今やセルリアンの支配下。

俺はその世界を取り戻そうなんて、大それたコトをするつもりはない。それは英雄の役割だ。俺は俺で、見たいものを見、確かめたいことや話したいことをする。

あと、出来ればチ●コを取り返したいです。

その為に先ず。ニホンオオカミと敵中突破、同じ都市部にある管理センターまで行かねばならない。

思考している間に。シャッターが匍匐で抜けられそうなくらいになった。

「これくらいで」

「えっ、はい」

看護婦さんに止めてもらおう。あまり大きく開けるのも危ないと思ってね。
おバカな俺も気を使ってるのよ？ どやあ。

「よし。行くぞニホンオオカミ！」

「うん！」

そう言つて、匍匐姿勢に。格好付けて外の世界へ――

「きやつ!？」

シャツターの隙間と胸元の間で挟まった。
思わず女々しい声が口から出ちやつたよ。

これ、地味に痛い。それでも、胸がへしやげれば無理に進められる……ダメだ。
痛い。苦しいです。

「す、すいません。もう少し上げて下さい」

「分かりました」

看護婦さんの声が震えていますよ。　笑いを堪えてるんですかね。

恥ずかしい。　くそつ、コレもセルリアンの所為だ。　余計なパイを付けやがって！

「大丈夫だよ。　私も通れなかったから！」

ニホンオオカミ。　それ、フオローになってなくない？

いや、気持ちは受け取ろう。　善意あるものだ。　うん。

取り敢えずシャツターを　もう少し上げてもらい、何とか外へ脱出。　ニホンオオカ

ミも後に続く。

「お気をつけて！」

背後から、看護婦さんの言葉と、閉まるシャツターの音。

それは終わりを意味するのではない。　始まりなのだ。　ムスコを取り返す冒険が、

今始まる——！

「とかいう、メルヘンなRPG話じゃないよね。目の前の光景はアライさんシティでサバイバル系だもん。パークがハザードだよね」

アホな思考は、立ち上がって見えた光景で吹き飛んだ。道路やビル群の外壁はひび割れ、ガラスは割れて、一部の車はひっくり返ってる。

廃墟というか、災害に見舞われた都市部と形容するべきか。

平和な時に見かけたヒトの姿はなく、代わりに1つ目、もしくは複数の目を並べた小型セルリアンが、その中を跋扈している。

こちらにはまだ、気づいていない。だがこの光景は衝撃的である。

「急にどうしたの?」

「いや……ヒトのナワバリじゃなくて、セルリアンのナワバリみたいだなんて」

「うん。たくさん匂う。悔しいけど戦ったら、勝ち目はないよ」

真顔で言うニホンオオカミ。俺も戦いは避けるべきと考えている。逃げられるなら逃げる。

当たり前だよなあ？　俺らはハンターじゃないし。　戦闘は苦手だ。　都会っ子ナ
メるなよ。

「行くこうか」

小声で、だげどしっかりとした口調でニホンオオカミに微笑んで。

女の声と揺れる胸、股間の虚無を感じつつ前に進む。

道中、ナニがあろうとなかろうと、ヒトとフレンズがいるんだ。　何とかなるさ。

管理センターへ。

セルリアンが跋扈する都市部をこそこそ歩いていると、こりや休園状態だなど確信してしまう。

荒れた歩道脇の花壇。折れた並木。

横転した車。割れた窓ガラス。

閑散として、だけどセルリアンというのけものが闊歩するこの都市部。

かつて支配者として、大手を振って歩いてきたヒトは影も形もない。今じゃ真逆の立場。目立たないよう、影から影へ。路地裏を抜け、時にやり過ぎし、音を立てず、こっそりと進む。

学生時代に磨かれたステルス性の高さからか、輝きを奪われたからか。幸い、セルリアンに気づかれる事なく管理センタービル前までやって来た。ニホンオオカミの聴力や嗅覚も助けとなり、ある程度の地理を理解しているのも武器となった。

胸の重みは邪魔であったが。ナニか。川や海での浮き袋か。なら役に立つ……って、都市部じゃ役に立たねーよ。

胸の小ささで悩む女子には悪いが、俺には邪魔かも知れん。自分に欲情しないし、シャツターに突つ掛かるわ、重いわ動き難いわ、デメリットが目立つ。アニマルガールは、コレを持って戦つたり素早く動けるのか。ううむ、凄い。恐れ入る。そーういや、カコは今の俺よりデカイ。やはり苦勞しているのだろうか。デリケー卜な話だと思うので、聞かないけどさ。

「で、着いたは良いが」

立派な管理センタービル前。他のビルよりは立派な大きさと横に広いガラス張りの自動ドア……があるはずの前。

手前は病院で見たような、簡易バリケード。入り口は横一面、シャツターで覆われているときた。セルリアンこそ集ってないが、これでは入れないではないか。

「私が壊そうか？」

ニホンオオカミが提案。確かに、鉄扉を破壊出来る彼女なら、シャツターを壊せそうではある。

だが、それではいけないと首を横に振って見せた。

「ダメだ。そんな事したら、大きな音でセルリアンが寄ってくるし、中のヒトにも迷惑を掛ける」

「じゃあ、どうするの？」

「こんだけ大きなビルだ。裏口か、搬入口、中央管理室へ行く出入口があるはず。それを探そう」

「そこに行けば入れる？」

「ビルの中が無事で機能しているなら、そこにヒトがいる」

「でも扉が塞がってるかも知れないよ？」

「表にインターホンがあるか、監視カメラが壊れてなければ管理室の職員に見つけて貰える。取り敢えず探そう。地図は……ないな、ビルの周りを行くんだ」

希望的観測に過ぎない事を言いつつ、ビルの周りを歩く。セルリアンに見つかったら大変なので、慎重にはあるが。

しかし、ビルが大きいと周りを歩くのも大変だ。距離というより、付属する施設や階段があると気にしてしまう為だ。

そこに正解のルートがあるかも、という他にセルリアンがいるかも、と考えてしまう。すると精神的に疲れる。

「大丈夫？」

振り返って、聞いてくるニホンオオカミ。

おっと、心配を掛けてしまったか。

「大丈夫だ、問題ない」

「無理しないでね」

「おう。ありがとう」

ニコツと微笑んでくれる彼女。優しいなあ、君がパートナーで良かったよ。偶に問題があるけど。

「あつ、あそこから中に入れるかもよ」

前を向き直り、見つけた地下階段。手前の看板には「防災センター」とある。たぶん、ここから行けるかも。扉が開けばだが。

「セルリアンは？」

「いない。大丈夫」

「よし。行こう」

短いやり取りを交わしつつ、周囲を警戒しつつ階段を下る。道はコレしかないの
で、後ろを塞がれたらアウト。結構、危険だが仕方ない。

階段を下ったところ。ジメツとした空気に鎮座するは一枚の鉄扉。錆びている
が重厚そうだ。

「開かないよ」

「さすがに、施錠はしてあるか」

先行したニホンオオカミがガチャガチャと文明的にドアノブを回して、押したり引いたりするも動かない。

こんな状況だ、逆に開いていたら警戒するまでである。もう手遅れじゃねのな。

「すみません、中に入れて下さいーい」

控えめの声を出しながら、見えぬ扉向こうに呼び掛けるも物音しない。

監視カメラが何処かにあると思う。動いていれば俺らが見えるハズなんだが……ダメか。ヒトがいない可能性も考えねば。

「ココはダメかもな」

「そうだね。違う道を探す?」

そう思つて踵を返した刹那。

ガチャリと解錠される音が。

びくりもしつつも振り返れば、重厚な鉄扉が開いていくではないか。

「しっ。早く中に入って」

して、ひよっこりと出てくるは警備服に身を包んだ若い男性職員さん。掠れるような小声を出してきた。

片手の人差し指で「静かに」のサインを出しつつも中に入るように促している。

俺はニホンオオカミと笑顔で顔を見合わせた。　どうやら、俺らを見てくれたヒトがちゃんとしたようだ。

「よく無事でしたね」

鉄扉の中。薄汚れた、露出配管や器具がある狭い道を辿った先。

出入り業者を受付するような窓口の前までやってきた。カウンターにはクリップボードが置かれて、窓口の中は警備服のヒトが何人かと、壁を埋め尽くす監視盤の類。カラフルに表示灯を点灯させている。

文明を感じるなあ。ヒトの世界は、まだ続いているんだって思う。そう考える

と、何故かホツとした。

普段は嫌悪感を感じる事すらあるのに、こんな時は都合が良いと思う。

あつ、また嫌悪感が……………。

「貴女は こちらのフレンズさんの飼育員で？」

「正規の飼育員ではありませんが、そんなトコです。 彼女はニホンオオカミ。 いてくれたお陰でココまで辿り着けました」

「えへへ」

そんな気持ちを誤魔化すように、頭を撫でてやるとヘツヘツと尻尾を振るニホンオオカミ。 可愛い。

「そうでしたか。 頑張ったね、ニホンオオカミちゃん」
「うん！ ありがとう！」

守衛さんも微笑んで褒めた。 良いヒトなのかもな。 いや、見た目に騙されるな。 俺はそれでツライさんになったのだから。

「体調が優れませんか？」

「えっ？ あ、いや。パークがこんな状況になったので……気が動転してまして」

誤魔化した。 サンドスターやセルリウムで、こういった気持ちを払拭出来ないだろうか。

なんだか出来そうな気がしてくるよね。 精神安定剤とか。

「確かに。 突然のセルリアン大量発生、集団でのセントラル襲撃。 そして都市部やサファリ区分も被害に遭っています」

「状況打開の目処は？」

「未だに。 ですがココや他の管理センター、調査隊が全力を尽くしてくれていますから。 きつと大丈夫ですよ」

その中に全力でヨダレ振り撒いてる隊長がいそうですね。 ちよつとその方に用事があるのですよ。

「その調査隊長とは知り合いでして。連絡を取りたいのですが」
「分かりました。担当者をお呼びいたしますので、お待ち下さい」

そう言つて、室内に引つ込む守衛さん。放送を流して、誰かを呼んでいる。

スムーズで助かる。怪しまれたり身元確認等が無くても良い。逆にガバくて大丈夫か不安になるんだけど。

やがて、奥からヒトの足音が聞こえて来たから、振り返ってみれば、

「お待ちせしました」

「あつ」「おねーさん！」

ヘルメットを被つた、背の低い背広の女性がやって来た。管理センターの世話好き小動物（ヒト）だ。思いつき知り合いである。

「ニホンオオカミさん。お久しぶりです」

「久しぶりー！」

「どうも」

「初めまして。新しい飼育員さんですか？」

うん……気付いてないね。元の容姿とかけ離れてるからなあ。存在が消えたよ
うで地味にツライさん。

「違うよー。あんじゅだよー！」

ここで二ホンオオカミが訂正を入れる。良いんだけどね。

ただ、案の定というべきか。驚愕された。うん……その反応も、地味に落ち込む。

「杏樹さん!? でも、その姿と声……」

「女になっちゃったんですよ。報告ありません?」

「あ、ああ。本当の話でしたか。てつきり女装趣味に走ったか勘違いかと」

「ヒドいツスね!? セルリアンに襲われて、この始末です!」

流石の彼女も信じきれてなかった様子。まあ、仕方ないね。アニマルガールの話

ならともかく、俺、ヒトだし。

奇跡の島とはいえ、やはり信じられない事は信じられないか。俺も信じられない。というか信じたくない。ムスコ返して。

「……………男？」

ぼそりとした、絶望した声が聞こえたと思つたら。守衛さんが崩れ落ちていた。へ、ナニ。なんでアンタが落ち込んでいるの。それ、俺の役割でしょ。

「守衛さん？」

「くっ……………！ 監視カメラに美しい姿が映つたから、助けたらイイ仲になれると期待して戸を開けたのに男だなんて…………。カミサマなんていないんだ！」

「欲望ただ漏れしてんじゃねーよ！」

思わず白い目で、或いはゴミを見る目で突つ込んだ。ちくせう、コイツも そういう目で見ていたか。悲しいなあ。それが男の性だとしても。

「いや、でも身体が女なら」

「少し黙りましょうか？」

「アツハイ」

最低な言葉に対して小動物とハモった。シンクロしても嬉しくもなんともないけど。

もう守衛はほつといて、仕事の話をしようしよう。これ以上構っても心が傷付くばかりだよ。

「お互い色々状況を知りたいトコですが……何か手伝える事はありますか。主に外部で」

「ありますが。この場ではダメなのですか？」

「ダメなのです。俺とニホンオオカミで、ちよいと冒険しなくてはいけないので」

「冒険？ この状況はイベントじゃないんですよ。半端な理由なら、危険な外に出すワケにはいきません」

「私がいるもん。大丈夫だよ」

「ニホンオオカミさん、正当な理由なく危険には晒せないという事です。その点、貴女も外には出させません」

「ええー！」

あかん。真顔で言われたよ。こりやマジだよ。別に遊びでやってんじやないんだけどな。危険に晒したくないという優しさは嬉しいけどさ。俺にはやりた
い事あるし。

ちゃんと説得しないとダメか。このままだと拘束されてしまう。

「い、いやーね！俺は失ったムスコを取り返しに行かなきゃならないんですよ！」

「息子さん？ 貴方は既婚者じゃないでしょう」

「真面目か！ 隠語的なアレだよ！ ナニだよ！」

「はい？ ハッキリお願いします」

おいおいマジかよ。キリツとして責めているつもりなのサマは逆に可愛く、純粹さが眩いんだが。たぶん、俺がテキトー言ってると思ってるのだろう。して、そこを突いて反論出来るならやってみると。

でもさあ……：そういうのを見ちゃうと、ちよつと穢したくなるよね。

いや、失礼。話が進まないんで。真面目な彼女にはストレートに言おう。ハッ

キリ言えと仰るワケだし。

俺は悪くない。暗黒微笑を浮かべながら、俺はハッキリと申し上げた。

「チ●コです」

見た目は綺麗、中身は男な女性の口から放たれる衝撃発言。卑猥な単語。

刹那。室内のヒトにも聞こえたのか、思わず振り返り。

項垂れていた守衛は、トドメを刺されたように倒れた。そのまま寝ていて、どうぞ。

ニホンオオカミは、いつも通り。赤面もしないし大きな反応はない。純粹過ぎる

のだろうか。少し残念。

して、肝心の小動物はというと。

「ち、ち、ちん……………ツ!？」

面白いようにワナワナと震えて赤面した。茹でタコのように真っ赤。

「なんて事を……………なんて事を言うんですかーツ!？」

「えー？　ハッキリお願いされたからハッキリ言ったんですよ。　なあニホンオオカミ？」

「うん」

「だからって！　ち、ち……なんて！」

「はいい？　ハッキリお願いしますう」

「子どもですかーッ！」

「はい。　ムスコの話です」

「もう良いですっ!？」

いやあ楽しいねえ。　これで彼女は大人の階段を上った。　悪く言えば穢れた。

セクハラで訴えられたら負けそうである。　彼女はそんな事しないだろうが、この辺で止めよう。　というか、話が進んでいない。　小学生が好きな子にするイタズラの話で終わってしまう。　それはいけない。

「とにかく。　俺は輝きを取り戻す為、外に出なければならぬ。　おわかり？」

「うう………分かりましたよ」

赤いまま、ボソボソと引き下がる小動物。 よし、これで良い。 島から出れば戻る可能性はあるが、それを言うのと不利である。 このまま行こう。

「けれど、外は本当に危険なのですよ。 それは貴方が管理センターまで来る時に感じている筈です。 それでも行くんですか？」

あれ。 引き下がってないね。 食い付いてくるね。 本当に心配してくれているんだろうな。 こういうヒトがいるだけで、俺の気持ちは救われるよ。 でも……ごめん。 俺は外に出たいんだ。

「はい。 それでもです」

「大丈夫。 私が守るよ」

「外は調査隊や研究員に任せては？」

「俺も職員なんで」

「私のトモダチだから」

ニホンオオカミが合いの手。 嬉しいこと言ってくれるじゃないの。

でも切実な話、ヒトに任せられないデリケートな理由もある。それを他に任せるとか、いやーキツイツス。

セルリアンが、大きさや形まで再現していたら最悪だ。それを園長やミライ、サールたちに見られる。

そうしたら合わす顔がない。

笑われでもしたら いよいよだ。そうじゃなくても気不味いつてレベルじゃない。

鬱だ、しもう。パーク職員物語 完！

「貴方を襲ったセルリアンを倒しても、元に戻る保証はありませんよ？」

そうなんだよなあ。奪われた輝きって、セルリアンを倒しても戻るとは限らないのだ。その辺、アプリでミライが語っていたような気がする。

でもさ、再現している野郎は消せるよね。それでもだいぶ違うんだよなあ。汚物は消毒。いや、返しては欲しい。

「その時はその時です」

「島の外へ行くのは？ その方が安全に元に戻れるかと」

あつ。その可能性に気付いていたのね。でもさ、やっぱり猥褻物を放置出来ないよね。正常な精神で眠れなさそうだ。園長にも会いたいし。

「でもダメなのです。どうしても、どうしても外に出たい」

「そこまで……貴方には、私と一緒に。安全に元の姿になつて——」

「はい？」

「い、いえ！ 何でもないです！」

慌てて首を横に振る小動物。動作や表情が、身長差もあつて子どもっぽく可愛い。だけど、ハッキリ言えという割に自分自身はダメダメじゃね？ シモい話は抜きにしても。

「とにかく。貴方とニホンオオカミさんは、このまま管理センター内に——失礼」

絶対出させないウーマンな小動物がグチグチ言っていると。彼女の懐にあるスマホが震えた。

彼女は取り出すと、どこかと会話をする。仕事の話かな。俺と長話し過ぎたか。申し訳ない。

「私です。 はい。 ええ、今一緒に………えっ!? しかし………はい。 分かりました。 そのように。 失礼します」

話し終えたのか。 しゅんとした表情でスマホを仕舞う小動物。

ナニか。 ヤバい話なのか。 パークの今の状況的には、どこもかしこもヤバいだろうけど。

「どうしました? 助けが必要ですか?」

「いえ。 杏樹さん、ニホンオオカミさん。 管理センターから出て大丈夫です」

「それはまた」「何か言われたの?」

さつきと言っている事が真逆。 これにはさすがに俺もニホンオオカミも声を出してしまう。 ニホンオオカミに限っては怖い事でも言われたと思ってか、心配している。 優しい。

でも、そういう訳ではないようで。小動物は苦笑して答えてくれた。

「上からの電話でした。杏樹さんに、知り得る情報を教えるようにと。そして、出る許可を出してサポートをするようにと」

「そりやありがたいが、上とは？」

「管理センターのお偉方です。他にも……コレは予想ですが。動物研究所の所長が絡んずると思います。杏樹さん、深入りしているのですか？」

深刻そうな顔で、覗き込まないでくれ。

だが確かに深入りしているか。気が付いたら暗部ストレスレの位置にいる気がする。片足を突っ込む一歩 手前。

「好きで そうなつたワケじゃないです。それより、サポートしてくれるんですけどね。無線機を下さい」

タブーな話は、もう止めだと強引に話を変える。俺はパークの暗部を明るみに出すつもりはないし、勇気もない。出来れば関わりたくない。

下手すると、俺の近いヒトやフレンズに災いが降りかかる。ヒトのやる事はエゲツないんだ。欲の為なら、他を不幸にする。

そんな気持ちを感じてか。小動物はそれ以上、入り込んでこない。

「分かりました」

そう言う。今度こそ、引き下がるようだ。本当に申し訳ないと思う。

して、どこからか無線機を取り出して渡してきた。ミライが持っているモノと同じようだ。

「これで連絡が取れます。チャンネルは、そのまま大丈夫」

「ありがとうございます」

「無線でのやり取りは、記録されます。不用意な発言はしないように」
「はい」

不用意、ね。未来についての話とかかな。話しても深刻にならないと思うが、面倒ごととは避けたい。気を付けよう。

「他に分からない事は？」

そういう事を言われると悩む。この手は後で分からない事があつて、聞いておけば良かったーとなる。少なくとも俺は。

何か。何でも良いから聞いておこう。それで不安は和らぐ。

「えーと……じゃあ カコ博士は、こちらに来てますか？」

管理センターからの迎えがどうこう言っていたカコを思い出す。用件は分からないが、この管理センターに来ているのだろうか。

「いえ。カコ博士は来ていませんし、来る予定はありません」
「ありや？」

あれ。じゃあ、カコはどこに行ったの。別の管理センターかな？ 他にもあるからね。

「ですが、上の方々が この状況下で席を外しています。どこかで会議しているのかもしれないですね」

「どこか、とは？」

「そこまでは。 たぶん、パークの状況について相談するのでしょう」

明るい話だと良いね。 暗部な話だったら関わりたくない。

「私は その部分も含めて、外に出て欲しくはないんです。せめて事件収束までここに残る事は出来ませんか？」

「心配してくれてありがとうございます。でも、決めた事ですから」

「そうですか」

ほんと、他人である俺を心配してくれて良いヒトだよ。カコとの出会いがなければ、このヒトに惚れていたな。

「……他に、分からない事は？」

そんな悲しげな顔をされるのはツライさんだけでも。少しでも、ココに残らせようとしてみるみたいで……その思考になった俺もツライさん。

して、分からない事ね。何か聞きたい事は……あ。園長の事を聞いてない。

「園長、じゃなかった。こんな状況下でも来客の話ってありました？」

「来客？ いえ。私は聞いてません」

「そうですか」

うーん。英雄は後で来るのか、それとも彼女が知らないだけで、既にパークにいるのか。

「じゃ、外の仕事で手伝える事は？」

「外部の状況を偵察して報告して下さい。細かい指示は、その都度行います」

「分かりました、じゃ、早速行ってきます……お待たせ。行こうか」

「うん！」

ジツと我慢の子であつた、ニホンオオカミに声を掛けて、元来た道を戻る。パークで、まだヒトの世界は続いている。それは良い事なのか悪い事なのか分からない。

だけど。

子供たち。 フレンズたちの笑顔を奪うような真似はしてくれるなよと、俺は切に願つた。

「ときわたり」の可能性。 電車と先輩。

「あー、あー。こちら杏樹臨時職員。管理センター聞こえますかー?」

管理センターから出る前に。貰った無線機に呼び掛けを行う。ちゃんと送信ボタンを押しながらですよ。終わったら応答待ちの為に離します。

無線で送信ボタンを押す前に話し始めてしまうと、相手が始めの言葉を聞き取れないので注意する。

とはいえ。期待する応答がある保証はない。

もしダメでも、行く当てはあるから大丈夫ではある。シナリオ通りなら、セントラルに結界が張られているから、その偵察。

セントラルにはセルリアンによるバリアが張られており、守られるようにしてセルリアンの親玉がいるのだ。

バリアを消すにはパークの各地にいる、バリアを作り出しているセルリアンを倒さねばならなかった気がする。

ソイツらを倒せば、セントラルに入れるようになる。そして親玉を倒せばセントラル奪還。パークのセルリアンは沈静化。事件解決へと流れていく。

ゲーム通りならカコの輝きを奪ったセルリアン……セルリアン女王がいる。それとオイナリサマ。

女王がパーク中の輝きを奪おうとしてるから、オイナリサマが抑えてるんだっけ？

また特殊なセルリアン、セーバルの運命が大きく変わる場所でもある。セルリアンである筈の彼女が自ら輝きを生み出し、アニマルガールとなる奇跡が起きるのだ。そして女王の支配下から離れる。

正確にはアニマルガールと異なるのかも知れんが、『トモダチ』が消滅する危機は去った。

だがしかし。俺がムスコを犠牲にカコを守ったから、女王はいないはずだ。シナリオは大きく修正されている事だろう。

実際のところ、どうなっているのか不明。セーバルの存在も気になる。そういう意味でも偵察はしたいところだ。

とか思っていたら無線が繋がった。声は小動物だ。

『聞こえますよ。 チェックはしてあるので大丈夫です』

どこから応答してんだらう。いつもの事務机かな？

「良かった。それで、何かして欲しい事はあるかい？」

『セントラルの偵察を。状況を知りたいのです』

「了解。何かあったら連絡する」

そう言って、切ろうと思ったがミライの事を思い出した。聞いてみよう。

「ああ、ミライは何してる？」

『ミライ調査隊長は………今、急な来客の出迎えに行ってます。サバンナエリアです。』

キーボードの音を挟みつつ、答えを得た。

急な来客ねえ。もうアプリ版主人公の園長の事だろ。そうだ。そうに違いな

い。寧ろそうであって。

「急な来客ねえ。この緊急事態に、しかも港から離れたサバナナにか
『パークにとつて重要なお客様でしょう。何か分かれば連絡しますね』

小動物は言ってくれたが、園長の事は分からないだろうな。緊急事態に、それもサ
バナナに現れた客だ。謎だらけである。

実際、園長は記憶が曖昧な筈だ。どうして、どうやってジャパリパークに来たのか
分からない。そもそもパークを知らない。

取り敢えず、ミライとも連絡が取れれば嬉しい。聞いてみるか。

「どうも。出来たら、ミライとも連絡が取れる様にしたいんだが」

『少し待って下さいね……………ハイ。無線機のチャンネル2のボタンを押せば切り替
えられる様にしました』

言われて手元を見る。ラジオみたいにボタンがあつて、数字が割り当てられてい
た。押すだけで良いらしい。

ショートカットか。便利だな。

チャンネルを小数点レベルで足したり引いたりしなくて済むのは有難い。

「チャンネル番号を弄らなくて良いのは助かる、ありがとう」

『いえいえ。 ですが、用も無しに連絡するのは避けて下さいね』

「了解」

そう言って、今度こそ無線が切れた。

「記憶喪失か。 それと設定であつたとかいう『お守り』による『ときわたり』か」

「ブツブツと独り言を吐きながら考察してみる。 そう、ときわたりの可能性について。」

「なんか、そういう設定があつた気がするのだ。」

「園長の持つレンズ状のお守りにオイナリサマ、ビヨウブ、四神の刻印を刻む事で時間を超えられる。 そして過去の自分にお守りを渡すのだ。」

「それは……無限ループか？ だとしたら園長は同じ時間を繰り返し返している。 その

後遺症的なので記憶喪失……？」

薄れに薄味の前世の記憶を掘り出しながら、無い頭で考える。

園長はこの事件、それか将来起こるパークの危機から救う為に無限ループの旅を？

だけど記憶喪失で上手く救えないとか？

上手く言えないが、時間超越をしなければならぬ事態というのは好ましく感じない。

未来へ進む事がなく、同じ事を繰り返して進展がない。

漫画やアニメの影響かも知れないが、きつと俺の妄想は当たっている。妄想は今世

で良く当たるんだ。バカにするなよ。

「……………ウロボロスの輪、か？」

「あんじゅ、どうしたの？　むげん　がどうとか、うろぼろす　がどうって」

と、考察していたらニホンオオカミが声を掛けてきた。

おっと、いけない。自分の世界に浸かり過ぎてしまった。早く仕事をしなきゃな。

「ああ、悪い。パークにお客さんが来たらしくてね。どんなヒトかと考えてたんだ」
「そっか！ きつと良いヒトだよ。ジャパリパークを好きになつてくれると良いな！」

「ああ。きつと好きになるよ……仕事に取り掛かろう」
「うん！」

ニホンオオカミの笑顔に答えつつ、仕事へ向かう。少し胸が苦しい。気持ち的な意味で。

園長……これからミライ達と事件解決の冒険へ出発し、ジャパリパークを好きになつてくれるんだろう。

そして始まりも終わりも無い無限の輪に囚われるのだ。

オープンングの、誰かの言葉。

あれは「ときわたり」する前に言われた言葉なのだろうか。

「どれほどの時が経つても……あなたが全てを忘れてしまつても……私は決して忘れな
い」

自然と口に出た。無意識だった。

「へ？　急にどうしたの？」

「ああ、いや……なんでもないよ。セントラルに向かう。頼りにしてるぞニホンオ

オカミ？」

「ッ！　うんっ！」

適当に誤魔化しつつ、セントラルへと歩み始める。今、考えても仕方ない。

出来る事。それをやるんだ。なんのチカラもない、いち職員としてもやれる事を。

それでも願わくば。

園長の永遠（トワ）を断ち切りたい。

「で、どうやって都市部を抜けりゃ良いんだ？」

管理センターを後にして、直ぐに問題発生。

道路やビル群の合間を堂々と跋扈するセルリアンを見て思った。

パークでの移動方法……どうしよう。

病院から管理センターまでは、徒歩で移動出来る距離だったから良かった。

だがセントラルまで行くとなると距離がある。 サフアリ区分程ではないにせよ、道中セルリアンに見つからずに行ける保証がない。

「どうする、ニホンオオカミ？」

「でんしゃは？」

文明的な手段を提案するワンコ。 指をさすので、釣られて見やれば、駅がある。最早驚かない。 そういう時代である。

だが、今はそういう事が出来ない事態。 都会っ子だとね、こういう時困るよね。

「流石に電車は止まってるだろう」

「いちおう、聞いてみようよ」

聞くまでもないと思うが。

思いつつ、再び無線を使う。

こんな事態になつても動いていたら、それはそれで危ないだろう。皆が避難済みとはいえ。

『どうしましたか?』

「電車、使えるのか?」

『逆に使えると思つたのですか?』

言われたよ。無線越しに呆れた口調なのが分かる。

「いや。ニホンオオカミに聞かれてね?」

『ニホンオオカミさんの所為にしないで下さい』

「まあまあ。答えを聞きたい」

『使えません。が、使おうと思えば使えます』

どういうことだつてばよ。

そう聞こうと思つたら、小動物が言葉を続けた。

『公共施設なので管理センターから、ある程度は操作出来ます』

「マジで!? リアリー!?!」

管理センターつて、そんな事も出来るの？

伊達に管理してないつてか。

『普段は現地のマニュアル操作ですがね。 緊急事態に遠隔操作出来る仕様です』

はえー。 すごいっすね……。

将来ラッキービーストにとって変えられたりしない？

「じゃ、今から電車に乗るから動かしてくれないか?」

『少し待って下さいね………はい、オンラインです。 乗ったら動かしますよ』

「ありがとう」

『特別ですよ』

いやあ、これで何とかなるか？

電車だから駅から駅の移動にしか使えないが、だいぶマシになったな。

やはり聞いてみるものだ。ニホンオオカミ、ありがとう。

「ニホンオオカミ、使えるって」

「やったね！」

「んじゃ、行こうか。セントラルに」

ニホンオオカミを撫でて、駅へと進む。

セルリアンには勿論、気付かれないようにしながら。

戦闘はなるべく避けねばならない。

ニホンオオカミがいるとはいえ、群れを相手にするのはキツイ。

鉄扉を破壊出来るパワーがある以上、決して彼女が弱いワケじゃない。

リアンは群れになると厄介だ。

でも、セル

と、ここらで思う。

「群れ、か。 こつちもお供フレンズを増やせれば良いな」

そうだ。 群れをつくれなかと。

ミライ達、園長もやっていたではないか。

冒険で行く先々で共に戦うフレンズを増やし、困難に立ち向かった事を。

「群れ!?! 群れをつくるの!?!」

やはりか、群れという単語に反応するニホンオオカミ。
ハイライトの無い目が、心なしかキラキラして見える。

「つくれたら、な」

「でもあんじゅ。 群れは苦手なんじゃ?」

「フレンズなら良いんだ……駅に入るぞ」

ヒトの群れは苦手だが、フレンズなら許せます。ニホンオオカミには、少し寂しそうな顔をされたが、諦めてくれ。それが俺だ。

さて。誰もいない駅舎に入り、作動していない改札をくぐる。

そこには待つてましたとばかりに電車がホームに止まっていた。遠慮なく乗車する。

「貸切の無人電車かあ。 気楽で良いな」

ちよつとしたセレブ気分。 前世の時も、こうだったら良かったのに。 圧迫死の危

機やヒトとのトラブルを感じて過ごす日々は大変だった。

おつといけない。 今は今。 昔は忘れる。

「ごめんねえ。 先客がいるよー」

「その声は!?!」

突如、聞き覚えのある幼い声が！

これはかの幼女なフレンズ……!!

見渡せば、前車両から此方へ歩いてくる女の子。

地に付くほど伸びたグレーのロングヘア。

だけど髪を後ろに流し、オデコを晒している。

ペンギンのフレンズらしく、手羽を覆う服はフード一体型。旧式のヘッドホンを装着し、PPPの文字が。

目のハイライトが無い事から、絶滅種であると考えられる。そう。ジャパリパーク動物研究所で出会った彼女の名は。

「ジャイペンじゃないか！」

「よっ！　また会ったな！」

ジャイアントペンギン。略してジャイペンであった。パイセンとも呼ぶ。

「あつ！　ジャイアント！　久しぶりー！」

「久しぶりニホ！　いやあ、元気そうだなによりだよー！」

ニホンオオカミが尻尾を振って小さな巨人に抱き着く。ジャイペンは小さな身体

に対してアンバランスな、大きな手羽でポンポンとニホンオオカミを優しく叩いた。
ふむ。　　そういえば同じ動物研究所で会ってたんだったな、このふたり。

「なんでパイセンがココに？」

「いやー、パークの危機だから？」

笑みを浮かべるパイセン。　　その裏はナニか。

パークの危機で、なんで都市部に出張ったのか。　　それも、駅で出会う偶然があるか。
特別研究所から離れてないとはいえ、これは狙っているだろう。

「理由になってねえツス」

「半分はホントだよー？」

「もう半分は？」

「あんじゅが女の子になったのをじっくり見にね。　　それと、あんじゅなら、電車を使う
かなあと思って待ってた！」

ええ……。

俺が電車を使うの分かって待ってたの？

すれ違う可能性とか考えなかった？

とかいふ思考を読み取ったのか、ジャイペンは答えてくれた。

「すれ違う可能性もあつたけどねー。それだつたらセントラルに行くだけさ」

「へ、ナニ。セントラルに行くのもバレてる系？」

「おつ？ 当たったか！ いやー、良かった良かった！」

手羽を上げて、アツハツハと笑うパイセン。

絶対ワザと振舞ってるよ。

俺がこの世界のヒトじゃない可能性を示唆したりと、賢いんだか当てずっぽうで正解してんだか……いや、前者だろう。

フレンズだが油断ならない相手だ。良い奴だと信じているが、腹の内ではナニ考えてんだか。それが怖い。ヒトじゃないのにな。

「そう怖い顔しなさんなって。私はあんじゆの味方だからさ！」

「……そうでなきや、困りますよ」

「その証拠に！ 私があんじゆの仕事に同行しよう！　ニホと一緒に、か弱くなつたヒトの身体を守つてあげよう！」

なんか、からかわれたんだが。

まあ良い。助けてくれるつてんなら。数は多い方が良い。

「ホント!?　　ジャイアントありがとう！」

「おー、よしよしよし！　　よしよしよし！」

そしてニホンオオカミ。ジャイペンに撫でくりまわされてるが、お前はそれで良いのかよ。ワンコだから良いのか。うん。

「んじゃ、よろしく頼みます」

「ヨロシク頼まれたー！」

そう言つて、無線を繋ぐ。

小動物に連絡を取ると、電車がひとりでに動き出した。

道中、セルリアンに襲われないか不安だが、まあ……パイセンもいるなら何とかなるだろう。

何とかなつてくれなきゃ困るぞ。

「ああ、ジャイペン」

「んー？」

「これだけは言っておこう。」

「喰われた俺を助けてくれたって？　ありがとうな」

「良いって良いって！　それに、私だけじゃなくて、マンモスやサーベルタイガーが協力してくれたお陰だし！」

ハツハツハと笑うパイセン。

対して俺は照れ臭くて、目を逸らしてしまう。

いや、ほら。

礼くらい言えるよ。俺だって。

セントラル偵察。そして再び研究所へ。

パークの車窓から。

どうも皆さま。 私は今、パークの電車に乗っております。

動物園とは思えぬビルディングが何本も聳え立ち、本土の東京と言われた方が信じてくれる光景が続いております。

本土で見た光景と大きな差異があるなら、地上が荒れている事か。 車がひっくり返つてたり、歩道や花壇が壊れてたり。 知らないヒトがみたら暴動後かな、という有様。

時々ドギツイ色の物体が見える。 大中小、風姿形は様々。 セルリアンだ。 チラホラと見えては景色と共に流れていく。

あいつら小さくても目立つんだよ。 なんで、あんな色なのかね。 理由があるのだろうか。

一方で夜は見難いであろう黒いヤツもいる。 謎。

『間も無く都市部を抜けてセントラルですが……外の様子はどうですか?』

ここで管理センターの小動物から連絡。道中の様子も報告案件かな？
何にせよ仕事の一環か。素直に報告する。

「荒れてる。車がひっくり返ってたりな。セルリアンも散見している」

「そうですか……セルリアンに攻撃されたりとかは？」

「大丈夫。レールにも問題ないのか、大きな揺れもなく普通に走ってる」

淡々と報告する。特に問題はない。

問題ない……のだが。乗っておいてアレだけど、非常事態に交通機関を走らせるべきではないだろう。管理センターの判断には感謝するけど。

万が一もある。セルリアンに攻撃されたら最悪横転、転落事故だ。ヤツらのパワ―はフレンズ同様に謎で未知数だ。怖い。

漫画版では緊急時の都市部の様子は描かれてなかった。

その点、このような風景がパークにて発生、見ていると思うと不思議な感覚だ。

あつ……。

奈々達は無事だろうか。心配だ。

たぶん、無事に避難出来たと祈ろう。

あかん。他の面子は？

キタキツネたちフレンズは？

カコはナニしてる？

いちど心配になると色々心配になる。

いかなな。

今はどうしようもないだろう

俺。

今を集中だ、集中。

「良かった……ところで、何か賑やかな声が聞こえるのですが。誰か増えましたか？」

ほら、今は仕事 중이다。 答えなきや。

「あ、ああ。 ジャイアントペンギンのフレンズがいるよ。 同行するってさ」

隣を見やる。

座席に膝立ちして、外を見やるふたりのフレンズ。 流れていく外の光景に興奮して

いる様子。 子どもほくて可愛らしい。

「おー。電車には初めて乗ったけど、不思議だな！ この大きな箱が動いてるんだろー？」

「私も初めてだよ！ 見た事はあったんだけど！」

「しっしっしっ！ 今パークは大変だけど、貸切状態は感激だなー！」

逆に貸切じゃなかったら迷惑系フレンズなまでである。そして保護者の俺が怒られる、怒られちゃうんだよ。

『分かりました。管理センターとしては同行に問題はありません。ですが、治安や風紀を乱す教えは駄目ですよ』

「やらないツス……信用ないっすね、俺」

『前科がありますので』

悲しいなあ。履歴に傷が付いてると、この先も色々突かれそう。未来のパークで変態みたいに語られない事を祈る。

『間も無くセントラル駅です。正確には、セントラルの手前で降りられます』

「了解。けもキャツスル城内に入れるか調べてみる」

『それは、どういう……?』

「後で報告するよ、じゃ」

無線を切つて、電車の先を窓で見る。

ビル群や住居類が無くなり、代わりに見えるは、けものをかたどつたお城、観覧車。

遊園地だと思わず、楽しいな人工物。

周囲が平原や自然が多いから、遊園地が陸に浮かぶ島のように。

そこだけ世界が違う。それが近付いてくる。

子どもが見たら、いや大人もワクワクする情景だ。

「わあ! 遠くから見たのは初めて! 気になる気になる!」

「おお。観覧車にお城……実際に見るとワクワクしてくるなー!」

「お前らなあ、遊びに行くんじゃないぞ?」

他にも様々なレジャー施設が集まる、パークに来たお客さんの玄関口。

『間も無くパーク・セントラル。パーク・セントラル。お出口は——』

自動アナウンスが流れる。

そう。女王事件……アプリ版のストーリーだと、最終決戦地となる場所。パーク・セントラルである。

「……………活気が無い所為じゃないよねー、この感じ」

「……………近くに来ると、気にならないなあ」

トーン低く、先程の興奮が冷めていくジャイペンとニホンオオカミ。

駅から降りてセントラルの敷地に入って……この反応である。

周りにはカラオケだのエステだの宿泊施設だの遊戯施設があるが、ワクワクしない。

俺も寂しきの様なものを感じている。ココの輝きは、セルリアンに奪われたからだ。

その辺、ジャイペンも分かっている様子。 反応からして。

「そうだな。セルリアンに輝きを奪われたからだろう」

輝きが無い。それは魅力が無いという事。

セルリアン。 ヒトやフレンズの持つ輝きのみならず、物、施設の輝きをも攻撃、奪う。

結果、本来楽しい場所であったセントラルは寂れた場所に成り果てた。

ココを元に戻すには、少なくとも親玉の居城となつたけもキャツスル……セントラル中央に聳え立っている城に行き、中の親玉セルリアンを倒すしかないだろう。 予想通りなら。

「じゃあさ！ そのセルリアンを倒せば、ここは楽しい場所になるんだね！」

ニホンオオカミが、明るく言い放つ。

うん。 たぶん、多くのヒトやフレレンズが思う事だろうなソレ。 知らなければ。

だが、そう簡単じゃないとジヤイペンが説明してくれる。

その辺も研究所で学んだか。 勉強家なのか教えられたのか。

「ニホー。 残念だけど、輝きを奪ったセルリアンを倒しても元に戻る保証はないんだ」

「ええ!? そうなの!」

ガーン!

そう効果音が聞こえてきそうなショック顔をするニホンオオカミ。 それはそれで可愛いが、同時に可愛そう。

まあ、希望を持たせてあげよう。 たぶん、大丈夫だと。

最終決戦後、明るい話だった気がするし。

「でも占拠しているセルリアンは倒さないと。 そうすれば、また明るい場所に戻れるさ」

「そ、そうだよね! よーし! セルリアンを倒すぞー!」

そして明るく意気込むところ悪いが、それは難しい。上げて落とす俺。酷い。

「そうしたいが、たぶん無理だ」

「ええ!?! 　　なんでよ!?!」

「親玉は　あの城の中にいるだろうが、そこまで行けば分かるさ」

俺が指差すと、釣られてジャイペンとニホンオオカミが見る。

そこには聳え立つ城、けもキャツスルが。

「ほう?　　あんじゆくーん、いや。　　あんじゆちやーん。　　何か知ってるようだね?」

しっしっしっ、と笑うジャイペン。

おいこら。　　パイセンだからって調子乗ってる怒るぞ。　　そして負ける、負けちやうんだよ。

「あくまで予想だがな。　　とりあえず行けば分かるさ」

「分かった!」「りようかいっ」

フレンズを先頭に、俺たちは城に向かう。

別にビビってないです。でもほら、ヒトは無力だからね。ナニかあったらフレン

ズに守って貰わなきゃだし？

そうこうビビリながら歩いていると、城の根元に到着。道中、セルリアンには会わ

なかった。会ってたまるか。チビるぞコラ。

いい理由を考えるなら、輝きを粗方奪った後だからだと予想。それで他の場所に

行ったのだろう。助かるからヨシ。

「中に入る？」

「入れるなら、入ってくれ」

「うん？ わかった！」

ニホンオオカミを先行させ、城へと入らせようとする。

大きな門を抜けようとするニホンオオカミ。刹那。

バイイイイイイインツ！

「キャウンツ!？」

ニホンオオカミがトランポリンみたいに跳ね返ってきた。
うむ。予想通りだった。やはり結界が張られている。

摩訶不思議な現象を目の当たりにするのも不思議な気持ちになるね。

あいや、科学的な理由はあるのかもだが。それに、今まで見てきたフレンズやセルリアンも摩訶不思議な現象のソレだな。

現代科学の敗北かな？

カコ……がんばれ　がんばれ　♡

「ほうほう。　あんじゅは、これを知ってたんだねー？」

ジヤイペン、興味深そうに半透明化した結界を見る。

有利に立てた気分だ。　知識面で。

今までは彼女に負けてた気分だからなあ、少しは胸を張って良いかな。　本当に付い

てる胸は鬱陶しいが。

「まあ多少はね？」

「これって、セルリアンの仕業だよな？」

「そうだな。消すには、コレを作り出ししているセルリアンを倒す必要がある。それは各地に分散しているから厄介だ」

アプリの設定を思い出しながら説明していく。

ある意味で王道な展開と状況だ。だが分かりやすく助かる。

「くそう！　なんだか楽しくなってきた！」

「結界で遊ぶな」

「はっはっはっ！　ニホはいつも通りだなー！」

話をしてる間にも駄犬が結界に体当たり。　ランプポリンみたいに遊んでるといふ。

俺らが真面目な話をしているのに全く。　和むから良いけど。

「そういや思い出した。　アプリ版のサーバルもこんな事をしてたんだよな。　楽しそうに何よりです。」

「じゃ、そのセルリアンを倒して回るのが あんじゅ の仕事になるのかな？」

ジャイペンが聞いてくる。

確かに裏方で活躍したい、出来るならソレが良いだろう。

園長達の労力も減るし、セーバルを早い段階で捕獲出来るかも知れない。

だがリスクが高過ぎる。 先ずセルリアンを倒す戦力が無い。 ジャイペンは強いかも知れないが、数的に不利だ。

仮に出来ても、セーバルのフレンズ化が無くなるかも知れない。

フレンズ化は城の中で、ほぼ輝きを失ったかに思われたセーバルに対し、サーバルが選択した行動の結果起きたものだ。

もしそれがなくなれば、それが更なるパークの危機になる可能性がある。

俺の思う正史から、どんどん離れていくのは避けたい。 予測が難しくなる。 手遅れかも知れぬ。

なんにせよ、俺が手を出さなくてもミライや園長達が事件を解決してくれる筈。 余計な手出しは無用だ。

しかしなあ……セルリアン女王がいない筈なのに、結界があるのは不安だぞ。

一体、城の中には誰の輝きを奪ったセルリアンがいるというのだね。

まさか俺の？ いやいや。ご冗談を。

まつ。 大丈夫つしよ。 ちよつとした大型セルリアンが代理で親玉をしていると思おう。

「セルリアンを倒すのはミライに任せる」

「ミライ？ 調査隊長兼、パークガイドの？」

「なんだ、知ってるのか」

「まあねー。 カコ博士から聞いた事があるんだ」

ああ。 カコとミライは友人だからな。 聞いていたとしてもおかしくはないか。

「そうか、近々会えるかもな。 ちよつとけもの好き過ぎて暴走する時はあるが、良いヒトさ」

「しっしっしっ！ 楽しみが増えたな！ あっそうだ、連絡出来るならした方が良

いんじゃないかー？」

「おっ、そうだな」

ジャイペンに言われて無線を手取る。

セントラルの状況を管理センターに伝えよう。

ミライにでも良いのかもだが、指示を出しているのは管理センターだ。上に報告&mp;伺いするのがスジだろう。

「こちら杏樹臨時職員。管理センターの小動物どうぞ」

『小動物じゃないです！』

直ぐに反応が返ってきた。

良きかな良きかな。小動物が無線越しにプンプン怒ってるのが分かる。可愛い。

「んで、セントラルの報告。結果……見えない壁が城の入り口を塞いでいて中に入れない。恐らくセルリアンの仕業だ。今回の事件の親玉が城にいる可能性がある」

『見えない壁？ 親玉といい、何故分かるのですか』

疑問を投げってくる小動物。

鵜呑みにはしないか。情報が欠けている。それに非現実的か。だがしかし。この島では常識に囚われてはいけないんだよ？

例えば俺。転生者ですし。それはパークの奇跡と関係ないかもだけど。

「壁はニホンオオカミが身を呈して調べてくれたからだ。親玉は……わざわざバリアを張るんだ、それ相応のヤツがあると思つてな」

『分かりました。ミライ調査隊長には管理センターから伝えておきます』

伝えてくれるらしい。良かった、これ以上食い下がらなくて。

「頼む。次はどこを調べる？」

『動物研究所へ行つてください』

はいい？

動物研究所？ また行くの？

セントラル事件発生時に向かった場所じゃないか。

今は誰もいない筈だ。何の為に行くのさ。

「分かりました、向かいます」

そして断らない俺。

ヤダ………：……パークに来てまで社畜道？

『お願いします』

「理由を聞いても？」

『動物研究所内に残された資料の回収です。無理でしたら、処分して下さい』

ああ。セルリアンに情報をパクられない為とか、火事場泥棒に機密情報を盗まれな
い為かな。

「了解。でも俺みたいなヤツが受けて良い仕事なの？」

『本当はダメですが、他に動ける職員がいないので』

微妙にへこむ言葉をありがとう。

しかし他、ね。

ミライは分かるが、他の職員って事件中ナニしてんだ？

描写が無いから分からん。ナニもしてないなんて事はないだろうけど。

管理センターは、働いてるのは分かるが。

俺のサポートがそうだが、他にはパーク各地、本土との連絡、各員の指示とか かな

？

その、奈々やカコが気になるんだが。

フレンズも、モチロン気になるが……。

「聞きたいんだが」

『なんでしようか』

「ミライと俺、管理センター以外の職員ってナニしてるんだ？」

『保安調査隊（探検隊）なら、パークの各地で調査活動。森林警備員（レンジャー）も

同じような事ですね。こちらはフレンズと協力して森のセルリアンを退治していま

す』

「フレンズの飼育員は？」

『担当の子と周囲の子らの安全や健康チェック、コミュニケーション。現地には簡単

に行けないので、リモートが多いです』

リモートね。 フレンドズを観察出来るという施設〔パピリオン〕に使われる技術を使うのかな？

とりま、仕事しているのは分かった。 皆、見えないところで頑張ってるんだな。

俺だけじゃない。 その事実が妙な安心感を生む。 俺もやれる事を頑張ろう。 そう思えた。

『他に聞きたい事は？』

「大丈夫」

『では宜しく願います。 分からない事があれば、また連絡を』

そう言われると、無線が切れた。

ヨシ。 次の目的地は決まった。 行こう。 これ以上ココに居なくても良さげだ。

「パイセン、ニホンオオカミ。 動物研究所に行く事になった」

「みたいだねー。 声を聞いてたよ」

パイセンは、特に動揺も意見もなく付いてきてくれるっぽい。
内心、どうなのだけ。ヒトの都合で復活させられた、いや……生まれさせられたか？

その場所に戻る。ナニも思わないのだろうか。

俺としては、セルリアンに喰われた場所だ。

もう二度と、あの経験は御免である。気を付けよう。

戦えない以上、それくらいしか出来ない。

一方、ニホンオオカミ。似合わない険しい顔になって、

「今度こそ、守るから」

静かに決意を固めていた。

うん……ありがとう。俺なんかの為に。

俺は静かにニホンオオカミの頭を撫でながら、駅へと踵を返す。

ジャイペンも、ニホンオオカミも、そして俺も。

何も言わず、ただ電車へと足を進めた。

ただ、最初よりも皆の足取りが重かったのは気の所為ではないだろう。

メルヘン裏のディープ世界

カコ博士。

「けものフレンズ」に出てくる、数少ない「ヒト」のひとり。

博士とある通り、研究職でジャパリパーク動物研究所の副所長を務める。

この世界（作中）の彼女は才色兼備な若き天才で、本土での学業は体育除いて常にトップクラス。

主に動物が好き。好きこそ物の上手なれとばかりに、知識が豊富。

休暇の日は動物園へ行く事が多かった。

大学へ進学してからは現生・古生物……動物の研究を行うように。

その優秀な知識と手腕からジャパリパーク計画へ抜擢。

島へ上陸後、ジャパリパーク動物研究所に配属。若くして副所長に。

既成概念が通用しないジャパリパーク。

多くの科学者が悩む中、サンドスターを用いた絶滅種のフレンズ化に成功させる等の結果を出している。

他にも様々な分野……サンドスター、セルリウム、フレンズに対して研究、見解を示

したレポートを書く。

これらは他の科学者にとつても貴重な資料、意見となっている。

未知が大半を占める島であるが、彼女はパークの権威と言つても過言ではないだろう。

(あんじゅは今、なにしてるのかしら)

そんな彼女も、内面は恋する女の子。

いつも研究、けものばかり考えているワケじゃない。

今なんて、研究の事より想いヒト……幼馴染の杏樹の事を考えてるのだから。

杏樹は何かに秀でていっているワケではない。学歴も悪く、一般人かソレ以下だ。

職種も違う。共通しているのは同じパークで働いているという事のみ。

天と地の差がある。ヒトによっては釣り合わないというだろう。

だけど、臨時職員として様々な場所へ赴き仕事をこなしている杏樹は素直に凄いなと思う。

そんな杏樹。小さい頃から好きだった。

幼い頃から頭が良かったカコだが、それ故に周りとは合わなかった。引つ込み思案

だったのも災いした。

それでも「けもの　さんが好き！」と言えば、刹那的に同い年の女の子が寄って来た。やれ　ワンちゃんネコちゃんの耳や尻尾が可愛いとか。身近な　けもの　さんの話題で盛り上がる。

だけど好き故に知識は深く口に出る。　小さい子が知らない　けもの　さんとか、難しい事、専門的な話が混ざってしまう事もしばしば。

その度に引かれてしまったり、距離を置かれて……気が付けば　またひとり。　幼き心は、その度に虚しく、寂しさを感じて来た。

だけど、杏樹は違った。

難しい言葉をつい言ってしまったても引いたりしなかったし、寧ろ真剣に聞いてくれる態度を示してくれた。

時々、どこか上の空になるけど、それでも他の子とは違う雰囲気と付き合ひ方。ちよつと大人っぽいトコも惹かれるポイントだった。

初めて出来たフレンド。

嬉しかった。　純粹に。

いつも側にいてくれて。

同じ事を好きになって。

話を聞いてくれて。

笑顔を見せてくれた。

それが恋心に変わったのは直ぐだった。

ハッキリ自覚したのは、ある日の事。

ちよつと年下のミライと動物園で出会い、友だちになった後。

杏樹への「好き」とミライへの「好き」と、けものさんへの「好き」が違うのに気付いた。

頭の良いカコは、その差を考え……幼くして「恋心」に気付く。顔が熱くなった。

家に帰った後は恥ずかしさと嬉しきでベッドの上を転げまわり、顔を枕に埋めた。

足をジタバタした。

くすぐったくて、苦しくて、離れたいのに、くっ付きたい。だけど心地良い温かさ。

不思議な感覚。

その感覚が、より強くなる事が起きた。

間接的ではあるが、杏樹に両親を救われたのだ。

杏樹と家族で動物園に向かう途中。杏樹が家にした悪戯のお陰で足止めを食い、結

果として行き先の道中で起きた交通事故ら故に巻き込まれずに済んだ。

偶然だとしても、救ってくれた事に違いはない。

カコにとっては想いヒトでありヒーローとなる。カコだつて女の子だ。白馬に乗った王子様に憧れた事もある。

そんな王子様と重ねて……恥ずかしさで顔が熱くなつて、やつぱりベッドの上でジタバタした。

これからも一緒に……いつまでもいたいと思つた。

そんな想いだつたから、大学へ一緒に行けなかつたのは悲しかった。

ジャパリパークへ行く時は会えないんじゃないかと不安にもなつた。

だけど同じパークで再会、共に立つ今。

会おうと思えば会える。連絡手段もある。側にいる時間は減つたけれど、それで

も十分幸せな事。

(でも杏樹は……私に隠している事がある)

深く、ため息。

幸せな微笑みから一転。少し沈む表情に。

小さい頃から共にいて、互いを知っているようで知らなかつた事実。

誰にでも隠したい情報はあつた。それはカコもそうだし、皆そうだ。仕方ない。

だけど、杏樹を理解していた気になっていたカコにはシヨックである。パークの未来が視えてるような発言。

そして「この世界のヒトじゃない」可能性。

後者は、ジャイアントペンギンのフレンズが、杏樹に聞いた時に発覚した。

いや、発覚というのは違う。本人も否定気味だった。それに荒唐無稽も良いところだ。

不思議な事ばかり起きる島だけど、いくらなんでも信じられない。

小さい頃から共にいたのだ。それはサンドスターが無い本土からずっと。

(じゃあ、未来の話は？ 非公開情報の知識は？)

すると疑問も生じる。

杏樹の狂言と片付けられれば楽なのに。 唾棄して跨げないレベルの知識。

偶然で片付けられない。 やはり本当に、この世界のヒトではないのだろうか。 或

いは未来人？ 超能力者とか？

非科学的な事。 不思議な事。

解明したい。 もっと杏樹を知りたい。

研究職員として。個人として。

だが、ソレをして杏樹に嫌われないだろうか。誰も幸せに出来ないのでは。皆を不幸にしてしまうのでは。

そう思う不安もあって……結局、カコは学生時代の時みたいに想いを胸にしまい続ける。

関係を壊したくない。ならこのまま。

その甘く進展のない考えは、頭の中でくすぶり続けた。

(やめよ、やめやめ。今はパークの問題を解決するのが最優先でしょ)

想いヒトへの思考の海から、ようやく現実へと帰還したカコ。

気付けば、どこかの会議室の椅子に座る。

周りには自身と同じ白衣を着た老若男女のヒト達がいて、大きなテーブルを囲むように座っていた。

その中にはジャパリパーク動物研究所 所長のゲンダイ所長もいる。

皆が見える位置に、プロジェクターが鎮座。その先には巻き取り式の白いスクリーンが展開。まだ何も投影されていない。

「カコ博士、大丈夫ですか？」

隣の女性研究員に、声を掛けられた。

研究所の後輩職員だ。心配する様に顔を覗き込んでくる。

いけない。職務中だというのに、雑念が混じり過ぎた。

それを悟られないよう、威厳があるように堂々と返答する。

「大丈夫よ」

「なら良いのですが……ずっと、考え込んでいたので」

「ええ。パークの現状をね」

嘘である。

だがしかし。副所長ともあろうお方が、パークの危機に想いヒトを考えていたなんて言えないワケである。

「カコ博士も、この問題は難しいですよ。もうすぐ各地の情報を報告し、解決策を模

索する会議が始まりますが……あまり良い話は期待出来ません」

気を使われたのか、説明口調をされてしまった。誤魔化し失敗！

威厳なんて、なかったんや。ノロケた顔をしていたのを見られていた所為もある。権威ある、風格ある印象は既に過去の遺物と化していた。

「……そ、そう。でも大丈夫よ。保安調査隊や森林警備員達、管理センターが尽力を尽くしている」

「それと、杏樹さんですよね？」

「そう……何故、個人の名前を？」

「なぜでしょうね。ふふっ♪」

副所長、からかわれる！

最早、隠せていない。惚れた腫れたな話が好きな職員らにとつては、噂が噂を呼んで広まり格好的と化している。

そのうちパーク全土に拡大してしまうのではないか。

「別に杏樹とは……幼馴染というだけ」

頬を赤らめながら、ナニかを否定した！

会議室の面子は思わず息を吐く！

あんなノロケ顔をしておいて、ただの幼馴染というのは無理だろオメーと。

皆は思ったが言わなかった。代わりにからかい続ける後輩研究員。

とても緊急事態下の空気ではない。OLの昼下がりの会話みたいである。

「そうでしたかー。 フレンズさんに良く杏樹さんの話を聞かせている様子でしたので、てつきり」

「仲良くして欲しかったからよ」

「あー、私語はその辺で勘弁してくれたまえ。 会議を始めるのでな」

「すみませんでした」「すみません！」

ゲンダイ所長に止められて、ようやく真面目な空気になっていく。

若い子のやり取りを見ているのは楽しいが、パークの危機に遊んでいるワケにはいかない。

フレンズは兎も角、上に立つヒトなら尚更に。

「では、緊急会議を始める。セルリアンの所為で行動範囲や場所が制限されており集まれたヒトは少ないが……現状、分かっている事を伝えて欲しい」

「はい。早速ですがコチラをご覧下さい」

ひとりの研究員が起立し、リモコンを操作。

部屋が薄暗くなり、プロジェクターが起動する。

白いスクリーンに光が当てられ、ジャパリパーク島の地図が映し出された。日本列

島を逆さまにして、小さく丸めた様な形状だ。

そこにレーザーポインターを当て、島を囲む様に点を動かす。研究員は動きに言葉

を添えていく。

「皆さんもご存知の通り、セルリアンは以前からパーク全土で出没していました。ですが基本的にセントラルや都市部に侵入する事は有りませんでした」

先ずは公開されている情報から入る。

この世界では、セルリアンの存在は公にされている。

島に溢れかえる存在を隠したところで、いずれバレるからだ。

世界からヒトや組織が集まるのを政府が推進する時点で、どうしようもない。

逆に言えば、より多くのヒトに認知させる事で、研究を捗らせる狙いもある。

まあ……日本が島の利益を独占したくても利益を得たい各国が圧力を加えてきたり、予算や人員が足りないとかの問題もあった。

何にせよ、その辺はパーク職員には、どうしようもない話である。

「一部の個体が侵入しようとした事例もありますが、安全柵やフレンズに阻まれて失敗しています」

島のお腹付近……セントラルにポイントを合わせる研究員。

リモコンを操作すると、セントラルに向かって小さな矢印が描かれる。セルリアンの侵攻を表している様だ。

「ですが今回、大規模な群れでのセントラル襲撃」

今度は大きな矢印がセントラルへと描かれた。次にはセントラルにバツ印。陥落、占領等の意味だろう。

複数の研究員は眉間に皺を寄せる。既に知り得ている情報だが、改めて知らされると悔しさを恐怖がこみ上げる。

セルリアン。ヤツらは謎だ。存在、目的、構成、何もかも。

今回の群れでの襲撃も突然で、予測出来なかった。研究不足……自分達の力不足も感じつつ、しかし現実と向き合うために話を静かに聞き続ける。

「セキュリティや、その場に居合わせたフレンズのみでは対処しきれず。警備員が警報を鳴らし、職員及び お客の避難完了まで時間を稼ぐのが精一杯でした……被害は幸か不幸か、その……男性臨時職員ひとりのみ」

「……っ」

カコが机の下で苦しそうに、ぎゅつと握り拳を作る。

説明している者も、周りの研究員もカコに同情した。

その男性臨時職員とは、カコの幼馴染の杏樹の事なのだから。

説明者は、セントラル全体の出来事としてボカしているが、これはカコや本人に配慮

しての事。

動物研究所でセルリアンに喰われそうになったカコを庇って犠牲になったのは、皆知っている。

杏樹は重要な人的資源を守った。称賛されて良い。

一方カコはセルリアンに、どうしても渡したくない資料……情報があつて所内に残っていた。

それを責める者はいない。寧ろ皆が逃げ出す中、勇敢であつたと思う。

それに犠牲になったといつても杏樹は、幸いにもフレンズに助けられている。

ただ、何故かチ●コが犠牲になって、女の子になっちゃった。おっ●い、ぶるんぶるんっ！

「その臨時職員は、2日間昏睡状態の後に職務に復帰……今日、ですな。良かったです」

説明者が慰めの言葉を添えて、ようやく安堵の表情。

といつても安全な本土に避難せず、職務復帰した杏樹。

安全な場所において欲しい想いと反するパークの為に頑張る姿で、心境は複雑ではある。

ここで杏樹が、女の子になっちゃった件は触れない。本題からズレるから。それとカコ博士が荒ぶるから。

どういう理屈で、彼が彼女になったかは気になるが。サンドスターとセルリウムは本当に謎だらけである。

「現在、各地で保安調査隊や森林警備員がセルリアンの調査を行なっています。とはいえ人手不足なのとセルリアンからの攻撃等が障害となっており……臨時職員は、セントラルの調査及び研究所の資料回収又は処分に動いています」

カコが挙手。

臨時職員とは杏樹の事だ。病院から抜けた後、仕事をしているのは知っている。が、やはり心配なのと仕事の内容が気になって質問を投げる。

「それは、危険じゃない？　特に研究所の資料を扱わせるのは」

「ごもつともな質問。」

いくら特例、緊急時とはいえ、機密情報もある研究所。部外者をホイホイ入れて良

いワケが無い。

対してゲンダイ所長が応答。

無表情にも見える初老が発言すると、有無を言わさぬ雰囲気があった。

「問題ない。所内に残っている資料は、杏樹君も知っているもの、或いは重大では無い事だ。危険な事は貴女が回収した」

「……はい」

「大丈夫だよ、カコ博士。杏樹君は管理センターがサポートしている。それに、フレ
ンズが ついている」

問題ないと言いつつ、フオローする所長。

角度次第では怖いが、気持ちも汲み取れる人物でもあるようだ。

そんなヒトらしさ、感情を見て取れて場が和む。 氣不味い空気は無くなり、話しやすい空気に。

「そうですね。ありがとうございます」

「礼を言われる事は、何もしていませんよ。それより杏樹君がしている。都市部やセ

ントラルの報告をね」

手で説明の続きを促すゲンダイ所長。

説明者は見て頷くと、話を再開。

「はい。試験解放区の都市部やセントラルの様子は臨時……いえ、杏樹さんがしてくれました」

名前をハッキリと言う説明者。

この流れで、隠す必要は無いと判断した様だ。カコや周りも同意見で、ナニも言わない。

「都市部はセルリアンが散見。セントラルも同様。ただ、襲撃時より数は少なくなっています。これは我々が輝きと表現しているモノが無くなった為と仮定します」
「おそらく、そう。セルリアンは輝きのあるものを攻撃、模倣するのが分かっている」

セルリアンの特性から考えて、カコ博士は発言。皆も同意見で頷いていた。

最も分からない事の方が多いが。輝きなんて科学的な説明が困難だ。

だが仮定の上で成り立つ事もある。取り敢えずの納得になるが、その上で調査研究をする事で分かる事もある。

今回のセントラルル事件は、アトラクション園内等の大きな輝きに惹かれて、ヒトのナワバリを襲撃したと思われる。一応の理屈は通る。

が、分からない事も勿論あるわけで。突然過ぎる襲撃。加えて大規模な群れは今まで確認されなかった。

準備や対策が出来なかった。その結果、この始末。

本土や各国は個人から組織、政府等からの賠償請求に追われている。

それは一部を除き、職員が気にしても仕方ないので多くは触れない。

気にするのは、起きてしまったパークの事件をどう收拾するかだ。この会議は、その為にある。

説明者の話は続く。

スクリーンのパーク各地に、多くのバツテンやセルリアンの写真が連続表示されている。

最早、数えるのが億劫だ。何度目か分からない溜息が出るのは、仕方ない。

「奪還するにはエリア内のセルリアンを殲滅するべきですが。調査隊の報告では、理由不明の活性化が見られ、また発生源がパーク全土にあると考えると………パークからのセルリアン殲滅は困難です。また、セントラルや都市部からセルリアンを駆逐出来たとしても、根本的解決にはなりません。今回の事件を收拾出来たとしても、また同様な事が起きる危険性が」

長く、今後の話へと脱線していく。

それはパークを心配しての結果だ。研究者だからといって、愛情が無いワケではない。

それに待てを掛けるは所長。

手の平を見せ、静止を促すと課題を現状へと戻す。

「分かっている。だが、今回の事件を收拾出来ねば次を考える余裕は無い。先ずは

そこから考えよう」

「は、はい。すみません」

「パークを心配する気持ちは皆同じだ。だからこそ、皆で考えよう」

カコや、皆も頷いて説明者を落ち着かせた。

ひとりひとりの足並みを揃えなくては。

個々では弱くても、群れになれば強い。それを理解している程に、仲間意識もある。

個々が やれ手柄がどうか、私ひとりでもとかでは烏合の集。何のチカラも発揮

出来ず何も解決出来ない危険性がある。

互いに手を取り協力する。美談ではない。重要な事だ。

「杏樹君の報告では、セントラルで不可思議な現象を確認したとあるな。それは？」

「はい。分析していない為、詳細不明ですが、セルリアンによる共鳴多重構造……防壁
と思われます。これがセントラルの中央に建造された城、けもキャツスルを覆ってい
るようです」

カコがフム、と思索。

分かつている事から、次の考察を生んでいく。

「セルリアンに意思はないとされるけど。どうしても意味があるものに感じる……城
内にセルリアンが守りたいモノが。それを暴いてしまえば、各地の活性化は収まる

「？」

「分かりません。 ですが、可能性はあります」

「希望的観測、個人の見解に過ぎないけれど。 やるべき事が決まるのは大きな進展ね」

カコ博士が言うと、周囲の研究職員は互いに目を見合わせ……資料に走り書きを始めたり管理センターへと連絡を始めた。

会議中だが、善は急げ。 所長もカコも咎めたりしない。

寧ろ自発的に動くラボトリースタッフに感心する。 良いヒト達に恵まれた。

「それと、サーバルキャットのフレンズにそっくりなセルリアンの情報が。 管理センターから調査隊やフレンズに捕獲依頼を出しています。 徐々にセントラルへ移動しつつ、行く先々でセルリアンを活性化させているとの事。 特別な輝きを内包している可能性があり、危険視した方が良いかと考えられます」

「杏樹の手紙にもあった事ね。 それはミライ班に任せれば大丈夫よ」

「分かりました。 それから、特別来客があつた件ですが」

所長、再び手の平を向けて静止させる。

今度は、先程までの温かい声色から一変。心が凍る感覚を覚える、重い声を出した。

「その件は触れなくて良い」

「……………いい、いちおう報告をと」

「謎は多い。だが今は事件收拾へ動くのが最優先だ。分かるね？」

「す、すすみません！」

思わず手を止めてしまう面々。

皆が普段見せない所長の表情と声にビビる中、カコは別の思考へとシフトする。

（所長は来客者を知っている？　それとも、謎を？）

今考えても仕方ないと、直ぐに思考を止めた。

それより所長の言う通り、事件收拾を急がなくては。

直ぐ皆と共に作業に戻りながら、妙な引つ掛かりを覚えるカコたち研究職員。

だがそれも、作業で頭の隅へと追いやられていった。

セルリウム実験室へ。

再びジャパリパーク動物研究所。

白い清楚な感じの建物は、セルリアンの襲撃で外壁が崩れてたりとボロボロの有様。

ここまで電車から降りて、少し歩く程度。研究所の側に駅があつて良かった。

てか、駅名も『ジャパリパーク動物研究所』とそのままである。

流石に敷地内や真正面には建設出来なかつたようだが、だいぶ助かつたな。余計な体力を消耗しなくて済む。

こうして研究所の側に駅があるって事は、パークは研究にもチカラを入れてるという事か。研究職員が行きやすい様にとという配慮かも知れない。

しかしまあ、誰が好き好んで自分が喰われた場所に赴きますかね。

行けって言われたから来たけどさ。管理センターは配慮してくれなかつた系？

「いやー！ フレンズ化した場所に来ると帰ってきたかあーつてなるねえ」

この有様なのに、ジャイペンが朗らかに言った！

ヒトの、実家の感覚じゃないの？

俺だったら悲しいんだが。喜ぶヤツは相当親に怨みがあるんだろう。

アレ。その理屈だと、ジャイペンはフレンズ化させたヒトが憎いんじゃないや……。

「そうだね！　戻ってきたって感じ！」

ニホよ、お前もか。

尻尾を振って喜んでらあ。絶滅種って、やはりヒトを憎んでるんじゃないやね？

ジャイペンはヒトの時代ではなかったと思うが、フレンズ化させられたワケだし。

「お前ら……俺は関係ないからな？」

「わふ？」

「んー？　ああ」

ニホは首を傾げ。

ジャイペンは一瞬だけ悩み、答えを出す。

ニホ、相変わらずのワンコ。

言う事聞いてくれてるウチはヨシ。

ジャイペン、かしこい。

でも、そのかしこきは、俺には恐怖。

「あんじゆが考えてる事は、ないんじゃないかな？」

「そうか？」

「そうそう！　カコ博士や杏樹と会えたし！」

しっしっしっ、と笑うジャイペン。

俺の思ってる事と、ジャイペンの考えた事は同じなのか？

分かん。全然分かん。

だけど笑顔を見たら、グダグダ考えるのが馬鹿らしくなってきた。

仕事は仕事だ。やるべき事をやるだけ。　答えの出ない、余計な事は考えても前に

進まない。

「そうだな。俺もジャイペンやニホに出会えて嬉しいよ」

「嬉しい事、言ってくれるじゃん！」

「私も嬉しいよー!」

喜ぶ絶滅種のフレンズ。複雑な気持ちだ。
今は前に進もう。足踏みしても仕方ない。

所内に入れば、まあ暗い。

何もおかしくない。停電しているのだ。そのくせ、電車が動いているのは置いておこう。

非常用回路、照明や発電機はあるだろうが期待していない。

エントランスにいる分には、窓や入口からの明かりがあるから良い。

だが、奥は真つ暗。俺の気持ちや人生みたい。って、やかましいわ。

「暗いね」「暗いなあ」

俺の人生の様。　　つて、もう良い！

「ああ。　今まで当たり前だった、電気の有難さを感じるよ」
「セルリアンの匂いはしないけど、瓦礫もあつて危ないよ？」

ニホが有益な情報を教えてくれた。

セルリアンがないのは有難いが、瓦礫も危ない。　暗いと尚更に。
襲撃事件から日が経っている。　電気供給は何らかの理由で停止。　非常設備にしても発電用燃料が尽きたり、セルリアンによる攻撃で非常照明が壊れたり回路が断線しているのだろうか。

だが、ここは重要施設。　いちおうそうなつても措置の仕方はあるはずだ。

「大丈夫だ。　ヒトはこういう所には、非常用の設備や道具を置いているモンだ」

「ひじょーよー？」

「照明を点ける気かい？」

ニホはともかく、かしこいジャイペンは疑問符。　ふむ。　知らないか。　ちよつと有利に立てた気分で嬉しい。

そんなワケで。　俺はエントランスにある受付カウンターの裏を漁る。

受付用ボードじゃなく……筆箱じゃなく、忘れ物入れでもなくてだな……なんでR18本があんだよ!?

よ、よしよし。　あつたぞ。　これだ。

「テツテレー!　懐中電灯〜!」

どこの青狸……げふん。　猫型ロボットの真似をして取り出すヒトの道具!

棒状のソレ。　暗闇に向けて上部のスイッチを押す。　ピカーツと光り、闇が払われた!

「あんじゅちゃん、さっすがー!」

パイセンよ。　忘れていた事を思い出させてくれんなよ畜生!

「わあー！　なにそれ！　気になる気になる！」

じゃれつくニホ。　いつも通りで安心。

ヒトの文化に触れている方のニホも、新しいモノには興味津々になる。　可愛い。

それはヒトも同じか。　いや、個人差はあるか。　俺なんてダメだからな。　懐中電

灯よりエロ本の方に興味津々だったし。

あー、でも。　女体化した所為か性欲が湧かない。　悲しいなあ。　おのれセルリア

ン許すまじ。

「懐中電灯。　ヒトの道具さ。　スイッチを押せばライトが光る。　暗闇の中を進む時

に重宝するよ」

「ヒトって、色々なモノを作るね！」

「いやー！　私が生まれた場所なのに、知らなかったとは。　お恥ずかしい！」

ニホは褒め、ジャイペンはわざとらしく腕をおでこに当てる。

持っているスマホのライト機能も使えるけどな。

光量や持ちやすさなら、まだ本家に軍配が上がるんじゃないかな。

普段持ち歩くモンじゃないけどさ。

「俺が作ったワケじゃないが。これで探索出来るな。俺について来い！」

「うんうん。ところでさ、何を探すのかな？」

「資料だな。あー、管理センターに連絡する」

ジャイペンに言われて、無線を弄る俺。肝心な事を聞きそびれてたわ。格好付けていたぶん、恥ずかしいんだけど。

「小動物聞こえるか？」

『何度、ツツコミを入れれば良いのです？』

ぶんぶん丸から呆れ丸に変化した小動物。次は何になるのかな？

「研究所に着いた。回収資料とやらは、どこにあるんだ？」

『セルリウム実験室です』

「なるほど、セルリウム……ファッ!？」

セルリウム!?

さらりと、ヤバい単語が聞こえたよ!?

セルリウム。

それは、セルリアンを生み出す未知の物質。

黒いドロドロした泥の様な見た目をしている。　輝きに反応、それを模倣したセルリ

アンを生む。　うん。　危ない。

一期アニメでは、セルリウムの名は出ていないが、サンドスター・ロウという名前が出てきたな。　コレの所為で大型セルリアンが巨大化していた気がする。

果たしてセルリウムと同一のモノかは不明だが、たぶん一緒かと考える。

それが、研究所にある可能性。

未知に対する好奇心、研究故にか。　謎を解明したい。　結果、パークや皆を守るのに繋がるかも知れない。

それは分かる。　分かるが、やっぱり怖い。　近寄りたくないんですがそれは。

「な、なあ。　セルリウムがソコにあったりする?」

『ある様です』

あるのかよぶぎけんな馬鹿こん畜生!?

『ですが、蓋をしたペトリ皿に保管してあります。　大丈夫ですよ』

ほんとお？

ガチめの密閉容器じゃないでしょレ。　襲撃もあつたワケだし、漏れ出ていたりしない？

い、いやいや！　　ビビるな俺！

仕事、任務を遂行するのだ。　パークの為に！

「分かった。　施錠されてたりしない？」

『大丈夫です。　普通に入れますよ』

そして閉じ込められてのエンカウント。　俺は詳しいんだ。

『その部屋にある資料を回収して管理センターに戻って来て下さい。　分かりやすいと

『ころにあるそうです』

分かりやすいところ？

手に取ろうとした瞬間、ムービーが入るんだろどうせ。俺は詳しい（ry

「んじゃ、行ってくる」

でも避けられない。行くしかない。

無線を切る。意を決して、俺は暗闇へと足先を向けた。

「セルリウム実験室へ行くって？」

無線を聞いていたジャイペンが、明るく尋ねる。

そんな表情が多いよな、この子。良い事なんだろうけどさ。

でも、何を考えているのか時々分からないのは怖い。

「ああ。入った事ある？」

「ないな。 研究職員の、それも一部しか入室出来なかったし」

やや困った様に答えられた。

まあ、聞いてみただけだ。 まさか無関係者やフレンズをホイホイ入室させるとは思

えない。

だけど、一部ね。

カコとか、かな。

セルリアン女王のセリフから妄想すると……カコはセルリウムを使用した故人の実験をしていたのでは？

そして、正史と違って良いか分からんが……亡き両親を再現しようとしていた？

もう会えない。 会える。

偽物でも。 それでも。

そんな事を言っていたような気がする。

それは、カコの気持ちだった筈だ。 セルリアンは都合の良い部分のみを発言してい

たが、それはきつと、嘘ではない。

だけど この世界では、俺の存在の所為か。 悪足掻きした結果、カコの両親は生存

している。

だから、セルリウムを使用した……そういうった倫理観に反する事はしていない筈。そう、願う。

これから回収する資料とやらも　そういう事ではない。俺の心は否定した。　し
たかった。

「あんじゅ」

ニホの声が、研究所に木霊した。

「大丈夫だよ。　あんじゅは、私が守るから」

真剣な声だ。　ニコニコ笑顔が似合う彼女らしくない声。
だけど、不安感に襲われていた俺には安心出来るものだ。

「私もいるからなー！」

パイセンはニコニコ笑顔で言う。

だがそれも、俺を安心させてくれた。

そうだな。俺には今、フレンズがいる。

だから……大丈夫だ。何があっても。

「ありがとう、ニホ。 ジャイペン」

そう言って……ようやく闇へと歩き始める。

カツン、カツンと木霊する、俺とフレンズの足音。 暗い廊下を照らす、ひとつの光。

不安はある。 また喰われるのも勘弁だ。

セルリアンがいるのも怖い。 変な真実があるのも怖い。

でも、今の俺は ひとりじゃない。 その事実が確かに、俺を動かしてくれていた。

壁に描かれている所内マップ等の案内をみながら、実験室まで歩いている。

道中は暗く瓦礫だのなんなので危ないが、セルリアンがいなくなってくれただけ遙かにマシ。

たぶん、奪う輝きが無くなったかです。他所へ移動したのだ。それが良い事かは知らん。

取り敢えず、資料がセルリアンの手に落ちてない事を願う。手はないだろうが。

と、考えていたら。

前方を壁に阻まれた。行き止まり、というワケではない。非常用の壁だ。

「マズいな。コレ、隔壁か」

しっかり閉まっている重厚な鉄壁。

通常の施設で見かける防火戸のような感じではない。

避難者や消防隊等の、ヒトが出入り出来る扉がないのだ。

「私が壊すよー！」

そう言うは二ホ。

鉄扉を破壊したからな、また壊せると思っているのだろう。
たぶん、ニホには無理だろうな。

これ、かなり頑丈そうだし。でもいちおう、やってもらうか。

「頼む」

「わかった！」

元気良く返事。

そして手を光らせて、鉄壁に振り下ろすと。

キイイイインツ！

「ウツ!? ビクともしない！」

激しい金属音と、軽い火花が散ったが壁はへこみもしない。

これ、クマヤゾウのフレンズなら壊せるだろうか。無理か。

かなり堅牢そうだ。

「ジャイペン。 実験室に行くには、この道しか無いんだろ？」

「だね。 この壁を何とかするしか道は無いよ」

「となると……この壁、セルリアン対策か」

万が一、実験室で事故が起きた時。 セルリアンを中に閉じ込める設備だな。

空調設備……ダクトにもひよつとしたら隔壁が設けられているのかも。

そして、ヒトも一緒に閉じ込められる。 そんなでチョメチョメされる。 嫌過ぎる。

だが、内外で上げる方法はある筈なのだ。

セルリアンには扉を丁寧に開けたり、スイッチを押す等の基本知恵は無いかと思われ
る。

そう考えると、そういった救済処置を設けても良い判断になった筈。

俺は考えた。 近くの壁を光で照らし、探す事にする。

「んー？ あんじゆ、非常用の何かを探しているのかい？」

「ああ。 無いと困る」

そして、それは直ぐに見つかった。

スイッチだ。エレベータースイッチの様に、上下矢印ボタン。分かりやすくして結構。

「これか？」

上ボタンを押す。すると。

「わー！　壁が上に上がったー!？」

隔壁が上にゆっくり上がり始め、二ホが騒いだ。

良かった。これで先に進めそうだ。

これ、後で閉じ込められたりしないよな？

「本当、ヒトは色んなものを作るなあ！」

ジャイペンが、またワザとらしく言った。

「そう……だな」

「ただ……その中にはヤバイモノもあるんだよ。」

「この研究所も、そういったモノはあるんじゃないだろうか。特にこれから行く実験室とかさ。」

「ふたりとも。気を引き締めてくれ。この先、ナニが起きるか分からんからな」

「うん！」「はいよー！」

「明るい返事が、なんだか気が抜けた返事を感じて不安になるんだが……。」

「いや。大丈夫だ。ふたりは強い。信じている。」

「俺たちは、また先へ進む。」

「セルリウム実験室と書かれた扉は、直ぐだった。」

「ちやちやつと済ませちやおう！」

「パイセン。心の準備をさせて。」

「よし。行くぞ、お前ら」

俺は深呼吸し……それでも緊張した面持ちで、棒状のドアノブを下へ引く。聞いた通り、鍵はかかっていない。

入室。部屋は、そこそこ大きい。

色んなモノが目飛び込む。

球状のガラスドームの様なモノ。

その中にある、ペトリ皿。中にある、黒い泥の様なモノ。微妙に動いている。

セルリウムって、あんな感じなのか。初めて見たが……近寄りたくないな。黒い

ドロドロというだけでも嫌だが、微妙に動いているというのも生理的悪感がある。

幸いにも漏れ出ている様子はない。その辺は触らないでおこう。

部屋の隅には、酸素カプセルの様な機械が鎮座している。

それも何なのかは知らない。中には何も入っていない様だが……。

「よく分からんモノばかりだな」

「あんじゅ。あの黒いドロドロ……イヤな感じがする」

ニホが入室そうそう、唸り声を上げた。その視線の先には黒いドロドロ……セルリウム。

「ニホに同じく。アレには関わらない方が良いでしょう」

ジャイペン、真顔で警告してきた。

「けもの の本能か？ フレンズとしてか？」

「どちらにせよ、ヒトより優れた子らだ。警告は素直に聞き入れよう。」

「そのつもりだよ。早く回収して、ここから出ようか」

「そういつて、資料を探す事にする。余計な事はしない。」

「資料らしきモノは、直ぐ見つかった。」

「唯一あつた、机の上に置いてあつた。白い紙媒体の様だ。文字が羅列している。」

「そして、手に取るとつい。ちよつと目で読んでしまう。」

「難しい言い回しが多く、不勉強な俺には殆ど理解不能であつたが。」

それがセルリウムを使用した実験内容、計画なのは分かった。その文の中から、目に飛び込んできた文字がある。

『セルリウムによる故人の再現』

「な、なんでだよ……………ツ!？」

思わず叫んでしまった。

ニホとジャイペンは驚いて、俺を見るも直ぐに気が付かない。

まさか計画者はカコか!？」

なんで!？」　　なんでだ!

両親は存命している！
やる理由はなんだよ!?

チカラを紙に込め、くしゃくしゃにしながらも、無い頭を必死に回し、目を上から下に動かして文字も読む。

誰が計画したかは、下の方に書いてあった。

ジャパリパーク動物研究所 所長。

ゲンダイ所長。

なんで所長が？

いや、所長だからか？

所長もヒトだ。 歳だ。 大切な……だけど、故人になってしまったヒトに会いたい

と願った可能性がある。

なんにせよ、俺は思った。

ヒトは、ヒトだと。

カコを何とか出来ても、他の……知らないヒト達まで見きれない。 分からない……

！

転生者だとしても、けもフレ世界を多少なりとも知っていても。

この世界に生きる、ヒトやフレンズ全てなんて分かりようがないのだ！

だけど、どうする事も出来ない。 どうして良いのか分からない。

俺は、怒りや不安を……ただ……。

とにかく……管理センターに持って行こう。

この情報を、他の組織やセルリアンに渡すワケにはいかない。

それだけ……白くなった頭が、そう結論付けた。

相談しよう。

揺れ動く電車。静かに座る俺と、両側に座るフレンズ。

互いに何も言わない。

レール走行音と時々流れる自動アナウンスが、静寂過ぎない世界をつくる。

だからといって、気まずさやザワつきが無くなる事はない。

ニホとジャイペンも、ここまで話してこない。どう対応して良いのか分からないの
だろう。

「……………」

「……………」

「……………」

分かるよ、それ。ヒトにもあるから。

だが、原因は俺なんだ。研究所で……今、手に持っている資料を見て……叫んでしま
ったから。

いや、だつて……ねえ？

アレは叫ぶでしょ。

セルリウムで故人再現計画とか。

カコの両親を救えば、そんなもんは消えると思つていただけにショックだよ？

結局はさ。個人レベルを止めたところで、誰かがやるだけなのは分かつたよ。

セルリウムの特性を知れば、誰かが遅かれ早かれやる事だつたのだ。きつと。

誰にでも大切な思い出やヒトはいる。失つたモノを取り戻したいと願うのは珍しくもなんともない。ありふれていると言える。

俺もそうだ。酷い前世だったが、良い思い出がゼロだつたワケじゃない。それをもういちど欲しいかといえば、欲しいものだ。

だがセルリウム。セルリウムだぞ。

危険な行為だ。俺は研究職員じゃないから、詳しくは分からない。だが、あの物質を利用しようとしたら……ロクな事が起きない。

俺の妄想は当たるんだ。馬鹿にするなよ。

こんな気不味い空気の打開策。

パークマニユアルに載つてない？

俺は不真面目だから、あまり読んだ事無いけど。

無理矢理、日常会話してみるか？

そうすれば、ふたりも資料の件には触れてこないだろう。 うん。 そうしよう。

「な、なあジャイペン」

「うん？ どうしたの？」

ヤダ、パイセン。いつもの明るい顔。

いや。明るい裏では色々考察中か。

そう思うとき、パイセンが危険な事に突っ込まないか不安になる。

もういつそ、ネタバレしようか。そうすれば俺も楽になる。 ついでにナニか、突

破口が開けるかも知れないしさ。

い、いや……やめよう。危険だ。

これはヒトの問題。巻き込むのは、良くない。

「あー、その……そうだ。PPP（ペ PAP）の皆とは会えたか？」

「会えた会えた！ いやー、ありがとうね可愛い後輩を教えてくれて！ なんか

会ったらさ、いろいろと慕ってくれて！ 嬉しかったよ！」

普通に、日常会話をしてくれるパイセン。

気を使われたか？

まあ、しかし……その。なんだ。

初対面でいきなり慕ってくれたの？

絶滅種だからか、風格があるからか。かしこさもあるか。

「プリンセス……ロイヤルペンギンのフレンズの子なんだけど、新しくメンバー入りしたって事で！ 私に出来る範囲でサポートしてあげてるんだ！」

「そうなんだ。すごいなジャイペン」

「しっしっしっ！　　そう言われると、照れるなあ！」

ジャイペンが所外に出たのって、この事件がキツカケだよな？

という事は、2日……いや、1日かそこらで会いに行つて、仲良くなつて、しかもプリンセスのサポートしてんの？ ヤバあない？

そんな明るい会話に触発されたか。

ニホが話しかけて来た。良いぞ。この調子で会話をし、資料は忘れろ。

「ねえ、さっき叫んでどうしたの？」

紙に何か書いてあったの?」

直球ストレートで来たんだけど!?

ヤバイ。 どう打ち返そう。

パイセンを見る。 困ったような顔をしている。 が、助けてくれそうにない。
あわよくば、答えを聞こうとしているなパイセン。 くそう! くそう!

「……遠吠えだよ。 思わずしちやつて。 ニホ、今度一緒にする?」

誤魔化す! カット出来るか!?

頭がぼわーんとしてそんな駄犬だ。 何とかなるだろう!

「誤魔化さないでよ」

無理でしたー!

てか、ニホ。 今まで見たことない顔してるんだけど。 ハイライトの無いツリ目で

無表情で見つめてくるんだけど。 ヤダナニソレ怖い！

「ねえ、気になるよ。 私を群れから……仲間外れにしないで」

「仲間外れになんか、してないぞ」

「嘘。 今までは、そういう時が多かった。 構ってくれなかった。 勝手にどこかに 行ったりした」

うっ……！

確かに。 思い出すと、そういう時が多かった気がしてきた。

もっと一緒にいるべきだった。 すまない、二ホ。 でも。 それでも。

「ごめんよ、二ホ。 でも……この話だけは、二ホには……いや。 パイセンにも出来ないんだ」

「なんで？ なんでよ？」

怖い！ ハイライトの無い目に吸い込まれそうだ！ 正直チビリそう！

女の子が電車で失禁！ 好きなヒトは好きそうなシチュ。 でもしない。 しそ

うになる寸前で耐えられた！

俺は声を震わせながら。でもハッキリと答えていく。

「これは、ヒトの問題なんだ。レンズを巻き込みたくない」

「ねえあんじゆ。私は、その問題から守りたい。きっと、その事はあんじゆにとつて怖い事だったんだよね。だから叫んじやつたんだよね？」

かしこい。

やはりオオカミ故にか。普段の駄犬ムードはどこに消えた。今まではかしこいのを隠してたでもいうのか。

そして……身近なフレンズだからこそ、フレンドだからこそ。

打ち明けたい気持ちになる。甘えたい。言えればどんなに楽か。

でも、やはり……くそつ。

「まあ、な」

「私だけじゃない。きっと、あんじゆのともだちは、あんじゆを守りたいって思うよ。だから……言うだけでも良いんじゃないかな」

「私も、ニホに賛成だな！　ひとりで抱えても解決しないよ？」

ここでジャイペンからの追い討ち。

くっ。言うしかないのか？

でもフレンズに言うのは……。

「パークには、私がいる。皆がいる。フレンズがたくさんいる」

「ニホ？」

突然に。ニホは笑顔で語りかける。

優しく。母親が子に言うように。優しく、優しく。

光の無い目。だけど優しさを感じる目に。

瞳に映る俺——今は女の子の姿だけど——を包み込んでいる。

「だからね。もう頑張らなくて良いんだよ、辛かったら、言って良いんだよ」

ギュッと抱きしめた。

冷たくて、寒さと寂しさに震える身体を暖めてくれた。
耐えて溜めてきた涙が、大粒の雨となって二ホを濡らす。
止めなくちゃ。　だけど、優しい温もりに耐えられない。　止めどなく、涙が出てくる。

「……二ホ」

もう良い。　全てが赦された気持ちだ。

俺は思わず、突然の出来事だが……嬉しきで二ホを抱き返してしまう。

思えば同居しているのに、こんな事はした事がない。　初めてだ。

抱きしめ返したのが合図のように。

二ホは耳元で、優しい言葉を言った。

「」

パークに、改めて受け入れられた。

そんな温かな気持ち。

醜態を晒す中、パイセンも温かな目で見守ってくれていた。これさ……後で黒歴史になりそう。

でも、今だけは泣いて良いよね？

結構、ダークサイドな部分に触れてツライさんなんだよ俺。

豆腐メンタルなんで。

「——そんな事が」

「そうなんだ」

ジャイペンとニホは真剣に、資料の事を聴いてくれた。

フレンズに話して解決するかは分からない。だけど、気は楽になった。

今後、どうすれば良いのかなんて分からない。

なんだったら放置しようか？

事件收拾なら、パークのどこかで行動中のミライ班……園長たちに任せれば良い。

暗部に下手にツツコミを入れれば、輝きを奪われるより恐ろしい目に遭うかも知れない。

ならば。大人しく上の指示に従ってりや良い。パーク職員として職務を遂行するのみ。

いや……それが本当にパークの為か？

それは、ヒトの為にフレンドズの皆の為じゃないのでは？

疑問に思えば、またどうすれば良いのかと考えてのループにはまる。

マジでどうすりや良いんだ？

アイディア求む、フレンドズよ。

「ならば、カコ博士や皆を仲間に引き入れよう！」

パイセンが言う。

それが出来れば良いんだが。

「群れを作るんだね！ 楽しそう！」

「サークル作る感覚で言うな」

二ホよ。いつもの口調で言うが、遊びじゃないんやで。

ヒトを仲間にしようとするのは、リスクが高いんだよ。

声かけして、仲間に入ったつもりをされての裏切りパターンとか。

ヒトはね。平気で裏切るからね。なんなら殺すまである。

「あー、フレンズを引き入れるのは？」

「それでも良いと思うよ。でもさ、ヒトの問題なんだよね？」

「そうだな」

「それも動物研究所ときた。おいそれと立ち入れない場所で悪事が起きる。なら内

通者がいた方が良くない？」

パイセン……本当にフレンズですか？

言い回しが知恵ある者だよ。キレ者だよ。

「パイセンさ」

「うん？」

だから、気になってる事を聞こう。

「実はオツサン入ってたりしない？」

「ヒドいなあ!! 私はご覧の通り、ピチピチのフレンズさ！」

「ピチピチとか死語じゃね？」

「なんなら、もつともつと遙か前を生きてたかもね。 あんじゅちゃんは、《どれくらい

前》かなあ？」

「あ、いや……すまん。 本題に戻ろう」

しっしっしっ、と笑われる。

いかん。 からかわれた。 ナニ言っても勝てそうにないな。 パイセンをからか

うのは止しておこう。

電車のリズムミカルな音を聞きながら、話を続ける。

「カコに相談するよ。 最も身近で信用出来る、ラボラトリースタッフだからな」

「うんうん。 それと、管理センターは？」

「管理センターは小動物……今、俺をサポートしてくれているヒトに言う。無線越しだと記録に残るから、直接会って話す」

カコも小動物も不安だが。

頼りになりそうな一方、上にいる分 暗部に絡んでいる可能性がある。

だが話さなければ進展はない。裏切られるにしろ協力してくれるにしろ。

あつ。 そうだ。

ミライと園長に話すのは？

裏の無いヒト……かは分からない。だが、そこらのヒトより絶対良い。

「ミライと園長にも話そうかな」

「えんちよー？」 「園長って誰かな？」

ニホとパイセンが首を傾げた。

ああ、うん。 知らないのも仕方ない。 なんなら俺もよく分からない。

幼少の頃に会った男の子が、園長かも知れない。 だからなんだよって話だが。

俺の知っている知識というなら、このセントラル事件の、アプリ版主人公だ。

園長という呼び名は親玉を倒した後、フレンズが親しみ等を込めて言い始めた呼び名だったかな。 たぶん。

別に今言っても、対して悪影響は無いだろう。彼の持つ『お守り』の話をしたワケじゃないし。

「今、ミライと一緒に行動している お客さん……いや。 職員、かな」

パークの為に動いているから、お客さんじゃないか。そう思って『職員』と言いついた。

かばんちゃんの物語の影響もある。

「ほう。 特殊なヒトなのかな？」

さすがパイセン。 鋭い疑問。

閉園状態のパークに、突如としてサバンナに現れた記憶喪失のヒトだ。 特殊なパーク製のお守りを持つまでである。

「特殊だな。まだ会った事はないが」

「それなのに信用出来ると考えるのは、やっぱり あんじゆの記憶的に オツケーな感
じ。」

「確証は無い。でも、そこらのパリピより断然マシだな」

「そつかそつか！ そうしたら、信じてみると良いよ。私も信じる」

「あんじゆが信じるなら、私も信じる！」

笑顔で言う お二方。

何の確証も無しに、そう言うとは。

フレンズらしいというか、純粹無垢というか。パイセンは微妙だが。

「信じてダメでも、私が守るから」

「結果は、一緒に背負うよ？ 言い出しつぺは格好悪いじゃん？」

ふたりは言う。グダグダする俺を押す様に。

いやはや……泣いて、ここまで言われて、やらないのも格好悪いよな？

仕方ない。やろう。

ヒト……信じてみても、良いじゃないか。

「分かった、言ってみよう。ただし」

キョトンとするジャイペンとニホ。

ナニ、別に大した条件を付けるワケじゃ……いや大した条件を付けるか。

「この事件を解決しながらな」

「へ？」「それは、どういうコト？」

疑問に思うよな。

この事件、資料の件とおそらく関係ないし。

放置しても園長らが解決するし。

だが、そうだとでも利用出来るものは利用する。

「これから、偶然を装い保安調査隊ミライ班に合流。共に事件解決に行動しながら、こちらの話も合わせてする」

ヒトが少ない現パーク。

セルリアンが跋扈し、情報が遮られているからこそ……事件を隠れ蓑に重要人物らに接近するのだ。

《ときわたり》の可能性と相談。

セントラル駅に途中下車。

管理センターが各駅停車運転にしている良かったよ。お陰で降りられた。

管理センターの小動物には、ミライ班への協力と言いついておいた。

無線記録に残るから、怪しまれるかもだが……大丈夫と願おう。

ほら、言っておかないと管理センターに中々来ない理由を問われそうだし。

逆にだ。無線以外では、俺の情報は分からない。小動物が言っていた「無線記録

が残るから、不用意な発言はしないように」というのがヒントだ。

無線にさえ気を付ければ、俺の行動は分からない。

いやしかし。意図は……バレるか？

資料を確保したと思ったら、妙な行動を取るワケだから。

小動物が、何とか誤魔化してくれる事を願う。あのヒト、色々優秀そうだし。

味方なら、その辺を上手く取り計らってくれるハズ。頼む！

録画や無線連絡機能のある、パーク中に配備されるラッキーパーキービーストがまだ稼働して

いないパークだ。

監視カメラでバレルのかもだが、会話までは分かるまい。

ダメでも小動物が何とかなる。信じてるぞ小動物。ご都合主義万歳。そんなワケで。

セントラル内のベンチで待ち惚け。

青空が綺麗だなあと。パークが平和じゃないのが嘘のよう。

だが聳え立つ城を見れば、違和感がある。よく目を凝らして見れば、薄い半透明な膜が。それはドーム状に城を覆っている。

さっきも確認した、セルリアンの境界だ。現代科学で解明出来ないのかね、アレ。

実はある程度分かっていたりしないかな。ミライのメガネでの解析で、セルリアンによるモノだと分かっていた気がするし。

「セントラルにいれば、ミライ達に会えるんだ？」

「ミライさん……気になるから、早く会いたいな」

隣に座るジャイペンが訪ねてきた。

ニホは単に会いたいだけって感じが。

来るか不安……というワケじゃなさそうだが、聞かれたなら答えよう。

「そのはずさ。最終的には」

アプリ版……最終決戦の地だった筈だからね。ここ、セントラルは。

正確には、中央に聳え立つ けもキャツスル内が決戦の場だ。

詳細は憶えていないが、各地にいる、結界を作り出しているセルリアンをフレンズが倒して結界を解く。

そこで、園長らが城内に突入。オイナリサマに出会ったりセーバルがフレンズ化したり、色々あつて最後は親玉を倒す。

それはまあ、園長らに任せたい。戦闘指揮能力は園長らが高いだろうし、フレンズから信頼もされているだろうからね。『お守り』という特別なモノもある。

ちよつと羨ましい。嫉妬するすらある。

と、ここで二ホが吠えた。耳が良いのだ。ナニか聞こえた模様。

「あんじゅ、何か音が近付いてくるよ！　くるま　みたい！」

「この状況でか。　なら、ミライ達だろう」

期待をして、遠くを見やる。すると砂煙を上げながらジャパリバスが やつてきた

！

ジャパリバスといっても、かばんちゃんの乗っていたタイプではない。ひとまわり以上大きい。都バスのよう。

運転席部分はネコ科の動物……サーバルっぽいのか、配色が共通しているように見える。ただし、造形は ややリアル。

窓ガラスもしっかりあり、運転席は分離出来ない。その代わり潜水モードがあるんだったか。リウキウ地方辺りで、なったかな。

実はかばんちゃんの使用したバスも、そんなモードがあつたりするのだろうか。見た目は簡素的だった。

まあ、何にせよ会えたから良い。

「おーい！ 待つてたよよよ！」

アニメのカピバラさんの言い方風に声を出しつつ、手を振った。

いやはや。こうして生でジャパリバスを見ると、謎の感動ですな。

「おー！ アレがバスかあ！」

「バスは見た事あったけど！ あの形は初めて見たよ！」

ジャイペンとニホは、初めて見るバスに興奮している模様。

俺もだ。ベクトルは違うけどな。側で喜ぶフレンズがいるだけで、なんだか嬉しさ倍増って感じで好き。

運転席を見やると……ありやミライか。助手席には見知らぬ凡夫。ふたりとも軽く手を振ってくれていた。

ふむ。凡夫は園長だろう。ここまで来て園長じゃなかったら、じゃあ誰だよオメーである。

やがて側に止まる。

先に降りたのはミライらヒトではなく、サーバルだった。ぴよんと軽快にバスのステップから降りる。

「わあ！ フレンズが乗ってたんだね！」

「まあ、フレンズがいなきや戦えないし」

ニホが嬉しそうに言う。新たな出会いを喜べるのは、素直に羨ましい。俺なんて、警戒する。心の壁を全開して拒絶すらする。

戦う件は……そのうち、ヒトだけでも戦える様になるのだろうか。無理か。武器を使えば模倣される危険性がある。

銃とか模倣されたらヤベエよヤベエよ。

それはそうと。

園長らの、アプリ版の主要メンバーと会えるかな。

知っている世代の子だと良いが。まさか既に世代交代をしているのか？

奈々が主人公の漫画版とセントラル事件を解決するアプリ版の世代は多分違う。

もし、交代しているのなら……少し悲しいな。俺の記憶は引き継いでないだろうか
ら。

「うん？」

アレ？

メンバーは、サーバルだけ？

カラカルは？

トキは？

トムソングゼル、シロサイやギンギツネは？

アプリ版の主要メンバーがいない。

なんで？

「あんじゅ！ 久しぶり！」

「おお。《憶えている》のか」

「忘れないよー！ ななちゃんのお歓迎会にも来てくれたし！ 雪山の時は助けてく

れたし！」

疑問に答えてくれるかのように、サーバルが元気に駆けてきた。

どうやら俺の知っているサーバルの様だ。良かった。それだけで妙な安心感と

喜びが湧いてくるね。

俺の影響なのだろうか。世代交代は起きていないのか。それが良い事か悪い事

か分からない。だが、思い出が消えていないのは素直に喜ばしい事。

え？ 俺との大した思い出は無いって？

良いんだよ。主人公格のフレンズが俺を知っているってだけでも。

ほら、有名人と知り合いみたいなの。そして語るべき事が……うん。無いな。悲しいぞおい。

ただ、聞きたい事がある。出会い頭早々悪いが、聞こうか。

「あー、フレンズはサーバルだけか？」

「他のみんなはね。結界を作っているセルリアンをパッカーンする為に動いていて、今はいいの」

ああ、そうだったか。

いや、なに。おかしくはない話だった。

結界を解く為に、各地にメンバーが散っている状況なのだ。

時間が惜しいから、手分けして各地のセルリアンを倒している最中というところか。

「そうか。ならば、信じて待とう」

時が来れば、結界は消えそうだな。

ナニも心配していないワケじゃないけど。

知っている様で知らないパークの状況

下だ。

各地で獅子奮迅、奮闘中のフレンズが敗北する可能性がゼロじゃない。だが信じる。フレンズのチカラは奇跡を起こし、時として超えていくだろうから。

「じじよーを知ってるんだね？」

「まあな」

互いに妙な落ち着きを保って話せた。

サーバルも仲間を、フレンズを信じているのだろう。

話に区切りがつく。と、待ってたのか。

ニホとジャイペンがサーバルに絡んだ。うん。フレンズ同士、仲良くやってく

れ。それは良い事だ。

「初めまして！ 私、ニホンオオカミ！ あなたは何のフレンズ!？」

「私はジャイアントペンギン！ ジャイアントでも、ジャイペンでもパイセンでも。

好きな様に呼んでくれて良いよー！」

「私はサーバルキャットのサーバル！ よろしくね！」

ワイワイガヤガヤ、と。

フレンズらしいというか。非常事態下なのに、騒がしく話し合う子たち。でも、微笑ましい可愛い子たちだ。

そんな光景にキモく微笑んでいる間に、探検服に身を包むミライと、首に丸いレンズ状のお守りを下げる凡夫な園長が側に来た。

おつといかん。本題を進めなきやな。

「ひよつとして杏樹さん？」

へ？　なんで疑問系なのミライ。

まさか記憶が？　サーバルは憶えていたのに、シヨックなんですすがそれは。

「杏樹だよ。なんで疑問系なんだ」

「す、すいません！　女の子になってしまったと聞いてはいましたが、容姿は分からないかったですので！」

「ああ」

「こんな事もあるんですね。 サンドスターといい、セルリウムといい、謎は深まるばかりです」

「そうだな」

そうだった。今の俺、女の子だったわ。

疑問系だったのは仕方ないな、うん。見た目もまるで違うからな。早く男の子に戻りたいーい（白目）。

「で、凡夫の君は？」

「ぼ、凡夫……初対面で初めて言われたよ」

「あ、杏樹さん！ 失礼ですよー!？」

「野郎には容赦せん」

「ひどい!？」

互いに戯れる。

いや、なんかね。小動物とは違うんだけど、からかいたくなるんだよ。優しそう

だし絡みやすそうな顔だし。

顔、大事……あれ？　　なんでだろう。　　涙が出てくるや。　　早起きしたからかな？

「こちらの方は、お客さんです！」

「客う？　　ミライよ、言わせて貰おう。　　この非常時に、それもサバナのど真ん中に

いて記憶喪失で謎のお守りを持つヒトが普通の来客者じゃないと思うんですがそれは」

「そ、それは！　　まあ、そうですね！」

「普通なのは顔だけにしろ」

「お、お願いです杏樹さん……僕の心が沈んで行くので、この辺で止めてください」

凡夫……園長が地面に膝をついたので、やめてあげよう。

「冗談だ」

「う、嘘だ!?　　割と本気で言ってた様に聞こえましたよ!？」

「被害妄想は良くないぞ園長よ」

「園長？」「杏樹さん？」

あ、やべ。　　また口が滑った。

いや。大した情報じゃないから良いか。
だが誤魔化そう。

「アレだよアレ。凡夫の癖に、ヒトやフレンズ、パークの皆に好かれそうだったからな。パークの為に頑張ってくれているみたいだし。もう、お客さんじゃなくて職員で良くね？」

「職員かあ。平和になった後も、パークの為に頑張るヒトになれば良いな」
「きつとなれますよ！ 管理センターやフレンズからも信用されていますし！」

何とか誤魔化せたか。
全く。もっと気を付けろ俺。今世でもへましてどうするよ。

「ところで杏樹さん。記憶の事や、お守りの事は聞かれていたのですか？」

既にへまをしていたようだ。

杏樹ちゃーん。またやってしまったねえ!?

「あ、ああ。合流するにあたってな……情報を知っておこうと思ってね」

「管理センターには詳細を伝えましたからね……杏樹さんや、他の方が知っていてもおかしくはないのですが」

ここでジト目で見えてくるミライ。

ナニその目。

君もニホみたいになるモノをジッと観察する癖があるのかい？

「な、なんだいミライ？」

「いえ……今後の話をしましょうか」

良かった……話を変えてくれた。

気を遣われたとも取れるが。今は合わせよう。

「サーバルさんから聞かれたと思いますが今、各地のフレンズさんが結界を解く為に頑張ってくれています」

「ああ。結界が解けたら、今のメンバーだけで先行するんだな？」

「はい。セーバルさんが……あ、セーバルさんの事は聞いてますか？」

聞いているというか。

コレもだが。俺は知っている。重要なキーキャラだからな。なんならパークの運命に関わってくるだろうフレンズだ。

だが、またも素直に知ってるなんて言うのも怪しまれるか。既に手遅れかもだが。確か、管理センターから捕獲依頼が出ているはず。その話に乗ろう。

「少しなら知ってる。管理センターから捕獲依頼が出ていたからな。特別な輝きを持つているんだよな？」

「はい。サーバルさんの特別を持っていて、ソレを城の中にいるセルリアンの親玉に渡そうとしているらしいのですが……セーバルさんは既に城の中に入ってしまった。このままでは、セルリアンがより活性化。パーク中の輝きが奪われてしまうかも知れないんです」

つまりパークの危機なのダーってヤツだ。

本当はミライ班がセーバルを城内に入る前に無力化してしまえば良かったんだが。

無力化……セーバルを滅する。特別な輝きを取る方法は、既に園長達は知り得ているハズ。

それはリウキウ地方に行った時だろうな。神様……シーサーのフレンズから渡された特別な塩をセーバルは持っている。それをセーバルに掛ける事で特別な輝きを取る……だったか？

だが、特別な輝きを取るといふ事は。

その輝きでセーバルは存在しているなら。

輝きが無くなれば、セーバルは消える。

それはセーバル含むフレンズは望まない。

冒険の中で、一緒に楽しい事をしたりして……敵としてではなく、友だちとして見るようになったから。

セーバルも自我が芽生えていった。だからただどしいけど会話をしたりした。城内で別れを悟ったからか、自分が消えても想いを残す為に日記を書いた……だったかな。

パークを救うなら、セーバルを滅しなければならぬ。

でも、セーバルは大切な友だちだ！

セーバルも仲間も、選択するのに苦しんだ筈だ。

とても、とても。

今も苦しんで、だけど見えない場所で戦い続けている。

サーバルの親友、カラカルはサーバルが選んだ結果は皆で背負うと言っていたか。

罪をサーバルひとりに背負わせない為の、友だちの言葉。

オイナリサマの部下として動いていたギンギツネも、サーバルを滅すべきだとは言わず、選択はサーバルに任す。

心のどこかで、園長やお守りの奇跡を信じたい様な事も言っていたかな。

園長達とは別に、アライさんと行動していたフェネックも実は苦しんでいた。

パークを救うなら滅するのが確実だ。　だけど皆の事も好きだから……だったか？

そんな悩むフェネックに、アライさんは何もおかしくないと言い、今はアライさんについてくるのだーとイケメンな事を言っていた気がする。

アライさん、ドジっ子な面はあるが時々素晴らしい言葉を放ち、稀にナイスな仕事をこなすからスゴい。

結界のセルリアンを倒す際、活躍していた気がするし。

漫画版にもアライさんは出ていたが、この事件中的子も同じ子だろうか。

「杏樹さん？　あんじゅさん？」

「はっ!？」

ミライの言葉で我に返った。

あかん。アプリ版の記憶を呼び起こしていたら、ミライの話の大半を聞き逃してしまっただけだ。

「大丈夫ですか？　時々辛そうな顔をしたり、微笑んだりして」

「え？　俺、そんな顔してた？」

「してましたよ？」

「す、すまん。悲しいような嬉しいような、昔の記憶を思い出していた」

メツチャ恥ずかしい。

すっかりしろよ杏樹ちゃん。今は非常時。大切な話の最中だったやん！

転生前の、けもフレ世界の記憶が　どこまでアテに出来るかも分からないというのに。

昔は昔。今は今だ。記憶がそのまま未来になるとは限らない。

「記憶、ですか？」

「杏樹さん。あなたも、僕と同じく記憶が無いとか？」

「あるわ！ 凡夫と一緒にするなよ！」

「ひどい!？」

ミライは兎も角、園長がナニかほざいたので吠えといた。

前世も今世の記憶も曖昧なトコはあるけど、本土の記憶が無いとかパークに来た経緯が分からないなんて事はない。

あつ、そうだ（唐突）。

園長のお守りの話をしよう。それもまた謎だ。俺の考察も聞かせる事で、ナニか思い出すかも分からない。

「園長。君が首から下げてる、ボロボロなレンズ状のお守りだが」

「と、突然ですね。何か知ってますか？」

園長め。ずっと敬語で話すつもりか？

なんか話辛いから、やめてもらおう。そんなに年の差を感じないし。

「敬語はもう良いわ凡夫！　俺と園長の仲だろオ〜!?」

「なんで、ここで肩に手を回すんですっ!?　ああっ!?　当たってます！　当たってますから！」

「当てるんによ」

園長の肩に細くしなやかな、白く美しいすべすべな腕を回し。

胸元で大きなたわわに実るハリ、弾力のあるポインを背中に押し付けた。柔らかさ故にへしやげる。オマケで耳元に息を吹きかけた。ビクツとした。面白い。

園長も男だ。赤くしてアタフタしている。でも突き放そうとしない。優しい。すると、見ていたミライも顔を赤くして声を上げる。行動が遅いな。

それでも保安調査隊長かい？　あ、関係ないですかそうですか。

「あ、杏樹さん!?　女の子の身体を手に入れたからって、そういうのは良くないと思いますっ！」

「園長が降参すれば、直ぐ止めるさ。降参しないなら、もつと過激な事をして差し上げよう。あ、まさかソレを望んで降参しないのか？」

「分かりま、じゃなくて分かった！　分かったから絡むのやめてー！」

チツ。降参したか。　つまらん！

まあ、言った通り解放してやる。　顔は赤いままだが、話が進まないのだからかうのはやめといた。

「で、君のお守りの話を聞いて考えたんだ。　それは単にフレンドを強化するだけじゃないと」

「い、今の状況から普通に話すんだね」

話しますよ。　時間が惜しい。

なんだか俺が言うな状態だが、気にせず続ける。

ミライも気になるのか、ツツコミはいれてこない。　時としてお邪魔虫になる二ホ達も、離れた所でサーバルとずっと戯れている。

パークの危機、サーバルの危機なのに、この余裕よ。　主人公格の余裕か。　そのまま続けたまえ。

「パークのモノにしてはボロボロのレンズの枠。パークは開園からそんなに時間が経っていないのに、その痛み様。自然に痛むには早すぎる気がする」

「確かに。パークは開園から、特別年月は経っていません」

ミライが同意してくれた。

園長は、うーんと考える。じゃあナニかと言いたげだ。よかろう。俺の考えを

聞きたまえ。

「だが、それはパーク製のようだし。そしてお守りの記憶も、なんかその他の記憶も抜けて突如としてサバンナに現れた園長。君は」

核心的な事を言おう。

荒唐無稽、迷探偵アミメキリン風！　だが設定的なのを知っている転生者の知識を

喰らえ！

「お守りのチカラでタイムリープ、時間跳躍を繰り返している！　《ときわたり》をし

ているんだよ！　記憶喪失はその後遺症だ！　園長、君は《ウロボロスの輪》に囚

われている！」

どーん！

人差し指を立てて、園長に言い放った！

ドヤツ。

自分でも滅茶苦茶言うてるが、おおよそ正解だろう。設定では過去の自分にお守りを渡してたんだったか？

だが俺の妄想も当たるんだ。そも、俺がいるこの世界は知っているようで知らないけもフレ世界だ。最後に信じられるのは自分自身よ。

園長とミライは、ぼかーんとして。

そしてハツと我に返る。 ナニかい。俺の真似かい？

「い、いや。 スゴい話で。 理解するのに時間が掛かったよ」

「杏樹さん。 そんな、SFみたいな事を」

「ナニを言う。 全く的を得ていないワケじゃないだろう。 それに、常識が通用しない島だぞココは」

「そ、そうですけど」

狼狽える お二方。

信じられないだろう。それが普通だ。だが普通は通用しない島だ。

ウロボロスの輪。この辺の言い回しとか……………格好良くね？

ああ、シーサーとか神様のフレンズがいるワケだけれど。ウロボロスのフレンズつ

ていないかな？

でもなんだろう。

ウロボロスの発言をした時、一瞬ゾワツとした。格好良い感じの言い方に、俺の気

持ちが高ぶっただけかもだが……………。

なんだ。何故か悪寒みたいな感覚が。

この話はこの辺にしよう。

資料の話をしなきゃな。

「まあ、今の話は参考までにしといてくれ。次に俺から君らに、相談したい事があるんだが」

「唐突に唐突を重ねてくるね」

「また絡まれたいか？」

「い、いや！　話を続けて！」

園長がツツコミを入れたので、絡み返す。

なんか俺、DQNかナニかみたい。

いやいや、気にせず進もう。こんな時くらいしか話せないかもだし。

「この話は内密にして欲しい。出来るか？」

「……パークを危険に晒すような事ですか？」

ミライが不安そうに尋ねてきた。

パークを愛する者だ。ナニか怖い話だと思って、警戒をしているんだな。

園長も、パークを冒険して輝きを見て、触れて来たからか。表情が固くなる。

確かに怖い話ではあるけどな。コレはパークどうこうというより、ヒトの問題だ。

職員によって意見は異なる。それは仕方ない。だが、ミライと園長は味方だと願う。

「ある意味では。この島で行われている、或いは行おうとしている実験の話だ」

「実験？」

「ああ。ヒトの業だな」

「……………内密にします」

「僕も。裏で何が起きているのか、知りたい」

「ありがとう。早速コレを見てくれ」

ミライ、園長。感謝する。

俺は多少クシャクシャになった、紙束を渡す。セルリウム実験の計画書だ。

ミライは受け取り、園長が覗き込む。

しばらくすると、みるみる気難しい顔に。仕方ないね。倫理観に反するだろうか

ら。

「これは……………！」「故人の再現？」

「動物研究所にあった資料だ。仕事でその資料を回収したんだが、書いてある事を黙

認出来なくてな。意見を聞きたい」

「大切なヒトに、もういちど会いたい……………その気持ちは分かります。きっと、みんなが

思う事です。ですが」

「やはり?」

「はい。セルリウムは、やはり危険です。パークを危険に晒す事にも繋がります。それに、再現出来たとしても……それは……ホンモノではありませんから」
「そうか」

ホンモノではないから、か。

それでも会いたいと願っただろうヒトを、俺は知っている。

そのヒトの悲しみを俺は無くした。だけど他のヒトの事は分からない。

その結果が、この計画書だ。俺って転生者なのに、ホント無力だよなあ……チ●コを失っっちゃうし。

「僕も同じ意見だよ。セルリウムの事は良く分からない。だけど、上手く言えないけれど……きつと、再現したヒトも誰も、本当の幸せにはなれない——不幸にはさせたくない」

園長は曖昧に、だけど強い口調で言う。

いつか見た、真っ直ぐな目だった。

園長は、やはり強いな。心が。俺とは大違いだ。

「そう言ってくれて良かったよ」

「何か行動を起こすんですか？」

「管理センターの、信用出来そうなヒトに相談する。それ以上は、まだ考えてない」

「私、直談判をしても良いですよ！　こんな事……きつと、間違ってますから」

ミライが決意した様に言ってくれた。

だが、それでは解決しないだろう。敵の規模も分からない。

少なくとも、所長絡みなら弱い勢力ではない。

「ありがとう。だけど、派手に動くのは止めた方が良い。権力者相手に個人が楯突

いても歯が立たない。下手すれば消される」

「そ、それは……怖いです」

一転。弱気になるミライ。美人が様々な表情をしてくれるのは、見ていて面白い

が真面目に話そう。

「猶予がどれくらい残されているのか分からない。だが、味方を増やしたい」

「たくさんのフレンズさんに、お話を？」

「なら僕も協力出来そうだね」

園長が発言。

信頼されている園長なら、フレンズをたくさん仲間に引き込めそうだけど。

フレンズだけでは、ヒトの問題は解決出来ないな。

目には目を。ヒトにはヒトを。

フレンズにも協力して貰うが、ヒトのチカラが必要不可欠だ。

暴力じゃダメだ。

研究所を皆で襲撃しても研究や実験は他所でも出来る。

権力。

そんなの敵側にばかりあって、コッチには無いだろう。

「それもだが、ヒトの味方も増やす」

「で、でもリスクがあるのでは？」

ミライが現実的な事を言った！

なんかスゲエと思う反面、悲しくなった。ミライもヒトなのねと。俺の知らないところで、人間関係に悩んでいたのかも知れないな。

「頭を使うのです、頭を」

アニメのコノハ博士やミミちゃん助手風に言う。

そうです。群れのチカラを見せるのです。

「世間を味方につけるんだ。情報を噂レベルに薄めて島中に、外界に拡散させてやる」

いきなり濃い味出すと、叩かれるから薄味でな。

ミーム汚染させるのだ。みんな！

ああ、色々違うか……。

ヒトの群れのチカラ。

けもの の様な、優れた身体能力は無い。

だが知恵がある。

そして情報社会の嫌な現代に沿った事がな。

ヒトの多くは、ムカついてクソツタレな心なき悪質タンパク質の塊連中だ。

弱者を攻撃して つまらない人生に価値観を見出して楽しんだり、心冷える頭わるわるうで自己中な情けないヒトも多い。

そのくせ群れで情報を共有しようとし、だけど自分で考えず、互いに虐められないよう内心ビクビク怯えながら協調しようとする。

共通の悪と正義を作り、息が詰まる空気を作り、少数派を排除し、ムカつく高給取りや権力者を正義を言い訳に皆でワイワイ祭りだわっしょいと偽善行動として御輿を潰して大正義万歳と両手を上げて歓喜する。

俺もそうだ。 無数のクズのひとりだ。

何も努力しない。 考えない。

そうすれば楽だから。

皆に合わせる。 合わせないと潰される。

出る杭は打たれるから。

でも今回、俺は大なり小なり出る杭だ。

潰される危険性がある。 でも、リスクは

回避したい。 努力も成る可くしたくない。

ならば。

無数のクズを、さも自分達が考えたかのように錯覚させつつ、パークに仕向けよう。偽善行動を取る、群れになれば自身は罰せられないという無責任な愚民の濁流を、パークの暗部に向けられればどうだ？

この計画が、ジワジワとネット等を通じて伝染病の様に、ヒトの群れに伝播したら？直ぐに頭を出せばモグラ叩きよろしく、権力者に潰されるが、少しずつ、バレない程度に頭を出せば？

それもひとつやふたつじゃない。

無数の穴から無数のモグラがでたら？

それが時間と共に早く出て来て、叩く相手を集団で攻撃し始めたら？

マスゴミ含むメディア操作は、情報社会では無駄に近いだろう。ネットの海で発生した津波は対応しきれない。したつもりでも、いくらでも抜け道はあるだろう。

物理的な、口コミで伝わる件もある。

気づいた頃には対応なんて、無理ゲーと化すだろう。

権力者は失墜、ゲームオーバーだ。

そう簡単に、上手くはいかないかも知れない。だが、俺もクズだ。上手く考えられない。

そのくせ、権力者を攻撃したい。すると面白い。何故かこんな、クズで無知な考えが出てきたワケだ。

「俺の考えは、管理センターのヒトに言っておく。今はパークの事件を解決しようか」

啞然とした、ミライと園長。

俺の頭わるわる加減にモノを言えないらしい。仕方ないね。自覚はあるよ。

取り敢えず、セントラルのけもキャツスルを指差した。結界が丁度、消えたのである。

セルリアンの分際でハーレムとは生意気だ！

セントラル事件も、いよいよラスト。

セントラルの敷地ど真ん中。　聳え立つ城……今は魔王城な、けもキャツスルに突入だ！

内部の道にはレッドカーペット。

明かりはシャンデリアや蠟燭に見立てた電気照明が並ぶ。

普通に明かりが点いているから助かるが、逆にセルリアンに誘われてるようで怖い。

「というわけで。　俺を守ってくれ！」

サーバルとニホ、ジャイペンの背後に隠れながら進む俺。　ダサイ。　ダサくて泣けてくる。

だってヒトだもの。

その点、園長やミライもそうだし。　他に仲間がいると安心するよねえ。

だってヒト（ry）。

「任せて! 自慢の爪で守ってあげる!」

「あんじゅは、私が守るよ!」

「しっしっしっ! あんじゅちゃんは か弱い女の子だもんなく?」

おいこら最後のパイセン。いつまでそのネタを使うんだ。そろそろやめてくれ。
ガラスのハートが傷だらけだよ!

「ああ〜! ジャイアントペンギンさんと一緒に旅してただだなんて、羨ましいですっ!
ああ、ジャイアントペンギンさんですね、3千万年以上前に——現生ペンギンさんでいちばん大きいコウテイペンギンさんより大きく、ヒトと同じくらいの大
きさだったと——」

「ミライ。緊張感を持って前進しよう?」

調査隊長にもツッコミたい。

ヨダレを振り撒き、ヘブン顔でセルリアンの根城でけも語りを響かせるな。

そもそも、先程のダークトークで見せた表情は何処へ消えた。切り替え早くね?

「いやあー！ ミライさんは面白いヒトだなあ！」

「ああ〜！ 褒められました！ 感激ですっ！」

「今どの辺に感激した!?!」

「あんじゅも面白いよー？」

「違うそうじゃない！」

俺が荒ぶると しっしっしっ、と笑うジャイペン。 からかうのが好きなのかしら。
可愛いから、結局許しちゃうんだけど。 その意味でも勝てそうにない。

「あんじゅさん。 この後、各地に向かってくれたフレンズが戻って来てくれる予定なんだ。 大丈夫だよ」

園長が微笑みながら言った。

安心させようとしてくれると思うと、素直に嬉しい。

「そうか。 なら、来るまで待つのは？」

「本当は、そうするのが理想だろうけど……先に行ってしまったサーバルを止めなきゃいけないから」

サーバルの話になると、少し暗い表情になってしまった園長。ミライも少し暗くなる。

反射する様にサーバルを見た。

表情は無言の背中越しには分からないが、少し猫背になっている気がする。

たぶん、もう手遅れの可能性を嫌でも感じているのだろう。

サーバルが結界に入ってから時間が経っているから。

でも、きっと大丈夫だと言いたい。アプリ版ストーリー的には、奇跡が起きる。

でもそれをストレートには言えない。下手な慰めも時に苦しめてしまう。

希望的観測に過ぎない発言も、傷付けるかも知れない。

不器用な俺だから上手く言えないが……何とか口を動かした。

「サーバルって子は会った事ないからさ、分からないけど……元はセルリアンかも知れないが……サーバルや皆の大切なともだちなんだろ。大丈夫、信じよう。その子もきっと、心の中でサーバルや皆を信じてると思うから」

なんかワケ分からない事を言ってしまった。

なんて無責任だ。何の確証もなしにテキトーな事を言ってしまったよ。

だが。そんな後悔している俺とは裏腹に、サーバルや皆から明るい返事がきた。

「うん。モチロン！ 私はサーバルを信じてる！ そして ともだちとして、出来る事をするよ！」

「私、サーバルつて子が気になる！ だから、信じる！ 信じて前に進んで、その先で ともだちになりたいな！」

「ともだちなら助けなくっちゃだな！ 私も協力するよ？」

「そうだね。僕は、僕にやれる事を全力でやるよ。どんな強いセルリアンが待ち構えていようと、指揮を全力で執る！ そして皆でサーバルを助けよう！」

「私も全力でサポートしますっ！ 分析や戦局のモニタリング面、アドバイス頑張りますよ！」

互いを鼓舞するように声を出し、ポジティブな表情をしていく面々。

良かった……。余計に悲しませる結果にならずに済んで。

「俺も……俺も、えーと、頑張るぞ!」

「俺もナニが出来るか、出来る事を頑張ると言いたかったが……。
俺、ナニが出来るんだ?」

ヤベエ。俺、お荷物じゃん。

「あんじゅは皆を元気にしてくれるじゃん?」

パイセンのフオロー。

すまないパイセン。ありがとう。

「はい! あんじゅさんは、皆を元気にしてくれます!」

「うん。僕達の事を考えてくれてる、優しいヒトだ」

ミライと園長に褒められた。

なんか、うん。恥ずかしい。

最終決戦直前に、俺はナニをしているのか。いけない。今に集中しないと。

「あ、あー。ほら、あの大きな扉の先。親玉がいそうだぞ！ 気を引き締めよう！」

「そうだね。よし、行こう」

「あそこは、けもキャツスルの一番奥の部屋。玉座の間です！」

「セーバル、待っててね！ 今行くから！」

「あんじゆを守って、気になる子を助ける！」

「私も、こう見えて戦えるんだよー？」

俺らは大きな扉を開く。

セーバルを助ける為に。奇跡を起こす為に。

この先にはオイナリサマ、セーバル、そして誰の輝きを奪ったか分からんが、強い親玉セルリアンがいる。

だけど大丈夫だ。園長と、お守りの奇跡、フレンズのチカラでハッピーエンドさ！
そう思っていた時期が、俺にもありました。

扉を開ければ、距離を置いて低い階段。その小山の上には豪華で立派な玉座。

その玉座には、真っ黒なヒトが足を組んで堂々と座っているときた。王冠のような虹色の飾り、ツノ的なのが頭部にある。

このバーローで犯人的なヤツにデコレーションしたのが親玉セルリアンだろう。

記憶にある女王とは見た目が違うが、威圧感がある。

だけども。ヒト影はソイツだけじゃなかったのだ。

「なっ!?! フレンズ!?!」

驚愕の声を上げてしまう。

周りにフレンズがいたのだから。

それに。

白に包まれたキツネのフレンズは……!!

「オイナリサマまで!？」

親玉を囲むようにフレンズが。

なぜ敵であるセルリアンに寄り添ってる!？」

研究所で出会ったマンモス、サーベルタイガーもいる。セーバルも混ざっていた。なんか、皆の目にセルリアンブルーのハートマークが浮かんでるのが気になるんですがそれは。

加えて親玉に抱き着くような姿勢を取り、ハーレムの図みたいなんだけど……。なんでこうなった。

「みやあつ!!? フレンズ!?! 　なんでここにいるの!?!」

「マンモスにサーベルだ!」

「どこからどう見ても、あの子たちだね」

サーバルが驚く。

ニホとジャイペンも、知り合いのマンモスとサーベルに驚いている。

「ミライさん!」

「今、解析しました……セルリアンじゃありません。 フレンズです」

それにはツツコミを入れず、園長がミライに解析を頼み、結果を言う。 やっぱフレ
ンズらしい。

なんて事だ。 いや、どう言う事なの……。

緑色をしたサーバルそっくりなサーバルもいるが、それよりもフレンドの存在が
シヨツキングだよ。

「驚くのも 無理は ない」

ここで親玉が言葉を発する。

どこか、俺が男の時の声とそっくりだ。

女王も喋ったから、そこに驚きはしない。

それよりこの声。

コイツ……俺の輝きを……ムスコを奪ったセルリアンか!?

「この声、杏樹さんの!？」

「考えたくないが、俺の輝きから進化したセルリアンだ!」

まさかの事態である。

いや、逆に考えよう。俺みたいなザコな輝きで踏ん返り返っているのだと。

ならば、ヤツは俺のチ●コ並みにザコだ。園長らには容赦なく倒して貰おう。周

囲にいるフレレンズを巻き込まないように。

アレ?　なんでだろう。涙が。

早起したからかな?

「パークの未来は　輝きは　やがて消える。　しかし　我々　セルリアンなら　失った
輝き　を　保存し　再現　出来る　永遠に」

カコ……いや、女王が言っていた様な事を言い始める俺……じゃなくて、セルリアン。
セルリアンは、女王の記憶を参考にすれば、都合の良い情報のみを得て行動する。
パークの輝きが消えるのは悲しい。だから永続させたい。それは、心の何処かで

願っていた事。

輝きを再現しようとするセルリアンは、そんな俺の想いや記憶を都合良く解釈したり、その部分のみを切り取って行動しているに過ぎない。

本当に俺を丸パクリしたなら、パークの皆を巻き込む事は望まない筈だからだ。

だから、コイツは……ニセモノだ。

セルリアンの行動原理が輝きをコピーしようとする事だとしても、捻くれた、臆病な愛まではコピー出来なかった。

ご退場願おう。

「耳を傾ける必要はない」

「え?」「杏樹さん?」

「園長、ミライ。コイツは多分弱い。さっさと倒しておしまいなさい!」

謎の状況から平和的な解決法を模索しているだろう、ふたりに早く倒すよう促す。

童貞短小包茎早漏チ●コの擬人化とかいう、卑猥な存在を早く消したいんです。

だがしかし。

そんな俺の思考を知ってか知らずか、ヤツはとんでもない事を言い始める。

「王は 戦わぬ」

それが合図かの様に、周囲にいたフレンズがゾロゾロと前に。

まさか敵対する系!?

オイナリサマ、マンモス、サーベル。

サーバルも来た。相変わらず漫画みたいに目をハートにして、ふらふらとした足取り。操られているよう。

計4にん。コッチのフレンズは3。

1人ぶん不利だ。

いや、それだけなら良かった。

園長の指揮があれば、それくらいのハンデ、なんて事はないだろうから。

問題は白いキツネのフレンズ……オイナリサマだ。

神サマ……正確には使者だったか？

普通のフレンズではない。別格だ。

事件中では結界を張っていたりと、特殊な事をやっていた。物理的な攻撃ではない

方法を取られる危険性がある。

よくない事態だ。そもそもフレレンズとは戦いたくない。

「自分は戦わず、フレレンズを盾にする気か!？」

とか抗議の声を上げてみるが、思えば俺もそうだった。 さすが俺。

「なんて事を……!」

ミライが悲痛な声を上げる。

すまないミライ!　それが俺だ!

だけどミライ。園長もだが、ヒトの事言えないからね?　ポケ●ンみたいにフレ

レンズを戦わせてきたでしょ?

ああ。指揮をしていた分、俺より遥かにマシか。 やっぱ俺って悪いヒト。

「ど、どうして……みんな目を覚まして!」

「ヒドいよ!　そんなの王さまだなんて認めない!」

「フレレンズを友だちじゃなく、道具のように扱う……パイセンチョップで成敗してくれ

よう」

此方側のフレンズも吼えた！

パイセンは静かに闘志を燃やしている。強そう。

「さーば、る」

「ッ!? セーバル!」

「セーバルさん!」

突如セーバルが声を出した！

辛うじて自由意志が残っているのか。掠れた、弱々しい声だ。

だが、聞こえる。皆の反応からして、同じようだ。

耳の良いセーバルは、直ぐに反応。

彼女がハートの目で、だけど必死に何かを伝えようとしているのを聞く！

「セルリ、あんツは……」

なんだ? この状態を上手く乗り越えるヒントか!?

「他の、ふれんず……イッてたよ」

エロく聞こえるが、聞き間違いだなうん!

「言ってた? 何を!？」

「ナニを……とつても」

ナニってトコ、おうむ返しだろう、うん!

俺の心が汚れてるからエロく聞こえるだけ!

「とつても?」

「てくにしゃん、らしい」

「ファツ!？」

え、ナニその情報!?

テクニシャン!?

エツチな響きにしか聞こえなかったよ!?

アレか!?

とても指揮能力が高いとか、なんかそんなニュアンスだろ!?

そうだと言え!

しかし、力尽きたのか。

「キモチ……よかった♡」

ハートマークで、ボタンと倒れるセーバル!

「セーバルウウウウ!」

「よくも!　よくもセーバルを!」

「友だちになりたかったのに!　セルリアンめ、許さないッ!」

「もつと言うところ、ねーのかよ!」

ここで困惑ではなく、セーバルの最期的なのを見て怒る園長とサーバル、あと二ホ。たぶん、セーバルの身体は消えてないから大丈夫だろうけど……。

ねえ。 ツッコんでも良いのよ? 変な意味じゃなくてね?

対してミライは妄想したのか顔が赤い。

パイセンは闘志が四散してしまった。

「あー、うん。 あんじゆ。 セルリアンを倒そうか。 清い心で」

「意味が分かるパイセンは清くない系?」

「イヤだなあ。 私はいつだって清いよ?」

嘘だ!!

つかみどころのない時が多いじゃん。 ナニ考えてるのか分からない。 実はエロ

知識あるんじゃないですかパイセン?

「だけど、フレンズを退けないと……皆、正気に戻って!」

「白いキツネのフレンズって、ギンギツネの言っていたオイナリサマだよね? とて

も強そうなのに、どうして……!」

園長とサーバルの問いに、無言の面々。

ハートの目を、ただコチラに向けるばかり。ちよつと怖い。代わりに声を出したのは、セルリアン。

感情のこもつてない、淡々とした口調で言った。

「ヒトの身体を得た 獣を 雌堕ちさせ 侍らしたのだ」

予想した、最悪の事態だった。

「あ”あ”!?” ●ねやセルリアンが」

「杏樹さんが、思わず過激な事を!」

ミライよ、ヤツは俺以上にヤバい事を言いやがりましたけど？

畜生! とんでもない事を言いやがって!

もう確定じゃないですかねヤダー!

俺は怒りのままヤツに指をさして、怒声をあげる!

コレは言っておかねばならない!

俺からチ●コを奪い、フレンズを捕まえたかなんかして、それでヒトサマのチ●コ

ピー品を使用し、あっはんうふふな事を俺たちが来るまで城で（自主規制）しまくってただと!?

こちとら暗部の話とか仕事で苦労してるとてのに!

断じて許し難い!!

ゆる”さ”ん”!

「そもそもだ! 自分で言うのもなんだが、俺のチ●コは童貞で短小包茎早漏力●パスだぞ! セツ●ス経験ゼロで、そんなんで美少女揃いなフレンドを満足させた挙句に言いなりにさせられるかってんだ!!」

「杏樹さーん!? お願いですから言葉を選んで下さーい!?!」

ミライが茹でタコのように真っ赤になりながらも、俺に物申してきた。

だが止めてくれるな。俺に出来ず、セルリアンに出来るとか認めたくないのだよ。

「本能のウエートが 高い フレンドは 楽しめる」

「喋んなクスツッ!」

親玉がほぎく。

なんて羨ましい！　モノホンよりニセモノが先に卒業とか許せねえ！

変態セルリアンめ。　のけもの　にしてやる！

「フレンズの輝き　は良い。　パークの未来　手に入る」

「あの助平セルリアンのタマ取つたれ！　タマあるのか知らんけど！」

「そうだけど、目の前のフレンズを何とかしないと！」

園長がもつともな事を言った。

そうだ。　卑猥物を消滅させるにも、目の前のフレンズを何とかしないと！

しかし、どうして良いか分からない！

セーバルはハート目で倒れたまま。

サーバル、ニホ、ジャイペンは目の前のフレンズと睨み合い……いや、相手はハート目だけだ。

園長は突破口を模索中。

ミライは頭から湯気を出して倒れている。

うん。　ミライは俺が倒してしまつたらしい。　変な意味ではない。　やる気は無

かったと供述しており。

「ヤれ」

だが変態はやる気か!

ごまごましていると、変態がとうとう指示らしき言葉を発した!

さすが俺のコピー! 待てない早漏!

刹那。

「避けてッ!」

「ッ!」

園長が叫び、言い終わるより早くサーバルが後方に大きく飛び跳ねた。

瞬間。

サーバルのいた場所に、白き一閃。

「な、なんだ!? 何が起きた!?!」

戦闘経験皆無な俺は、狼狽えるしかない。

「ニホ、ジャイアントも下がって！」

園長が、俺のツレにも声を掛けた。

ニホとパイセン、遅れて反応。急いで後方に下がり、腕を構える。

「サーベルを構えてる……いつの間にも！」

何が起きたのか。常人ではおおよそ理解に苦しむ状況。

しかし、相手を見れば予想がついた。

サーベルタイガーが、帯刀しているサーベルで居合斬り（立合斬りと言った方が良いのか？）を解き放ったのだ。

その速度は目で追えるモノじゃなかった。だけど、園長は察した。スゴい。

サーベルもスゴかった。たぶん園長の指示もあつたが自分でも察したのだろう。

ネコ科のフレンズがする人外レベルに近いジャンプ……アニメで見たジャンプをし

て、攻撃を避けた。 さすがフレンズ。 とんでもない身体、察知能力だ。

園長も指揮を執り続けたからか、天性なのか。 はたまたお守りのチカラか。 的確な指示を出せているように感じる。

うん。 任せよう。

俺、役に立てそうにない!

「そ、そんな……サーベル! マンモスも! 私だよ! ニホンオオカミだよ!

分からないの!?!」

ニホが悲痛の鳴声を上げた。

だけど、サーベルもマンモスも無言。 ハート目を向けてくるばかり。 怖い。

研究所で友だち だったろうからな。 その友だちが攻撃してきた事実がショック

らしい。

アプリ版でいうと、セーバルが女王からの指示なのか、サーバルを攻撃したシーンつてどこか。

その時はオイナリサマが簡易な結界を張って、サーバルを守った。

しかし、チカラがソレで弱まったのか。 女王を抑えていた結界が破れてしまい、

セーバルが女王の下へと行ってしまふのだ。

まあ、その。今回は俺の影響でシナリオが違うが。

俺は友だちが少ない。二ホの気持ちは分からないが……カコに罵倒されたら悲しくなるだろう。

そして快感になる変態化しちやいそう。

「研究所でふたりの ジャパリまんを盗み食いしたけどさあ、それは ナイナイで仲直りしたじゃん？」

「パイセン、そんな事してたのかよ!？」

しょうもない話を聞いてしまった。 ロッジでのサーバルちゃんかよ。

「フレンズを何とかしなきゃダメかな……!」

「園長よ。心苦しいだろうが、戦わないとダメかもな」

園長がフレンズを相手にするのを躊躇う。

四神等の神様や妖怪系。 キングコブラ、シロナガスクジラ等の格上フレンズとドン

パチする事はあつたかも知れない。

「ただどそれらは、格闘試合的な形式だったハズ。お互い本気で傷付けるモノではない。いい。」

ミライが気絶してなければ、ナニか良いアイディアが生まれたかも知れないが。

「そだねー。セーバルが倒れたから、相手はオイナリサマ、サーベル、マンモスのさんなんだねえ。親玉は、まあ何でもなるんじゃないかな?」

「まあ、うん。たぶんザコだけど、言われるとなんか落ち込むんでヤメテ」

「アレは杏樹ちゃんじゃないから、気にする事ないだろー?」

「……パイセン」

こんな状況なのに、励ましてくれる。

パイセンは先輩でジャイペンだな。うん、自分でもナニ言ってるか分かんね。

「アレは杏樹君だしな!」

「シャーラップ! あの変態を俺とは認めねえ!」

やはり、パイセンは先輩でジャイペンだった！　自分でもナニ（ry。

「過去の自分と向かい合うチャンスと思えば良いじゃん？」

いやナニ言うてんの。

あんなの俺じゃ……ああ。　フレンズとやりたい気持ちはあったわ確かに。認めたくないものだな、若さ故の過ちは。

「あのセルリアンは、あんじゆの　よくぼう　を再現してるんだと思う。でも大丈夫だよ！」

「ニホ、励ましてくれるのか？」

「うん！　綺麗なあんじゆは、私が守る！」

「悪かったな、今まで汚い杏樹君でッ!？」

寓話じゃないんだぞ。

綺麗な杏樹ちゃんは返品します。　なので汚い杏樹君（主に下半身の棒）を返して下

さい。

クーリングオフ!

「気を引き締めて! 来るよ!」

園長が喝を入れた。

慌てて敵側を見れば、マンモスが片足を上げて――。

「サーバル飛んで! 他は逃げて!」

園長の声に弾かれ、サーバルはその場で大ジャンプ。

ニホとジャイペンは更に後ろへ下がる。

そのタイミングで、マンモスが上げた足を勢い良く下ろした。思いつきりのストンピング。

刹那。

ズドオンツ!!

「うおおおおお!」「キャウンツ!」「すごいねえ!」

地震かと思う程の、城全体を揺るがす衝撃波。

まともにも立ってられず、よろける俺とジヤイペン。 転ぶ二ホ。

そんな中でも、敵を注視。

マンモスの足を中心に、床が陥没してクレーターが出来上がっている。

天井を見上げれば、シャンデリアは落ちるんじゃないかと思う程に激しく揺れ動き、パラパラと埃が降ってくる。

「やべえよ。 フレンズやべえよ」

再び恐れ慄く。

実際の、絶滅した けもの のマンモスが こんなにやべえヤツかは知らない。だがフレンズだ。 それも絶滅種の。

実際どうこう以上にヒトの想像、妄想が具現化している部分がある。

マンモスは巨像、強いな想像が反映されているのだろうな。

虚像だ。 しかし危険だ。

もし全てのフレンズがヒトと敵対したら……考えたくない。

「所内での測定でも見たけどさ。いつ見てもスゴいなー!」

「本当にスゴいね! 私が勝ったのは素早さくらいだし!」

フレンズは皆、スゴいさ。そこに絶対の優越はない。皆違って、皆良い。ヒト

と違い、良い子が多いし。

だから攻撃はしたくない。しては、ならない。優しい世界だから……。

いや。違うな。

その理屈は、偏見は、時に狂信な態度は身を滅ぼす。けものフレンズの世界なんだからこうあるべきだ、というのは、そろそろ意識しなくて良い。してたらまた喰われそう。

「罅を跨げ」

園長に、俺に言い聞かせるように呟く。

「へ?」

「へ、じゃない園長。 時には心を鬼にしないと いつか俺みたいに喰われるぞ。 戦うのが嫌なのは俺も他もそうだ。 だけどやるんだ。 せめて仲間が来るまで時間を稼げ」

残酷で、だけど現実を見る。

「パークを変態の好きにさせて良いのか?」

「そんなワケない!」

変態は否定しないのね。

いや、俺も否定出来ないけど。

「ナニ、大丈夫だ。 俺たちは 独りじゃないから。 特に園長は、パークで友だちが けものフレンドズが、たくさん出来ただろうし」

とか格好つけた言葉を言うも、俺はナニもしないんだけど。 ヒトに任せる酷いや

ッ。

でも残酷を言うつもりが、優しい言葉をまた探して言ってしまうんだよな。

「園長は強い。 勝つよ。 勝つて、セーバルもパークも救う」

ハート目のオイナリサマが、忍者みたいに片手を前に構える。 忍法かな？

何にせよ、無力化しなくては。

その辺は園長に任せる。 イレギュラーなシナリオだが、苦難を乗り越えてきただろ
う彼だ。

パークの英雄。

見せてくれ。 君のチカラ、お守りのチカラを。

ハーレム潰しと、ウロボロス。

対峙する目がハートのフレンズ。

足を組み、傍観する変態セルリアン。

足下に倒れたままの、ハート目セイバル。

ぐるぐる目で気絶中のミライ。

ツツコミどころはあるが、戦闘状態だ。卑猥物を消す意味でも、パークを平和に

する意味でも、安全を確保する意味でも早く終わってくれ。マジで。

「フレンズと戦いたくはない！ でも、みんなやるよ！」

「うみゃー！ 親玉を倒せば、きつとみんな正気に戻る！ 信じて戦うよ！」

「おう！ ニホ、ジャイペン！ 園長の指示に従うんだ！」

「わかった！」「おっけおっけー！」

気合いを入れる面々。

へ？ 俺はナニするかって？

そうだなあ……ミライみたいにサポートやアドバイスが出来れば良いのだが。
けもの に対する知識は無いしなあ。 戦闘面でもアドバイス出来る事はない。
せめて応援しよ。 奇跡の島なんで、そういう事でもフレンズを強くするかも知れな
いし。

「頑張れみんな！ 俺はナニも無いしナニも出来ないが、応援するから！」

「ありがとう あんじゅ！ 雪山で助けてくれた事！ 奈々ちゃんの歓迎会に来て

くれた事！ 応援してくれる感謝を込めて戦うよー！」

サーバルの振り返っての笑顔が眩しい！

サーバルはやっぱ……聖獣やな！

「うん！ あんじゅの事は、私が守るよ！」

ニホ。 あまり俺に拘らなくて良いんやで？

嬉しいけどね。

「私もだけど、PPPも応援してくれよー?」

パイセン、後輩達の事を想っている。

掴みどころがなくて、ナニ考えてるのか分からんのが怖いけど、良いヤツに変わらないのだ。 フレンズだし。

「よし! 今度はコッチの番だよ!」

園長が指示の声を上げていく!

「サーバル! フレンズを飛び越えて、親玉を直接叩いて!」

「わかったよ!」

「フアツ!」

サーバル、フレンズと戦闘を避けるように大きく跳躍!

効果発動! ネコの大ジャンプ!

いきなりダイレクトアタックを指示する園長!

ズルくね？

園長なのに、そんな事しちゃうん？

いや。良いのか。

今回、正々堂々戦わなきやいけない理由ってないもんな。ルール無用のマジ戦だ。今まで相手にして来たのは駆除しなきやならないセルリアンだったろうし、フレンズ同士でのチカラ比べで正々堂々戦わなきやいけなかつたのだろう。

だけど今回は、ハッキリ親玉がいる。その配下に置かれているフレンズに罪は無い。戦わなくて済むなら、その方が良い。

それに親玉を倒せば正気に戻るかも知れない。ならそのタマ潰すよね。今、タマがあつたらタマヒュンで内股になってたわ。なんなら棒すら無い。毛も無い。スジがあるだけで綺麗なツルツルだ。

股間が寂しい。なんならスースーするまである。

「ニギヤツ!？」

サーバル、見事な大ジャンプをした直後、空中で見えない壁に当たり跳ね返ってきてしまった。

ドジもここまで来たか……いや、冗談だ。
オイナリサマの結界だ。

「な、なんだ!？」

園長が驚く。

そりゃ、ナニも無いハズの空中に壁があるとは思うまい。

冒険の過程で数多の奇跡を目撃している園長だろうが、結界の経験は無いか。

「結界だな。オイナリサマを怯ませれば消えると思う」

「そうなんだ？　ありがとう」

「参考程度に留めてくれ。本当かは分からないから」

「ううん。目標が出来た！」

俺がアプリ版ストーリーの記憶を参考に、アドバイスマドキを送ると礼を言われた。
屈託のない笑顔で。

恥ずかしいな。俺ナニもしていないし。

ヒトによってはドキッとくるところ。そして雌堕ちEND。
うん。そんなのお断りだ。男に戻りたい。

「オイナリサマ、みんな。ごめんね」

園長が謝り。そして直ぐに指示の声を飛ばしていく！

「サーバル、サーベルタイガーを足止め！ ジャイアントはマンモスを！ ニホン
オオカミはオイナリサマに体当たり！」

「分かったよー！」「おっけー！」「いっくよー！」

滑らかに、個々に簡単に言う。

それでいて、要領を得て それぞれ動くフレンズ。

これも園長、お守りの為せるチカラか。 ジャイペンとニホとは初対面なのに。 俺
には無理だな。

先ずサーバルとサーベルとセーバルがこの場にいる時点で、言い間違える自信があ
る。 名前が似てるんだよ。 ひと文字しか違う。

「うみやあー！」

サーバル、サーバルにジャンプして飛び付いた！　　ハート目サーバルは、上空からの攻撃に対応出来ず押し倒される！　　百合かな？

アニメ冒頭のシーンみたいだ。　　状況は平和的じゃないが。

「すもうつていうんだよね、こーこういうツ……のー！」

ジャイペンは体当たりするように、ハート目マンモスに抱き着く。

やっぱ百合じゃないか……冗談だ。

これはアニメ終盤、大型セルリアンに抱きついてたフレンズを思い出すなあ。

やっていたのはコツメカワウソとアライさんだったかな。　　PPPたちペンギンじゃなかったと思う。　　PPPはペチペチ叩いていたな。

略してPPP。　　いや、冗談だ。　　パイセンにバレたらチョップされそう。

それと大きさは互いにフレンズサイズ。

元けものサイズを考えると、ジャイアント同士だが……。

「うおおっ!？」

「ジャイアントツ!？」

ジャイペン、マンモスに軽く放り投げられて戻って来てしまった。

「パワーに差があるか……!？」

そりやそうか!

デカいっつても、元けものを考えれば、体格差もありパワーが違う!

元ジャイペンは大凡ヒトサイズ……!!

対して元マンモスはゾウサイズ!

両者フレンズ化したのもあり、ヒトのパワーを軽々と越えているのに違いはないだろう。

サーバルが漫画版で大岩を持ち上げたように。

だが、ジャイペンとマンモスを比べてしまうと……差が出てしまう。

単純にパワー

負けたのだ。

海といった水辺なら、ジャイペンが有利だったかも知れない。だが、ここは城内……陸地。完全に陸地暮らしだっただろうマンモスが有利か。

「いてて……チカラが湧いてくるから勝てるかもって思ったけど。やっぱりマンモスは強いなあ」

ジャイペンが、腰をさすりながらボヤク。

チカラが湧いてくる。

園長のお守りのチカラだろうな。

だが、それでも敵わないか。マンモス強い。

「大丈夫!？」

「大の大丈夫!　ちよつとビックリしたけどね!」

マンモスに勝てる子っているのかね。

もつとデカイシロナガスクジラとか？

「うみやあ!？」

「サーバルツ!？」

今度はサーバルの悲鳴が。

ジャイペン同様、放り投げられて戻ってきた。

しかし、そこはネコの子。

空中で体勢を立て直し、綺麗に着地。

スゲエ。 曲芸を見た気分。 ヒトの姿だからかも知れない。

「サーベルタイガーって子! チカラが強いよ!」

「サーベルタイガーは、動きが そんなに速くなかったと、なんかで見聞きした気がする。 その代わりパワーがあるのだろう」

俺が曖昧な、間違いかも知れない知識を皆に言う。

いや、ほら。

サーベルの攻撃、目に見えなかったし。

絶滅種なものもあるからね……研究者や見解、予想が変わっていく事もあるだろうし

……。

後武器の件は今、口に出さないでおく。

サーベルタイガーの名前の由来となっている、大きなサーベル状の牙。

見た目は凶悪だが、実は強度がなかったとか。その為、自衛目的や狩でイキナリは使用しない。身体のパワーで自衛行動、動きが比較的鈍重な大型動物を抑え、トドメを刺す時に使われたのではという話を見聞きしたような……？

それを目の前の、フレンズ化した彼女は初撃で容赦なく使用した。自衛ではない。トドメを刺しに来る……つまり、フレンズでありながらフレンズを傷付けにきている。

フレンズはヒトの妄想が具現化している部分もあるから事実と違うかもだが……：こんなの、サーバル達に言ったら、それこそ傷付けそうだ。ただでさえ相手にするだけでもツライさんだろうに。

俺も内心ツライさん。研究所で会った時の会話もあるからね……。

だが、抑えてくれた時間。

それは無駄ではない。

「いめんツ！」

うーがおー！

という感じで、だけど謝りながら突っ込んだ二ホ。

ふたりが抑えてくれた僅かな時間。

その時間で無防備なオイナリサマに体当たり。

オイナリサマは、自身には結界を張ってなかつたのか。そのままダイレクトアタックをモロに受け、後方に吹き飛んで行く。漫画みたいに。

やべえ。普通のヒトの体当たりなら、あんなに吹きとばねえよ。

改めてフレンズのパワーがやべえと思う。

それとオイナリサマ……こんな目になってしまふなんて。他の子もだけど、正気に戻った時のケアが大変そう。

「サーバルツ！」

「わかった！」

すかさず園長が声を出す。

さすがのサーバルも、何をすれば良いのか分かる。元気に、短い返事。

「今度こそ！」

もういちど大ジャンプ！

決して低くない天井、そのぶつかるギリギリまで飛び上がる！

そして、親玉の直上目掛けて落下！

「セーバルの仇ッ！」

いや。セーバル大丈夫だと思うよ。

ハート目でビクビク痙攣しているだけだと思うよ。ナニされたかは知らないし、知

りたくないが。

親玉。セーバルを目で追いかける。

しかし避ける事もなく、そのまま腕の白く輝く光を受け止めた。甘んじて。

「うみやあー！」

気合いのひと振り。

一閃は黒い身体を引き裂いて、直ぐに虹色の光となって四散する。

悲鳴もナニもない。親玉にしては、あまりに呆気なく、一瞬で終わった。セル

ハーモニーも過剰進化も無い。拍子抜けである。

「た、倒した?」

「たぶん」

園長が疑問の声を上げたから、俺は曖昧に肯定した。

アレが俺なら……そんなもんだろうと。

他力本願。そんなもって、自身はナニもしない。直ぐに諦めて、直ぐにやられる

弱い存在だ。その点、他のセルリアンより弱くても何ら不思議じゃない。

「偽りの王だ。カコなら未だしも、そんな器じゃないんだよ」

それは相手に対して、何より自分自身に対しての言葉。

「杏樹さん？」

「気にするな。 独り言さ」

園長が心配そうに声を掛けてくれる。 優しい。 でも、変に慰められると余計惨めな気持ちになるから……冷たくあしらう。

才能なんて無い。 俺には、何も。

それを理解してか否か。 ヤツは他者を利用こそすれ、悪足掻きなんてしなかった。

その点、俺はヤツ以下だな。 認めたくない未来が来そうな事に、子どもの様にワガママを言いジタバタしている。

でも見習う気はない。

改善する気もない。

セルリアンだからじゃない。 俺だから。

俺は俺なりに、ワガママを振りまく。

「よーし！ 取り敢えずハーレムは潰した！

後は囚われのフレンズが正気に戻れ

ば万事よし！」

「急に晴れ晴れしたね!？」

当たり前だよなあ？

ハーレム潰し。

f o o o ! 気持ちいい！

あれ。涙が出るや。早起きしたからかな？

そういえば、俺の身体は女の子のままだ。

やはりか、輝きを奪ったセルリアンを倒しても元に戻る保証は無いらしい。

悲しいなあ……でも、今は今を何とかしよう。

「俺の事は良い。それより、フレンズの容態は？」

「気を失ってるみたい。目を覚ますと良いんだけど」

園長とサーバル、ジャイペンとニホは、今まで対峙していたフレンズ……サーバル、サーベルタイガー、マンモス、オイナリサマ……あと、気絶しつばなしのミライの側に近寄って顔を覗き込む。

俺も釣られて見やれば、安らかに目を閉じていた。

皆からは規則正しい呼吸音が聞こえるので、大丈夫だろう。医者じゃないから、詳

しく分からんが。

「いちおう、病院に運ぼう。最寄りセントラル病院だが……封鎖しているか」

「だからといって、このままにしておくのは、心配だよ」

「だな。小動物に聞いてみる」

「小動物？」

「管理センターの、背の低い女性管理職員だよ。今、俺のオペレーターをやってくれて

いる」

無線を弄り、小動物を呼び出す。

気を失ったレンズを、セントラル病院に送って大丈夫か聞いてみよう。

それがダメなら、どうすれば良いか指示を仰ぐ。俺の今後の行動もある。

「小動物聞こえるか？」

無線に呼び掛けるも、ノイズが返ってくる。

はて。どうしたのか。前までなら、直ぐに返ってきたのに。

「おーい」

『はいはい、お待たせしました』

あ、良かった。小動物の声 came。

少し心配したぞ。俺の独断的な行動で、変なのに巻き込まれたかと。

『アナタの無線記録やら行動記録やらの対応に追われてましてね』

あ……。

変な事に巻き込まれてる様なモンだね。

大変申し訳ない。

でも、対応って事は期待して良い系？

「すまん。でも《何とか》なりそう？」

『何とかしましたよ。ですが、あまり無茶しないで欲しいですね』

何とか、してくれたらしい。

さすが小動物。頼りになる。

でも、謝ろう。迷惑掛けてるし。

「ウツス。マジ、サーセンした」

『反省の色ゼロですね』

そんな事ないよー。

でも、これからもどうぞ よろしくね！

『それで、ご用件は？』

「セントラルの結界が無くなって、ミライ班が中の親玉を倒した」

『おお、それは朗報です。ですが、ミライ班からの連絡が無いのですが……ミライ隊長に報告するよう、言ってくれませんか？』

「あー、戦闘中に気絶してね。今すぐは難しい」

顛末はボカして報告。

いや、だって……ねえ？

俺の下ネタで気絶しましたなんて言えない。最悪、そんなアホな理由で俺が罰せられる。

ミライも、変な記録を残して欲しくないだろう。

別に嘘は言っていない？

ヒトはね、こうやって事実を隠すんだね。もっと酷いパターンもある。

だから、これくらい許せ。

『そうでしたか。ミライ隊長や、皆さんは無事なのですか？』

「それなんだが、セルリアンに操られていたフレンズがいてね。その子らが気絶している。ミライ含めて、病院に運びたいんだが」

『それは……！ 少しお待ちを』

無線越しに、カタカタとタイプ音。何かを調べてくれているらしい。

暫くして、再び通信。

『セントラル病院に運んで下さい』

「閉鎖していると聞いたが」

『医療班を向かわせます』

「分かった」

『済んだら、管理センターに帰還して下さい。例の資料をちゃんと持って、です』

「大丈夫だ。無くしてない」

『ならよし。何か他にありませんか？』

「ない。あつたら、また連絡する」

『了解しました。では、無事に帰って来て下さいね。お待ちしております』

会話のキャッチボールを終える。

やはり、小動物は頼りになるな。帰ったら、やはり資料の件を話すか。

大丈夫な事を祈る。彼女は、良いヒトのハズだ。

俺は考えながら、園長とサーバルに指示を出す。越権行為だが、今はミライが気絶中。

無線による指示を受けた身だし、ココは声を出させていただく。

「園長、サーバル。皆をセントラル病院に運んでくれ。医療班が来るそうだ」

「分かった!」「杏樹さんは?」

「ニホとジャイペンと一緒に、園長の仲間が来るまで休んだら管理センターに行く。

ほら、園長の仲間が すれ違っても心配かけないように、誰かが行き先を教えなきや」

「ありがとう」

「礼を言われる事はしてないさ。 また どこかで会おう」

「うん!」「気をつけて!」

そう言って、園長はオイナリサマを抱えて、サーバルは器用にマンモス、サーベルタイガー、セーバルを抱えて城外へと素早く運んでいく。

特にサーバルは相変わらずすごい。 華奢な身体のどこに、女の子3人を同時に持つて走れるチカラがあるのか。

「お悩み解決、とはいかないが……セントラル事件は幕を閉じたか」

そう呟いて、近くの柱にもたれかかる。

大して運動してないが、精神的に疲れたな。

これからの事を思うと、荷が重い。

まだ仕事は残っている。

「あんじゅ」「あんじゅちゃん」

「うん？」

不意に、ニホとジャイペンが声を出す。

今までジツと我慢の子だったから、存在を少し忘れていたぞ。

あいや、すまん。戦闘中にはありがとう。ふたりがいなかったら、やられてたよ。

「だ、だれ……あの子？」

「え？　他に誰かいたか？」

ふたりが腕をあげる方向に、釣られて見やる。

「なっ!？」

そこには玉座に座る、女の子。

真紅に包まれたシスターの服。蛇のような、ドラゴンの様な長く紅い尾は、玉座の周りを1周して、円を描いていた。

記憶に無いフレンズだ。

似た姿なら、四神のセイリユウに似ているが、セイリユウは青色。目の前の彼女は真逆の赤……それも強烈な、真紅。

服装も大きく違う。宗教的な服だ。協会のシスターを思わず。現に、彼女の両手は前に組まれていて、余計にそう感じずにはいられない。

フードを被るし、尻尾的にも蛇の子か？

「俺も、分からん……ニホ？」

ニホを再度見ると、時間が止まったようにピタリと、腕を上げたまま動かない。

なんなら瞬きすらしていない。それは隣のジャイペンも同じだった。

気が付けば、城の内装は全て紅い世界に包まれ、それしか色を知らないと言わんばかりだ。目に悪い。どこぞの吸血鬼の城だということのか。

「なっ……なっ、なんだよ!? 何が起きてる!？」

再び、答えを求めるように玉座の彼女を見る。

彼女の背後には、空間がねじ曲がったんじゃないかと思わんばかりに、背景だったものが円を描いてグルグルと回る。

ついでに俺の目や頭まで回りそうだ。混乱するという意味で。

あまりに異様な空間。あまりに突然過ぎる謎現象。理解出来ない世界。

前世の記憶を辿っても、こんなシナリオは無い。

なんだ？ なんなのだ？

「ふっふっ。面と向かうのは、これで初めてね」

「へっっ？」

高貴で気高い、透き通った……美しい声が耳に入る。さも、直接脳内に響くかの様な、甘美な声。

その声は間違いないく、玉座に座るフレンズから発せられていた。妖艶な笑みを浮かべ、俺の事を見ている。

もはや、真紅の世界で動いているのは彼女と俺だけだ。

「我の名はウロボロス。 会えて嬉しいわ」

俺は思った。

面倒事だわこれ コンチクシヨウト。

永遠からの脱却。

突然現れた、ウロボロスと名乗るフレンズ。

こんな展開、想定に無かったよ。だって前世の記憶に無いんだもん。

フレンズそのものの存在、アプリ版ストーリーの展開に無い事だ。

いや、俺というイレギュラーの所為で こんな事になったのか？

もしくは。

ファンによるオリフレの様な存在が、パークに存在していたとしても おかしくない。
い。

フレンズ化の条件も正確に分からない。 実在する けもの 以外でもフレンズ化するからな。 絶滅種以外だと 神さま とか U M Aとか伝説とか妖怪とか。

ウロボロスの場合は古代の象徴のひとつか。

己の尾を噛んで環となったへびもしくは竜……だったか？

脱皮して大きく成長するさまや、長期の飢餓状態にも耐える強い生命力などから、「死と再生」「不老不死」などの象徴とされたとか。

そのへびがみずからの尾を食べることで、始まりも終わりも無い完全なものとしての

象徴的意味がある……のだったか？

永遠。

その、フレンズ。

なんか、ヤベエ事になってね？

うむ。 落ち着け杏樹。

イレギュラーな展開なんて、今に始まった事ではない。 マヨネーズ事件とか、チ●

コ奪われた時とかそうだ。

でも、何とかしてきたじゃないか。 性件は未だ解決していないが、狼狽える事は無

い。 ははは。

「そ、そ、そそそんで？ 偉大で美しく真紅の絶対女王な竜なのかへびなのかな永遠の

象徴的ウロボロス様が、超非力な下っ端職員に何用でありますかあ!？」

あーもう滅茶苦茶だよ。

「杏樹。 アナタが気に入っちゃったの。 我のナワバリに来ない？」

「フアツ!？」

ねっとりとして、誘う様に見つめられた。潤んだ瞳、清らかな、だけど真紅の服の胸元の膨らみとか……距離は空いているのに、何という妖艶さ。

それは告つてるんスカね？

大丈夫？ ナワバリ入っちゃう？ 交尾する？

いや落ち着け。今の俺は女の子。男ではない……ハッ！

まさか百合属性!?

などと馬鹿な思考をしてみた。少しでも冷静になれるように。

逆に混乱する頭。 あほくさ。

「と、とつぜん現れて誘われましても……そも、ナワバリつてどこです？」

何とか言葉を返した俺。肯定でも否定でもない、疑問の言葉。 エライ。

敬語なのは畏怖の念から。情けないが、突然過ぎる展開だし、俺無力だし。

言葉を返せているだけ、すつごーいと褒めて欲しい。

だが嫌な予感が、ずっとする。

ナワバリつて、たぶん、物理的なものじゃないよな。彼女がウロボロスというのな

ら。

俺の妄想脳がアレコレと考察していく。

「敢えて言うなら、時の流れの中かしら」

ウロボロス様が、パワーワードを言った！

なんとなく、予想の範囲だった。

俺の妄想が膨らんでくる。先程 園長に言った、時間のループが関係しているなオ
メーと。

「と、いいますと。決められた時間を無限ループしていて、その無限の環がウロボロス
様のナワバリ？」

「そうよ。 やっぱリアナタ、我の事を知っていて名前を言ってくれたのね。 嬉しい
わ」

妄想は当たっていたらしい。

俺の言葉に、ニコニコと笑顔を浮かべるウロボロス様。 怖い。

なんだ。俺が園長との会話で、ウロボロスの事を言ったから、嬉しくなって現れた
というのか。

「質問を重ねていくようで悪いんですが、園長の《ときわたり》に絡んでいる?」
「あら、そこまで知っているなんて。ますます気に入ったわ」

知っているのか。

時間がナワバリというのだ。おかしくはない。

園長という、セントラル事件後の愛称も知っている感じだしな。

やはり、園長は無限ループしている?

もしそうなら《永遠》の彼女が関与し、無限の環に閉じ込めている?

あくまで俺の妄想。

しかし、もしそうなら。彼女は園長を苦しめている可能性がある。そう考える
と、フツフツと怒りが湧いてきた。

「気に入ったついでに、教えて下さい。アナタは、園長を《ナワバリ》に閉じ込めてい
るの?」

疑惑と怒りの声を出す。

先程までの緊張は無い。自分でもびっくり。

聞いたウロボロスは、妖艶な笑みのまま口を開いた。

「そうとも言えるし、違うとも言える」

「と、言いますと？」

「あのヒトは、自ら同じ時を廻っている。気がつけば、我のナワバリに入っていたの」

「えーと？」

「我から手を出したワケじゃない、という事」

俺の感情を知ってか知らずか、そう言い放つ彼女。

趣味趣向で手を出したワケじゃない。

鵜呑みにすると、不思議と脱力する。

「そうですか……良かった」

「良くないわ」

ウロボロス様、笑みからムスツと頬を膨らませる。　あら可愛い。

恐ろしい印象が無くなったよ。　やっぱりフレンズ。　可愛いってハッキリワカンだね。

「何故です？」

「じゃあアナタ、自分の巣に知らない子が入ってきたら　どう思うの？」

嫌ですね。　キタキツネとか、イタリアオオカミが勝手に邪魔してきたりとか

……。

いや、クリスマスの際は嬉しかったけどさ。　時と場合によるね。

「困りますね」

取り敢えず定型文的なのを述べておく。

「でしよう?」

同意を得て、笑みを浮かべられた。

見た目はドキツイ色だが、表情は子どもみたくて可愛い。可愛くない？

「ああ、でも」

と思つたら、憂いを帯びた顔に。

「逆に我が、あのヒトのナワバリに入ってしまったのかも知れない」

「ワッツ？」

どういう事だつてばよ。

まるで意味が分からんぞ。

不法侵入されたと思えば、逆にしていた。

何を言っているのか分からねえと思うが、彼女はそう言っている。

これもうワカンねえな。

「だってフレンズ化したのは、アナタが我の名前を言ってくれた時だもの」
「マジっすか!？」

まさかの事実。

ウロボロス様は、俺の妄想発言で具現化してしまった！

マジでフレンズ化の条件は不明なんですがそれは。

たぶん俺の妄想発言は、ひとつのトリガーに過ぎない。

メインの触媒的なのは、やはり園長の お守りによる 《ときわたり》だろう。

とか妄想してみる。 実際は知らない。

問題なのは、この状況。 どうすれば良いの。

「その前の記憶はアヤフヤ。 でも、園長が同じ時間を繰り返ししているのは見た。 その繰り返ししている時間を我のナワバリにした。 元々繰り返ししていた時間だから、園長をナワバリに閉じ込めたワケじゃないし、寧ろ我が園長のナワバリに入ったと言える」
「じゃあ、ウロボロス様が園長のナワバリに不法侵入したんじゃないですかヤダー！」
「しよ、しようがないじゃない！ 心地良さそうだと思っただもの！」

可愛いらしく、頬を膨らませる彼女。
でもそれ、悪いのは貴女だよ。

「さっきの言葉、そっくり返しますよ。自分の巢に知らない子が入ってきたら、どう思います?」

「別に園長を困らせてないし、彼も自覚は無いのよ?」

「無ければ良いの? 知らないウチに犯して無知プレイみたいな事して楽しいの?」

「なによ……さっきまでオロオロしてたのに」

ブツブツいって拗ねる彼女。

園長に害を為してないなら良いが、となると無限ループは彼女の仕業じゃないよう
だ。

いちおう、聞いてみるか。

無限ループを断ち切れないか、どうか。

「じゃ、ナワバリにしてるところ悪いんですが。園長の為に輪を解いてくれませんか?」

「我には出来ない」

へ？

なぜに。時間をナワバリにしているんだから、なんかスゲーチカラで無限ループを断ち切れないの？

「彼自ら時間を繰り返しているのよ。それは強いチカラで。我が深く干渉しようとすると、跳ね返させて無理」

「なんかよく分からないけど、無理なのは分かりました」

ほんま、つつかえ……じゃなくて。

やはり考えないとダメか。

当初の予定通り、といって良いのか分からないけど、繰り返さないといけない状況を変えないとな。

「……私のナワバリ、壊す気？」

急に怖い顔をしないで下さい。チビります。

でも言いたい事は言わせて貰います。

「園長の為、パークの為です」

「幸せな時間を繰り返すのも、またパークの為だと思わない？」

「俺は前に進みたいんで」

「それはアナタの都合よ」

「ウロボロス様も、自分の都合で園長を利用しているのでは？」

「彼は自ら時間を繰り返しているわ」

「その理由はなんですか？」

「幸せの為よ」

「セルリアンのような《再現》に成り下がってませんか？」

「サンドスターによる《奇跡》は幸せにしている」

「その奇跡で、新しい幸せを探そうと思わないのですか？」

「繰り返す方が幸せよ」

「ビターエンドは求めない」

「先はバッドエンドかも知れない」

「なら、繰り返す時間に俺は、杏樹はいたか!？」

「……ッ！」

怯んだ！

ここだ！

攻めろ杏樹！

「やっぱ、いなかったな!？」

アンタが気に入った理由も、そうだからだろ!？」

「それ、は」

会話のトツチボールの中、一気に攻める。

手を、いや口を緩めない。

もう勢いに任せる。休んだら恐怖で話せなくなりそうだから。足は既にガクガ

クしてるけど。

「なら、賭けても良いじゃないか。フレンズ化したのだから多少は俺の お陰もある

のかも知れないし。そう考えると出会えた事は、こうして話せているのは奇跡だ。

その奇跡を起こさせた俺に、ちよつとは託してくれないか？ アンタも俺が気に入った

なら、協力してくれないか？

保証は無いけどさ、新しい幸せ探しを手伝って欲しい」

もうナニ言ってるのか、自分でも分かんないや！

でも見方によつては、コレ……告白みたいになつてね？

でも断じて違う。これは説得であり告白ではない。だから、服や周囲の光景同様に、肌まで赤くならないでウロボロス様に。

「う、うう」

「すみません何でもはしませんが許してください、何でもすいません」

意味不明な事を口走りながら謝る俺。

ほんま、ナニしてんだらうね俺。

「……分かったわ。アナタが創る新しい時間。見させて貰うから」

「あ、アザツス！」

上手くいったか！

「もし、我と話したくなったら名前を呼んで。そうでなくても、我から会いに行く時もあるかもだけど」

「ウツス、かしこまり！」

「上手くいかなかったら、永遠の時の中で抱擁してあげる」

「フアツ!?!」

え。 ナニソレ怖い。

永遠のハグとか、絞り取られちやうのかな？

「冗談ですよね？」

「ふふ。 どうかしらね」

「ヒエツ」

クスクスと、妖艶な笑みを浮かべると。

ウロボロス様は、幻のように消えていなくなった。

同時に周りの光景も元に戻り、元の色が戻って時間が正しく流れ始める。

置物の如く、微動だにしなかった二ホとジャイペンも動いて、ああ やつと解放され

たのだと感じた。

ああ……スゲー疲れたぞ。

「あの子は……アレ、消えた!?!」

「今のは幻……じゃないよね、杏樹?」

驚くニホとジャイペン。

ふたりには突然消えた様に見えたのか。

時間が止まっていたのだろう。

そう考えると、不思議な現象を体験したなあ。

あまり心地良い空間とはいえなかつ

たけど。

「ああ。フレンズだな」

「また会えるかな?」

「きつと会えるさ。パークが平和になったら」

テキトーな事を言って、踵を返す。

やる事はあるのだ。　忘れかけていたが。

「後続のフレンズが来たら、園長の行き先や顛末を教えて管理センターに行こう。　資料を渡さないとな」

下っ端の臨時職員なのにツライさん。

でも、不思議。　絶望感は無い。

妙な満足感。　さて、未来が楽しみだ。

管理センターへの帰還

園長とミライ、サーバルらは、セントラル病院へ。ミライが気絶しているので、ジャパリバスの運転は園長がやったと思われる。

園長、バス運転出来るのかね。免許持つてるのかしら。客もいないし大丈夫だと思うが。

まあ、事故つてもフレンズ相手なら、なんとかなるだろう。

アニメサーバルちゃんは、バスに軽く撥ねられてもピンピンしていたし。

バスが大破しても、歩いていける。ここから病院までは遠くない。後は任せただぞ園長。

さて。一方で俺らは、しばらく けもキャツスル内で待機。

後続のアプリ版メンバーが来る。園長達の行き先と顛末を教えなければならぬ。

カラカル、トキ、トムソンガゼルのルル、シロサイ、ギンギツネら。

その辺は正史の通りだろう。

ただ展開は正史……とは言えない。あまりに誤差が生じている。

痛いのがセーバル。フレンズ化していないのだ。セーバルがフレンズ化しない

と、例の異変が深刻化するかも知れない。

「考えると俺、余計な事をしたなあ」

セントラル事件に、首を突つ込まなければ良かった。

後悔先に立たず。

でもカコがセルリアンにチョメチョメさせるのは許せないじゃん？

「杏樹は良くやってるよー？」

ジャイペンがフォロー。

見れば、神殿っぽいデザインな柱に背を預けながらこちらを見ている。

パイセンの風格が、ありますねえ！

ボーイツシュで背が高ければ、絵になったな。でも目の前には幼女体系のパイセ

ン。そこはマイナスポイント。

それと、離れた所で城内探索をしているニホもマイナス。可愛いけど。

あの、シリアスモードの君は何処。今はタダの好奇心旺盛ワンコだよ。

あいや、今は良い。パイセンと話しているからな。

「そうか？」

「そうそう。カコ博士を助けたし、悪事を知れたじゃん？」

悪事ねえ。

アレはヒトによつて、意見が分かれる。

「アレは面倒事だ」

「何とかしようとしているじゃん」

「何もしてない。ヒトに任せて、後は連中任せさ」

世間に任せて、悪か善かを叫ばせる。

紛糾した事態になるかも知れない。

俺的には悪だ。

だが他のヒトにとっては、善かも知れない。

多数決で決めさせようと画策中なワケ。ヒトの悪い癖。褒められない。

「それでもさ。見過ごすのはマズいと感じたから、動こうとしてる」

「まあな」

「それだけで価値あると思うよー。ただ言われた仕事をこなすんじゃなく、パークの為に考えてるんだって分かる」

価値ねえ。

自身では、あまり無いと感じているが。

楯突く行為をしているからな。

仕事も不真面目だし。

その点、無価値どころかマイナス評価だ。

そのくせ、良い様に使われている。だからかな。この件で泡を吹けば良いと考えるのは。

「価値は知らん。でもパークが好きだから」

「うんうん。ありがとう！」

「礼を言われる事は、何もしてない」

とか言ったが。

礼を言われるのは、恥ずかしいな。

目を逸らして、遠くの二ホを見る。

玉座の匂いを嗅いだり、座ったりしている。　ナニしてんだか。　微笑ましくもある。

「でさ、杏樹」

「うん？」

「この事件もアレも、未来予知出来ての行動？」

パイセン……詮索されるのは、良い気はしないぞ。

礼を言われた喜びから一転。

冷めていく心と共に言葉を放つ。

「カコが襲われるのは予想出来た。だから助けられた。でも、俺の輝きを奪ったセルリアンの行動は分からなかったよ」

「ほう。杏樹が関与して変化した事は分からないと?」

「ああ、それは予想出来ない」

「資料の件も?」

「そう。でもアレは……解決出来たつもりだった。でも現実にはこうさ。上手くいかないもんだな」

変に隠しても面倒なので、テキトーに話す。

パイセンなら、日常会話からアレコレの情報を盗み出すだろうし。

だったら、勘の良いガキになって嫌いになるより、多少のネタバレをした方が大人しくなる。相談相手にもなる。

「俺に未来予知出来るチカラなんて無いよ。正直、無能だ。期待するな」

「そんな卑下しないでおくれよ。みんなで協力すれば良いんだし」

「そうだな。でもパイセン」

「なんだい?」

「無理すんなよ」

故の不安から掛けた言葉。

パイセンなら《やる》かも知れない。
するとキョトンとした後、笑われた。
笑わなくて良いだろ……。

「しっしっしっ！　大丈夫だって！　心配し過ぎだなあ！」

「真面目に心配してやってんだぞコッチは」

「うんうん、分かっている分かってる！　うん、ありがとう杏樹。　やっぱり君は優しい
ヒトだ！」

そう言って、また笑う。

全く。　今度は別の意味で恥ずかしくなってきたぞ。

「あんじゅ！　誰か来るよ！」

探索ワンコが、吠えた。

ケモ耳……聞き耳を立てている。　顔と共に出入り口方面だ。

「なんにんもいる！　音の感覚から、たぶんフレンズ！　羽音……？　鳥の子もいるかも！」

聞き分けられる系？

俺はミライやカコのように　けものに詳しくないから分からないが……凄いな。

「後続メンバーだ。　園長の行き先とココで起きた事を伝えたら、俺らは管理センターに行くぞ」

「おっけー！」「わかった！」

ふたりとも元気だな。

元気出してえな俺もなあ。

「サーバルー！」「ガイドさーん！」「セーバルは　ご無事？」「オイナリサマツ！」

騒がしくなって参りました。

女三人寄れば姦しい。　いや、3人以上いる。

カラカル、トキ、トムソンガゼルのルル、シロサイ、ギンギツネ。

他のメンバーはいない。アライさんやフェネックも他の子と共に、どこかのエリアにいるのだろう。

「あれ？ みんなは？」

可愛い声を出すのは、小柄な子。トムソンガゼルのフレンズ、ルルだ。オレンジほい色を基色に腹部は白く、アクセントのように黒い流線のような模様が混ざる毛皮……服を着ている。

やや曲がりくねった槍を手を持つ。元のけもの持つツノだ。そこは形状違えどシロサイも持っているな。

サーベルタイガーがサーベルを所持していたように、元のけものを思わす武器を持つ子もいる。

それらはフレンズ化した際に共に具現化したものである。決してヒトが彼女らに渡した得物ではない。

サンドスターは、本当に謎だらけ。

「可愛いな」

声に出ちやつたよ。でも可愛い。他の子も可愛いけど。

なんとなく幼い。妹属性がありそう。実際、アプリ版でそんな話があった気がする。

「失礼ですが、アナタは どちら様でしょうか」

シロサイも可愛いよ。美しさもある。

その中世の騎士を思わす鎧、重そうですね。

それと手に持つスピア。サイのツノを思わす湾曲した形。

くつ殺。いや、そんな描写は無かったかもだが。

「俺は杏樹。パーク臨時職員で、見ての通りヒトだ」

見ての通り、女の子になっちゃってるけどな！

「え？ あんじゆなの？」

「あんじゆ？」

あれ。カラカルとトキが反応したわ。

そういや会った事があるフレンズが、アプリ版メンバーにいましたね……。

でも同一個体か？

確認の為にトキの目を見る。絶滅種特有の、光の無い目……じゃなあい！

世代交代をしていなければ、もしそうなら……ちよつと嬉しいかも。俺の記憶を持つだけで嬉しい。嬉しくない？

「菜々ちゃんの歓迎会に来てくれた？」

「ポイ捨て禁止の時の？」

おおっ！

これは同一個体ですねえ！

「俺を覚えてくれていたか！」

「ええ。でも、男のヒトだったはずだけど」
「姿形、面影が無いわね」

同じような反応が来たよ。

仕方ない。誰でもそうなるんや。俺もそうでした。

「セルリアンに喰われて、女になったんだよ」

「喰べられた!?!」

「まあ! 良くご無事で……いえ。無事ではないにせよ、気を落とさないで」

カラカルとシロサイが声を上げる。

そうだよなあ。喰われる体験は、ヒトも けものも忌避したい。

ヒトの場合、ひどい方で昏睡状態。目覚めるか分からない。フレンズなら思い出が消えて、けものに戻る。

攻撃によっては、最悪 命に関わるだろう。とにかく、ヤバい体験を俺はしたのだと改めて思う。自慢したい。でも無いチ●コをイジられそうで怖いから、やめよ。

「それは……災難だったわね。でも、女の子になるなんて。セルリアンといい、サンドスターは謎だらけね」

警戒していたギンギツネが、声を掛けてくれた。

うん。 そうなの。 災難だよ。

そのセルリアン倒したんだけど、身体戻らないし。 それに君が仕えるオイナリサマも巻き込んでしまつて……。

あ、話さないとな。 ここに残った目的を忘れるところだった。

園長メンバーに会えた喜びを、もう少し味わいたいが時間が勿体無い。 俺の仕事もある。

「まあ俺の事は良いんだ。 それよりサーバル達の件だが」

「ええ。 聞かせてくれると嬉しい」

落ち着いた声のトキ。

性格変わった？

アプリ、アニメ側に近付いている？

同一個体なのにな。 事件の影響でオトナっぽくなった？

「ココのセルリアンを倒した後、セントラル病院に向かったよ」
「誰かケガしたの？」

心配する一同。

他を気遣える優しさを感じる。

俺の事じゃないのに、嬉しくなるね。

優しい世界。

「一緒にいたフレンズがね。 オイナリサマとか」

「オイナリサマ!?!」

ギンギツネが声を荒げた。

慕っている様だからな。 言えば、こうなるのは予想出来た。

でも隠す話じゃない。

寧ろ言わねば。 遅かれ早かれ会うワケだし、大切なフレンズだから。

「大丈夫だよ。 気を失っただけ」

重体ではない事を言う。 少しは安心するように。
するとニホが前に出てきた。 申し訳なきそうな、悲しそうな顔で。
しゅんと、垂れ耳。
尻尾も下がりに下がる。

「私が——」

「ニホ」

だから止めた。

手で、待てを掛ける。

ニホ。 お前は悪くないよ、と。

「セルリアンに操られていたんだ」

事実だ。

でも言わなくて良い事なら、言わない選択肢もある。

「そんな事が？」

「ああ。でも、セルリアンを倒したら気を失ってね。それで病院に向かったよ」

ニホが体当たりしたとかは言わなくて良い。フレンズ同士だ。ギクシヤクする可能性は避けたい。

俺も、もう少し言い方があっただろうけど。

自分、不器用ですから。

「君たちも病院に向かうと良い。園ちよ……不思議なお守りを持ったヒトと、サーバル、それとセーバルがいる」

「セーバルも無事なのね！」

「同じく気絶中だろうけどな」

「消えずに済んだのね……良かった」

安心する皆。

存在が消える危険性があつたからね。

シーサーの塩のチカラで輝きを取り戻すにせよ、親玉に輝きを奪われるにせよ。

「とにかく、行つてあげて。きつと待つてるから」

「そうね！　直ぐ向かうわ！」

「ありがとう、あんじゆ」

「また会おうね！　きつとだよ！」

「あんじゆ様。平和になつたら、ゆつくり　お喋り致しましょう」

「あ、言い忘れていたわ。雪山の時はごめんなさい。そして、ありがとう」

ドツタンバツタン大騒ぎしながら、城を後にする園長メンバー。

しかし最後の礼。カラカルだな。雪山の件を忘れていなかった。

それだけで、うん。嬉しいね　やっぱ。

短いやり取り。　また会えるだろうか。

「俺たちも行こう」

ジツとしていたジャイペン、少し悲しげな二ホに声を掛ける。
すまんね。でも、仕事中。
そして、また……悪足掻き中だから。

電車に乗り込み、管理センターへ。
道中、車窓から都市部を再度観察。

セルリアンが1匹も見当たらない。何処かに隠れているだけかも知れないが……
親玉を倒した影響だろうか。

「二ホ、ジャイペン。セルリアン見えるか？」

「見えないよ」

「見えないねえ」

ふたりにも訪ねたが、やはり見えないか。

セルリアンもサンドスター同様、謎だ。謎しかない。

奴らを解明出来れば、人類にとって有益な情報を得られるかも知れないのだが……。とか考える俺やヒトこそ、セルリアンなのかもな。実験の件やヒトのコト言えないや。

「なら都合が良い。再建も楽になりそうだ」

「またヒトが戻って来るの？」

「きつと、そうなる」

ニホが嬉しそうに、尻尾を振る。

そう。ヒトが戻る。それが良い事なのか分からない。

いない世界の方が、それこそ都合が良い。

でもフレンズは、そうは思わないのかもな。

「問題は、これからなんだよなあ」

「資料の件かい？」

「目先はソレだね。　後は未来かな」

例の異変とかね。

後は俺の知らない事。

ウロボロスのフレンドズといい、ヒトが起こす事件といい。

裏世界に足をつ突っ込んでいる。　もう避けて通れなさそう。

ツライさん。

「それらも、管理センターに丸投げ出来たらしちゃうけどな」

「しっしっしっ！　あんじゅは悪いヤツだなあ」

「さつきは良いヤツって言ってなかった？」

「そうだっけ？」

「あんじゅは、良いヒトだよ！」

「うんうん。　分かってるよニホ」

笑うジャイペンとニホ。

恥ずかしいな、全く。　悪いヒトで良いよ。

「あー、ほら。 もうすぐ管理センターだよ」

窓から見える、大きなビルを指差す。

パークを管轄するビル。 あの人工物の中は、どんなドロドロした情報が隠れているのやら。

でも。 そんな中にも味方はいる。

いなきや困る。 これからの事もある。

「小動物に資料の件を言おう。 きっと、味方になってくれる」

裏切られたら、俺の立場が危うくなりそう。

ウロボロスに永遠の抱擁を受けてしまうのも困る。 色んな意味でイッてしまうか

も知れない。

でも、まあ。

樂觀視している俺もいる。

フレンズもいる。 何とかなるさ。

情報戦の下地

管理センター。

その地下にある防災センターに、俺達は戻ってきた。

無線で小動物を呼び出すと、ヘルメットを被る小柄な女性がやって来る。

「お疲れ様です。危険な中、ありがとうございます」

礼を言われた。

嬉しいね、当たり前だとして資料をひたたくるクズの記憶がある身としては余計に。
じゃ、感動もソコソコに話をしましょうかね。

「いえいえ。小動物の可愛い声でのサポートがあつたからこそ」

「次、余計な事を言うとかコ博士に言いますよ?」

「ごめんなさいしませんでした、ハイ」

笑顔で脅迫されたよ！

小動物、恐ろしい子！

戦々恐々とする俺に反して、ニホとジャイペンはちよつとした冒険譚を語る。

「私達、頑張ったよ！ お城のセルリアンをやっつけたんだ！」

「ありがとうございます、ニホンオオカミさん。とても助かりました」

「私も、それなりに頑張ったかなー。付き添い程度だけだね」

「初めまして、ジャイアントペンギンさん。ありがとうございます、杏樹さんの保護者をしてくれて」

フレンズにも礼を言う小動物。

同じ笑顔なのに、雲泥の差を感じる……。

「ま、まあ……俺は女の子のままだけど。それより資料をどうぞ」

頼まれていた書類を渡す。ちよつとシワが出来てるけど、問題ないだろう。

さて。本番はここからですよ。

「ありがとうございます、確かに受け取りました」

「それで、その件なんだが」

仕事に物申す。

黙ってやれと、前世では言われたものだ。

だけど言う。黙認出来ない。

それと小動物なら聞いてくれると信じて。

「内容を見て。意見を聞きたい」

「いえ……勝手に見るのは」

「うっかり目に入っただけで読んで欲しい」

うっかりで読むって、それガツツリ系に分類されそう。でも言わない。読め。

小動物、逡巡して……結局は読んでくれた。視線が紙に落とされる。

表情が険しくなるサマから、俺ら同様に良く思っていないか。

「……………セルリウムによる故人の再現ですか。薄々はあるだろうと感じていましたが、改めて見ると重いですね」

情報を扱う、管理職員の身だからか。

セルリウムの特徴も、多少認知していたのだろう。それっぽい思考は出来た様子。

「同意見。して、将来的にパークに害なす技術ないし実験が行われる可能性がある。俺はソレを止めたい」

脇にいるニホとジャイペンも、真っ直ぐ小動物の目を見る。

止めるのに協力して欲しいと、言わんばかりに。
ところが。

「私は上の指示に従わなければなりません」

は？

それはまた……王道、社畜道をいく。

予想は出来たがね。真面目ぼいからね。小動物は。

だから、俺は説得する。

頭が悪いんでね。まともな意見じゃないが。

「堂々反目しろとは言わない。従うフリをしていれば良い」

「杏樹さん、私達は職員です。上の意思決定や指示には従わないといけませんよ」

「それで小動物は、満足なの？」

「満足とか、不満足の問題ではありません」

「今後、この件で悪事の片棒を担がされてる可能性もあるぞ」

「可能性は、常にあります。それはパーク職員全体に言えることです。この島は綺

麗な仕事ばかりではありません」

「いちぶ組織や個人の利権の所為で、フレンドズを悲しませる結果になるんじゃないかって、考えられない？」

「……………私達は、ヒトです」

「悪意もあれば善意もあるのがヒトだ。でも小動物は良いヒトだ。そうだろう。」

ニホ、ジャイペン？」

「うん！ おねーさんは良いヒトだよ！ 私があんじゅの部屋を汚しちゃった時と

か、助けてくれたし！」

「パークの為に、自主的に見回りしてる背の低い職員がいるって、フレンズから聞いたよー。それって、おねーさんの事だよね」

ここで清らかな(?) フレンズの言葉を浴びせて精神攻撃。 精神攻撃は基本。
小動物の良心の呵責に期待しよう。

「うっ……ズルいです、杏樹さん」

「へ? ナニ? 心を込めて、もう一回!」

「ズルいです! 私だって、何とかしたいですよ! でも!」

「怖いから?」

「……………何をされるか」

だよね。俺も怖い。

この話をする時点で、内心ビビってます。 どこかで聞いているヤツがいて、チクられて、次の日行方不明扱いにされるとか。

前世の様な過労死ENDも勘弁だが、そういう終わり方も嫌だ。

でもジャパリパーク、フレンズ、そしてヒトの未来の為だ。

不安要素は消したい。 苦難は群れで分かち合え。

「俺も怖いよ。 他にも、この件を話したヒトはいるけど、そのヒトも怖がってたよ」

「それは……保安調査隊の」

「うん。 でもフレンズの為に前向きに頑張る姿勢だった。 それって、個人の倫理観もあるけど、パークやフレンズが好きだからじゃないかな。 小動物はどうだ？」

「パークがお好きですか？」

「……………好きです。 だからこそ、私に出来る事をやりたいと思います」

「なら、やろう。 後悔しないように。 小動物だけに重荷を載せないから。 皆でや

るから、大丈夫」

島の中……パーク職員だけの問題に留めるつもりは無いからね。 世論……外界も

巻き込みます。

ヒトの世界が混乱する？

知らんな。 悪事を働くヤツが悪い。

それと予定の味方は、不特定多数の無責任論者の名無しな皆様だ。

ぜひ声を荒げてパーク談義を交わしたまえ。

運が良ければパーク上層部が無視出来ず、実験中止まで漕ぎ着ける。

「よし。作戦はこうだ。小動物がネットの掲示板だとかなんかで、こういう事がパークで行われているらしい事をほのめかす。それを薄く広く拡散させていく。

上手くいけば伝染して勝手に広がるだろう」

「それで、この件が解決するのでしょうか」

「上手くいけば、最終的に。世論が騒ぎ始めれば調査団やらなんやらが介入して実験中止になるかな。最悪、影でやろうとしたら研究所をフレンズや俺らが荒っぽい手段で止める」

「すごい……乱暴で粗末で、失敗しそうな作戦ですね」

「ごもつともである。」

結局最後は、暴力になるかも。フレンズ……協力してくれるかなあ。無理かも。

「ナニもしないより良い。他に良い方法があるなら頼むよ」

「考えておきます」

「拡散しなくてもさ。自然の結果って事で諦めもつく。噂程度で分散するぶん、責任逃れも出来る」

記録保存チームの、部長の言葉を思い出しながら言う。

諦めても新しい幸せが、この島で生まれる。悲しみは続かないはずだから。

「雑で卑怯ですね」

「それもヒトだから」

そう思うヒト、俺。

樂觀視している自覚はある。でも、なんとかなるさ。

するとニコツと。小動物は微笑んだ。

カコと出会ってなかったら、結婚しよと考えたかもね。背と胸無いけど、良いヒトなもの。

「分かりました。大した事はしません。後は流れに任せます」

「それで頼みます」

そう言うと、ニホとジャイペンが「お願いするよ!」とか「よろしくー!」とか続けて言った。

フレنزズに言われるとね。くるものがあるよね。絶滅種だと余計に感じる。

「分かりました。何かあつたら、連絡します」

「しくよろ」

「それで、アナタの今後ですが」

仕事の話にシフトですかそうですか。

危険な目に遭ったばかりなのに、休ませてくれないんスカね。

「ウイツス。なんスカ?」

「いちど所属決めをしてみませんか?」

はい? 所属う?

パーク臨時職員という肩書きを変えるというのか。

「あの一。それは臨時職員でなくて、どこかの組織や専職に組み込まれるという事でしょうか？」

「はい。そうすれば、その組織でアナタは色々と保証されますし、スキルも身につきます」

うーん。これはありがた迷惑かも。

臨職は大変だが、簡単な事をやらしてくれたり、重い責任を負わされない。今のところ。

今日みたいな、危険な仕事ばかりなら考えるが、派遣先の職員は皆雰囲気良いし、仲良く出来ている。

残業モドキはあるが、笑顔の中に包まれていると苦ではない。肩書きで周りの目も気にならないしな。前世と大きく異なる。

「いやあ、別に現職に大きな不満は無いんですけど」

「様々な部署が、アナタが欲しいと良く連絡されるのですよ」

マジで？

こんなダメ男……いや、今は女を？

「動物研究所からも、誘いがありましたよ」

「マジ？」

それはチャンスじゃね？

カコと一緒にいられる時間が増えるやん!?

「そ、その……アナタが望めば私の部下としても」

「ジャパリパーク動物研究所に所属しますですよハイ！」

「あ………はい、そうですか……先方には連絡しておいて下さいね……これ、連絡先です」

連絡先が書かれた紙を渡された。

なんか小動物が意気消沈しているが、気にしない。

それより連絡だ！

所長の問題はあるが、近くにいた方が監視もしやすいだろう。

「はあ、杏樹ちゃん。女の子になったなら、もう少し、もう少しこーし、気持ちを勉強した方が良くぞー？」

急にパイセンに溜息吐かれたぞ。

俺がナニしたってんだ。

「みんなと仲良くしなきゃダメだよ！」

二ホには吠えられた。

なんなんだ、一体……。

「まつ。大切なのはこれからかねえ。私はパーク復興に備えて、ひとまずPPPの

トコに戻るよ」

「あ、ああ。気を付けてな」

パイセンはPPPのトコに行ってしまった。
アツサリしている。

道中が心配だが、都市部の駅に来れたのだ。

セルリアンが沈静化したみたいだし、彼女も強そうだし。大丈夫だろう。

「じゃ、じゃあ研究所に連絡するか」

パイセンの言う通り、大切なのはこれからだ。

どう転ぶか分からない。

ウロボロスのフレンズとの出会いという、下手するとヤベエ事態になっているが、うん。

フレンズがいる。何とかなるさ。

改めて研究所。そしてフレンズ化？

所属。それは組織の中に組み込み、親元をしつかりする事で管理されている、仲間がいる事を示す。

そうすれば、他からの圧力や要求を軽減する事になるし、大きな所程に手を出し難い。俺は今、そのタイミングに来ている。所属を決めて「なんかよく分からないもの」から身を守るというタイミングに。

して、もうどこに所属するかは決めている。

それは。

「もしもし。ジャパリパーク動物研究所ですか？」

そう。幼馴染のカコが勤めるジャパリパーク動物研究所だ。

元々、カコと一緒にいたい気持ちはあったし、組織規模も大きい。権力もある。

無所属で、のんびり やりたかったが、そろそろ身を固めなきやだし。
力がある方に着く。 当たり前だよなあ？

『はい。 ジャパリパーク動物研究所です』
「臨時職員りんじしよくいんの杏樹あんじゆです。 手紙を見まして——」

人生の転機。

転職じゃないけれど。 俺は大きな一歩を踏み出したのである……！

「などと思っていた時期が、俺にもありました」

色々あって、手続きと面倒な書類の果て。 ようやく研究所内に入れたのだが。

「アンジュちゃくくん。大丈夫、先つちよ。先つちよだけだから！」

「ハアハア……その身体の構造が気になるんだよお」

「いやあああ！」

この通り、実験台にされかけている。

する方じゃない、される方だ。恐れていた事態になってしまった。

窓際のカーテンに、くるまい、寄るなよ来るなよと涙目で睨みつける。しかし効果なし。

マジ勘弁だ。解剖とか絶対にムリイ！

「助けてカコ！」

頼りになるのは、幼馴染にして副所長のカコ。ニホンオオカミは実験の邪魔にならないようにと研究員の餌に釣られて、何処かへ行つてしまったし、俺を救助したらしいEXフレンズはサファリ区分から戻つて来ていない。

かの先輩、賢い系のジャイペンに助けて欲しくも彼女もいない。

今いるのはデーパーワンみたいな変態研究員と天使のカコだけだ。ハハッ、カオ

ス。

「俺は人生の道を……求人をも、またも、誤ったか！」

「悲観する事はないよ。君は人類とパーク繁栄への糧となるのだからねえ」

「来るんじゃないやねえ変態どもめ！ 全体より お前らの願望だろ！」

だつて目が野獣だもん。 けだものだもん。 服をひん剥いて、酷い事する気でしょ

！ エロ同人誌みたいに！

嗚呼。 男に犯されるなんて、やーよ！

「何事？」

おお。 ここでカコ博士到着。 俺を追い詰めていた変態共は背を伸ばして しゃ

んとした。

よし。 これで助かるぞい。

「はい。 アンジュさんに実験に協力して欲しく、申し出ていました」

「ですが中々許可を得られずに」

おのれ、コイツら。俺に見せていたディープワンな変態顔は何処へやった。様変わりし過ぎだろ。様変

「分かった。許可が無いなら出来ない。諦めて、今進めている作業に戻って」
「カコ……！」

俺は信じていたよ。流石副所長。権力ある方が味方で良かったよ。よよよ。

「ええー！」

「えー、じゃない」

「はーい」

権力、あるよね？随分と態度がフレンドリーに変わったよ。様変わり激し過ぎだろ、ここの研究員。

取り敢えず部屋を出て行く変態共。ひとまず助かった。礼を言わねばな。

「ありがとうカコ」

「大丈夫。私含めた女性研究員にやらせるから」

「信じた俺が馬鹿だったわ！」

性別を変えれば良いという問題じゃねーよ。嬉しくもなんともない。保身に走らなきゃ殺されてしまう。

「そんな悲しい事を言わないで、ね？」

「悲しいから言ってるんだよ!？」 潤んだ目で見てもダメだつて。解剖とか絶対に嫌

だぞー！」

「解剖しない。怖い事は ない」

「ホントかよ！」

騙されないぞ。 そうやって前世でも騙されてツライさんになったんだからな。

「本当。 今回の事件やフレンズの世代についての質問に答えてくれれば良い」

「本当だな？」

でも幼馴染のカコの言葉だ。　きっと大丈夫だと信じたい。　これで騙されたら立ち直れない自信があるが。

「本当」

「分かったよ。　もし、騙したら酷いからな」

「う、うん」

おい。　最後、言い淀んだぞ。　凄い不安。

それでもホイホイとカコの後について行く俺はチョロい。　して、やはり幼馴染でもヒトは信用出来ないかも知れないと疑いの心を持つことになる……。

「……うん？」

あれ。俺は何を していたんだ？

いつのまにか、どこかのベッドに寝ている。

して寝起きにしては、やたらと身体が軽い。

もしや、男に戻れたのか？

胸元を見る。ダメだった。ぼよん としている。相変わらず発情しないのも、

なによりの証拠だ。寧ろ期待を裏切られた虚しさからか、前より発情しない感がある。

「気分は、どう？」

そんな時。　とてもクリアに聞こえたのはカコの声。　振り向けば、いつものカコ。

「えつと……良い感じだよ」

「良かった」

「何があつた？　寝落ち？　事故？」

「うん。　私の部屋に入った途端に、倒れた。　記憶にない？」

はて。　そんな事があつたのか。　記憶の混濁というか、そんな気がするし無いような気がする。

本当に何があつたのだろう。　気分は　とても良いのに、手の届かない場所にある一点の黒いシミ。

それが全てを台無しにしている不快感。　何があつたのか、マジで。

「身体に違和感はない？」

クリップボードを用意して、メモを走らせるカコ。　まるで医者診断。

或いは……実験のようで。　俺は、嫌な予感がした。

したから、聞かないや良いのに。やはり聞いてしまう。

「無い。して、こちらからも質問だ」

「な、なに？ 暫く、その……体調が大丈夫になるまで この部屋で寝ていて？」

「窓ガラス、どうして昼間なのにカーテンを閉めてるんだ？」

まず、陽の光が漏れている窓を指差す。そこにはカーテンが完全に閉められている。相変わらず綺麗な肌をした腕と手に違和感。

「えっと。眩しいから」

「もうひとつ質問だ」

問答したら相手のペースに巻き込まれる。そして逃げられる。させない。させるべきかも知れないが、今の俺はさせたくない。

だから、間髪入れずに質問を重ねた。

「鏡」

「え？」

「壁際に小さいのが掛かっていた だろ。 なんて無いの？」

「そ、それは」

「下に伏せてあるんだろ」

やたら冴える頭が、次から次へと言葉を俺に吐き出させる。 して、行動させる。俺はカコの制止の声を聞かずに、予想通り伏せてある鏡を持ち上げて。自分の姿を見た。

「……………やつてくれたな、おい」

鏡に映った自分の姿。

それは女の俺。 それは いつも通り。 だけど、そこに加えてあったもの。

頭部に けもの 耳。

お尻から シュツと犬の尻尾。

意識したら動かせた。 感触まである。

すっごーい。 ふっしぎー。

そして困惑よりも疑問と怒りが支配していく。

「フレンズじゃないから。 けもの じゃない、ヒト相手なら大丈夫だと思ったのか
よ? カコ?」

振り返る。 カコをギラリ、と睨みつける。

今度は効果があった。 だって震えているんだもの。

ヒトの勝手と 少しの お別れ。

過ぎた事は仕方ない。

そんな言葉は甘えや妥協かと聞かれれば……疲れているから妥協と答える。 苦し
みさえなければ良い。

人生を楽しみたいなら、何ひとつコントロール出来ないとスッパリ諦める事だ。

これくらいは妥協するべき。 そのラインが俺にはある。 皆にもある。
だけど、今まで経験したことのない事だったら？

判断基準を経験から探して、それと比べる。 それがマシなのか、許されるのか。
脳内で判断して、答えを出す。

それは珍しくも なんともない思考。 これまた皆がする。 覗けないだけで、そう
考えている。 これは偏見では無い筈だ。

もし、全てが許されないと怒り暴れるヤツは世の全てが思い通りになる、コントロー
ル出来ると思いがっているヤツだ。 駄々をこねるガキ同然だ。

俺は違う。 多くは違う。 当たり前だと。 受け入れる他ないと。 その怒りや
行為に巻き込まれる理不尽も仕方ないのかも知れないと。

そう、考えて生きてきたが……。

けもの にされるのは、流石に理不尽だろ。

俺は犯人を睨んだ。 暴れやしないが咎める事くらいはする。 そんな俺だった。

「そんで？ この耳と尻尾は？」

生やされたまま、はいそうですかとはいくまい。

カコが隠そうとした素ぶりをした節からも、拍車をかける。

説明を求める権利が俺

にはあるのだ。

耳を怒りの　ぴこぴこ。　尻尾を不機嫌のフリフリ。　それが自然と出る不思議を感じつつ、俺は問う。

「生えた」

「見たし触ったから分かる。　なんで生えた？」

「部屋の中にサンドスター粒子を放出させた状態で、杏樹を先に入らせた。　そして生えた」

あー。　言われると、そうだった。

カコに先に入室するように言われて、疑問を持たずにホイホイ入室。　それで暗転したんだ。

「予想出来た？」

「想定外」

「なあ、カコ。　言わせて欲しい。　何で　こんな　事を？」

「……………杏樹が女体化したのは、サンドスターとセルリウム、輝きを奪われた所為だと思われる。　その状態でサンドスターを受けたらどうなるのか、実験した」

実験。それが酷く冷たい言葉に感じだのは、今までなかった。

学生の理科の授業で行った実験のような……アレじゃない。冷たい。寒い。

実験にされた際の けもの の気持ちは ころなのだろうか。

それが訳も分からず、攫われて針をブスブスされて「自分じゃない ナニカ」に作られる……ゾツとする。

そうでなくても、もしだ。好きなヒトにソレをやられたら？

心に深い傷を負うだろう。 けもの だから、ヒトじゃないから 何も感じないなんて事はない。 けもの だって心がある。 傷付くに決まってる。

ましてや、フレンズならば。

つまり、俺は……傷付いている。

アレ。俺はフレンズ？ ヒト？

困惑と悲しみ。複雑な心境は、垂れ耳を作り、尻尾をしゅん、と下に。 見えない

けど、その感覚がある。意識しているからかな。

とにかく。前に前進しなければ。

「実験の結果は良い。無事だったからね。でも、1歩間違えれば生死に関わると

は思わなかった?」

「サンドスターは、今まで死に関わる結果を生み出さなかった」

「妄信か?」

「確信。今までの実験結果から、判断して実行した」

「今まで?」

「……………」

「俺の許可を得ずに?」

「……………」

「所長や他は知ってるよな。さっきの研究員的に」

「……………」

「……………」

はあ。俺は、来る所を間違えたか。カコの事は幼馴染だし、信用していたのに。

好き、だったのに。

結果はコレだ。ヒトの利益や欲に巻き込まれた。『また』だ。これからも、続く

だろうな。パークにいても、それは変わらない。

「カコ。俺は、これ以上、この件やセントラル事件に突っ込む気はないよ。謎を

明かそうなんて、もう疲れたから」

カコは ぴくつと反応。泣きそうな、嬉しそうな。複雑な顔。

それは喜びと、次に失われる輝きを感じた事で来る不安混じりの表情だ。俺は知っている。何年、お前を見てきたと思ってる。俺は知っている。

でも、それも 終わりかも知れない。

「少しお別れだ、カコ。これ以上、ここに 居たくない」

背後に手を振って、俺は部屋をスツと出る。そうしないと、悲しみと怒りで自我を保てなさそうだったから。

そんな俺を、カコを含めた研究所のヒトは止めなかった。

こんな姿だ。ヒトの目もある。監視もしやすいか。

ひよつとしたら、研究所に戻って来る確信……いや。妄信をしているからか。

だけど、戻ってやらねーぞ。

反抗期のがき。思い通りになる筈もない。いや、思い通りになると思っている連

中の思い通りになりたくないだけだ、俺は。

時が経てば、考えも変わるだろう。

でも、この時の俺は そう思っていた。

隠居

さて。研究所から飛び出して、ヒトの縄張りである都市部や寮での生活に戻ろうとしたのだが。

当然、こんな耳と尻尾ではフレンズ扱いだし、職員証は男性写真のままなので使えない。

いくら『パーク職員です』と名乗っても、通用しないだろう。

どうすれば良いのか。既に復興の為の作業員は港に集結しつつある。はいよ。このままでは、都市機能が回復してヒトが沢山戻って来る。そうしたら、いよいよ居場所がない。こんな俺の姿を見せられない！

「ニホンオオカミ。一緒に冒険だ」

「わーい！」

逃げよう。

サファリ区分に冒険という名目での避難だ。

取り敢えず、寮の荷物を纏めて置き手紙。「探さないでください」と書いておく。
うん。寮母さんなら見てくれるさ。パリピは知らん！ 仕事も、知らん！

広大なパークだ。闇雲にフラついても、行き倒れてヒトに捕まってしまう。それは嫌だ。

ではどうするか。ココは各地のフレنزのチカラを借りようと思う。食糧や住処を分けて貰うのだ。

先ずヒトが居ない内に、フレنز用食糧庫から食糧をパクっておく。

次に初代キタキツネの別荘である、森にあるログハウスへ。まだ朽ちて無いなら使える筈だ。誰か住んでいる可能性があるが、フレنزなら快く受け入れてくれるだろう。妄信。

「あんじゆの耳と尻尾はどうしたの？ 私に似ているけど」

ニホンオオカミに、今頃突っ込まれる。 どうもこうも、ヒトの欲に巻き込まれた結果だよ。 言わないが。

「生えちやつた」

「わーい！ 仲間だね！」

股間のは生えなかつたが。

対して喜ぶニホンオオカミ。 嬉しいね、傷心した身としては笑顔が何よりの薬だよ。

「ああ……そうだな。 仲間、だな」

感情が高まって、あかん……涙が。 今まで何かを我慢してきたように。 それが溢れて止まらない。 涙を拭つても拭つても。

すると。 ニホンオオカミが近寄つて来て。

ペロツと、頬をなぞる涙を舐めた。 擦りたい。

驚いて、見やる。相変わらず笑顔だった。

「それじゃ行くこうか！ 冒険！ きつと一緒になら楽しいよ！ 気になるモノを
沢山見つけてさ！」

涙については、とやかく言わない。 そんな優しさ。 そして赦されたような感覚に
襲われて。

俺は情けなく わんわん 泣いた。 滂沱した。
俺は暫く休養に入る事にしますよ。 ヒトのみんな。

俺とニホンオオカミは、ヒトのナワバリを離れて森へ入る。 楽しい事も、辛い事も
あった 初代キタキツネが住んでいた あの森に。
過去は変えられない。 そのくせ、後悔ばかりだ。 嗚呼。 身体が震える。 寒
い。

思わずニホンオオカミを抱き寄せた。 いつもより、彼女は温かかった。

例の異変

野生化したアンジュ

ヒトの身勝手に、持ち込まれた挙句に捨てられたり逃げた生物による被害。分かりやすい例だと外来生物による環境破壊は世界中で問題になっている。

島国であり貿易国である我が日本国は、その被害にやたらと遭っている印象を受ける方もいるだろう。日本固有種がそれにより住処を追われて絶滅の道を辿っているのは事実だ。

だがしかし。被害者面はいけない。日本の生物も外国へ渡ってしまい、被害を出しているそうだからだ。ナンテコツタ。

生物に罪は無い。ヒトが悪い。自然淘汰と言うには人工的なそれらは、どう言い訳出来ようか。

そして、俺に生えた犬耳やフサフサ尻尾も。失った我が愚息も。ヒトは、どう言い訳出来ようか。

「見て見てあんじゅ！　虹だよ！」

「わーい！　綺麗だね！　たっのしー！」

だが生物は強い。　生命は道を見つける。

このように順応し、適応し……生きとし生きる事が出来る。

ありがとう。　みんな、ありがとう。　ヒトから解放された俺は今、生きています！

杏樹臨時職員の異変。　それは野生化であった。

あれから、俺は森で過ごしている。　住処は初代キタキツネの別荘だ。　見た目は口

グハウス。　漫画版で出たアレだ。

雨風を完全に防げるワケじゃないが、野宿よりマシだ。　フレンズの中には木の上や土の上でも寝られる子もいるが、俺にはムリイ。　まだ文明を捨てきれない証拠だよ。

その内に知り合いのフレンズも増え、初代キタキツネのナワバリは俺とニホンオオカミのナワバリという認識になった。

理不尽な世界に己の安息の地を得る。これが如何に難しく喜ばしい事か。やはり、来て正解だったな。

それから、多くのフレンズの助けを得ながらも今日まで生きてきた。幸い、フレンズ化の都合か。俺はセルリアンとも戦える力を持っていたから、自己防衛程度ならなんとか出来る。

それと変化としては、パークにラツキービーストがフラつき始めた事か。

録画機能等があるから、俺の居場所がヒトにバレてる可能性が大だが、もうビクビクするのはやめだ。強制的なチカラが働いたら自己防衛である。いや、正当防衛か。

ラツキーはまだ、ボスとは言われていない。が、ジャパリまんを配り始めてるから、そういうありがたい存在だという認識。

因みに。ヒトなのか けものなのか 微妙な俺を見たラツキーの反応は……例の『アワワワワ』だった。たぶん、どっちつかずで そうなったのだろう。可愛いやつめ。

初めてなのに初めてじゃない光景。新鮮さと懐かしさを感じて、ちよつと笑顔になれたね。

かのようにして。平和な日々を過ごしてきた俺とニホンオオカミであったが、忘れていた、例の異変の兆候が姿を見せる事になる。

「火山の様子が おかしいって?」

ある日。 たぶん第2世代のフェネックや、他の子達が俺に教えてくれた。

「そうみたいだねー。 他のちほー にいる子たちも知っているんだけど、あんじゅにも伝えようと思ってさー」

「わざわざ ありがとう——アライさん、元気かい?」

「元気だよー。 どうして?」

「いや。 無事かなって」

「そっか。 気に掛けてくれるのは嬉しいなー。 大切なトモダチだから。 でもあんじゅも自分の事もね——それじゃー」

「おう。 気を付けてね」

賢い子との会話は、文明的で良い。 初代フレンズと比べると文明度は、やや劣る傾

向にあるから……いや、そうじゃない。

今は単純に嬉しいのだと素直に感動しよう。余計な事は考えるな。昔を思い出しちゃうから。

大切なのは今だ。そう言い聞かせて、木々の間から火山を見る。パツと見は普通だけど、フレンズ化した影響か。嫌な感じがする。

そして、あの結晶は まだない。

「四神にセーバル。ヒトのチカラ無しに救えるのかな？」

文明から少し離れた今。俺は彼女たちを救えるのだろうか。

取り敢えず、会いに行こうと思う。道中は険しいが……それもまた、冒険。楽しもう。

白虎と稽古

四神とは。

中国の神話、天の四方を司る靈獸。

それぞれ、

東の青龍。 南の朱雀。 西の白虎。 北の玄武。

奇跡の島、ジャパリパークでは神話の四神もフレンズ化しており、東西南北からパークを守っている。

守る、といつても余程の事態が無ければ動かない。 基本は現地のフレンズ任せであり、そんなに働き者ではない様子。

そんな四神だが、例の異変では流石に動いたとかないとかで、結果はフィルターを貼れた代償にプレート化。

フレンズの姿を失う。 そして、セーバルは結晶に……。

その話は、研究所は知っているが、どこまで頼って良いものか。 欲で動く連中だ。良からぬ事を企むので忙しいだろう。 失望する。

「俺はヒーローじゃないしな」

それでも。 それでも 俺はやらなきゃならない。

知っているのに、動かないのは罪だ。

その意味では罪を作り続けていくヒトと俺の人生だが、何もしないよりマシだ。 マシなだけだが。

「会おう。 会って、話して……何か変わらないかも知れないけど、何もしないよりマシ」

そう思わなきゃ、行動出来ない。 情けない。

先ずはオトモを連れて行かねば。 ニホンオオカミもだが、神と同じ名を冠する神域の彼女を。

「とういわけで、お願いしますホワイトタイガー先生！」

「おねがいしまーす！」

「任せろ」

少し離れた場所。 独りで住む白虎に、ニホンオオカミと共に お願いする。 アツ
サリ引き受けてくれた。 チョロい。

「四神の びやつこ……我と同じ名を冠する 神 もいるのか。 興味深い。 是
非、お手合わせ願いたいものだ」

「戦いに行くんじゃないからね」

拳を握る彼女に、一応の注意はしておく。 事あるごとに拳で語ろうとするので。

武道派つてヤツだろうか。 ナニを考えているのか、よく分からない。 世界共通用
語だと思っているのかも知れない。 良い子と いちいち殴らないでくれよ。

それと神さまは、とんでもなく強いです。 独りじゃ勝てません。 たぶん。

そう思ったからか。　白虎がおもむろに声を掛けてくる。　稽古の話だ。

「あんじゆ。　フレンズになつた経緯は、詳しくは聞かない。　だが道中セルリアンと戦う事もあるだろう。　それにはチカラがいる。　出発前に軽く稽古してやろうぞ」
「いや、そういうのは良いから。　時間が惜しいから」
「……そうか」

しゅん、と垂れ耳になる白虎。　分かりやすい分、罪悪感が。

「私が代わりにやろうか？」

「いやいや、ニホンオオカミよ。　そういうんじゃないんだ。　時間が、ね？」

「慌てても仕方がないよ。　四神つて、とーざいなんぼく？　で、いる所が遠いんでしょ？　少しでも準備した方が良いよ」

ぐつ。　2対1とは卑怯也。

仕方がない。　付き合うか。

「少しだけだぞ」

「……………ッ！　よ、よし！　早速始めるぞ！　構えろ！」

表情一転。白虎がパツと明るくなり、戦闘の構えを取る。

右手を背後に高く上げ、左手は俺に向ける。共通しているのはかぎ爪にしているところか。けものつぽい。

「じゃー、うん。　お手柔らかに」

対して、俺はラーテル風に喧嘩姿勢。ジャブを繰り出せるような姿勢で低く構えた。

喧嘩なんて避けてきた俺だが、フレンズ化して久し振りに拳を作り始めた。それもセルリアンという、謎の存在相手に。

アイツらは喋らないから良い。考える必要もなく、容赦なく、遠慮なく殴れる。

フレンズとヒトの共通の敵とはよく言ったものだ。ストレス発散用サンドバック。

もちろん、反撃には気を付けないとならないが、それにだけ気を付ければ有用かも知れない。あいや、冗談だ。半分はマジだけど。

「雑念があるのか？　拳が揺れているぞ」

おっと。先生に指摘を食らったわ。

集中しなきゃ。　こういうのは苦手なんだがな。　特にフレンズを相手にするとか

抵抗しかない。

別に舐めている訳じゃない。　白虎の強さは見た事がある。　百体組手とか無理。　俺なら集団レ●プのバッドエンド待った無し。　そんだけいるセルリアンにも驚きだけ。

「ごめん。　でも、トモダチを殴るのはちよつと」

「なに。　そんなヤワな鍛え方はしておらんよ。　遠慮なく打ち込んで来い！」

「頑張れ　あんじゅー！」

そう言われても。　勝てる気もしないし、痛い目に遭いそうで寄りたくない。　でも、やらないと進まない。　やるか。　決意大事。

「うりやあああ！」

右手で殴りかかる。すると、勝手に右手が白く輝く。アニメでもあったな。サンドスターやロウが反応しているのだろうか？

そんなポケ●ンな、或いは虎が如くなエフェクトを発した拳が白虎の頭に突き出されるも、

「ハッ！」

ヒョイツと頭と胴体を横に仰け反らせて簡単に躲す白虎。

ですよねー。当たるとは思ってたけど、こうも簡単に回避されると驚くよ。して、レベル差に愕然とする。俺が1なら相手は100なんじゃない？

「面積の小さい部位を狙うんじゃない。それとだ、大振り過ぎる。それでは隙だらけだぞ。もっとコンパクトにだ！」

指摘されるけども。

「こうかあ！」

「甘い！」

避けられまくり。

「ここかあ！」

「まだだ！」

時間ばかりが過ぎて。

「我からも行くぞ！　避けてみる！」

「ゴフツ！」

「ああ!?　あんじゆ　しっかり！」

「すまん！　深く入り過ぎたか!?!」

白虎の鋭い突きが、腹に刺さり気を失った……。

取り敢えず この稽古とやらで分かった事がある。
俺に強敵相手の戦闘は無理だという事。 大型を見たら、無理せず逃げよう。
ん。 う

西へ。

最初は西の白虎（びやつこ）に会いに行こう。
軽いノリで。

そんな彼女の住処は西にあるパワースポットとなっている平原。

この平原は彼女の機嫌次第で風が吹き荒れており、彼女に会うのは大変だ。
道中でも色々あったが、ニホンオオカミとホワイトタイガーのチカラでなんとか
た。

暴風も、何とか耐えて耐えて、踏ん張って進み、ようやく対面したフレンズ。

「よくぞ辿り着いたな。 私はジャパリパークの西方を守護する者、 四神獣のビヤツ
コだ。 疾風の恩恵で皆の手助けをする者ぞ」

四神のひとり、ビヤツコ。

アニメのオオカミ先生のようにオツドアイ。 同じ名を持つホワイトタイガーと比

べると、少し小柄でスマートな印象。胸は平たい。

服はほぼ白のみ。左胸に「の」の字入りの黒い胸ポケットが目立つ。

こうしてみると、本当に神さまなのかな……と疑いもするが、この風のチカラは彼女によるもの。とんでもないチカラの持ち主である事に違いない。畏怖と敬意を示さない。

「ありがとうございます、ビヤッコ様。つきましては、ご助力を頂きたいです」

「貴女が私と同じ名を冠する者か。手合わせ願いたい」

「だから、その為に来たわけじゃないってーの!?!」

折角良い感じに纏めようとしているのに、なんで そうするかね。脳筋なの？

誰にでも拳を振るいタイガーなの？

「ほう。私と同じ名の けもの か……どれ」

「ぐっ!?!」

ビヤッコがクイツと人差し指を向ける。刹那。

突風が吹いたと思ったら、ホワイトタイガーが後方に吹き飛んでしまった。一瞬過ぎて理解に時間がかかる程に速い。

「なに、風で少し小突いただけだ。同じ名を連ねていても、差は大きいな。これが神と けもの の差……だろうか」

「ぐう……そんな……あんなに鍛えたのに」

どこか しんみり するビヤッコと白虎。 話、進めて良いですかね？

「いきなり 攻撃しちやダメだよ！ 特に初対面なら尚更ダメ！」

ここで正論を吼えるニホンオオカミ。 うん、そうなんだけど。 俺の話……。

「む………そうだな、すまない。 詫びと言ってはなんだが、同行してやろう」

あれ。 そんなアツサリで良いんですかねビヤッコさま。 俺としてはウエルカム ようこそなんだけど。

「良いんですか？」

「ああ、あんじゆ。　ヒトの子よ」

「ッ！」

「驚く事は無いだろう。　お主の事は有名だぞ？　　男の職員がセルリアンの所為で

女になって、挙句に　けもの　にされたとな」

くつくつ、と不敵に笑うビヤツコさま。

情報知るの早いですね……疾風の如く。　風を司る神さまだからですかね？

いや、関係ないか。　有名だと言ってるし。　それにしても、情報回るの、本当に早

くない？

「経緯までは知らんがな。　根掘り葉掘り聞くつもりはない。　色々辛い目にあつた

のだろう？」

「ええ、はい」

「チカラを貸そう。　そうなつてまで、主が前に進む努力を認めてな。　それに……

同じ名を連ねている者にも興味がある」

「むっ……いずれは超えてみせる！」

「はっはっはっ！ その勢だ！」

なんだか、あっさりしているけど、上手くいったから良いか。

「あんじゅよ。四神のチカラを求めておるのは、パークの未来が相応以上に危険だから、だろう？」

「そこまでの情報を？」

「まあな。他の三獣も知っているだろう。して、お前の迎えを待っておる。我

も行くぞう」

「……ありがとうございます！」

「ビヤッコ、ありがとー！」

とても心強い味方が出来た！

このまま残りも仲間に入れるんだよ！

北と南へ。

ちよつと休憩。　ログハウスまで何とか戻つて来た俺らだが、流石に体力が持たない。

本来持っていた体力よりかはマシだが、それでもだ。

パークの東西南北を走り回れるほどの持久力を持つフレンズって、多分いない。それだけ広大だし複雑な地形で成り立っている。　とても1日で　どうにかなる案件ではない。

「つかれたー」「つかれたー」

そんな訳で。　俺とニホンオオカミは、ぐてーとだらしなく床に転がる。　白虎2人を前に　なんという恥知らず。

「おいおい、時間がないんだらう?」

「我は大丈夫だぞ」

いや、いそうですね……鍛えているからですかね。　神さまは例外として。

「休ませてくれ。　なんなら、手分けして話をしに行つて欲しいんだが」

「そうするか」

あれ。　これまたアツサリ。　良いんですか？　　ここは「はっはっはっ！　　断る
！」と言われるシーンかと思つたよ。

「パーク危急の事態。　それはお前の姿から確信出来る。　ゴネている場合ではある
まい」

「そ、そうか。　すまないビヤッコ」

「ありがとう！」

「我は北の玄武の元へ行く。　あんじゅ　達は別の地へ行くが良い」

そう言つて、風のように消えてしまった。　早い。　行動力の化身。

いやはや。大変助かるね。全部会いに行かなきゃいけないと思っていただけに、気が楽になったよ。

あいや。まだパークが助かった訳じゃないが。

「じゃあ……どうしようか」

「あんじゅ について行くよ！」

「我もついて行く」

決定権は良くも悪くも俺か。

うーん。どうしよう。後は南のスザク、東のセイリユウだ。

セイリユウは堅物のイメージがある。ここはフレンドリーなスザクに会いに行こう。

灼熱地帯にいるそうなので、対策しなきゃ。それと供物。あの神さまは ソレを 求めるのだ。

「準備する。 手伝って」

ムクリと起き上がって、行動を起こす。

働きたくないが、働かなきゃ。ヒトは頼りにならない。しちや、いけないんだ。

「全く。車を速攻で直せとはフレンズ扱いが荒いのです」

「荒いのです。ご飯とおかわりを要求するのです」

見た目はボロでも、性能と運転に問題のなくなった軽自動車の前にて。

ギヤアギヤア言っているのは、この世代のコノハ博士とミミちゃん助手。森に住んでいる中で知り合いました。

アニメ同様の姿で、無表情に やや近くも可愛い声で上から目線。そんなところもまた可愛い。

だがそれだけではない。知識と技術があるのだ。それはアニメより高い。具体的には、このように放棄された車を修理したりアプリ版だと無線を傍受していたか

……後は何かを開発する位に賢い。「我々は賢いので」は頭在だな。

「すまん。パークの危機なんぞな」

「そういうのは前もって言うのですよ」

「言うのです。我々も準備というのがあるのです」

「すまんって。それじゃ、火山の噴火がヤバいから今後も協力してくれ。じゃあの」

そう言って、相手の請求を踏み倒すようにアクセル全開。ニホンオオカミは既に乗っているので問題なし。

あばよ、とつつあん。（レトルト）カレーなら平和になったら喰わせてやる。気が

向いたらだが。

「スザクの所へ行くの？」

「ああ。フレンドリーな感じだろうからな、プレゼントを渡せば協力してくれるさ」

「それって、車に積んだジャパリまんじゅうとか？」

「おう。取り敢えず、セルリアンとの戦闘は避けて行くぞ」

「うんー！」

ブーンと森の木々を縫うようにして南の火山地帯へ。

この車、凄いいよね。ハンドリングも良いし、空調設備も万全だ。それくらい普通だろと思うヒトもいるだろうが、この車……スクラップ同然だったからね？

普通にそれを新車同様に修理出来る博士たちは凄いいよ本当に。

この世代の子って文明的じゃない子もいるけどさ、スゲー子も普通にいるんだよなあ。謎の感動。

「よし。このままスザクをゲットだぜ」

調子良くなって罰当たりな事を言っちゃうのは許して欲しい。欲しくない？

南の神鳥を接待

スザク。火を使役し、大地のチカラが満ちるパーク最南方に位置する火山地帯に居を構える神鳥。

努力家らしい反面、美しさには無頓着。お土産だつて要求する。

努力家という言葉に吊られてはいけない。ハッキリワカンだね。

そんで、そんな神鳥に会うべく火山地帯に突入。マグマが噴き出て、全体的にヤバい場所へ。

如何にも地球のパワースポットな場所だが、同時に怖い。長居したくない。助手席にいるニホンオオカミも怖がつてるし。垂れ耳で。

「くうん……本当に、ここにスザクが？」

「ああ。箆つてないで窓開けて、いつもの様に探してくれると嬉しいなあ？」

「あんじゆのいじわるー！」

「はっはっ、冗談だよ。外は暑い（熱い）し、無理しなくて良いよ」

「とまあ、こんな感じで可愛い。」

仕方ないから目視で探す。こんな場所にいるフレンズなんて そうそう いない。人影があれば目立つからな。そう思っていたら、第1フレンズ発見！クジヤクつばい姿だ、間違いないだろ！

「見つけた」

「ホント!?!」

いつもならニホンオオカミのセリフなんだが、今回は俺だったな。 ふふつ。

「あつ。 本当だね」

「だろ?」

「あんじゅ の耳が得意げ」

「どこ見てんだよ」

おのれ、けもの耳め。 役に立ったり自尊心を傷付けたり忙しいヤツめ……! !

「我はジャパリパーク南方を守護する者、四神獣スザクじや。ここまで よう来たの」

「おお……！」

道中、色々あったがスザクに会えた。よし、順調。

スザクの見目は、クジヤクのシルエツト。全体的に真紅の色だが、その大きな扇状の羽根は息を呑むほどに美しく神々しい。

「綺麗だ」

思わず口に出して、不敬を働く位には。いや、筆りたいとは思ったが やらないよ？

そこまで命知らずちゃうねん。

「うん？　この羽根か。前にも訪れた者に言われたがの、筆るのは勘弁じゃぞ」

エスパーかな。なんで心が読めたん？

しかし前にも訪れた者……ね。たぶんクジャク一行かな。

アプリ世代のクジャクが、ミスコンなイベントで、自分より美しい羽根のフレンズがいるらしいと確かめるために無理してスザクに会いに行つたんだよね。この過酷な火山地帯に。

美への拘り故か。ちよつと怖い。俺はそこまでやる勇氣も行動力もない。

今は特例で動いてますがね。ヒトは信用出来ないのです。

「やりませんよ。それより、その……此方を納め下さい！」

スザクの性格を考え、接待を開始。

真面目らしいのだが、こういうのには弱い。薄い記憶を頼りにアレコレ行う。

「おお！　ジャパリまんじゅうか！　気が効くのう」

「それからマツサージをして差し上げます」

「おお、気持ちが良いんじや」

「ニホンオオカミ、扇子で扇いであげなさい」

「わかったー!」

「おおー、コレが涼しいというヤツか。良きかな良きかな」

心地良さそうなスザクさま。

計画通り。スザクの背後で肩を揉みながら、ドス黒い表情を浮かべる俺は悪魔染みているかも知れん。くくつ。

だが、それも長くは続かない。突如として空よりやって来た、新たな来訪者が原因だ。

「あんじゆ、こんな所にいましたか」

「要求を踏み倒すとは。タダ働きはしないのです」

「しないのです。お礼を受けるまで 付き纏うですよ」

「コノハ博士……ミミちゃん助手! 俺の邪魔をしに来たか!」

虹色のけものプラズムを散らしながら、降り立ったはコノハ博士とミミちゃん助手。おのれ……かぐや姫じゃないんだから。いや、あの話とは かなり違うが。

「おお。 また会ったの。 どれ、ジャパリパークの歴史について、また語ろうかの」
「大変興味深いのですが、今は背後の あんじゅ職員に用事があるのでですよ」
「スザク、気をつけるです。 ドス黒い表情をしてるのです。 油断していると、また 雫られますよ」

「お前らに言われたくねえよ!」

普段はクジヤクの羽根を雫っているヤツらに言われたので言い返した。

おのれ、ヒトを一方的な悪者にしやがって。 俺的には お前らも悪寄りだ。 フレ
ンズだが、その純粋さを全ては認めん。 認めんぞ。

畜生のフレンズ。 車の件は感謝こそすれ、評価はソレだ。 特に今ので。

「なに!?! おい、それは本当か!?!」

ハツとして背後の俺と向き合うスザク。 近い、近いです。 美人がドアアップです。

「む、筆りませんって」

「そうではない。職員といったな？」

え？　そこですか。

職員だとマズいのだろうか。隠しているつもりはないけど、フレンズ化しているし面倒ごとには嫌いだから、自分から語る事はしなかったんだがな。

「そうですが……今は休業中でして」

後ろめたさから視線を逸らしてボソボソ言うと、

「おお！　やはり　あの　あんじゅ職員か！　話には聞いておるぞ！　いつか

迎えに来ると待っていたが、今日であったか！」

はっはっはつと豪快に笑うスザクさま。

どうやら正解だったらしい。良かった。敵意を向けられるかとヒヤヒヤしたよ。

真面目ちゃんらしいからね。休業理由が職務放棄なもんだから、叱られるかと思つたわ。

でも、何とかかなりそうだな。

「はい。共にパークの危機に立ち向かつて欲しいのです」

「良いぞ！ では早速、あんじゆの家まで案内してくれ！ 付いて行こうぞ」

「あのー、我々は」

「賢い我々は」

「すまん！ 話はまた今度だ！ 若しくは 付いてくるが良い！」

そう言つて車に乗り込むスザク。羽根が凄いので、狭い車内がスongoイ事になつて
る。

隣に乗っているニホンオオカミが見えないよ。大丈夫か、あれ。

「なら我々も行くのです」

「あんじゆに お礼を受けるまでは——」

「すまねえ、これは3人乗りなんだ」

「嘘つくんじやねえです!?!」

修理に関わった博士ズを置いて、アクセル全開。ズラかる俺ら。

まとも暗黒面に落ちた俺の顔。いやはや、ゾクゾクしちやうね。

アバよとつつあ

ん。

今後の動き

さて。なんか四神のうち三神が初代キタキツネの別荘に集まるというトンデモ事態になっている。

というのは字面だけで、実際は、かなりフレンドリーに話す。流石フレンズ。話しやすく良い。場所も場所なので、許されている気がするよ。よよよ。

「わしはゲンブ。北方を守護する者、四神獣のひとり。お主が あんじゆか。噂には聞いていたが……本当にヒトか？」

と言うのはゲンブ。北を守護する者であり、四神のひとり。見た目はゴスロリっぽい感じ。頭に蛇の髪飾り。

そんな彼女は、ビヤッコに連れられてここまで来た。

それまでは、俺の事は話しか聞いておらず、こうして初めて出会い、お話をしている形だ。

「ヒトです。色々あって、女になった挙句に犬のフレンズみたいになってます」

「……………まあ、多くは聞かぬ。同じく喜怒哀楽を感じる者だ。有限の時を共に

楽しもうぞ。それと、敬語はいらん」

「はい……………じゃなくて、おう？」

「ふふつ。可愛いヤツよ」

ぐぬう。何か笑われたが、気にせず前進しよう。次はセイリユウのみだ。

「残るは東のセイリユウ。行つてきます」

「うむ。あやつは不真面目だからのう。ちゃんとした理由を説明出来ないと協力

してくれんぞ」

「ちゃんとした理由？」

それはあるから平気かと思うが、ハッキリ言えるようにしろという事か。

火山の様子がおかしいから、協力してくれ……………じゃダメか。未来を知っていて、

パークがヤバいので助けて下さい？

うーん。どっちも微妙だな。でも言うしかないよな。

「分かりました。行つてきます。ホワイトタイガーはみんなと一緒に火口へ。

結界の準備をして欲しい」

「結界?」「成る程、分かった」

適当に言つたのだが、神さまには上手く言つた様子。首を傾げるホワイトタイガーに対して、ゴツトな皆様はグツトな感じに動き始める。

良いね。楽に越した事はないよ。

「では、火口で再開出来たら」

そんな神々なフレンズに俺はそう言つて、ニホンオオカミと共に再び走り出す。

今度は東。日の出づる方角だ。未来は明るいつてね。

「ねえ あんじゆ」

運転中。 おもむろにニホンオオカミが語りかけてきた。 運転中なので顔は見れないが、きつといつもの顔だろう。 笑顔のような、不思議がっているような。

「どうした？」

「うん。 あのね……この冒険が全部終わったら、カコ博士のところに行きたいよ」

カコ……なんでまた、急に。

アイツは、俺を実験台にしたんだ。 願わくば会いたくないし、会っても語る事はない。 あるなら恨み節だ。 余計に嫌いになってしまふ。

それだったら会わない方が良い。 未練ばかりが積もる。

「どうして？」

「カコ博士と あんじゆ、今、仲悪いでしょ」

どこで知ったんだよ、それ。

そんな思考を予想してか。ニホンオオカミは続ける。

「分かるよ。いつもカコ博士とめえる？　してたし。いつも話をしてたじゃん」

「そうだったけ？」

「そうだよ」

「そりゃあ……俺が家出……じゃなくて、冒険してるからさ。バッテリーだって無いわけ」

「でも、話をしないよ」

なんで話を続けたがるのか。子どもが両親の不仲を感じているような、そんな感じなのだろうか。

「一回、話をして欲しいな。ね？」

「分かったよ。約束だ」

「わーい！ あんじゅ、大好き！」

また、いつもの笑顔純度100パーセントに戻る。

敵わない。して、心が痛む。

でも俺以上にニホンオオカミは痛がっているんじゃないだろうか。
ハンドルを握る手が震えた。結局、俺はわがままなんだ。

東へ。

東には最後の四神、セイリユウがいる。

アプリ版から考えるに、他の3獣と違って冷たい性格だ。

良くも悪くもクールビューティ。水を司る関係か。なにせよ、協力して貰わねばならない。

そんなセイリユウは、パーク最東方に位置する湿原地帯に居を構える。

例によって道中色々あり、彼女が試しているのか豪雨の中を進んでいくと龍のフレンズと出会う事が出来た。セイリユウだ。

「私はジャパリパークの東方を守護する者、四神獣のセイリユウ。清き水の力と誇りの尾で一切を救済することが私の務め」

他の四神と異なり、威厳があるようにも感じられる。見た目は全体的に青く、ツイ

ンテール。太く、長い龍の尻尾。

もちろん女の子の姿なのだが、その力は凄まじい。畏怖しつつも、しかしお願いしなければ。

「杏樹と申します。助けを求めて来ました」

「良いわよ。行きましようか」

「そこを何とか……へ？」

思わず情け無い声が出た。女みたいな声……つて、今は女だったわ俺。

「何してるの？ 早く行くわよ」

「怒ったり拒否ったりしないんで？」

「して欲しかったかしら」

「滅相も無い」

覚悟してただけに、拍子抜けだよ。上手く行く分には良いんだけどね。でも、何でまた？

「疑問？ 私、地獄耳なの。何処にいても聞こえるから。特に貴方の行為は」

プライベートして無いんですかね？

今はソレで助かるから良いんですけど。

「助かりました。お願いします」

「特別よ。パーク困窮の事態なのだから」

そう言つてツカツカ歩いて……尻尾を消すと車に乗り込んだ。消せるんだね、尻尾。

「消せるんだね、尻尾」

素直な感想を言うのはワンコなニホンオオカミ。失礼じゃないとは思うけど、発言に気をつけるように。

「あら。貴女達も消せるわよ。けものプラズムで構成されている子ほど意識すれ

ばね」

「ふらずむ？」

「研究所で教わらなかつた？」

「あー、セイリユウさま。火口へ急ぎましょう」

話を遮るようにして、運転席へ。

あまり この手の話は、今はしたくない。 カコの件もある。 古傷を抉られるかの

ようだから。

それを察してか、ふたりとも 何も言わなくなつた。 すまない。 そう、心に思い

つつ、アクセルを踏む。 車は素直に火口方面へと進んだ。

「色々、貴方も あると思うけど。 カコ博士とは仲直りしなさいよ」

お節介、ありがとうございます。 そうしようと思えますよ。 ずっと引きずつてい

てもツライさんだからね。

自然とアクセルを強く踏む。 それは苛立ちかパークへの想いからか。

たぶん、両方だ。 そう言い訳しておく。

「……………火口には、既に3獣が いるかと思えます。 そうしたら」
「現地を見て、結界を予め張る必要があれば 皆でそうするわ。 心配しないで頂戴」
「どうも」

都合良く事が進むのは大好きだよ。

このまま、何もかも上手くいけば良いのだが。 逆に、ここまで上手く言っているこ
とに薄ら寒さを感じるが……考えすぎだろうか？

火口と四獣結界

かくして。火口に東西南北から四獣が1点に集合したのである。

俺がいなくても集合したのだろうが、いたことで早期解決に事が進んだと考えると誇らしくも思う。やるのは四獣の皆様なだけど。

「これは……予め張る必要があるわね」

「そうじゃのう」

「だな」

「異議なし」

火口を覗き込む四獣。して、それぞれ意見は一致。手を一様にかざすと、火口を囲い込むように虹色の光が。

「おお」「綺麗だね！」

そんな光景に感嘆の声を上げるのは仕方ない。仕方なくない？

鳥の子が飛ぶ時に散らしている。けものプラズムも綺麗だけど、これはその何十倍にもした輝きだ。それが大きな火口を覆っている。凄くない訳がない。

して、これでパークは救われる。サンドスター・ロウとかセルリウムが どうかかって例の異変、完！

「まさか あんじゅ。これで 終わりと 思っておらぬよな？」

ここで一番近くのスザクさま。結界を張りながら、声を掛けてきた。

何ですか。不吉な話なら聞かざるですよ。なんなら、貴女は言わざるでも良いですよ。なんてバチあたり！

「へ？ 終わりで良いでしょ」

「たわけ！ 結界は日々強化していく腹なのじゃ」

「ならお願いしますよ。俺はたまりに見にきますから」

「このバチあたりが！ 我らの世話係が必要じゃろうて！」

世話？　　神さまの　お世話とは恐れ多いのですが。　　というか面倒な話になって
ない？

実際に面倒を見る訳じゃんそれ。

「いやー、そういうのはちよつと」

「呼んでおいて、それはなかりう！」

うぐ。　　そう言われると、ごもつともです。　　言い返せません。

「うー。　　ナニすれば良いんです？」

性的なサービスとか種馬なら喜んで。　　あ、女の子だから無理か。　　それとも百合好
み？

いや、冗談ですよ。

「うむ。　　具体的には食べ物運んで来たり、また肩揉みとか　してくれば良い」

「おーい。　コノハ博士、ミミちゃん助手。　仕事代わってー！」

「森に向かつて叫ぶでない！　　というか、恥を知れ恥を！」

ちつ。　ダメか。　都合悪い時は博士たち畜生が来るのに、こういう時は　来ないの
な。

　　というか、聞こえないフリしてるだろ絶対。　あの博士の事だから、車に盗聴器や発
信機をつけてそうだからね。

　　アニメ世代では考えられないけど、この世代はあり得るんだよ。

　　こんな所までラッキービーストが　ジャパリまんを運んで来るとは考え難い。　下
山を繰り返すしかないか。　やれやれ。

「と・に・か・く！　　今から　お主は世話係じゃ。　宜しくな」

「えー！」
「では早速——」

やれやれ。　カコと仲直りしに行くのは後になりそうだな。　仕方ないな。

こうして。　俺は暫く世話係となるのだが。　例の異変の本格化は、実は目の前まで

来ていたのである……。

仲直りと異変と。

カコの研究所から飛び出して、どれくらいの日日が経ったのか。

怒ったのは後悔していないが、出て行ったのは後悔している。あの後、ちゃんと話し合つて解決するべきだった。

パークが この先どうなるのか分からない中、この気持ちを引き摺るべきではないからだ。

して、俺は研究所に帰った。

研究所の皆も こうなるのを知っていたのかも知れない。警備員さんには普通に会釈され、廊下ですれ違う白衣の研究者らにも同じ反応をされた。

責めるような目でも異端の目でもない。普通に接してくる。それが逆に違和感と不安を誘うから怖い。責めるなら責めて欲しい。ドMじゃないけど。

そうこう歩いていっているうちに。カコの研究室までやって来た。必要なのは この先に入る勇氣と言う勇氣。それだけで良い。良い筈なのに……勇氣がない。

そうやって扉の前でごまごまし、やっぱ森に帰ろうと踵を返した刹那。

「……杏樹」

聞き馴染み、幼馴染な声が。

振り返る。カコだ。見つかった。良いんだけどね。

「や、やあ」

愛想笑いで、ぎこちない挨拶。

もっと別の言葉があらうに。もっと相応しい表情があつたらうに。馬鹿な俺は、こんな挨拶をしてしまう。

「取り敢えず、入って」

「おう」

カコに勧められるがまま、研究室内へ。

ふと寮での暮らしを思い出して……少し緊張がほぐれた。

「ごめんなさい」

まず入室後一番のカコの言葉がそれ。 行動はお辞儀。

謝られたのは、いつ振りだろうなと思いつつ、俺も仲直りしようと優しい声で返す。

「良いんだ。 過ぎた事さ。 こっちこそ、ごめん。 勝手に消えて」

「ううん。 良いの。 無事だったから……森にいたの?」

「流石に知ってたか。 そうだよ、今は火山を何とかしようとする四神の手伝い」

「そっか……所長はきつと、視察に行ったのかな」

え? 所長が自ら視察とは。

それは火山の事だろうか。 嫌な予感がするのは俺だけか。

いや、俺の勤は当たるんだよな、こういう時！

「火口へ？」

「ひとりだったから、管理センターかな……時々個人で行動するから、本当に 所に行っているかは」

「今まで確認した事は!？」

「な、ないけど」

本能が警笛を鳴らす。

思い返されるは所長の言葉。

——ジャパリパークを何処まで知っている？

それは地域や神秘の秘密に留まらない。

個人に至るまで全ての謎だ！

「今すぐ火山に向かうぞ！」

「え？　え!？」

返事を待たずに研究室を飛び出すのと同時。

火山で噴火を観測した。

それは一瞬にして、全ての始まりを意味するのか、終わりなのか。

衝撃波はパーク上空を包み込む。

そして、空は灰色に包まれた。

降ってくるのは暗くて黒い雪。

セルリウム、そして生命の反物質……。

サンドスター・ロウだ。

やはり、ヒトは敵なのか。

火口に駆け付けた時には、四神はプレート化して転がっており、護衛役なホワイトタ
イガーは傷付き倒れている。

唯一、立っているのは初老の男性。 所長だ。

そう。 本来はいない筈のヒトが、この場にいる。 手には拳銃のようなもの。 簡
素的で、ブルーガンやデトネーターのように見える。

して、背後の火口からは黒い霧が噴き出ている。

それが全ての状況を物語っていた。 犯人は目の前だ。

「ゲンダイイイイイッ!!」

思わず所長の名を叫びながら、呐喊。 殴りかかるも、銃口を向けられて――。

パビュンツ!

「グッ!？」

虹色のビームが飛んできて、モロに食らってしまった。

俺の身体はみるみる代わり、犬耳とフサフサ尻尾は消えてしまった。 身体も心なし

か重い。 反動で思わず膝をつく。

フレンズ化が解けたのだと理解した。 そういう効果のある銃なん？ それ。

「すまない杏樹君。 全ては私の所為にしてくれて構わない」

「そのつもりだ……ッ! 何でこんな事を……ッ!?! ジャパリパークが どう
なつても良いのかよ!？」

「どうにかなるさ。 それは君が一番知っている」

かばんちゃん世代を言っているのか？

確かに、ヒトのいない あの世界は人間社会に縛られない。 だが全てが良い訳じゃ

ない筈だ。 今のヒトたち……管理センターの小動物や森林警備員の隊長、調査隊兼ガ

イドのミライ、そして俺の幼馴染カコ。

多くの笑顔の中にいた職員のみんな。 追い出したいのか、このヒトは！

「あの未来を望むだど!?」 だから今のヒトがどうなっても良いと!」

「その今を続けた場合、ヒトはどうする?」 既に薄々感じている筈だ。 アニマルガールに対して良からぬ事を企んでいる者共を。 島を手中に収めようとする組織の存在を」

確かに。 そんな雰囲気や勘はあった。 たぶん、当たっているのだろう。

でも それをどうにかするのも職員の仕事じゃないか。 あの子たちを守らずして、何が職員か。

「火山によるサンドスター・ロウやセルリウムの噴出はヒトの手に余る。 管理しようなど、最初から無理なのだよ杏樹君」

「でも結界は……!」

「結界は私じゃなくても、壊そうとする者がいた筈だ。 私利私欲の為にね。 そうなるくらいならば、早めに現実にも目を向けるべきだ。 全ては自然に返すのが一番だと。」

セルリウムやロウによるセルリアンの模倣はヒトが何とかしようとするればするほど危険だ。武器すらも模倣するからだ。それこそ核兵器がそうだ——進化ではない。人工物を増やしてはならない」

何となく言わんとしている事は分かった。

「ヒトの敵はヒトだ。断じてセルリアンでもアニマルガールでも、それこそジャパリパークそのものでもない。

本土へ脱出したまえ。既に職員総員退去命令が下っているぞ」

「——アンタは？」

「共に行くよ。事の顛末を説明する。世間には分かりやすい患者と英雄の物語が必要なんだよ」

何が正しいのかなんて、俺には分からない。正義は一つじゃない。ヒトがいるのが悪だとする考えも、そりゃあるだろう。

だが、いても良い物語も あっただろうに。

俺にはこれ以上、どうすることもできない。

所詮、無力だったのだ。

歴史は修正を嫌う。

きつと、このまま……かばんちゃん世代へ続くのだろう。
を踏まえてな。

この後のセーバルの犠牲

パーク職員です。

職員総員退去命令と後日談

各港。そこには多くの職員が集まり、本土への舟に乗っていく。見送りは多くのフレンズだ。

どうして？ と涙目に問う子もいる。

元気でね！ と元気に言う子もいる。

またね！ と約束をする子もいる。

その中に、ニホンオオカミがいた。

今まで相棒として共にいてくれた。それだけに別れはとても辛い。

願わくば本土に連れて行きたい。だけど、それは叶わない願い。そんな事をした

ら、けものに戻ってしまい、思い出も全て消えてしまうから。

それだったら、島で別れた方が利口なんだけど。それにしたって残酷な行いには違

いない。俺は涙を流す。

「ごめん……ごめんな。俺が不甲斐ないばかりに」

「ううん！　しょうがないよ！　あんじゅ　はすつごく頑張ったよ！　私が知ってるもん！」

「すまない……いつか。　いつか必ず島に戻る。　だから……待っていてくれ。　約束だ」

「うん！　約束！」

そうやって指切りをして別れ……舟に乗る。

終始、笑顔のニホンオオカミは、きつと忘れる事はないだろう。

「カコ」

同じ舟に乗る幼馴染に問う。

「俺ら職員は、いつ島に戻るだろうか」

「分からない」

素直に言われた。　変に希望を持たされるよりは優しいと思った。

「火山の噴火が危険。 海底火山もある、航路だって 近いうちに使えなくなる可能性が高い」

「そうか……いや、だとしても」

「うん」

互いに頷く。 きっと この想いは、総職員同じだろうから。

そして、決意をする為に口に出すのだ。

離れていくジャパリパーク本島に向く。

手は、互いに繋いだ状態で……口を開く。

必ず戻ると。

約束。

それをしたフレンズは、どれくらい いただろう。果たせずして散った子は、ヒトを含めて何人いただろう。

本土でのヒトの物語は、ここで語る事はないが、努力していた事は述べておく。だけど。

いつか必ず。

その言葉が儂く脆いものだって、フレンズとヒトが知った時。

悲しかっただろう。胸が痛んだだろう。

遠く離れた島。海の方こうを見て、人々は……フレンズは想いを馳せる。

それでも信じて、あるオオカミと忠犬は、それぞれの「おうち」で待ち続けた。

いつか。いつか必ずヒトが戻ってくるって。

多くのフレンズがヒトを忘れても。

多くのヒトがフレンズを忘れても。

彼女たちは忘れない。忘れずに、約束を守ろうと、努力する。待ち続ける。そして――。

「やあ。俺はヒトだ」

「ヒト？」

「おう。森にな、ニホンオオカミって子が待つてるんだけど知らないかい？」

「い、いえ。あのー、貴方は？」

「おっと失礼、申し遅れたね」

少なくとも。

その約束は誰かの役に立つかも知れない。

「パーク職員です」

ヒトやフレンズは、繋がって行くのだから。

END (ゲームオーバー等) 集

END (ゲームオーバー等) 集

これをやったら、パーク職員物語が終わってたかもな条件や展開。 妄想をゲーム風に。

BAD END

闇に入り過ぎたり心無い事をしていると★この始末★

友だちは大切に。 逆に大切にしていたら「なんでこんな事に」な理不尽展開もあるかも。

『カコとの決別』

条件：幼少期にカコの両親を救うのに失敗。

：パークでセルリウムによる故人の再現計画を知る。

：計画に反対する。 その上で説得しない、または説得に失敗。 倫理

観からカコとの付き合いを絶つ。

内容：幼馴染のカコが、亡くなった両親に もういちど会いたい気持ちから、セルリウムを使った両親の再現を試みる。

主人公は倫理観から、これに反対。カコとの付き合いを絶つ。

その後、過去に両親を救えなかった事、説得出来なかった事、なにより彼女を救えなかった様々な後悔から屈託だらけの人生へ。

パーク事件への関与も消極的になり、誰も救わずに『例の異変』まで無気力に過ごす。そのまま職員退去。何も成せず、名も無き職員のひとりとして島を去る。

メモ：幼少期に両親を救うか否かが最重要。あなたが歪んだ心を持たず、幼馴染を大切に想う気持ちがあるならば、このENDになる事は無い。

『群れに喰われた狼』（フレンズによってタイトル変更）

条件：同居フレンズがニホンオオカミである。

：ニホンオオカミを放置し続ける。

：「寮のヒト達が気持ち良い事を教えてくれる」と発言した際、出かけるのを呼び止めない。

内容：ニホンオオカミを放置し続けていると、パリピな寮住まいの男性職員達とよく遊ぶ様になる。

更に放置し続けていると、アダルトチックな事をしているのかと思わず発言をするよ

うになった。

それでも注意喚起もせず、無視していたある日。寮に二ホンオオカミの甘い遠吠えが響く。驚いて見に行く主人公。するとそこは集団の男と一匹の雌狼の乱行現場であつた……。

主人公の教育不足とヒトの業が招いた結果。妄想していた清らかな世界が現実に残された事で、目の前が真っ暗になり足元が崩れる絶望感を味わう事になる。

メモ：フレレンズを大切に想うなら、こうはならない。他のフレレンズやヒトに対して

『無限の輪に囚われて』

条件：園長、若しくはミライやカコに、お守りの事、ウロボロスの輪の事を話す。

：現れたウロボロスのフレレンズに負ける。

内容：園長がお守りのチカラで、過去と現在を繰り返している……ウロボロスの輪に囚われている可能性を示唆する主人公。

その後、ウロボロスのフレレンズが出現。そのまま戦闘。

圧倒的で特異なチカラを前に敗北。ウロボロスは考察、発言してくれた事への喜び

のままに、主人公を園長と同じ輪「なわばり」に取り込んでしまう。

記憶を消されてセントラル事件の無限ループの旅へ。

メモ：前準備もなく進めてしまうと、間違いなく敗北ENDに。

四神やオイナリサマ、他強力なフレンズを仲間にして挑む事が望ましい。

その際、ウロボロスの輪の話を聞かせて存在を認知させる事を忘れないように。そうしないと、ウロボロスの『無限廻廊』による特異空間内での行動の一切が不能になる。一線を凌駕した戦闘の為、万全の用意を。勝てれば園長を新たな未来へ連れ出せる他、ウロボロスが仲間になる。

『ヒト』

条件：所長に暗部絡みの質問をする。

内容：ヒトがパーク内で、サンドスターやセルリウム、フレンズを利用した裏実験や企みを調べる主人公。そして得た情報や事実を公表する、問い詰める行動をする。

知人であり、権力を持つであろう動物研究所の所長に暗部絡みの話をする……次に拳銃を突きつけられるのであった。

メモ：主人公の正義感だけでは誰も救えない。それどころか、他者をも巻き込み命

の危機に晒してしまう。知らぬが仏。

行動する度に警告とも取れる主人公の不安や他者からの警告あり。これを無視して続けると、このゾツとするEND。ヒトは怖い。セルリアンより、よほど。

頼れる仲間、チカラの無い内は、危険な行為は慎むべし。

『セ●クスフレンド』

条件：一線を超える。

内容：可愛いアニマルガールに性欲が抑えきれず、ヤツちやつたアウトな展開。故にアウト。

メモ：同居フレンズとなりやすい。自制心は大切です。特にあなたは職員なんですから。

一般的なゲームオーバー

ナンバリングする程ではなく、行動に失敗して死亡や解雇に結び付くもの。

『殉職・自殺等による死亡または行方不明』

例：セルリアンによる攻撃

：ヒトからの攻撃

：交通事故

：自然災害

：高所からの落下 等。

：怪異に巻き込まれる 等。

『職務怠慢・違反行為・犯罪等による解雇』

例：フレンズに、治安維持に著しく支障をきたす知識や行動を教唆、補佐する、させる。

：重大な交通違反

：重罪行為 等。

NORMAL END

パークを救う条件を満たせなかったりすると、こんな感じに。

明るい未来に漕ぎ出すには複雑な条件や困難な条件をクリアしなければならない。

その為多くの場合、こうなる。

『正史?』

条件：『例の異変』の未解決

：職員総員退去命令に従う。

内容：最も恐れていた事態である例の異変。

その解決の糸口を掴めず、とうとう退去命令に従う主人公。 船から見た遠ざかる島からは、見送りのフレンズの声が微かに聞こえた……。

メモ：例の異変解決は難題。特に四神とセーバルの犠牲を回避し、フィルターを火口に張るのと防衛システムの構築は困難。多くのヒトやフレンズの協力ナシには解決出来ない。

『ヒト無き方舟』

条件：フィルターを張る。

：所長の動きを読めず、説得や倒すのに失敗。

内容：フィルターを張るのには成功するも、所長が意図的にフィルターを破壊。 周りのフレンズも傷付けた。

未知の物質や現象、ヒトの所為で欲望渦巻くパーク。 本当の意味で手に負えなくなる前にヒトは去るべきだと、所長は淡々と語る。

その後、権力者によるものなのか職員退去命令。主人公は多くの職員と共に島を去る。

メモ：油断していると、なりがち。回避するには、フィルターを破壊される前に力尽くで阻止するか、予め所長とパークやヒトについて語り合うと良い。

他にも、様々な終了要素はありそうだが、概ねこんな感じだろうか。

GOOD ENDやTRUE ENDへ行くのは、いち職員の奮闘のみでは困難だ。多くの職員やフレンズのチカラで、パークの危機を乗り越えよう。

明るい未来を掴み取れば、新たなパークライフが始まるだろう。

(以下、幸せな未来END)

『異変解決』

条件：パークの危機を乗り切る。

内容：パーク閉鎖の危機を、大勢の職員とフレンズの絆で跳ね除けた。多くの爪痕が残ったパークだけど、皆で助け合い、復興への道を歩む。

メモ：最大の難所で、大きな山。それを越えれば、皆の笑顔と元気が溢れかえる。

その輝きは最大の報酬だ。

『幸せな家庭』

条件：パークの危機を乗り切る。

：カコと結婚する。

内容：異変解決後も近くにいるようで、遠くにいた幼馴染のカコ。立場も大きく違う。

だけどここのままじゃ駄目だと、主人公は勇気を振り絞り告白する。カコは、赤らめながらもプロポーズを受け入れた。

時が少し流れて、ふたりはパークで結婚。多くの職員やフレンズに祝福される。

一軒家に子どもに犬。思い描いた様な幸せな家庭を持つのであった。

メモ：爆発しろ。 祝ってやる。 生まれた子どもと家族に迎え入れた犬は、後にパークを大冒険。

『キタキツネ恋物語』（フレンズによってタイトル変更）

条件：キタキツネと園長が会っている。

：キタキツネから恋の相談を受けて、真面目に取り合う。

内容：園長といると、ドキドキするというキタキツネ。主人公に相談し、恋なのではという考えに至る。 やがて確信し、悩み苦しみながらも、主人公に押される形で園長に告白するキタキツネであった。

メモ：イベントEND。 恋に発展するか否かは主人公次第。 フレンズとヒトの壁に悩む事も。 場合によっては失恋。 フレンズと共に苦しみ歩むのも、また職員か。 必ずしも通らなくて良い話なので、無理に介入しなくても良い。